

古 樂

古 樂 圖 說

序

ゲーテはその *West-Oestlicher Divan* に於て、古蘭について下の如く言へり——『吾等此書に対する毎に、初めは常に嫌惡の情を抱かしめらるるも、そはやがて吾等の心を惹き、吾等を驚かしめ、遂に敬意を拂はしむるに至る。……その格調は内容と目的とに相應して嚴肅・雄渾・激越に、一貫して実に莊嚴なり。……かくて此書は百世を通じて最も強力なる感化を及ぼし往くべし』と。近代精神の最も洗練せられたる、且最も健康なる体现者ゲーテをして、その当初読みたる時に抱ける嫌惡の情を、驚異と嘆賞とに変らしめたる此の書籍は、人間精神の驚くべき所産といふべく、切実に世界と人生とを考察する人の至心の関心を惹くに足るものといふべし。

マホメットに親灸し得ざりし初期信者らは、アーイシャを初め彼の諸未亡人に向ひ、最も熱心に豫言者の為人について質問するを常とせり。而してアーイ

シヤは、是くの如き質問を受くる毎に、常に下の如く答へたりと傳へらる——
『汝等は古蘭を有するに非ずや。汝等はアラビア人にしてアラビア語を解するに非ずや。然るに汝等は何故に豫言者の為人について訊ぬるか。げに古蘭は直ちに豫言者の為人に非ざるか』と。

まことにアーイシヤの言の如く、古蘭は即ちマホメットなり。古蘭の偉大は、此書が曾て地上に呼吸せる最大なる偉人の一人の性格並に生活を最も忠実に反映するが故にして、ビュフォンが『文は人なり』と言へるは、古蘭の場合に於て無比に適切なり。カーライルが言へる如く、古蘭の長所は『あらゆる意味に於て眞摯なること』に存す。即ち古蘭を貫き流るるものは、眞摯なるマホメットの生命なり、その眞理を追ひ求めて止まざる熱意なり、萬難を排して其の把握せる眞理を護持せんとする勇猛心なり、而して聽くを欲せざる聽衆に向つて其の把握せる眞理を傳へんとする不退轉の堅忍なり。而して古蘭の一言一句は、悉く一千三百餘年以前にマホメット自身の口より出でたるを如実に今日に傳へたるものなり。此の一事のみを以てするも、古蘭は世界文学史上の希有なる文

献なり。

而も古蘭は決して單なる古典に非ず、實に三億回教徒の聖經として、現にその宗教的・道德的・社会的生活を規定するものなるが故に、尋常の文献を以て之を目すべきに非ず。従つて最も望まじき古蘭の日本語訳は、アラビア語に精通し、日本語に熟達せる敬虔なる回教信者にして初めて之を能くすといふべし。例へば佛典の漢訳が鳩摩羅什乃至玄奘三藏の如き巨匠に待てるが如し。加ふるに古蘭は、もと決して読者のために書かれたるものに非ず、最初より最後まで聽者のために読誦せられたるものなるが故に、文章としては未完成にして、マホメットの身振乃至音声の抑揚によりて文意を補へる個処あり、また内容は無味乾燥なるも、ネルデケの謂はゆるアラビア語の『異常なる自由と力 Die ungeheure Freiheit und Kraft』によつて、切実なる印象を聽者に與ふるものなるが故に、之を外國語に翻譯してアラビア語の有する音調に伴ふ魅力を彷彿せしむるが如きは、殆ど不可能事に属すといふべし。例へば、メデナ諸章の如き、マホメットが現実の政治的支配者たり且立法者たる間に、接受せる啓示なるが故に、諸節

の多くは之を外國語に翻譯すれば、甚だ平板無味なる法律乃至規則の制定にすぎざるも、アラビア語によつてマホメットが之を朗誦せる時は、強く聽者の耳に響き、深く其胸に徹せるが如し。

予は回教信者に非ず、またアラビア語の知識は貧弱なるが故に、訳者としての資格を缺くことを俟たず。唯だ大学に宗敎學を修め、深甚なる興味を回教に抱き初めてより、其間断続ありといへども、今日に至るまで未だ曾て其の研究を廢せず、存分にアラビア語によつて古蘭の醍醐味を色読するを得ずとするも、その傳ふるところの精神は略ぼ之を領會するを得たり。偶々松沢病院に閑日月を得て古蘭を繙くに及び、意荐りに動くに任せて其の訳註に着手し、昭和二十一年初春に稿を起し、同二十三年初冬に至る約二年の間に成れるもの即ち是なり。訳出に當りては普く漢英佛獨の諸訳を参照せり。予は此の訳註が、完全なる和訳古蘭の出現を促す陳勝吳廣たることを以て満足するものなり。

昭和二十四年十二月

大川 周 明

古蘭について

一 古蘭の成立

古蘭即ちアムクライン *Al-Qur'an* は読誦・復誦又は暗誦の意味にして回教徒の經典の呼称なり。そはアムラーハがマホメットに降せる啓示の集録にして、神意を彼に傳へたるは天使ガブリエルなりとせらる。即ちガブリエルが神意を奉じて隨時マホメットに默示し、マホメット之を復誦し、然る後に之を信者に向つて誦出せるものなり。従つて古蘭は悉くアルラーハの言にして、語るところの者は即ちガブリエルなり。是くの如き經驗は、之を旧約の豫言者の場合にも見る。天末の靈感其胸に満つる時、人間の個我は其影を潜め、語る者は即ちエホバなり。但し旧約の豫言者の場合は、暫くエホバに語らしめる後、また吾に歸りて自ら語るを常とす。マホメットは即ち然らず。彼は徹頭徹尾カブリエルをして語らしめ、己れは唯だ一個の受話器として終始したり。

マホメットが文字を知り居たるか否かについては學者の間に定説なし。マホメット自身は自ら『無学の豫言者』と唱へ、默示を受くるまで読むことも書くことも知らざりきと言ひ、且彼自身が何ものをも書残さざりしことは殆ど確實なり。但しネルデケは、マホメットは必ずしも全く文盲なりしに非ず、唯だ書くことに慣れざりしたため、筆録を必要とせる場合は他人を煩はしたるならんと推測せり。いづれにもせよ古蘭の諸節は、總じてマホメットが誦出せるも

のを彼の信者が筆写し又は暗誦せるものなり。

当時既に國際商業都市なりしメッカには、文字を知れる者多く、彼の最初の信者なりし妻カディージャ、ワラカ、アリー、アブー・パクルなど、皆を讀み且書くことを能くせりと言はる。従つて古蘭の諸節は当初より暗記せらるると共に筆録せられたりとすべく、そのために古蘭は早くより經典即ち『書物 *Al-Kitāb*』と呼ばれたり。例へばメッカ初期の啓示なる第五章第七七——七九節には『こは高貴なる古蘭なり、そは載せて秘藏の書冊にあり。淨められたる者に非ずば、何人も之に觸るるを得ず』とあり、また当初最も猛烈なるマホメットの迫害者なりしウマルが、翻然として彼に歸依するに至れるは、其妹が所持したるター・ハー章を一讀して深甚なる感激に打たれたりしによると傳へらるるを見ても、当時既に多くの信者が筆写せる古蘭を所持せるを知るべし。而してマホメットがメヂナに遷りて後は、ウバイ・イブン・カーブ *Ubay ibn Ka'b* が彼の常任書記たりし外に、二十四人乃至四十八人の書記ありしとせられ、其中には後に古蘭結集の重任を負へるザイイド・イブン・サービット *Zaid ibn Sābit* もあり。従つてマホメットが豫言者としての二十三年間、不断に默示せられたる古蘭の諸節は、其の生前に於て全部筆録せられたるものとすべし。

而も古蘭は決して筆写によりてのみ保存せられたるに非ず、實に信者の腦裡に保存せられたり。記憶はアラビア人にとりて最も安全なる知識の貯藏庫なりき。彼等は殆ど信すべからざる記憶力の所有者として、古より長文の詩歌乃至系譜の暗記に慣れ未れるが故に、マホメットの場合に於ても彼等は嘗に彼が復誦せる啓示を筆写せるのみならず、直ちに之を彼等の腦裡に印刻せり。蓋し古蘭の諸節は、彼等のために嘗に宗教的・道德的並に社会的規範たるのみな

らず、それは実にアルラーハより出でたるものとして、一言一句悉く至高至貴なる恩賜なるが故に、之を己れのものとする事は、彼等にとりて大なる榮譽たると共に大なる歓喜なりき。かくてマホメットの信者は、新たなるアルラーハの言が彼の口を通じて傳へらるる毎に、宛も新しき生命を鼓吹せられたるが如く感じ、争ひて之を暗誦するに努めたり。而してマホメット自身も古蘭の暗誦を奨励し、多くの章節を記憶せる者に対して特別の眷顧を与へたり。例へば公の禮拜を指導する導師イムムの役目は、最も多く古蘭を誦誦せる者が之を勤むるを常とせる如き、又は戦利品さへも一応律法に従ひて分配を了へたる後、彼等に対して餘分の贈与を行へるが如き即ち是なり。かくてマホメット生前に於て四人又は五人の篤信者は古蘭全部を、其他の數人は殆ど全部を暗誦せりと傳へらる。

二 古蘭の結集

さて古蘭の全部又は大部分が信者によつて筆写せられ又は記憶せられたりとするも、筆写せられたる断簡零墨は未だ一卷として纏められたるに非ず、而してマホメットの死後も其俛に放任せられたり。

然るにアブー・バクルが虚偽の豫言者ムサイリマ討伐の軍を起すや、ヤママーの役に於て回教徒の死傷夥しく、戦死者のうちには多くの古蘭暗誦者を算へたり。而も戦争は向後も頻発すべくその都度古蘭暗誦者は陣歿し行くべし。長老尙ほ存生の中に、諸処に散在せる古蘭筆写の断片を集め、之を一巻の經典に結集する必要を感じたるウマルは、此事をアブー・バクルに勧めて之を決意せしめ、アブー・バクルは直ちに之をザライド・イブン・サービットに命じ

たり。

ザイドは此事を以て山を動かすよりも困難なる大業なりとして容易に承諾せざりしが、遂に説得せられて結集に着手したり。此際ウマルは、マホメットより直接に啓示を聴聞し、且之を彼の面前にて筆録せるもののみをザイドに提出すべきことを命じ、且その眞実を立証する二名の証人あることを條件とせり。ザイド曰く『予は古蘭を探し求めたり。予は之を椰子葉、石盤、乃至人間の脳裡より集めたり。最後に予は輔士の一人アブー・クザイマ Abu Khuzaima が、懺悔章の末尾数節を所持せるを発見せり。此等の数節は他の何人も之を所持せざりしなり』と。蓋し懺悔章の末尾数節は、多数の暗誦者ありしかど、之を筆写せるものを発見するまで、ザイドは之を古蘭中に集録せず、最後に之を発見して結集を終へたるなり。之を以て観るも現在の古蘭諸章は、最初の結集当時既に悉く筆写せられたるものなることを知るべし。

ザイドによつて結集せられたる古蘭が、アブー・バクル並にウマルを初め、当時の諸長老に充分なる満足を与へたりしことは、之に対して如何なる異存も唱へられざりしことによつて推察せらる。果して然らば古蘭諸章の題名並に前後の次序も、またマホメット生前に於て定まり居たりとするを至当とす。また古蘭の如き長篇を悉く暗誦するためには、諸章に一定の順序あるを必要ともすべし。然るに古蘭諸章の序列は、主として章の長短によれるものにして唯だ長章を前にし、短章を後に置けるにすぎず、年代の順序あるに非ず又は前後に内容の聯絡あるに非ず、極めて外面的又は器械的なる排列なり。而して回教學者のうちには、是くの如き順序はマホメット自身によりて、一層精確にはアルラーハの啓示によりて定められたるものにして、深奥なる内面的統一を有すと言ふ者あるも、その具体的説明

ば未だ万人を首肯せしむるに足らざるなり。

此の古蘭最初の原典は、先づアブー・バクル之を護持し、その死後はウマル、ウマルの死後は彼の女にしてマホメット諸妻の一人なりしハフサ Hafsa 之を護持したり。恐らく此の原典によつて幾多の複本作成せられ、信者の間に配布せられしなるべし。

然るにウスマーンのカリファ時代（西紀六四四—六五六年）に至り、アルメニア及びアゼルバイジャン遠征軍を率ゐたるホザイファが、此等の地方に於て古蘭誦誦が極めて区々なるを知り、驚き且憂へて其の統一の必要をウスマーンに進言せり。よつてウスマーンはハフサより其の護持せる古蘭原典を借受け、ザイイド・イブン・サービット及びクライシュ族の長老三人に命じ、更めて原典によつて複本を作成せしめたり。而してウスマーンは、若し古蘭の発音に関してザイイドと三長老との間に異論を生じたる場合は、必ずクライシュ族のそれによるべしと訓示したり。蓋しザイイドはメヂナ人なるが故に、アラビア語の発音に於てクライシュ族のそれと相異なるべきを慮れるなり。かくて此の第二の結集は、古蘭の用語をマホメット自身の言語即ちメッカ方言に統一せるのみにて、内容其者には何等の変更を見ざりしなり。

かくして成れる新しき古蘭原典は、永く之をメヂナに奉藏することとし、三個の複本を作成して之をダマスコ、クイファ、バストラの三陣営に送致し、同時に悉く自餘の複本を破毀せしめたり。而してウスマーンの命令によつて結集せられたる古蘭は、爾来如何なる添加も削除もなく、全く当時其俛に今日に傳へられたり。従つて其の一言一句は、悉く千三百年以前にマホメット自身の口より出でたるものにして、実に世界文学に於ける稀有の文献といふべし。

古蘭は百十四の『章 Sura』より成り、各章は『節 Ayat』より成る。章の原語スーラは列又は序列を意味し、節の原語アイヤットは本未見聞し得る表徴を言ひ、古蘭中に最も頻出する語にして、予は之を『休徴』と訳したり。天啓・奇蹟等皆なアイヤットにして、古蘭の諸章また最も高貴なる啓示又は休徴なるが故に之をアイヤットと名づけたるなり。而して章によつて甚だしく長短あり。其の最も長きは第二章にして二百八十二節より成り、最も短きは第三章・第百八章・第百十章にして、共に僅に三節より成る。

古蘭はまた三十の『部 Juz』に分たれ、部は更に『課 Rukū』に小分せられる。之を三十部に分てるは、ラマザーン月に毎日一部づつ誦誦して、一月中に全部を終る便宜によれるものにして、全く器械的なる区分なり。されど回教徒は其の文献に古蘭を引照するに当り、章と節とによらず、常に部と課とによる。

三 古蘭誦出の年代

マホメットはメッカ及びメヂナに於て啓示を受けたるが故に、古蘭各章は劈頭に啓示接受の場所を記せり。従つて古蘭は其の受啓の地によつて之をメッカ期並にメヂナ期のものに大別せらる。而してメヂナに於けるマホメットの地位は、其の故郷メッカに於て占めたる地位と甚だしく相異なる。メッカに於ける彼は常に迫害せられたる傳道者なりしが、メヂナに於けるマホメットは当初より強力なる党派の指導者にして、次第に其の勢力を拡大して遂に全アラビアの独裁者たるに至れり。之をメッカに於ける微力なる新宗教團體の輕蔑せられ擯斥せられたる教師時代に比すれば

正に雲泥の差ありと言ふべし。此の地位と環境との相違は最も明白に古蘭に反映せり。

古蘭諸章を啓示接受の年代に順つて排列することは、マホメットの信仰の發展を明かにする上に於て極めて重要なことなると同時に、甚だ困難なる研究に屬するが故に、學者の間に異説あるは当然といふべし。メヂナ諸章は其の歴史的背景が略ぼ明かなるため、啓示接受の年代も自ら推定し易しといへども、メッカ諸章に至りては若干のものを除けば、其の前後を定むること決して容易ならず。但し其の内容並に格調によつて、之を數個の期間に分つことは固より不可能に非ず。グスターフ・ワイルがメッカ時代を三期に分ち、メヂナ諸章を三群に分ちて其の理解を容易ならしめてより、多くの學者また之を試みたり。就中サー・キリアム・ムイアの排列、最も當を得たりと信ずるが故に、左に之を拠つてメッカ諸章を年代順に五群に分つべし。

第一はマホメットが深刻なる宗教的自覺を體驗し始めたる最も初期のものにして、一〇三・一〇〇・九九・九一・一〇六・一・一〇一・九五・一〇二・一〇四・八二・九二・一〇五・八九・九〇・九三・九四・一〇八の十八章なり。

第二はマホメットが新しき信仰の宣傳を覺悟せる当初のものにして、九六・一一三・七四・一一一の四章なり。

第三は宣敎開始よりアビシニア避難に至る期間の啓示にして、八七・九七・八八・八〇・八一・八四・八六・九〇・八五・八三・七八・七七・七六・七五・七〇・一〇九・一〇七・五五・五六の十九章なり。

第四は宣敎六年より十年に至る間の啓示にして、六七・五三・三二・三九・七三・七九・五四・三四・三一・六九・六八・四一・七一・五二・五〇・四五・三七・三〇・二六・一五・五一の二十一章なり。

第五は宣敎十年よりメヂナ移住に至る期間のものにして、四六・七二・三五・三六・一九・一八・二七・四二・四

原

五五五五五五五五五四三二一〇四四四四四四四四三二一〇三三三
九八七五六五四三二一〇四四四四四四四三二一〇三三三 典

ルジ
ツヤ
デライ
ン

一一
〇〇九四九三二七六三
一五三五六二七六三〇六一九六六六六六一〇五五三八五

ウロ

一一
〇〇九四四四四四四四四四四四四四四四四四四四四四四
二六九五八四九四四四四四四四四四四四四四四四四四四四 典

原

八八八七七七七七七七七七七七七七〇六六六六六六六六六六六
二一〇九七八七六五四三二一〇六八七六六六六六六六六六六六 典

ルジ
ツヤ
デライ
ン

八二八七三九三
一六三〇九二〇四三三九〇七八七七二七六〇〇八〇四八〇〇

ウロ

三三二二三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三
一三二四三五七六二〇二二六二五四四一七六三〇〇九〇四九八〇

原

一一一一一一九九九九九九九九九九九九九八八八八八八八八八
〇四三二〇〇九八七六五四三二一〇六八七六六六六六六六六六六六 典

ルジ
ツヤ
デライ
ン

一三一一一二九九二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二
八一二五九三九九二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二 典

ウロ

一一二一三三三三三九九二二二二二二二二二二二二二二二二二二二
九三七四九四〇一八九二一六五四一六三三八九八二二二二二二二 典

Arabic.	Names.	Roman.
ا	Alif	A
ب	Bā	B
ت	Tā	T
ث	Ṣā	S
ج	Jim	J
ح	Hā	H
خ	Khā	Kh
د	Dāl	D
ذ	Zāl	Z
ر	Rā	R
ز	Zā	Z
س	Sin	S
ش	Shin	Sh
ص	Ṣād	Ṣ
ض	Zād	Z
ط	Tā	T
ظ	Zā	Z
ع	'Ain	'
غ	Ghain	Gh
ف	Fā	F
ق	Qāf	Q
ك	Kāf	K
ل	Lām	L
م	Mim	M
ن	Nūn	N
هـ	Hā	H
و	Wau	W
ي	Yā	Y
•	Fathah	a
•	Kasrah	i
•	Zammah	u
•	Hamzah	'

一、アラビア文字のローマ字化は次表に依る。

一、古蘭各章の節の区分は、原典によりて多少の出入あり、本書はトルコ・エジプト・印度・中国等のスナ派回教徒の間に行はるるトルコ版アラビア原典のそれに依る。

附 言

一〇八	一〇七	一〇六	原典
一四	一六	二八	ルジ ツァ デ ラ イ ン
九	一五	二〇	ウロ エ ツ ルド
一一	一一	一〇	原典
一一	〇	九	
五二	〇一	一七	ルジ ツァ デ ラ イ ン
一一	一一	一一	ウロ エ ツ ルド
一一	一一	一一	原典
四	三	二	
二〇	一九	二一	ルジ ツァ デ ラ イ ン
七	六	〇	ウロ エ ツ ルド

古

蘭

目次

第一	開經章	一
第二	牝牛章	三
第三	イムラオン家章	六
第四	女人章	一九
第五	食卓章	二四
第六	家畜章	二七
第七	高壁章	三〇
第八	戦利品章	三四
第九	懺悔章	三〇
第十	ヨナ章	二九
第十一	ホード章	二五

第十二	ヨセフ	章	三三四
第十三	電雷	章	三三〇
第十四	アブラハム	章	三二八
第十五	ヒジル	章	三二六
第十六	蜜蜂	章	三二四
第十七	夜行	章	三七一
第十八	洞窟	章	三九〇
第十九	マリヤ	章	四〇八
第二十	タア・ハア	章	四一九
第二十一	豫言者	章	四三四
第二十二	参詣	章	四三七
第二十三	信者	章	四六〇
第二十四	光明	章	四七〇

第二十五	識別章	四八二
第二十六	詩人章	四九一
第二十七	蝮蟻章	五〇三
第二十八	來歴章	五〇四
第二十九	蜘蛛章	五〇六
第三十	羅馬人章	五〇六
第三十一	ルクマーン章	五〇五
第三十二	叩首章	五〇二
第三十三	聯盟章	五〇五
第三十四	サバー章	五〇〇
第三十五	天使章	五〇九
第三十六	ヤー・スーン章	五〇六
第三十七	整列者章	五〇五

第三十八	サ ド	章	六二六
第三十九	隊 伍	章	六二五
第四十	信 者	章	六二六
第四十一	解 說	章	六二七
第四十二	商 議	章	六四五
第四十三	金 飾	章	六五三
第四十四	煙 氣	章	六六七
第四十五	跪 坐	章	六六七
第四十六	ア ハ カ ト フ	章	六七二
第四十七	マ ホ メ ツ ト	章	六七九
第四十八	勝 利	章	六八五
第四十九	内 房	章	六九三
第五十	カ ト フ	章	六九八

第五十一	散布者	章	七〇
第五十二	山嶽	章	七一
第五十三	星辰	章	七二
第五十四	太陰	章	七三
第五十五	大悲者	章	七四
第五十六	不可避者	章	七五
第五十七	黑鐵	章	七六
第五十八	爭辯者	章	七七
第五十九	追放	章	七八
第六十	試女	章	七九
第六十一	列伍	章	八〇
第六十二	集會	章	八一
第六十三	僞信者	章	八二

第六十四 相欺章

六二

第六十五 離婚章

六四

第六十六 禁止章

六七

第六十七 大權章

六三

第六十八 筆翰章

六四

第六十九 必來者章

六九

第七十 階段章

六二

第七十一 了章

六四

第七十二 幽鬼章

六七

第七十三 着絨衣者章

六九

第七十四 着套衣者章

六四

第七十五 復活章

六六

第七十六 人間章

六二

第八十九	黎明	章	八三
第八十八	壓倒者	章	八〇
第八十七	至高者	章	八六
第八十六	夜者來	章	八六
第八十五	望樓	章	八四
第八十四	分散	章	八三
第八十三	減量者	章	八九
第八十二	分裂	章	八七
第八十一	摺疊	章	八五
第八十	攪蹙	章	八三
第七十九	抽出者	章	八〇
第七十八	消息	章	八〇
第七十七	神使	章	八四

第九十	國土	章	八五
第九十一	太陽	章	八七
第九十二	暗夜	章	八六
第九十三	午前	章	八四〇
第九十四	開胸	章	八四
第九十五	無花果	章	八三
第九十六	凝血	章	八三
第九十七	稜威	章	八三
第九十八	明證	章	八四
第九十九	地震	章	八四
第一百	戰馬	章	八四
第一百一	打擊者	章	八五
第一百二	競多	章	八五

第三百	午後	章	八三
第三百四	誹謗者	章	八三
第三百五	巨象	章	八四
第三百六	クライシユ族	章	八五
第三百七	布施	章	八五
第三百八	潤澤	章	八七
第三百九	不信者	章	八六
第三百十	佑助	章	八九
第三百十一	アブー・ラハブ	章	八〇
第三百十二	獨一	章	八二
第三百十三	曉天	章	八三
第三百十四	人類	章	八三

開經章

メッカ啓示

古蘭の卷頭にあるを以て開經章 *Fatihatu'l-Kitab* と名づけられ、また単に開卷章 *Al-Fatihah* と呼ばる。古蘭中の最も重視せらるる一章にして、礼拝章・祈禱章・讚美章・十全章・珠玉章及び其他の莊嚴なる名称を與へられ、日々五時の礼拝に際して必ず之を誦するのみならず、公私一切の契約又は取引は、之を唱へずば完からずとせられ、且誦し了れば必ずアーメンと唱ふ。古蘭第一五章第八七節に『屢々誦せらるる七節』とあるは、本章を指せるものとせられ、初期のメッカ啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて¹

アルラーハを讚へよ、そは三界の主² 大悲者・大慈者ニ審判の日の執権者なり³ 吾等汝に事へ、
佑助を汝に求む⁴ 吾等を直き道に導け⁵ 汝が恩寵を垂るる者⁶ 汝の怒に触れず、また迷はざる者
の道に⁴
七

(1) 第九章を除く古蘭の各章は、悉く此の唱名 *Bismillah* を以て始まる。大悲者 *Ar-Rahman*、大慈者 *Ar-Rahim* は、その具足する徳性によるアルラーハの呼称にして、之を『尊称 *Al-Asma'u'l-husna*』と謂ひ、総じて九十九を算ぶ。古蘭第七章第一七九節に『アルラーハに諸の尊称あり。故に之を以て彼を呼べ』とあるが故に、信者は常に此等の尊称を以て

アルラー、に呼びかく。例へば赦免を求むる場合は『罪障拂拭者 Al-Afaw』又は『允懺悔者 At-Tauwab』と呼び、加護を求むる場合は『守護者 Al-Muhaimin』又は『佑助者 Al-Wali』と呼ぶが如し。大悲者・大慈者は等しく同一語根より出でたるものにして、殆ど同意義なれども、回教神学者は前者を以て一切衆生に対する普遍的なる愛、後者を以てその善行の故を以て恩寵に値する者に対して注がる愛と解す。而して『大悲者 Ar-Rahman』はアルラー、のみに限らるる尊称にして、自餘の何者をも此の名称を以て呼ぶことを許さず。(2) 三界の原語は『諸世界・Alamin』なるが、此処にては天使・幽鬼・人間を総称せるものとせらるるが故に三界と訳したり。尙ほ古蘭中に此語は一切衆生・宇宙萬有・人類全体又は萬國萬民の意味に用ゐらる。『主』の原語は Rabb にして、本来養育者又は育成者の意味なれば、日本語の主人と同じからず。漢訳は調養之主又は養主となす。(3) 執権者の原語は Malik にして支配する権力又は処分する権力を所有する者を意味す。英訳に King とあるは Malik と Malik と混同せるものなるべし。(4) 第七節は『汝の怒に触れ、また迷へる者の道に導く勿れ』とも訳し得べし。但し此処にて『怒に触るる者』を猶太人、『迷へる者』は基督教徒を指すとする解釈は首肯し難し。マホメットが猶太人並に基督教徒に対して積極的非難を加へ始めたるはメヂナ遷都以後、回教の独自性を確立してよりのことなるが故に、メツカ初期の啓示に属する本章に於ては、神怒に触るる者並に迷へる者は、一般的意味に之を解釈するを妥当とすべし。

第二 牝牛章

メヂナ啓示

第六七—七一節にモーゼが猶太人をして牝牛を神に供へしめたる経緯を述ぶるに因みて牝牛章 *Al-Baqarah* と名づけらる。メヂナ遷都以後最初の三年間の啓示にして、其の大部分はバドル *Badr* 公戦以前即ち遷都以後一年有半に於けるものとせらる。本章の前半は主としてメヂナの猶太人並にメヂナ市民中の謂はゆる『偽信者 *Munafiqun*』を対象とするものなるが故に、当時のメヂナに於ける此等両者の事情並に両者とマホムトとの關係を略述して、本章の歴史的背景を明かにすべし。

メヂナはもとヤスリブ *Yasrib* と呼ばれ、メツカの北約百哩の地にあり、北方に向つて緩く傾斜する平野に位し、水に豊富なことに於てアラビア稀有の地なり。南より北に向ふ多くの河谿あり、ザガール *Zaghar* に於て合流し、イダム *Idam* 河谿に注ぎて海に嚮ふ。河谿に水あるは降雨の後に限らるるも、井を掘りて容易に水を得らるるが故に、夙くより農耕行はれ、棗椰子樹園の繁茂を見たり。されどヤスリブの起原並に其の最古の歴史については、精確なる何事も知られ居らず、やや確実に知り得るは猶太人が此地に定着してよりのことなるが、彼等が最初に南下し来れる年代も明かならず、唯だ西紀第一世紀頃よりナツイール *An-Nazir*・クライザ *Qurayza*・カイヌカー *Qainuqa* の三猶太部族が、此地一帯に定着して次第に繁栄し、堡壘を築きて自ら護り居たりしことを知り得るのみ。然るに其後ヤマン *Yaman* に於けるマリブ *Mariyb* 貯水池の崩潰による南アラビア人の北方移住が開始せらるるに及び、アウス *Aus* 及びカズラジ *Khazraj* の両族此地に來りて上着し、当初長く猶太人支配下に置

かれしが、第五世紀末葉に至り、彼等に代つてヤスリブの羈権を握るに至れり。彼等は從來猶太人が占拠せる諸堡壘を略取せるのみならず、若干の堡壘を新設して防備を嚴にし、両族のうち優勢なりしカズラジ族が主権を握りて居を市の中央に占め、アウス族は其の南部及び東部を占めたり。而して此等両族以外に、彼等の北上以前より此地に住み、永年に亙る猶太人との接触により、多かれ少かれ猶太化せられたる若干のアラビア諸族もありき。而してナヅイール・クライザ兩猶太部族はアウス族の下に、カイヌカー族はカズラジ族の下に、或る程度の獨立を保有しつつヤスリブの周圍に生活したり。

かくしてヤスリブの状態は、アラビア人制覇の下に一旦平和に落着せしが、幾くもなくしてアウス・カズラジ兩族の間に権力の爭奪を生じ、猶太人の三部族並に其他のアラビア諸族また此の党争に加はり、角逐は次第に激化して、遂に西紀六一六年即ちマホメットの開教第六年、ボアース Bo'as に於て干戈を交ゆるに至れり。而して此の激戦はアウス族の勝利に歸したるも、カズラジ族は決して屈辱に甘んずることを欲せず、兩派の対立は依然として繼續し、市民は甚だしき不安の間に日を送りしが、遂に多年の党争に倦み、カズラジ族の最も有爲なる領袖アブダラーハ・イブン・ウバイ Abdallah ibn Ubai を推してヤスリブの首長となし、以て統一と平和とを實現せんとするに至れり。

さて傳承によれば、ヤスリブ市民とマホメットとの關係は、三段階を経て急速に進めるものなり。西紀六二〇年即ち開教第一〇年に於て、マホメットは最大の慰藉者たりし愛妻カディージャ Khadija を失ひ、月餘にして更に最も信實なる保護者たりし伯父アブー・タリフ Abu Talib を失ひて窮迫其極に達し、伯父を葬りて半月ならざるに、遂に養子ザイド Zaid ibn al-Haris を伴ひ、メッカと繁榮を争へるタリフ At-Tarif に趣き、暫く身を此地に託して傳道に従はんとせしが、タリフ市民また彼を排斥し、石を亂擲して彼を放逐せる其年の參詣期に於て、若干のヤスリブ市民が參詣の序を以てマホメットに至り、其教を聽

きて大に欣び、直ちに其の信者となり、歸りて之をヤスリブ市民に告げたり。而して翌年の参詣期には、アウス、カズラジ兩族の代表者十二名が、ミナー Mina に近きアカバ Aqaba 谿谷に於てマホメットと会見し、直ちに熱心なる彼の歸依者となり、名高き第一アカバ誓言を行ひてヤスリブに歸り、市民に向つて傳道を開始せり。而して市民の多くは欣んで之を信受し、アルラーハ並に其の使者マホメットに対する信仰は、実に異常なる速度を以て市民の間に弘まり、マホメットに向つて教師の派遣を求むるに至れり。而して翌六二二年の参詣期に至り、七十餘人のヤスリブ市民が、再びアカバにマホメットと会見し、所謂第二アカバ誓言によつて彼のヤスリブに遷らんことを望み、生命を獻げて彼並に彼の信仰を護るべきことを誓へり。

是くの如くにしてメッカに於ける窮餘の豫言者は、此年有力なる都市の賓客としてヤスリブに遷り、ヤスリブは爾來マディーナト・アン・ナビー Madinat an-Nabi 即ち『豫言者の都』と呼ばれ、後には單にマディーナ Al-Madinah 即ち『都』と呼ばれるに至れり。

されどメヂナ市民は当初より挙りてマホメットに歸依せるに非ず。彼等のうちには彼の宗教を信ぜず、また異族の出身者が突如として來りて勢力を彼等の上に揮ふを快しとせざる者あり、設ひ大勢に順応してマホメットに服従せるも、決して衷心より彼の信仰に歸依せるに非ず、寧ろ時たらば彼を失脚せしめんと企てたり。古蘭に於て屢々糾弾せらるる『偽信者 Munafiqan』は即ち彼等の一群を指せるものにして、其の首領は將にメヂナに君臨せんとしてマホメットのために其の地位を奪はれたるアブダラーハ・イブン・ウバイ其人なりき。さればマホメットが彼の不遜なる言動に忿懣の色を示せる時、メヂナ市民中の最初の歸信者の一人なるサアド・イブン・ウバーダ Sa'd ibn 'Ubadah は『アルラーハが吾等に汝を遣はせる時、吾等はアブダラーハのため既に冠冕を用意し居たりしなり。されば彼が汝を以て己れの掌中より王國を奪取せる者として怨恨を抱くは当然なり』と告げ

て、マホメットが彼並に彼の一党に対するに寛容と忍耐とを以てすべきことを勸告せり。さればマホメットは彼等の意図を熟知せるが故に、屢々痛烈なる非難を彼等の上に加へたれど、概して異常なる寛大を以て彼等を遇し、専ら其心を得るに努め、他日其の勢力を完全にメヂナに確立したる後も、何等差別的に彼等を遇することなく、次第に彼等を教化して忠実なる信者たらしむるに至れり。

メヂナに於ける猶太人の処理は一層困難なりき。メッカ中期即ち開教第五年乃至第六年の啓示とせらるる古蘭諸章は、マホメットが此頃より猶太教並に基督教に対して深甚なる関心を抱き初めたることを示す。蓋しマホメットの最初の宣教は、アラビヤ人をして其祖アブラハムの純一なる信仰に復歸せしめんとするものにして、自餘の宗教との關係については何等言及するところなし。然るにメッカ中期の古蘭諸章は、タルムードを典拠とする猶太人の傳承、並に南シリア及びアラビヤに行はれたる異端基督教の傳承を叙する記事極めて多きを見る。但しマホメットは旧約又は新約聖書の原典又は其の一部について直接学ぶところありしに非ず、専ら之を傳聞せるに過ぎざりしが如し。而して彼が最も多くを学べるは実に猶太教にして、イスラームはアラビヤ化せる猶太教とも言ひ得るほど、猶太教の信仰並に儀禮を自己の宗教に採用したり。彼はモーゼの五書並にダビデの詩篇を以てアラブの降せる經典なりとし、天啓の經典を奉ずる故を以て猶太人並に基督教徒を『受經者 *Alu'l-Kitab*』と呼び、日曜を以て禮拜日となし、信者をして禮拜に際しては其面をエルサレムに向はしめたり。此の禮拜して当面する方向を『朝向 *Qiblah*』と称す。さればマホメットのメヂナに遷るや、猶太諸部族と友好條約を結び、平等の市民権と信仰の自由とを彼等に與へ、其心を攪るに努めたりしが、少数の例外者を除けばマホメットを豫言者と認むる者なかりしのみならず、多くは却つて彼を待つに輕侮と嘲笑とを以てし、メヂナの偽信者と相通じて彼の地位を顛覆せしめんと欲したるを以て、マホメットは遂に其の態度を一変

し、先に定めたる規定を廢して金曜を禮拜日となし、信者の朝向をメッカに改め、茲に猶太人と絶縁して、其の殲滅を期するに至れり。

メヂナに於けるマホメットの最初の仕事は、叙上の雰圍氣の間に、禮拜並に集会の場処たる禮拜堂の建設並に宗教的儀禮及び諸規律の制定なりしを以て、本章の後半は之に関する啓示を以て満たさる。而して回教に於ては宗教と法律と道德との分化を見ざるが故に、マホメットが宗教的導師たることは、同時に政治的首長たり且道德的教師たることを意味す。従つてマホメットがメヂナに於て宗教的地歩を確立せることは、直ちに其の政治的支配を伴へり。アブダラー・イブン・ウバイを中心とする一群のメヂナ市民が、マホメットに対して不平なりしは實に之がためなり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ミーム・ラーム¹—²こは疑惑を容れざる經典なり、³其身を護る者の嚮導なり⁴—⁵彼等は不可見のものを信じ、⁶禮拜を守り、⁷わが賜へるものにて喜捨を行ひ⁸—⁹わが汝に降せるもの並に汝以前に降せるものを信じ、¹⁰且堅く末世を信する者なり¹¹—¹²此等の者は其主に導かる。彼等は本願成就せん¹³

(1) 古蘭諸章のうち、その二十九章の劈頭に此種の單字あり。回教神学者は之を以て若干語の省略となし、種々たる解釈を試むるも竟に定説なし。一学者が言へる如く『此等の文字の眞意は、唯だアルラーハのみ之を知る』とすべし。(2)

『其身を護る』の原語は *muttaq* にして、アルラーハの懲罰に対して其身を護る意味なり。英語にては常に *God-fearing*

又は Pious と翻譯せらるるも、律法教たる回教に於ては、神罰を免るる必須の條件は『掟を守ること』又は『善事を行ふこと』なるが故に、純粹なる宗教的感情としての『敬虔』と同じからず。(3) 『不可見者 Al-Ghaib』は古蘭中に類出する語にして、復活・最後審判・樂園・地獄等々の超感覺的なるものを指す。(4) 『礼拝 Salat』は常に『祈禱』と訳せらるるも、回教に於て祈禱に相当するは Dua にして、サラートはアルラーハを讚美する宗教的儀禮なるが故に、之を『礼拝』と訳するを妥當とす。(5) 汝とはマホメット、汝に降せるものとは古蘭。(6) マホメット以前にも多くの豫言者が啓示を受けたりとせらる。此処にては其等の諸啓示のうち、モーゼの五書、ダビデの詩篇、及びイエスの福音を指せるものとせらる。(7) 此の一句は古蘭中に類出するものにして、『彼等は成功せん』又は『彼等は榮えん』と訳し得べし。但し成功又は繁榮とは現世に於けるそれに非ず、常に來世の幸福即ち樂園に入ることの意味す。

げに信ぜざる者は汝之を警むるも猶警めざるに同じ。彼等は信ぜざるべし。アルラーハは彼等の心と耳とを封じ、其目には被覆おほひかかれり。彼等には重罰ありせ

人々のうちに言ふ者あり『吾等はアルラーハと末日とを信ず』と。されど彼等は断じて信者に非ず。彼等はアルラーハと信者とを欺かんとして、実は唯だ己れを欺くにすぎず、而も自ら之を識らざるなり。彼等の心には病あり、²而してアルラーハは其病を重からしむ。彼等はその虚言のために痛刑を受けん。人あり彼等に向つて『世を紊す勿れ』と言へば、彼等答へて曰く『吾等は和解者に外な

らず』³と二 嗚呼、彼等自身こそ紊乱者に非ざるか。而も自ら之を識らざるなり三 人あり彼等に向つて『人々の信する如く汝等も信ぜよ』と言へば、彼等答へて曰く『吾等も愚人の信する如く信すべきか』と。嗚呼、彼等自身こそ愚人に非ざるか。而も自ら之を識らざるなり三 彼等、信者に遇ふ時は『吾等も信ず』と言ふも、去りて己れのサタン等⁴のみと偕なる時は即ち曰く『げに吾等は汝等に與す。吾等は唯だ翻弄するのみ』と四 アルラーハは彼等の翻弄に報い、暫くその背逆の中に当てなき彷徨を続けしめん三 此等の者は善導に代へて迷誤を購へるものなり。その取引は如何なる利益をも齎さず、また彼等は決して善導せらるることなし云

(1) 多くの註釈家は『人々』を以て猶太人を指すとなす。されど余はベルが解釈せる如く、此等の諸節は当初猶太人に対象とせるものなれど、後に訂正を加へてメヂナの『偽信者』に向けられたるものとするを妥當なりと信ず。(2) 古蘭中に偽信者は常に『心に病ある者』と呼ばる。その病は恐らくマホメットの君臨に対する政治的不満より来る。(3) 偽信者が回教徒と猶太人との間に介在して策謀せることを非難せられ、その目的は両者の和解にありと辯解せることを指せりとすべし。(4) サタン等とは偽信者の首領又は偽信者同志を指すものとすべし。

譬ふれば彼等は火を點する人の如し。火點せられて四圍を照らす時、アルラーハ其光を奪ひて彼等を黒闇の中に殘し、之をして視ることを得ざらしむモ 彼等は聾者なり、啞者なり、盲者なり。

されば彼等は轉向することなし。また譬ふれば黒闇と電雷とを包みて天より降る雨の如し。彼等霹靂を聞きて死を恐れ、指もて其耳を塞ぐ。されどアルラーハは不信者を圍繞す。電火は殆んど彼等の目を奪ひ、彼等その一閃する毎に光の中に歩み入るも、黒闇彼等を襲へばまた停まる。アルラーハ若し欲しなば、必ず彼等の耳目を奪はん。アルラーハは萬事を能くす。

人々よ、¹汝等其身を護るために汝等並に汝等の先人を創れる汝等の主に事へよ。主は汝等のために大地を絨毯とし、蒼穹を屋宇とし、汝等の糧なる果実を実らしむ。されば汝等知りて同位者をアルラーハに配する勿れ。汝等若し吾僕に降せるものを疑はば、之に類する一章を作り、若し汝等の言眞実ならば、アルラーハ以外の汝等の證人を喚べ。汝等若し之を能くせずば、而して汝等決して能くせざるべし、然らば即ち不信者のために準備せらるる人と石とを薪とする火獄に対して其身を護れ。

(1) 古蘭に於て『人々よ』と言ふ時は、原則としてメッカ市民を対象とし、メデナ市民に対しては『汝等信者よ』と呼ぶを常とす。従つて本章其他のメデナ諸章のうち、『人々よ』と呼びかけたる諸節は概ねメッカ啓示なりとする學者多し。セル、ネルデケ、ロッドウエルの諸氏皆然り。されど第四女人章の如き明白なるメデナ章が『人々よ』といふ呼びかけにて

始められ居るが故に、單に此事のみを以てメッカ啓示と断定することは必ずしも正当なりと言ふべからず。ペルは第二一節以下をメヂナ初期の啓示とし、予もまた之に従ふ。(2)マホメットを指す。(3)多神教徒の拜する石又は石像。(4)火獄の原語は *al-Nar* にして『火』を意味す。古蘭に於て地獄は最も屢々ナールと呼ばれ、別に約三十個処に於て *Jahannam* と呼ばる。予はナールを常に『火獄』と訳し、ジャハンナムを『地獄』と訳せり。

信じて善事を行ふ者には、彼等のために河川流るる樂園ありとの吉報を傳へよ。彼等其処にて果実の糧餉を賜はる毎に『こは吾等が以前に賜はれるものなり』¹と言はん。彼等は之に類するものを賜はるなり。また其処には彼等のために純潔なる配偶あり、彼等長久に其中に住まん²

(1)『以前』とは樂園に入る以前即ち現世を指す。樂園にて賜はる果実が、現世の美果に類するを言ふ。

げにアルラーハは蚊又は其より上なるものを比喻に擧ぐることを恥ぢず。信する者は其の彼等の主よりの眞理なることを知る。されど信ぜざる者は曰く『アルラーハは是くの如き比喻によりて、果して何事を教へんとするか』と。主は之によりて多くの人々を迷はしめまた多くの人々を導く。彼は之によりて唯だ道に背く者を迷はしむるのみ云。彼等は結約の後にアルラーハとの約束を破り、アルラーハが結べと命じたるものを離間し、地上に於て惡事を行ふ者なり、此等は必ず淪喪者たらん³

(1) 古蘭中、蚊又は蜘蛛などの卑近なる比喩を擧ぐることを嘲笑せる猶太人に対して答へたるものとせらる。

汝等如何なればアルラーハを信ぜざるか。彼は汝等が死してありし時に生命を與へたり。彼はまた汝等を死なしめ、再び汝等を甦らしめん。其時汝等は彼に歸らしめらる云。汝等のために地上の萬物を創れるは彼なり。然る後に彼は天に登り、之を七層の天となせり。彼は萬事を知る云

(1) 父の腰間に在りし時は死してありしが、母の胎内に入りて生命を得とするなり。(2) 天を七層となせるは、タルムード又は之に拠れる傳承によれるものにして、猶太教より學べることの一つとせらる。

汝の主が諸天使に向つて『げに吾は地上に一代理者^{カッイフ}を置かんとす』と言へる時を念へ。彼等曰く『汝は地上に惡を作し、血を流す者を置かんとするか。吾等は汝を讚へ、汝の聖潔を頌^ほむるに非ずや』と。彼曰く『吾は汝等の知らざることを知る』と言。彼即ち萬物の名をアダムに教へ、然る後に之を諸天使に示して曰く『汝等の言眞実ならば、此等の物の名を告げよ』と。彼等曰く『汝に榮光あれ、吾等は汝が吾等に教へたるものの外に如何なる知識もなし。げに汝こそ能知者・聰明者なれ』と。彼曰く『アダムよ、其等の物の名を彼等に告げよ』と。而してアダム其等の名を彼等に告げたる時、彼曰く『吾は汝等に、吾は天地の秘密を知る、また吾は汝等が露^{あらは}すこと並に匿すこ

とを知る^vと告げざりしか』と^三

またわれ諸天使に向つて『汝等アダムに叩首せよ』と言へる時を念へ。其時彼等みな叩首せしが独りイブリースのみ傲然として之を拒み、不信者の一人となれり^一。吾曰く『アダムよ、汝と汝の妻とは樂園に住み、隨處に豊かに食へ。唯だ作悪者とならざらんがために此樹に近づく勿れ』と^二然るにサタン^三彼等を蹉かしめ、その居りし處より逐はるるに至らしめたり。吾曰く『汝等此處より降れ^四。汝等の一人は他の敵たるべし。而して地上には汝等のために暫時の居處と糧餉とあり』と^三其時アダム若干の言を其主より賜はり、主は彼の懺悔を允したり。げに彼は允懺悔者・大慈者なり^三。吾曰く『汝等相携へて此處より降れ。他日わが嚮導必ず汝等に到らん。而してわが嚮導に従ふ者には、畏怖なく憂懼なからん^六。されど信ぜずしてわが休徵を虚偽なりと言ふ者は火獄の徒にして、彼等は永劫に其中に住まん』と^三

(1) イブリース Iblis は天使に非ず、惡き幽鬼なり。古蘭第一・五章第二七節に『吾は(アダム)以前に無煙の烈火にてジヤーン Jann を創れり』とあり。レオンによればジヤーンは即ち幽鬼の始祖イブリースなり。(2) 或は無花果なりとし、或は葡萄なりとし、或は麦なりとし、定説なし。(3) サタン Shaitan は此處にてはイブリースと同一幽鬼の名なり。但しサタンは固有名詞として用ひらるると同時に、惡鬼の通稱として普通名詞に用ゐらる。(4) この命令は双数に非ずして

複数なれば、アダム夫婦並にその子孫を含むものとすべし。汝等の一人は他の敵たるべしとは、人類の互に対立し抗争することを意味す。(5)アルラーハを讚美し、之に禱る言。(6)『休徴 Ayah (複数 Ayat)』は古蘭中に最も頻出する語にして、本来は見聞し得る表徴を言ひ、種々なる意味に用ゐらる。即ち天啓・奇蹟・神命・休徴等、みな此語を以て表現せられ、且古蘭の諸節もアーンヤートと名づけらる。蓋し古蘭はアルラーハの啓示のうちの最勝なるものとせらるるが故なり。

イスラエルの兒等よ、汝等に垂れたるわが恩寵を念ひて、吾との約束を完うせよ。然らば吾また汝等との約束を完うせん。されば吾を敬へ。汝等が所持するものを確證するためいま吾が降せるものを信じ、之を信ぜざる者の首先^{さき}となる勿れ。わが休徴を些少の代價に換ふる勿れ。而して吾を畏れよ。虚偽を以て眞理を蔽ふ勿れ。知りつつ眞理を隠す勿れ。禮拜を守り、捐課²を納め、諸禮拜者と共に禮拜せよ。汝等は經典を讀みて善事を他に勧めながら、自ら之を行ふことを忘れたるか。汝等なほ曉らざるか。

(1)汝等が所持するものとは、猶太人に降されたる啓示即ちモーゼ五書並にタビデ詩篇、いま降せるものとは古蘭。(2)『捐課 Zakat』は後には法律によつて定められたる租税を意味するも、初期回教に於ては信心の発現としての慈善即ち財物の喜捨を意味せり。是亦マホメットが猶太教より学べる一つとせらる。メヂナ遷都以後、教團の經費次第に多きを加へ、殊に不信者に対する頻繁なる戦争が最も多くの費用を要するに及んで、喜捨は政治的財源の性質を帯び来り、従つて古蘭中に

極めて屢々喜捨の功德高調せらる。

忍耐と礼拜とによつて佑助を求めよ。されどそれは謙虚者ならでは難きことなり^聖 謙虚者はやがて彼等が其主に会ふこと、また其主に帰り往くことを知る^聖 1

(1) この両節は猶太人に対してに非ず、信者への啓示とすべし。恐らく錯簡なり。

イスラエルの兒等よ、汝等に垂れたる吾が恩寵と、わが萬民に優りて、汝等を選べることを念へ^聖 一人が他人のために一事を爲し得ず、如何なる勸解^{よりたし}も允されず、如何なる贖金も納れられず、如何なる佑助をも得られざる日に対して己れを護れ^聖 われ汝等をファラオの民より救へる時を念へ。彼等は殘虐なる懲罰を汝等に加へ、汝等の女子のみを殘して男兒を屠り去れり²。其中には汝等への偉大なる試練ありしなり^聖

(1) 末日を指す。(2) 旧約出埃及記第一章第一一二節参照。

其時われ海を分ちて汝等を救ひ、汝等の目前にてファラオの民を溺れしめたり¹ 其時われ四十夜に互りてモーゼと約束を結びつつありし間²に、汝等彼の在らざるに乗じ、犢^{ゴウシ}を拜して不義者となれり³ 其後われ汝等を赦したるは、汝等をして感謝せしめんがためなり^聖 またわれモーゼに經典と識別⁴とを與へたるは、汝等が正しく導かれんがためなり^聖

(1) 旧約出埃及記第一四章第二一節参照。(2) 同上第二四章第一八節参照。(3) 同上第三二章第二六節以下参照。

(4) 『識別 Furnace』とは正邪善惡の識別なり。此語は古蘭中にモーゼに降されたる律法 *Taurat* の名称として、また古蘭其者の別名として、並にバドルの戦の勝利の名称として用ゐらる。此處にてはバドルの戦勝をフルカーンと呼べる如く、*フアラオ*の民を溺れしめて猶太人を救へることを爾く名づけたるものと思はる。

其時モーゼ其民に告げて曰く『吾民よ。げに汝等は犢を拜して罪を犯したり¹。されば汝等の創造者に懺悔し、自ら之を殺すべし²。是くするは汝等の創造者の目に最も佳し』と。かくて彼は汝等の懺悔を允したり。げに彼は允懺悔者・大慈者なり³。其時汝等曰く『モーゼよ、吾等明らさまにアラーハを見るまでは汝を信ぜず』と。かくて見る間に電火汝等を襲ひたり⁴。其時われ汝等を死より甦らしめたるは、汝等をして感謝せしめんがためなり⁵。われ即ち白雲を以て汝等を覆ひ、マナと鶉とを汝等に降して、わが與ふる佳きものを食へと告げたり⁴。げに彼等は決して吾を害へるに非ず、自ら其身を害へるなり⁶。

(1) 猶太人は四百年に亙る埃及人との接触によりて、その牝牛崇拜に感染せるものとせらる。古蘭第二〇章第八六―九七節参照。(2) 汝等自身の手にて、犢牛崇拜を勧めたる張本人を殺すべしとの意味なり。旧約は此の張本人をモーゼの兄アロンなりとするも、回教徒は之をアッサミリ *As-Samiri* なりとす。(3) 電火に撃たれて死にたるを甦らしめたること。

(4) 旧約民数記略第二一章参照。

其時吾曰く『汝等此市まきに入り、隨處に豊かに食へ。敬礼して門に入り、¹赦し給へ²』と唱へよ。然らば吾は汝等の罪を赦し、一切の善行者には報賞を増さん』と云。然るに彼等のうちの不義なる者は、彼等に告げられたる言ことばを他の言に代へたり³。されば吾は其等の不義を行へる者の上に天譴を降したり云

(1) 恐らくシナム Shittim 又は之に近きエリッ Jericho なるべし。旧約民数記略第二十五章第一節、同上第三三章第四九。

五〇節参照。(3) 原語 Hittatum。(4) Hittatum と言ふべきを『Hibbatun 穀類』又は『Hinatun 大麦』と言へりと

傳へらる。

またモーゼ其民のために水を求めたる時、吾曰く『汝の杖にて岩を打て』と。即ち其岩より十二の泉湧き出で、各族みな己れの飲むべき場處を知りたり。(吾曰く)『アルラーハが賜へるものを食ひ且飲め。地上に悪を作して害毒を流す勿れ』¹と云

(1) 旧約出埃及記第一十五章第二三—二五節、同上第一七節第一—六節参照。

汝等は言へり『モーゼよ、吾等いろいろの食物に堪えず、されば吾等のために汝の主主に祈れ。主をして地に生ずる若干のもの、即ちその青菜、その胡瓜、その麦、その扁豆、その葱などを吾等のために生ぜしめよ』¹と。モーゼ曰く『汝等は佳きものの代りに之に劣れるものを求むるか。去りて埃

及²に往け。然らば汝等が求むるものを獲ん』と。かくて彼等は屈辱と困窮とを蒙り、またアルラーへの激怒に遭へり。これ彼等がアルラーへの休徴を信せず、且妄りに諸豫言者を殺せるが故なり。これ彼等が背きて掟を破れるが故なり。

(1) 旧約民数記略第一章第五—一〇節参照。(2) 原語 *Misi*。此語は埃及を意味するも、回教註釈家は多く此語を以て『都市』を意味する普通名詞となす。

げ¹に(汝に降されたる啓示を)信ずる者、猶太人たる者、基督教徒、並にサービ教徒、そのいづれたるを問はず、アルラーへと末日とを信じて善事を行ふ者は、必ず其主の報賞を受けん。而して彼等には畏怖なく憂懼もなからん。

(1) 此の一節前後と連絡なし。(2) サービ *Sabi*。教については定説なし。或はセトの子サービを教祖とするが故に此名ありと言ひ、或は之を以て日月星辰を意味するヘブライ語 *Tsaha* の轉訛なる拜天教なりとし、或はアラマイク語の轉訛にて『受洗者』を意味し、当時『洗礼のヨハネ派』と呼ばれシリアの諸異端基督教の一と酷似せる宗教なりとす。そのいづれにもせよ此の教徒は唯一の神と末日とを信じたるものなり。古蘭中の他の二個処、即ち第五章第六九節及び第二二章第一七節に此の宗教の名を挙げ。而して此語はまた一教より他教に轉ずる意味あるが故に、マホメットは当初メッカ市民より『轉向者 *As-Sabi*』と呼ばれたりと言はる。

われ汝等と約束を結び、汝等の頭上に山を擡げて『わが汝等に降せるものを護持し、己れを護る

ために其中に記されたることを銘記せよ』と言へる時を念へ^三 然るに其後汝等また背けり。若し汝等に対するアルラーハの恩惠と慈悲となかりせば、汝等は既に淪喪者のうちに入りしなり^四 汝等は汝等のうちに安息日の掟を破りし者ありしを知る。われ彼等に告げて曰く『汝等猿となれ、蔑まれ且憎まれよ』と^五 吾は之を以て彼等並に次代の者への鑑戒となし、且其身を護る者への訓誡となせり^六

(1) ベルは此の一段(六三—六六)を以て、もと第四七—五三節の一段に続くものとなせり。(2) 回教の傳承によれば猶太人がモーゼの律法を奉ずることを肯んぜざりしを以て、アララーハはシナイ山を彼等の頭上に擡げ、之を威嚇して信受せしめたりとなす。(3) ダビテの治世に当り、紅海岸のアイラ Ailah に住める猶太人が安息日に漁獵を事とせるため、遂に神怒にれ触て猿となれりとする傳承。

¹ モーゼが其民に告げて『アルラーハは汝等が牝牛を犠牲に供へんことを命ず』と言へる時を念へ。其時彼等曰く『汝は吾等に戯るるか』と。彼答へて曰く『吾はアルラーハに佑助を求む、吾を愚者の一人たらしむる勿れ』と^七 彼等曰く『吾等のために汝の主に祈り、主をして其の如何なる牝牛なるかを吾等に明示せしめよ』彼曰く『主は言ふ、そは老に非ず稚に非ざる中年の牝牛なりと。されば汝等命ぜられたる如く行へ』^八 彼等曰く『吾等のために汝の主に祈り、主をして其の如何なる

る色の牝牛なるかを吾等に明示せしめよ』彼曰く『主は言ふ、そは見る者を欣ばしむる鮮黃の牝牛なりと』^九 彼等曰く『吾等のために汝の主に祈り、主をして其の如何なる牝牛なるかを吾等に明示せしめよ。牝牛は吾等には概ね一律に見ゆ。願くはアルラーハの指示に従はん』^十 彼曰く『主は言ふ、そは地を耕し野に灌^{そそ}ぎて疲れざる牝牛、無疵の牝牛なりと』彼等曰く『いま漸く汝は眞実を告げたり』と。かくて彼等は心ならずも之を犠牲に供へたり^{十一}。これ汝等人を殺し、その殺害者について相諍へる時、アルラーハは汝等が匿さんとせることを露顯せしめんとせるなり^{十二}。吾曰く『其の牝牛の一枝を以て彼を打て』と。かくしてアルラーハは死者を甦らしめ、汝等に其の休徴を示したり。これ汝等を曉らしめんがためなり^{十三}。然るに其後汝等の心は石の如く硬く、また石よりも硬くなれり。そは石の中には河川其間より湧くものあり、また自ら崩裂して水を其中より流れ出でしむるものあり、またアルラーハを畏れて自ら隕落するものあるが故なり。アルラーハは決して汝等の為すことを看過せず^{十四}。

(1) 第六七—七三節は、殺人の罪を犯せる者を発見するため、モーゼが牝牛を神に供へしめたりといふ傳承によるものなり。即ち犯人の誰なるかを知り得ざりし時、モーゼ天啓によりて牝牛を神前に供へ、其中の一枝を以て被害者を打ちしに死者忽ち甦りて、己れを殺せる者の名を告げたりといふなり。旧約民数記略第一九章第一—九節、申命記第二二章第一—九

汝等なほ彼等が汝等を信ぜんことを望むか¹。彼等の或者はアルラーハの言を聴き、之を会得したる後、知りつつ之を変改せり²。彼等信者と遇ふ時は曰く『吾等もまた信ず』と。されど彼等のみなる時は即ち曰く『汝等はアルラーハが汝等に降せるものを彼等に示し、彼等をして之によつて汝等の主の前に汝等、³ 争論せしめんとするか。汝等曉らざるか』と。彼等はアルラーハが彼等の匿すこと並に露すことを併せ知ることを知らざるか⁴。彼等のうちには妄傳のみを知りて經典を知らざる文盲者あり。彼等は唯だ臆測するのみ⁵。されど己れの手もて經典を書き、些少の利益を獲んがために『こはアルラーハより降されたるものなり』と言ふ者は禍なるかな、彼等が之によりて利得することは禍なるかな⁶。而して彼等曰く『獄火の吾等に触るるは若干日の間のみ』と。言へ『汝等は是くの如き約束をアルラーハと結びたるか。果して然らばアルラーハは約束を破らざるべし。又は汝等己れの知らざるアルラーハについて語るか』と。然らず、惡事を積み、諸惡身を圍む者、此等は実に火獄の徒にして、永劫に其中に住まん⁷。されど信じて善事を行ふ者、此等は樂園の徒にして、長久に其中に住まん⁸。

(1) 『彼等』とは猶太人、『汝等』とはメヂナの信者を指す。此の一段は猶太人が經典を変改又は曲解せりとし、また經

典をマホメットの信者に隠蔽せりとして非難を加ふるものなり。(2)『妄傳』の原語は空想・空望等の意味、此処にては猶太人の教師が教ゆる傳承を指せるものとすべし。經典とはモーゼ五書なり。(3)經典を更改して書写せりとの意味なるべし。(4)若干日とは四十日、即ちモーゼの不在に乗じて猶太人が犢を拜したる日数。

われイスラエルの兒等と約束を結べる時を念へ¹。其時吾曰く『汝等アルラーハの外に何者にも事ふる勿れ。汝等の父母と近親と孤兒と貧者とに善くし、人々に愛語し、禮拜を守り、喜捨を行へ』と。然るに其後汝等のうち少数の者を除き、忌避して約に背きたり²。またわれ汝等と約束を結べる時を念へ²。其時吾曰く、『汝等己れの血を流すべからず、汝等の居處より己れの民を逐ふべからず』と。而して汝等之を確認し、且汝等自身その證人たりしなり³。然るに汝等互に相屠り、汝等の一部をその居處より逐ひ、罪惡と敵意とによつて互に其敵を助けたり³。而して彼等若し俘虜となりて汝等に未れば、之を逐へることが既に違法なるが上に、更に贖金を受納して之を釋放せり。汝等は經典の一部を信じて他部を拒む者なるか。果して然らば是くの如きことを敢てする者の応報は現世に於ける屈辱並に復活の日に於ける極刑に非ずして何ぞ。アルラーハは汝等の為すことを看過せず⁴。是くの如きは末世の價を以て現世を買へる者なり。彼等の懲罰は輕減せられず、且彼等は如何なる佑助をも得ざるべし⁴。

(1) シナイ山に於けるモーゼとの約束。(2) マホメットがメヂナ遷都の直後に猶太人と結びたる契約を指す。(3) メヂナのアウス・カズラジ両アラビア族が相争へる時、クライザ・ナヅィールの両猶太族が、相分れて相争ふアラビア族に加祖し、互に相殺戮し、且互に其の住居を破壊せることを言ふ。

げに吾はモーゼに經典を與へ、諸使者をして彼の後を繼がしめたり。また吾はマリアの子イエスに明白なる休徴を與へ、且聖靈¹を以て彼に助力せり。然るに使者が汝等の喜ばざるものを齎して汝等に至る毎に、汝等傲然として或者をば虚言者と呼び、或者をば殺害せるに非ずや。彼等曰く『吾等の心は覆はれたり』と。然らず。アルラーハは其の不信の故を以て彼等を呪咀せり。彼等は殆ど信ぜざるなり。いま彼等が所持するものを確認する經典が、アルラーハより彼等に降されたり。然るに曾ては不信者に対する勝利を祈願しながら、²いま其の承認せるものが彼等に至るに及んで、彼等之を信ぜんとせず。さればアルラーハの呪咀、不信者の上³にあり。彼等がアルラーハの降せるものを信ぜざるは、アルラーハが其の僕等のうち己れの好むところの者に恩寵を垂るることを嫉むが故にして、げに其魂を廉價に賣り去れるものなり。かくて彼等は神怒の上に神怒を招げり。而して不信者には恥づべき懲罰あらん。人あり、彼等に向つて『アルラーハの降せるものを信ぜよ』と言へば、彼等曰く『吾等は吾等に降されたるものを信ず』と。されど其後に降れるものは、

設ひ彼等が所持するものを確證する眞理なりとも、決して之を信ぜざるなり。言へ『汝等若し信者ならば、何故に曾てアルラーハの豫言者等を殺せるか』と云

(1) 聖靈 *Ruhu-l-Qudus* は、基督教に於ける聖靈に非ず、天使ガブリエル *Jibril* を指す。古蘭をマホメットに傳へたるもまたガブリエルなりとせらる。(2) メヂナの猶太人は、曾てアウス・カズラジ兩族のために迫害せられし時、常に彼等を征服する救世主の出現を祈願し居たることを言ふ。(4) アルラーハの好むところの者とはアラビア人たるマホメットを指す。即ち豫言者が猶太人の間に出でず、アラビア人の間に出でたることを嫉視するを言ふ。

げにモーゼは明瞭なる休徴を齎して汝等に至れるなり。然るに汝等は犢を拜して不義者となれり^三。而してわれ汝等と結約し、山を汝等の頭上に擡げて『わが汝等に賜へるものを堅持し、且之に聽け』と告げたる時、彼等は『吾等は聽く。されど背く』と言へり。かくて彼等は其の不信のため、犢を心中に吞ましめられたり^一。言へ『汝等若し信者ならば、汝等の信仰が汝等に命ずるところのものは惡むべきかな』と云 言へ『若しアルラーハと偕なる末世の居處が、自餘の民を排して専ら汝等のものならば、而して汝等の言眞実ならば、汝等即ち死を望め』と云 されど彼等は其手が豫め送れるものために、決して死を望まざるべし。げにアルラーハは不義者を知る^五。汝は彼等が生に執着すること最も甚だしき民にして、実に多神教徒^三よりも甚だしきことを知らん。げに多神教

徒のうちには千年の壽命を望む者あり。されど設ひ長壽を惠まるとも、そは懲罰を免るる所以に非ず。アルラーハは彼等の為すことを照覽す矣

(1) モーゼ、彼等の作れる犢の神像を灰燼に歸せしめ、之を河中に投じてイスラエルの兒等に飲ましめたりとの傳承。旧約出埃及記第三二章第二〇節、申命記第九章第二一節參照。註釈家の或者は「心中に吞ましめられたり」といふは、犢を崇拜する心を生ぜしめられたる意味と解す。(2) 其手が豫め送るものとは、最後審判を受くべき現世に於ける言行を意味し今後古蘭中に類出す。(3) 多神教徒とは恐らくゾロアスター教徒を指す。彼等は人を祝福するに當りて常に千年の壽を祈願せり。

言へ『ガブリエルの敵は誰ぞ¹』と。げに彼こそアルラーハの命を奉じ、信者への嚮導並に吉報として、以前に降されたるものを確證する古蘭を汝に啓示せる者なれを。アルラーハ、その諸天使、その諸使者、ガブリエル、さてはミカエルの敵は誰ぞ。げにアルラーハは不信者の敵なり矣。げに吾は證據として諸の休徴²を汝に降したり。作悪者の外は誰か之を信ぜざるものぞ矣

(1) ガブリエルは懲罰の執行者として猶太人の惡むところ、ミカエルは愛護者として其の好むところなり。猶太人がマホメットに神意を傳ふる天使は誰ぞと問へるに對し、そはガブリエルなりと答へたる時、彼等は若しミカエルなりせば吾等も之を信ぜんと言へりと傳へらる。(2) 此処の休徴は古蘭の諸節を指す。

彼等約束を結ぶ毎に、彼等の一部は必ず之を破ると言ふか。然らず、彼等の多くは信ぜざるな

(1) 此の一節前後と連絡なし。但し猶太人の背信を糾弾せるものなり。

アルラーハの使者彼等に来りて、其の所持するものを確證する時、¹ 經典を賜はりたる者の一部は宛も知らざるが如く装ひて、アルラーハの經典を背後に棄つ²。彼等はソロモンの世にサタン等が好んで讀誦せるものに従ふ²。ソロモンは不信者なりしに非ず、信ぜざりしはサタン等なり。彼等は人々に妖術を教へ、またバベルにてハールト・マールトの兩天使に降されしものを教へたるなり。されど兩天使は先づ『吾等是一個の誘惑に他ならず。されば決して不信者となる勿れ』と告げたる後ならでは、何人にも教ゆることなかりき。かくて人々は、夫婦を離間する術を兩天使に学びたり。されど彼等はアルラーハの允許なくしては、何人をも之によつて害することなかりき。彼等は己に害ありて益なきことを学べるなり。而して彼等は、此術を購へる者が来世を與ることなきを知れり。げに彼等は廉價に其魂を賣れる者なり。彼等若し此事を知りたりせば³ 彼等若し信じてアルラーハを敬ひたりせば、更に佳き報賞をアルラーハより得たりしなるべし。彼等若し此事を知りたりせば³

(1) 猶太人並に基督教徒、即ち『受經者 *Alur-Kit b*』 (2) 此の一句は『ソロモンの支配に抗せるサタン等が捏造せる

ものを信奉す』とも解せらる。傳承によれば、サタン等はソロモンを誘惑せんとして果たさず、よつて幾多の『魔術の書』を書きて之をソロモンの王座の下に埋め置き、王の死後に之を発掘せしめたり。而して猶太人は此等の書によつて魔術を習得せりと言はる。(3) Harut 及び Marut は、人間を試むるために地上に降されたる二天使なるが、罪を犯して神怒に觸れ、現世・来世のいづれに於て罰せらるべきかを擇べと告げられ、現世にての懲罰を乞ひしたため、長くバベルの岩窟内に倒懸せらるるに至れりとの傳承。

汝等信者よ、ラーアイナーと言ふ勿れ、ウンズルナーと言へ¹、而して耳傾けよ。げに不信者には痛刑あらん²

(1) Ra'ina は『吾等に聽け』 Unzurra は『吾等を視よ』の意味にして、共に信者等がマホメットに対して用ゐたる挨拶の言葉なり。但しラーアイナーは僅にアクセントを変へて発音する時は『わが愚者よ』又は『わが惡漢よ』の意味となり、猶太人が回教徒を愚弄するため好んで此の抄抄を用ゐたるため、その使用を禁じたるなり。

受経者中の不信者並に多神教徒は、汝等の主が如何なる善事をも汝等に降すことを欣ばず。されどアルラーハは己れの好む者を選んで慈悲を之に垂る。げにアルラーハは偉大なる施恩者なり³われ古蘭の如何なる諸節を撤廢するとも、又は之を忘却せしむるとも、吾は必ず之に優る又は之に等しきものを賜ふべし。汝²はアルラーハが全能なるを知らざるか⁴ 汝は天地の大権がアルラーハに屬するを知らざるか。またアルラーハの外に一守護者なく、一佑助者なきことを知らざるか⁵

又は汝等は、曾てモーゼが問はれし如く、汝等の使者にも問はんとするか。² げに信心を以て不信心に換ふる者は、正しき道より迷ひ去れる者なり云

(1) この一段は以前に降されたる古蘭の諸節を、以後の啓示によりて撤廃することを是認するものにして、恐らく猶太人の非難に対してなされたるものなり。是くの如くにして撤廃せられたる諸節の数については学者の所説区々にして、少きは僅に五節、多きは二二五節を挙げ。(2) この『汝』は撤廃を非難せる猶太人を指せるものとすべし。(3) 明らさまに神を見んことをモーゼに求めたることを指す。本章第五五節参照。

受経者の多くは、眞理が明示せられたる後に於ても、己れの嫉妬のために、既に帰信せる汝等を再び不信者たらしめんことを願ふ。されどアルラーハの命令至るまでは、彼等を容赦して、意に介すること勿れ。げにアルラーハは全能なり云 禮拜を守り、捐課を納めよ。汝等が己れのために豫め送る一切の善事は、皆なアルラーハの許にあり。げにアルラーハは汝等の為すこと照覽す云

彼等曰く『猶太人及び基督教徒の外は何人も樂園に入るを得ず』と。これ彼等の空望なり。言へ『汝等の言眞実ならば其の證據を示せ』と云 然らず、善事を行ひて、アルラーハに帰命する者は、必ず其主より報賞を受け、畏怖なく憂懼なからん云 猶太人曰く『基督教徒は據るところなし』と。基督教徒また曰く『猶太人は據るところなし』と。両者は共に同一の經典を讀誦する者なり。而して

知識を所持せざる者¹もまた同様の言を為す。復活の日に於て、アルラーハは彼等の争点に対して判決を下すべし^三。而もアルラーハの礼拝堂^{マシット}に詣でて其名を唱ふるを拒み、また之を毀つよりも甚だしき不義あるか²。彼等は恐懼せずしては之に入るを得ざるなり。彼等は現世に於て屈辱を、末世に於ては重刑を受けん^四。東も西もアルラーハに屬す。汝等いづれの方位に向ふとも、其處にアルラーハの慈顔あり。げにアルラーハは遍在者・能知者なり^五。彼等曰く『アルラーハに子あり⁴』と。彼を讃へよ、断じて然らず。天地間の萬物は彼に屬し、一切のものは彼の命令に服す^六。そは天地の創造者なり。かれ一事を決して、唯だ『有れ』と言へば即ち有り^七。

(1) 『知識』とは天啓の知識にして、知識なき者とは天啓の經典を所持せざる多神教徒を指す。(2) この一節は若しメッカ市民を対象とするものとすれば、遷都六年マホメットが信者を率ゐてメッカ参詣を企てて、ホーダイイビーヤに到れる時、メッカ市民が之を阻止せるを言へるものとすべく、従つて前後諸節と啓示年代を異にすることとなる。それ故にロッドウエルは、若し然りとすれば此の一節は錯簡たるべしとせり。但し若し猶太人を指すとすれば、礼拝堂とはエルサレム神殿にして、波斯人のエルサレム攻略に際し、猶太人の之に加勢せる者ありしを糾弾せるものとすべし。(3) 従来エルサレムに向へる朝向^{キブラ}をメッカに変更することを豫言するものとすべし。但し此の一節は本章第一四四節によつて撤廢せられ、朝向は必ずメッカに面すべしと定められたり。(4) イエスを神子たりとする基督教の信仰を言ふ。

知識を有せざる者曰く『何故にアルラーハは吾等に物言はざるか、また吾等に休徴が降らざるか』

と。彼等以外の者もまた是くの如く言へり。彼等の心は酷似す。吾は既に種々なる休徴を堅信の民に明示せりニ

げに吾は眞理を以て吉報傳達者並に警告者として汝を遣はしたり。而して汝は火獄の徒について問はるることなし¹ 猶太人は汝が彼等の信仰を奉ずるまでは汝を欣ばさるべく、基督教徒もまた然らん。言へ『アルラーハの嚮導こそ嚮導なれ』と。既に知識を賜はれる後に於て、汝若し彼等の欲するところに従ふ如きことあらば、汝はアルラーハに対して一愛護者又は一佑助者をも有せざるべし言 われ經典を與へたる者、而して正しく之を讀誦する者は、即ち之を信ず²。之を信ぜざる者は即ち淪喪者なり三

(1) 審判の日に於てアルラーハに問はれざること。即ちマホメットの警告を聽かずして火獄の徒となるものに対して、マホメットは責任を負はざること。(2) 此の一節は猶太人又は基督教徒のうちに、マホメットに歸依せる者ありしことを示す。

イスラエルの兒等よ、汝等に垂れたる吾が恩寵と、萬民に優りて汝等を選べることを念へ三
一人が他人のために一事を為し得ず、如何なる贖金も納れられず、如何なる勸解^{とらな}も允されず、如何なる佑助も獲られざる日に対して其身を護れ三 アブラハムが其主の言によつて試みられ¹、而して

之を果たせる時を念へ。主曰く『吾は汝を人間の導師^イたらしめん』と。彼曰く『吾が子孫は如何』
主曰く『わが約束は不義の者に及ばず』^二と言。其時われ聖殿^二を以て衆人の歸處並に平安の地たらし
め、アブラハムの立てる處を禮拜所とせよと告げ、またアブラハム並にイシマエルと結約して、
『之を周行する者、靜坐する者、鞠躬する者、叩首する者のために吾家を潔めよ』と告げたり^三
其時アブラハム曰く『主よ、此處を平安の地となせ、^三而してアルラーハと末日とを信する民のため
に果実を賜へ』と。彼曰く『信ぜざる者には暫く現世を樂しましめ、然る後に之を火獄の刑罰に逐
ひやるべし。げに惡き行先なり』^{と三}

(1) アブラハムが其の愛兒を神に獻ぐべきを命ぜられたること。(2) 原語は『家』。メツカ方殿を指す。(3) 神域を
『禁地 Harām』として流血を禁すること。

アブラハム、イシマエルと共に宮の礎を築き了へて曰く『主よ、此宮を吾等より受けよ。げに汝
は能聞者・能知者なり^三 主よ、吾等を汝に歸命せしめ^一、吾等の子孫をも汝に歸命する民たらしめ
よ。吾等に吾等の儀礼を示せ。吾等の懺悔を容れよ。げに汝は允懺悔者・大慈者なり^三 主よ、彼
等のうちより一使者を擧げ^二、汝の啓示を彼等に復誦せしめ、經典と智慧とを彼等に與へ、彼等を潔
めしめよ。げに汝は偉力者・聰明者なり』^{と三}

(1) 回教に於て信者とはムスリム即ち『帰命する者』即ち絶対に神意に随順する者の意味にして、イスラームは『帰命』又は『随順』の意味。(2) 『彼等』とはメッカ聖殿の周辺の住民即ちアラビア人を指す。アブラハムがアラビア人の間より一使者の出現せんことをアルラーハに祈れりとするなり。

喪心者に非ざるよりは、誰かアブラハムの教を棄つるものぞ。げに吾は現世に於て彼を選び、末世に於ては義人に伍せしむ言。主彼に向つて『帰命せよ』と告げたる時、彼は『われ三界の主に帰命す』と答へたり^三。而してアブラハムは之を其の子等に傳へて曰く『わが子等よ、アルラーハは汝等のために此教を択びたり。されば汝等帰命者^{ムスリム}とならずしては死ぬる勿れ』と。而してヤコブもまた然かせり^三。ヤコブ臨終の時、汝等¹は其場に在りしか。其時彼その子等に向つて曰く『吾亡き後に汝等何者に事へんとするか』と。子等曰く『吾等は汝の神、汝の祖先の神、アブラハム・イシマエル・イサクの神なる唯一の神に事へん。吾等は彼に帰命す』と^三。こは既往の民なり²。彼等には彼等の所行、汝等には汝等の所行に対する応報あるべし。汝等は彼等の為せることについて問はるることなし^三。

(1) 汝等とは猶太人を指す。(2) アブラハム及び其の後継者は、マホメット当時の基督教及び猶太教と全く別個なる宗教を信じたりとの意味なり。而して回教もまた猶太教及び基督教より独立して、アブラハムの信仰を復興せんとするものなることを意味す。

彼等曰く『猶太人又は基督教徒となれ。然らば汝等正しく導かれん』と。言へ『然らず、吾等は堅信者にして多神教徒に非ざりしアブラハムの教を奉ず』と。汝等是く言へ『吾等はアルラーハを信じ、吾等に降されたるものを信じ、アブラハム・イシマエル・イサク・ヤコブ並に諸支族に降されたるものを信じ、モーゼとイエスとに降されたるものを信じ、諸豫言者に其主より賜はれるものを信じ、其間に差別を設くることなし。吾等は唯だ彼に帰命す』と。彼等若し汝等の信する如く信じなば、彼等正しく導かれん。されど彼等若し背き去らば、彼等は即ち背教者となれるものなり。アルラーハは彼等に対して汝を護るに足る。彼は能聞者・聰明者なり。吾等はアルラーハの洗礼を受く。アルラーハに勝る授洗者あるか。吾等は唯だ彼に事ふ。

(1) 『堅信者』はハニーフ *Haniif* の訳なり。もと『心を傾くる者』の意味にて、マホメット時代に眞摯なる求道者をハニーフと呼びたり。古蘭にては『信心堅固なる者』又は『アブラハムの信仰を奉ずる者』の意味に用ゐらる。(2) 洗礼の原語はサブグ *Sabgh* にして本来染色の意味なり。此処にては洗礼の意味に用ゐられたりとする説に従ふ。即ち基督教の水の洗礼に対して、アルラーハの洗礼を高調するなり。

言へ『汝等アルラーハについて吾等と争論せんとするか。そは吾等の神にして、また汝等の神に非ざるか。吾等には吾等の事あり、汝等には汝等の事あり、吾等は唯だ至心に彼に事ふるのみ』

と言。また汝等はアブラハム・イシマエル・イサク・ヤコブ並に諸支族が、猶太人又は基督教徒なりしと言ふか。言へ『最も善く知る者は汝等なるか、將又アルラーハなるか。アルラーハが降せる証據を有しながら、之を隠匿するより甚だしき不義あるか。アルラーハは汝等の為すことを看過せず』と云。そは既往の民なり。彼等には彼等の所行、汝等には汝等の所行に対する応報あるべし。汝等は彼等の為せることについて問はるることなし^一

人々のうちの愚者は言はん『何故に彼等は曾て守れる^{キアラ}朝向を変へたるか¹』と。言へ『東も西もアルラーハに屬す。彼は己れの欲する者を直き道に導く』と^二。彼は是くの如くにして汝等を中正の民たらしむ。そは汝等をして人類に対する証人たらしめ、使者をして汝等に対する証人たらしめんがためなり。われ曩に汝等が守れる朝向を定めたるは、使者に従ふ者と踵を回す者とを分たんがためなり。そはアルラーハに導かるる者以外には一大事なるべし。されどアルラーハは汝等の^{イマニ}信仰を空しくせず。げにアルラーハは人間に柔和にして仁慈なり^三

(1) 従来はエルサレムに向つて礼拝せるを、次の第一四四節の啓示によつて朝向をメッカに改めたることを言ふ。朝向變更は即ち回教の獨立宣言にして、猶太人並に基督教徒に対する最後通牒なり。(2) 中正の原語は *wasai*、物の中部又は最上の部分を意味し、従つて不偏不党の意味に用ゐらる。ウルマンは『猶太人と基督教徒との中を持する民』の意に解す。

吾は汝が其面おもてを天に向くるを見る。いま吾は汝が欣ぶキアラ朝向を汝に與へん。汝の面おもてを聖殿に向けよ。汝等いづこに在りとも其面を之に向けよ¹。げに受経者は此事が彼等の主よりの眞理なることを知る。アルラーハは彼等の為すことを看過せず²。設ひ汝は一切の休徴を受経者に示すとも、彼等は汝の朝向に従はざるべし。汝は彼等の朝向に従はず、彼等は他の朝向に従はざるなり。知識既に汝に至れる後、汝若し彼等の欲するところに従ふが如きことあらば、げに汝は不義者の一人たるべし³。受経者は己れの子を認むる如く此事²を認む。げに彼等の一部は知りつつ眞理を隠すなり⁴。此の眞理は汝の主より出でたるものなれば、疑惑者の一人となる勿れ⁵。

(1) 『汝が其面を天に向くるを見る』といふは、此の啓示がマホメットが礼拝堂に於て礼拝を指導しつつありたる時に降れるが故とせらる。傳承は下の如く語る。メヂナ遷都後約一年有半のころ、マホメットは礼拝堂に於て信者の導師として恒例の礼拝を行ひたり。此日まではエルサレムが朝向とせられしを以て、マホメットは信者と共に北方に向つて礼拝し、既に一拜に及びたる時、突如此の啓示を受け、直ちに轉回して南方に面し、メッカ聖殿に向つて礼拝を続け、信者も之に従へりと。メヂナを距る數哩の地に此の礼拝が行はれたりとする『二重朝向礼拝堂 Masjidu 'l-Kiblatain』あり。但し現在は礼拝のために使用せられず、唯だ聖蹟として保存せらる (Lady Evelyn Cobbold: Pilgrimage to Mecca. p. 85)。 (2) 此事とは朝向変更の眞理を指すか、然らずばマホメットの使命を意味す。

各人皆な其の面する方向あり、唯だ競ひて善事を行へ。汝等いづこに在りとも、他日アルラーハは

一齊に汝等を召集すべし。げにアルラーハは全能なり^一。汝いづれの処より来るとも、汝の面を聖殿に向けよ。げにそは汝の主よりの眞理なり。而してアルラーハは汝等の為すことを看過せず^二。汝いづれの処より来るとも汝の面を聖殿に向けよ。而して汝等いづこに在りとも汝等の面を之に向けよ。かくするは不義者の外は何人をも汝等に対して異存なからしめんがためなり¹。彼等を恐れず、吾を畏れよ。そはわれ汝等にわが恩寵を完うし、汝等を正しく導かんがためなり^三。吾はそのために汝等のうちより擧げたる一使者を汝等に遣はし、吾が休徴を汝等に復誦し、汝等を潔め、經典と智慧とを汝等に教へ、汝等の知らざりしことを汝等に教へしむ^三。されば汝等吾を念へ、吾また汝等を念はん。吾に感謝し、吾恩を忘るること勿れ^三。

(一) エルサレムを朝向とすることはアラビア人の間に異存ありしも、いま之をメッカに改めて彼等を満足せしむべしとの意味。

汝等信者よ、忍耐と礼拜とによつて佑助を求めよ。げにアルラーハは耐え忍ぶ者と偕にあり^三。またアルラーハの道に殺されたる者¹を死せりと言ふこと勿れ。然らず、彼等は生きて在り、唯だ汝等之を知らざるのみ^二。げに吾は恐怖と飢餓、財産と生命と果実との喪失を以て汝等を試むべし。されば耐え忍ぶ者に吉報を傳へよ^三。不幸に遭ひて『げに吾等はアルラーハのものなり。げに吾等は汝

に帰るなり²』と言ふ者² 是くの如き者の上にこそ其主よりの祝福と慈悲と降るなれ。彼等こそ正しく導かるる者なれ²

(1) アルラーハの道に殺さるとは、常に不信者との戦争即ち聖戦 Jihad に於て戦死することを言ふ。この啓示はバドル会戦後のものとす。但し堅忍を高調する点より見れば、ウホド敗戦後の啓示たるやも知るべからず。(2) 此の一句は現在に於て回教徒が不幸は遭遇する時に常に唱へらる。

サフアーとマルワとはアルラーハの聖蹟のうちなり¹。されば聖殿に参詣^{ハヤジ}し又は参殿^{ウムラウ}する者は、此等両丘に周遊するも罪なし。進んで善事を行ふ者には、げにアルラーハは感恩者・悉知者なり²

(1) サフアー Safa 及びマルワ Marwa はメッカ郊外の両丘にして、アラビア人は往古より丘上に祀られたる神に参詣し来れるものなり。両丘に詣ぶることを許したるはアラビア在来の民族的宗教の一儀礼を回教に採用せるものなり。(2) 参詣期以外の時期に聖殿に参拜し、供犠以外の参詣の諸儀礼を行ふことを 'Umra と云ふ。仮に之を『参殿』と訳す。

げにわれ明証並に嚮導を降し、¹ 經典中に之を人々に明示せる後に、猶且之を隠蔽する者は、アルラーハ之を呪咀し、其他の呪咀する者もまた之を呪咀すべし² 但し懺悔して其身を修め、眞理を宣揚する者を除く。吾は彼等の懺悔を允さん。吾は允懺悔者・大慈者なり³ げに信仰に入らず不信者として死ぬる者、此等の上にこそアルラーハと天使と全人類との呪咀あるなれ³ 彼等は永遠に

呪咀せられん。其の刑罰は輕減せられず、また猶豫せられざらん^三

(1) 猶太人を対象とするが故に、此の經典はモーゼ五書を意味す。(2) 其他の呪咀する者とは次節にある「天使と全人類」なり。旧約申命記第二十八章第一五節以下参照。

汝等の神は唯一の神なり。彼の外に神なし。そは大悲者・大慈者なり^三。げに天地の創造、晝夜の循環、人を利するものを運びて海上を走る船舶、アルラーハが天より降し、之によつて死せる大地を甦らしめ、各種の家畜を地上に繁殖せしむる雨、風の去来、天地の間を使用する雲、總じて是れ思慮ある者への休徴なり^四。然るに人々のうちにはアルラーハの外に之に配する神々を選び、アルラーハを愛すると同じく之を愛する者あり。唯だ信ずる者のみ何者にも勝りてアルラーハを愛す。嗚呼此等の不義を行へる者が、己れの刑罰を課せらるる日を目睹し、一切の權威は擧げてアルラーハに属すること、而してアルラーハの刑罰の峻嚴なることを知りたりせば!^五其時隨從者を有せる者¹は己れに隨從せる者を拋棄すべし。彼等は刑罰を目睹すべく、彼等を結べる絆^{きづな}は寸断せらるべし^六。其時隨從者等は言はん「吾等若し再び世に還ることを得なば、彼等が吾等を棄てたる如く、吾等も彼等を棄てんものを」と。是くの如くにしてアルラーハは彼等に其の為せることを明示す。彼等には唯

だ長嘆息あるのみ。彼等は火獄を出離することを得ざるなり²

(1) 多神教徒の崇拜の対象たる神々、又は偽の宗教的指導者。(2) 此の一段の啓示の対象はメツカ市民なりと思はる。
ネルデケ及びロッドウエルは之をメツカ啓示とせり。

人々よ、汝等地上にある物のうち、合法なる佳きものを食ひ、サタンの足跡に従ふ勿れ。彼は汝等の公然の敵なり³。彼は唯だ悪事と醜行とを汝等に勧め、またアルラーハについて汝等が知らざることを言はしめんとす⁴。

人¹あり彼等に向つて『アルラーハが降せるものに従へ』と言へば、彼等曰く『否な、吾等は祖先の行へるところに従はん』と。何たる事ぞ、彼等の祖先は蒙昧にして、正しく導かれざりしに非ざるか⁵。信ぜざる者は之を譬ふれば喚呼と叫號との外に何事をも聽き得ざるものに向つて呼ぶ者の如し。彼等は聾者・啞者・盲者なり。されば彼等は曉らず⁶。

(1) ベルは此等両節を以て第一六五節前半、即ち『唯だ信ずる者のみ何者にも勝りてアルラーハを愛す』に続くものとなせり。

汝等信者よ、わが汝等に賜ふ佳き品々を食ひ、汝等若しアルラーハに事ふる者ならば之に感謝せよ⁷。彼は唯だ死物、血、豚肉並にアルラーハ以外の者に供へられたる物を禁ず。されど自ら欲せ

るに非ず、又は故意に違背せるに非ず、唯だ強要せられたる場合は罪に非ず。アルラーハは寛恕者・大慈者なり^三

げにアルラーハが降せる經典の一部にても之を隠蔽¹し、之によつて些少の利益を購ふ者は、唯だ火のみを己れの腹中に吞む者なり。復活の日にアルラーハは彼等に物言はず、また彼等を潔めざるべし。彼等は痛ましき懲罰を受けん^五。此等は嚮導を賣りて迷誤を買ひ、寛恕を賣りて懲罰を買ふ者なり。火獄にての彼等の忍苦は如何に甚だしかるべきぞ^五。さればこそアルラーハは眞理を以て經典を降したるなれ。この經典²について異論を唱ふる者は離反すること甚だしき者なり^五。

(1) 猶太人を対象とするものにて經典とはモーゼ五書、隠蔽すとはマホメットに関する記載を隠蔽すといふ意味。(2) 經典について異論を唱ふとは、モーゼ五書中にマホメット出現を豫言せることについて異論を唱ふることを言ふ。

其面を東に向け又西に向くことは決して正義に非ず。正義とはアルラーハと末日と天使と經典と豫言者とを信じ、アルラーハを愛するが故に其の財産を近親・孤兒・貧者・乞食並に贖身者^{リカンプ}のため¹に費し、禮拜を行ひ損課を納むることを謂ひ、また約束を結べば之を果たし、困窮と艱難と戦争とに際して能く忍耐するを謂ふなり。此等は眞実を言ふ者にして、また能く其身を護る者なり^三

汝等信者よ、殺害に対する報復は、自由民には自由民、奴隸には奴隸、女子には女子と定めら

る。但し加害者が被害者の兄弟によつて赦免せらるる場合は、慣例によつて之に贖血金を課し、懇ろに之を支拂はしむべし。これ汝等の主よりの減刑にして且慈悲なり。其後に於て此掟を犯す者は²痛刑を加へらるべし¹。この報復の掟は汝等の生命を保障するものなり。汝等有識の者よ、これ汝等をして其身を護らしめんがためなり¹。

(1) 赦免するとは之を死刑に処することを赦すなり。(2) 一旦贖血金を受納したる後に加害者を殺すこと。

汝等のうち臨終に際して財産を遺す者は、遺言により慣例に従つて両親並に近親に之を贈與すべしと定めらる。これ其身を護る者に課せらるる義務なり¹。遺言を聞きたる後に之を変更する者ある場合は、罪は変更せる者の上にある。アルラーハは能聞者・能知者なり²。但し遺言者に錯誤又は不正あることを懼れ、当事者の間に立ちて之を調停することは罪に非ず。アルラーハは寛恕者・大慈者なり³。

汝等信者よ、先人に定められたる如く、汝等にも齋戒を定めらる。これ汝等として其身を護らしめんがためなり³。そは一定の日数なり。但し汝等のうち病者並に旅行者には他の時期の同一日数なり。また齋戒し得る者も貧者の供養によつて之を贖ふを得べし¹。進んで善事を行ふは彼のために最も善し。若し汝等に知識あらば、齋戒は汝等のために最も佳し³。

(1) 齋戒 Saum は回教の根本儀礼なる五行の一たるが故に、最も嚴格に之を守るべしとせらる。然るに本節に於て人は随意に貧民供養を以て之に代ふることを得とせられたるを見れば、当初は尙寛大なりしたるべく、従つて本節はメヂナ遷都当初の啓示とすべし。而して本節は恐らく之より一年以後の啓示と思はるる次節の規定によつて撤廢せられたるものとすべし。

ラマザーン月¹は人々の嚮導として、導の明証として、また眞偽の識別^{フルカイン}として、古蘭の降されたる月なり。汝等のうち家に在る者は此月に、病者並に旅行者は他の月に同一日数齋戒すべし。アルラーハは汝等に易さを求めて難さを求めず。これ汝等が能く日数を完了し、汝等に賜へる導に對してアルラーハを讚美し、且汝等をして感謝せしめんがためなり^{一全}

(1) ラマザーン Ramazan 月は回教曆第九月なり。ラマザーンはもと『焦熱の月』の意味なれど、回教曆は太陰曆なるが故に、此月は必ずしも夏期に當らず。此月の下旬の一夜、即ち『稜威の夜 Laylatu 'l-Qadr』に古蘭初めて降りるとせらる。古蘭第九七章参照。

わが僕等が吾について汝に問ふ時、げに吾は即ち近くに在り。喚呼者われを喚ばば、吾は彼の喚ぶに答へん。されば彼等をして吾に聽き、吾を信ぜしめよ。然らば彼等は直き道を歩まん^{一全}

【1】此の一節前後と連絡なし。

汝等齋戒の夜に其妻に往くことを許さる。妻は汝等の衣^{ころも}、汝等は妻の衣なり。アルラーハは汝等

が自ら欺きつつあるを知りて¹、いま汝等の懺悔を允して汝等を寛恕す。されば往きて彼等と偕に臥し、アルラーハが汝等のために定めたるもの²を求め、黑白の絲を分ち得る黎明に至るまで食ひ且飲め。然る後に夜の至るまで堅く齋戒を守り、決して彼等と臥すことなく、靜に禮拜堂に坐すべし。これアルラーハの立てたる掟なれば汝等之を守れ。アルラーハは是くの如く、其の休徴を人々に明示す。これ彼等をして其身を護らしめんがためなり^三

(1) 禁ぜられたるに拘らず夫婦同衾すること。(2) アルラーハが彼等のために定め置きたる子女。

汝等無益なることに互に其の財産を蕩盡する勿れ¹。罪惡と知りながら不当に他の財産の一部を併吞するために、財を法官に贈る勿れ^二

(1) 恐らく賭博を禁じたるなり。此の一句は『不当なる手段によりて互に其の財産を併吞する勿れ』とも解せらる。

彼等新月について汝に問はん¹。言へ『そは人々のため、また參詣^三のために定められたる時期なり』と。また汝等屋後より家に入るは正しからず²。正義とは其身を護ることなり。されば汝等榮えんがために門口^{かどぐち}より家に入り、アルラーハを敬へ^三

(1) 新月は聖月の新月。アラビヤ人は往古より第一月 Muharram、第七月 Rajab、十一月 Zu 'l-Qa'dah、第十二月 Zu 'l-Hijjah の四ヶ月を聖月とし、一切の流血を禁じたり。第十一月及び第一月が聖月とせられしは、メッカ參詣が第十

二月に於て行はるるを以て、其の前後の月を往復の安全のために是く定めたるものとせらる。(2) アラビヤ人はメッカ詣より帰宅するや、屋後より其家に入る風習ありしなり。此の啓示は是かる宗教的迷信を打破せるもの。

汝等と戦ふ者とアルラーハの道に戦へ。但し矩を越ゆること勿れ。げにアルラーハは越矩者を喜ばず¹。彼等に遇はば隨處に之を殺せ。汝を追放せる處より彼等を放逐せよ²。迫害は殺戮よりも悪し。但し聖域に於ては、彼等が汝等に挑戦するまでは其中に於て戦ふ勿れ。されど彼等若し戦はば之を屠れ。そは不信者の受くる応報なり³。されど彼等若し戦を停止しなば、アルラーハは宥恕者。大慈者なり⁴。迫害は止み、教はアルラーハのものとなるまで戦へ。されど彼等若し戦を停止しなば、不義者に対しての外は決して敵意を抱く勿れ⁵。聖月には聖月、聖域には聖域、これ報復の掟なり。されば聖月又は聖域に於て汝等を襲ふ者あらば、汝等もまた之を襲へ。アルラーハを敬へ。アルラーハは其身を護る者と偕に在ることを知れ⁶。

(1) 本節は聖戦 Jihād に関する最初の啓示とせらる。但し第二二章第三九節を以て最初のものとする学者あり。(2) マホメット並に其の信者がクライシユ族のために放逐せられたるメッカ。【3】『迫害』の原語は Fitnah。禍患、軋轢、誘惑の意味あり。セールは『多神教への誘惑』と解せり。

アルラーハの道に喜捨せよ。己れの手もて其身を滅ぼすこと勿れ。善事を行へ。アルラーハは善行

者を欣ぶ^五

アルラーハのために参詣^{ハッジ}と参殿^{ウムラ}とを完うせよ。汝等若し妨げ¹られなば、容易に獲らるる供物を送り、供物が供犠の場処に達するまで汝等の髪を剃る勿れ。汝等のうちの病者又は頭疾者は、齋戒又は喜捨又は供犠によつて之を贖へ。汝等安全²なる時に参詣^{ハッジ}の代りに参殿^{ウムラ}を行はんとする者は、容易に獲らるる供物を献ぐべし。是かる供物を入手し得ざる者は、参詣中に三日、帰来後に七日、併せて十日齋戒すべし。これ其の家人が聖域に住まざる者³に対する掟なり。アルラーハを敬へ、而してアルラーハの懲罰の嚴厲なるを知れ^六

(1) 敵のためにメッカに赴くことを妨げらるる場合。(2) 敵の危険が除かれたる場合。(3) メッカ居住以外の信者。

参詣は周知の数月に行はる¹。此等の月に於て参詣を行ふ者は、参詣の期間に交合し、違法し、争論することを得ず。苟くも汝等が行ふ善事は、アルラーハみな之を知る。さらば旅の準備せよ。但し準備の最勝なるは其身を護ることなり。理解ある者よ、吾を敬へ^七

(1) 周知の数月とは回教曆第十月、第十一月、第十二月。實際メッカ聖殿に於て参詣儀礼の行はるるは十二月初十日なるも、其前の二箇月に参詣の発願又は準備をなす。

汝等主の恩惠¹を求むるは罪に非ず。而して汝等アラフアトより疾行する時、マシユアララルハラ²

ームのほとりにてアルラーハを念へ。汝等曾て迷へる者なりしに、いま彼は汝等を導きたるが故に彼を念へよ。然る後に人々の疾行する処より疾行してアルラーハの恕を求めよ。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり^一。

(1) 主の恩恵を求むと言ふは商売を営みて利益を求むることにして、参詣期にメッカに於て商売することを許せるなり。

(2) マルシユアラルハラーム Masharu l-Haram は『聖蹟』の意味、アラファートとミナーとの中間なるムズダリファ Muzdalifa に在り。

汝等参拜を了へなば、汝等の祖先を念ふが如く、または祖先にも優りてアルラーハを念へ。人々のうちに言ふ者あり『主よ、現世に於て吾等に賜へ』と。彼は来世に於て如何なる分前をも獲ざるべし言。彼等のうちにまた言ふ者あり『主よ、現世に於て福を吾等に賜ひ、来世に於ても福を賜へ。また火獄の懲罰より吾等を護れ』と^二。彼等は其の為せることに対して分前を獲べし。而してアルラーハは清算に神速なり^三。

定められたる数日の間アルラーハを念へ¹。但し能く其身を護る者にありては、二日にして急ぎ去るも罪なく、² また長く留まるも罪なし。アルラーハを敬ひ、汝等やがて彼の前に召集せらるべきことを知れ^三。

(1) 定められたる数日とは祭礼が第十日の献祭節を以て終了せる後の三日間。此の三日は『乾牲日 Ayyamu'l-Tashriq』と呼ばれる。Tashriq は肉を日光にて乾燥する意味。(2) 一般の参詣者は乾牲日第三日の午後に行くを常とするも、第二日夕に帰途につくことを許さる。

人々のうちに現世の事を語りて汝を驚異せしむる者あり¹。彼はアルラーハを喚びて己れの胸中に懐けることの証人となせども、実は最も頑強なる汝の敵なり²。彼一たび其背を汝に向くれば、即ち四方に奔走して攪亂を事とし、田野と家畜とを蹂躪す。アルラーハは攪亂を喜ばず³。人あり彼に告げてアルラーハを畏れよと言へば、却つて其の罪惡を誇る²。地獄は其の応報なるべし。げに惡き臥床^{ふしど}なるかな³。また人々のうちにはアルラーハを欣ばしむるために其身を賣る者あり³。アルラーハは其の僕等に仁慈なり³。

(1) メヂナの偽信者アクナス・イブン・シュライク Akhnas ibn Shraiq を指すとせらる。(2) 又は『驕慢が彼を罪惡に導く』とも解せらる。(3) メッカ市民の迫害に堪え兼ね、一切の財産を棄ててメヂナに遷り来り、その信仰を護れるスハイブ Suhayb を指すとせらる。

汝等信者よ、徹底してイスラームに入れ¹。サタンの足跡を追ふ勿れ。げに彼等は汝等の公敵な

り^三 汝等若し明証既に至れる後に蹉^{つまら}くが如きことあらば、アルラーハの偉力者・聰明者なることを知れ^二 彼等は唯だ雲影の下、アルラーハが諸天使を率ゐて彼等に臨むを待つあるのみ。事は既に決せらる。萬事はアルラーハに帰る^三 イスラエルの兒等に問へ、吾は如何に多くの明瞭なる休徴を彼等に降したるか。アルラーハの恩寵既に至れる後、若し之を変更する者あらば、アルラーハの懲罰は嚴厲なるべし^三 現世は信ぜざる者には美しく見ゆ。彼等は信者を晒ふ。されど其身を護る者は復活の日に於て彼等の上位を占めん。アルラーハは己れの好む者に限りなく賜ふ^三 萬民はもと一團なり^三。アルラーハは吉報傳達者並に警告者として諸豫言者を擧げ、人々が相争へることを判断すべき真理の經典を彼等と共に降したり。然るに經典を賜はりたる者のみが、明証既に至れる後、互に嫉妬して相争ふに至れり。アルラーハは己れの欲する者を直き道に導く^三 汝等は汝等以前に世を逝りし人々が遭遇せることに遭遇することなくして樂園に入らんとするか。彼等は困窮と艱難とを嘗め、轉變餘りに激しかりしが故に、使者並に其の信奉者等は『アルラーハの佑助の来るは何の日ぞ』と叫びたり。げにいまアルラーハの佑助近づけるなり^三

(一) 『徹底してイスラームに入れ』といふは、猶太教的色彩を拂拭せよとの意味と思はる。回教神学者は猶太人にして回教に帰依せる者が、尙ほモーゼの律法の一部を守る者ありしによつて此の啓示ありと言ひ、ロッドウエルはメチナの信者中

に猶太人の律法の一部を守らんと欲する者ありしためならんとせり。いづれにもせよ此の一段は猶太人又は猶太教の影響に對して信者に警告せるものとすべし。但しベルは『徹底して』又は『完全に』を『全体挙りて』の意味に解し、信者に対して一致和合を求めたるものとなせり。(2)アルラーハが諸天使と共に降臨するは懲罰を執行するためなり。古蘭第二五章第二二節以下参照。(3)同一の宗教を奉じたる一團なりきとの意味。

彼等何物を喜捨すべきかと汝に問はん。言へ『凡そ汝等が喜捨する物は、両親・近親・孤兒・貧者並に旅人のためなり。凡そ汝等の行ふ善事はアルラーハ之を知る』と三五

征戰汝等に命ぜらる。これ汝等の好まざるところなり。されど汝等は己れのために善きことを惡み、己れのために惡きことを好むことあり。汝等は知らざれどもアルラーハは之を知る三六 彼等聖月に征戰することについて汝に問はん。言へ『聖月に戰ふことは重大事なり。されど人をアルラーハの道より阻み、アルラーハを信ぜず、人の聖殿に詣づるを妨げ、住民を之より逐ふことは、アルラーハの目には一層の重大事なり。迫害は殺戮よりも重大事なり。彼等若し其力あらば、汝等をして悉く汝等の教に背かしむるまで汝等と戰ふことを止めざるべし。されど汝等のうち若し其教に叛き、不信者として死ぬる者あらば、此等の者の為せる事は、現世並に来世に於て空無に歸すべし。此等の者は火獄の徒なり。彼等は永劫に其中に住まん三七 げに信する者¹、並に遷り来りてアルラーハの

ために戦ふ者、²此等は俱にアルラーハの慈悲を仰望し得べし。アルラーハは宥恕者・大慈者なり三六

(1) 信ずる者とはメヂナ市の信者即ち『輔士 Ansar』 (2) 遷り来れる者とは信仰のためにメッカよりメヂナに遷れる

信者即ち『遷士 Muhajir』

彼等酒と賭博とについて汝に問はん。言へ『両者には大悪あり、また人を益することもあり。されど其惡は其利よりも大なり』と。彼等何物を喜捨すべきかと汝に問はん。言へ『何にてもあれ餘分のものを』と。是くの如くアルラーハは種々なる休徵を汝等に明示す。これ汝等をして現世並に来世について反省せしめんがためなり三九 彼等また孤兒について汝に問はん。言へ『彼等のために事を処理するは善し。汝等若し彼等のことに関與しなば、彼等は即ち汝等の兄弟なり。アルラーハは処理者と破毀者とを識別す。アルラーハ若し欲しなば、げに汝等を困難に陥らしむべし。げにアルラーハは偉力者・聰明者なり三〇

多神教徒の女子とは、彼女等が信者となるまで結婚すること勿れ。設ひ汝等之を愛慕するとも、げに多神教徒の女子は信神の女奴に如かず。また多神教徒の男子が信者となるまでは、汝等の女子を彼等に與ふること勿れ。設ひ汝等之を愛慕するとも、げに多神教徒の男子は信神の男奴に如か

す。此等の者は汝等を火獄に招ぐ。然るにアルラーハは若し欲すれば汝等を樂園と宥恕とに招ぐ。彼は人々を反省せしめんがために其の休徴を汝等に明示す三

彼等月経について汝に問はん。言へ『そは不淨^{アザ}なり。されば月経時には其妻に遠ざかり、潔まるまで之に近づく勿れ。潔淨なる間はアルラーハの命ずる所に従つて彼等に往け。げにアルラーハは懺悔する者並に其身を潔むる者を欣ぶ三 妻は汝等の耕地なれば、意^{ニヒ}のままに汝等の耕地に往け。唯だ豫め己れのために善きことを送れ。汝等やがでアルラーハと会ふべきことを知れ。而して此の吉報を信者に傳へよ三

(1) 『不淨』の原語 *Azā* は、有害なること・疾病・不潔等を意味す。(2) 審判の日のために豫め善事を送ること。妻と交はるに先ちて唱名誦經などを行へとの意味。

汝等の宣誓によつて、アルラーハを以て義しく行ひ、神を敬ひ、人を和ぐることの障碍たらしむる勿れ¹。アルラーハは能聞者・能知者なり三 阿尔ラーハは汝等の宣誓中の空しき言葉を咎めず、唯だ汝等が胸中に藏することを咎む。アルラーハは宥恕者・大慈者なり三

(1) 神によつて一事を爲さんと誓へる者が、後に他の事を行ふの一層善なるを知りたる場合は、以前の宣誓に拘泥せず

善事を行へとの意味。

妻と同衾せずと宣誓する者は、四個月の間待つべし。されど彼等若し其の宣誓を翻さば、げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり^三、また彼等若し離別を決意しなば、げにアルラーハは能聞者・能知者なり^三。離別せられたる女子は三たび月経を待つべし。而して彼女等若しアルラーハと末日との信者ならば、アルラーハが彼女等の胎内に創れるるものを隠すべからず。若し彼女等の夫等が和解を欲しなば、此の期間内に其妻を復歸せしむることは、彼等のために最も正し。男子は女子より一段の上位にありといへども、妻は其夫が彼女等に対して行ふが如く、義しきに従つて其夫に対して行ふ同等の権利あり。アルラーハは偉力者・聰明者なり^三。

汝等は二度其妻に離婚を宣告するを許さる^一。然る後は善意を以て之を留むるか、或は善意を以て之を去れ。夫婦共にアルラーハの定めたる掟を守り得ざることを恐るるに非ずば^二、汝等は彼女等に與へたる何物をも回收するを得ず^三。若し汝等^四が彼等はアルラーハの定めたる掟を守り得じと恐るる場合は、妻が其の自由を贖ふために與ふるものについては双方とも罪なし^五。これアルラーハの掟なり、汝等之を犯すこと勿れ。アルラーハの掟を犯す者は不義者なり^三。夫が其妻を離別したる後は^六彼女が他の夫と結婚するまで、之と再婚するを得ず。若し第二の夫が彼女を離別せる場合は、彼等

若しアルラーハが定めたる掟を守り得べしと思はば、再婚するも双方に罪なし。これアルラーハの掟なり。彼は知識ある者に之を明示す言。

(1) 二度離別を宣誓するも、之を解消することを許すなり。二度と定めたるは、アラビア人が幾度となく離婚宣誓を繰返して、不当に其妻を束縛する風習を禁じたるなり。(2) 同棲して道徳的宗教的生活を送り難しとすること。(3) 夫が其妻に與へたる婚資を取戻すことを禁じたるは、離婚を困難ならしむるため。(4) 茲に汝等といふは夫婦以外の第三者、即ち原則としては法官を言ふ。(5) 此掟は妻が夫との同棲を不可能とし、法官が之を認めたる場合、妻は其の婚資の一部を棄てて離婚するを得とするものなり。『與ふるもの』とは婚資の一部又は全部を指す。妻に是くの如き権利を與ふるは回教の一特色といふべく、斯かる離婚は *Khula* と呼ばる。(6) 第三回の離婚宣誓によつて実際に其妻を離別せよとを言ふ。

汝等其妻を離別し、定められたる期間満了しなば、善意を以て之を留むるか、或は善意を以て之を去れ。彼女等を苦しむるために之を抑留するは掟を侵すものなり。之を敢てする者は必ず己れを害ふ。アルラーハの休徴を弄ぶ勿れ。彼が汝等に垂れたる恩寵を念ひ、また汝等を訓誡するため経典と智慧とを賜へることを念ひて、アルラーハを敬ひ、且アルラーハが萬事を知悉することを知れ。汝等其妻を離別し、定められたる期間満了しなば、互に合意の上にて彼女が合法に其夫と結婚することを妨ぐる勿れ。これ汝等のうちアルラーハと末日とを信する者への訓誡なり。こは汝等

のために最も有益にして潔淨なり。汝等は知らざれど、アルラーハは之を知る^三

(一) 第二二六節「離別せられたる女子は三たび月経を待つべし」

生母は¹、哺乳期を満了せしめんと望む者のために、満二個年其兒に哺乳すべし。兒の親となれる父は、慣例に従ひて哺乳者の衣食を負担する義務を有す。如何なる者も其の能力以上を課せらるることなし。生母は其兒のために、実父もまた其兒のために不当に強制せらるることなし。同一の義務は相續者之を繼承す²。されど相互の協議並に合意の上にて、離乳を早むるも罪なし。また汝等其兒を乳母に託することは、汝等若し慣例に従ひて約束せるものを支拂はば罪なし。アルラーハを敬ひ、アルラーハは汝等が為すところを照覽することを知れ^三

(一) 離婚せられたる生母。(二) 小兒の離乳以前に父が死去せる場合は、相續人が生母の衣食を負担し続けること。

汝等のうち其妻を遺して死する者あらば、妻は独居して四個月と十日待つべし。期間満了の後、彼女等が適宜に其身を処することは汝等に罪なし。アルラーハは汝等の爲すことを熟知す^言 汝等が此等の女子に結婚を提言し、又は心に其意を藏することは、汝等に罪なし。アルラーハは汝等が彼女等に対して將に言はんとするところを知る。但し合法に提言するに非ずば、秘密に彼女等と約束する勿れ。また定められたる期間の満了するまで、婚姻の紐結を堅むること勿れ。アルラーハは

汝等が胸中に懐くことを知る。さればアルラーハを畏れ、またアルラーハの寛容にして仁慈なるを
知れ^三

汝等未だ女子に触れず、また婚資を定めざる間に之を離別するは罪なし。但し富者は其力に応じ
困窮者も其力に応じて、慣例に従ひて彼女等に贈與せよ。これ善行者に課せらるる義務なり^三 汝
等未だ女子に触れざるも、既に婚資を定めたる後に之を離別する場合は、若し彼女等が之を放棄す
るか、又は婚姻の絆を握る者が、之を放棄するに非ずば¹、定められたる婚資の半を彼女等に與ふべ
し。而して彼が之を放棄することは最も敬虔に近し。また汝等互に贈答することを忘るる勿れ。ア
ルラーハは汝等の爲すところを照覽す^三

(1) 婚姻の絆を握る者とは新夫を指し、放棄すとは婚資の全部を女子に與ふること。

禮拜を守れ、最勝の禮拜を守れ¹。立つてアルラーハを敬へ^三 危地に在る時は徒步又は騎乗のま
ま禮拜せよ。平安の時は汝等もと知らざりしをアルラーハが教へたるところに循つて禮拜せよ²

(1) As-Salatu'l-Wusta は普通には信者が動もすれば忘れ勝ちなる午後禮拜を指すとせらるるも、ウスターは最上の意
味なるを以て、單に午後禮拜を意味せるに非ずとするムمامマッド・アリーの解釈を採る。(2) 啓示によつて定められた

る順序之法による礼拜。

汝等のうち其妻を遺して死ぬる者は、遺言によつて一年間彼女等を扶養し、之を其家より去らしむる勿れ。但し彼女等が自ら家を出づる場合は、彼女等が自ら合法に行動することに対して汝等に罪なし¹。アルラーハは偉力者・聰明者なり^二。離別せられたる女子は、慣例に従つて扶養を求むる権利あり。これ其身を護る者に課せらるる義務なり。是くの如くにしてアルラーハは其の休徴を汝等に明示す。汝等恐らく之を曉らん^三。

(一) 未亡人が四箇月十日を経たる後に再婚する場合を言ふ。

汝はかの死を怖れて集團をなして其の居処を出でたる者を見ざるか¹。アルラーハは彼等に向つて『死せよ』と言ひ、而して後に之を甦らしめたり。げにアルラーハは人間に対して仁慈なれども、人々多くは恩を知らず^二。

(一) 一群の猶太人が、疫病の流行を恐れ、又はエホバのために戦ふことを厭ひて家郷を去りしが、一山谷に於て天譴を受け、悉く死滅したり。年経て彼等が既に白骨と化し去れる時、偶々此道を過ぎたるエゼキエルが、エホバの命令によつて彼等を甦らしめりといふ傳承を指せるものとせらる。旧約エゼキエル書第三十七章第一一〇節参照。本節以下約十節は、猶太

人の歴史を引証して、アルラーハのために戦はざるべからざることを説き、信者をして其の生命と財産とを聖戦に献げしめんとするものとすべし。本章の後段に最も喜捨の功德を高調する、またそのためとすべし。

アルラーハの道に戦へ。アルラーハが能聞者・能知者なることを知れ^四。アルラーハのために善き貸附を行ふ者は誰ぞ。アルラーハは彼のために之を倍加すべし。アルラーハは堅く其掌を閉ぢ、また之を開く。而して汝等は彼に帰らしめらる^五。

汝はモーゼの後のイスラエルの兒等の貴人等を見ざるか。彼等その豫言者の一人に向つて曰く、『吾等のために一人の王を立てよ、吾等アルラーハのために戦はん』と。彼曰く『汝等戦を命ぜられて戦ふことを欲せざるが如きことなきか』彼等曰く『吾等既に家を逐はれ、子女を離る。何すれぞアルラーハのために戦はざらんや^二』と。されど彼等戦を命ぜらるるに及んで、若干の者を除きて悉く背き去れり。アルラーハは不義者を知る^三。

(一) サムエルを指す。旧約サムエル前書第八章第一九・二〇節参照。(二) 同上第一五章第三三節、第一七章第一節参照。

彼等の豫言者、彼等に告げて曰く『げにアルラーハはサウルを擧げて汝等の王となせり』彼等曰く『彼何ぞ吾等に君臨するを得べけんや。彼よりは吾等こそ王たるに適はしけれ。彼は豊かに富を

恵まれざるが故なり¹』彼曰く『アルラーハは汝等を措きて彼を選び、豊かに其の知識と体軀²とを増強せり。アルラーハは己れの欲する者に其の王國を賜ふ。アルラーハは厚施者・能知者なり』と云へば、また彼等の豫言者、彼等に告げて曰く『サウルが王者たるべき瑞兆として、其中に汝等の主よりの安靜^{サキナ}と、モーゼの家人並にアロンの家人の遺品とを納れたる櫃をば、諸天使之を荷ひて汝等に來るべし。汝等もし信者ならば、げに其中に汝等への休徴あるなり』と云へ

(1) 旧約サムエル前書第一〇章第二七節参照。(2) サウルのアラビア名はタールート *Taroot*、丈高き人の意味なり。同上第一〇章第二三節参照。

サウル軍を率ゐて發するに臨んで曰く『げにアルラーハは河水を以て汝等を試むべし。之を飲む者は吾が味方に非ず、飲まざる者は即ち味方なり。但し掌を以て一掬する者を除く』と¹。然るに少數の者の外は皆な之を飲み。而して彼並に彼を信じたる者が既に河を渡れる時、彼等曰く『今日吾等はゴリアテと其軍とに敵する力なし』と。されど其主に会ふことを信じて疑はざりし者は曰く『アルラーハの允許の下に、如何に屢々寡兵を以て大軍を破りしことぞ²。アルラーハは堅忍者と偕にあり』と云へ。かくて彼等進んでゴリアテ並に其軍と戦はんとして曰く『主よ、吾等に忍耐を賜へ、吾等の脚を固めよ、不信の民に対して吾等を佑けよ』と云へ。かくて彼等アルラーハの允許の下

に彼等を破り、ダビデはゴリアテを殺したり。而してアルラーハは王國と智慧とをダビデに賜ひ、己れの欲することを彼に教へたり。若しアルラーハが一の民を以て他の民を討つことなかりせば、大地は混沌亂雜なるべし。されどアルラーハは一切衆生に仁慈なり

(1) 此はサウルとギデオンを混同せるものとせらる。但し回教神学者は、ギデオンの軍がハロドの泉にて試みられたる如く、サウルの軍はヨルダンの河水にて試みられたるなりと主張す。旧約士師記第七章第一―六節、サムエル前書第一三章第七節参照。(2) サムエル前書第一三章第一五節、同上第一三章第六節参照。(3) ゴリアテのアラビア名はジャールト Jalt。強襲者の意味。

此等はアルラーハの啓示なり。吾は眞実を以て之を汝に讀誦す。げに汝は遣はれたる者の一人なるを

吾は此等の使者の或者を他より優らしめたり。彼等のうちの或者はアルラーハと言を交へたり。また彼は或者の位階を高めたり。また吾はマリアの子イエスに種々なる證據を與へ、且聖靈によつて之を強くせり。アルラーハ若し欲したりせば、彼等の後に來れる者が、明証既に降れる後に互に相争ふが如きことなかりしなり。然るに或者は信じ、或者は信ぜずして互に争論せり。アルラーハ若し欲したりせば、彼等は互に争論せざりしなり。されどアルラーハは、己れの欲するところを行

汝等信者よ、取引もなく、友誼もなく、勸解とらなしもなき日の来る前に、わが汝等に賜へるものにて喜捨を行へ。不信者は是れ不義者なり^三

アルラーハ！彼の外に神なし、永生者・自存者なり。微睡も熟睡も彼を襲はず。天地間の一切は彼に屬す。彼の允許なくして誰か彼の前に勸解とらなしし得るものぞ。彼は彼等以前にありしものを知りまた彼等以後のものを知る。彼が欲することの外、彼等は彼の知識について毫も知るところなし。彼の王座は天地に溢れ、天地を護持して疲るることなし。彼は至高者・至大者なり^三

(1) 本節は『王座節 Ayatu'l-Kursi』と呼ばれる著名の一節にして、之を金石の小片に銘刻し、護符として携帯する回教徒多し。

教は強制するを許さず。正道は既に分明に迷誤より區別せられたり。さればターグート¹を斥けてアルラーハを信ずる者は、決して摧げざる堅固無上の把柄とらてを握れる者なり。アルラーハは能聞者・能知者なり^三。アルラーハは信ずる者の愛護者なり。彼は彼等を導きて黒闇より光明に入らしむ。信ぜざる者の愛護者はターグートなり。そは彼等を光明より黒闇に導く。彼等は火獄の徒なり。彼等永劫に其中に住まん^三

(1) ターグート Taghut はエチオピア語にして偶像の意味なるが、神名として固有名詞の如く用ゐられたり。例へばメ
ツカ市民の最も崇拜せるムラート Al-Lat、アルウツザ Al-Uzza の両神は常にターグートと呼ばれたり。

アルラーハが王國をアブラハムに賜へるが故に、其主について彼と爭論せる者ありき、汝は之を見ざるか。其時アブラハム曰く『吾主は生を與へ、また死を致す』と。彼曰く『吾また生を與へ、死を致す』と。アブラハム曰く『げにアルラーハは、日を東より出でしむ、汝は之を西より登らしめよ』と。かくて不信者は愕然たりき。アルラーハは不義の民を導かず^二

(1) アブラハムの追害者とせらるるニムロド Nimrod を指す。其の追害については古蘭第二章第五節以下参照。

また廢墟に歸したる都府を過ぎりて、『アルラーハは如何にして此の死せる都府を甦らしむべきか』と言へる者ありき、¹汝は之を見ざるか。アルラーハ即ち百年の間彼を死なしめ、然る後に之を甦らしめて曰く『汝の滯留せるは幾日ぞ』と。彼曰く『一日か半日なり』と。彼曰く『然らず、汝は百年滯留せるなり。汝の食ふもの飲むものを見よ、そは未だ腐らず。また汝の驢馬を見よ。これは吾汝を人々への休徴たらしめんがためなり。其骨を見よ、而して吾如何に其等を集めて肉を之を附するかを見よ』と。此事明かになれる時、彼曰く『吾はアルラーハの全能者なるを知れり』と^三

(1) エズラ *Ezra* を指す。エズラはエルサレムがネブカドネザルのために破壊し去られたるを見て、此の都府が再び復興することあるべきかと疑ひし時、神は奇蹟を現じて、その再興の確実なるを信ぜしめたるなり。旧約ネヘミア書第二章第一三節参照。

アブラハムが『主よ、汝が如何にして死者に生命を與ふるかを吾に示せ』と言へる時を念へ。主曰く『汝はなほ信ぜざるか』彼曰く『吾は信ず。されど唯だ吾心を安んぜんがためなり』主曰く『然らば四種の鳥を取り、之を汝に馴れしめ、然る後に彼等の一部を各丘の上に置き、而して之を喚べ¹。然らば彼等飛んで汝に来らん。かくてアルラーハの偉力者・聰明者なることを知れ』と云

(1) 此の一段の意味不明なり。旧約創世記第一五章第九節以下の記事の訛傳なるべしとせらる。註釈家のうちには『之を馴れしめ』といふを『之を解剖し』と解し、四種の鳥即ち鳩・雉・鴉・孔雀を解剖して其の骨肉を混淆し、之を丘上に置きたる後、アブラハム之を喚べば、それぞれ原形の鳥となりて飛来せるなりと説く。

アルラーハのために其富を喜捨する者は、一粒に七の穂を生じ一穂に百粒を着くる穀粒の如し。アルラーハは己れの欲する者に倍加して賜ふ。アルラーハは厚施者・能知者なり^三。アルラーハのために其富を喜捨し、其の施與に義務と侮辱とを伴はしめざる者は、必ず其主より報賞を受けん。彼等には畏怖なく憂懼なからん^三。愛語と寛容とは侮辱を伴ふ喜捨に優る。アルラーハ富有者・仁

慈者なり^三 汝等信者よ、唯だ人々に誇示せんがために其の有てる物を施す者が然る如く、汝等義務と侮辱とによつて、己れの喜捨を無益ならしむる勿れ。彼は土を載せたる滑かなる岩に譬ふべし。大雨其上に注げば忽ち赤裸^{はだか}となる。彼等は毫も其の積めるものを左右する力なし。而してアルラーハは不信者を導かず^三 アルラーハを欣ばしむるため、また己れの魂を護持するため喜捨する者は、丘上の果樹園に譬ふべし。大雨注げば実を結ぶこと倍加し、雨降らざるも尙ほ露の之を沾^{うるほ}すあり。アルラーハは汝等の為すことを照覽す^三 汝等のうち、河川其下を流れて一切の果実を結ぶとも、己れ年老ひて其子尙ほ幼弱なる時、旋風猛火を伴ひて来り、悉く之を焼き拂ふが如き棗椰子園又は葡萄園を有たんことを望む者あるか。是くの如くアルラーハは種々なる休徴を明示す。汝等恐らく反省せん^三

汝等信者よ、汝等が獲たる佳きものと。わが汝等のために大地に産出するものとを喜捨せよ。己れは目を瞑^{こむ}らでは受けまじき腐れるものを喜捨せんと企^{たく}らむ勿れ。アルラーハは富有者にして讚美せらるべき者なるを知れ^三 サタンは貧窮を以て汝等を威嚇し、汝等に吝嗇を勧む。然るにアルラーハは寛恕と恩恵とを汝等に約束す。アルラーハは厚施者・能知者なり^三 彼は己れの欲する者に智慧を授く。智慧を賜はれる者は豊かなる幸福を賜はれる者なり。されど睿智ある者の外は何人も

之を省みず^三 汝等何物を喜捨し、何事を約束するとも、げにアルラーハ皆な之を知る。而して不義者には一援助者もなかるべし^三 汝等陽^{あはは}に喜捨するは佳^よし。されど秘^{かく}して貧者に施すは更に佳し。そは汝等の悪業の一部を拂拭せん。アルラーハは汝等の為すことを知る^三

彼等を導くことは汝の責に非ず。アルラーハは己れの欲する者を導く。汝等専らアルラーハを欣ばしめんがために喜捨するとも、汝等が喜捨する善きものは皆な汝等自身の利益となる。汝等が喜捨せるものは存分に返擠せられ、決して不当に遇せらるることなし^三 汝等の喜捨する善きものはアルラーハの道に於て困窮し、そのために國內を往来し得ざる者に與へらる¹。彼等は自制して人に物乞はざるが故に、無智者は彼等を以て富めりとするも、人は其の形跡によつて彼等を識り得べし。而して汝等何にてもあれ善き物を喜捨すれば、げにアルラーハ必ず之を知る^三 晝夜を問はず陰に陽に其富を喜捨する者は、必ず其主の報賞を受く。彼等には畏怖なく憂懼なからん^三

(一) 多神教徒の敵意のために商売のために國內の往来不可能となれる者を言ふ。

凡そ高利を貧る者は、サタン之に触れて仆せる者が起つ如くならでは起つことを得ず¹。そは彼等が『商賣は猶ほ高利の如し』と言ふが故なり。されどアルラーハは商賣を許して高利を禁ず。其主

よりの訓誡降り、之によつて其非を改むる者には、既往の事は赦され、爾後の事はアルラーハの掌中にあり。されど再び其非を繰返す者は、げに火獄の徒なり。彼等永劫に其中に住まん^{三三} アルラーハは高利を拂拭し、喜捨をして利を生ましむ。アルラーハは一切の不義忘恩の者を喜ばず^{三三} げに信じて善事を行ひ、礼拝を守り、捐課を納むる者は、必ず其主の報賞を受く。彼等には畏怖なく憂懼なからん^{三三}

(一) サタン之に触れて仆すとは、悪魔に憑かれて仆ること、癲癩の症状の如きを言ふ。此等の者は復活の日に癲癩病者の如く周章狼狽して廻らしめらるるを言ふ。

汝等信者よ、汝等若し信者ならば、アルラーハを敬ひ、残れる高利を放棄せよ^{三三} 汝等若し放棄せずば、アルラーハ並に其の使者より戦を布告せらるべし。されど汝等若し懺悔しなば、汝等の元金は保留せられ、汝等も負債者も俱に損失を免るべし^{三三} 負債者若し貧窮ならば、その餘裕を生ずるまで待て。汝等若し其の功德を知らば、喜捨として之を施與するは最も善し^{三三} 汝等アルラーハに帰らしめらるる日のために其身を護れ。其日各人は己れの為せることに対して存分に清算せられ不当に遇せらるることなかるべし^{三三}

汝等信者よ、汝等期限を定めて貸借する時は、必ず之を記録せよ。記録者をして汝等の間に公正に之を記録せしめよ。如何なる記録者もアルラーハが彼に教ふる如く筆録することを拒むを得ず。彼をして記録せしめ、且負債者に口授して之を筆記せしめよ。負債者はアルラーハを敬ひ、如何なるものをも其より減すべからず。若し負債者が低能者又は虚弱者なるか、又は自ら口授を筆記し得ざる者なる場合は、其の後見者をして公正に之を筆記せしめよ。汝等の同人のうちより二名の証人を立てよ。若し二名の男子なき場合は、汝等が証人たることを承認する者のうちより一人の男子と二名の女子とを選べ。女子の一人過つことありとするも、他が之を匡^たすべし。証人は如何なる時にも喚問を拒むを得ず。期限を定めたる貸借契約は、大小を問はず、必ず之を記録することを厭ふ勿れ。是くするはアルラーハの前に最も公正に、立証するに最も確実に、且汝等相互の疑惑を避くるに最も適切なり。但し汝等の授受するものが現物商品なる場合を除く。此の場合は之を記録せざるも汝等に罪なし。但し汝等互に交易する前に証人を立てよ。証人並に記録者に迷惑及ぼす勿れ。是くするは汝等に於て不正なり。アルラーハは汝等に教ゆ。アルラーハは一切を知る云々 汝等旅にありて記録者を求め得ざる時は、担保を提供すれば足る。汝等の一人が他を信用する時、信用せられたる者は其の信用を果たさざるべからず。アルラーハを敬へ、證據を隠すこと勿れ。之を隠すは心

に罪を犯す者なり。アルラーハは汝等の為すことを熟知す^{三三}

天地間の一切はアルラーハに属す。汝等己れの胸中に懐くものを露^{あらは}すも又匿^{かく}すも、アルラーハは之に対して清算を行ふべし。彼は己れの欲する者を赦し、欲する者を罰す。アルラーハは全能なり^{三四}

使者は其主より己れに降されたるものを信ず。信者もまた然り。彼等は皆なアルラーハ、其の天使、其の經典、其の諸使者を信するものなり。吾は諸使者の間に差別を設くることなし。彼等曰く『吾等は聽き、吾等は従ふ。主よ、吾等を赦せ。吾等は汝に歸る』と^{三五}

アルラーハは如何なる人にも其の荷ひ得ざるものを負はしめず。人は其の獲たるものによつて益し、其の積めることによつて苦しむ。主よ、吾等若し忘れ又は過つことありとも咎むる勿れ。主よ、荷ふに堪えざる重荷を吾等に負はしむる勿れ。吾等を赦し、吾等を加護し、慈悲を吾等に垂れよ。汝は吾等の愛護者なり。されば不信の民に対して吾等を佑けよ^{三六}

第三 イムラーン家章

メチナ啓示

第三三節以下に、モーゼ以下洗礼のヨハネ及びイエス・キリストに至る一切の猶太豫言者を出だせりとせらるるイムラーン家のことを述ぶるによつて、イムラーン家章 *Alu Inran* と名づけらる。本章の前半即ち第一二〇節までは、バドルの勝利よりウホドの敗戦以前、後半はウホド敗戦以後のものとすべく、従つて大部分は遷都二年及び三年の啓示とすべし。而して此の期間に於ける最も重要な事件は、バドル及びウホドの両会戦なるが故に、之を略叙して本章の歴史的背景を明かにすべし。

マホメット及び其の信者が挙りてメチナに遷りてより、メッカの状態は平和に復し、市民は安堵して再び征利に汲頭し得るに至れり。もとメッカの繁榮は全アラビアよりの方殿参詣と、夏冬両期の隊商貿易とによれるものたるが、今や恐るべき偶像崇拜破壊者が此市より放逐せられたるが故に、参詣者の減少に対する不安は去り、彼等は熱心に隊商貿易の準備に従へり。当時メッカの貿易は、其の規模相応に大にして、利益もまた莫大なりき。即ち冬期隊商は北方シリアに、夏期隊商は南方ヤマン及びアビシニアに向けられ、皮革・ゴム・香料・貴金属等を主要商品とせしが、就中アラビア皮革はシリア及びペルシアに於て最も喜ばれ、値もまた甚だ高價なりき。此等の商品はガザ其他のシリア市場に於て綿布・絹布並に其他の奢侈品と有利に交換せられ、之を積んでメッカに帰れば、殆ど五割の利益を挙ぐるを常とせりと言はる。商隊の最大たるは二千頭の駱駝に五萬ダイナールの貨物を運び、シユプレンガーによれば、毎年のメッカの輸出貿易は少くとも二十五萬ダイナールを下らず、且同額の貨物を積み歸

れるなり。同じくシユブレンガーの推算によれば一ディナールは約十五萬フランに當るが故に、輸出入総額五十萬ディナールは七百五十萬フランに當る。加ふるに隊商派遣に際しては、常に大商人が巨額の資本を投ずるのみに非ず、殆ど総てのメッカ市民が、一ディナールの餘裕にてもあれば必ず之を投じて貿易に参加したるを以て、隊商がメッカ市民全体の最大関心事なりしを知るべし。

隊商は、掠奪を以て最も男子に適はしき生業とせられたる沙漠のアラビア人にとりて、往古より常に彼等の絶好なる攻撃目標なりしが故に、隊商は多かれ少なかれ危険を豫想し、其の指導者は之を避け又は防ぐために、深甚なる警戒を以て往復せり。然るにいまメッカ市民によつて迫害放逐せられたるマホメット及び其の信者が、メチナに拠りて勢力を確立するに至れることは、メッカ隊商のために重大なる脅威となりたり。蓋しメッカよりシリアに至る隊商路は、メチナと紅海岸との間を北上するものなるが故に、メッカ隊商は其の必ず通過せざるべからざる途上に、従来の沙漠のアラビア人とは同日に語るべくもなき強敵を見るに至りしが故なり。

マホメットがメチナに遷りて半年の間は、シリア隊商の季節に非ず、且マホメットはメチナ市民との応接、移住者の生活の確立、教團の基礎の建設に忙殺せられしが、やがて隊商季節に入るに及んで、彼の眼は必然メッカ隊商に向つて注がれたり。彼はメッカ市民を以て眞実なる宗教の敵となせるが故に、既に前章に見たる如く、屢々不信者に対する戦を是認するアルラーハの啓示を得たり。而して彼はメッカ隊商に加ふる襲撃が、能くメッカの死命を制し得ることを熟知せり。かくて此年の冬、即ちメチナ遷都後第七月、マホメットは伯父ハムザ *Hanza* を遣はしてシリアよりの帰途にありしメッカ隊商に最初の襲撃を試みてより爾来間断なき戦闘を往途又は帰途のメッカ隊商に挑み、翌年初冬には遂に南下して、ヤマンに向ふ隊商をメッカとタイーフとの

中間なるナクラ Nakhla の山谷に襲ひ、時恰も聖月に当りしに拘らず、アラビア古来の最も神聖なる不文律を無視し、掠奪と捕虜と殺人とを敢行したり。前章第二一七節は、聖月に於ける戦争を是認せるものにして、実に此の襲撃の直後に降されたる啓示なり。其他前章に戦争に関する啓示多きは、信者の戦意を昂揚し、其の勇氣を鼓舞せんがために外ならず。

さて西紀六二四年一月、メッカに於けるマホメットの最大の敵アブー・スフヤーン Abi Sufyan に率ゐられ、昨冬季にマホメットの襲撃を免れて北上せるメッカ隊商は、いま一千の駱駝に貨物を満載してシリアよりの帰途にありき。而してマホメットは之をバドル Badr に要撃して悉く其の貨物を奪ひ、最初の大打撃をメッカに加へんと決意せり。アブー・スフヤーンは之を聞き、知して大に驚き、直ちに路を紅海岸にとりてバドルを迂回し、一方急使を馳せて援をメッカに求めたり。メッカ市民は飛報に接して今更の如くマホメットに対する憤激の情を燃やせり。かくて駱駝に乗る者七百、馬に乗る者一百、歩するもの二百、併せて一千の市民立どころに軍容を整へ、バドルに向つて急進せり。彼等は途にアブー・スフヤーンの第二の使者と会し、隊商の幸にして掠奪を免れたるを知れり。されど此機に乗じてマホメットに対する積年の鬱憤を晴らし、且メッカを脅威する最も恐るべき禍根を根絶せんがために、バドルに向つて殺到せり。時にマホメットの軍勢は僅に三百餘にして而も低地に陣し、敵は三倍の優勢にして砂丘の上に陣したり。されどマホメットは恐れざりき。彼は新に建てられたる壇上に立つて祈れり。曰く『アルラーハよ、吾等いま敗れなば、地上に於て汝を拜する者は誰ぞ』と。戦酣にして敵軍の攻勢頓に急を加へ、マホメットの軍、將に潰敗せんとせる時、彼は天使の一群が天上より来りて彼を援くるを見たり。彼即ち勇躍して壇上より降り、一握の砂を敵軍に投じて曰く『見よ、天使雲の如く来りて吾等を援く』と。其声雷の如く響くや、味方の勇氣百倍し、將に崩れ去らんとせる戦列を整へて必死の突撃を試みたり。而して敵は天軍のマホメットを援けて彼等を圧するが如く感じたり。かくて形勢忽ち一変し、メッカ

軍は死者七十、捕虜七十を残し、悉く先を争ひて敗走したり。バドル役は固より小戦闘にすぎず。されど其の結果より言へば、実に回教史上の最も重大なる会戦の一なり。此の一戦によつてマホメットの信者は彼に対する帰依の情を百倍せり。而してメヂナに於ける彼の宗教的並に政治的地位は、初めて搖ぎなきものとなれり。而して彼は直ちに其の威力を其敵に対して用ゐ、先づメヂナ郊外に住みて彼の權威を認めんとせざる猶太人カイヌカー族を討ち、其の財産を没收し悉く其民を放逐せり。

但しマホメットとメッカとの争は、バドル役を以て終局を告げたるに非ず。メッカは雪辱戦の準備に全力を注ぎたり。而して一年にして準備成るや、再びアブー・スフヤーンを司令官とし、三千の兵を率ゐてメヂナに進軍せしめたり。即ち西紀六二五年一月なり。マホメットは約一千の兵を率ゐ、メヂナを距る三哩のウホド Uhud 山麓に敵を邀撃せしが、メヂナ市民を率ゐて従軍せるアブダラーハ・イブン・ウバイが辭を設けて後退せるが故に、兵力は僅に七百となれり。而も彼等は最も勇敢にメッカ軍と戦ひ、敵軍漸く動搖の色ありし時、後方に配置せられたるマホメットの弓兵は、之を望み見て敵軍既に敗れたりとなし、決して動く勿れと嚴命せられたりしに拘らず、戦利品を獲んがために列を亂して戦場に向へるに乘じ、敵軍の騎兵疾駆してマホメット軍の背後を突きたり。於是形勢俄然一変して味方の大敗となり、マホメットの伯父ハムザは戦死し、マホメット自身もまた石片に打たれて氣絶せしが、幸に敵の追撃なかりしを以て九死に一生を得、敗残の兵を收めてメヂナに歸るを得たり。メヂナ市民は此の敗戦によつて若干動搖の色を示せるも、決して彼に失望することなかりき。彼等は敗戦の厄を悲しむ前に、先づ彼の無事を祝したり。而して彼は市民に向つて、アルラーハが偉大なる恩寵を垂れんとするや、必ず先づ之を試練することを力説し、以て士氣の阻喪を防ぐに努めたり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アッリーフ・ラーム・ミームー　アルラーハ、彼の外に神なし、そは永生者・自存者なり^二彼は此の以前にありしものを実證する眞実の經典を汝に降せり。彼は曩に人類の嚮導として律法と福音とを降し^三いままた眞偽の識別^{フルガール}を降せるなり。げにアルラーハの休徵を信ぜざる者には必ず重刑あらん。アルラーハは偉力者、報復者なり^四げに天地間の萬物、一としてアルラーハに隱すべきはなし^五己れの欲するままに汝等を胎内に形成するは彼なり。彼の外に神なし。そは偉力者・聰明者なり^六この經典を汝に降せるは彼なり。其中には明晰なる諸節あり、即ち經典の根幹なり。他の諸節には多義あるものあり¹。而して其心邪なる者は、多義の諸節を討ね、之によりて人を誤り、また己れの解釋を之に加へんとす。されどその解釋を知るは唯だアルラーハあるのみ。されば知識堅固なる者は曰く『吾等は之を信ず。総じて是れ吾等の主より出でたるものなれども、唯だ睿智ある者のみ能く之を曉る^セ主よ、一旦吾等の心を導きたる後に、また之を迷はしむる勿れ。汝の慈悲を吾等に垂れよ。げに汝こそ厚施者なれ^セ主よ、げに汝こそかの疑ふべくもなき日に萬人を召集する者なれ』と。げにアルラーハは決してその約束を破らず^ハ

(一) 『明晰なる』の原語は *muhkam* にして、『決定せる』又は『確實なる』を意味す。古蘭第二章第一節に古蘭は

『その諸節が明晰なる經典』とあり。『多義なる』の原語は *mutashabih* にして、『互に相似たる』を意味す。而して第九章第二三節に古蘭は『多義なる經典 *Kitaban mutashabihan*』とあり。即ち古蘭は『多義なる經典』とも、又は『明晰なる經典』とも、乃至は『一部は明晰、他部は多義なる經典』とも呼ばるるなり。

信ぜざる者は、其の財宝と子女とはアルラーハに対して無益なるべし。彼等が火獄の薪となるべきことは宛もファラオの民並に彼等以前の吾が休徴を虚偽なりとせる民の如くならん。アルラーハは彼等の罪惡のために彼等を滅ぼせり。アルラーハの懲罰は嚴厲なり。信ぜざる者に言へ『汝等戰敗れて諸共に地獄に逐ひやらるべし。そは惡き臥床なり』と二

兩軍相会せる時¹、一はアルラーハの道に戦ひ、他は信ぜざる者なりしが、彼等²は目のあたり敵の己れに倍せるを見たり。此中に既に汝等への休徴ありしなり。アルラーハは己れの欲する者を援けて之を強くす。げに其中には具眼者への教訓あり三

(1) 兩軍バトルに会せる時を言ふ。(2) 此処の『彼等』が信者軍を指すか、又はメッカ軍を指すかについて異説あり。

前者とすれば三倍の敵を二倍と見たること、後者とすればメッカ軍が兵力に於て彼等の三分の一にすぎざる回教軍を、二倍の多勢なるかに錯覚せること。

婦人、子女、金銀の蓄積、駿馬、良牛、美田の與ふる快樂は萬人に欣ばる。これ現世の幸福なり。されど最勝の歸處はアルラーハの許もとにあり三 言へ『吾は此等よりも善きものを汝等に教へん。其身を護る者のためにはアルラーハの許に河川流るる樂園あり、彼等長久に其中に住みて、純潔なる配偶とアルラーハの善意とを賜はらん。アルラーハは己れの僕等を照覽す』と四 げに『主よ、吾等は信ず。されば吾等をして火獄の懲罰を免れしめよ』と祈る者は五 忍耐者、誠実者、從順者、布施者並に黎明の求恕者なり云

アルラーハは己れの外に神なきことを親ら立證す。諸天使並に正義を護持する有識の者も亦然り。彼の外に神なし。そは偉力者・聰明者なり¹ げにアルラーハの教はイスラームなり。受經者が相争ふは、知識既に至れる後、互に相嫉むが故なり。苟くもアルラーハの休徴を信ぜざる者あらば、アルラーハの清算は神速なるべし六 されば彼等若し汝と相争はば即ち言へ『吾はアルラーハに歸命す。吾に従ふ者も亦然り』と。また受經者並に無識者に向つて言へ『汝等アルラーハに歸命するか』と。彼等若し歸命すれば正しく導かる。また設ひ彼等背き去るとも、汝の務は唯だ使命の傳達にあり。而してアルラーハは己れの僕等を照覽す云

(1) 第二章第一二八節註を見よ。古蘭によれば総て豫言者の宗教は即ちイスラームなり。古蘭中最も屢々アブラハムの宗教をイスラームと呼び、またモーゼを継げる諸豫言者を「ムスリムたりし豫言者等」と呼ぶ。(2) 此処の「無識者」は天啓の知識なき多神教徒を指す。此の一節の啓示が基督教徒、猶太人及びアラビア両神教徒を対象とせることを知る。次の第二〇節以下の一段は主として猶太人を対象とせる啓示なり。

アルラーハの休徴を信せず、妄りに諸豫言者を殺し、正義を高調せる者を殺したる民には、痛烈なる懲罰を告知せよ。彼等の所行は現世並に末世に於て空無に帰すべく、また彼等には如何なる援助者もなかるべし。汝はかの經典の一部を降されたる者が、彼等の争論を判決するためアルラーハの經典が示されたる時、彼等の一部が之を忌避して背き去れるを見ざるか。こは彼等が「獄火の吾等に触るるは若干日の間にすぎず」とするが故なり。彼等は其教に於て己れが虚構せるものに欺かるるなり。無疑の日に於て、われ一齊に彼等を召集する時、彼等果して如何にせんとすぞ。其時各人皆な己れの為せることに対して存分に報われ、決して不当に遇せらるることなかるべし。

言へ「アルラーハよ、王權の主よ、汝は己れの欲する者に王權を與へ、欲する者より之を奪ふ。

汝は己れの欲する者を貴くし、欲する者を賤しくす。幸福は汝の掌中にあり。伊に汝は全能なり云
汝は夜を以て晝に睡がしめ、晝を以て夜に睡がしめ、死者より生者を現じ、生者より死者を現す。
汝は己れの欲する者に限りなく賜ふ』と云

信者をして信者を舍きて不信者と友人たらしむる勿れ。之を敢てする者は断じてアルラーハの党ともがら
に非ず。但し彼等よりの危害を怖るる場合を除く。アルラーハは汝等を警しめて彼を畏れしむ。行
先はアルラーハなり云

言へ『汝等其の胸中に懐くことを隠すとも或は之を露はすとも、アルラーハは等しく之を知る。
彼は天地間の一切を知る。アルラーハは全能なり』と云

各人皆な己れの行へる善事と悪事とを歴然提示せらるる日、彼は己れと其の所行との間に萬里の
懸隔あらんことを望むべし。アルラーハは汝等を警めて彼を畏れしむ。而してアルラーハは僕等に
仁慈なり云

言へ『汝等若しアルラーハを愛しなば吾に従へ。然らばアルラーハもまた汝等を愛し、汝等の罪
を赦さん。アルラーハは宥恕者・大慈者なり』と云 言へ『アルラーハ並に其の使者に従へ』と。

されど彼等若し背き去らば——げにアルラーハは不信者を愛せず三

げにアルラーハは、アダムとノア、並にアブラハム家とイムラーン家とを、¹ 萬民に超えて選びたり三 彼等は互に他の子孫なり。アルラーハは能聞者・能知者なり三

(一)イムラーン Imran 即ちアムラン Amran は処女マリアの父にして、マリアにはアロン Aaron 及びエリザベス Isha と呼ぶ兄弟ありとせられ、従つてマリアは『アロンの妹』とも呼ばる(古蘭第二章第二八節)。而してマリアの姉エリザベスは、古蘭によればザカリヤ Zakariyya の妻となり、洗礼のヨハネを生みたり。従つてイエスとヨハネとは従兄弟とせらる。然るに旧約聖書によれば、モーゼにもアロン及びマリア(ミリアム)と呼ぶ兄弟あり、而して其父の名はアムランなり。此故に古蘭はモーゼの姉とイエスとの母とを混同せるものとして、ムイアを初め多くの西歐学者は、其の甚だしき年代錯誤を晒ふを常とす。されどマホメットは、当時の猶太人並に基督教徒について、猶太史並に基督教史の大要を把握し居たりと思はるるが故に、是くの如き年代錯誤を敢てするほど無智なりしとは信ずべからず。且古蘭の多くの箇處に於てモーゼの出世が遙にイエス以前なることを明示し居るを以て、モーゼの父アムラン及び其兄アロンと、マリアの父アムラン及び其兄アロンとは、同名異人として取扱はれたるものとすべし。その果して史実なるや否やは固より別個の問題に属す。セイル及びロッドウエルもまた略ぼ同様の見解を下せり。

イムラーンの妻が『主よ、吾は吾が胎内に宿れるものを汝に献げんことを誓ふ。² 希くは之を享け

よ。げに汝は能聞者・能知者なり』と言へる時を念へ言。その分娩するに及んで彼女曰く『主よ、吾は女兒を産めり——アルラーハは彼女の産めるものを知れり、男兒¹は女兒と同じからず——吾は之をマリアと名づけたり。願はくは彼女と其の子孫とを石にて撃たれしサタンより護れ』と言。主は善美なる嘉納を以て之を嘉納し、善美なる成長を以つて之を成長せしめ、ザカリアをして之を撫育せしめたり。ザカリア内殿に入りて彼女を見る毎に、常に食膳の其前にあるを見たり。彼曰く、『マリアよ、汝いづこより之を獲たるるか』と。彼女曰く『そはアルラーハより来る。アルラーハは己れの欲する者に限りなく糧餉を賜ふ』と言。

(1) イムラーインの妻即ち処女マリアの母。名はハンナ Hannah 即ちアン Anne。(2) 神に獻ぐとは祭司たらしむること。(3) 女兒は祭司となり得ざることを言ふ。

其時ザカリア其主に祈りて曰く『主よ、希くは汝より善き子を吾に賜へ。げに汝は祈願の聽取者なり』と言。而して彼尙ほ内殿にありて立ちて祈りつつありし時、諸天使彼を喚びて曰く『アルラーハはヨハネの吉報¹を汝に賜ふ。其兒はアルラーハの言^{ことば}の実證者、嚮導者、禁欲者、豫言者、義人の一人たるべし』と言。彼曰く『主よ、吾齡は既に老ひ、吾妻は不妊なり²。然るを吾如何にして一男兒を得べきか』諸天使曰く『汝は必ず之を得べし。アルラーハは己れの欲する如く行ふ』言。彼

曰く『主よ、吾がためは豫兆を示せ』彼曰く『汝は三日の間、身振を以つてする外、人と語り得ざるに至るべし。唯だ不断に汝の主を念じ、朝な夕な之を讚美せよ』と曰

(1) ヨハネと呼ぶ男兒を賜ふべしとの吉報。ヨハネ Yahya は即ち洗礼のヨハネなり。(2) ザカリアの妻はマリアの叔

母エリザベスなりとせらる。傳承によれば此時ザカリアは九十九歳、エリザベスは八十九歳り老齡なりしとなす。

諸天使が是く言へる時を念へ『マリアよ、げにアルラーハは汝を選び、汝を潔め、三界の女人を超えて汝を選びたり』マリアよ、汝の主を敬ひて叩首せよ、鞠躬する者と共に鞠躬せよ』と
是れ不可見のことに関する一消息にして、いま吾之を汝に默示す。彼等が籤を投じて何人が之を撫育すべきかを定めたる時、汝等は彼等と共に在らず、また彼等が相争へる時も、汝は彼等と共に在らざり¹』

(1) マリアが生れし時、何人が之を撫育すべきかについて祭司等の間に異論あり、ザカリアは彼女の伯父たる故を以て自ら之に当らんと主張せしも彼等の同意を得ざりしかば、神意によつて之を定むるに決し、二十七人の祭司等相携へてヨルダン河畔に至り、各自の杖又は箭を河中に投じたりしが、ザカリアの杖のみ水上に浮び、他は悉く沈み去れるを以て、マリアの撫育が彼に委ねられたりとの傳承。

また諸天使が是く言へる時を念へ「マリアよ、げにアルラーハは、己れの言^{ことば}を以て汝に吉報を傳ふ。其名はマリアの子メシア・イエス、現世並に来世の高貴者、且アルラーハに咫尺する者の一人たるべし^聖 彼は搖籃の中より人と語るごとく成人の如く、必ず義人の一人たらん」と^聖 彼女曰く「主よ、如何なる男子も吾に触れず、吾如何にして子を産むべきか」彼曰く「産むべし。アルラーハは己れの欲するものを創る。彼、一事を決して『有れ』と言へば即ち有り^聖 彼は經典と智慧と律法と福音とを彼に教へん^聖 而して彼をイスラエルの兒等への使者たらしめん。(彼は言はん) 吾は主よりの休徴を齎して汝等に来れり。われ汝等のために泥にて鳥の象^{かたち}を造り、之に息を吹入れなば、そはアルラーハの允許によつて忽ち飛鳥とならん。また吾はアルラーハの允許によりて盲者と癩者とを癒やし、また死者をも起たしめん。また吾は汝等何を食ひ、何を家に貯ふべきかを汝等に告げん。汝等若し信者ならば、げに此中に汝等への休徴あり^聖 また吾は吾以前に降されたる律法を實踐し、且汝等のために禁戒の一部を弛めんがために来れり。吾は汝等の主よりの休徴を齎せり。さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ^聖 げにアルラーハは吾主にして、また汝等の主なり。されば彼に事へよ。是れ直き道なり^聖』と^聖」

(一) 『言』の原語は Kalimah なり。セールは之を『肉となれる言』即ちイエスを意味するものとし、此の一節を『汝は

主より出でたる言を産むべしとの吉報をアルラーハより賜はれり』と解釈せり。予は單に之を男兒を産むべしとの神の『豫言』と解したり。

イエス彼等の信ぜざるを識りて曰く『アルラーハの道に於て吾が援助者たらん者は誰ぞ』と。使徒等¹答へて曰く『吾等はアルラーハの援助者なり、吾等はアルラーハを信ず。願くは吾等の帰命者^{ムスリム}なることを立證せよ』^二 主よ、吾等は汝が降せるものを信じ、汝が遣はせる者に従ふ。されば吾等を證人のうちに記録せよ』と^三

(一)イエスの弟子等と言ふ。原語 Hawari は衣を白くする者の意味にて、イエスの使徒の呼称なり。かく呼ぶは彼等の精神が潔白なるに由ると言ひ、或は白衣を纏へるに由ると言ひ、或は洗衣を業とせるに由ると言ふ。また此語はエチオピア語の『使者』を意味する Hawiya の轉訛なりとも言はる。

彼等は策謀せり¹。而してアルラーハも策謀せり²。されど最勝の策謀者はアルラーハなり^三 アルラーハが是く言へる時を念へ『イエスよ、吾は汝の壽命を終らしめて吾許に擧げ、汝を潔めて信ぜざる者より出離せしむべし。また吾は汝に従へる者を、復活の日まで不信者の上に置くべし。然る後に汝等は吾に帰り、吾は汝等が相争へることについて判決を下すべし』^四 信ぜざる者は、われ現世並に来世に於て嚴罰を以つて之を罰すべし。而して彼等には一援助者もなからん』と^五 信じて

善事を行ふ者は、かれ存分に之を報賞すべし。アルラーハは不義者を欣ばず矣。是れ吾が汝に誦出する啓示にして且賢明なる訓誡なり焉。

(1) 猶太人がイエスを殺さんと策謀せることを言ふ。(2) 古蘭はイエスが十字架上に刑死せることを否定す。アルラーハは其の最勝なる『策謀』によりてイエスを天上に挙げ、彼に酷似せる別個の人間をして、彼に代りて刑死せしめたりとなす。古蘭第四章第一五七節参照。

イエスのアルラーハに於けるは、猶ほアダムのアルラーハに於けるが如し¹。彼は泥土にて彼を造り、之に『有れ』²と言ひたれば彼有りき矣。是れ汝の主よりの真理なり、されば疑惑者の一人となる勿れ矣。彼に関する眞実なる知識が汝に降されたる後に、²苟くも彼について異論を稱ふる者あらば即ち言へ『いざ吾等並に汝等の子ら、吾等並に汝等の妻ら、吾等並に汝等の同人らを集め、然る後に至心に祈禱し、アルラーハの呪咀が虚言者の上に降らんことを求めん』³と云。げに是れ眞実の物語なり。アルラーハの外に神なし。アルラーハは偉力者・聰明者なり⁴。されど彼等若し背き去らば——アルラーハは作惡者を熟知す⁵。

(1) ロッドウエルは之を以てアダム並にイエスが共に人間の父を有せざりしことを意味すとなし、セールもまた両者が神の直接の力による奇蹟的誕生なることに於て相似たるを指すとす。されど此処にての主旨は、アダムもイエスも共に泥に

て造られたる一個の人間なることに於て同一なるを示すにあり、イエスの神性を主張する基督教の信仰を否定せるものとすべし。(2) イエスについての眞実なる知識とは、彼がアルラーハの子に非ず、マリアの子にして一個の人間なること、彼が十字架に刑死せざりしことなどを言ふ。(3) 此の挑戦は早くより基督教を奉じたる中部アラビアのナジラインの諸部族が遷都十年十四名より成る使節團をメヂナに派遣せる時、マホメットが彼等に歸信を勧めたるも応ぜざりしため、此言を以て彼等に挑みたるなりとせらる。果して然りとすれば、此の一段は前後の諸節よりも後に挿入せられたるものなり。

言へ『汝等受経者よ、吾等と汝等との間に公平なる判断をなすために来れ。吾等は唯だアルラーハに事へ、何者をも彼に配せず、また吾等の何人といへども、アルラーハ以外に他の者を主とすることなし』¹と。而して其時彼等若し背き去らば即ち言へ『吾等が歸命者^{ムスリム}たることの證人たれ』と云

(1) 基督教徒がイエスを神とし、猶太人が其の博士たちを過当に尊信することを指す。

汝等受経者よ、何故に汝等はアブラハムについて争論するか。律法と福音とは彼以後に降されたるに非ざるか、汝等曉らざるか²。げに汝等は既に知識を有すること¹についてさへ争論す。然るに汝等何故に知識を有せざること²について争論するか。アルラーハは知る。されど汝等は知らず

(1) 既に有する知識とは律法と福音とのこと。天啓の經典を有しながら尙且争論を事とするを言ふ。(2) 知識を有せず

とはアブラハムの宗教に関して如何なる知識もなきことを言ふ。

アブラハムは猶太教徒に非ず、また基督教徒に非ず。彼は堅信者^{ハニーフ}・歸命者^{ムスリム}にして多神教徒に非ざ

りき^六 げにアブラハムに最も近き民は、彼の信從者並に此の豫言者と其の信者となり。而してアルラーハは信者の愛護者なり^七

(一) 此の豫言者とはマホメットを指す。

受經者の一派は汝等を迷はしめんと欲す。されど彼等は唯だ己れを迷はしむるのみ。而も自ら之を識らず^六 汝等受經者よ、汝等は其の證人にてありながら、何故にアルラーハの休徴を信ぜざるか^七 汝等受經者よ、何故に汝等は眞理と虚偽とを混同して、知りつつ眞理を隠蔽するか^八

受經者の一派は曰く『一日の始に信者に降されたるものを信じ、一日の終には信ぜざれ^一。然らば彼等踵を回さん^二』而して汝等の教を奉ずる者の外は何人をも信ずる勿れ』と。言へ『嚮導はアルラーハの嚮導なり。汝等に賜はりたると同似のものが他にも賜はるべし』と。或は彼等其主の前に於て汝等と争論せんとするが^三。言へ『恩寵はアルラーハの掌中にあり。彼は己れの欲する者に之を賜ふ。アルラーハは厚施者・能知者なり^四』彼は其の恩寵を垂るるために己れの欲する者を択ぶ。アルラーハは偉大なる施恩者なり』と^五

(一) 此の一節の意味について異説あれど、猶太人の或者が、回教信者の信仰を動搖せしむるため、彼等の或者をして朝に回教を信じ、夕に之を棄てしめんとせることを指せるものとするバイザール井の解釈が最も妥当なりと思はる。(二) 汝等の

教とは猶太教即ちモーゼの律法。(3)イスラエルの兒等のみが神寵を専らにし、豫言者は彼等の間よりのみ出づとする主張。

受経者のうちには、汝が千金^{ナシグル}を之に託するも之を汝に返還する者あり、また一片の金貸^{ディナール}を託するも督促せざれば返還せざる者あり。そは彼等が「吾等は無学者^{ウムミ}に対して如何なる義務をも有せず」と言ふが故なり。彼等は知りつつアルラーハについて虚偽を語る者なり也。然らず、人若し約束を果たし、其身を護らば——げにアルラーハは其身を護る者を愛す也。げにアルラーハの約束と己れの誓言とを賣りて些少の利益を購ふ者は、末世に於て一分も獲るところなからん。復活の日に際して、アルラーハは彼等に物言はず、彼等を眷顧せず、また彼等を潔めざるべし。而して彼等のために痛刑あるべし也。げに彼等のうちには己れの舌にて經典を歪め、汝等をして經典の一部に非ざるものを經典の一部なるが如く思はしめんとする一派あり。彼等はアルラーハより出でたるに非ざるものを「こはアルラーハより出でたり」と言ふ。彼等は知りつつアルラーハについて虚偽を語る者なり也。

(1)無学者の原語は *Ummi* にして、読み且書くことを知らざる者を意味し、マホメットは自ら「無学の豫言者 *Ab-Nabi*」*Ummi*』と呼べり。またアラビア人一般が其の文学を知らざる故を以て *ウムミ* と呼ばれ、メッカ人も「諸邑の母 *Ummu*

「1-Quira」の民の意味にて同じくウムミールと呼ばれたり。猶太人は單りアラビア人のみならず、モーゼの律法を奉ぜざる異邦人を一般にウムミールと呼べり。

アルラーハが經典と智慧と豫言とを賜ひたる者が、¹後に至りて人々に向ひ「汝等アルラーハを捨てて吾僕となれ」と言ふが如きは、凡そ人間として有り得べきことに非ず。寧ろ彼は言はん「汝等常に經典を教授し、且常に之を讀誦することによつて善知識となれ」とき、彼はまた諸天使並に諸豫言者を主と仰げと勸むる者に非ず。汝等既に歸命者となれる後、彼何すれそ不信を汝等に勸むべけんやと

(1) イエスを指す。此の一段は基督教徒がイエスは已れを主として崇拜すべしと命じたりと言へるに答へたるものとせらる。(2) 原語 Rabbani は「主について知識を有する者」の意味。

アルラーハが諸豫言者と約束せる時を念へ¹。其時彼曰く「吾は經典と智慧とを汝等に與ふ。後年汝等が既に有てる經典を實証するため、一使者汝等に至るべし。其時汝等必ず彼を信じ、彼を助けよ」と。彼また曰く「汝等之を承諾するか、此事に対して吾と結約するか」と。彼等曰く「諾」と。彼曰く「然らば汝等証人となれ、吾また証人の一人たらん」とる。されば其後に至りて之に背ける者は背逆者なりと

(1) シナイ山上の結約。猶太の傳説によれば、神はモーセに律法を賜ふに當り、一切の豫言者即ち未だ生れざる豫言者をも、悉く山上に集めたりとせらる。此処に諸豫言者と言ふは其のためなり。此の結約に於てマホメットの出現が豫言せられたりとするなり。

天地間の一切は、好むと好まざるとを論ぜず、悉くアルラーハに服従し、且彼に歸る。然るを彼等はアルラーハの教に非ざる他の宗教を求むるか。言へ『吾等はアルラーハ並に吾等に降されたるものを信じ、アブラハムとイシマエルとイサクとヤコブと諸支族とに降されたるものを信じ、モーゼとイエスと諸豫言者とに其主より賜はりたるものを信ず。吾等は如何なる差別をも彼等の間に設けず、吾等は唯だアルラーハに歸命す』と云。苟くもイスラーム以外の教を求むる者は、決して彼の納るところとならず、末世に於ては淪喪者の一人たるべし云。

一旦信仰に入りて、使者の眞実なるを証言したる後、而して明白なる諸休徴が彼等に來れる後、再び不信に復る者は、如何んぞアルラーハに導かるを得んや。アルラーハは不義の民を導かず。彼等の受くべき応報は、一齊に其上に注がるアルラーハと諸天使と萬人との呪咀なるべし云。彼等永劫に其中に在り、その刑罰は輕減せられず、また猶豫せられざるべし云。但し後に懺悔して身を修むる者を除く。アルラーハは宥恕者・大慈者なり云。げに一旦信仰に入り、然る後に再び不信

に復り、而も其の不信を増長せる者は、設ひ懺悔するとも納れられざるべし。彼等は迷ひ去れる者なり矣。信仰に入らず且不信者として死ぬる者は、設ひ全地の黄金を以て其罪を贖はんとする者ありとも、決して納れられざるべし。彼等は痛烈なる懲罰を受くべし。彼等には一援助者もなかるべし。

汝等己れの愛するものを喜捨するに非ずば、決して正義を完うするを得ず。何物たるを問はず汝等が喜捨する物はアルラーハ之を知る也。

律法¹が降されたる以前に於ては、イスラエルが自ら禁じたる物を除けば、一切の食物がイスラエルの兒等に許されたりしなり。言へ『汝等の言眞実ならば、律法を取り来りて之を讀め』と云。されば其後に於てアルラーハに就て虚偽を構ふる者は不義者なり云。言へ『アルラーハは眞実を語れり。されば堅信者にして多神教徒に非ざりしアブラハムに従へ』と云。

(1) 旧約創世記第九章第三節、第三二章第三二節参照。この一段は猶太人がアブラハムは駱駝の肉を食ひ其乳を飲むことを禁じたりと稱して回教徒を非難せる時の啓示とせらる。古蘭は、モーゼの律法が従来猶太人の食ふことを許され居たるも

●を禁じたるは、彼等の罪惡に対するアルラーハの懲罰なりとするなり。

人類のために最初に建てられたる家はメツカの家なり¹。そは祝福せられたる家にして三界の嚮導なり也。其中には明白なる諸休徴あり、そはアブラハムの立てる処なり。苟くも此中に入る者は安全なり。此家への参詣は、其処に往き得る総ての人に課せられたるアルラーハへの義務なり。設ひ之を信ぜざる者ありとするも、アルラーハは三界に求むるところなし也。言へ『汝等受経者よ、何故に汝等はアルラーハの諸休徴を信ぜざるか、アルラーハは汝等の為すことを照覽するに非ずや』と云。言へ『汝等受経者よ、汝等は証人にてありながら、何故に信者をアルラーハの道より阻み、直き道を曲れるものたらしめんとするか。アルラーハは汝等の為すことを看過せず』と云。

(1)此の一段も猶太人を対象とするものにして、マホメットがエルサレム神殿を朝向とせずしてメツカ聖殿を朝向とせるを非難せるに答へたるものとすべし。

¹汝等信者よ、汝等若し受経者の或者に従はば、彼等は信仰に入りたる汝等を再び不信者たらしむべし也。いまアルラーハの啓示が汝等に復誦せられ、其の使者は既に汝等の間に在り。然るを汝等如何にして信ぜざるを得るか。アルラーハを堅持する者は、必ず直き道に導かる也。

(1) 此の一段は猶太人の或者が、多年嫉視抗争し来れるアウス・カズラジ兩族が、マホメットのメヂナ遷都後、等しく信者となりて相和するに至れることを喜ばず、ボアス戦争を想起せしめて両者を激昂せしめ、將に流血の慘を見んとしたる時に降されたる啓示とせらる。次の一段之に続く。

汝等信者よ、アルラーハに適はしき敬意を以て之を敬ひ、ムハリム 歸命者とならずしては死ぬる勿れ。汝等アルラーハの絆¹を堅持して、決して離散する勿れ。汝等互に仇敵なりし時に汝等に賜へるアルラーハの恩恵を念へ。彼は汝等の心を結び、其の恩寵によつて汝等は兄弟となれるなり。汝等火坑の畔²にありしを、³ 彼は汝等を之より救ひたり。正しく汝等を導かんがために、アルラーハは是くの如く其の休徴を明示す。また汝等の間に互に善事を励み、正義を行ひ、悪事を禁ずる一團を結ぶべし。此等の者は榮ゆべし。明証既に至れる後に、分裂して爭論する者の如くなる勿れ。彼等は重刑を受くべし。或者の面は白く、或者の面は黒くなる日に於て、其面黒くなれる者に是く言はれん『汝等一旦信じたる後に再び不信に復れるか。然らば汝等の不信に対する懲罰を味へ』と。其面白くなれる者はアルラーハの恩寵に浴し、長久に其中に在らん。此等はアルラーハの啓示なり。吾眞実に之を汝に誦出す。アルラーハは三界を苦しむることを望まず。天地間の一切はアルラーハに屬し、萬物皆なアルラーハに歸る。

(1) 『アルラーハの絆 Habl-ilah』とは古蘭のこと。(2) 汝等とはアウス・カズラジ兩族。(3) 火坑の畔にありとは、或は將に火獄に墮せんとする意味にも、或は將に武器を執りて戦はんとする意味にも解せらる。『火を焚く』とはアラビア人にとりて戦鬪を準備することを意味せり。

汝等は人類のために擧げられたる最善の教團なり。汝等は正義を勧め、不義を禁め、アルラーハを信ず。若し受經者もまた之を信じなばそは彼等のために最も善し。彼等の或者は信者なれど、其の大半は背逆者なり^一。彼等は唯だ些少の害を以て汝等を害し得るにすぎず。彼等若し汝等と戦ふことありとするも必ず敗走すべく、また援助を得ざるべし^二。而して彼等若しアルラーハの絆と人々の絆とを握るに非ずば、¹往く処として屈辱を蒙らざるはなからん。彼等はアルラーハの憤怒の下に生き、常に貧困に附き纏はるべし。是れ彼等がアルラーハの啓示を信ぜず、妄りに豫言者を殺せるが故なり。即ち彼等が常に反抗と敵意とを示し来れるが故なり^三。彼等は必ずしも一律に非ず。受經者のうちにも義しき一團あり、夜陰にアル²ラーハの啓示を誦し、叩首して彼を拜す^三。彼等はアルラーハと末日とを信じ、正義を勧め、不義を禁め、互に善行を競ふ。此等は善人なり^三。彼等の善行は一として報賞を拒まるるはなかるべし。アルラーハは其身を護る者を知る^四。

(1) アルラーハの絆を握るとは古蘭を堅持すること、即ち改宗して信者となること。人々の絆を握るとは恐らくマホメツ

トと結べる條約を忠実に守ること。(2)アルラーの啓示とは古蘭のことなり。此の『一團』とは改宗せる受經者を指せるものとすべし。

げに信ぜざる者の財宝と子女とは、毫もアルラーハに対して益するところなし。彼等は火獄の徒なり。彼等永劫に其中に住まんニ^五 彼等が現世にて費せるものは、譬ふれば寒風吹き来りて己れを害へる民の田野を襲ひ、之を荒蕪に歸せしむるが如し。アルラーハが彼等を害ふに非ず、彼等自ら己れを害ふなりニ^六

汝等信者よ、汝等¹自身以外に親しき友を扱ふ勿れ。彼等は汝等を破滅せしむるためには苦勞を厭はず。彼等は汝等が艱難に遭ふことを欣ぶ。憎惡は既に其唇より洩れたり。されど彼等の胸中に匿すものは更に甚だし。吾は既に種々なる休徵を明示せり。汝等恐らく之を曉らんニ^三 げに汝等は彼等を愛すれども、彼等は汝等を愛せず。汝等は經典を信じ、その全部を信する者なり。然るに彼等は汝等と会ふ時は『吾等も信ず』と言ふも、去りて彼等のみとなる時は、汝等を憤りて其の指端を噛む。言へ『憤死せよ、げにアルラーハは汝等が胸中に匿せることを知る』とニ^六 幸運汝等に来れば彼等は憂へ、災厄汝等に来れば即ち欣ぶ。されど汝等忍耐して能く其身を護らば、彼等の策謀は

る者を罰す。アルラーハは宥恕者・大慈者なり云

(1) ウホド戦役の際の出陣を言ふ。(2) 多くの註釈家は『両隊』とは軍の両翼を成せるアウス族のハーリス一族Banu Hāris及びカズラジ族のサルマー一族Banu Salmaを指すとすも、恐らく『遷士Muhajirūn』と『輔士Ansār』との両隊、即ち当日の全軍を指して言へるものなり。予はムイアの解釈に従ふ。此の戦役の際し、一旦三百の兵を以て出征せるアブダラーハ・イブン・ウバイが、悉く部下を率ゐて退却せるが故に、全軍に互りて動搖の色を見たりしなり。(3) 『有力なる者』の原語はTarafにして、一物の『部分』を意味し、人間の一群、又は人間中の有力者・首脳者の意味に用ゐらる。予は後者を採れり。

汝等信者よ、二倍し四倍して高利を貧る勿れ。汝等栄えんがためにはアルラーハを敬へ云 而して不信者のために備へらるる火獄に対して其身を護れ云 慈悲に浴せんがためにはアルラーハ並に其の使者に従へ云 汝等の主の宥恕を得るため、而して廣袤天地に等しき樂園に入るために急げ。そは其身を護る者のために備へらるる云 順境にありても將又逆境にありても喜捨を行ふ者、怒を抑へて他に寛容なる者、アルラーハは善事を行ふ者を愛す云 而して惡事を行ひ又は過失を犯せる時、アルラーハを念じて彼等の罪過の宥恕を乞ひ——誰かアルラーハの外に罪を赦す者ぞ——且知りて

後は其の爲せることを再びせざる者言 此等の者への報賞は、主よりの寛恕並に河川流るる樂園なり。彼等其中に長久に住まん。げに精進する者への報賞は美しきかな言

汝等の以前に幾多の先例^{スナヒ}あり。地上を旅して使者を虚偽なりとせる者の末路が如何なるものなりしかを見よ言 此れ人々への宣告なり、また其身を護る者への嚮導並に訓戒¹なり言

(1) 此等の二節前後と連絡なし。

¹ 意氣阻喪する勿れ、また悲嘆する勿れ。汝等眞の信者ならば必ず勝利を獲ん言 汝等傷痕を受けたれど、敵また同様の傷痕を受けたり。² 人間の間²に順逆成敗あらしむるは、アルラーハが之によつて眞実なる信者を知り、汝等のうちより殉道者を擧げんがためなり。アルラーハは作悪者を欣ばず言 是はまたアルラーハが信ずる者を試練し、不信者を掃蕩せんがためなり言 アルラーハが未だ汝等のうち全力を擧げて精進する者、能く忍耐する者の誰なるかを知らざる前に、汝等先づ樂園に入らんとするか言 げに汝等は死に当面する前には死を望みたり。而して汝者は之を見たり、之を目前に賭たり³言 マホメットは一使者にすぎず、諸使者は彼の前に逝けり。然るに彼若し死し又は

殺さるれば、汝等は踵を回さんとするか。設ひ其踵を回す者ありとも、彼は毫もアルラーハを害することなし。されどアルラーハは恩を知る者に酬ゆべし⁴ 加之アルラーハの允許なくしては何人も死するを得ず。その時期は豫め定めて記録せらる。而して現世の報償を求むる者には吾之を與へ、末世の報償を求むる者にも之を與ふ。吾は恩を知る者に酬ゆべし⁵ 主に事ふる多くの者と共に戦ひし如何に多くの豫言者ありしことぞ。而して彼等はアルラーハの道に於て遭遇せることのために阻喪せず、弱らず、また屈せざりき。げにアルラーハは耐え忍ぶ者を欣ぶ⁶ 彼等は唯だ是く言へり『主よ、吾等の罪惡を赦し、吾等の努力の空しかりしことを赦せ。吾等の歩武を堅め、不信の民に対して吾等を佑助せよ』と⁷ かくてアルラーハは現世の報賞と一層勝れたる末世の報賞とを彼等に賜ひたり。アルラーハは善事を行ふ者を欣ぶ⁸

(1) 此の一段は第一二八節に続くものにして、ウホド敗戦直後に士氣を鼓舞するためのものとせらる。(2) ウホドに於て信者等が蒙れると同様の傷痕をバドルに於て敵に與へたるを言ふ。(3) 死を望むとは聖戦に出征すること。バドル戦勝の後、多くのメヂナ信者は、彼等が共に出征して名誉と戦利品の分配とに與り得ざりしを悔ひ、此次には必ず出征せんと言ひしが、ウホド会戦に死を望みて出征しながら、敵の優勢を見て心怯れ、死を怖れたることを叱責するなり。(4) ウホド会戦に於てマホメットが負傷して氣絶するや、忽ち敵味方に彼の戦死が傳へられたり。而してメッカ軍は回教軍の動搖に乗

じ、彼等に向つて『マホメット若し眞個の豫言者ならば決して戦死せじ。いま彼が既に死したる上は、汝等来りて以前の信仰と友人とに歸れ』と誘惑せり。踵を回すとは回教を棄てて多神教に復ることを言ふ。後マホメットが長逝せる時、ウマルは其の死去を否定し、若し豫言者死せりと言ふ者あらば直ちに之を殺さんと昂奮せる時、アブー・バクルは此の一節を誦し来りてウマルを反省せしめたりと傳へらる。(5)此の一節は殆ど総ての西歐学者、セール・ロッドウエル・ムイア・パーマ一等皆な『多くの豫言者は多数の味方を有せる敵と戦へり』と解釈せり。されど原文は明白に『多くの Ridda と共に戦へり』とあり、リッピは本節第七八節の『善知識 Rabbani』と同一語根に出で、共に『主を知る者』又は『主に事ふる者』の意味なれば、豫言者の味方にして決して敵に非ず。

汝等信者よ、汝等若し信ぜざる者に従はば、彼等は汝等の踵を回さしめ、汝等再び淪喪者に復るべし¹ 然らず、アルラーハは汝等の愛護者なり。彼こそ最勝の佑助者なれ² 吾は信ぜざる者の胸中に恐怖を投ずべし。そは彼等がアルラーハが如何なる権成をも降さざる者をアルラーハと同位に置くが故なり。彼等の居処は火獄なり。不義者の居処は悪し³ 吾

(1)ウホド戦後にメッカ市民が荐りに信者に対して改宗を勧めたる時の啓示とせらる。(2)ウホド会戦に於てアブー・スフヤーンが勝に乗じてメヂナを襲ふことをせざりしは、アルラーハが彼の心中に恐怖を投じたるためとせらる。

げに初め汝等がアルラーハの允許を得て彼等を撃破せる時、アルラーハは既に其の約束を汝等に

果たせるなり¹。然るに汝等の心動搖し、事に因つて相争ひ、彼が汝等の愛好するものを示すに及んで、遂に命令に背きたり²。其時汝等のうちには現世を希へる者なり、また末世を希へる者ありき。然る後に彼は汝等を試みんがために、汝等を其敵より敗退せしめたり。而して彼は汝等を赦したり。これアルラーハは信者に対して仁慈なるが故なり³。其時使者は後より汝等と呼ばるも、汝等他を顧みずして丘を駆け上れり³。されば彼は苦難に苦難を重ねて汝等に報るたり。これ今後は汝等をして其の失へるものを悲しまず、また其の遭遇せることを悲しまざらしめんがためなり。アルラーハは汝等の為すことを知る³。

(1) ウホド会戦の初頭に於て回教軍が有利なりしことを指す。(2) 後方に配置せられし弓兵が、敵軍既に敗れたりと見て、其の『愛好するもの』即ち戦利品を獲んと欲に駆られ、命令に背きて陣地を離れ、列を亂して戰場に走りしことが、遂に敗因となれることを指す。(3) ウホドの丘上に駆け上る味方に対して、マホメットが『いづこに往くぞ、回れ！吾はアルラーハの使者たるぞ、回れ！』と呼びたりしこと。

而して彼は苦難の後に汝等の上に安靜を降し、汝等の或者は微睡せり¹。されど汝等の或者は其心を苦しめ、アルラーハに対して妄りに無智なる忖度を加へて曰く『吾等は此事によつて何の獲るところあるか』²と。言へ『事は擧げてアルラーハに屬す』と。彼等は汝に示さざるものを其の胸中に

藏せり、曰く『吾等若し此事によつて獲るところありたりせば、吾等此処にて殺されざりしなるべし』と。言へ『設ひ汝等己れの家に在りとも、殺さるることを定められたる者は、必ず其屍を横ふべき場処に進み出づべし』と。これアルラーハが汝等の胸中に懐けるものを試み、汝等の胸中に懐けるものを潔めんがためなり。アルラーハは汝等の胸中に懐けるものを知る^三

(1) ウホドの戦闘終り、メツカ軍の追撃なかりしため、アルラーハのために善戦健闘せる者が安らかに眠れるを言ふ。

(2) 約束せられたる勝利を得られざりしに非ずやとの不満を発表せるもの。但し此の一句は『吾等は此事に些かにも関與する所あるか』とも解釈せらるべく、然る場合はメヂナ市民中に出でて戦ふよりも止まりて防禦せんと提議せる者あり、其の容れられずして敗戦の厄を見たることに對する不平の言葉となる。従つて次の一句も『吾等若し此事に関與したりせば』となり、吾等の提議に従ひしならんにはの意味となる。予は暫くバイザー井・ジャラール・ルッデインの解釈に従へり。

両軍相会せる日¹、汝等のうちに背轉せる者ありしは、サタンが彼等の為せる惡事のために彼等を蹉^{つま}かしめたるによる。いまアルラーハは彼等を宥恕す。アルラーハは宥恕者・大慈者なり^二

(1) ウホド会戦の日、(2) 命令に背き陣地を離れたる弓兵を指す。

汝等信者よ、信ぜざる者の如くなる勿れ。彼等は其の兄弟が地上を旅し又は戰場に向ふに當りて言ふ『彼等若し家に居りたらんには、或は死し或は殺さるることなかるべきに』と。アルラーハは

此事¹を以て彼等の胸中の懊惱たらしめん。生を與へ死を致すはアルラーハなり。アルラーハは汝等の為すことを照覽す^二。設ひ汝等アルラーハの道に於て殺され又は死ぬるとも、アルラーハの宥恕と慈悲とは汝等が積めるものに勝る^三。而して設ひ汝等死し又は殺さるるとも、汝等必ずアルラーハの許に召集せらる^二。

(1) 『此事』の意味明かならず。或は彼等の誘惑に拘らず、多くの兄弟がアルラーハのために生命を献ぐることとも解すべく、或は彼等が夙く回教に帰依せざることを後悔するに至るべきを意味するとも考へらる。

汝が彼等に対して柔和なりしはアルラーハの慈悲による。汝若し嚴厲にして酷薄なりしならば、彼等は必ず汝の周囲より離散したるなるべし。されば彼等を赦し、彼等のために宥恕を乞へ。事あれば彼等と相議り、一旦決すれば仰いでアルラーハに頼れ。アルラーハは仰ぎ頼る者を欣ぶ^二。アルラーハ若し汝等を佑けなば、何者も汝等に打勝つことを得ず。アルラーハ若し汝等を棄てなば、彼の後に汝等を佑くる者は果して誰ぞ。されば信者をして唯だアルラーハに頼らしめよ^三。

騙取は豫言者の事に非ず¹。復活の日に於て騙取者は其の騙取せるものを携へ来らざるべからず。其時各人は其の為せることに對して存分に支拂はれ、不当に遇せらるることなかるべし^三。

【1】バドル役に際し、マホメットが戦利品の処分について非難せられたるを指すと言はる。即ち極めて高價なる鮮紅の絹

敷物が紛失せるを、マホメットが窃に持去れりとせるなり。本節並に以下の二節は前後と連絡なし。

アルラーハの愆ふところに従ふ者と、アルラーハの怒に触れて地獄を其家とする者とは同じかるべきか。惡き行先なり^三。アルラーハの賞罰には差等あり。アルラーハは彼等の為すことを照覽す^三。

げに彼等の間より一人の使者を擧げ、其の啓示を彼等に復誦せしめ、彼等を潔め、曩には顯著なる迷誤の中に入りし彼等に、經典と智慧とを與へしめたるは、信者等に賜へるアルラーハの恩惠なり^三。然るに艱難一たび汝等に臨めば、曾て之に二倍する打撃を其敵に加へたるに拘らず^一、汝等曰く『^二こは何より来るぞ』と。言へ『^二そは汝等自身より来る。アルラーハは全能なり』と^三。兩軍相会せる日に於ける汝等の遭難は、アルラーハの命による。そは彼が此事によつて信者を識り^三。且僞信者を識らんがためなり。此等の者は『いざアルラーハの道に戦へ、又は汝等自身を守れ』と言はれし時、『吾等若し戦争と知りたりせば、吾等も汝等に従ひしなり』^三と言へり。其日彼等は信仰よりも不信仰に近かりき。彼等の口は其の胸中になきことを言へるなり。されどアルラーハは彼等の隠せることを知る^三。而して其家に停まれる者は、戰場に向へる同胞について言へり『彼等若し吾等の言に従ひたらんには殺されざりしものを』と。言へ『汝等の言眞実ならば、汝等自身より死を

撃退せよ』と云

(1) ウホドに於て受けたるよりも二倍の損害をバドルに於てメツカ軍に與へたることを言ふ。(2) 命令に背けるが故に敗戦せりとの意味。(3) 極めて優勢なる敵に向つて進み往くは、餘りに無謀にして戦争とは考へられざりしとの意味。

アルラーハの道に殺されたる者を死せるものと思ふ勿れ。然らず、彼等は其主に養はれて生きてあり云。彼等は己れに賜へるアルラーハの恩寵を欣び、彼等の後に残りて未だ彼等と偕ならざる者の上に畏怖も憂懼もなきことを欣び云。アルラーハの恩恵と仁慈とを欣び、アルラーハが決して信者への報賞を空しくせざることを欣びつつあり云。

艱難に遭へる後にアルラーハ並に其の使者の招呼に応へたる者、彼等のうち善事を行ひ、其身を護る者には重賞あるべし云。人々彼等に向つて曰く『見よ、汝等と戦ふために人々相集まれり。されば彼等を恐れよ』¹と。されど此事却つて彼等の信仰を堅めたり。彼等は言へり『吾等はアルラーハあれば足る。そは最勝の守護者なり』と云。かくて彼等はアルラーハの恩恵と仁慈とに浴し、如何なる艱難にも遭ふことなくして帰り来り、アルラーハの欣ぶところに従へり。²げにアルラーハは厚施者なり云。サタンは汝等をして己れの同類を恐れしめんとす。されば汝等若し信者ならば、彼等を恐れず吾を恐れよ云。

(1) メッカの首領アブー・スファイーンは、ウホド会戦より凱旋するに当り、翌年の同季節を期して再びマホメットとバドルに戦ふべきことを宣言し、帰來其の準備に従へり。『人々相集まれり』といふは此事を指す。(2) マホメットは此の挑戦に應じ、翌年冬即ち西紀六二五年二月、軍を進めてバドルに陣し、敵の來り攻むるを待ちたりしも、メッカ軍が進撃せざりしため、密に戰團が行はれざりしのみならず、滯陣中に携行し來れる商品の市を開き、巨利を挙げて歸り來れり。『艱難に遭ふことなくして』といふは此事を指す。(3) サタンとはアブー・スファイーンか、然らずは彼の意を受けてメッカの戦備を誇大にメチナに吹聴し、回教徒の戦意を挫かんとせるヌアイム *Nuaim* を指す。されど斯かる宣傳は毫も彼等を阻喪せしむることなく、マホメットは『艱難に遭へる後に招呼に應じたる』千五百人の從軍者を得たりき。

容易に不信に奔る者を見て汝の心を傷むる勿れ。彼等は毫もアルラーハを害すること能はず。アルラーハは来世に於て如何なる幸福をも彼等に願つことを欲せず、彼等は痛烈なる刑罰を受くべし。信仰を賣りて不信を買ふ者は、決してアルラーハを害する能はず。彼等は重き刑罰を受くべし。

信ぜざる者をして、吾が彼等に與ふる執行猶豫が、彼等にとりて幸福なりと想はしむる勿れ。吾は唯だ彼等をして其の罪惡を増長せしめんがために猶豫を與ふるにすぎず。彼等は耻づべき刑罰を

受くべしモ アルラーハは、善人と悪人とを別つ日まで、信者を現在の如き境遇に放置するものに非ず²。彼はまた不可見のことを汝等に知らしめんとするものにも非ず。されどアルラーハは己れの欲する者を選んで使者となせり。されば汝等アルラーハ並に其の使者を信ぜよ。汝等信じて善事を行はば、必ず偉大なる報賞を受けん³。

(1) 同じくウホド戦後に士氣を鼓舞せるものにして、信ぜざる者とはメッカ市民を指し、彼等の繁榮の久しからざるべきを説くなり。執行猶豫とは天罰を加ふることを猶豫するなり。(2) 善惡分別の日は即ち復活の日、信者の境遇が近く昂揚せらるべきを約束するなり。

アルラーハの恩寵によつて賜はれる物を喜捨するに吝嗇なる者をして、そは己れにとりて利益なりと想はしむること勿れ。そは彼等のために不利なり。彼等が吝みて出ださざりし其物が、復活の日には彼等の首伽とならん。天地の遺産はアルラーハに屬す。アルラーハは汝等の為すことを知る⁴。

げにアルラーハは是くの如く言へる者の言を確聞せり『げにアルラーハは貧しく吾等は富む』¹と。吾は彼等が言へること、並に彼等が妄りに豫言者を殺せることを記録し、且言はん『汝等焦熱の苦

刑を嘗めよ^一。これ汝等が己れの手にて豫め送れるもののため、またアルラーハは決して其の僕等を害せざるがためなり』と云^二。彼等曰く『アルラーハは吾等を誡めて、天火に焼かるる犠牲を齎す者に非ずば、如何なる使者をも信ずる勿れと告げたり』と²。言へ『げに吾以前にも諸使者が明証を携へて汝等に来り、且汝等が求むるものを携へて汝等に来れり。汝等の言眞実ならば、何故に汝等は彼等を殺せるか』と云^三。設ひ彼等が汝を虚言者と呼ぶとも、決して意に介する勿れ。種々なる証據と、詩篇³と、輝ける經典とを携へて汝以前に来れる諸使者をも、彼等は虚言者と呼びたり云^三。

(1) 猶太人を対象とする諸節にして、此言はマホメットがアブー・バクルを遣はしてカイヌカー族の一猶太人より借財せんとせし時、該猶太人の口より出でたるものとせらる。單り此時のみならず猶太人は回教徒が一般に貧困にして常に彼等より借財するを晒ひ、且つマホメットが荐りに喜捨を勧奨するを晒ひたり。(2) 猶太人の信仰によれば、眞個の豫言者は其の祈禱によつて天上の聖火を地に降らしめ、神壇に供へる犠牲を焼くべしとせり。旧約レビ記第九章第二四節、前歴代史略第二章第二八節、後歴代史略第七章第一節参照。(3) 詩篇の原語はNubur (單数Nabur)。讚美歌を意味するベブライ語 Zimrahより来る。一般に聖典の意味に用ゐらるるも、古蘭にてはダビデの詩篇を指す。四ノ一六一、一七ノ五七、二一ノ一〇五参照。

各人は皆な死を嘗むべし。而して汝等復活の日に存分に酬ゐらるべし。此日火獄より遠ざけられ

て樂園に入らしめらるる者は、げに本願成就せる者なり。現世の生活は唯だ儂^{はかな}き歡樂にすぎず一六
汝等必ず財産と生命との試練に遭ひ、また汝等以前に經典を降されたる者並に多神教徒より種々な
る妄言を聞かん。されど汝等耐え忍びて能く其身を護らば、げに事は之によつて決せらる一五

アルラーハが曾て受経者と結約せる時を念へ。其時彼曰く『汝等必ず之を人々に明示し、決して
隠蔽する勿れ』と。然るに彼等之を背後に棄て、些少の代價を以て之を賣れり。彼等の買へるもの
は禍なるかな一六 己れの為せることを欣び、行はずして賞讃せらるることを好む者¹、是くの如き者
が懲罰を免れ得べしと想ふ勿れ。彼等は痛刑を受けん一七 天地の大権はアルラーハに属す。アルラ
ーハは全能なり一八

【一】聖書に記されたるマホメットに関する証拠を隠蔽し、律法の命ずるところを行はずして他より賞讃せらるることを喜
ぶ猶太人を指すとせらる。

げに天地の創造並に晝夜の循環の中には、睿智ある者への種々なる休徴あり一九 或は起立し、或
は端坐し、或は側臥してアルラーハを念じ、天地の創造について静思する者は言はん『主よ、汝は

徒爾に之を創造せるに非ず、汝に光榮あれ、吾等を火獄の刑罰より護れ。主よ、げに汝が火獄に入らしめんとする者は、汝必ず之を辱しむべく、不義者には如何なる佑助者もなからん。主よ、げに吾等は、汝等の主を信ぜよ」と言ひて信仰に招ぐ者の招呼を聽きて信者となれり。主よ、吾等の罪を赦し、吾等の惡事を拂拭し、吾等を義人と共に死なしめよ。主よ、諸使者によつて汝が吾等に約束せるものを賜へ。復活の日に吾等を辱むる勿れ。げに汝は約束に背かじ」と。主は彼等に應へて言はん、「げに吾は男女を問はず、汝等のうちの如何なる精進者の精進をも空しくせざるべし。男は女より、女は男より出づるなり。その家郷より逐はれ、吾がために艱難に遭ひ、征戰して殺されたる諸遷士、げに、吾は彼等のために其の諸惡を消滅せしめて、必ず之を河川流るる樂園に入らしめん、これアルラーハの報賞なり。げに最勝の報賞はアルラーハの許にあり」と。

汝、信ぜざる者が地上を横行濶歩するを見て、之に欺かるること勿れ。これ一朝の歡樂なり。やがて火獄が彼等の住居たるべし。そは惡き臥床なり。されど其主を敬ふ者には河川流るる樂園あり。彼等は長久に其中に住まん。これアルラーハの歡待なり。義人にとりて最勝なるものはアルラーハの許にあり。

【1】原語は『往来する』にて、貿易のために諸市の間を往復し、大いに富を積む意味とも解釈せらる。予はレインの解釈

に従ひ、思ふがままに行動する意味にとれり。

受経者のうちにもアルラーハを信じ、汝等に降されたるもの並に彼等に降されたるものを信じ、アルラーハを敬ひ、些少の代價にてアルラーハの啓示を賣らざる者あり。此等の者は必ずアルラーハの報賞を受けん。げにアルラーハの清算は神速なり二六

汝等信者よ、忍耐せよ、忍耐に於て他を凌駕せよ。鞍を置け¹。汝等の本願成就せんがためにはアルラーハを敬へ二九

【一】聖戦に出づる準備せよとの意味。

第四 女 人 章

メヂナ啓示

女子に関する啓示多きを以て女人章 *Ab-nis* と名づけらる。その大部分はウホド役後に発生せる諸問題を取扱ふ。即ちウホド会戦に於て信者の戦死者七十四名、うち四名は遷士にして、七十名は実にメヂナの輔士なりしが、之によつて生じたる寡婦並に孤兒の保護が当面の問題となりしを以て、之に関する多くの啓示あり。次にウホド敗戦の重大なる原因の一は、所謂偽信者の離反にありしを以て、彼等を対象とせる諸啓示あり。更にウホド敗戦後、猶太人の一部が偽信者と相結び、公然回教徒を敵視せるのみならず、回教徒に関する情報をメッカに提供して之と相通ずる等のことありしため、マホメットは遂に意を決してメヂナの猶太人を絶滅せんとし、之に関する啓示を受けたり。本章は主として叙上三問題についての諸啓示より成る。ネルデケは本章の啓示年代を遷都三年初頭より同五年暮までとなせども、遷都五年に起りし『塹壕戦』に関する啓示なきより見れば、此の戦争以前のものとすべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

人々よ、一人¹より汝等を創り、其より其妻を創り、両者より多くの男女を殖やせる汝等の主を敬へ。汝等其名によつて互に相求むるアルラーハ²を敬ひ、また（汝等を産める）女人³を敬へ。アルラ

一ハは汝等を照覽す

(1) 『一人』とはアダム、其妻とはエバ。(2) 他に何事かを求むる場合に、常に『アルラーハ』の名によつて汝に某事を求む』と言ふなり。(3) 原語は『子宮 Arham・單数 Rahim』。

孤兒等に其の財産を與へよ。汝等の惡きものを以て彼等の善きものと換ふる勿れ。彼等の財産を己れの財産に併吞する勿れ。是くするは大罪なり^二

汝等若し孤兒等に対して公正なり得ざるを恐れなば、汝等が佳しと思ふ二人又は三人又は四人の女子を娶れ¹。但し公平なり得ざるを恐れなば、唯だ一人の女子、又は汝等の右手が所有する者を娶れ。不公平を避けんがためには、此事最も善し^三而して女子には贈與として婚資を與へよ。されど若し女子が自ら進んでその一部を放棄することを願はば、満足し且安心して之を納めよ^四

(1) 此の一句の意味明瞭ならざるを以て、學者によりてその解釈を異にす。或は之を以て孤女を娶りてその財産並に家業を併吞せんとするを警しめたるなりとなし、或は孤兒を擁せる寡婦を娶りて彼等を扶養することを勧めたるなりとなす。若し前者とすれば孤女と結婚せずして、一般の女子を四人まで娶り得る意味となり、後者に従へば孤女を四人まで娶り得たるなり。(2) 『右手が所有する者』とは一般に女子奴隸を意味し、古蘭中に類出する語なり。此処にては戰爭にて俘虜となれる女子を言ふ。

アルラーハが汝等に後見を命じたる財産を、低能者に交付する勿れ。唯だ其の財産にて彼等に衣食を給し、且親切に物言へ^五

婚期に達するまで孤兒を試みよ。若し彼等自ら処理し得べしと認めなば、其の財産を彼等に交付せよ。孤兒の成長せざる以前に急ぎて之を浪費する勿れ。後見者が富者ならば手を之に触れしむる勿れ。若し貧者ならば適宜に之を利用せしめよ。汝等彼等の財産を還付する場合は、必ず証人を立会はしむべし。アルラーハは十全なる清算者なり^六

男子は両親並に近親の遺産の一部を獲べく、女子もまた両親並に近親の遺産の一部を獲べし。而して遺産の多少を論ぜず、必ず定められたる分與を受く^一。若し遺産の分配に際して、親戚・孤兒並に貧者が現場にある場合は、其の若干を彼等にも與へ、且親切に物言へ。彼等をして（孤兒に対して）慎しませよ。彼等若し弱小の子女を後に遺さば、彼等もまた其為に心を勞せん。されば彼等をしてアルラーハを敬ひ、正しき決意を表明せしめよ^二。げに不義にして孤兒の財産を呑む者は、火を腹中に呑む者なり。やがて彼等は烈火に燔かるべし^三

（一）回教以前のアラビアに於ては『槍を以て撃つ者の外は相続するを得ず』とせられ、女子及び年少者は遺産分配に除外せられたり。従つて此の啓示はアラビアの相続法に於ける非常なる改革なり。（二）臨終の父又は孤兒を安心せしむるため

汝等の子女に関して、アルラーハは下の如く汝等に命ず。男子は女子二人と同額の分與を受く。若し女子のみにて其数二人以上なる時は、亡父が遺せる財産の三分の二を受け、若し女子一人なる時は其半を受く。男子に遺兒ある場合は、其の父母は各自遺産の二分の一を受け、遺兒なくして父母が遺産を相続する場合は、母は其の三分の一を受く。若し彼に兄弟ある場合は、母は其の遺囑又は債務を果たせる後に残れる財産の六分の一を受く。汝等は己れの父母と己れの子女の孰れが最も多く汝等を裨益するかを知らざるなり。こはアルラーハより出でたる掟なり。アルラーハは能知者・聰明者なり二 若し妻に子なき場合は、汝等は妻の遺産の半を受く。若し子ある場合は、遺囑又は債務を果たせる後に残れるものの四分の一を受く。若し汝等に子なき場合は、妻は汝等の遺産の四分の一を受く。若し子ある場合は、遺囑又は債務を果たせる後に残れるものの八分の一を受く。遺産を相続せらるべき男子又は女子に直系親屬なくして、兄弟一人又は姉妹一人ある場合は、各自遺産の六分の一を受く。若し二人以上の場合は、彼等は他に損害を與へず、且遺囑又は債務を果たせる後に残れるものの三分の一を受く。これアルラーハの掟なり。アルラーハは能知者・大度者なり三 此等はアルラーハによりて立てられたる律例なり。而してアルラーハ並に其の使者に隨順す

る者は、河川流るる樂園に入らしめられ、長久に其中に住まん。げに偉大なる本願成就なり^三。されどアルラーハ並に其の使者に背き、其掟を犯す者は、火獄に入らしめられ、永劫に其中に住まん。彼は耻づべき懲罰を受くべし^四。

汝等の女子のうち姦淫を行へる者に対しては四名の証人を喚べ。彼等若し之を立証しなば、彼女等の死に至るまで、又はアルラーハが彼女等のために別途を指示するまで、^一之を其家に拘置すべし。汝等のうち姦淫を行へる兩人は、共に之を譴責すべし。但し彼等懺悔して善に遷らば之を赦せ。げにアルラーハは允懺悔者・大慈者なり云アルラーハが懺悔を赦すは、無智にして惡事を行ふも、直ちに之を懺悔する者なり。アルラーハはその懺悔を允さん。アルラーハは能知者・聰明者なり云されど死が彼等の一人に臨み、其者が『いま吾は悔ゆ』と言ふまで惡事をつくる者、又は尙ほ信ぜざる間に死ぬる者の懺悔は、アルラーハ之を允さず。吾は彼等のために痛刑を備ふ云

(一) 古蘭第二四章第二一〇節は『アルラーハが別途を指示』せるものなり。

汝等信者よ、彼女等の意志を無視して女子を相続することは合法に非^一ず。また明かに姦淫を行へるに非ずば、汝等が彼女等に與へたる婚資の一部を回收せんがために彼女等の結婚を妨ぐる勿れ。

親切に彼女等と遇せよ。汝等若し彼女等を悪まば、汝等はアルラーハが大なる幸福を其中に藏せるものを悪むこととなるやも知るべからず。汝等一人の妻を他の妻と換へんとする場合は、設ひ其の一人に如何に巨額の婚資²を與へたりとも、其中より一物をも回収するを得ず。汝等は讒誣と明白なる罪惡とを犯して之を回収せんと欲するか³。汝等は既に互に相交はり、彼女等は堅き約束を汝等より受けたるに、汝等如何ぞ之を回収すべけんや三

(1) 此処に『女子』と言ふは亡父の妻を指す。回教以前のアラビアにては、男子が死去せる場合に其の長男又は親屬が其の寡婦を所有し、自ら之と結婚し、又は他と結婚せしめ、又は其の再婚を禁ずる權利を有せり。この啓示は叙上の弊風を禁止せるものなり。(2) 『巨額の婚資』の原語は「タレント」。(3) 姦淫其他の罪名を其妻に負はしめ、容易に之を離別して、婚資を回収し、新しき妻を娶り得たる在来の弊風を禁じたるもの。

汝等の父が結婚せる女子と結婚する勿れ。但し既往の事は之を除外す。そは耻づべく忌むべく惡むべき道なり三 汝等が結婚を禁ぜらるるは生母、女兒、姉妹、父方の伯叔母、母方の伯叔母、兄弟の女兒、姉妹の女兒、乳母、同乳の姉妹、妻の生母、汝等の妻が産みたる撫育中の養女——汝等若し其妻と交らざりしならば罪なし——並に実子の妻なり。また同時に二人の姉妹を娶るべからず。

但し既往は除外す。アルラーハは宥恕者・大慈者なり^三。また汝等は有夫の自由女子を妻とするを得¹ず。但し汝等の右手が所有する者を除く²。これ汝等が守るべきアルラーハの掟なり。以上を除く総ての女子は汝等に許さる。されば汝等の財産を以て、淫欲のために非ず正しき妻帯生活のために妻を娶れ。娶りて同衾せる者には定められたる婚資を與へよ。また汝等合意の上にて所定以外のことを行ふも罪なし³。アルラーハは能知者・聰明者なり。汝等のうち信者の自由女子を娶る資力なき者は、汝等の右手が所有する者のうちの信者を娶れ。アルラーハは汝等の信仰を知る。汝等は一体なり³。されば其家の承諾を得て彼女等と結婚し、彼女等が貞節にして多淫ならず、また密夫と通ずることなくば、懇ろに婚資を與ふべし。彼女等若し正式に結婚せる後に姦淫を犯すことあらば、自由女子に課せらるる刑罰の半を課せよ。これ汝等のうち罪に陥ることを恐るる者のために定むるなり。但し彼女等との結婚を差控ゆるは、汝等にとりて最も善し。アルラーハは宥恕者・大慈者なり^三。

(1) 正式に離婚の手續を経ざる自由女子。(2) 俘虜となれる女子は有夫の者といへども之を娶ることを許さる。(2) 所定以外のことを行ふとは、婚資を増すこと、または減ずることを指す。(3) 女奴も等しくアダムの子孫にして、且信仰を同じくする故に一体なりとの意味。

アルラーハは汝等に事理を明示し、先人の道によつて汝等を導き、汝等の懺悔を允さんとするな

り。アルラーハは能知者・聰明者なり云。アルラーハは汝等の懺悔を允さんことを望む。されど己れの欲を追ふ者は、汝等が大いに迷はんことを望む云。アルラーハは汝等の荷を軽からしめんことを望む。人間はもと弱きものに創られたるが故なり云。

汝等信者よ、相互の同意による商賣に非ずば、其の財産を空しく汝等の間に蕩盡する勿れ¹。また汝等互に殺す勿れ²。げにアルラーハは汝等に仁慈なり云。苟くも敵意と悪意を抱いて之を敢てする者あらば、吾必ず火にて之を燔かん。そはアルラーハにとりて易々たる事なり云。されど汝等若し禁ぜられたる大惡を遠離しなば³、吾必ず汝等の諸惡を消滅せしめ、高貴なる門を入らしめん云。

(1) 空しく財産を蕩盡すとは賭博のこととせらる。(2) 原文は『汝等自身を殺す勿れ』とあるを以て、セール、ロッド、ウエル等は『自殺する勿れ』と解釈し、漢訳古蘭また然り。されど『汝等自身』とは血族を同じくする者又は信仰を共にする者の意味にして、第三章第一一七節にも『汝等自身以外に親しき友を擇ふ勿れ』とあり。(3) 此の一句は『禁ぜられたる重大事項を守らば』とも訳し得べし。

アルラーハが汝等のうちの或者に他よりも多く賜へるものを貧ること勿れ¹。男子は己れの為せることに相應せる一分を與へらる。されば唯だアルラーハに其の恩惠を求めよ。アルラーハは一切を

知る三 吾は各人のために其の父母及び近親が遺すものの相続者を定めたり。而して汝等が右手を握りて結約せる者にもまた其の分前を與へよ。アルラーハは一切を照覽す三

(1) 一般的に貧富の差を意味するか、或は遺産分配に定められる受益者の差等を指すかを明かにし難し。恐らく前述の規定によりて遺産を多く相続する者を羨む勿れといふ意味なるべし。(2) 回教徒がメッカよりメヂナに遷れる当初、マホメットはメヂナの各「輔士」は皆な一名の「遷士」を扶養すべき制度を定め、之によつて移住者の経済的困難を救はんとせり。此時彼等はアラビア古来の慣習に従ひ、互に右手を握りて兄弟の契を結べるが故は、遺産の分配に與かる権利をも得たるなり。但し此の権利は後の啓示によりて撤廢せらる。

男子は女子の扶持者なり¹。そはアルラーハが女子よりも男子を優れるものとし、且男子は女子を扶養するため其財を費すが故なり。されば善き女子は從順にして、アルラーハが彼等を加護するが故に其の貞操²を護る。強悍恐るべき女子は之を訓誡し、之を臥床より遠ざけ、之を打て。されど彼等從順とならば之を追求すること勿れ。げにアルラーハは至高者・至大者なり三 若し汝等夫婦の破局を惧れなば、男子の家族並に女子の家族より各一名の調停者を擧げよ。彼等若し和解を望まばアルラーハは彼等を和解せしむべし。アルラーハは能知者・悉知者なり三

(1) 原語 *Qawwam*。扶養者・維持者・処理者等の意味あり。(2) 原語は「見えざるもの」又は「隠れたるもの」。

アルラーハに事へよ。何者をも彼に配する勿れ。父母に懇切なれ。親屬、孤兒、貧者、親戚たる
と否とを問はず汝等の庇護の下にある者、同伴者、旅人、並に汝等の右手が所有する者に親切なれ。
アルラーハは高慢にして自負する者を欣ばず

己れ吝嗇にして他にも吝嗇を勧め、アルラーハが彼等に賜へるものを隠匿する者、吾は是くの如
き不信者のために耻づべき刑罰を備ふ。彼等はアルラーハと末日と信ぜず、唯だ人に誇示せんが
ために其財を費す。げにサタンを伴侶とする者は、惡き伴侶を有てる者なり。彼等アルラーハと
末日とを信じ、アルラーハが彼等に賜へるものうちより喜捨するとも、果して何の失ふところぞ。
アルラーハは彼等を知る。アルラーハは一毫の軽きを苟くもせず、若し一善あれば必ず之を倍加
して偉大なる報賞を賜ふ。かくてわれ各族より一証人を召喚し、彼等に対しては汝を証人たらし
むる時、其時彼等は如何なるべきぞ。其日信せずして使者に抗せる者は、大地が彼等と共に平ら
げられんことを望まん。彼等は一事もアルラーハに隠すことを得ず。

汝等信者よ、汝等酌量せる時は、己れの言が分明ことばとなるまで礼拜に近づく勿れ。大穢1にある者は、

途上の旅人たる場合を除き、大淨の後ならでは近づく勿れ。また汝等病に罹り、又は旅中にあり、又は汝等の一人が廁より来り、又は汝等女子と交はり、而も水を得難き場合は、乾きて潔き砂に趨き、汝等の面と手とを撫でよ。アルラーハは寛容者・宥恕者なり

(1) 大穢 Janabah は下のことによつて生ず。即ち死亡・精液分泌・男女の四肢接触・月経・分娩・産褥惡露。(2) 小淨を行ひたる後、更に週身洗到三回するを大淨 Ghisl と言ふ。(3) 砂を以て水に代ふる洗身を『砂淨 Tayammum』と

54。

汝は見ざるか、經典の一部を賜はれる者が、己れは迷妄を購ひ、汝等をば道を迷はしめんとするを^四アルラーハは汝等の敵を知る。アルラーハは愛護者たるに足り、佑助者たるに足る^五猶太¹人の或者は經典の字句を轉倒して『吾等は聽き且背く』と言ひ、聽き難きものを『聞け』と言ひ、其舌を歪めて『吾等に聽け』と言ひて眞教を誹謗す。されど彼等若し『吾等は聽き且從ふ』と言ひ、また聽きて『吾等を見よ』と言はば、彼等のために最も善く、また最も正し。アルラーハは彼等の不信の故を以て之を呪咀す。されば僅少の者を除きて彼等は信ぜざるなり

【1】第二章第一〇四節参照。

汝等經典を賜はれる者よ、われ汝等の面を塗沫して之を其背に扭轉せざる前に、また曾て安息日を破りし者が呪はれたる如く呪はれざる前に、汝等が有てるものを確証せんがために吾が降せるものを信ぜよ。アルラーハの命令は必ず行はる。

【1】第二章第六五節参照。

げにアルラーハは何者をも己れに配することを許さず。此事を除けば彼は己れの欲する者を赦す。何にてもあれ之をアルラーハに配する者は大惡を犯す者なり。

汝はかの自ら義しとする者を見ざるか。然らず、アルラーハは己れの欲する者を義しくす。彼等は毫末も不当に遇せらるることなし。見よ、如何に彼等がアルラーハについて虚偽を弄するかを。此事既に顯著なる罪惡なり。

(1) 神の選民と称する猶太人並に特別なる神寵に浴すとする基督教徒を指す(バイザー井)。

汝はかの經典の一部を賜はりたる者を見ざるか。彼等はジプトとターグートとを信じ、且信ぜざる者を指して『此等の者は信者よりも正しく道に導かる』と言へり、此等はアルラーハに呪はるる者なり。アルラーハが呪ふ者には如何なる佑助者もなし。また彼等は大權に與かると言ふか。若

し然らば彼等は一毫をも人に與へざるべし^三。また彼等はアルラーハが恩寵を垂れたるが故に其民を嫉むか。されど吾はアブラハムの兒等に經典と智慧とを與へ、且偉大なる權力を彼等に與へたり^三。然るに彼等の或者は之⁴を信じ、或者は之に背きて去る。げに地獄の烈焰は彼等を燐くに足る^三。げに吾が体徴を信ぜざる者は、吾必ず之を火獄に投ぜん。彼等の皮膚爛熟する毎に、われ新しき皮膚を以て之に代へ、彼等をして飽くまで刑罰を味はしめん。げにアルラーハは偉力者・聰明者なり^三。されど信じて善事を行ふ者は、吾之を河川流るる樂園に入らしめ、長久に其中に住ましむべし。其処には彼等の貞潔なる花嫁あり。而して吾は鬱密たる樹蔭に彼等を導かん^三。

(1) バイザールに從へば、此の啓示は下の場合に降れるものなり。即ちメチナ猶太人の有力者の一團が、メッカに赴きて反マホメット同盟の締結をクライシニ族に提議せる時、メッカ市民は彼等に向つて『汝等もマホメットと同じく天啓の教を信ずるに非ずや。汝等の言眞実ならば、汝等も吾等の神々を拜すべし』と言へり。而して彼等は啻に彼等の求めに應じたるのみならず、多神教はマホメットの教に優ると言へり。ジプト Egypt は偶像又は魔術を意味す。(2) メシアの出現によつて権力と繁榮との回復を期待するを指す。或はメチナの偽信者と相結びてメチナに政治的勢力を確立せんとする陰謀を指せるものとも考へらる。(3) 従つてアブラハムの信仰を復興するマホメット及び其の信者にも同様の恩寵を垂るべしとの意味。(4) 『之』は『彼』即ちマホメットを指せりとするこも得べし。

アルラーハは汝等が其の信託せられたる物を原所有者に還付すべきことを命じ、また人を裁く時は公平に裁くべきことを命ず。これアルラーハが汝等に與ふる善き訓戒なり。げにアルラーハは能聞者・能見者なり矣

汝等信者よ、アルラーハと其の使者に従ひ、また汝等のうちの執権者に従へ。汝等事によつて相争はば、汝等若しアルラーハと末日とを信する者ならば、之をアルラーハ並に其の使者に委ねよ。これ事を決する最善にして至公なる道なり¹

【1】此の啓示はメヂナに於ける最高の裁判権をマホメットに賦與するものにして、メヂナに於ける彼の地位が漸く確乎たるに至れるを示すものなり。但し猶太人並に偽信者は之に対して不平を抱けり。

汝はかの汝に降されたるもの、並に汝以前に降されたるものを信ずと言ふ者を見ざるか。彼等は之を信する勿れと命ぜられながら、其の爭議の判決をターゲットに仰がんとす¹。サタン彼等を導きて遠く迷はしめんとするなり。人あり彼等に向つて『アルラーハが降せるものに来れ、其の使者の許に来れ』と言へば、汝は彼等偽信者が深刻なる忌避を以て汝を忌避するを見ん²。されど彼等

の手が豫め送れるもののために災難に遭ふ時は即ち如何。其時彼等汝の前に来り、アルラーハに誓ひて言はん『吾等は唯だ好意を示し、調停を図らんとせるのみ』と云。アルラーハは彼等が胸中に懐けることを知る。されば彼等を遠ざけ、之を訓誡し、且告ぐるに其の心魂に徹する言を以てせよ云。われ使者を遣はせるは、唯だアルラーハの命を奉じて人々をして彼に随順せしめんがために外ならず。而して彼等過誤を犯せる時、若し汝に来りてアルラーハの宥恕を乞ひ、使者また彼等のために宥恕を乞はば、彼等はアルラーハの允懺悔者・大慈者なるを知らん云。否な、主に誓つて言ふ、彼等その爭議の裁断を汝に仰ぎ、後に至るも汝の裁断に甘んじ、至心に之を承認するに至るまでは、彼等は決して信仰に入れるに非ず云。設ひわれ彼等に向つて『身を殺せ』と命じ、また『家を出でよ』と命ずるも、之に応ふる者は僅少なるべし。されど彼等若し勧めらるる如く行はば、そは彼等のために最善にして且最も安全なるべきものを！云。然らば吾必ず重賞を彼等に與へ云。必ず彼等を直さ道に導かん云。げにアルラーハ並に其の使者に従ふ者はアルラーハが恩寵を垂るる豫言者・誠実者・殉教者・義人と偕にあり。げに善き伴侶なるかな云。これ実にアルラーハの恩寵なり。アルラーハは十全なる能知者なり云。

(1) 此の一段はマホメットの最高裁判権に不服なりしメヂナの偽信者を対象とす。バイザー井及びジャラールッディーン

註に従へば、此の啓示の背景は下の如し。即ち一猶太人と一メヂナ信者との間に爭議を生ぜし時、該信者は賄賂によりて有利なる判決を求むるため、後にマホメットののために暗殺せられし有力なる一猶太人カアブ・イブン・アシユラフ Ka'b Ibn Ashraf に提訴せんとせり。此処にターゲットといふはカアブを指せるものとせらる。然るに猶太人はマホメットの裁判の公平なるべきを思ひて此の提議に應ぜず、遂に彼の裁判を仰ぐことなりしが、マホメットは猶太人を是とし、信者を非として所刑を宣告せり。該信者け之に不服なりしたため、更にウマル(後のカリフ)に赴きて之を訴へたり。ウマルは一伍一什を聽取せる後、直ちに一刀を抜きて其頭を断ち、以て豫言者の裁判に服せざる者の殷鑑たらしめたり。此事のためにウマルは『裁断者 Al Farick』と呼ばれるに至れり。蓋し彼の首を断じ、且正邪善惡を断じたるが故なり。(2) 『身を殺せ』とはアルラーハのために一命を捨てよの意味。『家を出でよ』とは聖戰のために出征せよとの意味。

汝等信者よ、準備せよ。或は小隊に分れ、或は一隊となりて出征せよ。汝等のうちには落後する者あり。而して¹艱難汝等に下れば即ち曰く『吾等が彼等と偕ならざりしはアルラーハの眷顧による』とき²されどアルラーハの恩寵汝等に下る時は、宛も汝等と彼等の間に交誼なかりしものもの如く装ひて曰く『吾若し汝等と偕なりせば、吾は大なる獲物を得たりしものを』とき³されば現世を棄てて来世を扱ぶ者をしてアルラーハの道に戦はしめよ。苟くもアルラーハの道に戦ひて、殺され又は勝てる者には、吾必ず重賞を與へん。汝等何すれどアルラーハの道に、また³迫害せらるる男

女と児童とのために戦はざる。彼等は言ふ『主よ、此の不義の民の都市^{まち}より吾等を連れ出せ。吾等のために汝の許より愛護者を遣はし、汝の許より佑助者を遣はせ』と^ま。信ずる者はアルラーハのために戦ひ、信ぜざる者はターグートのために戦ふ。さらばサタンの友と戦へ、サタンの謀略は弱し^ま。

(1) 此の一段は信者に向つてメッカに対する戦意を鼓舞するもの。艱難下るとは敗戦の場合を言ふ。(2) 勝利の場合。(3) メッカに留まりて不信者のために迫害を受けつつある信者。(4) メッカを指す。

汝は是く告げられたる者を見ずや『汝等の手を停めよ、礼拜を守れ、捐課を納めよ』と。然るに彼等征戦を命ぜらるる時、彼等のうちには人間を恐るることアルラーハを恐るる如く、或は之よりも甚だしき者あり。彼等曰く『主よ、何故に汝は吾等に戦へと命ずるか。何故に程遠からぬ末期^{まっご}まで吾等を猶豫せざるか』と。言へ『現世の歡樂は言ふに足らず。末世こそ其身を護る者にとりて最勝なれ。汝等は毫も不当に遇せらるることなかるべし^ま。而して汝等いづこにありとも、設ひ高樓の上にあるとも、死は必ず汝等に臨むべし』と。彼等は幸運に会へば『これアルラーハより来る』と言ひ、艱難に遭へば即ち『これ汝(マホメット)より来る』と言ふ。言へ『一切はアルラーハよ

り来る』と。彼等が殆ど一事をも解せざるは何たる事ぞ。一切の幸福はアルラーハより出で、一切の災厄は己れより出づ。吾は汝を使者として人々に遣はしたり。而してアルラーハは証人たるに足る。何人にもあれ使者に従ふ者はアルラーハに従ふ者なり。されど若し背き去る者あらば——可し、吾は保護者として汝を遣はしたるに非ず。彼等は『服従』を口にすれども、一たび汝の面前を去れば、彼等の一党は夜陰に隠れて汝が命ぜざりしことを策謀す。アルラーハは彼等の夜間の策謀を記録せり。されば彼等を遠離して唯だアルラーハに頼れ。アルラーハは受託者たるに足る。彼等は古蘭について思はざるか。若し古蘭がアルラーハ以外の者より出でたりとすれば、彼等は其中に幾多の矛盾を見るべきなり。

【1】此の一段は卑怯なる、又は陰險なるメヂナの偽信者に対する非難と訓誡となり。『汝等の手を停めよ』とは、暫く干渉を執ることを止めよの意味。

或は安心すべき事にせよ、或は憂惧すべき事にせよ、何等かの報道を聞く毎に、彼等必ず之を吹聴す。されど彼等若し使者並に同人中の権威者について之を質せば、其事を究めんとする者は、事の真相を彼等より知り得べし。げにアルラーハの恩寵と慈悲となかりせば、僅少の者を除きて汝等皆なサタンに従ひしなり。されば汝はアルラーハの道に戦へ。汝は己自身に対する外は何人に対

しても責を負はず。唯だ信者を鼓舞せよ。想ふにアルラーハは不信者の戦意を制止せん。アルラーハは勇武に於て強大に、また懲罰に於て強大なり。善意を以て結合する者は之に依じて報償を獲べく、悪意を以て結合する者も之に依じて報償を獲べし。アルラーハは一切を支配す。汝等挨拶せられたる時は、更に善き挨拶をなすか、又は同様の挨拶を返せ。アルラーハは一切を清算す。アルラーハ、彼の外に神なし。彼は復活の日に必ず汝等を召集すべし。そは疑惑を容れず。誰かアルラーハよりも眞実に物言ふ者ぞ全

(1) 此の一段も偽信者を対象とす。但し第八五・八六・八七の三節は、各自別個の場合の啓示にして、信者全体を対象とせるものと思はる。

汝等何を苦しんで偽信者に関して両派對立するか。アルラーハは既に彼等の為せることのために彼等を顛倒せるに非ずや¹。汝等はアルラーハが迷はしめたる者を導かんとするか。げに何人もアルラーハが迷はしめたる者のために道を示すこと能はず。彼等は己れが信ぜざる如く汝等も信ぜざらんことを望み、汝等が彼等と同類の者とならんことを望む。されば彼等がアルラーハのために其家を出づるまでは、断じて彼等の何者をも友とする勿れ。彼等若し帰信せずば、処を論ぜず捕へて

之を殺せ。彼等のうちより決して友人又は援助者を択ぶ勿れ。但し汝等と同盟せる民の中に避難せる者、並に其心に汝等又は己れの民と戦ふべからずと思ひ定め、来りて汝等に投ずる者を除く。若しアルラーハ欲したりせば、彼は汝等を制する力を彼等に與へ、彼等必ず汝等と戦ひしなり。されば彼等若し退きて戦はず、汝等に和平を提議する場合は、アルラーハは汝等が彼等に敵対することを許さず。汝等また他の或者が、汝等と和平を保たんことを望み、己れの民とも和平を保たんことを望みつつあるを見ん。されど彼等は己れの民が再び叛乱を起せば、忽ち之に傾倒し去るを常とす。されば彼等若し退かず、また和平を提議せず、汝と戦ふ手を停めずば、処を論ぜず捕へて之を殺せ。吾は彼等に対して明白なる權威を汝等に與ふ。

(1) 此の一段の対象はメヂナの『偽信者』に非ずして沙漠の諸部族たるべしと思はる。彼等のうちには一旦メヂナに來りて歸信しながら、歸りて後に再び不信に復り、またメッカの反回教聯盟に加はれる部族ありたり。此等の諸節は是くの如き諸部族に対して執るべき態度を示せるものなり。

過失¹によるに非ずば、信者は信者を殺すべからず。過失によつて信者を殺せる者は、信者奴隸一名を解放し、且被害者の家人に贖血金を納むべし。但し彼等が喜捨として之を施與する場合を除く。

若し被害者が汝等と敵対関係にある民に屬する信者なる場合は、信者奴隸一名の解放にて足る。若し彼が汝等と訂盟せる民に屬する者なる場合は、²その家人に贖血金を納めたる上、信者奴隸一名を解放すべし。その資力なき者は二個月齋戒せよ。これアルラーハが定めたる律例なり。アルラーハは能知者・聰明者なり。故意に信者を殺したる者は、何人たるを問はず其の応報は地獄なり。彼は永劫に其中に住まん。アルラーハは彼を怒り、彼を呪ひ、彼のために痛烈なる刑罰を準備す。

(1) 此の一段は前段に於て一旦歸信せるも去就常なき沙漠の諸部族に対して断乎たる態度に出づべしとの啓示ありしため、恐らく往々にして『処を論ぜず之を捕へて殺す』こと度にすぎたるために、之を緩和するために降されたるものと思はる。(2) 回教徒と結盟せる部族の者は、信者と同一に取扱はるるなり。

汝等信者よ、汝等アルラーハの道に出征する時は、必ず事情を明察せよ。汝等に和平を求むる者に向つて『汝等は信者に非ず』¹と言ふこと勿れ。汝等は現世の財宝を求むるか。²されどアルラーハの許には莫大なる戦利品あり。汝等も以前は不信者なりしが、アルラーハは恩寵を汝等に垂れたり。されば事情を明察せよ。アルラーハは汝等の為すことを知悉す。

(1) 諸部族との戦争に際し、敵が和平を求め、又は『吾等は信者なり』と言ふ者あるに拘らず、戦利品を獲んと欲に駆

られ、彼等の言に耳傾けず、之を屠り去る者ありしを以て之を戒むるものなり。(2) 戦利品を欲するかの意味。

信者のうち、如何なる傷痕もなくして落後する者と、財産と生命とを獻げてアルラーハの道に戦ふ者とは同じからず。アルラーハは財産と生命とを獻げて戦ふ者に、落後する者よりも高さ位階を授く。アルラーハは総ての信者に善賞を約す。されど善戦者には落後者よりも大なる報賞を賜ふべし¹。即ち高さ位階と宥恕と慈悲とを賜ふべし。アルラーハは宥恕者・大慈者なり²。

己れの魂を害ひつつある間に、天使来りて之を運び去る者¹に向ひ、天使は是く問ふべし『汝等は如何なる事情なりしぞ²』と。彼等は言はん『吾等は地上の弱者なり³』と。其時天使言ふべし『アルラーハの國土は廣し。汝等遷りて他に住むことを得たりしに非ずや』と。此等の者の住処は地獄なり。そは惡き行先なり⁴。但し弱者のうち、自ら避難の途を講ずる力なく、また往くべき道を示されざりし男女と兒童とを除く⁵。アルラーハは彼等を宥恕せん。アルラーハは赦免者・宥恕者なり⁶。アルラーハの道に移住する者は、地上に幾多の避難^{ムライガム}処と豊富なる糧餉とあるを知るべし。アルラーハ並に其の使者のために家郷を出で、然る後に死に襲はれたる者には、アルラーハ其の報

賞を保證す。アルラーハは宥恕者・大慈者なり。

(1) 此の一段はメッカに残留し、又は不信者の間に住む者に向つて移住を勧むるものなり。天使来りて運び去るとは死去すること。(2) 如何なる宗教を信じたるかの意味。(3) 迫害を受けて信仰に入るを得ざりきといふ意味。

汝等¹地上を往来する時、若し不信者に襲はるる惧あらば、礼拝を短縮するも罪に非ず。げに不信者は汝等の公然の敵なり。汝が彼等と偕にありて彼等のために礼拝を指導する時は、先づ彼等の一部を汝と共に起立せしめ、且彼等をして其の武器を執らしむべし。彼等叩首して一拜を了らば、彼等を後方に退かしめ、然る後に未だ礼拝せざる他の一部をして出でて汝と共に礼拝せしめ、且警戒して其の武器を執らしめよ。不信者は汝等をして其の武器と行李とを閑却せしめ、一擧汝等を猛襲せんことを望む。但し汝等降雨に累せられ又は病に罹れる時は、武器を放下するも罪なし。但し警戒を怠る勿れ。アルラーハは不信者のために耻づべき刑罰を備ふ。汝等礼拝を了らば、或は起立し、或は端坐し、或は側臥してアルラーハを念ぜよ。安全に復したる時は正規の礼拝を行へ。げに定刻の礼拝は信者に命ぜられる掟なり。汝等敵を追及することを懈る勿れ。汝等痛苦するも敵また汝等と等しく痛苦し、且汝等には彼等が有たざるアルラーハの希望あり。アルラーハは能知者

・聰明者なり^三

(1) 此の一段は征戦時に於ける礼拜に関する啓示にして、遷都五年初頭即ち西紀六二六年五月、マホメットが四百人の信者を率ゐてザータルリカー Zāt ar-Rīgā に出征せる時に降れるものとせらる。地上を往来すといふは、征戦のために馳驅することを意味す。

吾はアルラーハが汝に示せるものによつて人々を裁かしめんがために、眞実の經典を汝に降したり。されば汝は背信者の辯護人となること勿れ^二。アルラーハの宥恕を求めよ、アルラーハは宥恕者・大慈者なり^三。自ら欺く者のために辯護する勿れ。アルラーハは背信にして不義なる者を欣ばず^四。彼等は人に対して其身を隠し得るも、アルラーハに対して其身を隠すこと能はず。彼等夜陰に乗じて彼の悦ばざる言を弄する時も、彼は実に彼等と偕にあり。アルラーハは彼等の為すことを圍繞す^五。嗚呼、汝等現世に於て彼等を辯護せんとするも、復活の日に際して誰かアルラーハと争ひて彼等を辯護する者ぞ。また誰か彼等の守護者たらんとするものぞ^六。惡事を行ひ又は己れの魂を害ふ者は、誰だアルラーハの宥恕を乞へ。然らば彼はアルラーハの宥恕者・大慈者なるを知らん^七。罪を犯す者は唯だ己れに対して罪を犯すにすぎず。アルラーハは能知者・聰明者なり^八。過失又は

罪惡を犯して之を無辜の人に誣ゆる者は、讒誣と明白なる罪惡とを其身に負ふ者なり二三 若し汝に對するアルラーハの恩惠と慈悲となかりせば、彼等の一派は將に汝を迷はしめんとせり。されど彼等は唯だ己れを迷はしめたるのみにして、毫も汝を害することなかりき。アルラーハは經典と智慧とを汝に降し、汝が知らざりしことを汝に教へたり。汝に垂るるアルラーハの恩寵こそ甚大なれ二三 喜捨と善行とを勧め、また人々を和解せしむる者を除き、彼等の幾多の密議は竟に無益なり。而してアルラーハを欣ばしむるために之を為す者には、吾之に重賞を與へん二四 嚮導既に明示せられたる後に使者に背き、信者の道に非ざる道を歩む者は、吾之を彼が向へるところに向はしめ、吾之を地獄にて燔かん。そは惡き行先なり二五

(一) 此の一段はウホド戦後の啓示にして、メヂナの偽信者に対して取るべき態度を指示し、彼等と妥協すべからずとする精神を以て一貫す。而して此処に『背信者』として非難せらるるは、バイザー井以下の解釈によればタアマ・ビン・ウバイラク *Ta'ma Bin Ubairaq* と呼ぶメヂナの一偽信者なりとせらる。彼は鍵帷子一着を盗みて、之を一猶太人の家に隠匿し、事露顯すに及んで罪を該猶太人に歸せんとせるを、マホメットは公平に之を裁判せり。(2) 『彼等の一派』とはマホメットの前にタアマを弁護したる彼の一族並に彼等を支持せる偽信者を言ふ。

げにアルラーハは何者もを己れに配することを許さず。其他は己れの欲する者は之を赦す。苟く

もアルラーハに同位者を配する者は迷ふこと遼遠なるものなり云 彼等は彼を舍きて唯だ偶像^{イダリス}を拜し、唯だ背逆のサタンを拜す云¹ アルラーハはサタンを呪へり。而して彼曰く『吾必ず汝の僕等のうちより定められたる一部を拉し去らん云 吾必ず彼等を迷はしめ、其の諸欲を熾んならしめん。吾は彼等に命じて駱駝の耳を切らしめ、² 彼等に命じてアルラーハの創造を変へしむべし』と。さればアルラーハを舍きてサタンを愛護者とする者こそ、げに明白なる淪喪者なれ云³ サタンは彼等と約束を結び、彼等の諸欲を熾んならしめん。されど彼は唯だ欺かんがために約束するのみ云 此等の者の住処は地獄なり。彼等は之より遁れ出づるころなし云³ されど信じて善事を行ふ者は、吾之を河川流るる樂園に入らしめ、長久に其中に住ましめん。これアルラーハの眞実なる約束なり。誰かアルラーハより眞実に物言ふものぞ云³

(1) 原語イナース *Inas* は女性的なるもの意味ある故、之を『女神』と訳し得べし。アラビア人は天使を女性とし、またアルラート・アルウツザ・マナート等の諸神も女性なり。(2) 五頭の仔を生み、最後のものが牝なる時、其の牝駝の耳を切り、一切の労役より解放して野に放ち、之を神々への供犠のために養ふ。かかる牝駝をバヒーラ *Bahira* といふ。第五章第一〇三節参照。(3) 創造を変ふとは、人間を不具ならしむる意味とせらる。例へば奴隷の耳鼻を切断し、烙印を刻する等の如し。

此事は汝等の希望に副はず、また受経者の希望にも副はず。されど苟くも悪事を行ふ者は必ず之に對する応報を受くべく、アルラーハを舍きて如何なる愛護者も佑助者もなかるべし^三。されど男女を論ぜず苟くも善事を行ひ、且其人信者ならば、彼等必ず樂園に入り、毫も不当に遇せられざるべし^三。

(1) 『此事』とは死後の復活・最後審判を指す。『汝等』とは多神教徒を指す。

アルラーハに帰命するに勝る教を有てるものあるか。彼等は常に善事を行ひ、堅信者^{ハニール}アブラハムの教に従ふ者なり。げにアルラーハはアブラハムを友とせり^三。天地間の一切はアルラーハに屬し、アルラーハは萬物を圍繞す^三。

彼等は女子に関して汝の見解を求む。言へ『アルラーハは彼等に関する掟を汝等に示す。而して既に汝等に復誦せられたる經典の中に、汝等が之を娶らんと欲して而も所定の物を與へざる孤女に關する掟、無力なる兒童らに關する掟、並に汝等が孤兒らを公正に遇すべきことに関する掟あり。汝等が行ふ善事はアルラーハ常に之を知悉す^三。女子が其夫の虐待又は嫌忌を恐るるとも、若し夫

婦の間に和解成れば罪なし。和解は最も善し。人心は貧欲に傾けども汝等若し善事を行ひて其身を護らば、げにアルラーハは常に汝等の為すことを知悉す^三。汝等如何に努むるとも、汝等の諸妻を平等に遇するを得ざるべし。されど偏愛に傾きて、妻の一人を棄てられたる者の如く放置する勿れ。汝等若し和解して其身を護らば、げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり^三。設ひ夫婦相別るるとも、アルラーハは恩沢を垂れて各自を豊かならしむべし、アルラーハは厚施者・聰明者なり^三。

天地間の一切はアルラーハに屬す。吾は汝等以前の受經者並に汝等に、アルラーハを敬ふべきことを命じたり。設ひ汝等信ぜずとも、天地間の一切はアルラーハに屬す。アルラーハは富有者・可頌者なり^三。天地間の一切はアルラーハに屬す。アルラーハは守護者たるに足る^三。人々よ、彼若し欲しなば汝等を掃蕩し去りて別個の民を出現せしむべし。アルラーハは之を能くす^三。唯だ現世の報償をのみ望む者には、アルラーハの許に現世並に来世の報償あることを知らしめよ。アルラーハは常に聞き且見る^三。

汝等信者よ、設ひ汝等自身、又は両親、又は近親のために不利なりとも、而して当事者が富者な

りとも將又貧者なりとも、証人としてアルラーハの前に立つ時は、必ず公正を守れ。アルラーハは汝等よりも両者に近し。されば汝等私欲に従つて公正を逸する勿れ。汝等設ひ証言を歪曲し、又は立証を忌避するとも、アルラーハは汝等の為すことを知悉す^三

汝等信者よ、アルラーハ並に其の使者、彼が其の使者に降せる經典並に以前に降せる經典を信ぜよ。アルラーハと其の經典と其の使者と末日とを信ぜざる者は、迷ひ去ること遼遠なるものなり^三。一たび信じてまた信ぜず、遂に其の不信を増長する者は、アルラーハ決して之を赦さず、また導かず^三。されば偽信者に向つて、彼等のために痛刑あることを告知せよ^三。

信者を舍きて不信者を友とする者あり。彼等は彼等の手より榮譽を求むるか。されど榮譽はアルラーハに屬す^三。既に經典の中に、汝等若しアルラーハの休徴が信ぜられず、また嘲笑せらるるを聞かば、彼等が話題を轉ずるまでは彼等と同坐する勿れと誡められたり¹。汝等之を為さば汝等も彼等と同類なり。げにアルラーハは偽信者と不信者とを一齊に地獄に集めん^四。

【一】第六章第六八節。

汝等の敗戦を期待せる者が、アルラーハの佑助によりて汝等勝利を獲たる時、汝等に向つて言へ

り『吾等も汝等に協力せるに非ずや』と。されど不信者が有利なりし時は彼等に向つて言へり『吾等は汝等に勝れるに非ずや。吾等は信者に対して汝等を守れるに非ずや』と。復活の日に際し、アルラーハは汝等を裁判すべし。アルラーハは断じて信者に敵対する道を不信者のために開かず。げに偽信者はアルラーハを欺かんとするも、アルラーハは却つて彼等を欺く。彼等起つて礼拜する時は唯だ怠然として起つ。彼等の之を為すは他に誇示せんがためにして、殆どアルラーハを念ずることなし。彼等は彼此の間を徘徊す。彼等は一に非ず他に非ず。げにアルラーハが迷はしむる者には、何人も彼のために道を示すこと能はざるなり。

汝等信者よ、信者を舍きて不信者を友とする勿れ。汝等は己れに不利なる明証をアルラーハに與へんとするか。

げに偽信者は火獄の至深处に墮すべし。而して何人も彼のために佑助者を求めざるべし。但し懺悔して其身を修め、加護をアルラーハに求めて、アルラーハを唯一無二の信心の対象とする者を除く。此等の者は信者と偕にあり。而してアルラーハはやがて信者に重賞を賜ふべし。汝等若し感謝して信仰すれば、アルラーハ何すれど汝等を罰せんや。アルラーハは感恩者・能知者なり。アルラーハは公然悪語を放つことを欣ばず。但し不義を加へられたる者の場合を除く。アルラー

は能聞者・能知者なり^一

汝等若し陽に善事を行ひ、陰に善事を行ひ、且惡事を赦しなば、げにアルラーハは能聞者・能知者なり^二

アルラーハと其の使者とを信ぜず、且アルラーハと其の使者とを別個のものたらしめんとして『吾等は一を信するも他を信ぜず』と言ひ、彼此の間に一途を取らんとする者あり¹ 此等の者こそ真に不信者なれ。吾は不信者のために耻づべき刑罰を備ふ^三 されどアルラーハと其の使者とを信じ、之を別個のものとなせざる者は、吾やがて報賞を之に與へん。アルラーハは宥恕者・大慈者なり^三

(一) 猶太人を対象とす。アルラーハを信するもマホメットを信せず、一豫言者を信するも他豫言者を信ぜざること。マホメットの神使たることを信じ、且古蘭中に挙げられたる総ての豫言者を信するに非ずば不信者とせらる。次節以下も同じく猶太人を対象とするものなり。

受經者は汝が天上より彼等に經典を降さんことを望む。然り、彼等モーゼに向つて『神を明かに

吾等に示せ』と言へるは、之より大なる事を求めたるものなり。されど彼等は其の不義のために電雷に撃たれたり。而して其後明白なる休徴降れるに拘らず、彼等犢^{こぶし}を扱^とりて之を拜したり。而して吾は之をさへ赦して、明白なる權威をモーゼに與へたり¹。われ彼等と結約するに当り、シナイ山²を彼等の頭上に擡げ、『敬礼して門を入れ』と告げ³、また『安息日を破る勿れ』と告げて⁴、堅き約束を彼等より取れり⁵。然るに彼等此の約束を破り、アルラーハの休徴を信ぜず、妄りに豫言者を殺し、且『吾等の心は蔽はれたり』と言へり⁵。然らず、彼等信ぜざるが故に、アルラーハ彼等の心を封じたるなり。されば僅少の者を除きて、彼等は決して信ぜざるべし⁵。

(1) 第二章第五一―五六節参照。(2) 同上第六三節。(3) 同上第五八節。(4) 同上第六五節。(5) 同上第八八節。

彼等はイエスを信ぜず、マリアに対して甚だしき讒誣を敢てし¹。また『吾等はアルラーハの使者にしてメシアなるマリアの子イエスを殺したり』と言へり。されど彼等はイエスを殺せるに非ず、また之を十字架に釘けたるに非ず、唯だ彼等の目に爾く映ぜしめられたるのみ²。げにイエスについて論ずる者は皆な之を疑問とす。彼等は之に関する知識なく、唯だ揣摩臆測するのみ。彼等は決して彼を殺せるに非ず³。然らず、アルラーハは彼を己れの許に昇らしめたるなり。アルラーハ

は偉力者・聰明者なり云 而してイエスの死ぬる以前に、一人の受經者も彼を信ぜざりき。復活の日に當りて、彼は彼等に関する証人たるべし云

(1) マリアが私通によりてイエスを産めりとする事。 (2) 『そは彼等に然る如く見えしめられたり』といふ原文は種々に解釈せらる、予は『或者がイエスの如く彼等に見えしめられたり』と解したり。即ちイエスに酷似せる他の者を磔刑に処して猶太人の目を欺ける意味なり。そはマホメットの獨創に非ず、初代基督教徒の間に行はれたる傳承にして、イエスに代りて十字架に死せるは誰なるかについても彼等の間に種々なる指名あり。第三章第五五・五六節参照。

猶太人の或者が不義を行へるため、また彼等が多くの人々をアルラーハの道より背き去らしめたるため、吾は曾て彼等に許されたる佳き食品を彼等に禁じたり云 そはまた彼等が禁を侵して高利を貪り、また妄りに民の財産を併呑するためなり。吾は彼等のうちの不信者のために痛刑を準備せり云 されど彼等のうちの知識堅固なる者、並に汝に降されたるもの及び汝以前に降されたるものを信じ、禮拜を守り、捐課を納め、並にアルラーハと末日とを信する者は、吾之に重賞を與へん云

げに吾はノア並に彼以後の諸豫言者に默示せる如く汝に默示せり。吾はまたアブラハム、イシマ

エル、イサク、ヤコブ並に諸支族に默示し、イエス、ヨブ、ヨナ、アロン並にソロモンに默示し、
ダビデには詩篇を興へたり^三 吾は汝に告げたる諸使者並に未だ汝に告げたる諸使者に默示せり。
而してモーゼにはアルラーハ親ら物言へり^四 諸使者が吉報と警告とを齎して遣はさるるは、彼等
の来れる後にアルラーハについて論議せざらしめんがためなり。アルラーハは偉力者・聰明者な
り^五 アルラーハは彼が汝に降せるものについて親ら証人となる。彼は己れの知識を以て之を降せ
るものにして、諸天使その証人たり。而してアルラーハは証人として缺くところなし^六

げに信ぜずして人をアルラーハの道より迷ひ去らしむる者は、迷へること甚だしき者なり^七 信
ぜずして不義を行ふ者は、アルラーハ断じて之を赦さず、また如何なる道にも導かず^八 唯だ地獄
への道に導く。彼等永劫に其中に住まん。そはアルラーハには易々たる事なり^九

人々よ、使者は汝等の主よりの眞理を齎して汝等に来れるなり。されば信ぜよ、信ずることは汝
等のために善し。設ひ汝等信ぜずとも——天地間の一切はアルラーハに属す。アルラーハは能知者・

聰明者なり^{一〇}

汝等受経者よ、汝等己れの教に於て矩を越ゆる勿れ^一。眞実の外はアルラーハについて語る勿れ。

マリアの子、メシア・イエスはアルラーハの使者なり、彼がマリアに傳へたる言ことばなり、彼より出でたる靈なり。さればアルラーハと其の使者を信ぜよ。『三位』を言ふこと勿れ²。之を止むることは汝等のために最も善し。アルラーハは唯一の神なり。栄光彼の上にあれ、彼に何ぞ子あるべけんや。天地間の一切はアルラーハに属す。アルラーハは守護者として缺くところなし^三。メシアは決してアルラーハの僕たることを耻ぢず、彼に咫尺する諸天使もまた然り。彼に事ふることを耻ぢる者は、彼一齊に之を己れの許に集むべし^三。信じて善事を行ふ者は、彼之に存分なる報賞を與ふべし。耻ぢて自ら衿る者は、彼之に痛刑を加ふべし^三。彼等はアルラーハ以外に如何なる愛護者も佑助者もなきことを知らん^三。

(1) この一段は基督教徒を対象とせるものにして、越矩とは基督教徒がイエスを神とすることを言ふ。(2) 東方の基督教にてはイエスとマリヤとエホバとを共に神として崇めたり。此処にての『三位』は父と子と聖靈との三位一体に非ず、東方基督教の叙上の信仰を指せるものとすべし。第五章第七三節、同上二一六節参照。

人々よ、げに主よりの明証既に汝等に来れるなり。吾は明かなる光を汝明等に降したり^三。さればアルラーハを信じて之を護持する者は、彼即ち慈悲と恩寵とを之に垂れ、直き道によつて之を己

れの許に導かん

彼等は汝に教訓を求む。言へ『アルラーハは、汝等のうち直系相続者を遺さずして死せる者に関する教訓を與ふ。人若し死して実子なく、唯だ一名の姉妹ある場合は、遺産の半は彼女に歸す。彼女に実子なき場合は、彼が彼女の相続者たるべし。若し彼に二名の姉妹ある場合は、遺産の三分の二が彼女等に歸す。若し多数の兄弟姉妹ある場合は、男子は女子二名の得分を受く。アルラーハは汝等が迷はざらんために之を明示す。アルラーハは一切を知る』と

(1) 此の一節は本章第一二節の相続に関する掟の補充なり。第一二節に於ては母方の兄弟姉妹の相続権を定め、本節に於て父方の兄弟姉妹の相続権を定む。

第五 食卓 章

メヂナ啓示

第一二節にイエスの諸弟子が、イエスに向つて、天上より食卓の降らんことを求めたる経緯を述ぶるによつて食卓章 Al-Ma'idah と名づけらる。ロッドウエルを初め、此章を以て古蘭の最終啓示とする学者多し。其故は本章第三節に『今日吾は汝等のために其教を完うし、汝等に対する吾が恩寵を完うし、汝等の教としてイスラームを選びたり』とあるによる。此の啓示はマホメットの謂はゆる『告別参詣』に際して降されたるものにして、マホメットは此の参詣よりメヂナに帰りて幾くもなく長逝せり。従つて此の一節並に他の二節はネルデケが指摘せる如く最終の啓示中に属すべきも、本章の自餘の諸節は、遷都四年より同七年の間に於けるものとすべく、且若干其以前並に其以後の啓示をも含む。主として宗教的儀礼並に律法の嚴守を力説し、前章と同じく猶太人を攻撃するも、本章に於ては一層多く基督教に言及し、基督神子説・三位一体説を痛撃す。イスラームを独自の宗教として確立する過程中的の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝等信者よ、汝等の約束を守れ。既に汝等に復誦せられたるものを除き¹、汝等家畜を食ふことを

許さる。但し禁忌中に狩獵することを禁ず²。アルラーハは己れの欲することを定む¹

(1) 既に古蘭に於て禁ぜられたる食品。(2) 禁忌 *Haram* とは参詣に際し、純白の綿布二片より成る禁衣を纏ひ居る間を言ふ。狩獵を許さざることとは同時に野獸野禽の肉を禁ずることを意味す。

汝等信者よ、アルラーハの標章を犯す勿れ¹、聖月を犯す勿れ²、犠牲を犯す勿れ²、飾環を犯す勿れ³、主の恩寵と喜悅とを求めて聖殿に詣づる者を犯す勿れ。禁忌終れば狩獵するも可なり。曾て汝等を聖殿より阻める者を怨みて、敵意を彼等に抱く勿れ⁴。むしろ相助けて善事を行ひ、神を敬へ。相助けて罪惡と背逆とを犯す勿れ。アルラーハを敬へ。げにアルラーハの懲罰は嚴厲なりニ

(1) 『アルラーハの標章』の原語は *Shair-Allah* にしり。 *Shair* は *Shairah* の複数なり。此語はアルラーハの啓示による一切の宗教的儀禮、又はアルラーハの宗教其者、又は参詣に關する一切の儀禮並に儀禮の行はるる場処を意味すとせらる。 (2) 『犠牲』の原語は *Had-y* にしり。 *Had-yah* の複数。此語は『追はるるもの』の意味にて、メッカに追ひやられて犠牲に供へらるる動物の意味なり。 (3) 『飾環』の原語は *Qalaid* (*Qiladah* の複数) にて、首輪の意味なり。供犠のために首輪にて飾れる駱駝を指す。神前に供へらるる諸動物のうち、駱駝のみ首輪にて飾らる。 (4) メッカ市民を指す。此言によつて此の啓示がマホメットのメッカ征服以後のものなるを知る。

死物、血、豚肉、アルラーハ以外の名號が唱へられたるもの、絞首せられたるもの、撃死せるもの、踏死せるもの、擣死せるもの、野獸が食ひ剩せるもの——汝等自ら之を殺せるものを除く——並に石壇に供へられしもの、籤矢を以て分配せるもの、汝等此等の物を食ふことを禁ぜらる。いま不信者は汝等の教を滅ぼすことを断念せり。されば彼等を恐れず吾を恐れよ。今日吾は汝等のために其教を完うし、汝等に対する吾が恩寵を完うし、汝等の教としてイスラームを選びたり。但し罪を犯す意図なく、飢餓に迫られて止むなき者には、アルラーハは宥恕者・大慈者なり^三。彼等は己れに許さるるものについて汝に問ふ。言へ『種々なる佳きもの汝等に許さる。汝等野獸野禽を訓練すること獵犬の如くし、アルラーハが汝等に教へたることを彼等に教へたる場合は、彼等が汝等のために捕へたるものを食ふことを許さる。獲物の上にアルラーハの名を唱へてアルラーハを敬へ。アルラーハの清算は神速なり』と^四。

今日種々なる佳きもの汝等に許さる。受經者の食物は汝等に許され、汝等の食物は彼等に許さる。^一また一切の貞潔なる信者の女子並に貞潔なる受經者の女子は、汝等之に婚資を與へ、私通するに非ずまた情婦とするに非ず、潔く之と同棲するに於ては、汝等之を娶ることを許さる。而して苟くも信仰を拒む者は、その為せることは空無に歸し、来世に於ては必ず淪喪者とならん^五。

(1) 此の一節は受経者の女子との結婚を許すものにして、明かにマホメットが未だ猶太人と決裂せざる以前の啓示なれば、メヂナ初期のものに属すべし。

汝等信者よ、汝等起つて礼拜する時は、汝等の面おもてと汝等の手を肘まで洗ひ、軽く頭かうべを撫で、足くろみを踝まで洗へ。汝等若し大穢にある時は全身を淨めよ。また汝等病に罹り、又は旅中にあり、又は汝等のうち廁より来れる者あり、又は女子と交はれる者ありて、而も水を得難き場合には、乾きて清潔なる砂をとり、之を以て汝等の面と手とを撫でよ。アルラーハは汝等に難きを求めず、唯だ汝等を潔め、汝等への恩寵を完うせんとするのみ。汝等恐らく感謝せん六

汝等1に垂れたるアルラーハの恩寵を念ひ、彼が汝等と結べる約束を念へ。其時汝等は『吾等は聽き且従はん』と言へるなり。アルラーハは人が胸中に懐くものを知る七

(1) 此の一節は猶太人を対象とせるものにして前後と連絡なし、ベルは之を以てもと第一六節の末尾なりしならんと推測せり。

汝等信者よ、汝等証人としてアルラーハの前に立つ時は、必ず公正を守れ。人々に対する怨恨のため不正に陥ること勿れ。常に公正なれ。是くするは敬虔に近し。アルラーハを敬へ。アルラーハは汝等の為すことを知悉すハ。信じて善事を行ふ者は、アルラーハ之に重賞を約束すハ。されど信ぜずして吾が休徴を虚偽なりとする者は、獄火の徒なり云

汝等信者よ、汝等に垂れたるアルラーハの恩寵を念へ。人々汝等に向つて其手を伸べんとせる時、アルラーハ其手を抑止せり。¹アルラーハを敬へ。信者をして専らアルラーハに頼らしめよ云

(1) 手を伸ぶるとは打撃を加へんとすることなり。不信者が屢々信者を襲ひ且マホメットの生命に危害を加へんとせしもその都度失敗に歸したるを言ふ。

アルラーハはイスラエルの兒等と約束を結びたり。而して吾は彼等のうちより十二首領を挙げたり。其時アルラーハ曰く『げに吾は汝等と偕にあり。汝等若し礼拜を守り、捐課を納め、吾が諸使者を信じて之を助け、無利子にてアルラーハの募債に応じなば、われ必ず汝等の諸惡を銷殞せしめ、河川流るる樂園に入らしめん。これより後に不信に陥る者は、直き道より迷ひ去る者なり』と三されど彼等此の約束を破れるが故に、吾は彼等を呪咀し、其心を頑冥ならしめたり。彼等は經典中

の字句を轉倒し、與へられたる訓誡の一部を忘却せり。僅少の者を除けば、汝は彼等が不斷に背信を事とするを見ん。されど彼等を赦して之を看過せよ。アルラーハは善事を行ふ者を欣ぶ^三 吾はまた『吾等は基督教徒なり』と言ふ者とも結約せり。されど彼等もまた與へられたる教誡の一部を忘却せるが故に、吾は復活の目まで不和と怨恨とを彼等の間に助長すべし。やがてアルラーハは彼等に向つて其の為せることを告知せん^四 汝等受經者よ、汝等が隠蔽する經典中の多くのことを闡明し、且多くのことを癡棄するために、わが使者汝等に至れるなり。げにアルラーハよりの光明と明瞭なる經典とが、いま汝等に至れるなり^五 アルラーハは之によつて己れの欲する者を平安の道に導き、赦して之を黒闇より光明に入らしめ、之を直き道に導く^六

(1) ベルは本章第七節を以て此節に続くものとなせり。

アルラーハはマリアの子メシアなりと言ふ者は断じて信ぜざる者なり。言へ『アルラーハ若しマリアの子メシア、其母、並に地上一切の者を亡ぼさんとすれば、誰か些かにても彼を左右し得るものぞ。天地と天地間の一切のものとはアルラーハに属し、彼は己れの欲するものを創造す。アルラーハはハ一切を支配す』とモ 猶太人並に基督教徒曰く『吾等はアルラーハの子、その寵兒なり』と。

言へ『然らば何故に彼は汝等の罪惡を罰するか。然らず、汝等は彼が創造せる人間にすぎず。彼は己れの欲する者を赦し、欲する者を罰す。天地の權威と天地間の一切とはアルラーハに属し、一切は彼に歸向す』と云 汝等受經者よ、使者中断¹の時に當り、わが使者は眞理を汝等に明示するため遣はされたり。これ汝等をして『吾等には吉報傳達者も警告者も来らず』¹と言はしめざらんがためなり。いま吉報傳達者並に警告者が汝等に来れるなり。げにアルラーハは萬事を能くす云

(1) 『中断』の原語は *Fatra*。豫言者出現の中断にして、イエスよりマホメットに至る六百年間は、即ち使者中断の期間なり。マホメットが古蘭第九六章の啓示ありし後、暫く天啓に接せざりし時あり、此の期間をもまた *Fatra* と呼ぶ。

モーゼが其民に向つて是く言へる時を念へ『吾民よ、汝等に賜へるアルラーハの恩寵を念へ。彼は諸豫言者を汝等の間より挙げ、汝等を王者たらしめ、三界の何者にも賜はざりしもの¹を汝等に賜へり言 吾民よ、アルラーハが汝等のものと定めたる聖地に往け。汝等踵を回して退くこと勿れ。然らずば汝等は淪喪者とならん』と云 彼等曰く『モーゼよ、げに彼処には巨大なる民あり。げに彼等出で去らずば吾等は入るを得ず。彼等去りなば吾等入るべし』²と云 アルラーハを敬ひ、其の恩寵に浴せる兩人ありて曰く『門を入りて彼等に向へ。入らば汝等必ず勝たん。汝等若し信者なら

ばアルラーハに頼れ』と云 彼等曰く『モーゼよ、げに彼等が彼処に留まる間は、吾等決して入るを得ず。汝と汝の主とは往きて戦へ。げに吾等は靜かに此処に坐せん』と云 彼曰く『主よ、げに吾は己れ自身と兄弟との外は、何人をも左右する力なし。されば吾等と不義の民との間を分明ならしめよ』と云 彼曰く『可し、此國は四十年の間彼等に閉ざされ、彼等は其間地上を彷徨せん。汝は不義の民のために心を勞する勿れ』と云

(1) 紅海を分ち、雲を以て導き、マナと鶉とを天上より降せることなどを指す。(2) 旧約民数記略第一三章第三二節。

同上第一四章第一一四節参照、(3) カレブとヨシユア、同上第一四章第六一九節参照。

アダムの二兒の物語を眞実に彼等に語れ¹。彼等献祭せる時、一人のは納れられ、他のは納れられざりき。一人曰く『吾は必ず汝を殺さん』と。他は曰く『アルラーハは唯だ其身を護る者の物を納るモ 設ひ汝は吾を殺すために其手を伸ぶるとも、吾は汝を殺すために吾手を伸べざるべし。吾は三界の主アルラーハを畏るニ げに吾は汝が吾に対する罪と汝が以前に犯せる罪とを負ひて、火獄の徒に加はらんことを望む。これ惡事を行ふ者の応報なり』と云 されど彼の心は彼をして其の兄弟を殺すことを快からしめたれば、遂に之を殺して淪喪者の一人となれり云 其時アルラーハは一

羽の鴉を遣はし、地に穴を掘らしめ、如何に其の兄弟の屍骸を隠すべきかを彼に示さしめたり。彼曰く『嗚呼、吾が兄弟の屍骸を匿すために、吾は此鴉の如くなるを得ざるか』と。かくて彼は悔恨者の一人となれり。此故に吾はイスラエルの兒等のために掟を定め、殺人の罪を犯せる者又は地上に悪を作せる者に非ざる限り、一人を殺すは萬民を殺すが如く、一人を生かすは萬民を生かすが如しとなせるなり。而して吾が諸使者は幾たびか明証を齎して彼等に至りしが、其後に於ても彼等は多く地上に於て背逆を行へり。

(1) カインとアベルの物語なり。旧約創世記第四章第三—一二節参照。

アルラーハ並に其の使者に対して戦ひ、地上を攪乱せんと努むる者の応報は、殺戮か又は磔刑か又は手足反断か又は放逐の外にあるべからず。彼等に現世に於て屈辱を嘗め、末世に於ては重刑を受けん。但し汝等が彼等を制圧せる以前に懺悔せる者を除く。さればアルラーハの宥恕者・大慈者なるを知れ。

(1) 猶太人を対象とする此の一段は、遷都七年初頭に行はれたる猶太人カイベル *Khibar* 族討伐直前のものと思はる。

汝等信者よ、アルラーハを敬ひ、彼に親近せんことを求め、彼のために戦へ。然らば汝等榮ゆべし。信ぜざる者は設ひ地上一切のもの乃至之に倍するものが彼等の所有にして、之を以て復活の日の懲罰を贖はんとするも、断じて受納せらるることなし。彼等のためには唯だ痛烈なる刑罰あるのみ。彼等は火獄を出でんと望むべし。されど彼等は之を出づる能はず。げに彼等には永劫の罰あらん。

盜賊は男女を問はず其手を切断せよ。これ彼等の所行に対する応報にして、アルラーハの懲罰なり。アルラーハは偉力者・聰明者なり。されど惡事を行へる後に懺悔して其身を修むる者は、アルラーハはその懺悔を允さん。アルラーハは宥恕者・大慈者なり。汝は天地の權威がアルラーハに属するを知らざるか。彼は己れの欲する者を罰し、欲する者を赦す。アルラーハは全能なり。

汝使者よ、^{マホノット}競ふて不信に趨る者のために汝の心を勞する勿れ。彼等は口に信すと稱へて心に之を信ぜざるなり。また猶太人は、好んで虚偽に聽き、汝に來らざる人々の言に聽く。彼等は經典の字句を顛倒し、「若し之が汝等に與へられたるものならば即ち受けよ。若し汝等に與へられたるものな

らずば即ち要慎せよ²』と言ふ。アルラーハが迷はしめんとする者あれば、汝は彼のためにアルラー
に對して何事をも能くせず。此等はアルラーハが其心を潔むるを欲せざる者なり。彼等のためには
現世に於て屈辱、来世に於て極刑あるのみ¹。彼等は好んで虚偽に聽き、禁ぜられたるものを貪る。³
彼等若し汝に来らば、彼等を裁判するか、又は彼等より遠離せよ。汝若し彼等より遠離すれば、彼
等は決して汝を害する能はず。また若し裁判するならば公平に裁け。アルラーハは公平に行ふ者を
欣ぶ⁴。されどアルラーハの裁決を載せたる律法を所持する彼等が、如何にして汝を裁判者とすべ
きぞ⁴。彼等は背き去らん。彼等は信者に非ざるなり¹。

(1) マホメットに出入せざりし猶太人のラビを指せるものなるべし。(2) マホメットの言が、ラビによつて歪曲せられ
たる經典の章句と一致しなば之を承認せよ、然らば否認せよとの意味。(3) 高利・收賄等のことを指す。(4) 己れの
所持する經典にも従はざる猶太人が、如何にしてマホメットの判決を承認すべけんやといふ意味。先是マホメットが天啓に
よつてメヂナの最高裁判権を宣言せるも、猶太人が之に對して服せざりしを見るべし。

げに吾は嚮導と光明とを藏する律法トウラトを降したり。而してアルラーハに歸命せる諸豫言者は、之に
よつて猶太人を裁きたり。而して『人々を恐るる勿れ、唯だ吾を恐れよ。些少の代價にて吾が休徵

を賣る勿れ』といふアルラーハの經典の章句を守れと命ぜられ、且その証人たりし學者並に司祭らも亦然かせり¹。苟くもアルラーハの降せるものによらずして裁判する者は悉く不信者なり²。而して吾は律法の中に彼等のために是く定めたり。即ち生命には生命、目には目、鼻には鼻、耳には耳、齒には齒、傷害には賠償、而して賠償を施捨する者は其の諸惡を銷殞せしめらる²。苟くもアルラーハの降せるものによらずして裁く者は悉く不義者なり³。

(一)此の一節の解釈はペルに從ふ。多くの學者は『アルラーハの經典の一部 Min Kitab-illah』を以て『律法 Taurot, Torah』を指すものとし、『人々を恐るる勿れ云々』は、本節の啓示に際して更めて猶太人に対して爲されたる訓誡となす。されど予は經典の『一部 Min』を以て、此の一句を指せるものとするべしの解釈を最も穩當なりと信ず。(2)

旧約出埃及記第二二章第二三—二五節、同上申命記第二四章第一九—二二節参照。

吾はマリアの子イエスを遣はし、彼以前に降されたる律法を確証するため、¹彼等の跡を踏ましめ、その以前にありし律法を確証するため、嚮導と光明とを藏する福音^{イシヤ}を彼に與へたり。そは其身を護る者への嚮導にして且訓誡なり⁴。されば福音の信者をしてアルラーハが其中に示せるものによつて裁かしめよ。苟くもアルラーハが降せるものによらずして裁く者は悉く作惡者なり⁵。

【1】イエス以前の諸豫言者。

吾は以前にありし一切の經典を確証し、且之を保障するため、眞実の經典を汝に降したり。さればアルラーハが降せるものによつて彼等を裁け。彼等の私欲に従ひて、汝に賜はれる眞理に背く勿れ。吾は汝等各自のために一個の教律と一個の道法とを定めたり。アルラーハ若し欲したりせば、汝等を挙げて一個の教團たらしめたりしなり。之を為さざりしは、彼が汝等に賜へるものによつて汝等を試みんがためなり。されば汝等競ひて善事を行へ、汝等は皆なアルラーハに歸る。其時彼は汝等に向つて汝等が相諍へることを告知せん²。さればアルラーハの降せるものによつて彼等を裁き、決して彼等の私欲に従ふ勿れ。彼等は汝を誘惑して、アルラーハが汝に降せるものの一部に背かしめんとするが故に要慎せよ。彼等若し背き去らば、そはアルラーハが彼等の犯せる罪の一部を懲らさんとするがためなりと知れ。げに彼等の多くは作惡者なり³。彼等の求むるは無明時代の裁判⁴なるか。されど篤信者にとりてアルラーハに勝る裁判者あるか⁵。

(1) 『汝等』とは猶太教徒・基督教徒・回教徒を意味し、三教それぞれ一個独立の宗教なるを示す。(2) 最後審判に於てアルラーハが三教のいづれが眞理に従へるかを彼等に告知すべしとの意味。(3) アルラーハの定めたる掟即ち古蘭によ

る裁判を忌避するならばの意味。クライザ・ナツィール両猶太族はマホメットに対して、彼等は彼の裁判を欲せずとの意思を表示せり、(4)アラビア在来の慣習法を言ふ。猶太人は回教律よりも之を擇べるなり。

汝等¹信者よ、猶太人並に基督教徒を友とする勿れ。彼等は互に友人なり。何人にもあれ彼等を友とする者は即ち彼等の同類なり、アルラーハは不義の民を導かず。汝はかの心に病ある者が彼等に走り往きて『吾等は不運の回り来らんことを惧る』と言ふを見ん。されどアルラーハは親ら勝利を與へ、又は懲罰を加ふ。彼等は其の胸中に秘かに懐けることのために懊惱するに至るべし。而して信ずる者は其時に言はん『汝等の協力者なることを神かけて嚴かに誓ひたるは此等の者なりしか』と。彼等の所行は空無に歸し、彼等は必ず淪喪者となるべし。

(1)此の一段は恐らくウホド敗戦後の啓示にして、メヂナ市民中に回教の前途に杞憂を抱き、猶太人及び基督教徒と相結んでメッカに當るべしとせる者あり、其等の偽信者を対象とせるものなり。

汝等信者よ、若し汝等のうち其教に背く者あらば、アルラーハは別に一個の民を擧げん。彼は彼等を愛し、彼等は彼を愛し、信者には謙遜に、不信者には剛毅にして、能くアルラーハの道に善戦

し、如何なる非難者の非難をも恐れざる民なるべし。これアルラーハが己れの欲する者に賜ふ恩寵なり。アルラーハは抱擁者・能知者なり。げに汝等の友はアルラーハ並に其の使者、及び礼拜を守り、捐課を納め、叩首して拜する信者なり。アルラーハ並に其の使者、及び信者を友とする者——げにアルラーハの味方こそ勝利者なれ。

汝等信者よ、汝等以前に經典を賜はりたる者並に不信者の間に友を求むる勿れ。彼等は汝等の教を嘲弄笑罵の的となす。汝等若し信者ならばアルラーハを敬へ。汝等が人を礼拜に喚ぶ時、彼等は之を嘲弄笑罵の的となす。これ彼等は思慮なき民なるが故なり。言へ『受經者よ、汝等が吾等を非難するは、唯だ吾等がアルラーハを信じ、吾等に降されたるもの並に以前に降されたるものを信するが故なるか、而して汝等の多くは作惡者なるが故なるか』と。言へ『アルラーハより受くべき応報について之よりも惡しきことを汝等に告ぐべきか。アルラーハが怒りて之を呪へる者、アルラーハが猿及び豚となせる者、またターゲットに事ふる者、此等こそ最惡の境涯にあり、直き道より遠く迷ひ去れる者なれ』と。言へ『彼等汝等に来れば即ち曰く『吾等は信ず』と。実は来る時も信ぜず、去りても信ぜざるなり。アルラーハは彼等の隠すことを熟知す。彼等の多くは競ひて罪惡と

背逆とに奔り、禁ぜられたるものを貧る。げに彼等の為すことは悪しき。何故に学者と司祭とは、彼等が罪惡を口にし、禁ぜられたるものを貧ることを禁ぜざるか。げに彼等の行ふことは悪しき。

猶太人曰く『アルラーハの手は縛られたり¹』と。彼等の手こそ縛らるべけれ。また其の言へることのために彼等こそ呪はるべけれ。然らず、アルラーハの双手は開けり。彼は己れの欲する者に惜みなく賜ふ。げに主が汝に降せるものは、彼等の多くをして其の傲慢と不信とを増長せしむ。されど吾が彼等の間に投じたる敵意と怨恨とは、実に復活の日まで続くべし²。彼等戦はんとして火を燃やす毎に、アルラーハは之を吹き消さん。彼等は地上を攪乱せんと努む。されどアルラーハは攪乱者を欣ばず。されど受経者にして若し信じて其身を護らば、われ必ず彼等の諸惡を銷殞せしめ、之を歡喜の樂園に入らしめん。彼等若し其主より降されたる律法と福音とを守りなば、彼等の頭上又は脚下より、必ず豊かに糧餉を賜はらん。彼等のうちには正義を行はんとする一團あり。されど多くの者の行ふことは悪しき。

(1) 手を縛るとは吝嗇の意味。マホメットが常に喜捨を奨むるを嘲りて言へるなるべし。蓋し第三章第一八〇節の『アルラーハは貧しく吾等は富む』と同一義なり。(2) 本章第一四節参照。

汝使者よ、主が汝に降せるものを宣べ傳へよ。之を為さずば汝は主の使命を果たさざる者なり。
アルラーハは人々に対して汝を護る。アルラーハは信ぜざる民を導かず

言へ『汝等受經者よ、汝等若し律法と福音と、並に其主より汝等に降されたるものを守らずば、
汝等は據つて立つところなきものなり』と。されど主が汝に降せるものは、必ず彼等の多くをして
其の傲慢と不信とを増長せしむべし。されば不信の民について心を勞する勿れ

げに信者たると猶太人たると基督教徒たるとサービ教徒たると問はず、苟くもアルラーハと末日
とを信じて善事を行ふ者は、畏怖なく憂懼なからん

吾は曾てイスラエルの兒等と結約し、諸使者を彼等に遣はしたり。然るに使者が彼等の好まざる
ものを齎して彼等に至る毎に、彼等或は之を虚言者と呼び、或は之を殺したりき。而して彼等はそ
のため如何なる禍をも招ぐまじと想へり。彼等は盲者・聾者なりき。其後アルラーハは彼等の懺
悔を允したれど、彼等の多くはまた盲者・聾者となれり。アルラーハは彼等の為すことを照覽す

『アルラーハはマリアの子メシアなり』と言ふ者は、断じて信ぜざる者なり。メシアは言へ
り『イスラエルの兒等よ、吾主にして汝等の主なるアルラーハに事へよ』と。苟くもアルラーハに

何者かを配する者は、アルラーハは樂園を其者に閉ざさん。彼の住む処は火獄なり。而して不義者には如何なる佑助者もなかるべし。

『アルラーハは三位の一なり』と言ふ者は、断じて信ぜざる者なり。唯一の神の外に神なし。彼等若し其言を止めずば、彼等のうちの信ぜざる者は痛刑を受けん。彼等はアルラーハに懺悔して其の宥恕を求めんとせざるか。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり。

マリアの子メシアは使者の一人に外ならず。彼の以前にも多くの使者ありて逝けり。彼の母は誠実なる女子なりき。而して母子兩人とも食物を攝れり。見よ、吾は如何に彼等に種々なる休徴を明示するかを。また見よ、如何に彼等が背き去るかを。

言へ『汝等アルラーハを舍きて毫も汝等の利害を左右し得ざる者に事へんとするか。アルラーハは能聞者・能知者なり』と。言へ『汝等受経者よ、眞実ならざることを語りて汝等の教の矩を越ゆる勿れ。以前に迷ひて多くの人々を誤り、現に直き道より迷ひ去れる民の欲求に従ふ勿れ』と。

イスラエルの兒等の信ぜざりし者は、ダビデ及びマリアの子イエスの舌にて呪はれたり。そは彼等背きて掟を破れるが故なり。彼等は悪事を行ひて互に相戒しむることなかりき。彼等の為せる

ことの如何に悪かりしぞか。いま汝は彼等の多くが不信者を友とするを見る。げに彼等が己れのた
めに豫め送るものは禍なるかな。アルラーハは彼等を憤る。彼等は永劫の懲罰の中にあらん。彼
等若しアルラーハを信じ、^{マホメット}豫言者並に彼に降されたるものを信じなば、彼等を友とするが如きこと
なかるべし。されど彼等の多くは作悪者なり。

げに汝は、萬民のうち最も激しく信者を敵視する者は、猶太人並に多神教徒なるを知る。また汝
等は『吾等は基督教徒なり』と言ふ者が、信者と情愛最も近きを知る。これ彼等の間に説教者と修
道者とあり、且自ら高しとせざるが故なり。彼等は使者に降されたるものを聽きて其の眞理なる
ことを承認し、其目に涙の滂沱たるを見る。彼等曰く『吾等は信ず。されば吾等を証人のうちに書
き留めよ。吾等如何んぞアルラーハを信じ、吾等に降されたるものを信じて、アルラーハが義し
き人々と共に吾等をも樂園に入らしめんことを切願せざるを得んや』と。げにアルラーハは彼等
の祈に応へ、彼等を河川流るる樂園に入らしめ、長久に其中に住ましめん。これ善事を行ふ者への
報賞なり。されど信ぜずして吾が休徴を虚偽なりと言ふ者は、火獄の徒なり。

汝等信者よ、アルラーハが汝等に許せる佳きものを食ふことを禁ずる勿れ。また掟を破る勿れ。
アルラーハは侵犯者を欣ばず。アルラーハが汝等に許せる佳きものを食へ。汝等若し信者ならば
アルラーハを敬へ。

アルラーハは汝等の宣誓に於ける空しき言葉に対して汝等を責めず、唯だ汝等が誓へる約束に対して汝等の責を問ふ。破約を贖ふためには、汝等が己れの家人を養ふ通常の食事を十名の貧者に給するか、又は之に衣服を給するか、然らば奴隸一名を解放せよ。これ汝等が誓へる約束の賠償なり。汝等の誓約を慎め。アルラーハは是くの如く其の休徴を汝等に明示す。汝等恐らく感謝せん。

汝等信者よ、酒と賭博と偶像と籤矢とは穢行なり、サタンの業わざなり。汝等栄えんがためには之を避けよ¹。サタンは酒と賭博とによつて唯だ汝等の間に敵意と怨恨とを植え、汝等がアルラーハを念じ、礼拝を行ふを妨げんとするのみ。さらば汝等之を慎むか。アルラーハに従ひ、使者に従ひ、而して自ら慎め。設ひ汝等背くとも、吾が使者の責は唯だ明白に声明することを知れ。

(1) 酒と賭博とは第二章第二一九節に於ては節制を命ぜられたるにすぎざりしが、此の啓示によつて嚴禁せられたり。傳

承によれば、此の啓示降れる時、一傳達者がメヂナの町々に此事を触れ廻り、之を聴きたる信者の家々が皆た酒麴を割り棄てたるため、メヂナの街頭に酒川流れたりと言はる。

信じて善事を行ふ者は、曾て食へる物について罪なし。さればアルラーハを敬ひ、善事を行へ。再び言ふ、アルラーハを敬ひ、信心せよ。三たび言ふ、アルラーハを敬ひ、善事を行へ。アルラーハは善行者を欣ぶ^三

¹ 汝等信者よ、アルラーハは密かに彼を敬ふ者を知らんがために、汝等が己れの手又は槍にて捕ふる狩獵の獲物について汝等を試むべし。而して此後に掟を破る者は痛刑を受けん^四 汝等信者よ、汝等禁忌にある間は野禽野獸を殺す勿れ。意図して之を殺せる者は、汝等のうち公正なる二名の者の判定に基き、その殺せるものと相等しき^{あたい}値の家畜を以て其罪を贖ふべし²。而して此の賠償は供物として之を方殿^{カウバ}に献ぐべし。又は其の所行の惡果を味ふために、貧者に施與せよ。然らずば之に相當する齋戒を行へ。アルラーハは既往を看過す。されど汝等若し罪を繰返さば、アルラーハは必ず之に報いん。アルラーハは偉力者・報復者なり^五

(1) 此等兩節は遷都六年即西紀六二八年、マホメットがメッカ參詣のために千五百人を率ゐて南下し、ホダーイビーヤ Hudaibuya に於て十年間の休戦條約をメッカと結べる時、此地に滞在中に降されたる啓示とせらる。即ちマホメットに従ひ來りし信者等が、禁衣を纏ひて禁忌に入れる時、多数の禽獸群り來りて彼等を困み、その行進を妨げしかば、信者等は是れアルラーハが捕獲を許せるなりとて多くの獲物を得たり。此の啓示は是くの如き參詣中の狩獵を禁止せるものなり。(2) 例へば鹿を殺せる者は羊、山鳩を殺せる者は家鳩といふが如し。二人の判者その等價物を定むるなり。

海中の漁獲並に之を食ふことは、汝等自身及び隊商の糧餉として許さる。但し陸上の狩獵は、禁忌にある間は禁ぜらる。アルラーハを敬へ。汝等は皆なアルラーハの許に集めらる矣

アルラーハは萬民の鎮護として方殿^{カバ}を聖殿と定め、また聖月と供物と飾環とを定めたり。これ汝等をしてアルラーハが天地間の一切のものを知り、且一切の事を知れることを知らしめんがためなり矣。アルラーハは懲罰に於て嚴厲なれど、また宥恕者・大慈者なることを知れ矣

使者の任務は唯だ声明することにある。されどアルラーハは汝等が露はすことを知り、また隠す

ことを知る究

言へ『悪事の夥しきは驚くに堪えたり。されど悪は決して善と同じからず。されば汝等睿智ある者よ、本願成就せんがためにはアルラーハを敬へ』と云

汝等信者よ、知りて却つて煩悶するが如きことについては訊ぬる勿¹れ。されど古蘭が降されつつある時に之に就て問はば、そは汝等に告げ知らさるべし。アルラーハは此事を赦す。アルラーハは宥恕者・大度者なり²。汝等以前の民も此事について訊ねたり。而して其事のために不信者となれり²。

(1) 恐らく細微に互る宗教的行事に問する質問を制止せるものと思はる。即ち繁瑣なる律法が信者に過重なる義務を負はしめ、そのために彼等を苦しむることを避けんとするなり。(2) 繁瑣なる律法を完全に守り得ざるために信仰生活より逸脱せること。

アルラーハはバヒーラ又はサーイバ又はワシーラ又はハーミを定めたるに非¹ず。信ぜざる者はア

ルラーハについて虚構す。彼等の多くは無智なるなり^{二三} 彼等に向つて『アルラーハが降せるもの並に其の使者を信ぜよ』と言へば、彼等答へて曰く『吾等は祖先の守れるものにて足る』と。何たる事ぞ、彼等の祖先は知識もなく、また正しく導かれざりしに非ずや^{三四}

(1) 多神教の宗的教行事の否定なり。 Bahira. Saiba. Wasila. Hami は、神前に供犠せらるるために神聖視せらるる動物の呼称たるが、此等は多神教徒が案出せる虚偽なるが故に、之を神聖視すべからずとするなり。バヒーラは『耳を剪られたる牝駝』にして、五頭乃至十頭の仔を生み、其の最後のものが牝なる場合に之を聖視す。サーイバは継続的に十頭の牝を産める母駝。ワシーラは双生の牝仔を生める山羊又は羊、ハミーは使役せられざる牝駝。

汝等信者よ、己れを慎め。汝等直き道を踏まば、迷へる者は汝等を害する能はず。汝等は皆なアルラーハに帰る。其時彼は汝等に其の為せることを告知せん^{三五}

汝等信者よ、汝等のうち臨終に近づける者ある時は、遺言の作成に際して公正なる二名の証人を立てよ。若し地上を旅する間に死の不幸に遭へる時は、汝等以外の者のうちより二名の証人を立てよ。汝等午後禮拜の後に彼等兩名を留置し、若し彼等を疑はばアルラーハによつて是く誓はしめ

よ『吾等は設ひ近親のためなりとも此の誓言を破らず、且アルラーハの証據を隠蔽せず。然る場合は吾等当に罪人たるべし』と云 若し彼等が偽証の罪を犯せること判明せる場合は、彼等によつて利益を侵害せられたる者のうちより、血縁最も近き者をして是く誓はしむべし『吾等の証言は彼等のものより眞実なり。吾等は決して掟を破らず、然る場合は吾等当に不義者たるべし』と云 是くするは人々をして誠実に証言せしむるために善し。そは是くするに非ずば、彼等が立誓せる後に其の誓言の斥けらるべきを恐るるが故なり。アルラーハを敬ひ、之に聽け。アルラーハは作惡の民を欣ばず云

アルラーハが諸使者を召集する日、彼は彼等に向つて問はん『汝等如何なる返答を得たるか¹』と。而して彼等は答へん『吾等には如何なる知識もなし。汝こそ一切の秘密を知る者なれ』と云²

(1) 使者を遣はされたる民が、使者の宣教に対して如何に應じたるかの意味。(2) 眞実の信者なりしか、偽信者なりしか、將又背教者となりしかを知らずとの意味。

アルラーハが是く言へる時を念へ『マリアの子イエスよ、汝並に汝を生める母に垂れたる吾が恩

寵を念へ。吾はは聖靈によつて汝を強め、搖盪の中にて既に成人の如く人に語らしめたり。吾は經典と智慧と律法と福音とを汝に教へたり。汝は吾が允許を得て泥にて鳥の如き象かたちを造り、吾が允許を得て之に息吹きて飛鳥となせり。汝は吾が允許を得て盲者と癩者とを愈やせり。汝は吾が允許を得て死者を甦らしめたり。吾は汝に敵する猶太人等を制止せり。汝は明證を携へて彼等に至りしも、彼等のうちの不信者は「こは明白なる魔術なり」と言へり。其時吾は使徒等に向つて「吾を信じ、吾が使者を信ぜよ」と默示せしに、彼等は「吾等は信ず。汝は吾等が歸命者ムスリムたることの證人たれ」と言へり』と二三

使徒等が是く言へる時を念へ『マリアの子イエスよ、汝の主は能く吾等のために天上より食卓を降し得べきか』と。彼曰く『汝等若し信者ならばアルラーハを敬へ』二三 彼等曰く『吾等その食卓にて食ひ、吾等の心を安んじ、汝が吾等に語れることの眞実なるを知り、その證人のうちに加はらんことを切願す』と二三 マリアの子イエス曰く『アルラーハよ、吾主よ。吾等のために天上より食卓を降し、之を以て吾等の最初の者並に最後の者の節宴たらしめ、且汝の休徴たらしめよ。吾等を養へ、げに汝は最勝の供養者なり』と二四 アルラーハ曰く『げに吾は之を汝等に降さん。されば若し後に至りて汝等のうちに不信者となる者あらば、吾は未だ曾て三界の何者にも加へざる刑罰を以

て之を懲らさん』と二三

またアルラーハが是く言へる時を念へ『マリアの子イエスよ、人々に向つて△アルラーハの外に吾と吾母とを二柱の神とせよ』と告げたるは汝なるか』と。彼答へて曰く『栄光汝の上にあれ、吾何すれぞ言ふべからざることを言はんや。吾若し言ひたりせば汝能く之を知る。汝は吾が心奥を知れども吾は汝の心奥を知らず。げに汝のみ能く一切の秘密を知る言。吾は汝が吾に告げたること、即ち△吾主にして且汝等の主なるアルラーハに事へよ』といふことの外は、何事をも彼等に告げず。吾生きて彼等の間にありし時は、吾は彼等の証人なりしが、汝が吾を昇天せしめたる後は、汝こそ彼等の監視者なれ。汝は一切を照覽す二三。汝が彼等を罰するとも——可し、彼等は汝の僕なり。汝が彼等を赦すとも——可し、汝は偉力者・聰明者なり』と。アルラーハ曰く『此日は誠実が誠実者を益する日なり。彼等は河川流るる樂園に入り、長久に其中に住まん。アルラーハは彼等を欣び、彼等もまた彼を欣ぶ。これ偉大なる本願成就なり』と二三

天地の權威と天地間の一切とはアルラーハに屬す。アルラーハは萬有を支配す言

第六章 家畜章

メッカ啓示

第一三七節及び第一三九・一四〇節に家畜に関するアラビア人の迷信について述ぶるところあるに因みて家畜章 *Al-An'ām* と名づけらる。従来本章は其の一部を除けば、全章悉く遷都前年に於て一時に啓示せられたるものにして、メッカ諸章の最後のものとせられたり。されど其後の研究によつて、本章中の諸節にはメヂナ啓示に属するものが、従来指摘せられたる七乃至九節に止まらざること、並にメッカ啓示の原文が遷都以後に訂正せられたるもの多きこと、従つて決して同一時の啓示に非ず、年月を異にして降されたる啓示の集成なることが明かにせられたり。内容は雑多なれども、アラーの独一を力説すること最も努む。因みにネルデケ及びロッドウエルは共に第一三電雷章を以て最後のメッカ啓示となし、その直前に本章を置きたり。而してムイアは、マホメットの開教第十年よりメヂナ遷都までをメッカ第五期となし、此間に降されたる啓示二十章を以て一群となし、本章を其の第十八に置き、第七高壁章を最後のメッカ啓示となせり。

大悲者・大慈者アラーハの名によりて

天地を創造し、黒闇と光明とを定めたるアラーハを讃へよ。然るに信ぜざる者は同位者を彼に配す¹。泥土より汝等を創造せるは彼なり。次で彼は期限を定めたり¹。而して彼は更に期限を定め

置けり²。然るに汝等は之を疑ふ³。彼は天に於ても地に於てもアルラーハなり。彼は汝等の隠すことを知り、汝等の露すことを知る。彼は汝等が積むものを知る³。其主の休徴の彼等に至る毎に、一として彼等が之を忌避せざるはなし⁴。眞理が彼等に來る時、彼等は常に之を虚偽なりとす。されど彼等が嘲笑する事³に關する種々なる消息が、やがて彼等に傳へらるべし⁵。吾は、彼等以前に幾多の世代を滅ぼしたり。彼等は之を見ざるか。吾が地上に於て彼等に與へたりし住居は、汝等の住居の如きものに非ず⁴。吾は沛然たる雨を天上より彼等に降し、脚下には河川を流れしめたり。されど彼等の罪惡のために吾は之を滅ぼし、其後に他の世代を出現せしめたり⁶。設ひ吾汝に紙上に書ける經典を降し、彼等己れの手にて之に觸るも⁵、信ぜざる者は尙且言はん『こは明白なる魔術に外ならず』と⁷。彼等また曰く『何故に天使が彼に遣はされざるか』と。されど吾若し天使を降せりとすれば、事は既に決定せられ、彼等の刑罰は猶豫せられざりしなるべし⁶。而して吾設ひ彼を天使たらしむるとも、吾必ず人間の姿を之に取らしめ、いま彼等が惑ふ如く惑はしめたるなり⁸。汝以前の諸使者も嘲笑せられたり。されど彼等の嘲笑せる事が、やがて彼等を圍繞せり⁹。言へ『地上を旅して使者を虚言者と呼べる者の末路が如何なるものなりしかを見よ』と¹⁰。

(1) 此の一段はメッカ啓示の教節を基とし、遷都後に補訂して本章の序言たらしめたるものと思はる。『期限』とは現世

の寿命を言ふ。(2)更に定め置く期限とは復活の日を言ふ。(3)復活・最後審判・楽園・地獄等の『不可見のもの』を言ふ。(4)メツカの如き磽确の地に非ず、極めて豊沃の地なりしを言ふ。即ち往昔『多幸のアラビア』と呼ばれしヤマン地方に榮えたる諸部族を指す。(5)第四章第一五三節参照。(6)天使の来るは最後審判のために衆生が復活せしめらるる時なり。従つて天使来れば判決忽ち下り、賞罰立どころに行はる。第二章第二一〇節、本章第一五九節参照。

言へ『天地間の萬物は誰の有ぞ』と。言へ『アルラーハの有なり。彼は慈悲を己れの務めとなす。げに彼は復活の日に必ず汝等を召集せん。そは断じて疑惑を容れず。されど己れの魂を滅ぼす者は之を信ぜず』また夜間に住み、晝間に住む者も彼の有なり。彼は能聞者・能知者なり』と三言へ『吾何ぞアルラーハの外に愛護者を求めんや。彼は天地の創造者なり。彼は天地を養ひて、己れは養はるるを要せず』と。言へ『吾は歸命者の首先たれと命ぜられ、多神教徒の一人たる勿れと命ぜられたり』と四言へ『吾若し吾主に背かば、吾は偉大なる日の懲罰を恐る』と五其日懲罰を免るる者は、アルラーハが之に慈悲を垂るるなり。そは明かなる本願成就なり六アルラーハ若し災難を汝に降すとすれば、彼の外に之を除く者なし。彼若し幸福を汝に降すとすれば、げに彼は全能なり七彼はその僕等に君臨する至高者なり、彼は聰明者・悉知者なり八

言へ『立証に於て最も重大なるは何事ぞ』と。言へ『アルラーハは汝等と吾との間の証人なり。古蘭が吾に降されたるは、吾をして之によつて汝等並に之に接する一切の者を警めしめんがためなり。汝等はアルラーハの外に神あることを立証するか』と。言へ『吾は立証せず』と。言へ『彼は唯一の神なり。吾は汝等が彼に配する者と風馬牛なり』と云。既に經典を賜はれる者は、其子を認むる如く之を認む。されど己れの魂を滅ぼす者は信ぜず』

(一)此の一段の啓示は、メッカ市民が猶太人並に基督教徒についてマホメットの事を訊ねし時、彼等は己れの經典中にはマホメットに関する如何なる記載もなしと答へたりしを以て、メッカ市民が彼に向つて『汝がアルラーハの使者たることを立証する者は誰ぞ』と問へる時に降されたる啓示とせらる。

アルラーハについて虚偽を構へ、又は其の休徴を虚偽なりとするより甚だしき不義あるか。不義者は決して榮えざるべしニ。一齊に彼等を召集する日、吾はアルラーハに同位者を配せる者に問はん『汝等が配せる同位者らはいま何処にありや』と云。其時彼等は是く言ふ以外に如何なる遁辞もなかるべし『吾等の主アルラーハによつて誓ふ。吾等は決して同位者を配せる者に非ず』と云。見

よ、如何に彼等が自ら欺くかを。見よ、如何に彼等の虚構せる者が彼等を棄て去るかを。

彼等¹のうちには汝に耳傾くる者あり。されど吾は彼等をして之²を理解せしめざらんがために、其心を覆ひ、其耳を聳ひしめたり。されば彼等設ひ休徴を目睹するとも之を信ぜざるべし。而して彼等汝と論議するために来る時、彼等うちの信ぜざる者は即ち曰く『こは古人の物語に外ならず』と³。彼等は他を之より遠ざけ、己れは之を避く。されど彼等は自ら識らずして己れの魂を滅ぼす者なり⁴。而も汝若し彼等が火獄の前に立たしめらるる時の有様を見得なば！其時彼等は言はん『嗚呼、吾若し再び世に還り得なば、吾等は決して主の休徴を虚偽なりと言はず、必ず信者の一人とならんものを』と⁵。然らず、曾て彼等が隠蔽せるもの、いま彼等に明示せらるるなり。而して彼等設ひ再び世に還らしめらるるとも、彼等必ずまた禁ぜられたるものに復らん。彼等は虚言者なり⁶。

(1) 此処に『彼等』と言ふは、恐らくメヂナの猶太人なるべく、従つて此の一段はメヂナ啓示とすべし。(2) 『之』とは古蘭又はマホメット。(3) 古蘭を指す。

彼等曰く『在るものは唯だ吾等の現世のみ、吾等は決して甦らしめらるることなし』と⁷。而も

汝若し彼等が其主の前に立たしめらるる時の有様を見得なば！ 其時主は言はん『こは眞実に非ざるか』。彼等は言はん『然り、神かけて』と。彼言はん『然らば汝等が示せる不信に対する懲罰を味へ』と言 げにアルラーハと会ふことを虚偽なりとする者は、其魂を滅ぼす者なり。其日突如として到らば彼等は言はん『悲しいかな吾等が之を閑却せることは』と。彼等は其背に重荷を負へり。げに彼等の負へるものは悪し^三 現世の生活は娛樂又は遊戯にすぎず。其身を護る者には末世の住居こそ最勝なれ。汝等尙ほ曉らざるか^三

(一) 此処に『彼等』といふは明白にメッカの多神教徒を指す。

げに吾は彼等の言が汝を悲しましむることを知る。されど彼等は汝を虚言者とするに非ず、不義者はアルラーハの休徴そのものを否認するなり^三 汝以前にも諸使者は虚言者と呼ばれたり。されど彼等は吾が佑助の至るまで、能く排撃と迫害とを耐え忍べり。アルラーハの言は何者も之を変ふる能はず。而して諸使者に関する若干の消息は、既に汝に傳へられたり^三 若し彼等の離反が汝を悲しましむるならば、汝之を能くしなば地に穴を穿ち、天に梯はしこをかけて休徴を彼等に示せ。されどアルラーハ若し欲したりせば、彼等を集めて之を導きしなり。されば汝は無智者の一人となる勿

れ^三 耳傾くる者のみ能く応ず。されどアルラーハは能く死者をも甦らしめん。然る後に彼等は彼に帰らしめらる^三。彼等曰く『何故に主よりの休徴が彼に降されざるか』と。言へ『アルラーハは能く休徴を降す』と。されど彼等の多くは知らざるなり^三。地上の動物、双翼を以て翔くる鳥、一として汝等と等しき民ならざるはなし。吾は經典の中に一事をも脱落せず。されば彼等もまたやがて其主に召集せられん^三。吾が休徴を虚偽なりとする者は聾者なり、啞者なり、黒闇の中に居る者なり。アルラーハは己れの欲する者を迷はしめ、欲する者を直き道の上に置く^三。

(一) 此の一段の諸節は、愛妻を失ひ、愛護者を失ひ、タイフに赴きて排斥せられしマホメットの極度の窮迫時代に、彼の意氣を鼓舞せんがための啓示と見るべし。

言¹へ『汝等如何に思ふか、若しアルラーハの懲罰が汝等に至り、又は復活の日が汝等に至らば、汝等はアルラーハ以外の者を喚ぶか。汝等誠実に之に答へよ^三。否な、汝等必ずアルラーハを喚ばん。而して彼若し欲しなば汝等に応へて其の災厄を除き、汝等は彼に配せる神々を忘れ去らん』と^三。げに吾は汝以前の諸の民に諸使者を遣はし、彼等を謙虚ならしめんがために困苦と窮乏とに遭はしめたり^三。吾が懲罰の降りし時、彼等若し謙虚なりしならんには！されど彼等の心は硬く、サ

タンは彼等をして其の為せることを佳しと思はしめたり。而して彼等が己れに與へられたる訓誡を忘れ去りし時、吾は萬物の門を彼等のために開きたり。而して彼等が其の與へられたるものに歡喜しつつありし時、吾突如として彼等を襲ひ、之を絶望に陥らしめたり。かくて不義を行へる民は根絶せられたり。三界の主アルラーハを讚へよ。

(1) 此の一段はメヅカに大飢饉ありし後の啓示と思はる。(2) 繁榮の門を開けること。之を滅絶し去る前に先づ彼等を榮華に酔はしむることを意味す。

言へ『汝等如何に思ふか、アルラーハ若し汝等の耳目を奪ひ、汝等の心を封じなば、之を汝等に還元する者はアルラーハに非ずして何の神ぞ』と。見よ、吾は如何に休徵を反復明示せるかを。されど彼等は背き去る。言へ『汝等如何に思ふか、設ひアルラーハの懲罰が突然又は公然に來るとも、不義の民の外は誰か滅ぼさるるものぞ。わが遣はせる使者は、一として吉報傳達者にして且警告者に非ざるはなし。されば信じて善事を行ふ者には畏怖なく憂懼なからん。されど吾が休徵を虚偽なりとする者には、其の行へる背逆に対して刑罰下らん』と。

言へ¹『吾は汝等に向つて、[△]吾にアルラーハの宝庫あり』[▽]と言はず、また[△]吾は不可見のものを知る[▽]と言はず、また[△]吾は天使なり』[▽]と言はず。²吾は唯だ吾に默示せられたることに随順するのみ』と。言へ『失明者と具眼者とは同一なるか。汝等尙ほ曉らざるか』と吾。汝は此³を以て其主に召集せらるることを恐るる者に警告せよ。彼の外に彼等の愛護者なく勸解者もなし。彼等恐らく其身を護らん[△]。主の慈顔を求めて朝な夕な主を喚ぶ者を逐ふこと勿れ⁴。汝は彼等の意図に対して如何なる責任もなし。彼等また汝の意図に対して如何なる責任もなし。されば汝若し彼等を逐はば、汝は不義者の一人とならん[△]。かくして吾は、彼等の或者を以て他を試みたり。そは彼等をして『アルラーハが恩寵を垂るるは、吾等のうちの此等の者なるか』⁵と言はしめんがためなり。されど最も善く感恩者を知るはアルラーハに非ざるか[△]。わが休徴を信する者が汝に来らば即ち言へ『平安汝等の上にあれ。主は慈悲を己れの務めとなす。されば汝等のうち無智にして悪事を行へる者も後に懺悔して善事を行はば、げに彼は宥恕者・大慈者なり』[△]と吾。是くの如く吾は種々なる休徴を分明にせり。これ作悪者の道を明示せんがためなり[△]。

(1) 此の一段は彼及び彼の信者に対するメッカ市民の批評に答へたるものなり。(2) 『寶庫を有せず』とは、メッカ市民が物質的榮華の將來を求めたるに答へ、『不可見のものを知らず』とは、彼等が天譴の降るは何時ぞと問へるに答へ、

『天使に非ず』とは彼等が奇蹟を求めたるに答へたるなり。(3)『此』とに古蘭のこと。(4)メッカの信者、殊に初期の
帰依者のうちには奴隷其他の貧賤者多かりしを以て、メッカの有力者中には、若しマホメットが此等の貧賤者を放逐したば、
彼等もまた帰信せんと言へる者あり。此の啓示は其時に降されたるものとせらる。アラビアにて奴隷は決して一個の人間と
して待遇せられざりしが故に、メッカの有力者は彼等との同坐を厭惡せるなり。(5)『此等の者』とは即ち貧賤者を意味
す。メッカ市民がマホメットの信者に貧賤者多きを嘲弄せるなり。

言へ『吾は汝等がアルラーハ以外に喚ぶ者を拜することを禁ぜられたり』と。言へ『吾は汝等の
私情に従ふこと能はず。若し従はば吾は必ず迷ひて、正しく導かるる者たる者を得ざるべし』と云
言へ『吾は吾主の證據の上に立つ。然るに汝等¹此事を以て虚偽なりとす。げに汝等が催促する事²は
吾が能くするところに非ず、決定は唯だアルラーハのみ之を能くす。彼は眞実を宣す。彼は最勝の
決定者なり』と云 言へ『若し汝等の催促することが吾が掌中にありとすれば、事は吾と汝等との
間にて決定せられん。されどアルラーハは最も善く不義者を知る』と云 げに不可見なるものの秘
鑰は彼の掌中にあり、彼の外は何人も之を知らず。彼は陸上のものを知り、海中のものを知る。一
葉の落下も彼之を知らずといふことなく、地中暗黒の穀粒、青きもの、枯れたるもの、一として明

瞭なる經典⁴に記載せられざるはなし⁵

(1) 『此事』とは復活を言ふ。(2) 『催促』とは復活を信ぜざるメッカ市民が、賞罰が行はるる復活の日の来るは何時ぞと催促すること。(3) 此処の『不可見のもの』は復活を指す。(4) 天上にある神典即ち *Ummu'l-Kitab*。

夜間に汝等の魂を取る者は彼なり¹。彼はまた汝等が晝間に行へることを知る。彼は白晝には汝等を覚醒せしめ、定められたる壽命を満たしむ。而して汝等遂に彼に帰り、其時彼は汝等に向つて其の為せることを告知せん。彼は其の僕等に超在する至高者なり。死が汝等の一人に来り、諸天使之を迎へ入るるまで、彼は汝等の上に監視者を遣はす²。而して彼等は決して怠慢に非ず。然る後に彼等は其の眞実の主アルラーハに帰らしめらる。嗚呼、判決は彼の掌中にあり、而して彼の清算は神速なり³。言へ『汝等心を虚しくして密かに祈り、汝若し³此事より吾等を救はば、吾等必ず感謝を献げん』と言ふ時、陸海の黒闇より汝等を救ふ者は果して誰ぞ』と云。言へ『アルラーハは汝等を此事より救ひ、また一切の艱難より救はん。然るに汝等はアルラーハに同位者を配す』と云。言へ『彼は汝等の頭上より、また汝等の脚下より、懲罰を汝等に加へ得べく、また汝等を党同伐異せしめ、互に他の暴虐を味はしめ得べし』と。見よ、彼等を曉らしめんがために、われ如何に種々

なる休徴を反復明示するかを至。汝の民は此の眞実なる事を虚偽と言へり。言へ『吾は汝等の責任を負はしめられたる者に非ず』と云。一切の豫言には一定の時期あり。やがて汝等思ひ知らんを

(1) 『魂を取る』とは眠らしむること。(2) 一個の人間に四天使配せられ、二天使は晝間、他の二天使に夜間に彼の言行を監視すとせらる。(3) 復活の日の刑罰。(4) 定められたる時期に於て実現せらるること。

わが休徴について言を弄する者を見なば、彼等が其の話題を轉ずるまで之と遠ざかれ。設ひサタンが汝を忘却せしむることありとも、一旦想起すれば断じて不義の民と同坐する勿れ。其身を護る者は彼等に対して如何なる責任をも有せず。されど彼等をもまた其身を護らしめんがために、之に訓誡を與ふべし。己れの教を娛樂遊戲とする者、また現世に欺かれ居る者は之を放任せよ。人は其の爲すことによつて己れを滅ぼすべきことを、古蘭によつて教訓せよ。人はアルラーハの外に如何なる愛護者も勸解者もなく、賠償のために如何なる代償を拂ふも受納せられざるなり。彼等は其の爲せることのために滅び行くものなり。彼等は其の爲せることのために沸湯を飲み、また痛烈なる懲罰を受けんが

言へ『吾等アルラーハを外にして、吾等に損もなく益もなき者に祈るべきか。吾等一たびアルラ

一ハに導かれたる後に、かの地上に於てサタンに惑はしめられたる者の如く吾等の踵を回すべきか。彼には『吾等に来れ』と呼びて直き道に彼等を招ぐ多くの伴侶あるものを』と。言へ『アルラーハの嚮導こそ眞個の嚮導なれ。吾等は三界の主に従順せよと命ぜられし。また礼拝を守り、彼を敬へと命ぜられたり』と。汝等はやがて彼の前に召集せらるるなりき。

眞理を以て天地を創造せる者は彼なり。其日彼『有れ』と言へば即ち有りき。彼の言ふところは眞実なり。喇叭鳴る日、¹権力は彼にあり。彼は不可見のものと可見のものとの能知者なり。彼は聰明者・知悉者なり^註。

(1) 復活の日の喇叭なり。喇叭は天地創造の後に直ちにアルラーハが之を作りて天使イスラーフィール Israel に與へたるものにして、此時以来イスラーフィールは不斷に此の喇叭を其口に当て、仰いでアルラーハの命令一下するを待ちつつありとせらる。

アブラハムが其父アザルに是く言へる時を念へ『汝は偶像を神とするか。げに汝並に汝の一族は明白なる迷誤の中にあり』と^註。曾て吾はアブラハムを信心堅固なる者たらしめんがために、天地の王國を彼に示したりき。夜陰彼を覆へる時、彼は一つの星を見たり。彼曰く『こは吾主

なり』と。星の沈むに臨んで即ち曰く『吾は沈む者を愛せず』と云。次で彼は月の登るを見たり。彼曰く『こは吾主なり』と。月の落つるに臨んで即ち曰く『吾主若し吾を導かずば、吾は迷へる者の一人たりしならん』と云。次で彼は日の登るを見たり。彼曰く『こは吾主なり、こは至大者なり』と。されど日の沈むに及んで彼曰く『吾民よ、吾は汝等がアルラーハに配する者と絶縁す云。吾は天地を創造せる彼に帰向す。吾は堅信者にして多神教徒に非ず』と云。

されど彼の民は彼に異存を唱へたり。彼曰く『アルラーハは吾を導けり。然るに汝等彼について吾と争論せんとするか。吾主が何事かを欲するに非ずば、吾は毫も汝等が彼に配する者を怖れず。吾主の知識は一切を抱擁す。汝等何ぞ之を思はざる云。吾何ぞ汝等が彼に配する者を恐れんや。汝等はアルラーハが如何なる權威をも與へざる者を彼に配して憚らざるに非ずや。汝等若し知識あらば、両者のいづれが安泰なり得べきかを答へよ』と云。げに其の信仰を不義と混同せざる者、彼等こそ安泰にして且正しく導かるる者なれ云。これ吾がアブラハムに與へて其民に抗せしめたる論旨なり。吾は吾が欲する者の位階を高む。げに汝の主こそ聰明者・能知者なれ云。

吾はアブラハムにイサクとヤコブとを與へて其の各自を導き、また曩にはノアを導きたり。アブラハムの子孫にはダビデとソロモン、ヨブとヨセフ、モーゼとアロンとあり。吾は是くの如く善事

を行へる者に報ゆ全　またザカリヤとヨハネとイエスとあり、皆な義人のうちなり矣　またイシマエルとエリシアとヨナとロトとあり。吾は彼等を皆な世に秀でたる者となせり矣　また彼等の祖先と子孫と兄弟とのうちに若干の者あり。吾は彼等をも選びて正しく導きたり矣　これアルラーハの嚮導なり。彼は之を以て其の僕等のうち己れの欲する者を導く。されど彼等若し他の神々を彼に配しなば、彼等の一切の所行は空無に帰すべし矣

¹此等は吾之に經典と智慧と豫言とを與へたる者なり。されど若し²此等が之を信ぜずば、吾は信ずる民に之を委ぬべし矣　³此等はアルラーハに導かれたる者なれば、汝は彼等の嚮導に従へ。言へ『吾は之がために如何なる報酬をも汝等に求めず。そは唯だ三界に対する訓誡なり』と云

(1) 『此等』とは諸豫言者を指す。(2) 此の『此等』は諸豫言者の子孫即ち『イスラエルの兒等』を指す。若し猶太人が信ぜざれば、マホメット及び其の歸依者に之を委ぬべしとの意味。従つて此節はメチナ啓示とすべし。(3) 諸豫言者。

¹彼等が『アルラーハは何ものをも人間に降さず』と言ふは、正しくアルラーハの力を測れるものに非ず。言へ『光明並に嚮導としてモーゼが其民に齎せる經典を降せる者は誰ぞ　汝等之を紙上に書き、僅に示して多く隠蔽するも、汝等之によつて汝等の知らざりしこと、汝等も汝等の祖先も知

らざりしことを教へられたるに非ずや』と。言へ『アルラーハなり』と。而して彼等を放置して空論に耽らしめよと。

(一) 此処に『此等』と言ふは猶太人を指せるものにして、此の一段も恐らくメヂナ啓示なり。

こは吾が降せる祝福せられたる經典にして、以前に降されたるものを確證するものなり。そは汝をして諸邑の母並に其の周囲のものに警告せしめんがために降されたるものなり。来世を信する者は之を信じ、謹みて礼拜を守らん^三。アルラーハについて虚偽を弄し、又は啓示を受けずして『吾は天啓を受けたり』と言ふ者、また『吾はアルラーハが降せると相似たるものを降すべし』と言ふ者あり。凡そ之よりも甚だしき不義を行ふ者あるか。されど汝若し不義者が死の苦惱に喘ぎ、而して諸天使其手を伸べて是く言ふ有様を見るを得なば！『汝等の魂を渡せ。汝等アルラーハについて眞実ならざることを稱へ、且其の休徴を侮蔑せる応報として、いま耻づべき懲罰に処せらるべし』と^四。また是く言はれん『今日汝等は吾が初めて汝等を創れる時の如く、單身にて吾前に来り、わが汝等に賜へるものを悉く背後に遺し来れり^二。吾は汝等が曾て己れの味方なりとせる勸解者が、一人として汝等に伴ひ来れるを見ず。いま汝等の間^一の絆は断たれ、汝等が曾て在りとせる者は汝等

より消え去れり』と云

(一) 『諸邑の母 Ummu 'l-Qura』とはメッカのこと。(二) 子女財産を後に遺して單身神前に出づること。

穀類の種子及び棗椰子の核に芽を萌えしめ、死者より生者を、生者より死者を創る者はアルラーなり。是くの如きはアルラーハなり。然るを汝等何故に背き去るか。彼は黎明を現れしめ、暗夜を休息の時と定め、日月を以て計算の標しるしとなす。これ偉力者・能知者の配置なり。單一の人間より汝等を生れ出でしめたるは彼なり。而して彼は汝等に住居と安息処とを與へたり¹。吾は理解ある民のために分明に休徴を示す。雨を天上より降すもまた彼なり。吾は之を以て一切の芽を萌え出でしむ。吾は鮮緑の莖を之より出だし、纍々たる穀類を生ぜしめ、また棗椰子の花粉よりは簇々として果実を垂れしめ、また葡萄・オリヴ・石榴など、同類異類の果樹園を育成す。その果実の結ぶを見、而して其の熟するを見よ。其中には信ずる者への種々なる休徴あり。

(一) 回教神学者は『住居 Mustaqarr』は、父の腰内のこと、『安息処 Mustauda』とは母の胎内のことなりと解釈す。

彼等はアルラーハが創れる幽鬼ウンを彼と同位に置く。また彼等無智にして妄りにアルラーハに男兒

と女兒とありとなす。アルラーハに光榮あれ、彼は高く彼等が彼に配するものの上に超在す。天地の創造者なり。彼に妻なし、如何ぞ子あるを得んや。彼は一切を創造せり。彼は一切を知る。是れ汝等の主アルラーハなり、彼の外に神なし。彼は一切の創造者なり。されば彼に事へよ。彼は一切を監督す。衆目は彼を見ず。されど彼は衆目を見る。彼は能知者・悉知者なり。げに明瞭なる證據既に汝等の主より汝等に降り。されば其目を開く者は己れを益し、盲目なる者は己れを損ず。吾は汝等の監視者に非ず。

吾は是くの如く休徴を反復す。これ彼等をして『汝は学ぶこと深し』と言はしめ、また知識ある者に此事を明瞭ならしめんがためなり。主より汝に降されたるものに従へ。彼の外に神なし。他の神々を彼に配する者より遠離せよ。アルラーハ若し欲したりせば、彼等は他の神々を彼に配することなかりしなり。吾は汝を彼等の監視者に任命せるに非ず。汝は彼等に対して責を負ふことなし。

(1) 此の一段は第一〇〇節に続くものとすべし。

彼等をして無智のために妄りにアルラーハを誣らざらしむるために、彼等がアルラーハ以外に拜する神々を誣る勿れ。吾は是くの如くにして各派をして皆な己れを行ふ所を佳しと思はしむ。やがて彼等は其主に帰らしめらる。其時彼は彼等に向つて其の爲せることを告知せん云

彼等¹は最も嚴肅にアルラーハに誓ひて、若し休徴彼等に降らば必ず之を信ぜんと言へり。言へ『休徴はアルラーハの掌中にあり』と。汝等は設ひ休徴が彼等に降るとも、彼等は決して之を信ぜざるべきことを知らざるべからず云 吾は彼等が最初に之を信ぜざりし時の如く、彼等の心と目とを背轉せしめ、彼等の反抗を放任して迷誤の中に彷徨せしむべし云 吾設ひ諸天使を彼等に降し、死者が彼等に物言ひ、またわれ一齊に萬物を彼等の前に集むるとも、若しアルラーハが欲するに非ずば彼等決して信ぜざるべし。彼等の多くは無智者なり云 かくて吾は一々の豫言者に一個の敵を定めたり。そは人間並に幽鬼の中のサタンにして、欺瞞のために互に詭語を示唆す。されど主若し欲したりせば、彼等は之を為さざりしなり。されば彼等並に彼等が虚構せる言を放任せよ云 そは来世を信ぜざる者の心を彼等に傾かしめ、且彼等を喜ばしめ、以て其の獲べきものを獲せしめんがためなり云

(1) 此の一段も恐らくメヂナ初期の啓示にして、主として猶太人を対象とせるものなり。

吾豈アルラーハ以外に審判者を求むべけんや。分明に説かれたる經典を汝等に降せるは彼なり。曾て吾が經典を賜はれる者は、古蘭が眞実に汝の主より降されたることを知る。されば疑惑者の一人となる勿れ^{二三}。汝の主の言は確實と公正とに於て缺くるところなし。何人も彼の言を変ふるを得ず。彼は能聞者・能知者なり^{二四}。汝若し地上多数の人々に従はば、彼等必ずアルラーハの道より汝を迷はしめん。彼等は唯だ臆測に従ひ、虚言を事とするにすぎず^{二五}。げに汝の主は最も善く彼の道より迷ひ去れる者を知り、また最も善く正しく導かるる者を知る^{二六}。

汝等アルラーハの休徴を信するならば、彼の名が唱へられたる物を食へ^{二七}。汝等何を苦しんでアルラーハの名が唱へられたる物を食はざるか。強いられたる場合を除き、アルラーハは汝等が食ふべからざる物を明示せるに非ずや。げに多くの人々は無智より来る私欲のために人を誤る。汝の主は最も善く違背者を知る^{二八}。公然並に秘密の罪惡を避けよ。げに罪惡を積む者は、他日必ず其の爲せることに対して応報を受けん^{二九}。アルラーハの名が唱へられざる物を食ふ勿れ。これ断じて罪惡

なり。げにサタンは己れの追隨者を嗾かして汝等と爭論せしめんとす。されど汝等若し彼等に従はば汝等は即ち多神教徒なり三

既に死したるを吾之を甦らしめ、光明を與へて人々の間を往かしむる者を、かの黒闇の中にありて決して之より出離し得ざる者に比ぶべきか。不信者は己れの爲すことを佳しと思はしめらる三

吾は各都府の有力なる者を罪人となし¹、彼等をして其処にて策謀せしむ。されど彼等は自ら識らずして唯だ己れに対して策謀するのみ三 休徵彼等に至れば彼等即ち曰く『アルラーハの諸使者に賜はりたる休徵と同じきものが吾等に賜はるまで、吾等は信ずるを欲せず』と。アルラーハは何人に其の使命を託すべきかを最も善く知る。罪を犯せる者には、その策謀せることのために、アルラーハよりの屈辱と重刑と来るべし三 アルラーハ若し人を導かんとすれば、彼は其人の胸を拈げてイスラームを抱かしめ、若し人を迷はしめんとすれば、其胸を緊め窄めて宛も天に昇らんとする者の如くすべし²。かくしてアルラーハは信ぜざる者の上に不淨を置く三

(1) 此の一句は『罪人の間に有力者を置き』とも訳し得べし。(2) 昇天の不可能なる如く歸信を不可能ならしむる意味。

これ汝の主の直き道なり。吾は反省する民のために種々なる休徴を明示す^三。彼等は其主の許に平安なる住居を得べく、彼は彼等の爲せることに對して其の愛護者たるべし^三。

一齊に彼等を召集する日に主は言はん『汝等幽鬼の党侶よ、汝等は多くの人間を惑はし去れり』と。人間のうちの幽鬼の友は言はん『主よ、吾等の或者は互に他を利用せるなり。而していま汝が吾等のために定めたる時期到来せり』と。彼は言はん『火獄は汝等の永劫の住処なり。但だアルラ^一ハ欲すれば其限に非ず』と。げに汝の主は聰明者・能知者なり^三。吾は是くの如く其の爲せる惡事のために、不義者の一部をして他を抑制せしむ^三。幽鬼並に人間の党侶よ、汝等の間より擧げられたる諸使者が汝等に至りて、わが休徴を汝等に復誦し、汝等の此日の会見について汝等に警告せざりしか。彼等は言はん『吾等は己れ自身の證人なり』と。げに現世の生活が彼等を欺けるなり。彼等は己れの不信者なりしことを自ら立證す^三。これ汝の主は其民の識らざる間に妄りに都府を滅ぼすことなきが故なり¹ ^三。

【一】アルラーハは不義の都府に懲罰を下す前には、必ず其民に使者を遣はして懺悔を勧むることを意味す。

各人には其の爲せることに応じてそれぞれ階級あるべし。汝の主は彼等の爲すことを忽諸にせず^①。汝の主は富有者・施恩者なり。彼若し欲しなば、汝等を排除して己れの欲する者を汝等の後繼者たらしむること、宛も別個の民の子孫より汝等を出現せしめたるが如くなるべし^②。汝等に約束せられたることは必ず来る。汝等之を免るを得ず^③。言へ「吾民よ、汝等は其の爲しつつあることを爲し続けよ、吾また吾が爲すことを続けん。他日汝等は善き住家が何人の有^④となるかを知らん。不義者は決して榮えず」と^⑤。

彼等^①はアルラーハが創れる果実並に家畜の一部を割きて曰く「こはアルラーハに献げ（彼等是く称ふ）、此は吾等の神々に献げん」と。彼等が其の神々に献げしものはアルラーハに達せず、アルラーハに献げしものは彼等の神々に達す^②。彼等の判断は悪し^③。また彼等の神々は、多くの多神教徒をして己れの子女を殺すことを善しと思はしむ^④。これ神々が彼等を滅ぼし、且彼等の教を紊さんがためなり。アルラーハ若し欲したりせば、彼等は之を爲さざりしなり。されば彼等並に彼等が虚構せるものを放任せよ^⑤。彼等また曰く「此等の果実と家畜とは禁制なり。吾等が許す者ならでは何

人も之を味ふを得ず（彼等是く稱ふ）。また此等は其背⁴が禁ぜられたる家畜、此等はアルラーハの名を唱ふべからざる家畜なり』と。総じてアルラーハを偽るなり。他日彼は必ず彼等の虚構⁵に対して報ゆべし云 彼等また曰く『此等の家畜の胎内にあるものは男子のみ之を食ふことを許され、女子には禁ぜらる。但し死産の場合は女子も之に與る』と。他日彼は必ず彼等の假託⁵に対して報ゆべし。彼は聰明者・能知者なり云 無智にして愚かにも其の子女を殺し、アルラーハに假託して其の賜へる物を食ふことを禁ずる者は、既に淪喪者となれる者なり。彼等は迷ひ去れる者にして、また導かるることなし云

(1) 此の一段は宗教的迷信に基づくアラビアの弊風を否定す。(2) アラビア人は其の耕野をアルラーハの田園と神々の田園とに分ち、若し神々の田園の果実が、アルラーハの田園内に落ちたる時は必ず之を復旧せしも、反対の場合はアルラーハは富裕なりと唱へて之を神々のものとしたり。(3) アラビア人の間に女兒誕生の時に之を生埋にする風習行はれ居たり。(4) 騎乗又は負荷を許さざること。(5) 虚構又は假託とは、叙上の風習をアルラーハの掟なるかの如く言ふこと。

有架又は無架¹の葡萄園、棗椰子、種々なる農産、オリヴ、石榴、其他同類のものを生ずるは彼なり。実を結ばば果実を食へ。收穫に際しては其中より捐課を納めよ。但し浪費する勿れ。彼は浪

費者を歛ばず^三 彼は家畜のうちより荷を負ふものと食用に供するものとを創れり。アルラーハの賜へる物を食ひ、サタンの跡を踏むこと勿れ。彼は汝等の公然の敵なり^四 家畜八頭、即ち羊二対と山羊二対。言へ『アルラーハは二牝又は二牡、若くは二牝の胎内にあるものを食ふことを禁じたるか。汝等の言眞実ならば、確實に之を告げよ』と^五 駱駝二頭と牡牛二頭。言へ『アルラーハは二牡又は二牝、若くは二牝の胎内にあるものを食ふことを禁じたるか。アルラーハが之を禁じたる時、汝等は現場にありしか。知識を有せずして、唯だ人を迷はすためにアルラーハについて虚構するよりも甚だしき不義あるか。アルラーハは不義の民を導かず』と^六

(一) 柵を作りて結実せしむるものと、地に蔓延せしむるもの。

言へ『吾に黙示せられたる物のうち、死せる物、溢るる血、豚肉（こは不浄なるが故なり）、又はアルラーハ以外の神名が唱へられる穢れたる物を除き、之を食ふことを禁ぜらるるものなし。而して嗜欲のために非ず、また掟を破らんとしてに非ず、唯だ迫られて己むを得ざりし者には――、
げに汝の主は宥恕者・大慈者なり』と^七 われ猶太人に一切の蹄ある動物を禁じ、且背部又は腸内にあるか、若くは骨に附きたるに非ずば、牛と羊との脂を禁じたり^八。これ彼等の貪欲に対する応報

なり。げに吾は眞実を語るに、彼等若し汝を虚言者と誣いなば即ち言へ『主の慈悲は廣大なり。されど不義の民は彼の懲罰を免るる能はず』と云へ

(1) 食物に対する規定の此の一段は、メヂナ初期の啓示と思はる。それは特に猶太人の禁食に言及せることによつて知るべし。(2) 旧約申命記第三章第一三節、同上第七章第二三節参照。

多神を拜する者曰く『アルラーハ若し欲したりせば、吾等並に吾等の祖先は多神を拜せず、また何物をも禁ぜざりしならん』と。げに彼等以前の者も、吾が憤怒を味ふまでは、豫言者を信ぜざりき。言へ『汝等果して知識を有するか、有らば之を吾等に示せ。汝等は唯だ臆測に従ひ、虚言を事とするにすぎず』と云。言へ『アルラーハの論證は最後の論證なり。彼若し欲したりせば、擧りて汝等を導きたりしならん』と云。言へ『アルラーハが此事を禁じたりと立證する証人を伴ひ来れ』と。設ひ彼等證言するとも、汝は彼等と共に證言する勿れ、また吾が休徴を虚偽なりとし、末世を信せず、其主に同位者を配する者の欲求に従ふ勿れ云

言へ『いざ吾は汝等の主が汝等に命じたることを誦出せん。何者をも彼に配する勿れ、汝等の父

母に懇切なれ、貧困の故を以て汝等の子女を殺す勿れ、吾は汝等と彼等とを養ふべし。公然にても秘密にても猥みだらなることに近づく勿れ、正当なる理由なくしてアルラーハが禁じたる者を殺す勿れ。これ彼が汝等に命ずるところなり、汝等之を曉らん^三 孤兒が成年に達するまで之を増殖するためならでは其の財産に触るる勿れ。度量衡を充分にし且公正にせよ。吾は何人にも其の能力以上のものを課せず。汝等発言する時は、設ひ近親のためなりとも必ず公平なれ。これ彼が汝等に命ずるところなり、汝等訓誡を守らん^三 此れ吾が直き道なるを知れ。さらば之に従へ。汝等を主の道より離れしむる如き道に従ふ勿れ。恐らく汝等其身を護らん^三

(一) 本節以下本章終節まで、概ねメヂナ啓示なるか、又はメヂナ遷都後に訂正を加へられたるメツカ諸節なりと思はる。

われモーゼに經典を與へたり。これ善事を行へる者に対する重賞なり。そは一切の闡明なり、嚮導にして慈悲なり。恐らく彼等は其主との会見を信ぜん^三

こは吾が降せる祝福せられたる經典なり¹。されば之に従ひて其身を護れ、恐らく汝等慈悲に浴せん^三 此れ汝等をして『經典は吾等以前に唯だ二つの党侶とものがらにのみ降されたり。されど吾等は心を籠めて之を学ばざりき』²と言はしめざらんがためなり^三 そはまた汝等をして『若し吾等に經典降さ

れなば、吾等は彼等よりも善く其の嚮導に従ひしならん』と言はしめざらんがためなり。いま汝等の主よりの證據、即ち嚮導と慈悲と汝等に来れり。さらばアルラーハの休徴を虚偽なりとし、之を忌避するよりも甚だしき悪事を行ふ者あるか。吾は吾が休徴を忌避する者に対し、その忌避せることのために重刑を以て報ゆべし^二。彼等は唯だ諸天使の来るを待ち、汝の主の来るを待ち、また汝の主の休徴の来るを待つあるのみ^三。而して主の休徴の来る日には、豫てより信じ、信じて善事を積み来れるに非ずば、遽かに帰信するとも何人をも益せず。言へ『期待して待て、吾もまた待つ』と^二

(1) 古蘭を指す。(2) 猶太人と基督教徒とを指す。(3) 諸天使の来るは神命を執行するため、主の来るは最後審判のためなり。而して此處の『休徴』は恐らく末日に先行する天変地異のことを指す。此の一段の啓示の対象は猶太人及び基督教徒にして、そのメチナ啓示なること殆ど疑なし。

其¹教を分ちて宗派となせる者に対して、汝は毫も関はるところなし。彼等の事はアルラーハの掌中にあり。やがて彼は彼等に向つて其の爲せることを告知すべし^三。一善を行ふ者は之に十倍する報賞を受く。されど一悪を行ふ者は、唯だ之に等しき応報を受くるのみにして、毫も不当に遇せらるることなし^二。言へ『吾がことを言へば、主は吾を正しき道に、即ち堅信者^{ハニール}にして多神教徒なら

ざりしアブラハムが信仰せる正しき教に導きたり』と云 言へ『吾が礼拜、吾が献祭、吾が生死は、三界の主アルラーハの掌中にあり云 彼には如何なる同位者もなし。吾は是く命ぜられたり。吾は^{ムスリム} 歸命者の^{さきかへ} 首先たらん』と云 言へ『既にアルラーハの萬物の主なるを知る。吾豈彼の外に主を求めべけんや。積む者は己れに積むなり。何人も他の荷を負ふこと能はず。汝等は主に歸らしめらる。其時彼は汝等が相争へることについて告知すべし云 汝等を以て地上の^{カウレウヤ} 代理者となし、汝等の或者をして其の位階を他よりも高からしめたるは彼なり。これ彼が其の賜へるものによつて汝等を試みんがためなり。げに汝の主は懲罰に神速なれど、また宥恕者・大慈者なり云

(一) 此の一段は恐らく遷都二年の啓示なり。

第七 高 壁 章

メヅカ啓示

第四六節に『高壁の上に人あり、其の記号によつて悉く各人を識別す』とあるに因みて高壁章 Al-Araf と名づく。高壁とは樂園と地獄とを隔つる墻壁なり。本章は三個の重要たる部分より成り、第一は人間の創造並に其の失樂園について、第二はアララーハの使者を拒めるがために滅び去れる幾多既往の民族について、第三は主としてモーゼについての物語なり。前章と同じくメヅカ末期の啓示とせられ、ムイアは之をメヅカ期最後のものとし、ネルデケ及びロツドウェルは前章即ち第六章の前に第四十章を、而して該章の前に本章を置く。但し本章の諸節にもメヅカ初期の啓示に属するもの多く、またメヅカ啓示にして遷都後に加筆訂正せられたりと思はるる諸節多きこと、前章と同じ。

大悲者・大悲者アルラーハの名によりて

アリフ・ラーム・ミーム・サードー　こは汝が之を以て警告を與へ、且信者への訓誡ツイクルたらしめんがために汝に降されたる經典なり。されば之がために汝の胸を窄くすること勿れニ

汝等の主より汝等に降されたるものに従ひ、彼以外の愛護者に従ふ勿れ。げに汝等は殆ど訓誡に従はずニ　吾は如何に多くの都府を滅ぼせることぞ。或は夜陰の間に、或は午睡の時に、わが震怒

は彼等の上に降りり^四 而して吾が震怒が彼等に降れる時、彼等は唯だ『げに吾等は不義者なりき』と叫喚するのみなりき^五 げに吾は使者を遣はされたる者を訊問し、且遣はせる諸使者をも訊問すべし^六 吾は確實なる知識を以て彼等に其の爲せることを告知せん。吾は彼等と偕にありしなり^七 其日の衡量は公正なり。秤^{はかり}衡重き者は必ず榮ゆべし^八 而して秤^{はかり}衡軽き者は、吾が休徴を信ぜざりし罪によつて其身を滅ぼせる者なり^九

・ (一) 樂園と地獄との間に巨大なる『秤^{はかり} Nizkor』あり、各人の行狀即ち『爲せること』が此秤にかけらる。多くの善行によつて秤^{はかり}衡重き者は即ち樂園に入り、軽き者は地獄に墮つ。

吾は地上に汝等を定住せしめ、其処にて生計の道を與へたり。然るに汝等は殆ど感謝せず。吾は汝等を創造せり、然る後に汝等に形体を與へたり。然る後に吾は諸天使に向つて『アダムに叩首せよ』と告げたり。而してイブリースの外は皆な叩首せり。唯だ彼のみは叩首者のうちに加はらざりき^二 主曰く『われ汝に命じたるに、何故に汝は叩首せざるか』。彼曰く『吾は彼に勝る。汝は火にて吾を造り、泥にて彼を造れり』^三 彼曰く『此処より退れ、此処にては汝の傲慢を許さず。さらば立ち去れ。げに汝は賤しき者の一人となるべし』^三 彼曰く『彼等が甦らしめらるる日まで

吾を猶豫せよ』^二 彼曰く『汝は猶豫せらるる者のうちに加へらる』^三 彼曰く『汝は吾を誘はし

黃濱市圖書館

めたるが故に、吾は汝の道に坐して彼等の来るを待ち^六 前後左右より彼等を襲はん。汝は彼等の

多くが忘恩者なるを知るべし』^七 彼曰く『^{おと}貶され逐はれて此処より去れ。若し彼等のうち汝に従

ふ者あらば、吾必ず汝等一同を以て地獄を充滿せしめん^八 またアダムよ、汝と汝の妻とは樂園に

住み、隨處に汝等の好むものを食へ。唯だ不義者とならざらんために此樹に近づく勿れ』と云

然るにサタン彼等に囁きて、彼等に隱されたる羞かしき處を彼等に示したり。而して曰く『主が

此樹を汝等に禁じたるは、汝等を天使又は不死者たらしめざらんがためなり』と云 而して彼は

兩人に誓つて言へり『吾こそ善き助言を汝等に與ふる者なれ』と云 是くて彼は彼等を欺きて墮落

せしめたり。彼等此樹を味ふや、其の羞かしき處を知り、果園の樹葉を縫ひて其身を蔽ひ初めたり。

其時主は彼等と呼ばて曰く『吾は此樹を汝等に禁ぜざりしか、またサタンは汝等の公然の敵なりと

告げざりしか』^三 彼等曰く『吾等は誤れり。若し汝の宥恕と慈悲となくば、吾等必ず淪喪者とな

らん』^三 彼曰く『汝等立ち去れ。汝等は互に仇敵たらん¹。地上には汝等の住処あり、また時至る

まで樂しき生活あり』と云 彼また曰く『汝等は其處に生き、其處に死し、其處より甦らしめらる

べし』と云

(1) 人間を代表するアダムとエバに向つて、人類の常に争鬪すべきことを告げたるなり。此時アダムは天上の樂園より印度のセーロン島に落ち、エバはアラビアのジッダ附近に落ちたりしが、其後二百年を経てアダムの懺悔納れられ、天使ガブリエル彼を導きてメッカ近郊の一丘上に伴ひ、此処にてエバと再会せしめたり。そのために此丘は『アラファート Arafat』即ち『会合山』と呼ばれる。其後アダムはエバを伴ひて再びセーロン島に歸れりとせらる。

アダムの兒等よ、吾は羞かしき処を蔽ふ衣と美しき衣裳とを汝等に與へたり。されど敬虔こそ最勝の衣裳なれ。これアルラーハの休徴の一なり、彼等恐らく訓誡を受けんま。アダムの兒等よ、サタンに誘惑せらるる勿れ。彼は曾て汝等の父母に其の羞かしき処を知らしめんがために彼等の衣を奪ひ、遂に樂園より放逐せらるるに至らしめたり。彼並に彼の一族は、汝等には見えざる処より汝等を見る。而して吾はサタン等を以て信ぜざる者の愛護者たらしめたりま。彼等は猥ふる事を行ふに當りて言ふ『吾等は吾等の祖先が之を行ふを見たり。而してアルラーハは之を吾等に命じたり』と。言へ『アルラーハは断じて猥なる事を命ぜず。汝等はアルラーハに対して己れの知らざることを言ふか』と云。言へ『吾主は公道を命じたり』と。されば一切の禮拜の場処に於て汝等の面を正しく向け、専ら彼に歸命して彼に祈れ。彼が汝等を創れる如く、汝等は復た彼に歸るま。彼は或者

を導き、或者をば当然その迷ふに委ねたり。げに彼等はアルラーハを舍きてサタンを愛護者とし、而も自ら正しく導かるとするものなり言　アダムの兒等よ、如何なる礼拜の場処にても汝等の服飾に留意せよ、而して食ひ且飲め。但し過度なる勿れ。げに彼は度を過ごす者を歡ばず三　言へ『誰かアルラーハが其の僕等のために造れる服飾並に其の賜へる美食を禁じたるか』と。言へ『復活の日に於て、此等のものは現世にて信者となれる者のみに限らる』と。吾は是くの如く知識ある民のために吾が休徴を明示す三　言へ『げに吾主は公然並に秘密の醜行と、罪惡と、非理の迫害とを禁じ、またアルラーハが如何なる權威をも與へざる者を彼に配することを禁じ、且アルラーハについて汝等が己れの知らざることを言ふことを禁ず』と三

一切の民には一定の期限あり。期限至れば一刻も後に遅るるを得ず、また先に進むを得ず言　アダムの兒等よ、若し汝等の間より出でて吾が休徴を傳ふる使者が汝等に来らば、其時其身を護りて善事を行ふ者には、畏怖なく憂懼もなかるべし三　されど吾が休徴を虚偽なりとし、傲然として之に背き去る者は、即ち火獄の徒にして、永劫に其中に住まん三　凡そアルラーハについて虚偽を弄し、又は吾が休徴を虚偽なりとするよりも甚だしき不義あるか。吾が諸使者が、彼等を迎ふるために彼等に至る時、經典中の彼等に関する部分が彼等に傳達せらるべし¹。其時彼等は言はん『ア

ルラーハを舍きて汝等が常に拜し来れる者はいま何処にありや』と。彼等は答ふべし『彼等は吾等を棄てて去れり』と。かくて彼等は自ら其の不信者たりしことを立証す。彼は言はん『汝等以前に逝きたる幽鬼と人間との団体に混りて火獄に入れ』と。而して一団体の火獄に入る毎に、必ず姉妹の団体を呪ひ、逐次之に入り終るや、最後の団体は最初の団体に向つて言はん『主よ、吾等を迷はしめたるは彼等なり。されば火獄の刑罰を倍加せよ』と。彼は答へん『各團皆な刑罰を倍加せらる。汝等之を知らざるのみ』と云。而して団体の最後のものは最初のものに向つて言はん『汝等は毫も吾等に勝るところなし。されば汝等が積みたることに對する懲罰を味へ』と云。

【1】『吾が諸使者』とは死の天使等と言ひ、『迎ふる』とは其人の魂を取り去りて之を死なしむることを言ひ、『經典中の一部』とは不信者のために定められたる刑罰に関する部分を言ふ。

げに吾が休徴を虚偽なりとし、傲然として之に背き去る者には、天門断じて開かれず。駱駝が針の孔を通るに非ずば、彼等決して樂園に入るを得ざるべし¹。吾は是くの如くして作惡の者に報ゆ。地獄に彼等の臥床あり、上には烈火の幔幕あらん。吾は是くの如くにして不義者に報ゆ。信じて善事を行ふ者——吾は何人にも其の能力以上のものを課せず——此等は樂園の党侶にして、長久に

其中に住まん^三 吾は一切の怨恨を彼等の胸中より除くべし。彼等の下には河川流る。彼等は言はん『吾等を此処に導きしアルラーハを讃へよ。若しアルラーハ導かざりせば、吾等は決して正しく導かれざりしなり。吾等の主の諸使者は眞実を傳へたり』と。而して彼等はく告げらるべし『こは樂園なり。汝等は其の爲せることのために樂園の繼承者となれるなり』と^三

【1】新約馬太傳第一九章第二四節参照。但し此の譬喩は東方に於て尋常茶飯に用ゐらるるものなるが故に、必ずしもイエスの言を襲用せるものとなすべからず。

樂園の党侶^{ともがら}は火獄の党侶に向つて言はん『吾等は吾等の主の約束の眞実なるを見たり。汝等も汝等の主の約束の眞実なるを見たるか』と。彼等『然り』と答ふべし。其時一人の布告者あり、両者の間にありて呼んで言はん『アルラーハの呪咀、不義者の上に降り^四 彼等は人をアルラーハの道に背かしめ、之を歪めんとせる者にして、また末世を信ぜざりし者なり』と^三

両者の間に隔障あり、而して高壁^{アラバ}の上に人あり、其の記號によりて悉く各人を識別す。彼等は樂園の党侶を呼んで言はん『平安汝等の上にあれ。彼等は望めども入るを得ず』と^四 其時彼等其目を火獄の党侶に轉じて言はん『主よ、吾等を不義の民に共に居らしむる勿れ』と^五 高壁の人、記

號によつて識別せる人々に向つて言はん『汝等が積める富と汝が示せる傲慢とは、共に汝等を益せざるに非ずや』汝等がアルラーハは決して彼等に慈悲を垂れずと誓へるは此等の人々なるか』と。(而して此等の者に向つて言はん)『汝等樂園に入れ。汝等には畏怖なく憂懼もなかるべし』と咒 火獄の党侶は樂園の党侶を呼んで言はん『多少の水か、又は何なりともアルラーハが汝等に賜へるものを吾等に注げ』と。彼等之に答へて言はん『アルラーハは堅く此の兩者を不信者に禁じたり』と吾 彼等は己れの教を以て娛樂遊戲となし、且現世の生活に欺かれたる者なり。されば彼等が己れの此日の会見を忘れ、わが休徴を認めざりし如く、今日吾は彼等を忘れ去らん』

げに吾は經典を彼等に齎したり。吾は知識を以て之を闡明せり。そは信する者への嚮導にして且慈悲なり』いま彼等は其の実現を待つ外に何事を待つか。而して其の実現せらるるに及んで、曩に之を忘れ居たる者は即ち言はん『げに主の諸使者が傳へたることは眞実なり。吾等のために宥恕を求むる勸解者なきか。又は曾て爲せる事に非ざることを爲すために、再び現世に還らしめられ得べきか』と。彼等は其身を滅ぼせる者なり。而して彼等が虐構せる神々は彼等を棄てて去らん』

げに汝等の主はアルラーハなり。彼は六日の間に天地を創造し、然る後に王座に登れり。彼は夜を以て晝を覆はしむ。夜は^{あはただ}速しく晝を追ふ。彼は日月星辰を其命に従はしむ。嗚呼、創造し命令する

は彼の事に非ざるか。三界の主アルラーハを祝福せよ。心を虚しくして密かに汝等の主に祈れ。彼は矩を越ゆる者を欣ばず。既に秩序を與へられたる後に地上を案すること勿れ。畏敬し仰望して彼に祈れ。げにアルラーハの慈悲は善行者の近くにあり。

慈悲の傳令者として風を送る者は彼なり。風、重き雲を孕めば、われ之を不毛の地に送りて雨を降し、之によつて一切の果実を生ぜしむ。吾は是くの如くにして死者を甦らしむるなり。汝等恐らく訓誡を受けん。沃土には其主の允許によりて草木繁茂し、惡土には草木僅かに生長す。吾は是くの如く恩を知る民のために諸の休徴を反復す。

吾はノアを其民に遣はしたり。彼曰く『吾民よ、アルラーハに事へよ。彼の外に神なし。げに吾は汝等のために偉大なる日の懲罰を恐る』と。其民のうちの貴人等曰く『げに吾等は見る、汝こそ明白に迷誤の中にあるなれ』。彼曰く『吾民よ、吾は決して迷へる者に非ず。吾は三界の主の使者なり。吾は汝等に吾主の諸の消息を傳へ、善き助言を汝等に與ふべし。吾は汝等が有たざる知識を吾主より賜はれり。いま汝等のうちの一人を通じて、汝等の主の訓誡が汝等に達せるなり。そは汝等を警告し、汝等をして其身を護らしめ、汝等を慈悲に浴せしめんがためなり。汝等之

を驚くか』と云 然るに彼等は彼を虚言者と呼べり。されば吾は彼並に彼と舟を同じくせる者を救ひ、わが休徴を虚偽なりとせる者を悉く溺死せしめたり。げに彼等は盲目の民なり²云

吾はアアド¹の民に其の兄弟²ホードを遣はしたり。彼曰く『吾民よ、アルラーハに事へよ。彼の外に神なし。汝等其身を護らんとせざるか』と云 其民のうちの信ぜざる貴人等曰く『げに吾等は見る、汝こそ明白に愚妄の中にあるなれ。吾等は汝を虚言者の一人となす』云 彼曰く『吾民よ、吾は決して愚かなる者に非ず、吾は三界の主の使者なり云 吾は吾主の諸の消息を汝等に傳ふる者にして、誠実なる汝等の助言者なり云 いま汝等のうちの一人を通じて、汝等を警告せんがために、汝等の主の訓誡が汝等に達せるなり。汝等之を驚くか。主が汝等をしてノアの民の後を繼がしめ、²また汝等の軀軀を巨大ならしめたることを念へ。汝等若し榮えんと思はばアルラーハを念へ』云 彼等曰く『汝は吾等が唯だアルラーハのみに事へ、吾等の祖先が事へ来りし神々を棄てしめんがために来れるか。汝の言眞実ならば、汝が吾等に約束することを示せ』云 彼曰く『汝等の主の報復と憤怒とは必ず汝等を襲はん。汝等は汝等並に汝等の祖先が其の偶像に與へたる名称について吾と爭論せんとするか。げにアルラーハは如何なる權威をも彼等に與へず。さらば待て、吾また汝等と共に待たん』と云 かくて吾は慈悲を垂れ、彼並に彼と共にありし者を救ひ、わが休徴を虚偽なり

とせる者並に信ぜざりし者を殲滅せり³

(1) アアド A'ad 族は古代に於て南アラビアに榮えたる最も有力なる部族とせられ、國をハドラマウトのアカーフ Araf かに建て、初代國王はアアドの子シェダード Shedad なりとせらる。此の國王の豪華なる治世は、アラビア史家及び詩人の最も好んで描写するところにして、その造れるイラム Iram 花園は地上の樂園と称せられたり。(2) ホード Hud は旧約のエベルと同一人なるべしとせらる。創世記第一〇章第二四節参照。(3) アアド族の体軀は巨大にして、身長一丈二尺乃至二丈ありしと傳へらる。(4) 七日八夜に亙る熱風のため、拳國の民、窒息苦悶して悉く死滅し去れりと傳へらる。

吾は¹サムードの民に其の兄弟サーリヒ²を遣はしたり。彼曰く『吾民よ、アルラーハに事へよ。彼の外に神なし。いま汝等の主よりの証據、汝等に来れり³』こはアルラーハの牝駝にして汝等への休徵なり。されば之をアルラーハの大地に放牧せよ。痛刑を受けざらんがために之を虐ぐることを勿れ⁴』主が汝等をアアドの民の後を繼がしめ、汝等を其地に安住せしめ、平地には大履を建て、山を斫りては家となさしめたることを念へ。アルラーハの恩寵を念ひて地上を紊すこと勿れ』と⁵ 其民のうちの傲慢なる貴人等は、彼等が無力視せる信者等に向つて曰く『汝等はサーリヒが主より遣はされたる者なるを知るか』。彼等曰く『吾等は彼が遣はされたる使命を信ず』⁶ 傲慢なる者曰く『吾

等は汝等が信するものを信ぜず』とき、かくて彼等かの牝駝を屠り、其主の命令を蔑視して曰く『サーリヒよ、汝若し真にアルラーハの使者ならば、汝が吾等に約束せることを示せ』とき、かくて地震彼等を襲ひたり。而して翌朝彼等が俯して悉く其家に仆れ居たるを見たりき。彼其民を去りて曰く『吾民よ、吾は吾主の使命を汝等に傳へ、誠実なる助言を汝等に與へたり。然るに汝等は誠実なる助言者を欣ばず』とき。

(1) サムード Samūd 族はもとヤマンに占拠せしが、後にヒムヤール族に逐はれて北上し、シリアに境する北アラビアのアルハジャール Al-Hajar に定着し、アアド族の滅亡後、約二百年に亘りて繁榮せりと傳へらる。(2) サーリヒ Salih はホードとアラハムとの間と出でたる豫言者にして、或は之を旧約のペレグ(創世記一一ノ一六)、又はセラ(同上一一ノ一三)と同人なりとせらる。(3) サーリヒが其民より神使たる証拠として奇蹟を示せと求められる時、岩石の中より一牝駝を出現せしめて之に應じたりとの傳承。

吾はまたロトを遣はしたり¹。彼其民に向つて曰く『汝等は三界の何者も行はざりし淫行を敢てするから。汝等は情欲のために女子に往かずして男子に趨く。げに汝等は放埒の民なり』と云。其民は唯だ是く答へたり『彼等を汝等の市²より逐へ。彼等は純潔を装ふ者なり』と云。かくて吾は彼並

に彼の家人を救へり。但し彼の妻は狐疑跋巡せるが故に之を除けり^三 げに吾は雨¹を彼等の上に降らしめたり。されば罪人の末路の如何なるものなりしかを見よ^四

(1) 旧約創世記にはロトに関する記事に矛盾ありて、彼が豫言者なりしか否かを定め難し。創世記第一八章第二三節、同上第一九章第三〇—三八節参照。但し使徒ペテロは明かに彼を義人とせり、新約彼得後書第二章第七・八節参照。(2) ソドム。(3) 岩石の雨を降らせたりと傳へらる。

吾は¹ミダイアンの民に其の兄弟²シュアイブを遣はしたり。彼曰く『吾民よ、いま汝等の主よりの証據、汝等に未れり。されば汝等充分に計り、公正に量^{はか}れ。民の一物をも騙取する勿れ。既に秩序を與へられたる後に地上を紊すこと勿れ。汝等若し信者ならば、是くするは汝等のために最も善し^全 汝等路頭に坐して脅喝する勿れ。アルラーハを信する者を其道に背かしむる勿れ。また其の歪曲せられんことを望む勿れ。汝等初めは少數の民なりしが、アルラーハが之を衆多ならしめたることを念へ。而して世を紊す者の末路の如何なるものなりしかを見よ^全 若し汝等のうち吾が遣はされたる使命を信する一團と、之を信ぜざる一團とあらば、堅忍してアルラーハが汝等を審判するまで待て。げに彼は最勝の審判者なり』と^全 其民のうちの傲慢なる貴人等曰く『シュアイブよ、

吾等は汝並に汝の信者を市外に放逐すべし。若し之を欲せずば、吾等の信仰に復れ』。彼曰く『吾之を厭ひてもかゝ。アルラーハは汝等の信仰より吾等を救ひたり。若し今にして之に復らば、吾等はアルラーハを偽る者とならん。吾等の主アルラーハが欲するに非ずば、吾等決して之に復るを得ず。主の知識は一切を抱擁す。吾等はアルラーハに頼る。主よ、眞理を以て吾等と吾等の民とを対決せよ。げに汝は最勝の対決者なり』と云。其民のうちの信ぜざる貴人等曰く『汝等若しシュアイブに従はば、汝等必ず淪喪者とならん』と云。かくて地震彼等を襲ひ、翌朝彼等が悉く俯して其家に仆れ居たるを見たり。シュアイブを虚言者と呼べる者は、宛も未だ曾て此処に住めることなかりし如くなれるなり。げにシュアイブを虚言者と呼べる者こそ淪喪者なりけれ。かくて彼は其民を去りて曰く『吾民よ、げに吾は吾主の使命を汝等に傳へ、また誠実なる助言を汝等に與へたり。吾何すれぞ信ぜざる民のために吾心を傷ましめんや』と云。

(1) ミディアアン Midian 族はアブラハムの子ミディアンの子孫にして、シナイ山の東南に位し、紅海に瀕せる同名の都府に拠れる一部族とせらる。(2) シュアイブ Shu'aim は回教神学者によりてモーゼの妻の父とせられ、旧約聖書に Reu el・Rageul・Jethro と呼ばれる者と同一人とせらる。此等の神学者はモーゼが埃及に於て種々なる奇蹟を行へる神秘の杖は、シュアイブが彼に與へたるものなりとす。

われ一都府に一豫言者を遣はす毎に必ず困苦と艱難とを以て其民を苦しめざりしはなし。これ彼等を謙虚ならしめんがためなり。然る後にわれ災厄に代ふるに幸運を以てすれば、彼等大いに繁昌して言へり『吾等の祖先は禍福並び嘗めたり』と。されば吾は彼等の覺らざる間に突如懲罰を加へたり。されど都府の民が信じて其身を護りたりせば、吾は天地の祝福を彼等のために開きしなり。されど彼等之を虚偽なりとせるが故に、吾は彼等の積めることに対して懲罰を加へたり。

深夜彼等が眠れる間に降る吾が激怒に対して、都府の民は果して安心して得るか。白晝彼等が相戯るる間に降る吾が激怒に対して、都府の民は果して安心して得るか。彼等はアルラーハの謀略に対して安心して得るか。滅ぶべき民の外は、何人もアルラーハの謀略に対して安心して得るか。以前の民の後を承けて地を嗣げる者は、吾若し欲しなば彼等の罪惡に対して之を懲罰すべきことを熟知せる筈ならずや。されど吾は彼等の心を封じたれば、彼等は聞くことを得ざるなり。

吾は此等の都府について若干の消息を汝に語れり。諸使者が明証を携へて彼等に来りし時、彼等は最初虚偽なりと言へるものを信ずることを欲せざりき。アルラーハは是くの如く信ぜざる者の心を封ず。彼等の多くは約束を守らず、げに彼等の多くは作惡者なりき。

(1) ベルは前段及び此の一段をメヂナ初期の啓示なるべしとせり。果して然らば前段に於ける『諸都府』とはメヂナ周辺

の諸猶太人邑落を指し、此段に於ける『彼等』とは猶太人を指せるものなり。

彼等の後に吾は吾が休徴を携へてモーゼをファラオ並に其の貴人等に遣はしたり。而して彼等は之を斥けたり。さらば見よ、一切の作悪者の末路の如何なるものなりしかを三三。モーゼ曰く『ファラオよ、げに吾は三界の主よりの使者なり三三。吾はアルラーハに就て眞実の外は何事をも語るを許されざる者なり。いま吾は汝等の主よりの証據を齎して汝等に来れり。されば吾等と共にイスラエルの兒等を去らしめよ』と三三。ファラオ曰く『汝若し証據を齎し来れりとすれば、而して汝の言眞実ならば、先づ之を示せ』と三三。モーゼ即ち其杖を地に抛ちしに、見よそは顯然たる蛇なりき三三。また彼其手を伸べしに、そは看る者に純白に見えたりき三三。ファラオの民の貴人等曰く『げに此は知識ある魔術者にして三三。汝等を己れの國より逐はんとする者なり。汝等如何にせよと言ふか』と三三。彼等曰く『暫く彼並に彼の兄弟を退かしめ、召募者を市中に遣はして三三。一切の知識ある魔術者を汝の前に伴ひ来らしめよ』と三三。

かくて魔術者等ファラオの前に来れり。彼等曰く『吾等若し勝者とならば、必ず吾等に賞與を賜へ』と三三。彼曰く『諾、吾は必ず汝等を吾が側近者たらしめん』と三三。彼等曰く『モーゼよ、汝先

づ抛つか、又は吾等が抛つべきか』と三 彼曰く『汝等先づ抛て』と。かくて彼等其杖を抛つに当り、人々の目を眩惑して彼等を駭懼せしめ、偉大なる幻術を現じたり三 其時われモーゼに默示して『汝の杖を抛て』と言ひしに、見よ其杖は彼等が幻出せしめたるものを呑み去れり三 かくて眞理は現れ、彼等の為せることは空しくなれり三 而して彼等其処にて打負かされ、卑しめられて歸れり二元

魔術者等は匍匐して叩首せり三 彼等曰く『吾等は三界の主三 モーゼとアロンとの主を信ず』と三 フアラオ曰く『汝等わが允許なくして彼を信ずるか。げにこは都民を國外に放逐せんがために汝等が都内にて企らみたる陰謀なり。汝等やがて思ひ知らん三 吾は必ず汝等の手足を反断し、然る後に磔刑に処せん』と三 彼等曰く『げに吾等は吾等の主に歸るべし三 汝は吾等が唯だ吾等に降されたる主の休徴を信ずる故を以て吾等に報復せんとするものなり。主よ、吾等に忍耐を賜へ、吾等をば歸命者として生命を終らしめよ』と三

フアラオの民の貴人等曰く『汝はモーゼ並に其民を放置して國內を紊さしめ、且汝並に汝の神々を侮蔑せしむるか』と。彼曰く『吾等は彼等の男兒を殺して其の女兒のみを生かし置かん。かくして吾等は必ず彼等の彈壓者たらん』と三 モーゼ其民に向つて曰く『アルラーハの佑助を求めて耐

え忍べ、げに大地はアルラーハの有もにして、彼は己れの欲する僕等に之を嗣がしむ。最後の善果は其身を護る者に帰せん』と云。彼等曰く『吾等は汝が吾等に来りし以前にも、また汝が吾等に来りし後も、常に迫害を受く』と。彼曰く『これ汝等の主が汝等の敵を滅ぼし、汝等をして地を嗣がしめ、また汝等の為すところを見んがためなり』と云。

吾は旱魃と果実の缺乏とを以てファラオの民を苦しめ、彼等を反省せしめんとせり云。然るに彼等は幸運至れば常に『是れ吾等のものなり』と言ひ、災厄至れば常に之をモーゼ並に彼と偕にある者より来る凶事なりとなせり。げに彼等の凶事はアルラーハより来れるものに非ざるか。されど彼等の多くは之を知らざりき云。彼等曰く『汝如何なる休徴を示して吾等を眩惑せしめんとするも、吾等は断じて汝等を信する者に非ず』と云。吾即ち蝗と蝨と蛙と血とを彼に降し、明かなる休徴を示したり。されど彼等依然として傲慢にして、遂に作惡の民となれり云。而も彼等災厄に襲はれたる時は即ち言へり『モーゼよ、吾等のために汝の主に祈れ。彼は汝と約束せり。汝若し此の災厄を除かば、吾等必ず汝を信じ、イスラエルの兒等を汝と共に去らしむべし』と云。かくて吾は彼等より其の災厄を除きしが、応に到るべき時到来に及んで、見よ彼等は約束を破りたり云。されば吾は彼等を懲罰して悉く之を海中に溺れしめたり。これ彼等が吾が休徴を虚偽なりとして之を蔑視せる

が故なり云 而して吾は無力視せられたる民をして、吾が祝福せる東西の地²を嗣がしめたり。汝の主の善き言³はイスラエルの兒等の忍耐に對して完うせられ、吾はファラオ並に其民が建てたるもの並に架けたるものを悉く毀ちたり云

(1) アミラーハの懲罰を受くべしと定められたる時期が到来すること。(2) 東西とはパレスチナの東西又はヨルダン河の東西の意味たるべし。(3) 旧約創世記第一七章第八節参照。(4) 架けられたるものとは有架の葡萄園を言ふ。

吾はイスラエルの兒等をして海を渡らしめたり。而して彼等は偶像を奉じて之を拜する民に會へり。彼等曰く『モーゼよ、彼等には多くの神々あり、吾等にも一柱の神を作れ』と。彼曰く『げに汝等は無智の民なり云 げに此等の民が守るところのものは必ず滅ぼさるべく、その為すところは総て空し』と云 彼また曰く『吾豈汝等のためにアルラーハ以外に神を求むべけんや。彼は三界の何者にも勝りて汝等を眷顧せるに非ずや』と云 吾が汝等をファラオの民より救へる時を念へ。彼等は汝等の男兒を殺して女兒のみを生かし、嚴酷なる刑罰を汝等に加へたり。其中に汝等の主よりの偉大なる試練ありしなり云

吾はモーゼに三十夜を命じたりしが、更に十夜を加へて之を満たしたれば、主の定めたる期間は

四十夜を以て満了せり。¹ モーゼ其兄アロンに向つて曰く『汝は吾民の間に吾が代理者たれ。義しく行ひて、作悪者の道に従ふ勿れ』と云²。モーゼわが定めたる時に来れる時、主は彼と語りたり。其時彼曰く『主よ、姿を現して吾をして仰ぎ見せしめよ』と。² 彼曰く『汝は吾を見るべからず。されど山を見よ、山若し依然として舊の如く聳えなば、汝即ち吾を視ん』と。されど主が其の榮光を山に現すや、主は忽ち之を粉碎し、³ モーゼは眩暈して仆れたり。その覺醒するに及んで彼曰く『榮光汝の上にあれ。吾は汝に懺悔して、信者の首先さまがけとならん』と云⁴。主曰く『モーゼよ、げに吾は萬人に超えて汝を選び、吾が使命と吾が言ことばとを與へたり。されば吾が賜へるものを護持し、恩を知る者の一人となれ』と云⁴。

(1) 神はモーゼに律法を賜ふに當り Al-Qa'dah 月(回教曆十一月)三十日間の齋戒を定めしが、齋戒終りし時、更に Al-Hijrah 月(第十二月)の初十日間齋戒せしめたりと言はる。(2) 旧約出埃及記第三三章第一八章以下参照。(3) 傳承によれば神は小指の先端を以て山を粉碎し去れりと言ふ。(4) 神が親しくモーゼに物言へることを言ふなるべし。

吾は彼のために一切の事件に関する訓誡と、一切の事物に関する明晰なる解釋とを諸牌1の上に記し、彼に向つて曰く『之を堅固に護持し、汝の民に命じて其中の最勝のものを守らしめよ。吾は作

悪者の住処を汝等に示さん^一 吾は地上に於て妄りに傲慢なる者をして吾が休徴を忌避せしめん。されば彼等は有らゆる休徴を見るも之を信ぜず、正義の道を見るも之を己れの道とせず、邪曲の道を見れば即ち之を己れの道とせん』と。これ彼等が吾が休徴を虚偽なりとし、之を閑却するが故なり^二 わが休徴並に末世の会見を虚偽なりとする者、此等の者の所有は空無に帰せん。彼等は唯だ其の行へることに対して応報せらるるのみに非ざるか^三

(一) 脾は七枚又は十枚にして、薬園のスイドラ樹の板、又は橄欖石、又はエメラルドにて作られたりとせらる。

モーゼの民、彼去りて後¹、彼等の裝飾品にて鮮黄色の吼ゆる²犢を造れり。彼等は此犢が彼等に物言はず、また如何なる道にも彼等を導かざるを見ざりしか。彼等は之を拜して不義者となれり^三 されど彼等懺悔して其の迷へることを知れる時、彼等曰く『げに吾等の主が慈悲を吾等に垂れて吾等を赦さざりせば、吾等は必ず淪喪者となりしならん』と^四

(一) 神より律法を賜はるためにシナイ山に赴ける後。(二) 鮮黄色の原語 Jasad はまた『体軀』の意味あり。従つて諸

家多く『体軀を具へて吼ゆる犢』となす。されど此時彼等が犢の鑄造に用ひたるは黄金の裝飾品なるを以て、此語を以て、

色の形容なりとせるピクトホールの解釈を妥当とすべし。

モーゼ其民に歸るや、憤り且悲しみて曰く『禍なるかな、吾が去れる後に汝等の為せることは。汝等は主の審判を催促せんとするか』と。彼即ち諸牌を取りて之を抛ち、アロンの髪を掴みて之を己れに引き寄せたり。アロン曰く『吾母の子よ、げに人々吾を無力者なりとし、殆ど吾を殺さんとせるなり。されば吾を辱しめて吾敵を欣ばしむる勿れ。また吾を不義の民のうちに加ふる勿れ』と云。モーゼ曰く『主よ、吾並に吾兄を赦して汝の慈悲に浴せしめよ、げに汝は慈悲者中の最慈者なり』と云。

げにかの體を拜せる者は其主の震怒に触れ、現世にても屈辱彼等に至るべし。吾は是くの如く一切の虚構者に報ゆ。されど惡事を行へる後に懺悔して信仰に入る者は、げに其後は汝の主は宥恕者・大慈者なり云。

さてモーゼの憤怒鎮まれる時、彼は抛ちたる諸牌を拾ひたり。而して其上には一切の主を敬ぶ者のための嚮導と慈悲とが記され居たり云。而してモーゼは、吾と会見するため其民のうちより七十人を選びたり。其時地震彼等を襲ひしかば、彼曰く『主よ、汝若し欲したりせば、夙く既に彼等を亡ぼし、彼等と共に吾をも亡ぼせるなるべし。いま汝は吾等のうちの愚者が為せることのために吾等を亡ぼさんとするか。唯是れ汝の試練なり、汝は之によつて己れの欲する者を迷はしめ、欲す

る者を導かんとす。汝は吾等の愛護者なり。されば吾等を赦して慈悲を垂れよ、げに汝は最勝の宥
恕者なり¹。吾等のために現世並に来世の幸福を登録せよ²。げに吾等は汝に懺悔す」と。彼曰く
「吾は吾が欲する者に懲罰を加ふ。而して吾が慈悲は萬物を抱擁す。吾は一切の其身を護る者、捐
課を納むる者、並に吾が休徴を信する者のために之を登録すべし³。彼等は其の所持する律法並に
福音の中に記されたる無学の豫言者たる使者に隨順する者たるべし。彼は正義を彼等に勧めて不義
を禁じ、一切の佳き食品を許して唯だ不淨なるものを禁じ、且彼等の重荷を除きて其の負荷する一
切の羈絆を解かん。彼を信じ、彼を支持し、彼を援助し、彼と共に降されたる光明に従ふ者、此等
の者は本願成就すべし」と⁴。

(1) 第二章第五節参照。(2) 天上の記録に留めて幸福を豫定すること。(3) 『無学の豫言者 An-Nabi al-Ummi』

はマホメット。神はマホメットの出現をモーゼに默示せるなり。回教神学者は、旧約並に新約聖書の中に、マホメットの出
現を豫言せる幾多の個処ありとなす。例へば以下。旧約申命記第一八章第一五—一八節、同上第三三章第二節。新約馬太傳第
一三章第三一節、同上第二二章第三三—四四節、馬可傳第一二章第一—二節、路加傳第二〇章第九—一八節、約翰傳第一
章第二二節、同上第一四章第一六第二六節等々。而して『無学』の原語 Ummi は三義あり、第一は謔み且書き得ざる者、第
二はアラビア出身者、第三はメッカ出身者。されば学者のうちには之を第二の意味に解し、アラビア出身の豫言者とする者
あり。例へばベルが The Native Prophet と英訳せるが如し。予は古蘭第二九章第四八節に、ガブリエルがマホメットに

向つて『以前汝は如何なる書籍をも読まず、また右手を以て如何なる文学をも書かざりき』と言へるに従ひて、之を文盲者の意味にとれり。(4)ネルデケは此の一句はメチナの「輔士」^{アシヤール}を対象とするものとなせり。独り此の一句のみならず、モーゼに関する物語の後半はメチナ啓示なりとすべし。

言へ『人々よ、吾は汝等全体へのアルラーハの使者なり。天地の大権は彼に属す。彼の外に神なし。彼は生かし且死なしむ。さればアルラーハ並に其の使者、即ちアルラーハ並に其言を奉ずる無学の豫言者を信じて之に従へ。然らば汝等正しく導かれん』と云

モーゼの民のうち、眞理を以て人を導き、之によつて正義を行へる一團ありき云 而して吾は之を十二の民に別ちたり。モーゼの民が水を彼に求めたる時、われ彼に默示して『汝の杖にて岩を打て』と告げしかば、十二の泉此岩より湧き、各族皆な其の飲むべき処を知れり。吾また白雲を以て彼等の上を覆ひ、マナと鶉とを降して『わが汝等に與ふる佳き物を食へ』と告げたり。彼等は如何なる害をも吾に加へざりき。彼等は唯だ己れを害したるのみ云

わが彼等に向つて是く言へる時を念へ『汝等此市^{まち}に住み、隨処に己れの好む物を食へ。また[△]赦し給へ』と唱へ、敬礼して門を入れ。吾は汝等の罪を赦し、善事を行ふ者には報賞を加へん』と云

然るに彼等のうちの不信者は、他語を以てわが彼等に告げたるものに代へたり。さればわれ彼等の不義に対して天譴を降したり^三

(1) 第二章第五八・五九節。

海浜の町について彼等に問へ。彼等は安息日を破れり。安息日には鮮魚水に浮んで至りしに、彼等が安息日を守らざりし時は、鮮魚もまた来らざりき。かくて彼等は作悪者なりしが故に、われ之を試みたるなり^三。其時彼等のうちの一團は曰く『何故に汝等はアルラーハが之を亡ぼさんとし、又は嚴罰を以て之を罰せんとする民に向つて訓誡するか』と。彼等曰く『汝等の主の前にを証明^{あかり}を立てんがため、また彼等をして其身を護らしめんがためなり』と^三。されば彼等が其の與へられたる訓誡を忘れたる時、吾は彼等のうち悪より遠ざかれる者を救ひ、悪事を行へる者は嚴刑を以て其の行へる悪事を罰したり^三。彼等が其の禁ぜられたることを無視せる時、われ彼等に向つて言へり『蔑まれ憎まるる猿となれ』¹と^三。

(1) 第二章第六五節。

汝の主が彼等に宣告して、彼は復活の日まで嚴酷なる刑罰を彼等に課する者を彼等に遣はさんと
言へる時を念へ¹。げに汝の主は罰すること神速なり。而も彼はげに宥恕者・大慈者なり²。吾は地
上に於て彼等を諸族に別ちたり²。而して其の或者は義しく、他は之に次ぐ。吾は彼等を懺悔せしめ
んがため、幸運と災厄とを以て之を試みたり云

(1) 旧約申命記第二八章第四九・五〇節参照。(2) 此の一句は『地上の諸國の間に分散せしめたり』との意味にもとら
る。予は『十二の各別の支族とせり』との意味に解したり。

彼等の子孫其後を嗣ぎて經典を繼承せり。彼等は『こは吾等に赦さるべし』と言ひて、専ら現世
の儚き利得を擲む¹。而して同然の利得が提供せらるる時はまた之を受く。アルラーハについて眞実
の外は何事をも語らずとは、經典に於て彼等と結ばれたる約束に非ざるか。而して彼等は經典に記
されたることを精讀せるに非ざるか。されど其身を護る者にとりては、末世の住処こそ最勝なれ。
汝等尙ほ曉らざるか云 而して經典を護持し、礼拜を守る者は——げに吾は正義を行ふ者への報賞
を空しくせず云

(1) 猶太人が經典を曲解して賄賂を取り、高利を貸ることを言ふ。『こは赦さるべし』とは己れの所行の惡事なるを知れ

るなり。されど機会あれば常に同様の悪事を繰返す。

われ山を被覆おほひの如く彼等の上に擡げ、彼等其の己れの頭上に落ちんことを恐れたる時を念へ。其時吾曰く『汝等其身を護るために、わが汝等に賜へるものを堅固に護持し、其中に記されたることを常に念頭に置け』¹とモ

【1】第二章第六三節。

汝の主がアダムの兒等の腰部より彼等の子孫を取り出だし、彼等をして己れ自身の証人たらしめたる時を念へ¹。其時彼曰く『吾は汝等の主に非ざるか』と。彼等曰く『然り、吾等は之を証言す』と。こは復活の日に当り、汝等をして『吾等は此事を閑却せり』と言はざらしめんがためなりモ。また『アルラーハに神々を配したるは吾等の祖先にして、吾等は其の以後の子孫なり。汝は虚妄を追へる者が為せることのために吾等を亡ぼさんとするか』と言はざらしめんがためなりモ。吾は是くの如く休徴を明示す。これ彼等の懺悔せんことを欲するが故なりモ。

(1) 傳承は是の如く言ふ。初めアルラーハはアダムの背を打ちて、其の腰部より復活の日まで此世に生れ出づべき無数の

子孫を産ましめたり。此等の人間は蟻よりも小さき者なりしが、諸天使の面前に於てアルラーハに対する信仰を表白したる後、再びアダムの腰裡に復歸せしめられたりと。

われ休徴を降したるも、彼之を棄て去れるために、サタン之に追隨して遂に迷路者の一人となる者の消息を彼等に傳へよ¹ 吾若し欲したりせば、之によつて彼を向上せしめたるなり。されど彼は地上に執着して己れの私欲に従へり。譬ふれば彼は猶ほ犬の如し。犬は之を毆つも舌を垂れ、之を放置するもまた舌を垂る。わが休徴を信ぜざる民もまた是くの如し。彼等を曉らしめんがために此の消息を彼等に語れ² わが休徴を虚偽なりとし、其身を誤る者の譬喩は惡むべきかな³ げにアルラーハが導く者は正しく導かれ、アルラーハが迷はしむる者は淪喪者となる⁴。

(1) 異説ありて定め難けれど、バイザール、ジャラール、ディーン等によれば、カナン人バラーム Balaam の消息なりとせらる。バラームは經典に通じ、神籠によつて天啓をも與へられたる修道者なりしが、カナン人は彼に向つてモーゼ並に其民を呪咀せんことを求めたり。初めバラームは之を拒絶せしが、巨額の贈與を受けて遂に之を承諾し、モーゼ並に其民を呪咀したり。然るに彼が其の呪咀を始むるや、其舌宛も犬の如く長く垂るに至れりと言ふ。但しベルは此の物語は、旧約前列王記略第一三章の神に背ける豫言者、又は新約テモテ前書第一章第二〇節、テモテ後書第四節第一〇節、ヒリビ書第三

章第二節等に見ゆる基督教の説話と関聯するものなるべしとなせり。

げに吾は地獄に入るべき多くの幽鬼と人間とを創りたり。彼等は心あれども悟らず、目あれども見ず、耳あれども聞かざる者なり。彼等は宛も家畜の如し、否な家畜よりも遠く迷へり。彼等は懈怠者なり^三

アルラーハには最勝の名號あり。されば汝等之を以て彼を喚べ¹。彼の名號を瀆^{けが}す者を意に介する勿れ。げに彼等は其の為せることに対して報いらるべし^二

(一)アルラーハは無限の徳性を具足せるが、古蘭は其の九十九を挙げて之を『尊称 Al-Asma'ul-Husna』と呼ぶ。即ち『最勝の名号』なり。此の一節の啓示に従ひ、回教徒は此等の尊称を以てアルラーハを呼ぶ、例へば神助を求むる場合は『守護者 Al-Hafiz yo』と呼び、罪の赦免を乞ふ場合には『宥恕者 Al-Afw yo』又は『允懺悔者 At-Tawab yo』と呼ぶが如し。

また吾が創れる者のうちには、眞理を以て人を導き、之によつて正しく行ふ民あり^二。されど吾が休徴を虚偽なりとする者は、われ彼等の知らざる処より徐ろに彼等に忍び寄らん^三。吾は彼等に

猶豫を與ふるも、吾が劃策は必ず効を奏せん^{二三} 彼等尙ほ反省せざるか、彼等の伴侶は決して憑かれたる者に非ず^一。彼は明白なる警告者なり^二 彼等は天地の廣袤と、アルラーハが創れる萬物とを見ざるか。また彼等の壽命が恐らく終末に近かるべきことを思はざるか。彼等は此の古蘭の後に果して如何なる教説を信ぜんとするか^三 アルラーハが迷はしむる者には如何なる嚮導もなし。彼は彼等を放任して迷路に彷徨せしむ^四

(一) 伴侶とはマホメットを指す。メッカ市民が彼を『憑かれたる者』と言へるを見るべし。

彼等は汝に向つて重大事の来るは何時と定められたるかと問はん。言へ『之を知る者は唯だアルラーハあるのみ。時到りて之を現出せしむる者は彼の外になし。そは天地の重大事にして、其の来るや突如ならん』と。彼等は汝が之について熟知せるかの如く問はん。言へ『之を知るは唯だアルラーハあるのみ。人々多くは之を知らず』と^五 言へ『アルラーハが欲するに非ずば、吾は己れの利害を左右する力なし。吾若し不可見のもの知識を有したりせば、吾は大なる幸福を得て、災厄に遭ふことなかりしならん。吾は唯だ一警告者にして、また信者への吉報傳達者にすぎず』と^六

單一の人間より汝等を創造し、汝等と同棲せしむるために其妻を創造せる者は彼なり。かれ其妻を御したる時、彼女は軽き荷を負ひて、其荷と共に往來せり²。其荷重さを加ふるに及んで、彼等兩人其主を喚んで曰く『汝若し佳き兒を吾等に授けなば、吾等必ず感謝を献げん』と云ふ。彼は佳き兒を彼等に授けたり。然るに彼等⁴は彼が彼等に授けたるに對して、同位者を彼に配したり。されど彼は高く彼等が彼に配する者の上に超在す。彼等は彼等自身が造られたる者にして、己れは何者をも造り得ざる者なり。是くの如き者をアルラーハに配するとは何事ぞや。彼等には彼等を助くる力なく、己れ自身をさへ助くる力なし。されど設ひ汝等彼等を正道に招ぐとも、彼等は汝等に従はざるべし。されば汝等之を呼ぶも又沈黙を守るも、彼等にとりて畢竟一なり。

(1) 妊娠せることを言ふ。(2) 胎兒を宿せるままに行動すること。(3) 胎兒次第に成育し來れること。(4) 此處の『彼等』はアダム夫婦に非ず、其の子孫を指せるものとすべし。

げにアルラーハ以外に汝等が祈る神々は、汝等と等しく彼の奴僕なり。汝等の言眞実ならば、彼等に祈りて汝等に應へしめよ。彼等に歩む脚あるか、握る手あるか、視る目あるか、聽く耳あるか。言へ『汝等がアルラーハに配する者を呼びて、吾に向つて策謀せよ。吾を容赦すること勿れ。』

げにわが愛護者は經典を降せるアルラーハなり。彼は正義を行ふ者を愛護す^{二六}。汝等が彼以外に拜する者は、決して汝等を助くる能はず、また己れ自身をだに助くる能はず』と^{二七}。されど汝等設ひ彼等を正道に招ぐとも、彼等は耳傾けざるべし。汝は彼等が汝を視つつあるを見ん。されど彼等は見ざるなり^{二八}。

寛容なれ。善事を勧め、無智者より遠ざかれ^{二九}。設ひサタンの讒誣が汝を悩ますとも、加護をアルラーハに求めよ。げに彼は能聞者・能知者なり^{三〇}。げに其身を護る者は、サタンの誘惑来る毎に、常にアルラーハを念ず。げに其時彼等は明かに視る^{三一}。されどサタンの兄弟等¹は、更に遠く彼等を迷はしめ、停止する所なし^{三二}。

(一) 人間のうちのサタンの党侶を指す。

汝が一個の休徴をも彼等に示さざりし時、彼等は『何故に汝は之を求めざるか』と言へり。言へ『吾は唯だ吾主より默示せらるることに従ふのみ。こは汝等の主よりの明証にして、信する者への嚮導並に慈悲なり』と^{三三}。されば古蘭が讀誦せらるる時は、汝等慈悲に浴せんがために、之に耳傾けて靜肅にせよ^{三四}。

朝な夕な心を虚しくし、畏れ敬ひ、声を低くして心にアッラーハを念ぜよ。懈怠者の一人となる
勿れ_五

汝の主と偕に在る者は、傲慢にして彼に事へざる如き者に非ず。彼等は彼を讚美し、其前に叩首
す_{三〇}

【1】諸天使のこと。

第八 戦利品章

メヂナ啓示

第一節に『戦利品はアルラーハ並に其の使者に属す』とあるに因みて戦利品章 Al-Anfar と名づく。主としてバドル役前後即ち遷都二年の啓示なれども、其の以後のものも尠からず。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

彼等戦利品について汝に問ふ。言へ『戦利品はアルラーハ並に其の使者に属す。されば汝等アルラーハを敬ひて汝等の係争を処理し、且汝等信者ならば、アルラーハ並に其の使者に従へ』¹と一

(一)バドルの戦勝後、戦場に馳駆せる壯者と、軍旗の下に残れる老者との間に、戦利品の分配について激しき議論を生じ、前者は後者が分配に與る権利なしと言ひ、後者は有りとして互に相争へり。此の啓示は其時に降れるものとせらる。

信者とは、アルラーハの名の唱へらるるを聞きて其胸は敬畏に戦き、其の休徴の復誦せらるるを聽きて信心を深め、其主に信賴し^二 礼拜を守り、わが賜へるものより喜捨する者を謂ふ^三 此等

は眞実なる信者なり。彼等は其主の許にて高き位階と、宥恕と、高貴なる糧餉とを賜はらん^四

汝の主が眞理のために汝を其家より出でしめたる時^一、げに一部の信者は之を厭惡せり^五。彼等は宛も目の当り死に驅られたる者の如く、既に眞理が明示せられたる後に^二、尙且之について汝と相争へり^六

(一) マホメットがアルラーハの命を奉じてメヂナの家を出で、バドルの戦場に向へることを言ふ。(二) 啓示によりて出征の必要並に勝算が明示せられたる後に、信者の或者は戦争を忌避したるを言ふ。

またアルラーハが、^一二個の團躰のうち一個は汝等の有たるべしと約束せる時を念へ。其時汝等は武装せざる一團を己れの有とせんことを望みたり^二。而してアルラーハは、己れの言の眞実なるを立証し、且不信者の根を絶たんとせり^三。そは設ひ罪人が之を厭ふとも、アルラーハは眞理の眞実なるを立証し、虚偽の虚偽なるを示さんと欲したるが故なり^ハ

(一) 二個の團躰とは、一はアブー・スファーンに率ゐられ、貨物を満載してシリアよりの帰途にありし隊商、他は此の商隊を救援せんがために北上せる精銳なるメッカの軍隊。(二) 信者の或者はメッカ軍との戦闘を避け、唯だ隊商を襲ひて商獲品を得んことを望みたり。時にメッカ軍は嚴に武装せる約一千の兵力なりしが、商隊の護衛は約三十人にすぎざりき。

汝等が佑助を汝等の主に求めたる時を念へ。其時彼は応へたり『吾は列伍相続く一千の天使を以て汝等を助けん』と云。アルラーハは唯だ之を以て汝等への吉報たらしめ、之によつて汝等の心を安んぜんとせるのみ。勝利は唯だアルラーハのみより来る。げにアルラーハは偉力者・聰明者なり。其時彼は汝等に安靜を賜ひて微睡に陥らしめ、また天より雨を降して、之によつて汝等を潔め、サタンの不浄を祓ひ、汝等の心を強め、また之によつて汝等の脚を堅めんとせり¹。其時汝の主は諸天使に默示して曰く『吾は汝等と偕にあり。されば信する者をして毅然たらしめよ。吾は信ぜざる者の胸中に恐怖を投ぜん。其時汝等は彼等の頭を刎ね、其指を断て』と云。これ彼等がアルラーハ並に使者に抗せるが故なり。苟くもアルラーハに抗する者は、げにアルラーハの懲罰嚴厲なるべし²。『これなり汝等の刑罰は。さらば之を味ひて不信者のために火獄の刑罰あるを知れ』云

(1) 天より雨を降すとは、バドル会戦の前夜に降雨ありて回教軍は飲料水に対する心配を除かれし上、砂濕りて行軍に便とされるを言ふ。サタンの不浄とは、陣中の或者が渴を憂へたるをサタンの影響とせるなり。

汝等信者よ、汝等不信者の進撃し来るに会ふとも、其背を彼等に向くる勿れ³。轉戦か又は本隊に合するため非ずして、此日其背を敵に向くる者は、何人たるを問はず必ずアルラーハの怒に触

れ、その住処は地獄なるべし。そは悪き行先なり云

げに汝等が彼等を殺せるに非ず¹、アルラーハ之を殺せるなり。また汝が投げたる時、之を投げたるは汝に非ずしてアルラーハなり²。これ彼が彼より出づる善賞³を信者に賜はらんがためなりき。げにアルラーハは能聞者・能知者なりモ 實に是くの如し。アルラーハは不信者の策謀を無力ならしむ云

(1) 『汝等』とは回教軍、『彼等』とはメッカ軍を指す。(2) バドル会戦に於て回教軍が將に潰敗せんとせる時、マホメットが投げたる一握の砂によつて、形勢忽ち一変したり。(3) 善賞の原語は *Idra* にして一般に『試練』を意味するも、思龍又は賞與の意味あり、予は後者を採りたれど、若し前者を採れば『善き試練を以て、信者を試みるがためなり』とべし。

汝等若し審判を求めたりとすれば、その審判は既に汝等に與へられたり¹。汝等若し敵対を止めなば、そは汝等のために最も善し。汝等若し帰り来らば、吾また帰り来らん²。而して汝等の軍勢は、設ひ夥多なりとも竟に為すところなかるべし。汝等アルラーハが信者と偕にあるを知れ云

(1) メッカ人を対象とす。汝等とは即ちメッカ人を指す。メッカ市民は出征に臨み、聖殿に於て神に祈り、兩軍のいづれ

が精銳なるか、両党のいづれが正しきか、両群のいづれが高貴なるか、両教のいづれが勝れるかを審判し、勝れる者に勝利を賜へと願ひたりとせらる。パドルの勝敗は即ちアルラーハの降せる審判なり。(2)メッカが再び軍を催して来り戦はば、吾また来りて信者を助けんとの意味。

汝等信者よ、アルラーハ並に其の使者に従へ。聞¹きつつ彼に背き去る勿れ。聞かずして『吾等は聞けり』と言ふ者に倣ふ勿れ。げにアルラーハの目に最悪なる衆生は、事理を解せざる聾者と啞者となり。アルラーハ若し彼等に一善だもあることを知らば、彼は彼等を聞かしめたるなり。』
されど設ひ彼等を聞かしむるも、彼等之を忌避して背き去らん。

(1)此の一段に於ける『聞く』とは、古蘭の訓誡即ち眞実の教を聞くこと。

汝等信者よ、アルラーハが生命¹を汝等に與ふることのために汝等と呼ぶ時は必ず彼並に彼の使者に應へよ。アルラーハは能く人間と其心との間に入ることを知れ。また汝等必ず彼の前に召集せらるることを知れ。災禍に対して用心せよ。そは汝等のうちの不義者にのみ降るに非ず。而してアルラーハの懲罰の嚴厲なるを知れ。

(1) 『生命を與ふること』はと、或は聖戰、或は宗教上の精進と解釈せらるるも、之を『信仰』と解するを妥当とす。即ち信仰は生命を與へ、不信は死を與ふるなり。

汝等¹地上に於て其数少く、無力視せられし時を念へ。汝等は人々が汝等を掃蕩し去らんことを恐れたり。然るに彼は避難處を汝等に賜ひ、其の佑助によつて汝等を強くし、且種々なる佳きものを賜ひたり。汝等恐らく感謝せん云

(1) 此の一節は『遷士』即ちメツカよりメヂナに遷り住める信者に対し、メツカに於て迫害せられし当時を想起せしむるなり。避難處とはメヂナ、佑助によつて強くせりとはバドルの戰勝を意味し、佳きものとは戰利品を指せるならん。

汝等信者よ、アルラーハ並に其の使者に対して背信なる勿れ。知りつつ汝等の委託に対して背信なる勿れ。財宝と子女とは一個の誘惑なるを知り、アルラーハの許に偉大なる報賞あるを知れ云
汝等信者よ、汝等アルラーハを敬はば、彼は汝等にフルカーン識別を賜ひ、汝等の諸惡を銷殞せしめて汝等を宥恕すべし。げにアルラーハは偉大なる施恩者なり云

不信者等が汝に対して策謀し、汝を幽閉し、又は汝を殺害し、又は汝を放逐せんとせる時を念へ。

彼等は策謀せしが、アルラーハもまた策謀せり。而してアルラーハは最勝の策謀者なり言　而して吾が休徴が彼等に讀誦せられし時、彼等は言へり『吾等は聞きたり。若し欲しなば吾等また之に劣らぬことを言ひ得べし。げにこは古人の物語にすぎず』と三　また彼等が是く言へる時を念へ『アルラーハよ、若し此事が汝よりの眞理ならば、吾等の上に石を天より降らしめよ、然らずば重刑を以て吾等に臨め』と三　されどアルラーハは、汝が彼等の間に在りし²間は彼等を罰せず、また彼等が宥恕を乞ひし間は之を罰せざりき三　いま彼等聖殿の守護者に非ざるに、妄りに人の之に詣づるを阻むに至りては、アルラーハ之を罰せざる理あらんや。げに其身を護る者のみが、能く聖殿の守護者たるべきなり。而も彼等多くは之を知らず言　聖殿に於ける彼等の礼拜とは唯だ口笛を吹き、手を拍つことにすぎず³。されば汝等の不信に対する懲罰を味へ三

(1) 此の一段はバドル役後の啓示にして、メッカに加へられたる懲罰の当然なることを述ぶ。『不信者』とはメッカ市民を指す。(2) マホメットがメッカに住める間。(3) 当時のアラビア人は聖殿参詣に際し、裸体にて方殿を周行し、口笛を吹き拍手する風習ありしと言はる。但しバイザー井は、此の一節を以てメッカの不信者等が、マホメットが方殿に至りて礼拜する毎に、之を妨ぐるために喧騒せることを指せるものと解せり。

げに不信者等は人をアルラーハの道より阻むために、其財を費しつつあり¹。彼等は暫く之を続けん。されどやがて此事は彼等の痛恨となるべく、次で彼等は征服せらるべし。而して此等の不信者は、一齊に地獄に驅らるべし²。これアルラーハが善人と悪人^{カヒース}とを分たんがためなり。彼は一人の悪人の上に他の悪人を置き、総ての悪人を積み重ねて之を地獄に入れん。げに彼等は淪喪者なり³。

(1) バドル戦後にメッカ市民が雪辱戦の準備のために財を費しつつあることを指す。

信ぜざる者に言へ『彼等若し敵対を止めなば、既往の事は宥恕せらるべし。されど彼等若し復た来らば、往古の者が必ず遭ひたる既往の先例を見るべし』⁴と云。一切の迫害は止み、教が完全にアルラーハのものとなるまで彼等と戦へ。されど彼等若し敵対を止めなば、げにアルラーハは彼等の為すことを照覽す⁵。而して設ひ彼等復た来るとも、アルラーハが汝等の愛護者なるを知れ。そは最勝の愛護者なり、最勝の佑助者なり⁶。

汝等若しアルラーハを信じ、且かの『識別の日』¹即ち両軍相会せる日に吾僕に降せるものを信じなば、何物たるを問はず汝等が獲得せる一切の戦利品の五分の一は、アルラーハ並に其の使者、孤兒、貧者及び旅人に属することを知れ。アルラーハは全能なり²。

(1) バドル会戦は正邪善惡が明白に審判せられたりとの故を以て『議別の日 Yamur' I-Furqan』と呼ばれる。此の一戦が回教史上に於て如何に重視せらるるかを見るべし。

汝等¹は山谷の近くにあり、彼等は山谷の遠くにあり、而して隊商が汝等の下方にありし時を念へ²。此時汝等は設ひ会戦を約したりとも、其の約束を破らんと欲したるなり³。(されど戦鬪は行はれたり。これアルラーハ⁴が其の成さんと定めたることを実現せんがため、また死ぬる者をして明白なる証據を見て死なしめ、生きのこる者をして、明白なる証據を見て生き残らしめんがためなり⁵。げにアルラーハは能聞者・能知者なり⁶。またアルラーハが汝の夢にて彼等の人数を寡少に見せしめたる時を念へ。此時若し汝に彼等の人数を夥しきものに見せしめなば、汝等必ず意氣阻喪し、事について争論せしなるべし。されどアルラーハは此事なからしめたり⁶。げに彼は人が胸奥に懐くものを知る⁷。而して汝等が彼等と会へる時、汝等の目に彼等を少数と映ぜしめ、彼等の目にも汝等を少数と映ぜしめたるは、アルラーハが其の成さんとすることを実現せんがためなり⁸。げに萬事はアルラーハに歸らしめらる⁹。

(1) 此の一段は、バドルの戦勝がアルラーハの加護によれるものなることを述ぶ。(2) バドル会戦直前の敵味方の陣地

を示す。山谷とはメヂナ低地のことにして、此日回教軍は最もメヂナに近く陣し、メッカ救援軍はメヂナより最も遠くに陣し、而してアブー・スフヤーンの隊商は、下方即ち海岸に近き地帯に陣したり。(3)メッカ救援軍の優勢なるを見て戦意を失ひしならんとの意味。(4)アルラーハの成さんと定めたることは、マホメットの勝利即ち眞実なる宗教の勝利。(5)明白なる証拠とはアルラーハが回教軍を加護せること、従つてマホメットの言の眞実なりしこと。(6)マホメットは其夢を味方に告げて彼等の勇氣を鼓舞せり。(7)第三章第一二節には敵軍の目に回教軍は彼等の二倍に見えたりとあり。バイザール、ジャラール、ディーン等は、此の矛盾を解くために、当初は少数に見え、後に干戈を交ふるに及んで二倍の優勢に見えたるなりとす。

汝等信者よ、敵軍と会する時は常に毅然たれ。勝たんがためには不断にアルラーハを念ぜよ。アルラーハ並に其の使者に従ひ、互に争論する勿れ。然らば汝等意氣阻喪して力を失ふに至らん。汝等堅忍なれ。アルラーハは堅忍者と偕にあり。昂然として人に見られんがために其家を出で、人をアルラーハの道に背かしめんとする者に倣ふ勿れ。アルラーハは彼等の為すことを圍繞す。サタンは彼等をして己れの為すことを佳しと思はしめ、且言へり『今日は何者も汝等に打勝つを得ず。げに吾は汝等の守護者なり』と。されど両軍相見るに及んで彼忽ち踵を回して言へり『げに吾は汝等と関りなし、吾は汝等の見ざる者を見る。吾はアルラーハを恐る。彼の懲罰は嚴厲なり』と。

(1) 必勝を期してメヂナに向へるメツカ軍を指す。(2) サタンが譬喩的のものなるか、又は現実の人物を指せるかは不明なり。バイザー井、ジャラールッディーン等は、サタンがバドル附近に占拠せるバクル・ビン・カナーナ Bakr Bin Kanāna 族の有力者スラーカ・ビン・マリク Surāqa Bin Malik の姿を取り、欺いてメツカ軍に助力を約したるなりと言ふ。(3) 天使の援軍を言ふ。

偽信者並に其心に病ある者が『彼等の教は此等の人々を欺けり¹』と言へる時を念へ。されど人若しアルラーハに頼りなば——アルラーハは偉力者・聰明者なり²。汝若し諸天使が、信ぜざりし者の面を殴ち背を打ちながら之を呼び入るる有様を見得たらんには！其時諸天使は言はん『焦熱の苦刑を味へ吾こは汝等の手が豫め送れるもののため、またアルラーハは決して其の僕等を虐ぐる者に非ざるがためなり』と云

(1) マホメットの教に欺かれ、無謀にも小勢を以て大軍と戦はんとすといふ意味。(2) 人の死なんとするや諸天使来りて其魂を持ち去るを言ふ。此処にては恐らくバドルにて戦死せる不信者の靈魂を諸天使が運び去る情景を指せるものなるべし。

彼等¹はフアラオの民並に其の以前の民と同じ。彼等はアルラーハの休徴を信ぜざりき。されば

アルラーハは彼等の罪惡のために之を懲らしたり。これアルラーハは強大者・嚴刑者なるが故なり。これアルラーハが一旦恩寵を或民の上に垂るれば、其民が己れの心裡にあるものを変ふるまでは、決して之を変へざるが故なり、而してアルラーハが能聞者・能知者なるが故なり。彼等はフアラオの民並に其の以前の民と同じ。彼等は其主の休徴を虚偽なりとせり。されば吾は彼等の罪惡のため之を滅ぼせり。吾はフアラオの民を溺れしめたり。彼等は悉く不義者なり。蓋

【1】此の一段もメツカ人を対象とす。「彼等」とはクライシニ族なり。

アルラーハの目に映ずる最惡の衆生は、信ぜざる者並に信ぜんとせざる者蓋 汝が約束を之と結ぶも、常に破約してアルラーハを敬はざる者なり。蓋 汝若し彼等と戦ふに至らば、彼等の背後にある者を震駭せしむる如き処置を之に加へよ。彼等或は省るところあらん。苟くも背信の惧ある民は、一律に汝の盟約を破棄せよ。アルラーハは背信者を欣ばず。蓋 信ぜざる者をして、免れ得たりと思はしむる勿れ。彼等は断じて免るるを得ず。蓋

(1)メチナの猶太人クライザ族を指せりとせらる。(2)神罰を免るること。例へばバドルの役に生還するを得たるメツ

カ人の場合。

召集し得る限りの歩兵並に騎兵を彼等に対して備へよ、そは之によつてアルラーハ並に汝等自身の敵、また汝等は知らざれどアルラーハが知れる敵を憎伏せしめんがためなり。汝等がアルラーハの道に費すものは、必ず存分に返済せられ、決して不当に遇せらるることなし。而して彼等若し和平に傾かば汝もまた之に傾き、信頼をアルラーハに置け。彼は能聞者・能知者なり。設ひ彼等汝を欺かんとするも、汝にアルラーハあれば足る。彼は己れの佑助と信者によつて汝を助け。且信者の心を結んで一となす。設ひ汝は地上一切のものを費すも、汝は彼等の心を結び得ざるなり。されどアルラーハは能く之を結ぶ。げにアルラーハは偉力者・聰明者なり。

(1) 直訳「能くする限りの兵力及び繋げる馬を豫備せよ」。(2) アラビア諸族が如何に不断の族闘を事とし来れるかを考ふれば、彼等が回教を奉ずることによつて突如一個の教團、即ち一個の國民となれることは、正にアルラーハに歸すべき奇蹟と言ひ得べし。

豫言者よ、汝はアルラーハ並に汝に従ふ信者あれば即ち足る。豫言者よ、信者を鼓舞して戦はしめよ。汝等のうち二十の堅忍者あらば能く二百に勝つべく、汝等の一百あらば能く一千の信ぜざる者に勝つべし。これ彼等は事理を解せざる民なるが故なり。いまアルラーハは汝等の負担を軽

くせり¹。そは彼が汝等の間に弱點あるを知るが故なり。されば汝等のうち一百の堅忍者あらば即ち二百に勝つべく、若し一千あらばアルラーハの允許の下に能く二千に勝つべし。げにアルラーハは堅忍者と偕にあり矣

(1) 負担を軽くすと言ふは、一以て十に当る代りに、当分は一以て二に当れば可なりとするなり。(2) 汝等の間の弱點とは、バドル当時の回教軍は殆ど軍隊の名に値せざる微力なるものにして、老幼皆を出でて戦はざるを得ざる状態なりしを以てなり。

地上¹にて大なる殺戮を行へる後ならでは、俘虜を捕ふことは豫言者に適はしからず。汝等は現世の儚²き利得を望めども、アルラーハは汝等のために来世を望む。アルラーハは偉力者・聰明者なり矣。若し既に発せられたるアルラーハの命令なかりせば、汝等は其⁴の取れるもののために重刑を受くべかりしなり矣。汝等の獲たる戦利品のうち、合法にして佳きものを食へ。アルラーハを敬へ。アルラーハは宥恕者・大慈者なり矣

(1) 此の一段はマホメットが、バドル戦の俘虜を助命し、贖身金を納めて之を釈放せんとし、ウマルが之に反対して、彼等の過去の罪惡のために之を屠り去るべしと主張せる時に降りし啓示とせらる。マホメットは之を以てアルラーハの譴責を

受けたるものとなし、贖身金を得んがために、戦場にて不信者の生命を容赦すべからずとせるなり。回教の初期に於ては、敵に対して峻嚴なるを必要とせることを示す他の幾多の諸節あり。(2)戦利品又は贖身金を指す。(3)戦利品・俘虜の獲得、従つて贖身金の受納が合法とせられたること。(4)取れるものとは贖身金。

豫言者よ、汝の手にある俘虜に言へ『若しアルラーハが汝等の胸中に何等か善なるものあるを知らば、彼は汝等が没収せられたる物に優れるものを汝等に賜ひ、且汝等を宥恕せん。アルラーハは宥恕者・大慈者なり』とき。されど彼等若し汝に対して信義を缺かば²——げに彼等はアルラーハに對して信義を缺ける者なり。さればいまアルラーハは彼等を左右する力を汝に與へたり。アルラーハは能知者なり¹。

(1) 懺悔して信仰に入らんとする心。(2) 信義を欠くとは約束せる贖身金を支拂はざることの意味すとせらる。

信じて移住し、財産と生命とを献げてアルラーハの道に善戦せる者¹、並に彼等のために住居と援助とを提供せる者²、げに此等の者は互に他の守護者なり³。信じたるも移住せざる者は、彼等が移住するまでは、汝等之に對して親族關係の義務を負はず。但し彼等が信教のことに関して汝等の援助を

求むる場合は、之を助くるは汝等の義務なり。但し汝等と訂盟せる民に敵対する場合を除く。アルラーハは汝等の為すことを照覽す。信ぜざる者は互に他の守護者なり。されば汝等互に相助くるに非ずば、地上には迫害と大悪とあらん。

(1) 最初にマホメットと共にメヂナに移住せる所謂『遷士 Muhajirin』。(2) 移住者に一切の援助を與へたる所謂『輔士 Ansâr』。(3) 近親同様の関係にあることを言ふ。

げに信じて移住し、財産と生命をアルラーハの道に献げて善戦せる者、並に彼等のために住居と援助とを提供せる者は、眞実の信者なり。彼等のためには宥恕と高貴なる糧餉とあり。後れて信じ、移住して汝等と共に戦へる者も、また汝等の党侶なり。但しアルラーハの定むるところにより、血縁者は彼等よりも互に相近し¹。げにアルラーハは一切を知る。

(1) 最初の遷士と輔士とは血縁関係者と同視せられ、之に伴ふ遺産相続権をも與へられしが、此の啓示によりて其後にメヂナに遷れる信者と輔士との間は、血縁者より薄き関係にありとせるものにして、従つて遺産分配に関する従前の規定は之によつて撤廃せられたり。

第九章 懺悔章

メデナ啓示

第一〇四節に『アルラーハは其の僕等の懺悔を允す』とあるに因みて懺悔章 *At-Taubah* と名づけられ、また第一節に因みて解約章 *Al Bara'at* とも呼ばれる。古蘭全章中唯だ此の一章にのみ *スミラーハ* を欠く。其の之を欠く理由については異説区々なれども、もと第八章の一部にして、独立の一章に非ざりしが故なりとするもの、最も穩当なり。遷都九年の啓示とせらるるも、其の以前に降されたる諸節少なからず。而して冒頭義務放棄の宣言は、アラビアの多神教に対する終止符として極めて重大なる意義を有するが故に、事茲に至りし経緯を略叙すべし。

メッカは連年の交戦によつて漸く疲弊し、殊に遷都五年、部族の興敗を賭したる遠征も終に失敗に終れり。於是マホメットの眼中またメッカ市民なく、遷都六年、聖殿参詣のためにメッカに向ふに至れり。彼は参詣以外に他意なきを示すため、信者をして単に一劍を腰に帯ばしめ、堅く其他の武器携帯を禁じたり。されどメッカ市民は彼を信ぜず、武装して其の来るを撃たんとせるを以て、マホメットは聖域外たるホダイイビーヤ *Hudaybiya* 山谷に止まり、メッカの代表者と会して十年の休戦を約したり。この休戦條約は、アラビア諸族は総て自由にマホメットと訂盟する権利あることを承認し、改宗者は自由にメッカを去りてマホメットに合し得ることを承認し、且翌年の参詣期にマホメットのメッカ参詣を承認したり。もとよりメッカ市民は尙未だ彼の豫言者たることを認めたるに非ず、彼は唯だアブダラーの子として参詣を許されたるにすぎずといへども、この條約は明かにメ

メッカ市民が彼に対して抗戦する力を失へることを白状せるものなり。而して此の條約により、翌遷都八年、マホメットは八年以前メッカ市民の暗殺をタウル洞窟に避け、危く一死を免れてメヂナに亡命せる時に乗れる其の駱駝に跨り、二千の信者を従へてメッカに入り、啻に参詣を了へたるのみならず、ホダイイビーヤ條約の侵犯を口実として、遂に此年一萬の大軍を起こし、一挙メッカを征服して、權威を全アラビアに布くに至れり。

かくて遷都九年は『使節の年』と呼ばれる。蓋しマホメットの勢威、頓に全アラビアに普く、沙漠の諸部族が遠近より使節をメヂナに送りて、マホメットの宗教的・政治的權威を承認するに至れるが故なり。而して此年の夏マホメットは其の最後の征戦となれるタブーク Tabuk 遠征を試みたり。蓋し東羅馬帝國に煽動せられて國境地方を騷擾せるシリア諸族を征服するためなりしが、メヂナ信者のうちには炎熱下の長途の行軍を厭ひて遠征に加はらず、又は辭を設けて中途より離脱せる者ありて、本章に於て激しき非難の対象となれるを見る。而して此の遠征は多くの基督教部族並に猶太人部族を臣従せしめたるが、兩教は本章に於て共に其の虚偽を攻撃せらる。

また彼のタブーク遠征に先ち、クバー Quba に一禮拜堂を建立し、彼の來臨を求めたる者あり。彼は凱旋後に之を訪ふべきことを約せしが、遠征中に此の建立にまつはる陰險なる策謀を聞知し、歸來直ちに一隊を派して此の禮拜堂を破毀し去れり。此事に關してもまた本章中に言及せらる。

而して此年の参詣期至るや、マホメット自身はメヂナに止まり、アブー・バクルをして三百人の信者を伴ひてメッカ参詣の途に上らしめたり。一行が出発して幾くもなく、彼は極めて重大なる天啓を受けたるを以て、直ちにアリーに命じ、之をメッカに於て発表せしめんがため、駱駝を馳せてアブー・バクルの後を追はしめたり。アリーは途上一行に追ひつき、彼等と共にメッカ

に参詣し、参詣諸儀礼が終結する献祭節の日に於て、ミナーに近き原頭にて、群がる参詣者を前にし、アリー自ら高声にて復誦せるもの、即ち本章冒頭の諸節なりとせらる。而して復誦を終りたる後、アリーは更に下の如きマホットの命令を傳へたり『吾は是く宣言することを命ぜらる。本年以後、多神教徒は参詣を行ふを得ず。裸体にて方殿を周行するを禁ず。豫言者と結約せる者は、期限満了するまで盟約を守らるべし。諸部族が安全に帰郷し得るために四個月の期間を與ふ。其後豫言者は如何なる義務をも負はず』。マホメットが参詣の最終日に天啓を復誦せしめたるは、アルラーハの命令が、参詣者の帰郷と共に、直ちに全アラビアに普及すべきが故なり。この宣言によつて、多神教は今や完全にメッカより葬り去られ、名実共に回教の確立を見るに至れるものなり。

アルラーハ並に其の使者は、汝等が結約せる多神教徒に対して解約を宣言す。されば四個月の間は任意に地上を往來せよ。而して汝等決してアルラーハを無力ならしめ得ざること、並にアルラーハは不信者に屈辱を與ふる者なることを知れ。アルラーハ並に其の使者は、アルラーハが多神教徒と絶縁すること、其の使者もまた然ることを、大参詣日に於て萬人に宣言す。汝等若し懺悔すれば、そは汝等のために最も善し。汝等若し背き去らば、汝等決してアルラーハを無力ならしめ得ざることを知れ。而して信ぜざる者には痛烈なる刑罰を告知せよ。但し汝等が結約せる者にして未だ曾て破約せず、また決して汝等に敵せる者に與せざりし者を除く。されば期限満了するまで彼

等との契約を守れ。アルラーハは彼を畏るる者を欣ぶ^四。聖月既に過ぎなば、多神教徒に会はば処を論ぜず之を殺し、之を俘虜とし、之を拘禁し、並に隨處に之を待伏せよ。但し彼等懺悔して禮拜を行ひ、捐課を納むる時は之を釋放せよ。アルラーハは宥恕者・大慈者なり^五。若し多神教徒にして汝の保護を求むる者あらば、之を保護してアルラーハの言を聞かしめ、然^二る後に之を安全の地に送致すべし。そは彼等は無智の民なるが故なり^六。汝等が聖殿に於て結約せる者の外は、如何にして多神教徒がアルラーハ並に其の使者と結約し得るか。彼等が汝等に誠実なる間は、汝等も彼等に誠実なれ。アルラーハは彼を畏るる者を欣ぶ^七。如何にして（彼等と結約し得べきぞ）。彼等若し汝等よりも優勢ならば、彼等は血縁をも誓約をも顧みざるべし。彼等は口にて汝を欣ばしむるも、心は決して肯んぜざるなり。彼等の多くは作惡者なり^八。彼等は些少の代價にてアルラーハの休徴を賣り、人をアルラーハの道に背かしむ。彼等の為すことは惡し^九。信者に対しては、彼等は血縁をも誓約をも顧みず。彼等は背犯者なり^{一〇}。されど彼等若し懺悔して、禮拜を守り捐課を納めなば、彼等もまた宗教に於て汝等の兄弟となる。吾は事理を解する者のために休徴を明示す^{一一}。されど彼等若し結約の後に誓言を破り、汝等の教を誹謗するが如きことあらば、不信者をして敵意を棄てしむるために彼等の首領と戦へ。彼等は如何なる誓言をも守らず^三。

(1) 此の一段十二節は遷都九年^{ツールヒツツト}第十二月十日(西紀六三一年三月十日)アリーが大献祭節の日に復誦せる重大なる啓示なり。(2) 『然る後に』とは、アルラーハの言を聞きても信者とならざる場合を言ふ。蓋し多神教徒といへども敵対するに非ずば妄りに殺さざるなり。

何事ぞ、汝等はかの己れの誓言を破り、使者を放逐せんと企て、且最初に汝等を攻撃せる者と戦ふことを欲せざるか。汝等は彼等を恐るるか。されど汝等若し信者ならば、アルラーハをこそ恐るべきなれ^三 彼等と戦へ。然らばアルラーハは汝等の手にて彼等を膺懲し、屈辱を彼等に與へ、汝等を助けて彼等に勝たしめ、信する民の胸を愈やし^四 且彼等の心中の鬱憤を拂拭すべし。アルラーハは己れの欲する者に慈顔を向く。アルラーハは能知者・聰明者なり^五 アルラーハは汝等のうち出でて戦ふ者、またアルラーハと其の使者と信者との外に何者をも友とせざる者の誰なるかを知らず。然るを汝等は晏然放置せらるべしとするか。アルラーハは汝等の為すことを知悉す^六

(1) 此の一段は遷都八年マホメットがメッカを征討を決心せる時に、信者の戦意を鼓舞せるものとすべし。『彼等』といふは即ちメッカ市民なり。(2) 此の一節は新しき帰信者に対する激励の辭とすべし。

自ら己れの不信を立証する多神教徒は、断じてアルラーハの拜殿を管理すべきに非ず。彼等の所

行は総じて無効にして、彼等は永劫に火獄に住まんモ。アルラーハと末日とを信じ、礼拝を守り、捐課を納め、アルラーハの外に何者をも恐れざる者のみ、当にアルラーハの拜殿を管理すべし。此等は正しく導かるる者のうちに加へらる云。

(1) 前段と同時の啓示にして、メッカ征服の目的が、聖殿を多神教徒の手より信者に收むるにあるを説く。

汝¹等は、かの参詣者に水飲ましめ、聖殿を修理することを以て、アルラーハと末日とを信じ、アルラーハの道に力戦する者の行動と比べんとするか。アルラーハの目に両者は決して同一ならず。アルラーハは不義の民を導かず云。信じて移住し、財産と生命とをアルラーハの道に献げて力戦せる者には、アルラーハは最高の位階を與ふべし。此等は本願成就者たるべし云。主は己れの慈悲と喜悅と吉報とを彼等に賜ひ、また永遠の歡喜に満ちたる樂園も彼等のものなるべし云。彼等長久に其中に住まん。げにアルラーハの許には偉大なる報賞あり云。

(1) バドル役に於て俘虜となりしマホメットの伯父アッパース Al-Abbas は、信者等の非難に対し、此等の二事を行へることを挙げて自己を弁護せりと傳へらる。されど恐らく此の一段は、メッカ聖殿が長く不信者の手に委ねらるることを不満とせる信者等に対する啓示なるべし。

汝等¹信者よ、若し汝等の父又は兄弟が信仰を棄てて不信を選ばば、決して彼等を友とする勿れ。苟くも汝等のうち彼等を友とする者あらば、其人は即ち不義者なり。言へ『若し汝等の父、子、兄弟、妻、親戚、汝等が所有する財産、不況を惧るる營業、意に適する邸宅が、アルラーハと其の使者、並にアルラーハのための善戦よりも汝等にとりて重大ならば、汝等即ちアルラーハが其の命令を發するまで待て。アルラーハは作惡の民を導かず』と云

【1】此の一段も前数段と略ぼ同時の啓示にして、信仰の血縁よりも重大なるを説くは、今將に膺懲せんとするメッカに、遷士の血縁者多きが故なり。

アルラーハ¹は既に幾多の戰場に於て汝等を佑助し、就中ホナイン会戦の日に於て然り。此日汝等は多勢を恃みたりしが、そは毫も汝等を益することなく、大地は廣げれど汝等のために窄くなり、遂に汝等は敗退せり。其時アルラーハは、彼の使者並に信者等の上に安靜を降し、且汝等には見えざりし軍勢を遣はして不信者等を膺懲せり。これ不信者の応報なり。而して其後もアルラーハは己れの欲する者に慈顔を向く。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり。

(1) 遷都八年、既にメッカを従へたるマホメットは、タイイフを中心とする有力なるアラビア諸部族を征討するため、メ

カを距る教哩のホナイン Husain 山谷に敵軍と会戦せり。時に味方は一萬二千の大軍にして、敵は僅に四千にすぎざりしが、衆を恃んで敵を侮りしたため、殆ど大敗に陥らんとせしも、マホメットの沈着によりて辛うじて頽勢を支へ、遂に大勝を博し得たり。(2)ホナインの戦勝によつて回教軍は約六千の俘虜を獲しが、マホメットは其の大多数を釈放せり。恐らくアルラーハの慈悲とは此事を指す。

汝等¹信者よ、多神教徒は唯是れ不淨なり。故に本年以後彼等が聖殿に近づくことを禁ず。汝等貧困を憂ふべきも、²アルラーハ若し欲しなば、其の恩寵によつて汝等を富まささん。アルラーハは能知者・聰明者なり云

(1)此の一節は冒頭第一一二節の解約宣言に続き、その結尾をなす。(2)メッカの繁榮は参詣期に全アラビアより集まれる参詣者の盛んなる取引による。此の禁制は不信者の参詣を禁ずるものなれば、そのために経済的中心としてのメッカの地位を失はんことを恐れし者ありしなるべし。

受經者のうち、アルラーハと末日とを信ぜず、アルラーハ並は其の使者が禁じたるものを禁ぜず、眞実の宗教を奉ぜざる者に対して、彼等が屈服して手づから貢^{シメテ}を納むるまで戦へ云 猶太人はエズラをアルラーハの子なりと言ひ、²基督教徒はメシアをアルラーハの子なりと言ふ。これ彼等の

口より出づる言なり。彼等は既往の信ぜざりし者の言に倣ふ者なり。アルラーハ親ら彼等を討たん。彼等の迷へること何ぞ甚だしき言。彼等専ら唯一の神を拜すべきことを命ぜられながら、アルラーハを舍きて学者と修道者とを己れの主となし、またマリアの子メシアを己れの主となせり。彼の外に神なし。彼を讃へよ、彼は高く彼等が彼に配する者に超在す。彼等は其口を以てアルラーハの光を吹き消さんとす。されど設ひ不信者が之を厭ふとも、アルラーハは必ず其光を完うすべし。また設ひ多神教徒が之を厭ふとも、嚮導と眞実の教とを與へて其の使者を遣はせるは彼なり。彼は之を以て一切宗教の上に置かんとするなり。汝等信者よ、多くの学者と修道者とは、妄りに人の財産を貪り、人をアルラーハの道に背かしむ。金銀を積みて而も之をアルラーハの道に費さざる者、是くの如き者には痛烈なる刑罰あることを告知せよ。復活の日に当り、彼等の金銀は地獄の熱火に灼熱せられ、之を以て彼等の額と脇と背とに烙印し、『こは汝等が己れのために貯へたるものなり。さらば己れの貯へたるものを味へ』と言はれん。

(1) 此の一段は、東羅馬帝國が漸く回教徒の擡頭に関心を有し来れるに應じ、シリア國境に事多く、北方遠征の必要が豫想せられ、その準備として信者の戦意を作興せんとするものとすべし。従つてタブーク遠征前の啓示に属す。その猶太教並に基督教を非難せるは、北方の征途に両教を奉ずる者多きが故なり。(2) 猶太人はバビロン幽囚の間に全く律法を遺失し

去りしが、エズラ Darius は死後百年にして復活し、其の記憶せる律法を筆記せしめたりと傳へらる。猶太人は、神子に非ずば決して是くの如きことを能くせずと驚嘆して、彼を神視するに至れり。(3) 学者とは猶太人のラビ、修道者とは基督教のそれを指す。

アルラーハが天地を創造せる日、其の經典に記されたるアルラーハの月数は十二にして、その四を以て聖月となす。これ正しき計算なり¹。されば此間是不義を行ふ勿れ。而して多神教徒が一齊に汝等と戦ふ如く、汝等もまた一齊に戦へ。アルラーハは其身を護る者と偕にあることを知れ。聖月の轉移は唯だ不信の増長にすぎず。一切の不信者は之によつて迷誤に導かる。彼等或年は之を犯し、或年は之を聖視し、以てアルラーハが神聖と定めたる月数と合致せしめ、かくしてアルラーハが神聖と定めたるものを冒瀆す。彼等その惡業を善しと思はしめらるるも、アルラーハは信ぜざる民を導かず。

(1) 原語 Dār は『宗教』の意味なれど、また『計算』の意味あり。予は後者を採れり。(2) 十一・十二・一月と継続する三聖月の最後の月一月に代ふるに二月を以てすること。この制度は Nasse と呼ばれ、マホメットの祖宗クサーイが、長期の平和に倦む好戰的なるアラビア人を欲ばしむるため、また此の轉移特権を己れのために利用する目的を以て創始せるもの

とせらる。

汝等信者よ、出でてアルラーハの道に戦へと言はるる時、汝等首を垂れて地に俯すとは何事ぞや。汝等は末世を舍きて現世を楽しむか。現世の歡樂は之を末世に比ぶれば一些事にすぎず。汝等若し出でて戦はずば、彼は痛刑を汝等に加へ、他の民を以て汝等に代へん。げにアルラーハは全能なり。設ひ汝等は彼を助けずとも、唯一人の同伴者と偕なりし彼を不信者が追求せる時、アルラーハは既に彼を助けたり。其時彼等兩人は洞窟の中にありしが、彼は其の同伴者に向つて言へり『憂ふる勿れ、アルラーハ吾等と偕にあり』と。かくてアルラーハは彼の上に安靜を降し、汝等には見えざる軍勢を以て彼を助け、信ぜざる者の言を最下とし、アルラーハの言を最高ならしめたり。げにアルラーハは偉力者・聰明者なり。されば或は軽く或は重く出征せよ。汝等の財産と生命とを献げてアルラーハの道に戦へ。汝等若し知らば此事は汝等のために最も善し。

(1) 此の一段はメヂナ初期の啓示と思はる。但し後に訂正を加へて此処に排列せるものなるべし。(2) マホメットがメヂナ市民の追求を免れてメヂナに奔らんとし、唯だアブー・バクル一人と共にタウルの洞中に潜める時を指す。唯一人の同伴者の原語は『二人のうちの第二者』にして、此語は後にアブー・バクルの最も名譽ある呼称となれり。(3) 或は軽く或は重くは種々に解釈せらる。即ち輕き心と重き心、又は貧者と富者、又は青年と老年、又は輕き武装と重き武装といふが如

し。恐らく最後のものを妥当とす。

利益¹目前にあり、征途また容易ならば、彼等もまた汝に従はんと欲したるべし。されど路は彼等に餘りに遠し。而も彼等はアルラーハに誓つて言ふ『若し能ふべくんば吾等も汝等と共に出征せんものを』と。彼等は己れを滅ぼす者なり。アルラーハは彼等の虚言者なるを知る。アルラーハ汝を赦さんことを！ 何故に汝は眞実を汝に告げたる者を明かにし、且汝を詐れる者を知る以前に、彼等の落後するを許せるか。アルラーハと末日とを信する者は、己れの財産と生命とを獻げて戦ふことを免れんとして、落後の許可を汝に求むることなし。アルラーハは己れを敬ふ者を知る。唯だアルラーハと末日とを信ぜざる者のみ落後の許可を汝に求む。彼等は胸中に疑惑を抱き、疑惑の中に一進一退す。彼等若し眞に出征する意図ありたりせば、そのために準備すべかりしなり。されどアルラーハは彼等の奮起を厭ひて之を逡巡せしめたり。而して彼等に是く告げしめたり『汝等は家に留まる者と共に留まれ』と。而して彼等設ひ汝等と共に出征するとも、彼等は唯だ汝等の荷を重からしむるにすぎず、汝等の間を奔走して内証を醸さんとするなるべし。然るに汝等のうちには彼等の言に耳傾くる者あり。アルラーハは不義者を知る。彼等は以前にも内証を醸して汝

を苦境に陥れんとせしが、彼等が厭へるに拘らず、眞理遂に到りてアルラーハの命令行はれたり
き¹ 彼等の或者は曰く『家に留まることを許せ、吾を内訌に誘ふ勿れ』と。嗚呼、彼等は既に内
訌に加はれるに非ずや。げに地獄は不信者を包囲せん²

(1) 此の一段はタブーク遠征の途上に降されたる啓示とせらる。タブークはメヂナとダマスコの中間にあり、遠征に慣れ
ざるアラビア人にとりては極めて長途の行軍なりしを以て、之に加ふるを厭ふ者多かりしなり。(2) ウホド役に於ける偽
信者の行動を指す。

若し幸運汝に降れば彼等は心を悩まし、不幸汝を襲へば即ち曰く『吾等は豫てより己れのことを
要慎せり』と。而して欣然として背き去る吾 言へ『アルラーハが吾等に定めたることの外は、何
事も吾等に臨まず。彼は吾等の愛護者なり。信者をしてアルラーハに頼らしめよ』と³ 言へ『汝
は最勝なる両者の一以外に、何事を吾等に期待するか。吾等はアルラーハが己れ自身又は吾等の手
にて汝等を膺懲せんことを期待す。さらば待て、吾等も汝等と共に待たん』と⁴

(1) 最勝なる両者の一とは勝利か、又は楽園を約束せらるる戦死。

言へ『設ひ汝等が欣んで喜捨し、又は欣ばずして喜捨するとも、そは嘉納せられざるべし。汝等は作惡の民なり』と云。彼等の喜捨が嘉納せられざるは、彼等がアルラーハ並に其の使者を信ぜず、礼拝を怠り、心ならずも喜捨するがためなり云。されば汝は彼等の財産並に子女を驚く勿れ。アルラーハは唯だ之によつて現世に於て彼等を罰し、また不信者として彼等を死し去らしめんとするのみ云。彼等アルラーハに誓ひて汝等の味方なりと言ふも、決して汝等の味方に非ず。彼等は汝等を恐るる民なり云。若し避難の地あり、潜ひべき穴あり、這ひ入るべき場処あらば、彼等必ず之に向つて疾走し去らん云。

彼等のうちには喜捨のことに關して汝を誇る者あり。之を分與せられたる者は欣び、分與せられざる者は憤る云。彼等若しアルラーハ並に其の使者が彼等に與へたるものに満足して、『吾等はアルラーハあれば足る。アルラーハ並に其の使者は必ず吾等に恩惠を垂れん。吾等はアルラーハを仰望す』と言ひたらんには——云。喜捨せられたるものは、貧者¹、窮困者²、喜捨を集むる者、其心を和らげらるべき者³、奴隸の贖身金、負債者の救済、アルラーハの道に於ける支出、並に旅人のためのもものなり。これアルラーハの掟なり。アルラーハは能知者・聰明者なり云。

(1) 貧者 Fakir とは恒常的の無一物者。【2】窮困者 Meskin とは一時的の困窮者。(3) ホナイン役後、マホメット

は其の戦利品をば多量にアラビアの諸小族長に分與して、其の歡心を買ひたり。心を和らげらるべき者とは彼等を指す。またメッカ征服に際しても、新たに回教に帰依せるメッカ市民に対して多大の喜捨を分與し、以て其心を和らげたり。此等のことがメヂナ市民の不滿を買ひ、マホメットを謗る者ありしなり。

彼等の或者は豫言者を誹りて『彼は総身これ耳なり』¹と言へり。言へ『汝等のための好耳なり。彼はアルラーハに帰信し、信者を信用し、汝等のうちの信者への恩寵を信する者なり。而してアルラーハの使者を誹る者には痛刑あるべし』と云

【1】或は他人の言を聞いて容易に信ずる意味とせられ、或は事の大小を問はず耳を藉すことと解釈せらる。されど之を『誹る』と言ふより見れば、恐らく間牒に類する行動を非難せるものと思はる。

彼等は汝を欣ばしめんがためにアルラーハによつて誓ふ。されど彼等若し信者ならば、アルラーハ並に其の使者を欣ばしむることこそ正しけれ。アルラーハ並に其の使者に敵する者には、永劫に住むべき地獄の火あることを彼等は知らざるか。げにそは甚大なる屈辱なり。

僞信者は己れの胸中に懐けることを指摘する一章^{スライ}が彼等に降されんことを恐る。言へ『汝等嘲弄

せよ、アルラーハは必ず汝等が恐るる所のものを露あらはさん」と云。汝若し彼等に問はば、彼等は必ず言はん『吾等は談話に耽りて嬉戯せるのみ』と。言へ『汝等はアルラーハ並に其の使者を嘲弄せるに非ざるか』 弁解するを止めよ、汝等は一旦信じて復た不信者となれるなり。設ひ汝等の一部は赦さるるとも、他の一部は其の作悪者なる故を以て必ず罰せらるべし』と云。偽信者は男女一律なり。彼等は惡を勧め、善を阻み、堅く其掌を閉づ。彼等アルラーハを忘れたるが故に、アハラーハもまた彼等を忘る。げに偽信者こそ作悪者なれ。アルラーハは偽信者の男女と不信者と共に、永劫に住むべき地獄の火を約束せり。彼等は此事を覺悟せざるべからず。アルラーハは彼等を呪咀す。彼等は永劫の刑罰を受けん。

汝等は汝等以前の民と同じ。彼等は其力に於て汝等に優り、財宝と子女とに於て汝等よりも豊かにして、現世に於て其の福分を樂しみたり。汝等もまた以前の民が其の福分を樂しめる如く己れの福分を樂しまんことを願ひ、また彼等が耽れる如く空談に耽らんことを望む。げに此等の者の所行は、現世並に末世に於て等しく空無に歸す。彼等は淪喪者なり。彼等以前のノアの民、アアド、サムード、アブラハムの民、ミデイアンの民、及び覆滅せる諸都府の消息が彼等に達せざりしか。諸使者は明証を齎して彼等に来りしなり。さればアルラーハ彼等を害せるに非ず、彼等自ら己れを

害せるなりき

男女の信者は互に他の愛護者なり。彼等は善を勧め、惡を阻み、礼拝を守り、損課を納め、アルラーハ並に其の使者に従ふ。アルラーハは彼等に仁慈ならん。げにアルラーハは偉力者・聰明者なり。アルラーハは彼等が永住すべき河川流るる樂園と、エデン園中の美邸とを男女の信者に約束す。されどアルラーハの善意こそ更に勝れたるなるものなれ。そは偉大なる本願成就なりき

豫言者よ、不信者並に偽信者と戦へ。彼等を遇するに嚴厲なれ。彼等の住処は地獄なり、惡き行先なりき。彼等はアルラーハに誓ひて『言はず』と言ふも、實は不信の言を弄し、一旦歸命者となりて復た不信者となり、且決して達成し難きことを心に懷く者なり。彼等が信者を恨むは、唯だアルラーハ並に其の使者が彼等を富ましむるが故に外ならず。されど彼等若し懺悔しなば、そは彼等のために最も善し。而して若し彼等背き去らば、アルラーハは現世並に末世に於て痛刑を以て彼等を罰せん。彼等は地上に一愛護者なく一佑助者もなかるべしき

彼等の或者はアルラーハと結約して曰く『げに彼若し吾等に恩恵を垂れなば、吾等必ず喜捨を行ひて、必ず義しき者の一人とならん』と云。而も彼その恩恵を彼等に垂るれば、彼等即ち賜はれるものを惜み、忌避して背き去るき。されば彼は彼等がアルラーハとの約束を破り、且その虚言せる

ことに対して、彼等がアルラーハと会ふ日まで、彼等の胸中に偽善を懐かしめ置くこととせり。彼等はアルラーハが能く彼等の秘密と密談とを知り、またアルラーハが能く隠れたるものを知る者なることを知らざるか。

進んで喜捨を行ふ者を誹り、また己れの勞力以外に喜捨する物を有たざる信者を誹りて之を嘲笑する者あり。アルラーハもまた彼等を嘲笑せん。彼等には痛刑あるべし。彼等のために宥恕を乞ひ又は乞はざれ。汝設ひ七十度彼等のために宥恕を乞ふとも、アルラーハは彼等を赦さざるべし。

これ彼等がアルラーハ並に其の使者を信ぜざるがためなり。アルラーハは作惡の民を導かず。

落後¹の人々は、アルラーハの使者が出征したる後、己れの家居靜坐せることを欣び、財産と生命とを献げてアルラーハの道に善戰することを厭ひたり。彼等は言へり『炎暑の時に出征する勿れ』²と。言へ『地獄の火は更に熱し。彼等此事を知りたりせば』²と。彼等をして少しく笑ひ、多く泣かしめよ。これ彼等の為せることに対する応報なり。さればアルラーハ若し汝を彼等の一党に歸らしめたる時³、彼等汝に向つて出征の許可を求むる如きことあらば即ち言へ『汝等決して吾と共に出征するを得ず、また決して吾と共に如何なる敵とも戦ふを得ず。げに汝等は最初の時に家居靜坐を好みたり。されば向後も落後者と共に靜坐せよ』³と。彼等のうちの何人が死するとも、汝

は決して彼のために禱る勿れ、また其の墓側に立つ勿れ。げに彼等はアルラーハ並に其の使者を信ぜず、作悪者として死せる者なり矣。彼等の財宝と子女とを驚く勿れ。げにアルラーハは唯だ之によつて現世に於て彼等を罰し、且その不信者たる間に彼等の魂を離れ去らしめんとするのみ矣。

(1) 此の一段はタブーク遠征中の啓示なるべし。使者の出征とはマホメットが遠征の途に上れること。(2) タブーク遠征は炎暑の時に行はれたり。(3) マホメットが生命ありてメヂナに帰り、彼等偽信者の許に至りたる時を意味す。

『¹アルラーハを信ぜよ、出でて其の使者と共に戦へ』との一章^{スラ}降る毎に、彼等のうちの長き財布の所有者は、汝に許可を求めて曰く『吾等を静坐する者と共に居らしめよ』と矣。彼等は落後者と共に居ることを願ふ者なり。彼等の心は封ぜられたり。されば彼等は曉らず矣。使者並に彼と共に信ずる者は、財産と生命とを献げて善戦せり。此等の者は種々なる幸福を得ん。彼等は本願成就者なり矣。アルラーハは河川流るる樂園を彼等のために備ふ。彼等は長久に其中に住むべし。これ至高の幸福なり矣。而して沙漠の民の中の辯疏者等も、また落後の許可を求めんがために来²れり。アルラーハ並に其の使者を虚偽なりとする者は皆な静坐す。げに他日此等の不信者の上に痛刑降らん矣。

(1) 此の一段はホダーイビーヤ遠征当時の啓示なるべし。此時マホメットは參詣以外また他意なきを告げたりしも、メヂナ市民中にはクライシユ族が必ず起つて戦ふべしと信じて、彼の招呼に應ぜず、此行に加はらざる者多かりしなり。(2) マホメットは此時沙漠のアラビア諸族にも参加を求めたりしが、彼等の多くは家事多忙を口実として之に應ぜざりき。

弱者、病者、及び貢獻¹の道を有たざる者は、彼等がアルラーハ並に其の使者に対して忠誠なる限り、家に留まるも罪なし。善事を行ふ者には非難の道なし。アルラーハは宥恕者・大慈者なり²。また汝に來りて汝が彼等を運ばんことを求めたる者あり、汝之に告げて『吾は汝等を運ぶべきものを有たず』と言へり。其時彼等双眼を涙に満たし、何事をも貢獻し得ざることを悲しみて去れり。此等の者もまた罪なし³。唯だ富有にして汝に落後の許可を求むる者のみ罪あり。彼等は落後者と共に居ることを欣ぶ。アルラーハは彼等の心を封じたり。されば彼等は知らず⁴。

(1) 出征の裝備をなす資力なき極貧者を指す。(2) 『運ぶ』の意味明かならず。セールは之を『旅行に必要なものを供給する』意味に解せり。蓋しバイザー井が、此の一節は輔士中の極貧者等が、焦土を旅するに裸足にては堪え難ければ、沓を給へとマホメットに嘆願せるに因めるものとせるに拠る。或は之を『乗る』と解して騎乗すべき駱駝又は馬を指せりとなす。

汝等彼等に歸り往かば、彼等は汝等に向つて辯疏すべし。言へ「弁疏するを止めよ。吾等は断じて汝等を信ぜず。アルラーハは既に汝等の消息を吾等に告げたり。げにアルラーハ並に其の使者は、唯だ汝等の行動を見んと欲す。然る後に汝等は不可見と可見のものを知る彼の許に伴ひ往かれん。其時彼は汝等に向つて其の為せることを告知すべし」と云。汝等彼等に歸り往かば、げに彼等は汝等が彼等より遠ざからんことをアルラーハによつて誓ふべし。さらば彼等より遠ざかれ。彼等は不淨なり、彼等の住処は地獄なり、これ彼等の積めることに対する応報なり云。彼等は汝等を歡ばしむるために誓ふべし。されど設ひ汝等は彼等を歡ぶとも、アルラーハは作惡の民を歡ばず云。沙漠の民は不信と偽善とに於て更に甚だし、彼等はアルラーハが其の使者に降せる掟を知らんとせず。されどアルラーハは能知者・聰明者なり云。沙漠の民のうち喜捨を以て誅求となし、不運の汝等に回り来らんことを待つ者あり。されど不運は却つて彼等の上に回り来らん。アルラーハは能聞者・能知者なり云。されど沙漠の民のうちにもアルラーハと末日とを信じ、彼等が喜捨するもの並に使者の礼拜を以て、アルラーハに近づく道なりとする者あり。げにそは彼等にとりてアルラーハに近づく道なり。げにアルラーハは彼等を導きて其の恩寵に浴せしめん。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり云。

最上の席次を占むべき者は、最初の遷士並に輔士、及び彼等に従つて善事を行へる者なり。アルラーハは彼等を欣び、彼等またアルラーハを欣ぶ。彼は河川流るる樂園を彼等のために備へたり。彼等は長久に其中に住まん。そは偉大なる本願成就なり。

汝等の周囲に住む沙漠の民のうち、に偽信者あり、また此市の民のうちにも頑固なる偽信者あり、汝は之を知らざれども吾は之を知る。げに吾は二重に彼等を懲らし、然る後に之を重刑に処せん。その他の者は自ら己れの罪を認めたり。彼等の所行は善惡相混はる。されどアルラーハは恐らく彼等の懺悔を允さん。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり。

(1) タブーク遠征に落後せるメヂナ市民のうち、其罪を悔いて自ら其身を禮拜堂の柱に縛り、マホメットが手づから之を解くまでは断じて自ら解かずとせる者あり。其時マホメットは此の啓示に従つて彼等の自縛を解放せりと言はる。善惡相混はるとは落後せるは惡事なれど、懺悔せるは善事なりとの意味なり。

彼等の財産のうちより喜捨せしめ、之によつて彼等を洗ひ且淨めよ。而して彼等のために禱れ。げに汝の祈禱は彼等のために慰安なり。アルラーハは能聞者・能知者なり。彼等はアルラーハが其の僕等の懺悔を允し、其の喜捨を納るること、また彼が允懺悔者・大慈者なることを知らざる

か^二言へ『躬行せよ、げにアルラーハは汝等の行動を見んと欲す。彼の使者並に信者も亦然り。而して汝等やがて必ず不可見と可見のものを知る彼に帰り、彼は汝等に向つて其の為せることを告知せん』と^三。其他の者は、或は之を罰するか、或はその懺悔を允すか、唯だアルラーハの命令を待たん。アルラーハは能知者・聰明者なり^四。

(1) 此の『彼等』とは前節の自縛を解かれし人々を指すとせらる。(2) 其他の者とは、同じく落後せる三人のメヂナ市民にして、彼等もまた宥恕せられたり。本章第一一八節参照。

敵対¹と不信とによつて別に一個の礼拜堂を建立し、以て信者を離間し、且之を以て曾てアルラーハ並に其の使者と戦へる者の前哨²たらしめんとしながら、口には『吾等は唯だ善事を行はんとするのみ』と稱ふる者あり。されどアルラーハは断乎としてその虚偽なることを立証せり^三。断じて其中に立つこと勿れ。最初の日より敬虔を礎として建立せられたる礼拜堂³こそ、其中に立つて汝が礼拜するに値するものなれ。其中には好んで其身を潔むる人々あり。アルラーハは其身を淨むる者を欣ぶ^四。アルラーハを敬ばしむるために礼拜堂を建立する者と、相共に地獄の火中に顛落すべき類然たる断崖の端に之を建立する者と、果していづれが優れるか。アルラーハは不義の民を導かず^五。

彼等の心が碎き去られざる限り、彼等が建てたる建築は、その胸が粉碎し去らるるまで、永く彼等が胸中の不安の因たるべし。アルラーハは能知者・聰明者なり二三

(1) アブー・アーミル Abu Amir と呼ぶ基督教の修道者あり。マホメットを敵視すること甚だしく、ウホド・ホナインの両会戦にも参加して回教軍と戦ひしが、ホナイン役後シリアに亡命して再挙を図り、東羅馬帝國の力を藉りて回教を撃たんと策謀せしも、幾くもなくして死去したり。先是アブー・アーミルに煽動せられたるガナム Ghannam 族の偽信者等が、別に一個の禮拜堂をクバーに建立し、彼を仰いで導師となし、信者の離間を企てたりしが、アブー・アーミル死するに及んで、彼等はマホメットに向つて来りて祝福せんことを求めたり。時はタブーク出征の直前なりしを以て、マホメットは凱旋後にクバーに赴くことを承諾せしが、遠征中に新禮拜堂建立の表裏を聞知し、帰來之に臨むことを拒めるのみならず、直ちに一隊を派して之を破壊せり。此の一段は此の事件に関する者なり。(2) アブー・アーミル。(3) 信者がクバーに建立せる最初の禮拜堂。

げにアルラーハは樂園を信者に與へんがために其の財産と生命とを購へり。彼等はアルラーハの道に戦ひて、殺し且殺さるべし。これ彼が律法と福音と古蘭とに於て結べる約束なり。約束を守ることに於て誰かアルラーハよりも誠実なるものぞ。されば彼との間に行へる交換を欣べ。そは偉大なる本願成就なり二三 懺悔する者、奉仕する者、讚頌する者、善を勧め惡を阻む者、アルラーハの

掟を守る者、此等は等しく本願成就すべし。この吉報を信者に傳へよ二三

多神教徒の必ず獄火の党侶たるべきことが既に明白となれる後は、設ひ近親なりとも、彼等のために禱ふことは、豫言者並に信者の為すべきことに非ず¹二三 アブラハムが其父のために宥恕を乞へるは、彼が其父と結べる約束ありしが故なり。而して其父がアルラーハの敵なること明白となるに及んで、彼は之と絶縁することを宣告せり。げにアブラハムは柔和にして親切なりき²三四 アルラーハは、彼等が守るべきことを明示せる後ならでは、決して一旦導ける民を迷はしむることなし。げにアルラーハは萬事を知る³五 天地の大権はアルラーハに属す。彼は生かし且死なしむ。アルラーハを舍きて汝等には一愛護者なく一佑助者もなし⁶六

【1】此の啓示は或はマホメットの最大の恩人アブー・タリブの臨終に際して降りと言ひ、或は彼がメッカ征服後に母アミーナの墓に詣でたる時に降りと言はる。

アルラーハは豫言者と遷士と輔士とに慈顔を向く。彼等は一部の人心殆ど離反し去らんとせる艱難の間に、能く彼に従へる者なり。さればこそ彼は慈顔を彼等に向く。げに彼は彼等にとりて憐憫

者・大慈者なり^二 三人の落後者にも（彼は慈顔を向けたり）。大地は廣けれど彼等には狭きものとなり、彼等の魂また之によつて悩み、遂にアルラーハに頼る以外に其の懲罰を免るる途なきを知るに至れり。かくて彼は慈顔を之に向けて彼等の懺悔を允せり。げにアルラーハは允懺悔者・大慈者なり^二

（1）タブーク遠征より帰還せる後の啓示なり。此の遠征は途中の困難甚だしく、一頭の駱駝に十人交代に乗り、暑熱に水なくして一個の椰子果を兩人にて食ひ、遂に駱駝の胃袋の水を飲むに至り、軍中に不平の声高かりし時を言ふ。（2）第一〇六節に『之を罰するか又はその懺悔を允すか』と言はれし三人の落後者。

汝等信者よ、アルラーハを敬ひ、眞実者と偕に居れ^二

汝等信者よ、此市の民たると周囲の沙漠の民たるとを問はず、アルラーハの使者に落後し、又は彼の生命よりも己れの生命を重んずるが如きことあるべからず。そは彼等がアルラーハの道に於て、未だ曾て渴にも困憊にも飢餓にも遭はず、不信者の怨恨を招ぐ途をも踏まず、また敵に一撃をも加へざれど、¹尙且彼等のために善行が記録せられ居るが故なり。アルラーハは善行への報賞を湮

滅せず言 彼等は小なる喜捨も大なる喜捨も行はず、一筋の河谿をも渡らざれど、尙且アルラーハは彼等が爲せる最善の行爲に對して報賞を與へんと記録せられたり三

【1】直訳「其敵より獲べきものを獲ず」。

信者は一齊に進出すべきに非ず。各團のうち其の一部を出でて戦はしめず、彼等に宗教に関する理解を得せしめ、彼等が其民に歸りたる時、彼等に警告を與へて之を戒心せしむるを可とせざるか三

【1】此の一節もダブーク遠征より歸來せる後の啓示にして、各部族又は都邑より参加せる戦團部隊の一部を残留せしめ、之に宗教的教育を與へて歸郷後に傳道に當らしめんとするものなり。

汝等信者よ、汝等の近隣なる不信者と戦へ。彼等をして汝等の嚴厲なるを知らしめよ。アルラーハは彼を敬ふ者と偕にあることを知れ三 彼等の或者は一章降る毎に即ち曰く『汝等のうち之によつて信仰を篤くする者は誰ぞ』と。信ずる者は之によつて信仰を篤くし、且之を欣ぶ三 されど心に病ある者は、之によつて不淨に不淨を重ね、遂に不信の間に死し去るなり三 彼等は年々歳々に

度又は再度の試練あることを知らざるか。されど彼等は遂に懺悔せず、また訓誡を受けんとせず。彼等は一章降る毎に互に相顧みて曰く『汝を見る者なきか』と。而して見る者なければ即ち背きて去る。彼等は理解せざる民なり。さればアルラーハは彼等の心を眞理に背かしむ。

いま汝等の間より一人の使者汝等に来れり。彼は痛く汝等を憂慮し、深く汝等を懸念し、信者に對して柔和にして仁慈なり。

されば設ひ彼等背き去るとも言へ『吾はアルラーハあれば足る。彼の外に神なし。吾は彼に頼る。げに彼は偉大なる王座の主なり』と。

第十ヨナ章

メツカ啓示

第九九節に『若し信じたりせば、其の信仰によつて利せられたるべきに、ヨナの民を除けば是かる民の無かりしは何故ぞ。ヨナの民が信仰に入りたる時、吾は現世に於ける屈辱の刑罰を彼等より除き、時到来まで其生を樂しましめたり』とあるに因みてヨナ章 *Yonus* と名づけらる。本章はヨナの外にノア及びモーゼについて述ぶるところあるも、主としてアッラーの慈悲の一面を高調するが故にヨナ章と名づけたるものなるべし。メツカ末期の啓示とせらるるも、メデナ遷都以後に訂正を加へて今日の形態を取るに至れるもの多く、またメデナ初期の啓示も少なからず挿入せられ居るが如し。

大悲者・大慈者アッラーの名によつて

アッフ・ラーム・ラーア。こは賢明なる經典の諸節なり。何事ぞ、われ彼等のうちの一人に默示して、『人々に警告せよ、而して信ずる者には、彼等が其主の許に堅固なる地歩を得べしとの吉報を傳へよ』と言へることが、人々にとりて驚異すべきことなるか。不信者は曰く『げにこは明白なる魔術なり』とニ

げに汝等の主はアルラーハなり。彼は六日の間に天地を創造し、然る後に王座に鎮坐して萬事を総攬す。其の允許の後に非ずば何者も勸解者たるを得ず。これ汝等の主アルラーハなり。されば彼に事へよ。汝等思はざるか^三。汝等挙りて彼に帰るなり。アルラーハの約束は眞実なり、げに彼は初めに創造し、また之を復造す^一。これ信じて善事を行へる者に公平に報いんがためなり。而して信ぜざる者には、その不信に対して沸湯の嚙下と痛烈なる刑罰とあるべし^四。太陽を燦爛たらしめ、月を光明たらしめ、年数と時刻の計算とを汝等に知らしむるために其の座位を定めたるは彼なり。アルラーハが之を創造せるは、唯だ眞理を現さんがために外ならず。彼は知識ある民に種々なる休徴を明示す^五。げに晝夜の循環並にアルラーハが天地の間に創れるものうちには、其身を護る者への種々なる休徴あり^六。

【一】『復造』とに最後審判によつて賞罰を明かに定むるために、死者に再び生命を興へて復活せしむること。

げに吾との会見を念はず、現世の生活に満足して之に安んずる者、並に吾が休徴を無視する者^七。此等の者は其の積めることのために、其の住処は火獄なり^八。されど信じて善事を行ふ者は、げに主は彼等の信仰の故を以て之を導き、歡喜の樂園に河川彼等の脚下に流るべし^九。其処にての彼等

の唱呼は『アルラーハよ、栄光汝にあれ！』、また其処にての彼等の挨拶は唯だ『平安！』、而して祈禱の末尾は『三界の主アルラーハを讃へよ』なり。

若しアルラーハが人々に災厄を急ぐこと、彼等が富に急ぐが如くなりせば、彼等の期限は既に終りしなるべし¹。されど吾との会見を念はざる者は、吾之を放任して傲然として迷路を彷徨せしむ二人艱難に遭へば、或は側臥し、或は端坐し、或は起立して吾に祈る。然るに吾其の艱難を彼より除けば、宛も艱難に遭へる時に吾に祈らざりし者の如く、また己れの道を往く。背逆者は己れの爲すことを佳しと思はしめらる三

(1) 執行猶豫の期限満了して、刑罰を受くべき時到来すること。

げに吾は汝等以前に幾多の世代を亡ぼしたり。これ彼等が不義を行ひ、彼等への使者が明証を齎して彼等に至りしも、決して之を信ぜんとせざりしが故なり。吾は是くの如くにして作惡の民に報ゆ三 然る後に吾は汝等をして彼等の後に地を嗣がしめたり。これ汝等が如何に行ふかを見んがためなり四

然るに吾が明瞭なる休徴が彼等に向つて讀誦せられたる時、吾との会見を希はざる者は言へり『之と異なる古蘭を齎せ、然らずば之を変改せよ』と。言へ『吾は私に変改するを得ず、吾は唯だ吾に默示せられたるものに従ふのみ。吾若し吾主に背かば、吾は偉大なる日の懲罰を恐る』と三
言へ『アルラーハ若し欲したりせば、吾は之を汝等に復誦せず、また之を汝等に知らしめざりしなり。その降る以前、われ汝等の間に居ること実に四十年¹なり。汝等尙ほ曉らざるか』と云　アルラーハについて虚構し、又は其の休徴を虚偽なりとするより甚だしき不義あるか。げに作惡者は決して榮えざるべしモ

(一)直訳『二世代』。マホメットが初めて天啓を受けたるは其の四十歳の時なり。

彼等はアルラーハを舍きて、毫も己れを損益せざる者を拜す。而して彼等曰く『此等はアルラーハへの吾等の勸解者なり』と。言へ『汝等はアルラーハに向つて天地の間に彼の知らざることを告げんとするか。彼を讚へよ、彼は高く彼等が彼に配する神々に超在す』と云　初め人間は一團なり¹。然る後に彼等は多岐となれり。若し既に発せられたる汝の主の言^{ことば}なかりせば、彼等の多岐に關して判決は既に下されたりしなるべし云　彼等曰く『何故に主よりの休徴²が彼に降されざるか』と。

言へ『不可見のものは唯だアルラーハに属す。されば待て、吾も汝等と共に待つ者の一人なり』
と三〇

(1) 一團とは同一信仰を報ずる一團なり。マホメットは最初人間は悉く唯一の神に事なる一團なりしことを屢々力説す。
(2) この『休徴』は奇蹟を意味すとすべし。即ちマホメットに奇蹟を示さんことを求むるなり。

われ人々が艱難に遭へる後に之を慈悲に浴せしむれば、彼等は却つて吾が休徴に対して策謀す。¹
言へアルラーの策謀は神速なり。而して吾が諸使者は既に汝等の策謀を記録したり』と三二

【1】此の一節はバイザールに從へば、メッカガ七年に亙る旱魃の後に降雨によりて救はれたる時の啓示とせらる。(2)
この『諸使者』は人間の言行を監視する諸天使を指す。

汝等をして陸海を往來せしむる者は彼なり。汝等船にあり、船は彼等を載せ、和風に乗じて走る。彼等之を欣ぶ時、暴風忽ち船を襲ひ、波浪四方より來りて彼等殆ど難破を覚悟す。此時彼等専らアルラーハに歸命して彼に向つて祈りて曰く『汝若し吾等を之より救はば、吾等必ず感謝を献げん』と三三 然るに主が彼等を救ふに及んで、見よ彼等地上に於て妄りに背逆す。人々よ、汝等の背

逆は唯だ己れに対して背逆するのみ。現世の生活は暫時の享樂なり。然る後に汝等は吾に歸る。其時吾は汝等に向つて其の爲せることを告知すべし^三。げに現世の生活は、譬ふれば吾が天上より降す雨の如し。人畜の食する地上の草木は雨と混り、大地は華麗なる装ひを以て己れを飾り、人は自ら大地の主人を以て居る時、或は白晝、或は暗夜、吾が命令一たび下れば、忽ち之を變じて昨日まで繁茂せりとは思ふべくもなき刈株たらしむ。吾は是くの如く吾が休徵を反省する民に明示す^四。

アルラーハは己れの欲する者を平安の住処に招ぎ、直き道に導く^五。善事を行ふ者には善賞の上^六に實に更に加増あり、彼等の面には憂愁又は羞辱の蔭なし。此等は樂園の党侶にして、長久に其中に住まん^七。惡事を積める者には其の惡行に等しき応報あり。彼等の上には羞辱来り、彼等をアルラーハより守る一防護者もなく、其面は深夜の黒闇に蔽はれたる如くなるべし。彼等は火獄の徒にして、永劫に其中に住まん^八。

(一) 『平安の住処 Daru's-Salam』は樂園の数ある名称の一。

一齊に彼等を召集する日、吾は同位者を吾に配せる者に言はん『控へよ！汝等並に汝等の神々は』と。然る後に吾は両者の間を隔つべし。其時神々は言はん『汝等は吾等を拜せるに非ず^六。ア

ルラーハは汝等と吾等との証人たるに足る。げに吾等は汝等の崇拜を無視したり』と云 此時各人皆な其の豫め送れるものを知り、彼等の眞実の主アルラーハに帰らしめられ、彼等が虚構せる者は彼等を棄て去るなり言

言へ『汝等のために天と地とより糧餉を賜ふ者は誰ぞ。汝等の耳目を支配する者は誰ぞ。死者を活かし、生者を死なしむる者は誰ぞ』と。彼等は言はん『アルラーハ』と。然らば即ち言へ『汝等其身を護らんとせざるか』これ汝等の眞実の主アルラーハなり。眞理の後に残るものは迷誤に非ずして何ぞ。然るに汝等何故に背き去るか』と云 かくて背逆者は信ぜざるべしと言へる汝の主の言は眞実となれり言

言へ『汝等の神々のうちに、能く創造し且復造する者あるか』と。言へ『アルラーハは能く創造し且復造す。然るに汝等何故に背き去るか』と云 言へ『汝等の神々のうちに、能く眞理に導く者あるか』と。言へ『アルラーハは眞理に導く。然らば眞理に導く者と、己れが導かれずば道を知らざる者と、いづれが随順せらるべき者ぞ。汝等何を苦しむか。汝等如何に判断するか』と云 彼等の多くは唯だ臆測に従ふのみ。臆測は断じて眞理に代るを得ず。げにアルラーハは彼等の爲すことを知悉す言

この古蘭はアルラーハ以外の者によつて偽作せらるる如きものに非ず。こはその以前にありしものを確証し、三界の主よりの無疑の經典を闡明するものなり。彼等は『彼之を偽作せるか』と言ふか。言へ『汝等の言眞実ならば、之に類する一章を作り、アルラーハ以外に汝等が呼び得る誰にても呼べ』と言。然らず、彼等は己れが理解し得ざる、且未だ彼等に其の解釋を示されざる知識を以て虚偽なりとするものなり。彼等以前の者もまた之を虚偽としたりき。而も見よ、不義者の末路の如何なるものなりしかを言。彼等のうちには之を信する者あり、また之を信ぜざる者あり。而して汝の主は作悪者を熟知す。

彼等もし汝を虚言者となさば即ち言へ『吾には吾事あり、汝等には汝等の事あり。汝等は吾が爲すことに関りなく、吾は汝等の爲すことに関りなし』と。彼等のうちには汝に耳傾くる者あり。されど設ひ彼等が理解なき聾者なりとも、汝は之に聽かしめんとするか。また彼等のうちには汝に目を注ぐ者あり。されど設ひ彼等は見ること得ざる盲者なりとも、汝は道を之に示さんとするか。げにアルラーハは決して人を害せず、人自ら己れを害するのみ。われ一齊に彼等を召集する日に當り、彼等互に他を認めて、その墓中に留まれるは白晝の一刻にすぎざりしが如く感ぜん。アルラーハとの会見を虚偽なりとし、正しく導かれざる者は、既に淪喪者となれるなり。

われ吾が彼等に約束せる事の一部を汝に示すとも、又は汝を迎へ入るとも、彼等もついに吾に歸るなり。其時アルラーハは彼等の為せることについて証人たるべし。各の民に一人の使者あり。彼等の使者未る時、彼等は公平に裁判せられ、不当に遇せらるることなかるべし。

(1) 不信者に約束せる刑罰、(2) 天上に迎ふること、即ち死なしむること、(3) 復活の日に各使者来りて、その遣はされたる民の証人となるなり。

彼等曰く『汝等の言眞実ならば、この約束の未るは何時ぞ』と。言へ『アルラーハ欲するに非ずば、吾は己れの利害を左右する力を有せず、各の民には皆な定められたる期限あり、期限未れば彼等は一刻も遅るるを得ず、また先んずることも得ず』と。言へ『汝等思へるか、彼の懲罰は或は暗夜、或は白晝、突如汝等に降るべきに、作惡の人は何を催促せんとするか。汝等は其の未るに及んで初めて之を信ぜんとするか』と。『何事ぞ、今は之を信ずるとや、汝等は其の未るを催促せるなり』と。其時不義者に是く言はれん『永劫の刑罰を味へ。汝等は唯だ其の積惡に対して報いられるのみに非ずや』と。言へ『然り、神かけて眞実なり。而して汝等決して免るる能はず』と。

(1) 此の一句は不信者が其の嘲笑せる復活の日に当り、曾て催促せる刑罰に当面して周章狼狽するを笑ひて、諸天使が発せる言と見るべし。

不義者は、若し地上一切のものが其の所有なりせば、之を挙げて其罪を贖はんとすると至るべし。彼等刑罰を目睹する時、其心は密かなる悔恨の念に満たされん。而して審判は公平に下され、彼等は不当に遇せらるることなし。嗚呼、天地間の一切のものはアルラーハの有なるぞ。嗚呼、アルラーハの約束は眞実なるぞ。然るに彼等の多くは之を知らず。彼は生かし且死なしむ。而して汝等は彼に帰らしめらる。人々よ、汝等の主より汝等に訓誡降り。また汝等の胸中の鬱屈を癒やす医薬と、信者への嚮導と慈悲と降り。

言へ『アルラーハの恩寵と其の慈悲、彼等をして之を飲ばしめよ。そは彼等が集むるものに勝る』と云。言へ『吾に告げよ、アルラーハが汝等に賜へる食物のうち、汝等任意に或ものを合法とし、或ものを禁じたるか』と。言へ『アルラーハ之を汝等に命じたるか、又は汝等アルラーハについて虚構せるか』と云。アルラーハについて虚構せる者の復活の日に於ける感想は果して如何なるべきぞ。げにアルラーハは人間に仁慈なり。然るに彼等多くは感謝せず。

汝が一事を行ひ、また古蘭の一章を誦するに当り、並に汝等が一事を行ふに当りて、汝等が之に従事しつつある間は、吾常に之を照覽せずといふことなし。また天地間の一塵、或は塵よりも小又は大なるものといへども、一として汝の主より免れ得るはなし。そは悉く載せて明瞭なる經典の中にありき。嗚呼、アルラーハが愛護する者には畏怖なく憂懼なしき。信じて其身を護る者き。彼等のためには現世並に来世の吉報あり。アルラーハの言には変更なし。げにそは偉大なる本願成就なりき。彼等の言に汝の心を悩ますこと勿れ。稜威は専らアルラーハの有なり。彼は能聞者・能知者なりき。

嗚呼、天地間の一切のものはアルラーハに属す。さればアルラーハ以外の神々を拜する者は、其等の神々に従ふに非ず、唯だ己れの臆測に従ふにすぎずき。休息のために夜を汝等に與へ、見るために晝を汝等に與へたるは彼なり。げに此中には聽かんとする人々への種々なる休徴ありき。

彼等曰く『アルラーハは子を生めり』と。彼を讚へよ、彼は求むるところ無き者なり。天地間の一切は彼に属す。汝等此事について如何なる保証を有するか。汝等は己れの知らざることアルラーハについて語るかき。言へ『アルラーハについて虚構する者は、決して本願成就せず』と云。現世に於ける暫時の享樂の後、彼等は吾に歸る。其時吾は彼等の不信に対して痛刑を加ふべしき。

彼等にノアの消息を復誦せよ。彼其民に向つて曰く『吾民よ、吾が此地に留まること、並にアルラーハの休徴を以て汝等を訓誡することが、設ひ汝等の心を苦しむるとも、吾は堅くアルラーハに信賴す。されば汝等その拜する神々と共に汝等の事を決せよ。汝等の事について狐疑する勿れ、吾に向つて之を断行して猶豫を興ふる勿れ』 訪ひ汝等背き去るとも、吾は報酬を汝等に求むる者に非ず。わが報酬はアルラーハの許にあり。而して吾は婦命者たるべきことを命ぜられたり』とき
然るに彼等は彼を虚言者となせり。されば吾は彼並に彼と共にありし者を舟に救ひ、彼等をして地を嗣がしめ、わが休徴を虚偽なりとせる者を溺れしめたり。されば警告せられたる者の末路が如何なるものなりしかを見よ』

吾は彼の後に諸の使者を彼等の民に遣はしたり。諸使者は皆な明証を齎して彼等に至りしも、彼等は以前に虚偽なりとせるものを信ぜんとせざりき。吾は是くの如く背逆者の心を封ず』

吾は彼等の後にモーゼ並にアロンを、わが休徴を齎してファラオ並に其の貴人等に遣はしたり。されど彼等は傲慢にして罪深き民なり』 吾よりの真理が彼等に至れる時、彼等曰く『こは明白なる魔術なり』とき
モーゼ曰く『真理汝等に至れるに、汝等は之については是くの如き言をなす

か。こは魔術なるか。魔術者は榮えざるべし』とモ 彼等曰く『汝の來れるは、吾等を祖先が守り
來れるものに背かしめんがためなるか、而して汝等兩人が此の國土の權力を握らんがためなるか。
吾等は断じて汝等兩人を信ぜず』とモ ファラオ曰く『一切の有識の魔術者を吾前に伴ひ來れ』
とモ 魔術者等來れる時、モーゼ彼等に向つて曰く『汝等が抛たんとするものを抛て』とモ 彼等
が抛てる時、モーゼ曰く『汝等が齎せるものは魔術なり。げにアルラーハは之を撥無すべし。げに
アルラーハは作悪者の為すことを榮えしめず』 設ひ作悪者は之を厭ふとも、アルラーハは其言に
よつて眞理を立証すべし』とモ

されどファラオ並に貴人等が彼等を迫害せんことを恐れて、モーゼの民の外は彼を信ずる者なか
りき。げにファラオは國內に於て至高なりき。げに彼は放恣者の一人なりき』 モーゼ曰く『吾民
よ、汝等アルラーハを信するならば、而して眞に歸命者ムヘリムとなりしならば、仰いでアルラーハに頼
れ』とモ 彼等曰く『吾等はアルラーハに頼る。主よ、吾等をして不義の民の迫害に遭はしむる勿
れ』 汝の恩寵を垂れて不信の民より吾等を救へ』とモ われモーゼと其の兄弟とに默示して曰く
『汝等の民のために埃及に住宅を備へ、汝等の住宅を禮拜の場1とせよ、而して信者等に吉報を傳
へよ』とモ

(1) 『禮拜の場処』の原語は Qidlah にして、回教徒が禮拜に當りて面する方位即ち『朝向』のことなり。但し此処にては禮拜の場処を意味す。蓋し猶太人が埃及に於てファラオの迫害のために公然禮拜を行ふ能はず、室内を以て禮拜処とせるを言ふ。

モーゼ曰く『主よ、げに汝はファラオ並に其の貴人等に現世の榮華と富裕とを賜ひたり。主よ、そのために彼等は人々を汝の道より迷はしむ。主よ、彼等の富貴を撥無し、彼等の心を硬くし、痛刑を目睹するまで彼等を信仰に入らしむる勿れ』と云　彼曰く『汝等兩人の祈願は聽許せらる。されば直き道を歩み続け、無智なる者の道に従ふ勿れ』と云　吾はイスラエルの兒等をして海を渡らしめたり。ファラオ並に其の軍勢は逆心と怨恨とを懷きて彼等を追求せしが、溺死彼に臨むに及んで初めて曰く『吾はイスラエルの兒等が信ずる神の外に神なきを信ず。吾は婦命者くスリムの一人となれり』とき　『何事ぞ、今は信ずるとや。以前汝は吾に抗して、作悪者の一人なりしに非ずや』と　されど今日吾は汝を其の肉体と共に救はん。これ汝をして汝の後に來る者への休徴たらしめんがためなり』と。されどげに多くの人々は吾が休徴を閑却す

(1) 天使ガブリエルの言とせらる。旧約出埃及記第五章第二節、第九章第一五・一六節、第一十五章第一一節参照。

吾はイスラエルの兒等に定着の地を與へ、種々なる佳きものを備へたり。而して知識が彼等に來れるまでは、互に相争ふことなかりき。げに復活の日に於て、主は彼等が争論せることについて、彼等を審判すべしと

汝若し吾が降せるものについて疑惑を抱かば、汝以前の經典を讀誦する者に問へ。眞理は汝の主より汝に來れるなり。されば狐疑者の一人となる勿れと 淪喪者の一人とならざらんために、アラハの休徴を虚偽なりとする者のうちに加はる勿れと げに主の判決が既に確定せる者は矣 設ひ一切の休徴彼等に來るとも、痛刑を目睹するまで信ぜざるべしと

若し信仰に入りたらんには、其の信仰によつて利せらるべきに、ヨナの民を除けば是くの如き都府なかりしは何故ぞ。ヨナの民が信仰に入りたる時、吾は現世に於ける羞辱の刑罰を彼等より除き、時到るまで其生を樂しましめたりと 若し汝の主が欲したりせば、地上總ての人々挙りて信仰に入りしなるべし。然るに汝は人々を強要して信者たらしめんとするかと アラハの允許あるに非ずば、何人も信仰に入るを得ず。而して彼は理解せんとせざる者には不淨を投ずと

(1) ヨナの民とはニネベ Nineveh の市民なり。彼等多神教徒となれる時、アルラーハはヨナを遣はして之に警告せしめたり。されど彼等初めはヨナの言に耳傾けざりしかば、ヨナは三日後又は四十日後に天譴必ず彼等の上に降るべしと宣言してニネベを去れり。豫言の日次第に近づくや、天に異象現れ、市民驚愕畏怖して罪を悔ひ、至心に宥恕を祈りて幸に天譴を免れたりと傳へらる。

言へ『天地の間にあるものを見よ』と。されど休徴も警告も、信ぜざる民を益せず。彼等は彼等以前に逝ける者が遭へる如き艱難の外に、また何ものを期待し得るか。言へ『待て。吾また汝等と共に待つ者の一人なり』と。其時吾は吾が使者と信者等とを救ふべし。信者を救ふは吾が務めなり。

言へ『人々よ、汝等設ひ吾教を疑ふとも、吾はアルラーハを舍きて汝等が拜する者のを拜せず。吾は汝等の生命を取り去るアルラーハを拜す。而して吾は信者たるべきことを命ぜられたり』と。堅信者として汝の面を眞実の教に向けよ、多神教徒の一人となる勿れ。アルラーハを舍きて汝を益せずまた損せざる者に祈ること勿れ。若し之を為さば汝は不義者の一人たらん。アルラーハ若し汝に災厄を降さば、彼の外に之を除く者なく、彼若し汝に幸福を授けなば、何者も其の恩

寵を阻むことなし。彼は僕等のうちの己れの好む者に之を授く。彼は大悲者・大慈者なり

言へ『人々よ、汝等の主よりの眞理汝等に未れり。導かるる者は唯だ己れの利益のために導かれ、迷ふ者は唯だ己れの損失のために迷ふ。吾は汝等の看護者に非ず』と云、汝に黙示せられたるものに從ひ、アルラーハが審判するまで耐え忍べ。げに彼は最勝の審判者なり

第十一 ホード章

メッカ啓示

第五〇節に『アアドの民には其の同胞ホードを遣はせり』とあるに因みてホード章 هوود と名づけらる。第一一四節以下はメ
チナ啓示とせられ、其他はメッカ後期のもものとせらる。但しメチナ遷都以後に訂正を加へたりと思はるる諸節多きこと前第十章
と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ラーム・ラア。こは其の諸節が確定せられ、然る後に明解せられたる經典にして、聰明
者・悉知者より出でたるものなり。曰く『アルラーハ以外の何者にも事ふる勿れ。げに吾は警告
者並に吉報傳達者として彼より汝等に遣はされたる者なり』と。また曰く『汝等の主の宥恕を求
めて彼に懺悔せよ。然らば定められたる時到来るまで、彼は多幸なる人生を汝等に享樂せしむべし。
而して恩寵に浴すべき者には其の恩寵を垂るべし。されど汝等若し背き去らば、吾は汝等のために
偉大なる日の懲罰を恐る』^三 汝等はアルラーハに帰る。而して彼は全能なり¹』と^四

(1) 本章の序説と見るべき叙上四節は、ベルに従へばメヂナ啓示なり。

嗚呼、彼等はアルラーハに匿さんとして其胸を擁す。嗚呼、彼等其衣を以て己が身を覆はんとするも、彼は能く彼等の匿すこと並に露すことを知る。げに彼は胸中の秘奥を知る^五。地上の生きとし生けるもの、みなその糧餉をアルラーハに仰がざるはなし。彼はその棲処を知り、その寄処を知る¹。一切は載せて明瞭なる經典にあり^六。六日の間に天地を創造せるは彼なり。その王座は初め水上に在りき²。これ彼が汝等を試みて、善行最勝なる者を知らんがためなり。されど汝若し『げに汝等は死後に甦らしめられん』と言はば、信ぜざる者は必ず言はん『げにこは明白なる魔術に外ならず』とせ

(1) 生前の住処と死後の住処とを知ること。(2) 天地創造の初めに神の王座が水上の空中にありきとするは猶太教の信仰なり。但し此の一句を『その支配は水上に及ぶ』と解する学者あり。例へばムハムマッド・アリーの如し。

げに吾若し定められたる時まで彼等の懲罰を延ばせば、彼等曰く『之を妨ぐるは何者ぞ』と。嗚呼、其の彼等に来る日は、何者も彼等のために之を避くるを得ず、曾て彼等が嘲笑せることが四方

より彼等を困むべし。げに吾若し人を吾が慈悲に浴せしめ、然る後に之を彼より撤回すれば、其人必ず絶望して恩を忘る。げに吾若し艱難の後に恩寵を味はしむれば、其人必ず『艱難吾を去れり』と言ひ、狂喜して自ら矜る。唯だ耐え忍びて善事を行ふ者は然らず。此等の者は宥恕と重賞とを獲べし。

恐らく汝は汝に黙示せられたるものの一部を放棄せんとし、汝の胸はそのために窄きを覚ゆべし。そは彼等が是く言ふが故なり『何故に財宝が彼に降されざるか、また何故に天使が彼と共に来らざるか』と。されど汝は一警告者にすぎず、萬物を管理する者はアルラーハなり。彼等また曰く『彼は之を偽作せり』と。言へ『然らば之に類する汝等が偽作の十章を示せ。而して汝等の言眞実ならば、アルラーハ以外に汝等が能くする如何なる神々にても呼べ』と。彼等若し汝等に応へずば、そはアルラーハの知識によつて降されたるものなること、而して彼の外に神なきことを知れ。さらば汝等帰命者となるか。

現世の生活とその榮華とを望む者には、われ現世に於て存分に彼等の所行に報ゆべく、その報償は決して減ぜらるることなし。されど此等の者は、来世に於て火獄の外に何ものもなき者なり。

其処にては現世にて為せることは無効となり、その既往に行へることは空無に帰すべし^三。是くの如き者を、其主よりの明白なる証據¹に立脚する者と同一視すべきか。そは彼より来れる証人²が之を讀誦せるものにして、その以前には嚮導にして且慈悲たるモーゼの經典あり。此等は古蘭を信ずる者なり。而して之を信ぜざる諸宗門の者は、火獄をその住処と定めらる。されば之を疑ふ勿れ。そは汝の主よりの真理なり。されど人々多くは之を信ぜず^三。

(1) 古蘭。(2) 天使ガフリエル。

アルラーハについて虚偽を構ふるより甚だしき不義を行ふ者あるか。復活の日に彼等は其主の前に立たしめられ、諸証人は是く言はん『此等は其主について虚偽を構へたる者なり』と。アルラーハの呪咀、不義者の上に降らざらんや^三。彼等は人をアルラーハの道に背かしめ、之を歪曲せんとし、また末世を信ぜざる者なり^三。此等は地上に於て天譴を免れず、アルラーハの外に一愛護者なく、末世の懲罰は彼等に倍加せらるべし。彼等は聞くことを得ず、また見ることを得ざりしなり^三。此等は自ら其身を滅ぼせる者にして、其の虚構せる神々は彼等を棄て去るべし^三。げに末世にては彼等こそ疑ひなく最悪の淪喪者なるべけれ^三。されど信じて善事を行ひ、其主に対して謙虚なる者

は樂園の党侶にして、長久に其中に住まん^三 両者を譬ふれば一は失明者と啞者にして、他は能視者と能聞者となり。両者の事情等しからんや、汝等思はざるか^四

げに吾はノアを其民に遣はしたり。彼曰く『吾は汝等への公然の警告者なり^五 アルラーハ以外の何者にも事ふる勿れ。げに吾は汝等のために痛ましき日の懲罰を恐る』と^六 其民のうちの信ぜざる貴人等曰く『吾等汝を視るに吾等と等しき人間にすぎず。また思慮^一なくして汝に従ふ者を視るに、吾等のうちの最も卑賤なる者のみ。吾等は汝等が毫も吾等に優るところあるを見ず。否、吾等は汝等を虚言者となす』と^二 彼曰く『吾民よ、汝等吾に告げよ、吾設ひ汝等には見えざれど、其の慈悲を吾に垂れたる吾主よりの明証の上に立つとするも、汝等が之を厭悪する時に、われ之を汝等に強い得べきか^三 吾民よ、吾は報酬として財貨を汝等に求むるに非ず、わが報酬は唯だアルラーハにあり。また吾は信じたる者を逐はんと欲せず。げに彼等は必ず其主に会ふべき者なり。されど吾は唯だ汝等が無智の民なるを見る^四 吾民よ、吾若し彼等を逐はば、アルラーハの懲罰より吾を救ふ者は誰ぞ。汝等尙ほ思はざるか^五 吾は汝等に向つて吾にアルラーハの宝庫ありと言はず、また不可見のものを知れりと言はず、また吾は天使なりとも言はず。されど吾は汝等が蔑視する者

に向つて、アルラーハは決して彼等に幸福を與へざるべしとも言はざるべし。アルラーハは最も善く彼等の胸中を知る。吾若し敍上の言をなさば、吾は不義者のうちに加はるべし』と云。彼等曰く『ノアよ、汝は吾等と争論せり、げに多岐に互りて争論せり。さらば汝の言眞実ならば、汝が吾等に威嚇することを吾等に齎せ』と云。彼曰く『アルラーハ若し欲しなば、彼之を齎すべく、汝等は之を避け得ざるべし。アルラーハ若し汝等を迷はしめんと欲しなば、設ひ吾汝等に善き助言を與へんとするも、吾が善き助言は汝等を益せざるべし。されど彼は汝等の主なり。汝等は彼に歸らしめらる』と云。

(1) 直訳『匆率なる判断によりて』。(2) ノアに信從する卑賤者の追放を求められたるに對して之を拒めるなり。

彼等¹曰く『彼は之を偽作せるか』と。言へ『吾若し之を偽作せりとすれば、罪は吾にあり。されど吾は汝等が犯す罪には関りなし』と云。

【1】此の一節、前後と連絡なし。此處に『彼等』と言ふは『ノアの民のうちの信ぜざる貴人等』に非ず、メッカ市民のうち不信者を指す。

ノアに是く黙示せられたり『すでに信者となれる者の外、汝の民は決して信ぜざるべし。されば彼等の為すことに心を悩ます勿れ』と云。わが目前にて、わが黙示に従ひて方舟ほこぶねを造れ。不義を行ふ者のために吾に歎願する勿れ。彼等必ず溺れしめられん』と云。かれ方舟を造り初めたり。其民のうち貴人等、彼を過ぎる毎に彼を笑ひたり。彼曰く『設ひ汝等吾等を晒ふとも、吾等また汝等が晒へる如く汝等を晒ふ時あらん』と云。やがて汝等は羞辱の刑が何人に来るか、永劫の罰が何人に降るかを知らん』と云

わが命令既に下り、水は谷1より迸り出でたる時、吾曰く『各類の一對兩個と、宣告既に下れる者を除く汝の家人と、既に信仰に入りたる者とを方舟に乗らしめよ』と。されど彼と共に信じたる者は僅少なりき』と云。彼曰く『汝等船に乗れ、帆を挙ぐる時、錨を下ろす時、常にアルラーハの名を唱へよ。げに吾主は宥恕者・大慈者なり』と云。船は彼等に乗せて山の如き波浪の中を走れり。ノア、離れて立てる其子と呼んで曰く『吾子よ、吾等と共に船に乗れ、不信者と偕に居る勿れ』と云。彼曰く『吾は吾を水より救ふ山上に赴かん』と。彼曰く『此日はアルラーハが慈悲を垂るる者の外、何人も其の懲罰を免るる能はず』と。宛も其時、波浪父子の間に寄せ来り、彼は溺死者の一人となれり』と云。時に声ありて曰く『大地よ、汝の水を收めよ。天よ、雨降らすことを止めよ』と。か

くて水は減じ、事は了り、船はジューデュー山上に泊れり。また声ありて曰く『不義の民を葬り去れ』と云

【1】『谷』の原語は Tamar にして、多くの学者は之を『火爐』と解し、猶太人のラビ等が、洪水の民は熱湯にて罰せられたりとするに拠るものならんとせり。されど此語には爐の外に水源又は貯水池の意味あるを以て、予は之を採れり。(2) ジューデュー Al-Judi 山はアルメニアとメソポタミアとを分つ山脈中の一峰 Gardu 又は Gardu 山にして、希臘人が Gordyaei 山と呼べるものなりとせらる。而して此の地方に住めるは Gardu 人なるを以て其名は之に由来すとせらる。

ノア其主を喚んで曰く『主よ、げに吾子は吾家の一人なり。げに汝の約束は確實なり¹。汝は審判者中の最勝の審判者なり』と云 彼曰く『ノアよ、げに彼は汝の家のものに非ず。げにそは義しき事に非ず²。されば汝が如何なる知識をも有たざることについて吾に求むる勿れ。げに吾は汝が無智者の一人たらざらんことを誡しむ』と云 彼曰く『主よ、げに吾は汝の加護を求め、わが知らざることを汝に問はざるべし。汝若し吾を宥恕し、慈悲を吾に垂れずば、吾は必ず淪喪者の一人たらん』と云 時に声ありて曰く『ノアよ、平安に降りよ³。吾は汝並に汝と偕にある一團を祝福す。他の一團には、吾之に現世を享樂せしめ、然る後に之に痛刑を加へん』と云 此れ不可見のもの消

息の一つなり。吾は之を汝に默示す。以前は汝之を知らず、汝も汝の民も之を知らざりしなり。さらば耐え忍べ。善果は必ず其身を護る者に歸す異

(1) 家族の者は必ず之を救はんと言へるアルラーハの約束に対し、家族の一人たる子息を殺せるは何故ぞと訴ふるなり。

(2) ノアが其子のために訴ふるは義しからずとの意味。此子は多くの註釈家によりてカナン Canaan のこととせらる。

信仰を失へるが故にノアの家人として認められざるなり。但し此の一句は回教徒の神学者によりて「彼は正しからざることを行へり」と解釈せらる。蓋し豫言者に不義の行動あるべからずとして「義しからざること」をカナンに歸するものなり。

(3) 方舟より降りよとの意味。回教徒はノアはアラビア曆第七月十日に乗船し、第一月十日に下船せりとなす。従つて彼等に從へばノアの方舟に在りしは六個月なり。

吾¹はアアドの民に其の同胞ホードを遣はしたり。彼曰く「吾民よ、アルラーハに事へよ、彼の外に汝等に神なし。汝等は唯だ虚構するのみ吾。吾民よ、吾は此為に如何なる報酬をも汝等に求めず。吾が報酬は唯だ吾を創れる彼の許にあり。汝等曉らざるか吾。吾民よ、汝等の主の宥恕を求め、彼に向つて懺悔せよ。彼は雲を汝等の上に送りて沛然たる雨を降し、汝等の力に更に力を加ふべし。されば作悪者となりて背き去る勿れ」と吾。彼等曰く「ホードよ、汝は如何なる証據をも吾等に齎さず。吾等は汝の言によつて吾等の神々を棄てず、また吾等は汝を信ぜず吾。吾等は唯だ吾

等の神々の或者が汝に禍をなせりと言ひて止まん』と。彼曰く『吾はアルラーハを証人に呼ぶ。汝等も吾が彼以外の汝等の神々と関りなきことの証人たれ』さらば汝等挙りて吾に策謀し、吾に猶豫を與ふる勿れ。げに吾は吾主にして汝等の主なるアルラーハに頼る。生きとし生ける者、一としてアルラーハが其の前髪を捕へざるはなし。げに吾主は直き道の上にある。設ひ汝等背き去るとも、吾は既に吾が汝等に齎し来れる使命を傳達せり。吾主は汝等の代りに他の民を挙げん。汝等は彼の一事をも妨ぐることを得ず。げに吾主こそ萬事の監察者なれ』と。かくて吾が命令至るに及んで、吾は吾が慈悲を垂れてホード並に彼と共に信じたる者を救ひたり。吾は極刑より彼等を救へるなり。これアアドの民のことなり。彼等は其主の休徴を虚偽なりとし、其の使者に抗し、一切の頑冥なる暴虐者の命令に従へるものなり。されば現世に於て、また復活の日に於て、彼等は呪咀に追求せらる。嗚呼、アアドの民は其主を信ぜざりき。嗚呼、ホードの民アアドを葬り去れる。

(1) 第七章第六五節以下参照。(2) 前髪を捕ふるとは支配下に置くこと。

吾はサムードの民に其の同胞サードヒを遣はしたり。彼曰く『吾民よ、アルラーハに事へよ、彼の外に汝等に神なし。彼は汝等を大地より生れ出でしめ、且生を大地に続けしむ。されば彼の宥恕

を求め、彼に向つて懺悔せよ。げに吾主は昵近者・応諾者なり』と云。彼等曰く『サーリヒよ、以前汝は吾等のうちにて望を属せられたる一人なりき。然るにいま汝は吾等が吾等の祖先が事へ来りし者に事ふることを禁ぜんとするか。げに汝が吾等を招ぐ教について、吾等は不安なる疑惑の中にあり』と云。彼曰く『吾民よ、吾に告げよ。吾若し吾主よりの明証の上に立ち、彼その慈悲を吾に垂るとすれば、吾若しアルラーハに背かば、吾を護りて彼の懲罰を免れしむる者は誰ぞ。汝等は唯だ吾が破滅を促さんとするものなり云。吾民よ、こは汝等へのアルラーハの休徴なる牝駝なり。されば之をアルラーハの大地に放牧し、之に害を加へて身近き懲罰を受けざれ』と云。然るに彼等之を殺したり。彼曰く『三日の間は汝等の家にて生を樂しめ。こは偽りなき約束なるぞ』と云。かくて吾が命令至るに及んで、吾は吾が慈悲を垂れてサーリヒ並に彼と共に信じたる者を救ひ、また復活の日の羞辱よりも救ひたり。げに汝の主は強大者・偉力者なり云。轟然たる一声、不義を行へる者を襲ひて、翌朝彼等は地に俯して其家に仆れ居たり云。其様は宛も彼等が其処に住めることなかりしものの如くなりき。嗚呼、サムードの民は其主を信ぜざりき。嗚呼、サムードの民を葬り去れ云。

(1) 第七章第七三—七九節参照。

吾が使者等は吉報を携へてアブラハムに至れり。彼等『平安！』と言ひければ、彼また『平安！』と答へたり、而して時を移さず燔きたる犢こしを持ち来れり。然るに彼等其手を犢こしに触れざりしかば²、彼之を恠おそしみ、彼等に対して恐怖おそれを抱きたり。彼等曰く『恐るる勿れ、げに吾等はロトの民に遣はされたる者なり』とき。其時、傍に立てる彼の妻笑ひしかば³、吾は彼女にイサクと、イサクの後にヤコブ（を産むべしと）の吉報を傳へたり。彼女曰く『悲しいかな、吾はいたく老い、此の吾夫また老人なるに、吾如何にして子を産むべけんや。げに不可思議の事なり』とき。彼等曰く『汝はアルラーハの命令を不可思議とするか。此家4の人々よ、アルラーハの祝福と慈悲と汝等の上にあれ。げに彼は可頌者・光耀者なり』とき。

(1) 『使者等』とはガブリエル・ミカエル・イスラフィールの三天使とせらる。旧約創世記第十八章第一―七節参照。

(2) 食事を共にせざるは敵意の表明なり。但し創世記には彼等が之を食へりとあり。(3) 『妻笑へり』の意味不明なり。或はロトの民即ち男色を事とせるソドムの民に天譴の降るを聞きて喜べるなりとし、或は之を『月経来れり』と解釈して、妊娠可能の兆候現れたるなりとなす。(4) 回教神学者は『此家』とはアブラハム及びイシマエルが建立せりとするメッカの方殿カーガを指せるものなりとす。

さてアブラハムの恐怖去り、吉報彼に傳へられたる時、彼はロトの民のために吾に歎願せり。そはアブラハムが温順・柔和・篤信なりしが故なり也。 (使者等曰く) 『アブラハムよ、此事を断念せよ。主の命令は既に下り、避け難き懲罰が既に彼等の上に来りつつあり』と云

而して吾が使者等がロトに来れる時、彼は彼等のために心を苦しめ、且彼には彼等を護る力なかりしかば、『今日は苦難の日なり』と言へり也。而して其民は奔馳して彼に来れり。彼等は以前にも種々なる惡事を行へる者なりき。彼曰く『此処に吾が娘らあり、彼女等は汝等には潔きにすぎ。さればアルラーハを敬ひ、わが客人の前に吾を辱しむる勿れ。汝等のうちに一人の義しき者もなきか』と云。彼等曰く『汝は吾等が汝の娘らに対して毫も求むるところなきを知り、且吾等が何ものを欲するかを知れり』と云。彼曰く『吾若し汝等に敵する力あらば、又は強き柱に頼るを得なば!』と云。使者等曰く『ロトよ、げに吾等は汝の主の使者なり。彼等は決して汝を侵すを得ず。されば夜に乗じて汝の家人と共に出で往け。汝等のうち一人も後を顧ることなかしめよ。但し汝の妻を除く。げに彼等が遭ふべき災厄に彼女も遭ふべし。彼等に定められたる時刻は早朝なり、朝は既に近きに非ずや』と云。かくて吾が命令は下り、吾は其の都府を顛覆し、泥石の雨を其上に降り積ましめたり也。而して石は汝の主によつて記號を付せられたるものなりき。彼等は不義者を距る

こと遠からざるものなり^三

(1) 第七章第八〇—八四節参照。(2) 天使等が美しき青年の姿を取りて来りし故、男色に溺れ居たる市民を恐れたるなり。(3) 一々の石に落下して撃死すべき人名が記され居たりとせらる。(4) メッカ市民。

吾¹はミディアンの民に其の同胞シユアイブを遣はしたり。彼曰く『吾民よ、アルラーハに事へよ、彼の外に汝等に神なし。汝等度量衡を減ずる勿れ。げに吾は汝等が繁昌するを見る。されど吾、は汝等のために一切を圍繞する日の刑罰を恐る^四。吾民よ、度量衡を正しく充分にせよ、人々の物を騙取する勿れ。不正を行ひて地上に悪を作すこと勿れ^五。汝等若し信者ならば、ア²ラーハが汝等に遺^三すものこそ汝等のために最善なれ。されど吾は汝等の監督者に非ず』と^六。彼等曰く『シユアイブよ、汝の教は、吾等が吾等の祖先が事へし神々を棄つべきことを勧め、且吾等の財産を任意に処理すべからずとするか。げに汝は寛大にして正しき指導者なるかな』と^七。彼曰く『吾民よ、吾に告げよ、吾若し吾主よりの明証の上に立ち、且吾に賜ふに彼よりの佳き糧餉を以てするとすれば――。吾は吾が汝等に禁じたることを、汝等の背後にて自ら之を行はんとする者に非ず。吾が希ふところは唯だ力を盡して事を匡^八さんとするのみ。唯一の佑助はアルラーハにあり。吾は彼に頼

り、彼に懺悔す。吾民よ、吾に対する反抗が汝等をして罪を犯さしめ、曾てノアの民、又はホードの民、又はサーリヒの民が遭へる如き懲罰を招ぐ勿れ。ロトの民に至りては汝等を距ること遠からず。されば汝等の主の宥恕を求め、彼に向つて懺悔せよ。げに吾主は大慈者・親愛者なり』
と云

(1) 第七章第八五—九三節参照。(2) 『アルラーハが遺すもの』の原語は *Baqiyat-ul-lah* にして、度量衡を公平にして然る後に獲べき利得を意味す。但し此語は『アルラーハに遺すもの』とも解釈せらる。然る場合は、人間の行爲のうちアルラーハに遺るもの即ち善行を意味すとも解すべく、又はアルラーハの許に恒存するもの即ち樂園の報賞を意味すとも解すべし。(3) シュアイブを揶揄弄する言。

彼等曰く『シュアイブよ、吾等は多く汝の言ふところを解せず、唯だ吾等は明かに汝が吾等のうちの無力者なるを知る。若し汝の家人のためならざりせば、吾等必ず石にて汝を撃つべし。吾等は汝を重視するに非ず』と云。彼曰く『吾民よ、汝等はアルラーハよりも吾が家人を重視するか、彼を無視して汝等の背後に棄てんとするか。げに吾主は汝等の為すことを囿繞す。吾民よ、汝等が行ひつつあることを続けよ。げに吾もまた行はん。而して時到らば汝等必ず思ひ知らん、耻づべき

刑罰が何人に下るか、また虚言せるは何人なるかを。さらば待て、げに吾もまた汝等と共に待たんとす。わが命令下るに及んで、吾は吾が慈悲を垂れてシェアイブ並に彼と共に信じたる者を救ひたり。而して轟然たる一声、不義者を襲ひて、翌朝彼等は地に俯して其家に仆れ居たり。其様は彼等が曾て其処に住めることなかりしものの如くなりき。嗚呼、サムードを葬れる如く、ミデイアンを葬り去れ。〽

げに吾は吾が休徴と明瞭なる權威とを與へてモーゼを。ファラオ並に其の貴人等に遣はしたり。然るに彼等はファラオの命令に従へり。而してファラオの命令は正しきものに非ざりき。復活の日に当り、ファラオは其民の先頭に立ちて、彼等を火獄に陥るべし。陥れらるる処こそ禍なれ。彼等は現世に於て呪咀に追求せらる。而して復活の日に彼等に賜はる賜物こそ禍なれ。〽

是くの如きは吾が汝に語る諸都府の消息なり。其中には現存するものあり、また既に刈り取られたるものもあり。吾は決して彼等を害せず、彼等自ら己れを害せるなり。アルラーハ以外に彼等が喚べる神々は、汝の主の命令一下するに及んで、毫も彼等を益することなく、唯だ其の滅亡を促せるにすぎざりき。〽 是くの如きは汝の主が不義を行へる都府を懲罰せる時の懲罰なり。げに彼の

懲罰は痛烈にして峻嚴なり二三

げに其中には末世の懲罰を恐るる者への休徴あり。其日は萬人が召集せらる日なり、萬人が目睹すべき日なり二三 吾は唯だ定められたる期限の来るまで之を延期するのみ二三 其日来れば何人も主の允許なくして發言するを得ず。彼等の或者は不幸なるべく、或者は幸福なるべし二三 不幸なる者とは墮地獄者なり。彼等其中にて號泣し哀呼せん二三 而して汝の主が欲するに非ずば、天地の有らん限り彼等其中に住まん。げに汝の主は己れの欲することを行ふ二三 幸福なる者は即ち樂園に入る。汝の主が欲するに非ずば、天地の有らん限り彼等其中に住まん。げに絶ゆることなき恩賜なり二三 されば彼等が拜するものについて疑心を抱く勿れ。彼等は唯だ祖先が事へたる如く事ふるにすぎず。吾は存分なる応報を彼等に與へて假借するところなからん二三

吾はモーゼに經典を與へたり。而して之について異論生じたり。若し既に発せられたる汝の主の言なかりせば、判決は既に彼等に下されたりしなり。げに彼等は之について不安なる疑惑を抱く二三 げに汝の主は各人に対して存分に其の所行に報ゆべし。げに彼は彼等の爲すことを知悉す二三 されば汝並に汝と共に懺悔する者は、汝が命せられたる如く直き道を踏め。而して矩を越ゆる勿れ。げ

に彼は汝等の爲すことを照覽す三 汝等火獄の汝等に臨むを免れんとすれば不義者に偏する勿れ。アルラーハの外に汝等の愛護者なく、また汝等を佑助する者もなし三 日の両端に於て、並に夜の初更に於て礼拜を行へ。善行は諸惡を銷殞せしむ。これ反省する者への訓誡なり三 耐え忍べ。げにアルラーハは善事を行ふ者への報賞を空しくせず三 汝等の前代には、吾が救ひたる僅少の者を除きて、何故に地上に惡を作すことを阻む堅忍不拔なる者なかりしか。而して不義者は歡樂を追ひ求めて作惡者となれり三

その住民が正しく行ふ間は、汝の主は決して妄りに都府を破壊するものに非ず三 而して若し汝の主が欲したりせば、彼は萬民を一團とせしならん。されど汝の主が慈悲を垂れたる者の外は、彼等は常に爭論を事とす三 彼は其爲にこそ彼等を創りしなれ。主の言は完うせらるべし『吾必ず人間と幽鬼とにて地獄を満たさん』三

総じて諸使者の消息については、汝に語れることは、汝の心を確乎たらしめんがためなり。而して此中に真理並に信者への訓誡と警告とが汝に與へられたり三 而して不信者に向つては是く言へ『汝等が行ひつつあることを行ひ続けよ。げに吾等もまた吾道を行はん三 而して待て、げに吾等もまた待たん』と三

天地間の不可見のものはアルラーハに属し、萬物は彼に歸る。されば彼に事へ、彼に頼れ、汝の
主は汝の爲すことを閑却せず

第十二 ヨセフ章

メッカ啓示

全章ヨセフの物語なるを以てヨセフ章 *Yusuf* と名づけらる。古蘭中、全章専ら一主題を以て終始するは唯だ此の一章あるのみ。而して其の物語が著しく旧約聖書の記事と相異せることに注意すべし。傳承は此章が遷都前二年、メヂナよりメッカに来れる最初の歸信者に向つて復誦せられたるものとなすも、必ずしも其時一時に啓示せられたるものに非ず。全章概ねメッカ末期の啓示とすべきも、メヂナ啓示の附加あり、またメッカ啓示にして遷都以後に訂正せられたる諸節あること、前諸章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ミーム・ラア。こは明晰なる經典の諸節なり一 げに吾は汝等に理解せしめんがために、アラビア語の古蘭として之を降したり二 吾はこの古蘭を汝に默示して、従前汝が閑却せる物語のうちの最勝のものを語らん三

ヨセフが其父¹に是く言へる時を念へ『吾父よ、げに吾は夢に十一の星と日と月とを見たり。吾は其等が吾を拜するを見たり』²と四 彼曰く『吾子よ、汝の幻夢^{まぼろし}を汝の諸兄弟に告ぐる勿れ。恐らく

彼等は汝に対して策謀を策せん。げにサタンは人間の公然の敵なり^五。いま汝の主は汝を選びて、幽言³の解釋を汝に教へ、曾て汝の二祖アブラハム並にイサクにその恩寵を完うせる如く、汝並にヤコブの子孫にも之を完うすべし。げに汝の主は能知者・聰明者なり』と六

(1) ヨセフの父はヤコブ。ヤコブはイサクの子なれば、アブラハムの孫なり。(2) 旧約創世記第三十七章第七―九節参照。(3) 一般に夢の意味とせられ、或は經典中の難解の句を指すともせらる。

げにヨセフと其の諸兄弟の物語の中には、詮議¹を好む者への種々なる休徴あり七。彼等が是く言へる時を念へ『げに吾等の数は多けれど、父は吾等に勝りてヨセフと其弟³とを寵愛す。げに父は明かに誤れりハ。ヨセフを殺せ、然らば之を他國に逐へ。然らば父の慈顔は専ら汝等に向けられん。然る後に汝等は義しき民となるを得べし』と九。彼等のうちの一發言者同く『ヨセフを殺す勿れ。己むなくば之を深井の底に投ぜよ。或は旅人が之を捨ひ上ぐることもあらん』と一〇

(1) メッカ市民を指す。マホメットの一挙一動について詮議することを好む者の意味。蓋しマホメット自身をヨセフに喩へ、メッカ市民をヨセフの諸兄弟に喩ふるなり。(2) ヨセフと母を同じくせる弟ベンジャミン。(3) 旧約創世記第三七

章第二二節参照。

彼等曰く『吾等の父よ、何故に汝はヨセフを吾等に託せざるか。げに吾等は彼の幸福を祈る者なり。されば明朝吾等と共に彼を野に往かしめ、鮮果を味ひ且嬉戯せしめよ。げに吾等必ず彼を護らん』三 彼曰く『げに汝等が彼を伴ひ往くことは痛く吾を憂へしむ。吾は汝等が彼を閑却する間に、狼の来りて彼を啖はんことを恐る』三 彼等曰く『吾等の数は多し、彼若し狼に啖はるる如きことあらば、吾等必ず淪喪者となるべし』と四 かくて彼等は彼を伴ひ去り、之を深井の底に投ずるに一決せる時、われヨセフに黙示して曰く『汝は必ず彼等の爲せる此事を彼等に告ぐる時あらん。而して其時彼等は汝を識らざるべし』と五

日暮れて彼等泣きながら其父に帰り来れり六 彼等曰く『吾等の父よ、吾等先着を競ひて疾駆し、ヨセフを吾等の衣服と共に残し置きたる間に、狼来りて彼を啖へり。吾等の言は眞実なれど、汝は之を信ぜんとせざるべし』とモ 彼等は偽りて血をヨセフの下着に附けたりき。彼曰く『然らず。汝等自ら事を構へたるなり。されど耐え忍ぶこそ吾には適はしけれ。汝等の語ることに對して、吾はアルラーハの佑助を求めん』と六

隊商の一行来りて、其の汲水者を深井に遣はしたり。彼は桶を下ろしたり。彼曰く『芽出度きかな、此処に一人の若者あり』と。かくて彼等¹は商品の如く装ひて彼を匿したり。されどアルラーハ

は彼等の爲せることを熟知せり元 而して彼等²ヨセフを重んぜざりしかば、銀若干の廉價にて之を賣拂へり言 彼を購へるは埃及の者なりしが、其妻に向つて曰く『懇ろに彼を遇せよ。恐らく彼は吾等を益することあらん。また吾等は彼を養子とするも可ならん』と。かくて吾はヨセフを埃及に居住せしめたり。そは幽言の解釋を彼に教へんがためなりき。アルラーハは能く其の目的を遂ぐ。されど人々多くは之を知らずニ

(1) 此の『彼等』をヨセフの兄弟等とするか、又は商人等とするかについて註釈家の間に異見あり。若し前者とすれば『彼を匿す』とは彼に關して行はれたる事を匿す意味となる。旧約創世記は銀二十片にて売りとるはヨセフの兄弟等とせらる。予は前後の文意より之を商人等と解釈せり。

かれ成年に達せる時、吾は智慧と知識とを之に與へたり。吾は是くの如くして善事を行ふ者に報ゆ^三 然るに彼が起臥せる家の夫人、彼を己が意^{こころ}に従はしめんとし、戸を鎖ざして『来れ』と言ひたり。彼答へて曰く『アルラーハよ、吾を護れ。吾が主人は懇ろに吾を遇したり。げに不義者は決して榮えず』と^三 彼女は彼に戀慕せるなり。而して若し其主の明証を見ざりせば、彼もまた彼女に戀慕せるなるべし。吾は是くの如くにして悪事と醜行とを彼より遠ざけたり。げに彼は誠実なる

吾が僕等の一人なりき言

其時兩人争ふて戸に走り、彼女は背後うしろより彼の下着を裂き取れり。而して彼等戸口にて彼女の夫に遇ひたり。彼女曰く『汝の家人に悪事を行はんとせる者の応報は何ぞ、投獄か重刑か』と云。彼曰く『吾を誘へるは彼女なり』と。時に彼女の家人のうちの一目撃者証言して曰く『若し彼の下着が前より裂け居らば、彼女の言は眞実にして、彼の言は虚偽なり云。されど若し彼の下着が後うしろより裂け居らば、彼女の言は虚偽にして、彼の言は眞実なり』と云。彼女の夫、彼の下着が後より裂かれ居るを見て曰く『こは汝等婦女子の詭計たくらみなり。げに汝等の詭計は恐るべし云。ヨセフよ、意に介する勿れ。妻よ、汝は其罪の宥恕を乞へ。げに汝は罪を犯せる者の一人なり』と云。

時に都内の婦人等曰く『貴人の妻、その若き奴隸しもべに己が意こころに従はんことを求めたり。げに彼は深く彼女を戀慕せしめたるなり。吾等は明かに彼女の誤れるを見る』と云。彼女、婦人等の私語を聞きたる時、人を遣はして彼女等を招ぎ、彼女等のために宴席を設け、各自に一小刀を與へ、然る後にヨセフを呼びて『来りて彼女等の前に出でよ』と言へり。而して彼女等ヨセフを見るや、嘆美の餘りに其手を傷つけて曰く『神よ、こは人間に非ず、こは貴き天使に非ずして何ぞ』と云。彼女曰く、『汝等が吾を誹るは即ち此者に就てなり。吾は彼に吾意に従へと求めたれど、彼は之に應ぜざり

き。されど彼若し吾が命ずるところに従はずは、彼は牢獄に投ぜられて、蔑さげしまるる者と成り果つべし』と云 彼曰く『主よ、吾は彼等の誘惑に従はんよりも寧ろ牢獄を択ぶ。されど汝若し吾がために彼女等の誘惑を除かずば、吾心は彼等に傾きて、吾も無智者の一人となるべし』と云 主即ち彼の祈願に応へ、彼女等の誘惑を彼より除きたり。げに彼は能聞者・能知者なり云

然るに彼等は種々なる（無罪の）証據を見たるに拘らず、一定の時まで彼を入獄せしむることとせり云 其時¹二人の若者彼と共に下獄せり。その一人曰く『げに吾は夢に葡萄酒を搾るを見たり』と。他は曰く『げに吾は夢に吾が頭上に麵麩を運びつつありしに、鳥の来りて之を啖へるを見たり。吾等のために夢を解け。げに吾等汝を見るに善人なり』と云 彼曰く『汝等に給せらるる食事の来る以前に、われ汝等のために明白に之を解かん²。こは吾主が吾に賜へるものの一部なり。げに吾はアルラーハを信ぜず且末世を信ぜざる者の教を棄て云 吾等の祖先アブラハム、イサク及びヤコブの教に従へる者なり。吾等は何者をもアルラーハに配すべきに非ず。これアルラーハが吾等並に萬人に垂れたる恩寵なれども、人々多くは之を感謝せず云 同囚の兩人よ、雑多の主と独一全能の主と、孰れを善しとするか云 汝等がアルラーハ以外に拜する者は、唯だ汝等並に汝等の祖先が名づけたる空名にすぎず、アルラーハは如何なる權威をも彼等に與へざるなり。審判は唯だアルラ

一ハにのみ属す。而して彼は彼以外の何者をも拜すべからずと汝等に命じたり。これ正しき教なり。されど人々多くは之を知らず。同囚の兩人よ、先づ汝等の一人について言へば、彼は其の主人のために酒を注ぐべし。他の一人について言へば、彼は十字架に釘けられ、鳥来りて其頭を啖ふべし。汝等が吾に訊ぬることは是く決定せらる』と。而して彼は兩人のうち釋放せらるべしと思へる者に向つて曰く『汝の主人に吾事を告げよ』と。されどサタンは、彼をしてヨセフの事を其の主人に告ぐるを忘却せしめければ、彼は尙ほ数年の間獄中に留まりたり。

(1) 此等の兩人は埃及王の下僕頭及び製麵包者にして、毒殺を企てたりとの嫌疑にて投獄せられたるものと傳へらる。

(2) 直訳『その汝等に來る以前に、われ汝等のために明らかに之を解かずば、汝等に給せらるる食事は汝等に來らざるべし』。此の一句解釈については異説あれど、立どころに夢の解釈を告げんとの意味にて、所謂『朝飯前』といふ類なるべし。(3) 主人即ちファラオ。

國王曰く『げに吾は七頭の瘠せたる牛が、七頭の肥えたる牛を啖ふを見、また七頭の緑なる穂と七頭の枯れたる穂とを見たり。貴人等よ、汝等若し夢を解き得るならば、吾がために此夢を解け』
と。彼等曰く『纏れたる夢なるかな、吾等は夢を解くことを知らず』と。兩人のうちの釋放せ

られたる者、時経たる今に及んで（ヨセフを）想起して曰く『われ其の解釋を汝等に告げん。先づ吾をして往かしめよ』と聖 『ヨセフよ、誠実の人よ。七頭の瘠せたる牛が啖へる七頭の肥えたる牛、並に七顆の緑の穂と七顆の枯れたる穂の夢を、吾等のために解け。吾歸りて人々に之を知らさん』と哭 彼曰く『七年の間恒例の如く種蒔け。但し之を刈取らば、汝等が食ふ少量を除きて、之を穂のままに貯藏せよ聖 其後七年に互る飢饉来りて、汝等が保有すべき少量を除き、豫て汝等が貯藏し置けるものを食ひ盡さん哭 其後に来る一年は、人々豊かなる收穫を得て、葡萄酒を搾るべし』と哭

國王曰く『吾前に彼を伴ひ来れ』と。使者彼に来れる時、彼曰く『歸りて汝の主人に問へ、其手を傷つけし婦人等は如何にせるかと。吾主は彼女等の詭計を知る』と吾 國王（婦人等を召して）曰く『汝等がヨセフを誘惑せる時の経緯は如何』と。彼女等曰く『神かけて！吾等は些かも彼の悪きを見ず』と。貴人の妻曰く『真相遂に露顯せり。吾は彼を吾意に従へと求めたるなり。げに彼は誠実者の一人なり』と吾 （ヨセフ曰く）『こは國王をして吾が決して密かに彼を裏切る者に非ざること知らしめ、またアルラーハは決して背信者の詭計を助くるものに非ざること知らしめんがためなり吾 吾は敢て自ら罪なしと言はず。吾主が慈悲を垂るる者を除けば、げに心は惡に傾き

易し。げに吾主は宥恕者・大慈者なり』と云

(一)心の原語は Nafs。生命・心霊・本性・良心・欲望等の意味あり。例へば『自責の念 Nafs-lawwamah』(七五ノ二)、『平安なる心霊 Nafs nutma 'annah』(八九ノ二七)と言ふが如し。

國王曰く『吾前に彼を伴ひ来れ。吾は彼を拔擢して吾爲に之を用ゐん』と。國王彼と語りて曰く『げに今より汝は吾が左右にあり、貴とき地位と信頼とを與へらる』と云。彼曰く『此國の倉廩を吾に掌らしめよ。吾は熟練なる管理者なり』と云。吾は是くの如くにしてヨセフのために此國に地位を作り、任意に隨處に住むことを得せしめたり。吾は吾が欲する者に慈悲を垂る。吾は善事を行ふ者への報賞を空しくせず云。而して信じて其身を護る者には、末世の報賞こそ最勝なれ云。

ヨセフの諸兄弟、来りて彼の前に出でたり。彼は彼等を認めたれど、彼等は彼を認めざり云。彼、彼等が需むる物を備へたる後に曰く『汝等の父の子なる汝等の兄弟一人を吾に伴ひ来れ。見よ吾が秤量^{はかり}は充分にして、吾は最善の招客者に非ざるか云。されど汝等若し彼を伴ひ来らずば、吾は向後汝等に穀類を量らず、汝等は吾に接近するを得ず』とき。彼等曰く『吾等力を盡して彼の父を動かし、必ず彼を伴ひ来らん』とき。ヨセフ其の僕等に向つて曰く『彼等の貨幣を其の囊中に入れ

置け。彼等家に還りて之を認め、必ずまた歸り来らん』とき

彼等其父に歸りて曰く『吾等の父よ、吾等は向後の購買を拒まれたり。されば穀類を入手するた
めに、吾等の弟を吾等と共に往かしめよ。吾等必ず彼を護らん』とき 彼曰く『吾曾て彼の兄につ
いて汝等を信頼せざりし如く、今も彼について汝等を信頼せず。最勝の守護者はアルラーハなり。
彼は大慈者中の大慈者なり』とき 彼等其囊を開ける時、彼等の貨幣¹の還されたるを見たり。彼等
曰く『吾等の父よ、吾等此上に何をか望むべきぞ。吾等の貨幣は還されて此処にあり。吾等は一族
のために穀類を求め来らん、また吾等の弟を護らん。吾等は更に駱駝一荷を得て歸るべし。こは些
々たる分量なり』とき 彼曰く『汝等若しアルラーハの名によつて堅く吾と結約し、囲まれて道を
塞がれざる限りは、必ず彼を吾に伴ひ来ることを誓ふに非ずは、吾は決して彼を汝等に共に往かし
めず』と。かくて彼等が彼に誓へる時、彼曰く『アルラーハは吾等が言へることの保証人なり』
とき

(1) 原語 *Bida'ah* は貨幣と同時に貨物の意味あり。(2) 此の一句の意味は二様に取らる。即ち彼等がいま購ひ来れる
分量は十分に非ずとの意味、又は駱駝一荷は埃及王にとりて言ふに足らぬ分量なりとの意味。

彼また曰く『わが子等よ、汝等決して一つの門より入る勿れ、必ず別々の門より入れ。されど吾はアルラーハに対して無力なり、¹ 審判は唯だアルラーハにのみ属す。吾は唯だ彼に頼る。頼る者は彼に頼れ』と云。彼等は其父の言に従ひて門を入りしも、アルラーハの定めたる何事をも避くるを得ざりき。そは唯だヤゴフの心願を満足せしめたるのみ。げにわれ彼に教へたれば、彼には知識ありしも、人々多くは之を知らず云。

(1) アルラーハの懲罰に対して彼等を護る力なきこと、即ちアルラーハの審判を左右する力なきこと。

彼等ヨセフに往きたる時、彼は其弟を己れと共に住ましめたり。彼曰く『げに吾は汝の兄なり。されば彼等が爲せることについて心を悩ます勿れ』と云。而してヨセフ彼等が需めたるものを備へたる時、其弟の荷物の中に一個の蓋さかすきを入れ置きたり。時に一喚呼者あり、疾呼して曰く『隊商よ、げに汝等は盜賊なり』と云。彼等其者に近きて曰く『汝等が失へる物は何ぞ』と云。彼等曰く『吾等は國王の蓋を失へり。之を齎し来る者には駱駝一荷を與へん、吾は其の保証人たらん』と云。彼等曰く『神かけて！ 汝等は吾等が悪事を行はんがために此國に来れるに非ざるを知る。吾等は決して盜賊に非ず』と云。彼等曰く『汝等の言虚偽いつはりならば、之に対する賠償つぐなひは何ぞ』と云。彼等曰

く『其の賠償は其荷の中より其蓋が出てたる者なるべし。吾等は是くの如くにして悪事を行ふ者を罰す』とせ

彼即ち其弟の囊の前に先づ彼等の囊を探し、然る後に其弟の囊中より蓋を取り出だせり。吾は此の策略をヨセフに授けたるなり。そは國王の法律のために、アルラーハが欲するに非ずば、彼は其弟を捕ふるを得ざりしが故なり。吾は吾が欲する者の位階を高む。而して一切の知識ある者の上に唯一の能知者ありき。彼等曰く『彼若し盗めりとすれば、げに彼の兄も曾て盗めることありき¹』。されどヨセフは一切を彼の胸中に秘し、之を彼等に示さざりき。彼曰く『事情は汝等に不利なり。而してアルラーハは汝等が語ることを知る』とき。彼等曰く『貴人よ、彼には齡高く年老いたる父あり。されば彼の代りに吾等の一人を取れ。げに吾等汝を見るに善人なり』とき。彼曰く『アルラーハは、吾等の物を所持し居たる者以外は、何人をも捕ふることを許さず。之を爲さば吾等は不義者となるべし』とき

(1) ヨセフが盗める物については異説あれど、その最も穩当と思はるるは、彼の少年の比、其母の父が禮拜せる黄金の神像を盗みて之を破毀せりとする傳承なり。

彼等絶望して、退きて密議したり。彼等のうちの最年長者曰く『汝等は汝等の父が、アルラーハの前にて汝等の証言を取りたることを忘れたるか。また曾てヨセフの事についても誓言を破りたることを忘れたるか。されば吾父が吾を赦すか、又はアルラーハが仁慈なる審判を吾に賜はるまで、吾は決して此國を去らざるべし。アルラーハは最勝の審判者なり。汝等の父に帰りて言へ。『吾等の父よ、汝の子は盗みたり。吾等は唯だ吾等の知れることを証言す。吾等は不可見のことを防ぎ得ざりき』』と云。汝自ら吾等が居りたる都にて之を問へ、又は同伴せる隊商に問へ。吾等の言は眞実なり』と云。

(彼等其父に帰りて是く告げたる時) 彼曰く『然らず、汝等は自ら事を構へたるのみ。されど耐え忍ぶこそ吾には適はしけれ。アルラーハは他日必ず彼等兩人を吾に伴ひ来るべし。彼は能知者・聰明者なり』と云。彼、彼等を離れて曰く『嗚呼、ヨセフを憶ひて吾心憂ふ』と。彼の目は悲嘆のために白くなり、胸は抑えたる激情に満たされたり。彼等曰く『汝若しヨセフを口にすることを止めずば、ついには重く病み、さては亡き者とならん』と云。彼曰く『吾は唯だアルラーハに向つて吾が憂愁と悲嘆とを訴ふるのみ。吾はアルラーハが汝等の知らざることを知れるを知る矣。わが子等よ、汝等往きてヨセフと其弟との消息を尋ねよ。汝等アルラーハの慈悲に絶望する勿れ。信ぜ

ざる民の外は、何者もアルラーハの慈悲に絶望せず』と云

彼等ヨセフに来りて曰く『大人よ、飢饉吾等並に吾等の一族に臨みたれば、吾等些少の財物を携へ来れり。されば秤量よく穀類を與へ、且吾等に施物を賜へ。げにアルラーハは布施者に酬ゆべし』云

彼曰く『汝等が無智なりし時、汝等がヨセフと其弟と対して爲せることを知るか』云 彼等曰く『げに汝はヨセフなるか』 彼曰く『吾はヨセフ、こは吾弟なり。アルラーハは吾等に恩寵を垂れたり。人若し敬虔にして堅忍ならば、アルラーハは決して善事を行へる者の報賞を空しくせず』云

彼等曰く『神かけて！ アルラーハは吾等を超えて汝を選べるなり。げに吾等は誤れり』云 彼曰く『いま汝等には如何なる譴責もなし。アルラーハは汝等を赦さん。彼こそ大慈者中の最勝の大慈者なれ云 さらば吾が此の下着を持ち歸りて、之を吾父の面に投げよ。然らば彼は忽ち能視者とならん。然る後に汝等全家を擧げて吾に来れ』と云

隊商の埃及を去れる時、彼等の父、左右の者に向つて曰く『汝等吾を老耄せりと言ふも、吾は確かにヨセフの香を嗅ぐ』云 彼等曰く『神かけて！ げにそはいつも乍らの汝の迷夢なり』と云 さ

れど吉報の傳達者来りてヨセフの下着を彼の面に投ぐるや、彼忽ち其の視力を回復せり云 彼曰く『吾は曾てアルラーハは汝等が知らざることを知れるを知る』云 と言はざりしか』云 彼等曰く『吾

327

等の父よ、吾等のために吾等の罪の宥恕を乞へ。げに吾等は誤れり』と云 彼曰く『吾は汝等のために汝等の罪の宥恕を乞はん。げに彼は宥恕者・大慈者なり』と云

かくて彼等ヨセフの前に来れる時、彼は己れの家に其の両親を住ましめ、且曰く『アルラーハ若し欲しなば、安んじて埃及に入れ』と云 彼は其の両親を高座に上らしめたり。而して彼等皆な俯伏して彼に敬礼せり。彼曰く『吾父よ、こは往年の吾夢の解釋なり。吾主は之を實現せしめたり。サタンが吾と吾が兄弟との間に不和を醸せる後、吾を牢獄より出だし、汝等を沙漠より出で来らしめたるは、げに吾に賜へるアルラーハの恩寵なり。げに吾主は己れの欲する者に仁慈なり。彼こそ能知者・聰明者なれ』と云 主よ、汝は力を吾に賜ひ、幽言の解釋を吾に教へたり。天地の創造者よ、汝は現世並に末世のわが愛護者なり。吾を歸命者^{ムスリム}として死なしめよ、而して吾を義人と結べ』と云 これ吾が汝は默示する不可見なるものの消息の一つなり。彼等が事を決して詭計を施さんとせる時、汝は彼等と共に現場に居らざりき』と云

設ひ汝は切望するとも、人々多くは信ぜざるべし』と云 汝は之に対して如何なる報酬をも彼等に求めず。そは單に三界への訓誡なり』と云 天地の間に如何に多くの休徴あることぞ 而して彼等其前を

過ぐるも之を忌避す^三 彼等の多くは他の神々を彼に配せずばアルラーハを信ぜず^四 己れに降るアルラーハの打勝ち難き懲罰に対して、また其の知らざる間に突如として来る末日に対して、彼等果して安心し得るか^五 言へ『これ吾道なり。吾並に吾に従ふ者は、明証の上に立ちて汝等をアルラーハに招ぐ。アルラーハを讃へよ、吾は多神教徒の一人に非ず』と^六

汝以前に都府の民の間より選びて吾が遣はせる者は、一人として吾之に黙示を與へざりしはなし。彼等地上を遍歴して、彼等以前の者の末路が如何なるものなりしかを見ざりしか。其身を護る者には、げに末世の住処こそ最善なれ。汝等尙ほ曉らざるか^七 而して諸使者が一切の希望を失ひ、人には虚言者と呼ばれし時、わが佑助彼等に降り、吾は吾が欲する者を救ひたり。而して罪を犯せる者には懲罰を容赦せざりき^八

げに彼等の物語のうちには、洞察し得る者への教訓あり。そは虚構の物語に非ず、以前にありしものを確証し、萬事を解明するものにして、信ずる民への嚮導並に慈悲なり^九

(一) 本節は第一〇二節に続くものにして、ヨセフの物語の結尾なり。『彼等の物語』といふは、ヨセフ並に其の諸兄弟の物語を意味す。従つて第二〇三—一〇節はヨセフの物語と直接の關聯なし。

第十三 電 雷 章

メツカ啓示

第一三節に『電雷は彼を讃ふ。諸天使も彼を畏れて亦然り』とあるに因みて電雷章 *Al-Ra'd* と名づけらる。概ねメツカ末期の啓示にして、メヂナ遷都以後に訂正を加へられたるもの多しと思はる。ロッドウエルは本章を以て最後のメツカ啓示となせり。アルラーハの恩寵は屢々雨に譬へらる。されど雨は常に電雷を伴ふ。電雷は即ちアルラーハの懲罰乃至警告なり。本章は全体として断片的にして、主として豫言者の警告に従はざる者に対して降さるるアルラーハの懲罰を力説す。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アッフ・ラーム・ミーム・ラア。こは經典の諸節なり。汝の主より汝に降されたるものは眞理なり。されど人々多くは之を信ぜず。

(1) この一節は本章の序言としてメヂナ遷都以後に加へられたるものと思はる。

汝等に見ゆる柱なくして諸天を擧げたるはアルラーハなり。然る後に彼は王座に鎮坐し、日月を驅りて各自その軌道を走り、以て其の任務に服せしむ。彼は萬事を総攬す。而して彼は汝等が必ず

其主に会ふべきことを確信せしめんがために、種々なる休徴を明示す^二 大地を展開し、群山と河川とを之に定置せるは彼なり。彼は地上一切の果実を毎種一対となす。彼はまた夜を以て晝を覆はしむ。げに此中には反省する民への種々なる休徴あり^三 地上には互に近接せる地區あり、葡萄園・穀圃・同根異根の棗椰子樹ありて、等しく一味の水に灌漑せらる。而も吾は一の果物を他よりも滋味ならしめたり。げに此中には睿智ある民への種々なる休徴あり^四

若し汝が驚くべきことありとすれば、彼等の言こそ驚くべきものなれ、曰く『何事ぞ、吾等一旦塵土に歸したる後、また新しく創造せらるべきか』と。此等は其主を信ぜざる者なり。此等は其頸に首伽ある者なり。此等は火獄の党侶にして、永劫に其中に住まん^五 彼等以前に諸の先例^{トスラート}ありしに拘らず、彼等は汝に向つて幸福よりも災難を催促す。げに汝の主は其の悪事に拘らず人間に寛容なり。されど彼はげに懲罰にも嚴厲なり^六

信ぜざる者曰く『何故に其主よりの休徴が彼に降らざるか』と。汝は唯だ一警告者にすぎず、而して各の民に一人の嚮導者あり^七

アルラーハは各の女子がその子宮に宿するものを知り、またその子宮の増減を知る^一。一切のものはアルラーハの許に其の定量あり^ハ 彼は不可見並に可見のものを知る。彼は偉大者・至高者なり^九

汝等のうち其の言ふところを匿す者も、又は之を吹聴する者も、夜間其身を潜むる者も、又は白晝公行する者も、総じて彼にとりて一律なり。各人の前後には之に随伴する諸天使あり、アルラーハの命を奉じて其人を監視す。げにアルラーハは人々が己れの心中にあるものを変ふるまでは、決して人々に対する眷顧を変へず。アルラーハ若し災難を人々に降さんと欲しなば、何者も之を斥くるを得ず、また彼等はアルラーハ以外に如何なる守護者もなし。

(一) 女子が孕めるものの男女・美醜・賢愚を知り、且子宮内に於ける胎兒の發育の程度を知る。

電光を汝等に示して、希望¹と恐怖とを抱かしめ、また重き雲を起すは彼なり。電雷は彼を讃へ、諸天使も彼を畏れて亦然り。彼は電火を發して、彼等がアルラーハについて爭論しつつある間に、之を以てその欲する者を撃つ。彼の威力は絶大なり。祈るべきは唯だ彼あるのみ。彼を舍きて彼等が祈る者は、決して彼等に応ふことなし。譬ふれば手を水に伸べて、之を口に達せしめんとするも、水は決して達せざるが如し。不信者の礼拜は唯だ迷路を彷徨するにすぎず。天地間の一切は、好むと好まざるとを問はず、悉くアルラーハを拜す。彼等の影さへも、朝な夕な彼を拜するなり。

(1) 希望とは電雷に伴ふ降雨を欣び待つこと、恐怖とは電火に撃たれて死ぬることを恐るること。(2) 萬物の影が朝夕には長く地に俯するを言ふ。

言へ『天地の主は誰ぞ』と。言へ『アルラーハ』と。言へ『然らば汝等はアルラーハを舍きて、己れ自身をさへ損益する力なき者を汝等の愛護者とするか』と。言へ『失明者と能視者とは一律なるか、黒闇と光明とは一律なるか』と。彼等はアルラーハが創造せると相似たるものを創造せる者を彼に配し、以て(彼等の創造と彼の)創造を混同するか。言へ『アルラーハは萬物の創造者、彼は独一者・至尊者なり』と云

彼は天より水を降し、河谿ワジは其の水量に応じて流れ、洪水には泡沫を浮ぶ。裝飾又は器皿を造るために火に溶かされたる金屬にも、また之に類する浮滓を生ず。アルラーハは是くの如く眞偽を分明ならしむ。泡沫は芥の如く消え、人を益するものは地に残る。是くの如くアルラーハは種々なる譬喩を説くモ 其主に応ふる者は善賞を獲べく、之に応へざる者は、彼等若し地上一切のものに倍するものを所有するとも、悉く之を投じて其罪を贖はんとするに至らん。げに彼等のために禍なる清算なり。その住処は地獄なり、悪き臥床なり云

汝の主より汝に降されたるものが眞理なることを知れる者と、失明の人とを同視すべきか。されど理解ある者のみ能く反省す。アルラーハの約束を完うして誓約を破らざる者。アルラーハが親しめと命じたる者と親しみ、其主を敬ひ、禍なる清算を恐るる者。其主の恩寵に浴せんがために耐え忍び、礼拝を守り、吾が賜へるものうちより陰に陽に喜捨を行ひ、善を以て惡を斥くる者、此等の者には多幸なる住処の報賞あるべし。彼等は其の祖先並に妻子のうちの義しき者と共にエデンの園に入らん。諸天使は各門より入りて彼等を迎へ。『汝等耐え忍べるが故に平安を得たり。樂園の報賞はいみじきかな』と言はん。されどアルラーハに誓ひたる後に其の約束を破り、アルラーハが親しめと命じたる者と絶縁し、地上に惡事を行へる者、此等の者には呪咀と禍なる住処との報賞あるべし。アルラーハは己れの欲する者に或は豊かに糧餉を與へ、或は乏しく之を與ふ。彼等は現世を楽しめども、現世は之を末世に比ぶれば一朝の歡樂にすぎず。信ぜざる者曰く『何故に主よりの休徴が彼に降されざるか』と。言へ『げにアルラーハは己れの欲する者を迷はしめ、懺悔する者を己れに導く』と。信仰に入り、アルラーハを念じて安心を得たる者——アルラーハを念ずれば誰か安心を得ざらん——及び善事を行ふ者、此等の者には幸福と善美なる住処とあらん。云々

吾は吾が默示せることを彼等に向つて復誦せしめんがために、一個の民の間に汝を遣はしたり。此民以前に幾多の民が滅び去れり。されど此民は未だ大悲者を信ぜず。言へ『彼は吾主なり。彼の外に神なし、吾は彼に頼り、彼に帰る』と言。設ひ山を動かし、大地を裂き、死者に物言はしむる古蘭ありとも……否な、萬事は唯だアルラーハの掌中にあり。アルラーハ若し欲したりせば全人類を導き得たりしなり。不信者は此事を知らざるか。而して信ぜざる者は、彼等の為せることのために、アルラーハの約束が實現するまで、彼等並に彼等が住む附近に災厄絶ゆることなからん。げにアルラーハは約束の時を違へず……

げに諸使者は汝以前にも嘲笑せられたり。吾は長く其等の信ぜざる者を容赦せしが、遂に彼等を襲ひたり。わが懲罰の如何に峻烈なりしぞ……

各人の上に在りて其の所行を監察する者は誰ぞ。然るに彼等はアルラーハに同位者を配す。言へ『彼等の名を擧げよ。汝等は地上に於てアルラーハが知らざること、彼に告げんとするか、又は其等は空虚なる名稱にすぎざるか』と。然らず、信ぜざる者の目には其の虚構せることが善しと映じ、そのために正しき道より迷はしめられたるなり。而してアルラーハが迷はしむる者には如何なる嚮導者もなし…… 彼は現世に於ても罰せられん。而も末世の懲罰は更に重く、アルラーハに對し

て如何なる守護者もなからん言

敬虔なる者に約束せらるる樂園の光景。河川之を貫きて流れ、その果実は長久不断、その綠蔭もまた然り。これ敬虔なる者への報償にして、信ぜざる者への報償は火獄なり言

わが曾て經典を降したる者は、汝に降されたるものを欣¹ぶ。但し聯盟者²のうちには其の一部を信ぜざる者あり。言へ『吾は唯だアララーハに事へ、何者をも彼に配すべからずと命ぜられたるのみ。吾は汝等を彼に招ぎ、吾は彼に歸る』と言。そのために吾は之をアラビア語の法典として降したり。されば眞実なる知識既に至れる後に、汝若し彼等の欲求に従ふ如きことあらば、げに汝はアララーハに對して一愛護者なく、また一守護者もなかるべし言

(1) 猶太人を指す。最初マホメットは猶太人の經典並に傳承に對して大なる敬意を示したる故、猶太人はマホメットを欣びたり。(2) 眞教に抗するために相結ぶ者を古蘭に於て屢々『聯盟者』と呼ぼる。

げに吾は汝以前にも諸使者を遣はし、妻子を彼等に與へたり¹。而してアララーハの允許なくしては、如何なる使者も休徵を現すことを得ず。而して一時代毎に一經典あり。アララーハは其の欲するものを抹消し、又は之を確定す。經典の母はアララーハの許にあり

(1) マホメットが妻子を有することは豫言者として適はしからずと言ふ非難に答へたるものなり。

吾設ひ吾が彼等に約束せることの一部を汝に示すとも、又は汝を(死に)迎へ入るるとも、汝の任務は唯だ使命の傳達にして、清算は即ち吾事なり^四

彼等は吾が此地に来りてより、其の辺境の縮小しつつあるを見ざるか¹、アルラーハ一度び判決を下せば、何者も其の判決を更改するを得ず、而して彼の清算は神速なり^二

(1) 不信者の勢力が減退して、マホメットの勢力が次第に増進するを言ふ。

彼等以前の者も策謀せり。されど一切の策謀はアルラーハに屬す。彼は各人の積めることを知悉

す。されば他日不信者は樂園の報賞が何人のものであるかを知らん^三

信ぜざる者曰く『汝は使者に非ず』と。言へ『アルラーハは吾と汝等との証人たるに足る。經典の知識を有する者もまた然り』と^四

第十四 アブラハム章

メッカ啓示

第三五―四一節にアブラハムの祈禱に就て述ぶるに因みてアブラハム章 Ibrahim と名づけらる。そはアブラハムが其子イシマエルをメッカに占居せしむる時の祈禱と称せられ、猶太人が『イスラエルの兒等』と呼ばるるに對し、アラビア人は『イシマエルの兒等』と呼ばる。従つてアブラハムは即ちアラビア人の所謂聖祖なり。前章と同じく断片的啓示の集録にして、概ねメッカ末期のものに属するも、遷都以後に訂正せられたる諸節多く、且遷都以後の啓示を含むこと前章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ラーム・ラア。こは汝がアルラーハの允許によりて、人々を黒闇より光明に、即ち偉力者・可頌者の道に入らしむるため、わが汝に降せる經典なり― 天地間の一切のものはアルラーハに屬す。禍なるかな不信者、彼等の懲罰は峻烈なるべし^二。そは末世よりも現世を愛し、人をアルラーハの道に背かしめ、之を歪曲せんとする者なり。彼等は甚だしく迷へる者なり^三。

【一】此の一段は本章の序言としてメヂナ遷都以後に附加せられたるものとすべし。

吾は未だ曾て其民の國語を以てせざる使者を遣はせることなし。これ彼がその使命を彼等に明瞭ならしめんがためなり。されどアルラーハは己れの欲する者を迷はしめ、欲する者を導く。彼は偉力者・聰明者なり^四

(一) 此の一節もメヂナ啓示にして、何故に古蘭はヘブライ語にて啓示せられざるかと反問せる猶太人に答へたるものと思はる。

げに吾は吾が休徴を與へてモーゼを遣はしたり。(其時吾曰く) 『汝の民を黒闇より光明に入らしめ、彼等をしてアルラーハの日を念はしめよ』と。げに此中には一切の堅忍にして恩を知る者への種々なる休徴あり^五

(一) 『アルラーハの日』は、『アラビア人の日』と言へば、彼等の戦闘を意味する如く、『アルラーハの戦』とも訳し得べし。いづれにもせよアルラーハの佑助、その驚嘆すべき業を意味す。

¹モーゼか其民に是く言へる時を念へ『汝等に垂れたるアルラーハの恩寵を念へ。ファラオの民、汝等に嚴酷なる刑罰を加へ、汝等の男兒を殺して女子のみを残せる時、彼は汝等を救ひたり。此中

には汝等の主よりの偉大なる試練ありしなり。其時汝の主は宣言せり『げに汝等若し恩を忘れずば、吾は必ず恩寵を増さん。されど汝等若し恩を忘れなば、吾が懲罰は峻烈なるべし』とせ。モーゼ曰く『設ひ汝等並に地上一切の者が擧りて恩を忘るるとも、アルラーハは求むるところなく、且讃頌せらるべき者なり。汝等以前のノアとアアドとサムードの民の物語。乃至唯だアルラーハのみ其数を知る其後の民の物語が汝等に達せざりしか。彼等の使者は種々なる明証を齎らして彼等に来れり。されど彼等は其手を以て口を掩ひて曰く『吾等は汝が遣はされたる使命を信ぜず、また汝が吾等を招ぐ教に対して不安なる疑惑を抱く』と云。彼等の使者曰く『汝等は天地の創造者アルラーハについて疑心を抱くか。彼は汝等を宥恕し、時至るまで汝等を容赦せんがために汝等を招く』と。彼等曰く『汝等は吾等と等しく人間にすぎず。然るに汝等は吾等の祖先が拜し来れる者に吾等を背かしめんとす。汝等先づ明瞭なる權威を吾等に示せ』と云。彼等の使者彼等に告げて曰く『吾等は汝等と等しく人間にすぎず。されどアルラーハは其の僕等のうち己れの欲する者に恩寵を垂る。アルラーハの允許あるに非ずば、吾等は汝等に權威を示すを得ず。信者をしてアルラーハに頼らしめよ。吾等如何ぞアルラーハに頼らざるを得ん、彼は吾等を吾等の道に導きたり。げに吾等は汝等が吾等に加ふる迫害を耐え忍ばん。されば頼る者をしてアルラーハに頼らしめよ』と云。

而して信ぜざる者は彼等の使者に向つて曰く「汝等が吾等の教に復歸するに非ずば、吾等は斷乎汝等を國外に放逐せん」と。其時主は彼等に默示せり「吾必ず不義者を絶滅せん。而して彼等の後に必ず汝等を此國に住ましめん。これ吾が審判を畏れ、吾が警告を恐るる者のためなり」と」

(一) ベルはモーゼに關する此の一段を以てメヂナ初期の啓示となせり。

彼等は佑助を求めん。而して一切の頑冥なる背逆者は絶望せん。彼の前には地獄、而して彼は沸湯を飲ましめらるべし。彼之を啜るも嘔下するを得ず、死四方より迫るも死するを得ず、而して其の背後には峻烈なる刑罰あり。

其主を信ぜざる者を譬ふれば、彼等の所行は暴風吹捲くる荒天の日の灰の如し。彼等は其の積める何ものをも捉ふる能はず。げに甚だしき迷誤なり。

人はアルラーハが眞理を現さんがために天地を創造せるを見ざるか。アルラーハ若し欲しなば、彼は汝等を拂拭して新に創造する者を以て之に代へん。そはアルラーハにとりて易々たることなり。

彼等一團となりてアルラーハの前に出づる時、無力者は傲慢なりし者に向つて言はん「吾等は汝

等の追隨者なり。汝等はアルラーハの懲罰に対して吾等のために何事かを為し得るか』と。彼等は答へん『アルラーハ若し吾等を導きたりせば、吾等もまた汝等を正しく導きしなり。いま吾等には如何なる避難処もなし。されば焦燥するも忍耐するも畢竟一なり』とニ 事既に決せられたる時、サタンは言はん『げにアルラーハは眞実なる約束を汝等と結びたり。吾また汝等と約束を結びたれど、吾は汝等を欺きたり。もと吾は汝等に対して如何なる權威をも有せるに非ず。唯だわれ汝等を呼び、汝等われに応へたるのみ。されば吾を責めず己れを責めよ。吾は汝等を佑くる能はず、汝等また吾を佑くる能はず。げに吾は汝等が曾て吾を配したる者を信ぜざりしなり』と。げに不義者は必ず痛刑を受けんニ

(1) 此の一句は『吾は汝等が曾て吾をアルラーハに配したることを否認す』と解する学者多し。されどサタンはアダムに叩首することを拒みて以来、常に神命に服せざる者なるを以て、予は此の一句を以てアルラーハに対する彼の不信を表明せるものと解したり(バイザー井)。

總じて善事を行ふ者は、其主の允許によりて河川流るる樂園に入らしめられ、長久に其中に住まん。其処にての彼等の挨拶は『平安!』なりニ

汝はアルラーハが譬喩を挙示するを見ざるか。善言は佳樹の如し、其根は堅く、其枝は天にあり。それは主の允許によりて四時美果を結ぶ。アルラーハは人を訓誡するために譬喩を用ふ。悪言は悪木の如し、地上に抜かれて堅固なるを得ず。アルラーハは堅実なる言を以て現世並に来世に於て信者の心を堅確ならしむ。

汝はかのアルラーハの恩寵を不信と易へ、其民を淪落の家即ち地獄に陥らしめたる者を見ざるか。彼等は其中にて燻かるべし。悪き住処なるかな。彼等は人をアルラーハの道より背き去らしむるために、同位者を彼に配す。言へ『暫く生を楽しめ、汝等の行先は火獄なるぞ』と言。

信ずる吾が僕等に告げよ、取引もなく友誼もなき日の来る以前に、堅く礼拝を守り、わが賜へる物のうちより陰に陽に喜捨せよと。

天地を創造し、天より水を降し、之によつて汝等の糧餉たる果実を結ばしむるはアルラーハなり。彼は船舶に命じ、海上を走りて汝等の用に服せしめ、また河川をも汝等の用に服せしむ。彼は兩個不断の精進者日月を汝等の用に服せしめ、また晝夜を汝等の用に服せしむ。彼は汝等が求むる一切を賜ふ。アルラーハの恩寵は、げに算へんとするも算ふべからず。げに人間こそ不義にして忘恩なる者なれ。

アブラハムが是く言へる時を念へ『主よ、此地を安全の地たらしめよ、吾並に吾が子等をして多神を拜することより遠離せしめよ』主よ、げに彼等は多くの人々を迷はしめたり。されど吾に従ふ者は必ず吾に属し、吾に従はざる者は……。されど汝は宥恕者・大慈者なり』主よ、げに吾は吾が子孫の或者を汝の聖殿に近き不毛の地に住ましめたり。主よ、彼等に礼拜を守らしめ、また民の或者の心を彼等に傾けしめ、また彼等のために果実を賜へ。彼等恐らく感謝せん』主よ、げに汝は吾等が隠すこと並に露すことを知る。而して天地の間、一としてアルラーハに匿すべきはなし』年老いたる吾にイシマエルとイサクとを賜へるアルラーハを讃へよ。げに吾主は祈願の聽許者なり』主よ、吾並に吾が子孫の或者に礼拜を守らしめよ。主よ、吾が祈願を納れよ』主よ、清算の行はるる日、吾と吾が両親と信者等とを宥恕せよ』と』

【1】メツカの方殿を指す。

アルラーハは不義者の爲すことを閑却するものと思ふ勿れ。げに彼は唯だ人々が瞠目する日まで彼等を容赦するのみ』其日人々は首を伸べて走り、目は腫を轉ぜず、心は空虚なるべし』懲罰

の降る日について彼等に警告せよ。其時不義を行へる者は言はん『主よ、暫時の猶豫を吾等に與へよ。吾等必ず汝の招呼に應へ、使者に従はん』と。『何とや、汝等會て汝等には決して没落なしと誓へるに非ざるか』 汝等は汝等以前の其身を亡ぼせる者が住める處に住み、而して吾は如何に彼等を処分せるかを汝等に明示したり。其故に吾は汝等に譬喩を述べたるなり』と

彼等は策謀せり。されど設ひ彼等の策謀が山を動かす如きものなりととも、皆なアルラーハに左右せらる。さればアルラーハが其の使者に約束を違ふべしと憂ふる勿れ。げにアルラーハは偉大なる報復者なり

大地變じて別個の大地となり、諸天また別個の諸天となる日、人は皆な唯一者・全勝者アルラーハの前に出づ。其日汝は罪人が悉く鐵鎖に繋がるるを見ん。彼等の下着は瀝青にして、猛火彼等の面を覆はん。これアルラーハが其の爲せることに対して各人に應報せんがためなり。げにアルラーハの清算は神速なり。こは萬人への宣言なり。そは之によつて彼等に警告し、神の唯一なるを彼等に知らしめ、且思慮ある者を反省せしめんがためなり

第十五 ヒジル 章

メッカ啓示

第八〇―八四節にヒジルの民に関する記述あるに因みてヒジラ章 *Al-Hijr* と名づけらる。ヒジルはメッカよりシリアに至る隊商路上の一山谷にして、サムード族の占拠せる地、希臘人の所謂ペトラなり。従つてヒジルの住民とは、既に屢々古蘭に出て来れる『サムードの民』に外ならず。もとヒジルは希臘語ペトラと同じく『岩石』を意味し、住民は岩を斫りて家となせるを以て『岩石の民』と呼ばれたり。ネルデケは之をメッカ中期即ち開教第五・六年の啓示とし、ムイアはメッカ第四期即ち開教第七一〇年の啓示とす。但しメチナ遷都以後並に遷都以後に訂正を加へられたる諸節あること前章と同じ。第十ヨナ章より本章に至る六章は、冒頭に *A・L・R* の三学あるを以て総称して *A・L・R* 群と呼ばれる、但し第十三章は如上三字の外に *M* を加ふ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ラーム・ラア。これは經典の諸節にして、事理を闡明する古蘭の諸節なり

(1) メチナに於て附加せられたる序言なるべし。

信ぜざりし者が、己れも歸命者なりしならばと望む時来らん
彼等を放任せよ、彼等をして食
ひ且樂しましめよ、空望を抱いて自ら欺かしめよ。やがて彼等は思ひ知らん
吾が滅ぼせる都府

は、一として經典中に其の時期を記載せられざりしはなし^I。如何なる民も其の時期を速むるを得ず、また之に遅るることを得ず^五。

(1) 直訳『知られたる經典を有せざりしはなし』。神典に豫め滅亡の時期が記載せられ居ることを謂ふ。

彼等曰く『訓誡を降されたる者よ、げに汝は憑かれたる者なり^六。汝の言眞実ならば、何故に汝は天使を吾等に伴ひ来らざるか』とせ。吾は眞理^Iを現すために非ずば天使を降さず、而して其時彼等は猶豫せられざるべし^八。げに訓誡を降せるは吾なり。吾は必ず之を護らん^九。げに吾は汝以前にも往時の諸の民の間に諸使者を遣はしたり^{一〇}。而して諸使者の彼等に至るや、一人として彼等のために嘲笑せられざるはなかりき^二。吾は現代の罪人の心中にも之を入らしめたり^三。されば設ひ既往に於て前代の諸の民の先例ありとも、彼等は之を信ぜざるべし^三。また設ひ彼等のために天門を開き、隨時彼等をして之に登らしめんとするも^四。彼等必ず言はん『吾等の目は眩惑せり、否な吾等は妖術に迷はしめられたり』と^五。

(1) 『眞理を現すため』の原語は、古蘭中に類出する *Bill-haq* にして、直訳すれば『眞理を以て』なるが、多様な意味に用ゐらる。此の場合は *アルラー* の約束の眞実なるを実現すること、即ち賞罰を執行することを意味するものとすべし。

吾は天上に星座を置き、仰ぎ見る者の目に美しく映ぜしむ。而して吾は一切の逐はれたるサタンに対して之を護る。唯だ竊み聽きて火箭に追はるる者を除く。また吾は大地を展べ、群山を其上に投げ、一切の佳きものを之に生ぜしむ。吾は汝等のために地上に生計の道を與へ、汝等が養はざる者にも之を與ふ。物として吾に其の倉廩なきはなく、之を降すに定量を以てせざるはなし。吾は雲を孕む風を送り、水を天より降して之を汝等に飲ましむ。水は汝等が貯藏せるものに非ず。生を與へ死を致すは吾なり。而して吾は萬物の相続者なり。吾は汝等のうちの首先者を知り、また落後者を知る。他日汝の主は一齊に彼等を召集せん。彼は能知者・聰明者なり。

(1) 天上に登りて天界の行動を探り、天界の論議を聞かんとするサタンに対して星座を護るなり。(2) 天上に潜み登りて其の論議を盗み聽きたるサタンを火箭にて追ふこと。火箭とは即ち流星にして、回教徒は之を以て天使がサタンに向つて放つ箭なりとす。(3) 汝等が養はざる者とは、人間の介意せざる諸動物のことなりとも言ひ、また家人奴隸等を指すとも言ふ。(4) アラーが豊富に一切を創造するを言ふ。(5) 一切衆生が死滅し去りてアルラーのみ恒存たるが故に、萬事萬物を相続するなり。

吾は黒泥の乾ける粘土を象りて人間を創れり。而して其前に烈火にて幽鬼を創れり。汝の主が諸天使に告げて是く言へる時を念へ、『われ黒泥の乾ける粘土を象りて人間を創らんとす。吾之

を完成し、吾靈を之に鼓吹せる時、汝等地に俯して之に叩首せよ』云 諸天使即ち一齊に叩首せり云 唯だイブリースのみは然かせざりき。彼は叩首者のうちに加はることを拒みたり云 彼曰く『何故に汝は叩首者のうちに加はらざるか』云 彼曰く『吾豈汝が黒泥の乾ける粘土にて創れる人間に叩首する如き者ならんや』云 彼曰く『さらば此処より退れ、げに汝は呪はるる者なり云 げに汝は審判の日まで呪咀を受く』云 彼曰く『主よ、人々が甦らしめらるる日まで吾を猶豫せよ』云 彼曰く『汝は定められたる日まで猶豫せらるる者のうちに加へらる』云 彼曰く『主よ、汝は吾を迷ひ去らしむ。されば吾は地上にて人間の目に迷誤を美しく映せしめ、悉く彼等を迷はしめん云 唯だ彼等のうち汝の誠実なる僕たるべき者を除く』云 彼曰く『此²は吾が正しき道なり云 汝は唯だ汝に従ふ迷誤者に対しての外は、吾が僕等に対して如何なる權威をも有せず云 げに総じて彼等に約束せらるる場処は地獄なり云 地獄には七つの門あり、而して各門に彼等の各別の一團あるべし』と云

(1) 第七章第一一節以下、第一五章第三〇節以下参照。(2) 『此』の意味不明なり。若し誠実なる僕の『誠実』の代名詞とすれば、吾が正しき道は『吾に到る正しき道』とすべし。セールは『此』を以て善人を賞し、悪人を罰することを意味すとせり。(3) 猶太人及び波斯人は地獄を七界に分てり。回教は恐らく兩者又は兩者の一より之を学べるものなるべし。

げに其身を護る者は、必ず樂園と井泉との中に住まん聖（彼等に言はるべし）『平安に之に入れ』と聖 吾は一切の怨恨を彼等の胸中より除かん。彼等は兄弟となりて同牀に対座せん聖 此処にて彼等は如何なる苦勞をも知らず、また此処より逐はるることなからん聖 されば吾が僕等に向つて、吾は宥恕者・大悲者なることを告げよ聖 而して吾が懲罰の峻烈なる懲罰なることを告げよ吾

彼等に向つてアブラハムの賓客のことを告げよ聖 彼等アブラハムに來りて『平安』と挨拶せる時、彼は『われ汝等を恐る』と言へり聖 彼等曰く『恐るる勿れ。吾等は聰明なる童子の吉報を汝に齎せる者なり』聖 彼曰く『老齡既に吾を見舞へるに、汝等是くの如き吉報を吾に傳ふるか。汝等が眞に傳へんとする吉報は何ぞ』聖 彼等曰く『吾等は眞実に吉報を汝に傳へたるなり。されば汝は絶望者のうちに加はる勿れ』聖 彼曰く『迷へる者に非ずば、誰か其主の慈悲に絶望するものぞ』聖 彼また曰く『使者等よ、汝等の用件は果して何ぞ』聖 彼等曰く『吾等は罪惡の民に遣はされたるなり聖 但しロトの一族を除く。吾等必ず彼等の総てを救はん聖 但しロトの妻を除く。吾等は彼女を落後者の一人と定めたり』と吾

使者等ロトの家に来れる時ニ　ロト曰く『汝等は未知の人々なり』とき　彼等曰く『然らず、吾等は人々が之について疑心を抱けることが、実は眞実なるを示さんがために汝に来れるものなり』吾等は眞実を汝に齎せり。吾等の言は眞実なり。されば深夜一族と共に出で立ち、汝は彼等の後に隨へ。汝等のうち何者をも後を顧みることなからしめ、唯だ命ぜられたる方向に進め』とき　われ是くの如く彼に默示せるは、翌朝自餘の民を殲滅せんがためなり。

市中の民、欣然として来れり。彼曰く『こは吾が賓客なり。汝等吾を辱しむる勿れ。アルラ』を敬ひ、吾を辱しむる勿れ』とき　彼等曰く『吾等は異邦の人を汝に禁じたるに非ざるか』とき　彼曰く『汝等何事をか爲さんとするならば、此処に吾が娘等あり』とき　誓ひて言ふ、彼等は狂乱して迷路を彷徨しつゝありしなり。かくて翌朝太陽の登るころ、轟然たる一声彼等を襲ひたり。吾は此の都府を顛覆し、市民の上に熱泥の雨を降したり。げに此中には睿智ある者への種々なる休徴あり。そは現に残れる大道の路頭にあり。げに此中には信ずる者への種々なる休徴あり。而して森林の民もまた不義者なり。されば吾は之に対しても報復せり。此等の二都府は、今尙ほ人の通行する公道の路頭にあり。

(1) ロトの家に客人ありと聞きて彼の家に來れるなり。第一章第七七節以下参照。(2) 人質として提供せんとの意

味。(3) アラビアよりシリアに到る大道。(4) シュアイブが遣はされたる民を指す。「森林」はミディアン¹の別名とせらる。

ヒヅルの民も諸使者を虚言者と呼べり。われ吾が休徴を彼等に降したるも、彼等之を忌避したり。彼等岩石を斫りて家となし、以て自ら安んじたり。されど轟然たる一声、早朝彼等を襲ひたり。而して彼等が積み未れるものは、毫も彼等を益せざりき。

わが天地並に天地間の一切のものを創造せるは、唯だ眞理を現さんがためのみ。げに時は近づけり。されば寛大なる宥恕を以て宥恕せよ¹。げに汝の主は創造者・唯一の能知者なり。吾は既に重誦²の七節と莊嚴なる古蘭とを汝に與へたり。不信者の或者に與へたる佳きものに向つて汝の目を張る勿れ。また彼等のために心を悩ます勿れ。而して信者に対しては汝の翼を低く垂れよ³。

『吾は公然の警告者なり』と言へ。吾は古蘭を割きて断片となせる分割者の上に懲罰を降せる如く⁴。誓つて総ての不信者に彼等の爲せることを糾問すべし。

(1) メッカの不信者を寛容せよとの意味。(2) 直訳すれば「屢々繰返さるる七」なり。一般に開卷章の七節を指すもの

とせらるるが故に予も之によれり。(3) 翼を垂るとは愛護すること。【4】古蘭を割くとは一部を承認し、他を否認する意味にて、分割者とは猶太人及び基督教徒を指すものと思はる。

汝が命ぜられたることを公然宣布せよ。而して多神教徒より遠離せよ。吾は嘲笑者に対して必ず汝を加護せん。彼等はアルラーハに他の神を配する者なり。されど彼等は思ひ知らん。吾は汝の胸が彼等の言によつて窄めらるるを知る。されど汝の主を讃へ、叩首者の一人となれ。確実なる¹事実が汝に来るまで汝の主¹に事へよ。

(1) 『確実なること Al-Yaqun』とは死を意味すとせらる。

第十六 蜜蜂 章

メッカ啓示

第六八節に蜜蜂のことを述ぶるに因みて蜜蜂章 *An-Nahi* と名づけらる。蜜蜂が百花を吸ひて人を医す力ある蜜を造るは、一宛もマホメットに降されたる啓示が、一切の經典の粹を集めて古蘭となれるが如しとするなり。メッカ末期の啓示とせらるるもメチナ初期の啓示、並に遷都以後に訂正せられたる諸節を含むこと前数章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

¹アルラーハの命令至らんとす。故に之を催促する勿れ。彼を讃へよ、彼は高く彼等が彼に配する者の上に超在す¹。彼は其の命令によつて、黙示²を携へたる諸天使を、僕等のうちの欲する者に降し、彼等をして『吾の外に神なし、故に吾を敬へ』と警告せしむ²。

(1) 本章の序言としてメチナ遷都以後に加へられたる二節とすべし。(2) 原語 *Ris* は普通心霊・生命等の意味なれど、此処にては天啓・黙示の意味に解す可し。

彼は眞理を現すために天地を創造せり。彼は高く彼等が彼に配する者の上に超在す³。

彼は一涓滴より人間を創れり、而も見よ、人間は公然たる反抗者なり。而して家畜、彼は之をも汝等のために創れり。汝等之によつて暖衣と種々なる便益とを得、且之を食ふ^五。夕^{ゆふた}、汝等が彼等を家に伴ひ帰る時、朝^{あした}、彼等を野に追ひ往く時、其中に汝等の榮耀あり^六。汝等が其身を苦しめずば達し難き國々に、彼等は汝等の重荷を運ぶ。げに汝等の主は大悲者・大慈者なり^七。また馬と騾馬と驢馬、こは汝等を之に騎乗せしめ、且汝等の裝飾たらしめんがためなり。而して彼は汝等の知らざるものをも創れり^八。正しき道を示すはアルラーハの事なり。然るに或者は之を離る^一。されどアルラーハ若し欲したりせば、彼は汝等を一齊に導き得たりしなり^九。

【一】此の一句は『或者』を道路と解し、『或路は正向を逸す』と解釈する学者あり。

天より水を降す者は彼なり。汝等は之を飲む。また汝等が家畜を牧する藪叢^{やまはら}もまた之によつて成育す^{一〇}。彼はまた之によつて穀類、オリブ、棗椰子、葡萄及び其他各種の果実を生ぜしむ。げに此中には思慮ある者への種々なる休徴あり^二。彼は夜と晝とを汝等に奉仕せしむ。日と月と群星ともまた彼の命令によつて汝等に奉仕せしめらる。げに此中には理解ある者への種々なる休徴あり^三。彼は汝等のために色彩多趣なる土を地上に創れり。げに此中には反省する者への種々なる休徴あり^四。

り三 彼は海洋を汝等に奉任せしむ。汝等之より鮮魚を捕へて食ひ、また服飾に用ゐるものを採る。人は船の海上を航するを見ん。これ汝等が主の恩恵を求むるためなり。汝等恐らく感謝せん云 彼は堅固なる群山を地上に置きり。これ大地を動搖せしめざらんがためなり。彼は汝等が正しく進むために河川と道路とを設け云 且種々なる道標を置きり。而して彼等は星辰によつて正しき方向を取る云 果して是くの如しとすれば、創造する者と創造せざる者と同一視せらるべきか。汝等尙ほ思はざるかモ アルラーハの恩寵は算へんとするも算ふべからず。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり云 アルラーハは汝等が匿すこと並に露すことを知る云 然るに彼等がアルラーハを舍きて拜する者は、己れ自身が造られたる者にして、自らは能く一物をも創らず云 彼等は死者にして生者に非ず、何の日に甦らしめらるかをも知らざる者なり三

汝等の神は唯一の神なり。されど末世を信ぜざる者は、其心知ることを拒む。そは彼等高慢なるが故なり三 アルラーハは彼等が匿すこと並に露すことを知る。彼は高慢なる者を欣ばず三 彼等に向つて『汝等の主は何を降せるか』と問ふ者あれば、彼等答へて曰く『古人の物語のみ』と言 彼等そのために復活の日に於て、己れ自身の全部の重荷と、知識なくして彼等が迷はしめたる者の

重荷の一部を負はしめらるべし。げに彼等が荷ふものは禍なるかな

彼等以前の者も陰謀を企てたり。されどアルラーハは彼等の建築の礎を覆し、屋宇彼等の頭上より落下して、懲罰は彼等の知らざるところより来れり。而して復活の日に彼は彼等を辱しめて言はん『汝等が吾に配せる神々はいま何処にありや。汝等が争論せるは其爲に非ざりしか』と。知識を賜はりたる者もまた言はん『げに今日こそ不信者の上に屈辱と苦難とが下る日なれ』と。己れの魂を害ひつつある間に諸天使に迎へ入れらるる者は、其時初めて屈從し、『吾は如何なる悪事も行はず』と言はん。『否なアルラーハは汝等が為せることを知悉す。されば地獄の門に入り、永劫に其中に住め。高慢なる者の住処は禍なるかな』云

其身を護れる者に是く言はれん『汝等の主は何を降せるか』と。彼等答へて言はん『最善なるもの』と。善事を行ふ者には現世にても報賞あり。されど末世の住処は更に善し。げに其身を護る者の住処は最勝なり。彼等は河川流るる樂園に入る。其処にて彼等は己れの欲するものを獲ん。アルラーハは是くの如くにして其身を護る者に報ゆ。而して善人にして諸天使に迎へ入れらるる者には是く言はれん『平安汝等の上にあれ。汝等が為せることに対する応報なれば、いざ樂園に入れ』と

不信者は、諸天使の彼等に來るを待つか、又はアルラーハの命令の下るを待つ外に、また何事を待つべきか。げに彼等以前の者も同然なりき。アルラーハが彼等を害^なへるに非ず、彼等自ら己れを害へるなり。かくて彼等が爲せる惡事は己れの上に落ち、曾て彼等が嘲笑せることが、いまや彼等を圍繞すべし。

多神を拜する者曰く『アルラーハ若し欲したりせば、吾等並に吾等の祖先は、彼を舍きて何者にも事へざりしならん。また吾等は彼の命令なくして何事をも禁ぜざりしならん』と。彼等以前の者も同然なりき。されど使者の務めは、明白なる宣言以外、また他事なきに非ずや。げに吾は各の民のうち、一使者を擧げ、『アルラーハに事へよ、僞神^{イダール}を避けよ』と言はしめたり。彼等の或者はアルラーハ之を導き、或者は迷ふを当然とせられたり。地上を遍歴して、使者を虚言者と呼べる者の末路が如何なるものなりしかを見よ。設ひ汝は切に彼等を導かんとするも、アルラーハは断じて己れが迷はしめたる者を導かず。彼等には如何なる佑助者もなし。

彼等嚴かに神かけて誓ひ、アルラーハは決して死者を甦らしめずと言へり。然らず、これ眞実なる彼の約束なり。されど人々多くは之を知らず。復活はアルラーハが彼等に其の相争へることを明示し、且信ぜざる者をして己れの虚言者なることを知らしめんがためなり。われ一物を欲して

之に向つて発する言は唯だ『有れ』と言ふのみ。而して其物即ち有り也

迫害¹せられてアルラーハのために移住する者には、われ現世に於ても善き住処を與へ、来世に於ては更に大なる報賞を與へん。彼等若し此事を知りたりせば！² 彼等は耐え忍びて其主に頼る者なり也³

(1) 此の一段はメヂナ遷都以後のものにして、善き住処とはメヂナを指せるものとすべし。

汝以前に吾が遣はせる使者にして、吾之に默示を與へたるは、一として人間に非ざりしはなし¹。汝等之を知らずば訓誡²の民に問へ³ 吾は種々なる証據と經典とを與へて彼等を遣はしたり。吾いま汝に此の訓誡³を降したるは、汝をして人々のために彼等に降されたるものを闡明せしめんがためなり。彼等恐らく反省せん也⁴

(1) アルラーハは天使を使者として遣はすべしとせるメッカ市民の疑問に答へて、其の必ず人間なることを示せるなり。

(2) 訓誡 *Nikr* の民とは受経者即ち基督教律及び猶太人を指す。(3) 此の訓誡は古蘭を意味す。

惡事を企つる者¹は果して安心し得るか、アルラーハは彼等を地中に埋め去ることなきか、又は彼等の知らざる処より懲罰が降ることなきか、又は彼等の往來に際し、彼を避くべき途なき時に彼等を襲ふことなきか、又は徐々に破滅に導く懲罰を加ふることなきか。されど汝等の主は親切にして仁慈なり。

(一) マホメットに対して陰謀を企つるメッカ市民。

彼等はアルラーハが創造せる萬物を見ざるか。彼等の影さへも左右に轉動し、身を屈してアルラーハに叩首するに非ざるか、げに天地間の一切衆生はアルラーハに叩首す。天使も亦然り。彼等は決して高慢に非ず。彼等は在上の主を畏れ、己れに命ぜられたることを行ふ。

アルラーハ曰く『二神を拜する勿れ、唯だ吾のみを敬へ』と。彼は唯一の神なり。天地間の一切のものは彼に属し、永久に彼に服従す。然らば汝等アルラーハ以外また何者を恐るるか。

汝等が浴する一切の恩寵は、悉くアルラーハより来る。而して艱難汝等に到れば即ち佑助を彼に求む。然るに彼が汝等より艱難を除き去れば、汝等の或者は其主に同位者を配して、彼等に垂れたる吾が恩寵を忘れんとす。さらば暫く生を楽しめ。やがて汝等思ひ知らん。

彼等は吾が賜へるものの一部を、己れの知らざる者に献ぐ。神かけて言ふ、汝等は其の虚構せるものについて必ず糾問せらるべし¹。彼等はアルラーハに女兒を指定し——彼を讚へよ——己れには己れの欲する男兒を指定す¹。彼等の一人若し女兒誕生の報知に接すれば、忽ち其面は黒く曇り、其心は憤怒に満つ¹。彼は其の受けたる不幸なる報告のために人目を避け、耻を忍びて之を育つべきか、又は之を土中に埋むべきかを思ひ惑ふ。嗚呼彼等の判断は禍なるかな¹。

【1】アラビヤ人は天使を以てアルラーハの女となせり。然るに女兒は彼等の最も欣ばざるところにして、誕生と共に之を土中に埋むる風習ありき。

末世を信ぜざる者は悪きものに譬へられ、アルラーハは至高なるものに譬へらる。彼は偉力者・聰明者なりき。

若しアルラーハが不義の故を以て人間を罰したりとすれば、地上に一個の生類も遺らざるべし。されど彼は定められたる時まで彼等を猶豫す。而して其時到来れば彼等寸時も之に遅れ又は先んずるを得ず¹。彼等は己れの悪む者をアルラーハに帰し、而も其舌は己れのために善報あるべしと偽る。疑ひもなく火獄は彼等のものなるべく、最先に其処に駆り立てらるべし¹。神かけて言ふ、吾は汝以前にも諸の民に諸使者を遣はしたり。然るにサタンは彼等をして己れの所行を佳しと思はし

めたり。彼は現世にて彼等の愛護者となれるなり。されど末世に於て彼等は痛刑を受けん。われ汝に經典を降せるは、汝をして彼等が相争ふ問題を解決せしめんがため、また信する者への嚮導並に慈悲たらしめんがためのみ也。

アルラーハは水を天より降し、之によつて死せる大地を甦らしむ。げに此中には耳傾くる者への一休徴あり。げに家畜にも汝等への教訓あり。吾は彼等の腹中にありて糞血の間より出で、而も之を飲む者をして快然嚙下せしむる清潔なる乳を汝等に與ふ。また棗椰子と葡萄との果実、汝等之を以て酪酊せしむる飲料と良好なる食品とを作る。げに此中には理解ある民への一休徴あり。

汝の主、蜜蜂に默示して曰く『或は山中、或は樹間、或は人間の造れる建物の中に汝等の巢を営め。而して一切の果実を吸ひ、淑然として主の道を行け』と。かくて彼等の腹より人を愈やす種々なる色の飲料出づ。げに此中には反省する民への一休徴あり。

アルラーハは汝等を創り、次で汝等を死なしむ。而して汝等の或者は、曾て知れることを忘れ果つるほど甚だしく老耄するまで長生す。アルラーハは能知者・強大者なり。またアルラーハは汝等の或者を他よりも富裕ならしむ。然るに彼が富裕ならしめたる者は、己れの右手が所有する者等に其富を頒ちて、彼此相等しくすることをせず。彼等はアルラーハの恩寵を認めざるか。またア

ルラーハは汝等の間より汝等に妻を與へ、其妻より子女を與へ、且幾多の佳き糧餉を與へたり。然るに彼等は、虚妄なるものを信じてアルラーハを信ぜざるかき。彼等はアルラーハ以外の者を拜するか。其等は天地の間より何物をも彼等に與へず、且全く無力なる者に非ざるかき。

さればアルラーハを何者にも比ぶる勿れ。アルラーハは知り、汝等は知らずき。アルラーハは一比喻を説く。一は主人の財産たる奴隸にして、自ら一事を爲す力なき者、他は吾之に佳き糧餉を與へ、且彼は其中より陰に陽に喜捨を行ふ者なり。兩者果して同一なるか。アルラーハを讚へよ、断じて然らず。されど彼等多くは知らざるなりき。アルラーハはまた一比喻を説く。二人あり、一は啞者にして自ら一事を爲す力なく、唯だ主人の煩累たるに止まり、何処に赴かしむるも一善事を齎さざる者なり。是くの如き者が、かの善事を勧め、直き道を踏む者と同一なるかき。

天地の不可見のことは唯だアルラーハにのみ属す。末日の事は實に一轉瞬に等しく、或はそれよりも速し。げにアルラーハは全能なりき。汝等何事をも知らざれど、汝等を母の胎内より出だし、耳と目と心とを與へたるはアルラーハなり。汝等恐らく感謝せんき。彼等は天空の只中に彼に従ふ飛鳥を見ざるか。アルラーハに非ずして誰か能く之を支ふるものぞ。此中には信ずる民への種々なる休徴ありき。アルラーハは住居として家屋を汝等に與へ、また家畜の革にて作れる天幕を與へた

り。こは汝等が家居する時にも、また旅行する時にも軽便なり。また彼は綿羊毛、駱駝毛、山羊毛より、家具並に時期に應ずる器什を汝等に與へたり。またアルラーハは其の創れる物の蔭影を汝等に與へ、山中に避難處を與へ、暑熱を防ぐ衣服と戰陣に其身を護る甲冑とを與へたり。彼は是くの如くにして其の恩寵を汝等に完うす。汝等恐らく歸命せん。されど設ひ彼等背き去るとも、汝の務めは唯だ公然宣言するにあり。彼等はアルラーハの恩寵を認めつつ而も之を否認するものなり。彼等の多くは忘恩なり。

他日吾は各の民より一人の証人を挙げべし。其日不信者は發言を許されず、如何なる眷顧をも得ざるべし。其日惡事を行へる者は己れの懲罰を目睹すべし。そは彼等のために輕減せられず、また猶豫せられざるべし。其日多神を拜せる者は言はん『主よ、此等は汝を舍きて吾等が拜したる神々なり』と。されど彼等は言はん『汝等は虚言者なり』と。其日彼等は初めてアルラーハに歸命せんことを希ふべし。而して彼等が虚構せる神々は悉く彼等を棄て去るべし。自ら信ぜずして人をアルラーハの道に背かしむる者には、われ彼等の惡事に対して懲罰の上に懲罰を加ふべし。他日吾は各の民に於て、彼等に対する一人の証人を其民のうちより挙げべし。而して吾は汝（マホメット）を此等（メッカの民）の証人たらしむべし。吾は一切を闡明する經典を汝に降し、之を以

て歸命者への嚮導と慈悲と吉報たらしめたるなり矣

げにアルラーハは正義と善行と近親への施與とを汝等に命じ、醜行と不正と貧欲とを禁ず。彼は汝等を留意せしめんがために訓誡を與ふ也。汝等アルラーハと約束を結ばば其の約束を完うせよ。

既に誓盟して約束を確認し、アルラーハを喚んで証人としたる後に之を破ること勿れ。アルラーハは汝等の爲すことを知る也。一の團體が他の團體よりも人数多き故を以て、汝等の誓約を汝等の中の詐謀たらしむること、かの女子が撚りて強くせる絲を解きて縷糸とするが如きことある勿れ¹。アルラーハは唯だ之によつて汝等を試みんとするなり。復活の日に於て、彼は必ず汝等の爭論を解決すべし也。アルラーハ若し欲したりせば、彼は汝等を挙げて一團²たらしめ得たるなり。されど彼は己れの欲する者を迷はしめ、欲する者を導く。而して汝等は必ず其の爲せることについて糾問せらるべし也。されば汝等の誓約を以て汝等の中の詐謀とする勿れ。然らば踏みしめたる脚は滑り、人をアルラーハの道に背かしめたることのために、汝等現世に於ては艱難を嘗め、末世に於ては偉大なる懲罰を受けん也。

(1) アラビア人は人数の多少を以て実力の標準とし、多人数の場合に常に契約を無視したり。(2) 同一宗教を奉ずる一團を意味す。

些少の代償を以てアルラーハの約束を賣る勿れ。汝等に知識あらば、アルラーハの許にあるものが汝等にとりて最勝なるを知らん^五。汝等の許にあるものは滅び、アルラーハの許にあるものは長く残る。而して耐え忍ぶ者には、われ彼等が爲せる最善の事に対して報賞を與へん^六。げに信者にして善事を行ふ者は、男女を論ぜず必ず多幸の生涯を送らしめ、且其の爲せる最善の事に対して報賞を與へん^七。

汝古蘭を讀誦する時、石にて撃たれしサタンに対してアルラーハの加護を求めよ^八。げに信じて其主に頼る者に対して、サタンは如何なる權威もなし^九。彼の權威は唯だ彼を愛護者とする者並に多神を拜する者の上にも行はる^{一〇}。

われ一節を以て他節に代ふる時、彼等曰く『汝は唯だ僞作者にすぎず』と¹。アルラーハは最も善く己れの降せるものを知る。彼等の多くは知識を有せざるなり^二。言へ『聖靈²眞実に汝の主より之を汝に降せるなり。そは信ずる者を毅然たらしむるため、また婦命者^{ムスリム}への嚮導並に吉報たらしめんがためなり』と^三。吾は彼等の言ふことを知る『彼を教ふるは一個の人間のみ』と³。されど彼等が指摘する者の言語は外國語にして、こは明晰なるアラビア語なり^四。

(1) 古蘭諸節の所謂『撒廢』に対する非難に答ふるもの。(2) 聖靈とはガブリエル。(3) 無学なるマホメットが古蘭

を誦出せることに対し、天啓を信ぜざるメッカ市民は種々なる疑惑を抱き、彼が密かに他人より教へられたるならんと言ふ者ありしなり。此処に「一個の人間」といふは何人を指せるかについて異説区々なり。最も多く其名を挙げらるるは、最も初期に改宗せる基督教徒奴隷の名なるが、ムイアは之をマホメットが「希臘の最初の美果」と呼べる奴隷スハイブ・イブン・スイナン Suhayb ibn Sinan なるべしとせり。またシュプレングァーは之をもとニネヴェの修道僧にして後にメッカに定住せるアッダス Addas なるべしと言ひ、フリドオは波斯人サルマーン Salman のことなるべしとせり。

アルラーハの休徴を信ぜざる者は、アルラーハ之を導かず、而して彼等は痛刑を受くべし^四 げにアルラーハの休徴を信ぜざる者は虚言を捏造す。彼等は虚言者なり^五

¹ 一旦信じたる後にアルラーハを信ぜざる者、但し強迫せられて止むなかりし者にして、其心は信仰によつて平安なる者を除き、進んで不信に向つて其胸を開ける者は、アルラーハの憤怒其上に降り、偉大なる懲罰を受くべし^六 これ彼等が来世よりも現世を愛せるがためにして、またアルラーハは不信の民を導かざるがためなり^七 此等はアルラーハが其の耳と目と心とを封じたる者なり。彼等は懈怠者なり^八 彼等は来世に於て必ず淪喪者たるべし^九 而して汝の主は、迫害せられて移住し、² 然る後に善戦し且忍耐する者には、げに其後も宥恕者・大慈者なり^三

(1) 此の一段をベルはメヂナ啓示とせり。(2) メッカよりメヂナへの移住を指す。

各人皆な己れのために辯護し、各人皆な其の所行に対して存分に報いられ、決して不当に遇せらるることなき日を念へ二

アルラーハは一比喻を説く。安全にして平安なる一都府あり¹、糧餉豊かに四方より来りしが、そのアルラーハの恩賜を感謝せざるに至るに及んで、彼は極度の飢餓と恐怖とを之に嘗めしめ、以て彼等の爲せることを罰したり三 而して今や彼等自身の間より出でたる使者が彼等に来りたるも、彼等之を待つに欺瞞者を以てす。されど彼等が不義を行ひつつある間に、懲罰必ず彼等を襲ふべし三

(1) メッカを指す。(2) マホメットを指す。

アルラーハが汝等に賜へる物のうち、合法にして佳きものを食へ。汝等若しアルラーハに事ふる者ならば、汝等の主の恩恵に感謝せよ四 彼は唯だ死したるもの、血、豚肉及びアルラーハ以外の者の名が唱へられたる物を禁ずるにすぎず。されど嗜欲のために非ず、故意に違背するに非ず、迫

られて止むを得ざりし者には、アルラーハは宥恕者・大慈者なり二三 汝等の舌の偽りにて『これは合法、これは禁制』と言ふこと勿れ。アルラーハについて虚構する者は決して榮えず二六 彼等には暫時の享樂あり、然る後に痛烈なる懲罰あらん二七

吾は猶太人に吾が曾て汝に告げたる物を禁じたり¹。吾は決して彼等を害はず、彼等自ら己れを害へるなり二八 されど無智にして惡事を行ふとも、後に懺悔して其身を修むる者には、アルラーハは宥恕者・大慈者なり二九

(一) 第六章第一四節参照。

げにアブラハムはアルラーハに従順なる龜鑑なりき。彼は堅信者^{ハニイフ}にして多神教徒に非ざりき三〇 而して彼は主の恩寵を感謝したりき。さればこそアルラーハは彼を選びて之を直き道に導きたるなれ三三 吾は現世に於て幸福を彼に與へたり。而して来世に於て彼は必ず義人のうちに加へられん三三 其後吾は汝に默示せり『堅信者^{ハニイフ}たるアブラハムの信仰に従へ。彼は多神を拜せる者に非ず。』と三三

安息日は之について豫言者と意見を異にせる者のために定められたるにすぎず¹。復活の日に當

り、汝の主は必ず彼等が相争へることに対して彼等に判決を下すべし^{三三}

(一) 豫言者とはモーゼを指す。回教徒に従へばモーゼは猶太人に対して、金曜日を礼拝日となすべきことを求めたりしも、彼等之に対して異論を唱へ、神が創造を完了して休息せる日を以て安息日となせり。かくて猶太人は豫言者の意に反して此日を選べることをために、最も嚴格に安息日を守るべきことを命ぜらる。マホメットが金曜日を礼拝日とせるは、モーゼに従へるものとせらる。回教徒は神は決して疲労を知らざる故を以て、休息の要を認めざるなり。

智慧と親切なる勧告とを以て人を汝の主の道に招げ。最善の態度を以て彼等と議論せよ。汝の主は彼の道より迷ひ去る者を知り、また導かるる者を知る^{三四}

汝等若し報復せんとすれば、被害に相應して報復せよ。されど汝等若し忍耐しなば、そは忍耐する者にとりて最も善し^{三五}。さらば汝等忍耐せよ。されど汝は唯だアルラーハの加護によつてのみ能く忍耐し得べし。彼等のために心を悩ます勿れ^{三六}。げにアルラーハは其身を護る者、善事を行ふ者と偕にあり^{三七}

第十七 夜行章

メッカ啓示

第一節に『夜行』即ち『昇天』のことあるによつて夜行章 *Al-Isra'*、又は昇天章 *Al-Miraj* と呼ばれる。またイスラエル族章 *Bani Israil* とも呼ばれるは、本章に於てイスラエル人が特別な神寵に浴しながら、神意に背けるために悲惨なる懲罰を受けたることを力説するが故なり。

夜行とは一夜マホメットが天馬に乗じてメッカよりエルサレムに至り、エルサレムより一躍昇天して七天を巡歴し、第七天に於て親しくアルラーハに謁したりとの傳承にして、其の経緯は下の如し。

傳承によればマホメットの夜行即ち昇天は、彼がメッカ参詣のために来れるメヂナ市民の少数者に宣教して其の帰依を得てより、大なる期待をメヂナに対して抱くに至り、鶴首して北方よりの吉報を待ちつつありし間に行はれたるものなり。即ち遷都以前一年、開教第十年七月二十七日夜、其の眠れるアブ・タリブの家より、マホメットは天馬に跨り、天使ガブリエルに導かれて先づエルサレム神殿に至り、其処より更に天上に運ばれ、第一天に於てアダムに会ひ、第二天に於てヨハネ及びイエスに、第三天に於てヨセフに、第四天に於てイノクに、第五天に於てアロンに、第六天に於てモーゼに、第七天に於てアブラハムに会へり。ガブリエルは此処より進むことを許されざりしが、マホメットは更に進みてアルラーハに咫尺し、親しく其言を聽くを得たり。一日五度の礼拜を行ふべしと命ぜられたるは実に此時のことなりとせらる。

翌朝彼は此の昇天のことを信者に発表せんとせしが、アブー・タリブの女は、不信者が之を聽かば嘲笑の種とすべしとの故を以て、切に之を秘密に付すべしと勧めしが、マホメットは遂に耳を藉さざりき。然るに此の異常なる物語が宣傳せらるるや、果してアブー・タリブの女が憂へたる如く、啻に不信者が今更の如くマホメットを狂人視せるのみならず、信者の間にさへも之を信ぜざる者ありて動搖するに至りしが、アブー・バクルが断乎其の眞実なることを信ずと明言したることによつて、僅かに事なきを得たり。回教徒は此の夜行又は昇天について語ること豪華奔放を極むるも、古蘭に於ては僅に本章第一節に最も簡単に言及せられ居るのみ。而して回教神学者は、或はマホメットが眞実に昇天せると言ひ、或は夢中の異象なりと言ひ、互に論議して倦むことなし。

この第一節を除く外、本章は一般にメッカ中期の啓示とせられ、ネルデケは之をメッカ第二期（開教第五・六年）の末尾に置とも、寧ろメッカ末期の啓示と見るべきもの多く、且遷都以後に訂正せられたるもの、並に遷都初期の啓示と思はるる諸節を含むこと前章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

彼を讚へよ、彼は夜間に其僕¹を聖処²より伴ひて、わが其の四周を祝福せる遠地³の殿堂に到れり。これ種々なる休徴を彼に示さんがためなり。げに彼は能聞者・能見者なり—

(1) マホメット。(2) Al-Masjid, I-Haram 即ちメッカ聖殿。(3) Al-Masjid, I-Aqsa 即ちエルサレム神殿。此

の一節、孤立して其他の諸節と連絡なし。

吾¹は經典をモーゼに與へ、之を以てイスラエルの兒等の嚮導たらしめたり。曰く『吾以外に守護者を扱ふ勿れ^二。ノアと共に方舟ほこふねに乗せたる者の子孫よ、げに彼は恩を忘れざる僕なりき』と^三。

吾はまた經典の中にイスラエルの兒等に是く告げたり。『げに汝等は再度地上に於て惡事を行ふべく²、また汝等は甚だしき傲慢を敢てすべし^四』。

(1) 此の一段並に次の一段、即ち第二一八節は、猶太人を対象とせるものなれば、メチナ初期の啓示とすべし。(2) 第一次の惡事は律法に背き、豫言者イザヤを殺し、エレミアを囚へたることなど。第二次の惡事はザカリア及びヨハネを殺し、イエスの豫言者たるを認めざりしこと。

『その最初の惡事を膺懲する時到来ば、吾はわが僕等のうちの天賦勇猛なる者を汝等に遣はさん。彼等隈なく汝等の屋内を劫掠し、約束は是くして遂げられん¹』。次で吾は汝等を彼等に勝たしむる機運を與へん²。吾は汝等の財宝と子孫とを殖やし、その人口を多からしめて是く告げん^三。『若し汝等善事を行はば、そは己れのために、之を行ふなり。また若し惡事を行はば、そは己れのために之

を行ふなり』と。而して第二次の悪事を膺懲する時到来ば、われ更に他の者に命じて汝等の面を曇らしめ、最初の時の如く神殿を侵し、一切を脚下に蹂躪せしめん。主は或は汝等の上に慈悲を垂れん。されど汝等若し三たび悪事を繰返さば、吾また必ず汝等を膺懲せん。吾は地獄を不信者の牢獄と定めたり』ハ

(1) ネブカドネザルがエルサレム神殿を破壊することを指すとせらる。(2) 猶太人がバビロン幽囚より帰り、ゼルバエルの下にエルサレム神殿を再建し、其後國榮えたることを指すとせらる。但し此の勝利とはタビデがゴリアテを殺せることを指すともせらる。(3) 羅馬皇帝ティトゥスのエルサレム征服を指すとせらる。(4) 直訳『若し汝等復り来らば、吾また歸り来らん』。復るとは第三次の悪事を行ふこと。吾また歸らんとは懲罰を加ふること。第三次の悪事とは、猶太人がマホメットの豫言者たることを否認すること。

げに此の古蘭は、人を直き道に導き、また善事を行ふ信者は偉大なる報賞を受くべしとの吉報を傳ふ。而して末世を信ぜざる者は、われ彼等のために痛烈なる懲罰を備へたり。されど人は幸福をこそ祈るべきに災厄をも祈る。これ人間は性急なるが故なりニ

吾は夜と晝とを二個の休徴とせしが、後に夜の休徴を暗くし、晝の休徴を輝かしめたり。これ汝

等をして晝間働きて主の恩恵を求めしめ、また年数を知り、時刻を計算せしめんがためなり。吾は一切を明瞭に説明したり三

吾は各人の鳥¹を其頸に結びたり。吾は復活の日に当り、開かれたる一卷の書冊を彼に提示せん三
(彼に是く言はるべし) 『汝の書冊を讀め、今日汝は自ら己れの清算者たるに足る』と四

(1) 鳥は運命を意味す。アラビヤ人も希臘人・羅馬人と同じく鳥によつて運命を判断せり。例へば其の左より右に飛ぶを見れば吉兆とし、右より左に飛ぶを見れば凶兆とせるが如し。

導かるる者は唯だ己れの魂のために導かれ、迷ふ者は唯だ己れを害するがために迷ふ。重荷を負へる者は他の荷を負ふことなし。吾は使者を遣はせる後に非ずば決して罰せず五 われ一都府を亡ぼさんとする時は、先づ都内の富裕なる者に命令す¹。然るに彼等其処にて罪惡を行ふが故に、之に對する至当の宣告下され、われ徹底して之を殲滅す六 ノア以後如何に多くの世代を吾は亡ぼせることぞ。汝の主は其の僕等の諸惡を知悉して之を照覽す七

(1) 豫言者に従ふことを命ずるなり。

速かに過ぎ去る現世を愛する者には、吾また現世に於て吾が欲するものを吾が欲する者に與へん。然る後に吾は彼のために地獄を設けん。彼は蔑まれ逐はれて之に入らん。されど信者にして末世を信じ、之に向つて力めて精進する者、是くの如き者の精進は嘉納せられん。

吾は總ての者の上に、此者の上にも又彼者の上にも、普く汝の主の恩賜を願はん。汝の主の恩賜は何人にも拒まるることなし。見よ、われ如何に或者を他よりも富貴ならしめたるかを。されど末世には之に優る高き榮譽と高き地位とあり。

他の如何なる神をもアルラーハに配する勿れ。然らずば汝等は蔑まれ且棄てらるべし。汝の主は汝等が彼の外に何者をも拜すべからざることを命じたり。また汝等の父母は、その一又は双親が汝等と共に老い往くとも、常に懇切に之に事ふべきことを命じたり。彼等に対して輕侮の嘆声を発することなく、また叱呵することなく、言ふには敬語を以てし。愛情より出づる從順の翼を低く垂れて是く言へ、『主よ、わが若年の時に吾を育てたる彼等に慈悲を垂れよ』と言。汝等の主は汝等が心中に懐くことを熟知す。汝等若し義しからば、げに彼は常に懺悔する者に寛容なり。

近親には応分に施與し、貧者と旅人にも施與せよ。但し浪費する勿れ。浪費者はサタンの兄弟なり。サタンは決して其主の恩を知らず。若し汝が己れ自身のために主よりの恩恵を求むるが

故に¹彼等を避くる場合は、彼等に対して柔和に物言へ。汝の手を其頸に縛る勿れ²。又は飽くまで
展き伸べて³誹られ且貧窮に陥る勿れ。主は己れの欲する者に豊かに與へ、或は之を加減す。げに
彼は其の僕等のことを知悉して常に之を照覽す。

(1) 生活に苦勞する境涯にて、自身もまた主の恩恵を希ふ意味。(2) 吝嗇なること。(3) 放埒なること。

貧困を恐れ七汝等の子女を殺す勿れ。吾は汝等を養ふ如く彼等をも養ふべし。げに彼等を殺すこ
とは大罪なり。三 姦淫を避けよ。そは醜行なり、惡むべき道なり。三 正当なる理由なくしてアルラ
一ハが禁じたる者を殺す勿れ。不当に殺害せられたる者ある場合は、われ其の相続者に権利を與
ふ¹。但し殺害に於て限度を越えしむる勿れ²。げに彼は援助を受く³。

(1) 死刑に処するか又は贖身金を收むる権利。(2) 残酷なる方法にて加害者を殺すこと、又は復仇を加害者以外の者ま
で及ぼすこと。(3) 此の一句の意味不明にして『彼』が何人を指すかによつて意味を異にす。若し之を被害者の相続者即
ち復仇者とすれば、宗教的に復仇を是認し、法律的に権利を與ふることによつて彼を援助する意味となる。

孤兒が成年に達するまでは、之を増殖するため非ずは其の財産に触るる勿れ。而して約束を果
たせ。げに約束は必ず糾問せらるべし。測る時には十分に測り、また正しき秤を以て量れ。是く

するは公正にして、結果に於て最も善し^三。己れの知らざることに従ふ勿れ^一。耳と目と心とは、必ず皆な糾問せらるべし^三。

(1) 予は此の一句を確實なる知識なくして世評又は他人の言を信受する勿れの意味と解す。或は確實に其の罪過を知れるに非ずば他を誹謗する勿れの意味に解せらる。

傲然として地上を往く勿れ。汝等は大地を裂くこと能はず、また身長は山に及ばず^三。総じて此等の悪事は汝の主の嫌惡するところなり^三。これ汝の主が汝に默示せる智慧の一部なり。されば他の神をアルラーハに配する勿れ。然らば蔑まれ逐はれて地獄に投ぜられん^三。

汝等の主は男兒を汝等に賜ひ、己れは天使のうちより女兒を採るといふか。げに汝等は重大なる言をなす者なり^四。

げに吾は此の古蘭に於て、彼等を警しめんがために(種々なる論証を)反復せり。然るにそは唯だ彼等の嫌惡を増したるにすぎず^二。言へ『若し汝等が言ふ如くアルラーハの外に神ありとすれば、彼等は王座の主に抗する道を求むべし^一』と^三。彼を讚へよ、彼は高く彼等が稱ふる者の上に超在す^三。七つの天は彼の栄光を讚へ、大地もまた然り、天地間の一切の者もまた然り。一物として

彼の栄光を讃へざるはなきも、汝等は彼等の讚美を解せず。げに彼は寛容者・宥恕者なり

(1) アルラーハに対して天地支配の權威を争ふこと。

汝が古蘭を讀誦する時、われ汝と末世を信ぜざる者との間に幔幕を垂れ、且彼等をして之を理解せしめざらんがために、其心に被覆おほいをかけ、其耳には錘おもりを入れたり。而して汝が古蘭の中にて唯だ汝の主の名のみを稱ふる時、彼等之を厭ひて其背を向く。吾は彼等が汝に耳傾くる時、その何に耳傾くるかを熟知す。而して彼等が去りて密語する時は、不義者は即ち曰く『汝等は唯だ憑かれたる者に従ふのみ』と。見よ、彼等が何に汝を譬ふるかを。彼等は迷へるなり。彼等は道に会ふを得ず

彼等曰く『何事ぞ、吾等一旦骨と塵とに歸したる後、また新しき生者として甦らしめらるべきか』と。言へ『設ひ汝等が石なりとも、又は鐵なりとも、又は汝等が心中に於て大なりとする何ものなりとも!』と、其時彼等は言はん『吾等を甦らしむる者は誰ぞ』と。言へ『最初に汝等を創れる者』と。彼等頭を振りて更に問はん『そは何時なるぞ』と。言へ『そは近かるべし』其日彼は汝等と呼び、汝等は讚美して之に答へん。而して汝等は、その墓中に留まれるは片時の如くな

りしと思はん』と云

吾が僕等に告げよ、彼等（不信者）と語る時は、最も懇慫に物言へと。げにサタンは悪意を彼等の間に煽る。げにサタンは人間の公然の敵なり云 言へ『汝等の主は最も善く汝等を知る。彼若し欲しなば慈悲を汝等に垂るべく、若し欲しなば汝等を罰すべし』と。吾は彼等の守護者として汝を彼等に遣はせるに非ず云

汝の主は最も善く天地間の一切を知る。げに吾は豫言者の或者を他よりも重んじ、またダビデには詩篇を與へたり云

言へ『アルラーハ以外の汝等が神々と稱ふる者を喚べ。彼等は汝等の災厄を除き又は轉ずる力なからん』と¹ 彼等が喚ぶ者自身が、彼等の主に近づかんことを望み、最も彼に親近せんことを望む。彼等もまた彼の慈悲を望み、其の懲罰を恐る。げに恐るべきは汝の主の懲罰なり云

(1) セールは『彼等が喚ぶ者』とは天使並に豫言者なりとし、ロッドウェルは基督教徒の聖徒崇拜を指せるものなりとす。

若し然りとすれば猶太人並に基督教徒を対象とせる啓示なり。されど多くの回教註釈家は之を以てメッカにて崇拜せらるる諸神を指すとなす。予も亦之に従ふ。

復活の日の来る以前に、われ之を殲滅し、又は之に懲罰を加へんとせざる一都府なし。此事は経典に銘記せらるる矣

われ汝に奇蹟を降さざるは、往古の民に之を虚偽なりとせる者ありしが故に外ならず。吾曾てサムードの民に明白なる証據として一牝駝を與へしが、彼等は之を虐げたり。吾は畏怖せしむるためならでは決して奇蹟を降さず矣

吾曾て汝に向つて『げに汝の主は人々を圍繞せり』と言へる時を念へ。わが汝に示せる夢幻は、人々を試みんがために外ならず。古蘭の中にて呪咀せられたる樹もまた然り。吾は彼等を警しむ。されどそは彼等の甚だしき傲慢を増長せしむるにすぎず

(1) 古蘭に於て『圍繞 *Itatah*』は常に亡ぼすために包圍することを意味す。此処に『人々』といふはメッカ市民を指す。

(2) 第一節の『夜行』のこととせらる。(3) ザクーム *Zaqum* 樹を指す。第四四章第四三—四九節参照。

われ諸天使に向つて『アダムに叩首せよ』と告げたる時を念へ。其時イブリースの外は彼等皆な叩首せり。彼曰く『吾豈汝が泥にて創れる者に叩首すべけんや』とき 彼また曰く『汝が吾よりも重んずるは此者なるか。汝若し復活の日まで吾に猶豫を與へなば、吾必ず彼の子孫を亡ぼし、殆ど

遺類なからしめん』と云　彼曰く『去れ、若し彼等のうち汝に従ふ者あらば、地獄こそ汝等の応報なれ。げに莫大なる応報なり云　汝の声を以て、彼等のうちの汝が誘惑し得る者を誘惑せよ。彼等を攻むるために汝が歩騎の軍勢を召集せよ、彼等と共に財宝と子女とを頒て、而して彼等と約束せよ。されどサタンは唯だ彼等を欺くために約束するのみ云　吾が僕等に対しては、げに汝は彼等の上に如何なる權威をも有せず。汝の主こそ彼等の十全なる守護者なれ』と云

汝等のために船を海上に走らしめ、汝等をして主の恩恵を求めしむる者は汝等の主なり。げに彼は汝等に仁慈なり云　而して汝等海上にて難に遭へる時、汝等が常に祈れる神々は求むれどもなく、唯だアルラーハのみあり。然るに彼安全に汝等を陸上に伴へば、汝等忽ち彼を離る。げに人間は忘恩なり云　汝等は彼が大地を裂きて汝を埋もれしめ、又は砂石を混へたる旋風を汝等の上に吹かしむることなしと安心し得るか。其時汝等には如何なる守護者もなかるべし云　又は彼が再び汝等を海上に帰らしめ、暴風を吹き送りて汝等を其の忘恩のために溺れしむることなしと安心し得るか。其時汝等は其の窮地に於て吾に對する如何なる佑助者をも有たざるべし云　げに吾はアダムの兒等を重んじ、海陸に彼等を伴ひ、種々なる佳き物を彼等に與へ、吾が創れる多くのものに超えて

彼等を貴くせりき

其日吾は総ての人間を其の導師イノムと共に召集すべし。右手に己れの書冊1を渡さるる者、彼等は（欣然として）其の書冊を讀むべく、且毫も不当に遇せらるることなしき。されど現世に於て盲目なる者は来世に於ても盲目なるべく、道を迷ふこと遠かるべしき。

（1）此の書冊は天使が記録せる各人の行狀記なり。

げに彼等は殆ど汝を誘惑し去りて、吾が默示せることに背かしめ、吾に對して別個のことを捏造せしめんとせり。¹ 然る時は彼等は友人として汝を遇せるならんき。而して吾若し汝を毅然たらしめざりせば、汝は殆ど彼等に傾かんとせるなりき。果して然らば吾必ず二重の懲罰を汝に味はしめ、且汝は吾に對する如何なる佑助者をも有たざりしなりき。また彼等は汝を國外に放逐せんとして、殆ど汝をして國を去らしめんとせり。² 然りとすれば彼等は汝が去れる後、暫時の間此世に残り得たりしならんき。是くの如きは汝以前に遣はしたる吾が豫言者に對する慣例にして、汝は此の慣例に如何なる変更もなきことを知らんき。

（1）此の一段の諸節がメヅカ啓示なるか又はメヂナ啓示なるかによつて、此の一節もまた解釈を異にす。若しメヅカ啓示

とすれば『彼等』とはクライシユ族の有力者を指し、彼等が妥協をマホメットに提議し、彼が之に應ぜんとしたることを言ふ。例へば、若しマホメットが彼等の拜する神々を併せ拜するならば、吾等もアルラーハを拜せんと言ひ、又は其の宣教を止めなば富と権力とを與へんと提議せるが如し。予は此の解釈を採る。但し他の註訳家例へばザマクシヤリは第七六―八二節を以てメチナ啓示となし、『彼等』とはタイフに占拠せるサキーフ *Thaqif* 族を指せりとなす。遷都九年マホメットがタイフを降服せしめたる時、條約締結に際して彼等は種々なる條約を提出し、殊に禮拜中の『叩首』を除かんことを求めたる時、マホメットは暫く黙然たりしが、侍立せるウマルが劍を抜いて彼等を威嚇し、次でマホメットも之を拒めりと傳へらる。シュブレンガも同様に解釈し、最後の一句を『其時一友ありて汝を責めたり』と訳す。一友とはウマルを指す。(2) 若しメッカ啓示とすればメッカ有力者のマホメット追放計画を指す。予は此の解釈を採る。但しメチナ啓示とする者は、此節の『彼等』を以てメチナ猶太人となし、マホメットのメチナに於ける擡頭を欣ばざりし彼等が、彼に向つてシリアは豫言者の國なりとて其のシリア行を勧めたる時、彼は之を以て善意の助言となし、一旦メチナを出立せしが、途上彼等の奸策に氣付き、一日にしてまたメチナに歸來せることを指せるものなりとす。

太陽の沈む時より夜の黒闇に至るまでの間に禮拜を行ひ、並に黎明に古蘭を讀誦せよ。げに黎明の讀誦は常に(諸天使に)照覽せらるる。また禮拜のために夜間の一部を眠らざることは汝の功德となる。恐らく主は汝を榮耀の地位に登らしめん。

言へ『主よ、吾をして正しく入り、正しく出でしめ、吾を助くる力を汝より賜へ』と云　言へ
『真理来り、虚偽消えたり。げに虚偽は消ゆべし』と云

(1) 此の一節は無事にメッカを脱出し、快くメヂナに迎へられんこと、並に途上の困難に対して加護を賜はらんことを求むる祈禱と思はる。但し『入る』とは墓に入ること、『出づる』とは復活を意味すとする解釈もあり。(2) 遷都八年、マホメットがメッカを征服し、方殿の四周に安置せられたる諸神像がつきつきに破毀せられ往くを目撃しながら、マホメットは此の一節を高誦せりと傳へらる。

わが降せる古蘭は、信者のためには医療にして且慈悲なれども、そは唯だ不信者の破滅を増すのみなるべし云　われ幸福を人に授くれば、彼は背き去りて他に往き、災難彼を襲へば常に絶望す云　言へ『各人皆な己れの流儀に従つて行ふ。されどアルラーハは最も正しく導かれたる者の誰なるかを熟知す』と云

彼等¹は靈²について汝に問ふ。言へ『靈は吾主の命令によつて来る。汝等は之について些少の知識を與へらるるにすぎず』と云　吾若し欲しなば、わが汝に默示せるものを撤回するを得べし。其時

汝は吾に對して如何なる守護者をも有たざるべし矣 唯だ汝の主が慈悲を垂るる場合を除く。げに汝に對する彼の慈悲は廣大なり矣

【1】此等の三節は、猶太人の學者がメッカ市民を使喚して三個の問題をマホメットに提出せしめたる時の第三問に對する啓示とせらる。第一問は所謂『洞窟の人々』について、第二問はツールカルナインについての質問にして、之に關する啓示は共に次の第十八章に在り。(2)此処の『靈石』の意味については異説あり、或は之を以てガブリエルを指すとなし、或は『啓示』の意味なりとす。予は猶太人がメッカ市民をして靈魂とは何ぞやとマホメットに質問せしめたりとの傳承に従ひ、之を一般に人間の靈魂を意味するものと解す。

言へ『設ひ人間と幽鬼と力を合せ、此の古蘭に類するものを作らんとして互に相輔くるとも、彼等断じて之に類するものを作るを得ず』と矣 吾は此の古蘭の中に一切の比喻を人々のために挙示せるも、人々の多くは唯だ不信のために一切を拒否す矣 彼等曰く『汝が吾等のために大地より井泉を湧出せしむるまで矣 又は汝が棗椰子園並に葡萄園の所有者となりて、河川を其中に流れしむるまで矣 又は汝が言へる如く蒼穹断片となりて吾等の上に落つるまで、又はアルラーハ並に諸天使を吾等の面前に伴ひ來るまで矣 又は汝が黄金の家を有ち、又は汝が天上に昇るまでは、吾等断じて汝を信ぜず、また吾等が讀み得る經典を齎し歸るに非ずば、汝の昇天をも信ぜざるべし』と。

言へ『吾主を讃へよ、吾は唯だ使者として遣はされたる一個の人間にすぎざるに非ずや』と云

嚮導が彼等に降されたる時、彼等の之を信すること妨ぐるものは、彼等が『アルラーハは使者として人間を遣はせり』と言ふことにすぎず云 言へ『若し悠然として地上を往来する天使ありとすれば、吾は天上より天使を使者として彼等に遣はせるならん』と云 言へ『アルラーハは吾と汝等との証人たるに足る。げにアルラーハは其の僕等の能知者・能見者なり』と云

アルラーハが導く者は、正しく導かるる人なり。アルラーハが迷はしむる者は、汝は彼の外に彼等の愛護者を求め得ざるべし。復活の日に於て、吾必ず彼等を召集して其面を伏せしめん。彼等は盲者・啞者・聾者なり。その居処は地獄なり。而して獄火熄えんとする毎に、吾は其の烈焰を加ふべし云 此れ彼等わが休徴を信ぜず、『吾等一旦骨と塵とに歸したる後、また新たなる生者として甦らしむることあるべきか』と言へるに對する応報なり云 彼等は天地を創造せるアルラーハが、能く之に類するものを創造し得ることを知らざるか。彼は彼等のために疑ふべからざる時期を定めたり。されど不義者は唯だ不信のために一切を拒否す云

言へ『設ひ吾主の慈悲の宝庫が汝等の掌裡にありとも、汝等は費すことを恐れて堅く之を握ら

ん。げに人間は吝嗇なり』と二〇〇

げに吾は証據としてモーゼに九つの休徴¹を與へたり。イスラエルの兒等に此事を問へ。モーゼ彼等に來り、ファラオが彼に向つて是く言へる時を念へ『モーゼよ、げに吾は汝を憑かれたる者となす』と二〇一 彼曰く『汝等は此等の明瞭なる休徴を降せる者が、天地の主²に外ならざることを知れるなり。ファラオよ、げに吾は汝を淪喪者となす』と二〇二 かくてファラオは彼等を國外に逐はんとせり。されど吾は彼並に従へる者を悉く溺れしめたり³

【一】第七章第一三節に挙げられたる七休徴に、抛ちて蛇となれる杖及び純白に輝けるモーゼの手を加へて九となす。

われ其後イスラエルの兒等に告げて曰く『此國に住め。されど末世の約束來る時には、吾は汝等を諸國より集められたる一群として召喚せん』¹と二〇四

【一】此の一句は學者によつて解釈を異にするも、予はピクトホールの説によれり。猶太人が其の不義のために故國を失ひて全地に分散すべしとの豫言なり。

吾は眞理を以て古蘭を降し、古蘭は眞理によつて降れり。而して吾は唯だ吉報傳達者並に警告者

として汝を遣はしたるのみ^三。そは汝をして徐々に人々に向つて復誦せしめんがために、章節に分たれたる古蘭にして、吾は默示によつて之を降したり^四。言へ『汝等之を信するも又信ぜざるも、此の以前に知識を賜はれる者は、其の彼等に復誦せらるるを聞くや、^{おちて}面を伏せて叩首して曰く^五。『吾等の主を讃へよ、げに吾等の主の約束は果たされたり』』と^六。彼等は面を伏せて泣く。そは彼等をして彌が上に謙虚ならしむ』と^七。

言へ『アルラーハに祈れ、又は大^{ラハマン}悲者に祈れ^一。いづれにても汝等の欲する名にて喚べ。彼には諸の最勝なる名號あり』と。礼拜に当りて高声なる勿れ。また餘りに低声なる勿れ、兩者の間に中庸を求めよ^二。言へ『アルラーハを讃へよ、彼に子なく、權威の分担者なく、屈辱に対する一守護者もなし』と。彼の偉大を讃へて之を尊崇せよ^三。

(一)メッカ市民はマホメットが礼拜に際して『アルラーハよ、大^{ラハマン}悲者よ Ya Allah! Ya Rahman!』と唱ふるを聞き、之を別個の神と考へたり。而して彼等は其の未知の神なるを以て痛く大^{ラハマン}悲者を厭ひ、ホダーイビーヤ條約の冒頭に『大^{ラハマン}悲者・大慈者アルラーハの名によりて』と書くことを拒み、マホメットをして之を單に『アルラーハの名によりて』と改むることを承諾せしめたり。第一六章第五一節は『二神を立つる勿れ』と言ふは、之を戒めたるものとせらる。

第十八 洞窟章

メッカ啓示

第一〇—二七節に、迫害を避けて洞窟に潜み、多年に亘りて眠り居たる青年のことを述ぶるに因みて洞窟章 Al-Kahf と名づけらる。多くの学者は之を以て名高きエペソの七睡人の物語を指せるものなりとす。即ち羅馬皇帝デシウスのために迫害せられたるエペソの良家の七青年が、基督教の信仰を護るために身を洞窟の中に潜むるや、之を聞知せる皇帝は、巨岩を以て洞口を封じ、また出づることを得ざらしめたり。然るに七青年は洞内に於て深き睡眠に陥り、其後百有餘年を経てセオドシウス皇帝の時代に初めて目覚めたりといふ傳説なり。本章は一般にメッカ中期の啓示とせらるるも、遷都以後のもの並に遷都以後に訂正を加へられたるものあること前諸章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アルラーハ¹を讚へよ、彼は其僕に經典を降したり。其中には如何なる歪曲もなく、眞直なり。

そは（不信者には）彼よりの痛刑あるべしとの警告を與へ、また信じて善事を行ふ者には善賞あり²。彼等は長久に其中に住むべしとの吉報を傳へ、またアルラーハに子ありと言ふ者に警告を與へんがためなり。彼等並に彼等の祖先は、此事について如何なる知識もなし。而も彼等の口よ

り出づる此言は実に重大なり。彼等の言ふことは虚偽に外ならず

(1) 本章の序言たる此の一段はメヂナ啓示と見るべし。(2) イエスを神子なりとする基督教徒を指す。

彼等若し此の消息¹を信ぜずば、恐らく汝は彼等のために心を悩まして身を殺すに至らん²。けに吾は地上一切のものを以て大地の裝飾となし、之を以て彼等を試み、最善の事を行ふは誰なるかを知らんとす³。されど見よ、吾はやがて地上一切のものを不毛の土に帰せしめん⁴。

【1】原語 Hadis。新しき報道の意味あり。此処にてはマホメットに降されたる新して啓示を指す。古蘭と相並ぶ回教の經典にして、マホメットの言行を記録せるものも Hadis と名づけらる。(2) 大地を飾るとは物質的文化を燦然たらしむること。此事のために人間は地上現世の生活に執着す。

汝は洞窟の人々とラクーム¹とを以て、わが休徴のうちの驚嘆すべきものとするか²。一群の青年あり、遁げて洞窟の中に潜み、祈りて曰く『主よ、汝の慈悲を吾等に垂れ、善処の道を吾等のために講ぜよ』と³。かくて吾は洞窟内に於て、多年に亙りて彼等の耳を封じたり²。然る後に吾は彼等を喚び覚まし、両者の³いづれが最も善く彼等の滞留せる期間を計算するかを知らんとせり³。

(1) ラキーム Ar-Raqim の意味不明なり。或は洞窟所在の地名なりとし、或は七青年に伴へる犬の名なりとし、或は其上に七青年の姓名が刻まれ居たる石板又は銅板なりとす。(2) 原文は『耳を打てり』。或は眠らしむる意味なりとし、或は聾者とすること即ち外界の消息を絶たしむる意味なりとす。(3) 両者の意味不明なり。或は猶太人と基督教徒とを指すと言ひ、或は七青年と彼等が覚醒せる時に会へる人々を指すと言ふ。

吾は眞実を示すために彼等の消息を汝に語らん。げに彼等は其主を信ずる青年なりしかば、吾はいやが上にも之を導き、其心を堅固ならしめたり。其時彼等起立して曰く『吾等の主は天地の主なり。吾等は彼を舍きて如何なる神にも祈らず。若し祈らば吾等は言語道断のことを口にする者なり』。然るに吾等の民は彼を舍きて他の神々を拜するも、その權威を認むべき如何なる明証をも示さず。凡そアルラーハについて虚構するよりも甚だしき不義者あるか。いま汝等既に彼等並に彼等がアルラーハ以外に拜するものを棄てたれば、汝等隠れて洞窟の中に居らん。主は其の慈悲を汝等に垂れ、汝等のために善処の道を講ずべし』と云

其時彼等洞中の廣場に居たりしが、見よ、日は其の登るに當りて洞窟より右方に傾き、其の沈むに當りて彼等を過ぎて左方に傾きたり。これアルラーハの休徴の一なり。アルラーハの導く者は導

かれ、彼が迷はしむる者には、汝は之を導く一愛護者をも求め得ざるべし。彼等は眠りつつありしも、われ彼等を輾轉反側せしめ、また彼等の犬は其の前脚を伸べて洞口に横はりしかば、人は彼等を覚めたりと思へるなるべし。人若し突如彼等を見なば、忽ち踵を回して逃げ、彼等を恐るる心に満たされしならん。

かくてわれ彼等を喚び覺まし、互に相問はしめたり。彼等のうちの一発言者曰く『汝等が此処に滞留せるは幾何時ぞ』と。彼等曰く『吾等は一日又は半日滞留せり』と。他の者曰く『汝等の滞留せるは幾何時なるかを最も善く知るは汝等の主なり。此の銀貨を携へて汝等の一人を市中に遣はし、市中の最も清潔なる物を販ぐ者を求め、其処より汝等の糧餉を齎し歸らしめよ。彼を慎重に振舞はしめ、何人にも汝等のことを知らしむる勿れ。彼等若し汝等を知らば、必ず石を以て汝等を撃たんとすべし。然らずば汝等を彼等の信仰に復らしめんとすべし。然らば汝等永久に榮えざるべし』と言

(1) 市とはタルソのことなりとせらる。

是くの如くにして吾は彼等の消息を其民に知らしめたり。そは之によつてアルラーハの約束の眞

実なることを彼等に知らしめ、且末日の疑ひなきことを知らしめんがためなりき。其時彼等此の事件について互に論じて曰く『彼等の上^上に一字を建てん。彼等の主は最も善く彼等のことを知る』と。而して事件を左右せる者曰く『吾等は一^一禮拜堂^{禮拜堂}を彼等の上^上に建立せん』と三

(1) 此の一段の意味は下の如し。七青年の一人が食物を購ふために市中に携へ行きたる銀貨は古き通貨なりしかば、之を受取れる者が彼を拉して領主の許に伴ひ往きたり。領主は基督教徒なりしを以て、青年の物語を聞くや、人を彼と共に洞窟に遣はし、彼等と語らしめたり。然る後に七青年は再び眠りに落ち、遂に死去せしかば、領主は彼等の遺骸を此処に葬り、其上に一^一禮拜堂^{禮拜堂}を建立せしめたりと。

或は曰く『三人なり、犬を加へて四なり』¹と。或はまた^{また}妄^妄に臆測して『五人なり、犬を加へて六』²と言ひ、また『七人なり、犬を加へて八』³と言ふ。言へ『吾主は最も善く其数を知る。彼等を知る者は稀なり。されば明白なる論議を以てするに非ずば、之に関して論議する勿れ。而して彼等の何人にも之に関して問ふ勿れ』⁴と三

(1) 後世の基督教徒が、洞中の青年の人数について種々なる意見を述ぶることを言ふ。(2) この『彼等』とは基督教徒を指す。

『アルラーハ若し欲しなば』と附加せずしては、事の何たるを問はず、決して『吾は明日之を爲さん』と言ふこと勿れ¹。汝若し之を忘れなば、汝の主を念じて言へ『恐らく主は吾を導きて、之よりも一層真相に近き消息を吾に知らしめん』と言²。さて彼等が洞中に滞留せるは三百有九年なり³。言へ『アルラーハは最も善く彼等が如何に長く滞留せるかを知る。彼は天地の不可見のものを知る。如何に彼は能く聞き、能く見ることぞ』と。彼等は彼の外に如何なる愛護者もなく、また彼は何者をも其の審判に與らしめず⁴。

(1) 猶太人に使囓せられたる不信者が、マホメットに向つて洞中に眠れる七青年のことを問へる時、彼は『明日天啓を得て之に答へん』と言ひたり。されど其時彼は『アルラーハ若し欲しなば』と附言すべかりしを、之を爲さざりしは、自ら負へる者として訓誡を受けたるなりとせらる。(2) 皇帝デシウスの時に眠り、皇帝セオドシウスの時に覺めたりとせらる。

其間二百年に満たず。

汝の主の經典のうち汝に默示せられたるものを讀誦せよ。何者も彼の言を変ふるを得ず¹。また汝は彼の外に如何なる避難処をも有せず²。其主の慈願を求めて朝な夕な彼に祈る者と共に耐え忍べ。現世の榮耀を希ひて、汝の目を彼等より逸らす勿れ²。われ其心に吾を念ずることを懈らしめた

る者、また専ら私欲を追ひて放埒なる者に従ふ勿れ云 言へ『真理は汝等の主より出づ。されば欲する者を信ぜしめ、欲する者を信ぜざらしめよ』と。げに吾は黒煙が幔幕の如く彼等を包む火獄を不信者のために備へたり。彼等水を求むる時、吾ば彼等の面を焦く溶銅の如き水を注がん。げに惡き飲みものなり、げに惡き臥床なり云 げに信じて善事を行ふ者、げに吾は決して善行者の報賞を空しからしめず云 此等のためにはエデンの園あり、河川其下に流る。彼等園中にあつて黄金の腕輪に飾られ、精絹鏤錦の緑衣を纏ひ、等しく宝座の上に倚らん。げに佳き住処なり、げに佳き臥床なり云

(1) 此言はメッカ市民中に古蘭の言句の変更を求めたる者ありしことを示す。(2) 貧しき信者を見棄つる勿れ、富者の榮華に心を奪はるる勿れの意味。(3) 此の不信者とはマホメットに向つて貧賤なる信者の追放を求めたるウマイヤ・イブン・カルフ *Umayya ibn Khalf* を指すとせらる。

彼等のために一比喻を述べよ。二人あり、吾は其の一人に二葡萄園を與へ、棗椰子樹にて兩園を囲み、兩者の間の空地を耕圃とせり云 兩園各果実を結びて良く成熟せり。而して吾は更に兩園の間に河を流れしめられたれば云 彼多く果実を獲たり。かくて彼は、其友に語れる時、『吾は富に於て

汝に優り、眷族も汝より強し』と言へり。彼は邪よこしまなる心を抱きて葡萄園に入れり。彼曰く『吾は断じて此園が荒廢に歸すべしと思はず。吾は復活の日が来るべしとも思はず。また設ひ吾主に歸らしめらるるとするも、必ず之に代る更に善きものを得べし』と云。其友、彼と諍ひて曰く『汝はアルラーハを信ぜざるか。彼は塵より汝を創り、次で一涓滴より創り、次で人間の姿を汝に與へたるに非ざるか。さればアルラーハ、彼こそ吾主なれ。吾は何者をも吾主に配せず。何故に汝は葡萄園に入るに當りてアルラーハのまにまに！アルラーハによる外に如何なる力もなし』と言はざりしか。設ひ汝は吾を以て財宝と子女とに於て己れより劣れるものとするも。吾主は汝の葡萄園に勝るものを吾に賜ふやも知るべからず。また天上より電火を汝の園に降し、一朝にして之を不毛平滑の丘たらしむるやも知るべからず。又は園内の水、深く地底に浸透し去りて、また其痕を尋ね得ざるに至るやも知るべからず』と云。果して彼の果樹園は天災に襲はれ、葡萄は皆な其架たなの上うへに倒れたり。翌朝彼は其爲に費せるものを想ひ、双手を反轉して痛嘆して曰く『吁、吾若し吾主に何者をも配せざりしならんには！』と云。彼はアルラーハ以外に如何なる援軍もなく、また自ら己れを護る力もなかりしなり。是くの如き時、加護は唯だ眞実者アルラーハの手にのみあり。彼は最勝の報賞者にしてまた最勝の善果を賜ふ者なり。

また現世の生活の比喩を彼等に述べよ。そは吾が天より降す水の如し。地上の草木、之によつて一旦は繁茂するも、やがて枯稿して風に吹散らさるる破片となる。げにアルラーハは全能なり。財宝と子女とは現世の裝飾なり。されど永く残る善行こそ、アルラーハの目には報賞として最善に、希望として最上なるものなれ。

われ群山を動かす日を念へ。其日人は大地が平坦となるを見ん。其日吾は一齊に彼等を集めて、全く遺類なからしめん。彼等整列して汝の主の前に立たしめられ（是く言はれん）『げにいま汝等は吾が最初に汝等を創れる時の如くにして吾前に来れり。然らず、汝等は吾は決して約束を實行せずと考へたるなり』と。而して書冊は（各人の手に）渡され、一切の悪事を行へる者は其中に記されたること対して戦々競々たるを見ん。彼等は言はん『吁、こは何たる書冊ぞ、大小枚挙して餘すところなからんとは』と。彼等は既往に於て己れの爲せることが、歴然として眼前にあるを見ん。而して汝の主は何人をも不当に遇せず。

われ諸天使に向つて『アダムに叩首せよ』と言へる時を念へ。其時イブリースの外は彼等皆な叩

したり。唯だ彼のみは幽鬼の一にして、其主の命令に背きたり。然るに何事ぞ、サタン並に其の子孫は汝等を敵とするに拘らず、汝等吾を舍きて彼等を己れの愛護者とせんとするか。不義者にとりて惡き交換なるかな吾。吾は天地の創造に彼等を參與せしめず、また彼等自身の創造にも參與せしめざりき。吾は人を迷はしむる者を吾が補佐とする者に非ず。

復活の日に於て主は言はん『汝等が吾に配せる神々を喚べ』と。彼等喚ぶも彼等は応へざるべし。而して吾は彼等の間に淪落の谷を置かん。其時作惡者は火獄を目睹し、己れの之に墮つべきことを知るも、之より遁るる途なきを見ん。

げに吾はこの古蘭の中に各種の比喻を人々のために反復せり。而も人間は唯是れ爭論を事とす。いまや嚮導既に彼等に至れり。彼等若し既往の民の先例が彼等をも襲ふことを望み、又は懲罰の目前に来ることを望むに非ずば、何者も人の信仰に入り、また其主の宥恕を求むることを妨ぐるを得ず。吾は唯だ吉報傳達者並に警告者として諸使者を遣はすのみ。然るに信ぜざる者は眞理を論破せんがために空言を以て相争ひ、わが休徴並に彼等に與へられたる訓誡を嘲笑す。其主の休徴によつて訓誡を與へられながら之に背き、其手が豫め送れるものを忘るる者より甚だしき作惡者あるか。見よ、吾は彼等をして之を曉らしめざらんがために其心を被幕にて覆ひ、其耳に錘を入れた

り。されば設ひ汝が彼等を招きて之を導かんとするも、彼等は決して導かれざるべし。汝の主は宥恕者・仁慈者なり。彼若し彼等の積悪を罰せんと欲したりせば、彼は必ず懲罰を急ぎしなるべし。然らず、彼等には既に定められたる時期あり、而して彼等はアルラーハの外に如何なる避難処もなきことを知らん。吾は諸都府が不義を行へる時、之を滅ぼしたり。而して吾は豫め其の絶滅の時を定めたり。

モーゼが其の従者に向つて是く言へる時を念へ、『吾は両河¹の合流する処に達するまでは進むことを止めざるべし。然らずは永年の旅をなさん』とき、彼等両河の合流する処に達せる時、携へ来りし魚のことを忘れければ、魚は海に入りて泳ぎ去れり。彼等其処より進み往ける時、モーゼ其の従者を顧みて曰く、『吾等の朝食を持ち来れ。げに吾等此旅にて疲れたり』とき、彼曰く、『汝は知らざるか、吾等岩にて憩へる時、吾は魚を忘れたり。之を汝に告ぐることを忘れしめたるは、げにサタンに非ずして誰ぞ。魚は海に泳ぎ去れり。世にも不可思議なることかな』とき、彼曰く、『是こそ吾等が求めたるものなれ』²と。かくて彼等は踵を回し、己れの足跡を踏みて帰途に就けり。

(1) 両河又は両海については學者の間に異説あれど、白ナイル・青ナイル兩河を指せるものとすべし。傳承によればモー

せは知識を求めて埃及よりアビシニアに至らんとせりと言はる。(2)此の従者はヨシユアなりとせらる。(3)モーゼは先に魚を失ふの日は師を得る日なりとの黙示を興へられたりと言はる。

彼等途に吾僕の一人¹に会へり。彼は吾が慈悲に浴し、吾が知識を賜はれる者なりと云々。モーゼ彼に向つて曰く『汝に教へられたるもののうちの正しき知識を学ぶために、われ汝に師事するを得べきか』と云々。彼曰く『げに汝は吾に師事するも能く忍耐せざるべしと云々。汝が周匝なる知識を有せざることに於いて、如何にして汝は忍耐し得るか』と云々。彼曰く『アルラーハ若し欲しなば、汝は吾が能く忍ぶ者なることを知らん。吾は一切の事に於て汝に背かざるべし』と云々。彼曰く『汝若し吾に師事しなば、われ之について語り初むるでは、何事についても吾に問ふこと勿れ』と云々。

【1】此の豫言者はアルキズル Al Khizr のこととせらる。キズルとは青春の意味にして、彼が生命の泉を発見し、之を飲みて永生を得たるが故に此名ありとせらる。之を旧約のエリアと同一人とする学者多し。

彼等往きて舟に乗れる時、彼は舟に孔を穿ちたり。モーゼ曰く『汝は人を溺れしめんとして孔を穿つか。汝は奇怪なる事をなせり』と云々。彼曰く『吾は汝が能く吾に耐えざるべしと告げざりし

か』とき 彼曰く『吾が失念を責むる勿れ、また難きを吾に命ずる勿れ』とき 彼等道を進みて一人の少年と遇へる時、彼は之を殺したり。モーゼ曰く『汝は流血の罪なき者を殺したり。げに汝は前代表聞のことを爲せり』とき 彼曰く『吾は汝が能く吾に耐えざるべしと告げざりしか』とき

彼曰く『向後吾再び何事かを汝に問はば、最早吾を伴ふ勿れ。いまは吾が陳謝を容れよ』とき

彼等更に往きて一都府に至り、食を其民に求めしに、其民は彼等を歡待することを拒みたり。其時都内に將に頽れんとする塀壁あるを見て、彼は之を修繕せり。モーゼ曰く『汝若し欲しなば、之に対する報酬を得べし』とき 彼曰く『是れ吾と汝との袂別たるべし。されど吾は汝が能く耐え得ざりし事の真相を明かにすべし』 先づ舟について言へば、かの舟は海上に勞苦する貧人の有なり。吾之を毀たんとせるは、彼等の背後に一切の舟を強制徵用せんとする國王あるが故なり。少年について言へば、彼の両親は信者なるが、吾は彼が其の背逆と不信との故を以て累を両親に及ぼさんことを恐れたるなり。されば吾は彼等の主が、純潔に於て彼に勝り、孝順にして親切なる子息を彼等に賜はらんことを祈れり。塀壁について言へば、そは都内の二孤兒の有にして、其下に彼等に属する財宝あり、且彼等の父は義しき者なり。主は彼等が成年に達し、主よりの恩惠として其の財宝を取り出ださんことを望みたり。されば吾が之を修繕せるは決して私意に出でたるに非

ず。是くの如きは汝が忍耐し得ざりし事柄の真相なり』と云

彼等はゾールカルナインについて汝に問はん¹。言へ『吾は彼について若干の事蹟を汝等に語ら

ん』と云 げに吾は彼が權勢を地上に確立し、一切を成就する道を彼に與へたり云 而して彼は其

道を進みたり云 彼は太陽の没する処に達し、その泥海²に沈むを見、且海浜に民の住むを見たり。

吾曰く『ゾールカルナインよ、汝は彼等を膺懲する可、また之を好遇するも可なり』と云 彼曰く

『不義を行ふ者は吾先づ之を罰し、然る後に之を其主に歸らしむべし。而して主は未聞の懲罰を以

て之を罰せん云 信じて善事を行ふ者は善報を得べし。吾は容易に行ひ得ることを彼等に命ぜん』

と云

(1) ゾールカルナイン Zū'l-Qarnain は『双角者』の意味にして、多くの学者によつてアレキサンダー大王のこととせらる。双角といふは或は東西に遠征を試みたることに由来すとなし、或は希臘・波斯の兩國に君臨せるがためなりとし、或は彼がジュピターとアムモンの子として双角を有する姿を以て其の貨幣に鑄出せられ居るに由来すとなす。またバイザー³其他の註釈家は、之を以てアブラハムの時代に希臘・波斯兩國に君臨せるサカンドル・アルルーミー Sakandar ar-Rūmi と呼べる一國王なりとす。而してムمامマッド・アリは彼を以て『メディア並に波斯の大王』なりしダリウス一世のこととな

せるが、予は彼の説に従へり。ダリウス一世は最も熱心なるゾロアスターの信者として知らる。旧約ダニエル書第八章参照。(2) 恐らく黒海を指す。原語は「黒き泥を含む多量の水」なれば、直ちに「黒海」と訳し得べし。

次で彼は他の道を進みたり¹。彼は太陽の登る処に達し、その一個の民を照らすを見たり¹。吾は此民と太陽との間に如何なる遮蔽をも設けざり²。是れ真相なり。また吾はわが知識によりて彼が有せる兵力をも熟知せり²。

(1) ダリウス一世が西方黒海に達したる後、踵を回して東方に向ひ、裏海の岸に到り、海浜の沙漠地帯に住む原始民族を見たるなるべし。(2) 暑熱を防ぐ山もなく樹もなき沙漠地帯なることを示す。

次で彼は更に他の道を進みたり¹。彼は両山脈の間に達し、山の此方に殆ど言語を解せざる一個の民あるを見たり¹。彼等曰く「ツールカルナインよ、げにヤーエジジとマーエジジとは此國を攪亂す²。されば吾等は汝に貢賦を納め、汝は吾等と彼等との間に防壁を築くべきか³」と。彼曰く「吾主が吾に授けたる力は貢賦よりも善し。されど力役を以て吾を助けよ。吾は汝等と彼等との間に防壁を築かん⁴。さらば吾に鐵塊を持ち来れ⁵」と。かくて彼は鐵塊を以て両山脈の山側の空地を

満たし、然る後に彼等に向つて『輔よびごにて之を吹け』と命じたり。而して彼之を火となせる時、彼曰く『溶銅を吾に持ち来れ。吾之を其上に注がん』と云。かくて敵は之に攀ぢ登るを得ず、又之を穿つを得ざるに至れり云。彼曰く『これ吾主の垂れたる恩寵なり。されど吾主の約束が実現せらるる日、彼は之を変じて塵埃たらしめん。而して吾主の約束は眞実なり』と云。

(1) 両山脈とはアルメニア及びアゼルバイジャンの山脈とすべし。山脈の北には獷猛なるスキチア人居住し、常に南下して山陽の民を冒せり。(2) ヤージュージ・マージュージ Yajuj wa Majuj は所謂 Gog. Magog として、恐らくスキチア人のことを指す。(3) 波斯タゲスタン州のダルバンド Darband に『アレキサンダー長城』と呼ばれし防壁ありしこと、回教徒の史学者並に地理学者の著書に見ゆ。東西五十哩、高さ約三丈、厚さ約一丈、処々に鉄門あり、以て波斯の北境を堅めたること、宛も萬里長城が朔北胡人に対して禹城を護れるが如し。

此日¹吾は激浪の如く彼等を亂闘せしむべし。其時喇叭は吹かれ、吾は一齊に彼等を召集せん云。此日吾は不信者の眼前に地獄を現出せしめん云。げに彼等は其目を蔽はれて吾が訓誡を見ず、其耳もまた聽くことを得ざりし者なり云。

(1) 此の一段は恐らく第四九節に続くものなり。

信ぜざる者は、吾を舍きて吾が僕等¹を己れの愛護者となし得べしとするか。げに吾は是くの如き不信者を迎ふるために地獄を備へたり²。

(1) 恐らく天使を意味す。

言へ『われ汝等に告ぐべきか、其の行へる事によつて最も多く失ふ者は誰なるか³。自ら巧みに行へりと考ふるも、其の努力は現世に於て消失し去る者は誰なるかを』と⁴。そは其主の休徴を信ぜず、彼との会見を信ぜざる者なり。彼等の労作は空無に帰す。されば吾は復活の日に彼等のために秤を立てざるべし⁵。これ彼等に対する応報なり。彼等が信仰に入らず、わが休徴と諸使者とを嘲笑せることに対する応報は即ち地獄なり⁶。

げに信じて善事を行ふ者には、之を迎ふるパラダイスの園あり¹。彼等長久に其中に住み、決して他に遷ることを望まざるべし²。言へ『設ひ海水が吾主の言を書くための墨汁なりとも、吾主の言未だ盡さざるに海水必ず涸れん、設ひ吾更に海を創りて之を補ふとも』と³。

【1】パラダイスの原語 *Firdaus* は波斯語なり。此の語が多くの國々に採用せられて『楽土』を表現するために用ゐらる。古蘭に於ける楽園の叙述は、單に此語のみならず、多く波斯語より取れり。さればロッドウェルは、マホメットの楽園

は豪華なる波斯貴人の生活より多くの暗示を興へられたるならんと忖度す。

言へ『吾は汝等と等しく一個の人間にすぎず。吾主は汝等の神が唯一の神なることを吾に默示せり。苟くも其主に会はんことを希ふ者には善事を行はしめよ。彼をして何者をも其主と共に拜せしむる勿れ』と云

第十九 マリア 章

メッカ啓示

第一六節以下にマリアの事を述ぶるに因みてマリア章 Maryam と名づけらる。開教五年、メッカ市民の迫害に苦しめる信者の一團十一名が、マホメットの勸告に従ひて難を基督教國アビシニアに避けたりしが、翌開教六年には其他の信者また彼等の後を追ひ、移住者の数は百を超ゆるに至れり。於是メッカは使節をアビシニアに派して彼等の引渡を要求したりしも、アビシニア國王は之に応ぜざりき。而して國王が彼等に対して是くの如き好意を示したるは、移住者の一人にしてマホメットの従弟たるジャファル Jafar ibn Abu Talib が、國王の前に本章を誦誦して、回教の信仰の如何なるものなるかを了解せしめたるによると傳承せらる。従つて本章はメッカ初期の啓示とせらるるも、ジャファルが復誦せるものは決して現在の本章の如き形態のものに非ざるべし。現在の本章はメデナ遷都以後に訂正せられたりと思はるる諸節、並に遷都以後の啓示と見らるるものあること、前諸章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

カーフ・ハア・ヤア・アイン・サードー 汝の主が其僕ザカリアに垂れたる慈悲についての説示ニ
ザカリアが密かに其主に祈れる時を念へニ 彼曰く『主よ、力は吾骨より去り、吾頭は白髪に輝

く。されど主よ、吾は汝に祈りて未だ曾て靈驗なきことなかりき^四。げに吾は吾亡き後の吾が近親を恐る^一。而して吾妻には子なし。されば汝より一人の相続者を吾に賜へ^五。主よ、彼をして吾を継ぎ、またヤコブの家を繼がしめ、且汝の意に適ふ者たらしめよ』と^六。曰く『ザカリアよ、われ其名をヨハネと呼ぶ一童子の吉報を汝に傳へん。吾は未だ曾て何人にも此名を與へざりき^二』^七。彼曰く『主よ、われ如何にして一童子を得べきか。吾妻は不妊にして、吾は既に高齡に達したり』^八。彼曰く『さもあるべし、されど汝の主は、吾は曾て汝が無かりし時に汝を創りたり。さればそは吾にとりて易々たることなり』^九。彼曰く『主よ、然らば吾に一休徴を示せ』。彼曰く『汝は健全の身にてありながら、三日の間決して物言ふことを得ざるべし。これ汝への休徴なり』と^{一〇}。かくて彼は神殿より出で来り、アルラーハを讚へよと朝な夕な合図せり^二。

(一) 近親とはザカリアの兄弟の子等にして悪人なりしかば、彼は己れの死後彼等が眞実の教に背かんことを恐れたるなり。(二) 新約路加傳第一章第六一節参照。(三) 口にて物言ひ得ざりしが故に、何等かの方法にて暗示せるなり。

『ヨハネよ、堅く經典を護持せよ^一。而して吾は彼尙ほ幼かりし時に智慧を與へ^三。また吾が慈悲と純潔とを與へたり。彼は能く其身を護り^三。父母に孝順にして、高慢背逆に非ざりき^四。その

誕生の日、長逝の日、並に復活の日に於て、平安彼の上にあれ^五

(1) ヨハネが誕生の時に降されたる主の言なり。

經典の中にマリアのことを説示せよ。其時マリア家人を離れて東方に退き^一己れと彼等との間に幔幕を垂れたり。其時われ吾靈を彼女に遣はせしが、靈は美しき人間の姿をとりて彼女に現れたり^モ。彼女曰く『吾は汝に対して大悲者の加護を求む。汝若し彼を恐れなば(吾を侵すことなからん)』^六。彼曰く『吾は純潔なる一童子を授けんがために来れる汝の主よりの使者に外ならず』^元。彼女曰く『未だ曾て如何なる男子も吾に触れず、また吾は商女あそびめにも非ざるに、われ如何にして童子を得べきぞ』^三。彼曰く『さもあるべし。されど汝の主は『そは吾にとりて易々たることなり』^と言へり。そはわれ其の童子を以て人々への休徴となし、且吾よりの慈悲たらしめんがためにして、事は既に決せられたるなり』^{と三}。かくて彼女は彼を孕みければ、彼と共に遠隔の地に退きたり^三

(1) 東方とは神殿の東部にて、祈禱のために参籠し、淨身のために幔幕を垂れて人目を避けたるなりとせらる。また東方とは私人の家の東方に面せる一室を指すとも言はる。傳承によればマリアは神殿に奉仕し、殿内に己れの一室を有せしが、既に女子となりてよりは月経時刻る毎に伯父ザカリアの家に退き、その終るを待ちて神殿に歸るを常とせり。天使がマリア

を訪へるは是くの如き事情の下にザガリアの家に在り、淨身のために幔を垂れ居たる時のこととせらる。(3) 吾靈とは天使ガブリエルのこととせらる。

マリア分娩の苦痛のために棗椰子樹の幹を抱きたり。彼女曰く『吁、かかることの前に吾は亡き者となり、世に忘れ果てられたる者となりけんものを』と云。時に下方より彼女を呼べる者あり、¹曰く『憂ふる勿れ、主は汝の脚下に細流を流れしむ』また棗椰子樹を己れの方に揺り動かせ、然らば熟せる果実汝の上に落ちん云。食ひ且飲みて目を鮮かにせよ。誰にてもあれ人間を見なば即ち言へ、²げに吾は大悲者に齋戒を誓ひたり。されば今日吾は何人とも物言はずと云。

(1) 此者は或は使ガブリエルのこととし、或は胎内の嬰兒なりとせらる。

マリア^{ミリア}嬰兒を伴ひて其民に帰り来れり。彼等曰く『マリアよ、げに汝は奇怪なることを為せりモアロンの妹よ、汝の父は悪人に非ず、汝の母は商女に非ざりしに』と云。マリア即ち其子を指せり。彼等曰く『吾等如何にして搖籃の中なる嬰兒と語るべきか』と云。嬰兒曰く『げに吾はアルラ^{シム}の僕なり。彼は經典を吾に與へ、吾を豫言者となせり云。彼は隨處に吾を祝福す。彼は吾が生くる限り礼拜を行ひ、捐課を納むべきことを命じたり。且吾母に孝順なるべきことを命じたり。彼は

吾を高慢なる者、また不幸なる者たらしめず^三 げに吾が誕生の日、長逝の日、並に復活の日に於て、平安吾上にあるべし』と^三

これマリアの子イエスなり。これ人々が疑心を抱くことの真相なり^三 アルラーハが己れの子を有つが如きことは断じてあるべからず。栄光彼の上にあれ、かれ一事を決して『有れ』と言へば即ち有り^三 げにアルラーハは吾主にして汝等の主なり。されば唯だ彼のみに事へよ。これ直き道なり^三 然るに諸派互にイエスについて争論す。信ぜざる者は禍なるかな、そは彼等偉大なる日に臨むべきが故なり^三 彼等が吾前に来る日、げに彼等は明かに聞き、明かに見ん。されど今日不義者は明白なる迷誤の中にあり^三 長嘆の日について彼等に警告せよ。彼等が閑却し、彼等が信ぜざる間に、事は決定せらるべし^三 げに大地並に地上一切のものを相続するは吾なり。彼等は皆な吾に帰らしめらる^三

(1) 第一六節より第四〇節に至る一段は、基督教徒を対象として、以前のメツカ諸節にメヂナ遷都以後に訂正加筆せるものと思はる。従つて叙上諸節に於ける『不信者』又は『彼等』は基督教徒を指せるものとすべし。此の一段の基礎となれるものが、ジャファルがアビシニア王のために復誦せる諸節たるべし。

經典の中にアブラハムのことを説示せよ。げに彼は一個の誠実者、一個の豫言者なりき。かれ
其父に向つて曰く『吾父よ、何故に汝は聞かず、見ず、且毫も汝を損益せざる者を拜するか。吾
父よ、汝に未らざる知識、げにいま吾に来れり。されば吾に従へ。吾は直き道に汝を導かん。サ
タンを拜する勿れ。げにサタンは大悲者に叛ける者なり。吾父よ、吾は大悲者の懲罰が汝に降ら
んことを恐れ、また汝がサタンの伴侶たらんことを恐る』と。彼曰く『アブラハムよ、汝は吾が
神々を拒否するか。汝若し止めずば、吾は石にて汝を撃たん。さらば長く吾より遠ざかれ』と。吾
彼曰く『平安汝の上にあれ。吾は汝のために吾主の宥恕を祈らん。げに吾主は常に仁慈なり。吾
は汝より離れ、アルラーハ以外に汝が拜する神々より離れ、唯だ吾主にのみ祈らん。吾主に祈らば
吾は不幸ならざるべし』と。かくて彼が彼等並に彼等が拜せる神々より離れたる時、吾はイサク
とヤコブとを彼に與へて、共に之を豫言者たらしめたり。而して吾が慈悲を彼等の上に垂れ、至
高の賞讃を博せしめたり。

經典の中にモーゼのことを説示せよ。げに彼は純潔にして、一個の使者、一個の豫言者なりき。吾
吾はシナイ山の右側より彼を呼びて、密議するため近く之を招ぎたり。吾はわが慈悲を彼の上
に垂れ、同じく豫言者なる兄アロンを彼に與へたり。またイシマエルのことを經典の中に説示せ

よ。げに彼は約束に忠実にして、一個の使者、一個の豫言者なりき^五。彼は礼拝と捐課とを其民に勧め、いたく其主に欣ばれたり^五。またイドリース¹のことを經典の中に説示せよ。げに彼は誠実にして、一個の豫言者なりき。吾は彼を高さ地位に登らしめたり^五。

(1) イドリース Idris は多くの学者によりて旧約のエノクと同一人とせらる。但しトリー Toriy は Idris = Esdras = Ezra として、之をエズラなりとせり。

此等の者は、アダムの子孫たる諸豫言者のうちにて、わがノアと共に運べる者、アブラハム並にイサクの子孫、並にわが選びて導ける者のうち、特にアルラーハが恩寵を垂れたる者なり。大悲者の休徴が彼等に讀誦せらるる毎に、彼等は地に伏して叩首し、流涕歔歔したり^五。然るに不良の子孫彼等の後を繼ぎ、礼拝を懈りて己れの私欲を追ふに至れり。されどやがて彼等は其の誤れるを知らん^五。但し懺悔して善事を行ふ者は然らず。彼等は必ず樂園に入るべく、決して不当に遇せらるることなし。そは大悲者が末世に於て其の僕等に約束せるエデンの園なり^五。其処にて彼等は空しき饒舌を聽かず、唯だ『平安』と言ふを聞く^五。彼等其処にて朝夕食事を供へらる^五。これ吾が僕等のうち、能く其身を護る者に嗣がしむる樂園なり¹。

(1) 第四一節以下本節に至る諸節も、メヂナ遷都以後に於て以前のメツカ諸節を訂正して現在の形態をとれるものと思はる。

吾は汝の主^に命ぜらるるに非ずは決して天より降らず。吾等以前のもの、吾等以後のもの、並に其間にある者は、悉く彼に属す。而して汝の主は決して忘却者に非ず。彼は天地並に天地間の一切のものの主なり。されば彼に事へよ、彼に事へて堅忍なれ。汝は彼と等しき者あるを知るか。

(1) 此の啓示はマホメットがガブリエルの来ること遅きを訴へたる時に降れるものとせらる。従つて『吾』とはガブリエル、吾等とは諸天使のこととせらる。

人は言ふ『何事ぞ、吾等一旦死したる後、復た甦ることあるべきか』と云。吾は曾て彼等が虚無なりし時に之を創れるなり。人は此事を忘れたるか。断じて言ふ、吾必ず彼等並にサタン等を召集せん、然る後に吾必ず彼等を地獄の周圍に密集せしめ、其膝を屈せしめん。次で吾は各派のうちより大悲者に背くこと最も甚だしかりし者を引出ださん。げに吾は火獄に於て最も燐かるるに値する者の誰なるかを熟知す。汝等一人として其処に墮ちざるはなし。これ汝等の主の断乎たる命令なり。其身を護れる者は吾之を救はん。されど一切の不義者は其膝を屈せしめたるまま其中

に之を放置せん^三

わが明瞭なる休徴が彼等に讀誦せらるる時、信ぜざる者は信者に向つて曰く『兩者の執^いれが地位に於て高く、会場に於て優れるか¹』と^三 されど吾は富貴と榮華とに於て彼等に優れる如何に多くの世代を、彼等以前に滅ぼし去れることぞ^三 言へ『迷誤の中に^{さまよ} 彷徨^{さまよ}ふ者は、大悲者は其人の日を永からしめん。されど彼等は、或は（現世の）懲罰にもせよ、或は復活の日にもせよ、彼等に約束せられたることを必ず目睹せん。其時彼等は眞に地位に於て劣り、力に於て弱かりし者の誰なるかを知らん』と^三 而して正しく導かるる者に対してはアルラーハは更に其の嚮導を増さん。永存する善行は、汝の主の目には現世の幸福よりも善報に於て勝り、善果に於て勝る^三

(1) 兩者とは信者並に不信者なり。此の啓示が信者に徴力者多く、不信者に有力者多かりし當時のものなるを示す。

汝はかの吾が休徴を信ぜず、而も是く言ふ者あるを見ざるか 『吾は必ず富貴と子女とに恵まれん』と^三 彼は不可見のものを見たるか、又は是かる約束を大悲者と結べるか^三 断じて然らず。吾は彼が言へることを記録せん、而して彼の刑期を長くせん^三 彼が言へるものは吾之を相続し、彼は單身吾前に来らん¹

(1) 彼等が言へるものとは富貴と子女となり。萬人皆な死してアルラーハのみ恒存なるが故に、アルラーハは一切の相続者なり。單身とは富貴と子女とを伴ひ来らざることを言ふ。

彼等は権勢を興へられんがためにアルラーハ以外の神々を拜す。然らず、彼等は彼等の敬拜を否認し、却つて彼等の敵とならん。吾は不信者を煽動するためサタンを遣はしたり。汝は之を見ざるか。されば彼等に対して性急なる勿れ。吾は彼等のために唯だ¹数を算ふるのみ。

(1) 数とは年数のこと。幾年かの執行猶豫を興ふとの意味。

其日吾は其身を護れる者をば使節を迎ふるが如く大悲者の前に招ぎ、作悪者をば牛羊の群^{ひれ}の如く地獄に追ひやらん。大悲者と約束を結べる者の外、彼等は勸解者たるを得ず。

彼等曰く『大悲者は子を有てり』と云。げに汝等は重大なる言を爲せり。諸天は裂け、大地は崩れ、群山粉碎せんとす。實に是れ汝等が大悲者に子ありとするが故なり。大悲者に子あるべからず。天地間の一切の者、一として僕^{しもべ}として大悲者に来らざるはなし。げに彼は彼等を算へて其数を定む。而して復活の日に於て、彼等は各自單身彼の前に来らん。されど信じて善事を

行ふ者には、大悲者必ず大愛を賜はらん矣

われ此の古蘭を汝の舌に容易なるものとなせるは、¹汝をして其身を護る者に吉報を傳へ、¹事とする者に警告を興へしめんがためなりを。吾は彼等以前に如何に多くの世代を滅ぼせることぞ矣。汝は其等のうちの一人にても残存するを見るか、又は彼等の私語にても聽くか矣

(1) アラビア語にて啓示せること。

第二十　　タア・ハア章

メツカ啓示

第一節の二文字T・Hを取りてタア・ハア章 Ta・Ha と名づけらる。傳承は此章に關して下の事を語る。後にカリフとなるウマル・Umar ibn al-Khattabは、初め最も激烈なるマホメットの反対者にして、遂に七首を懷にして彼を刺さんとするに至りしが、偶々其妹ファアテイマ Fatima が所持せるT・H章を讀んで甚だしく感激し、直ちにマホメットの歸依者となれりと。而してウマルの歸信は開教五年のことなれば、本章の啓示は其以前とせらる。但しメチナ遷都以後に訂正せられたる諸節並にメチナ啓示とすべきものを含むこと前諸章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

タア・ハア一 われ古蘭を汝に降したるは、汝を悩まさんがために非ずニ　　そは唯だ敬畏者への訓誡としてなりニ　　そは大地と高遠なる諸天とを創れる者より降されたりニ

大悲者は王座に鎮坐すニ　　天にあるもの、地にあるもの、天地の間にあるもの、並に濕土の下にあるもの、悉く彼に屬すニ　　汝何ぞ高声に物言ふを要せんや、げに彼は秘密を知り、また極秘を知

るセ　アルラーハ、彼の外に神なし。一切最勝の名號は彼に屬すハ

モーゼの物語、汝に達せるか^カ　かれ火を見たる時¹、其の家人に告げて曰く『停れ、げに吾は火を見たり。われ汝等のために彼処より火把ほたを持ち帰らん、或は火側に案内者を得ん』と云　かれ其火に來れる時、声ありて曰く『モーゼよニ　げに吾は汝の主なり。されば汝の履つらを脱げ。いま汝はトゥワー²の聖谷にありニ　吾は汝を選びたり。されば汝に默示することを聽けニ　げに吾はアルラーハなり、吾の外に神なし。されば吾に事へ、吾を念じて禮拜を守れニ　げに時は近づけり、吾は之を現さんとす。これ各人が其の努むるところに應じて報いられんがためなりニ　されば之を信ぜずして己れの私欲を追ふ者のために、此の信仰に背かしめらるること勿れ。然らば汝は滅ぶべしニ　汝の右手に持てるものは何ぞ、モーゼよ』とモ　彼曰く『こは吾杖なり。吾は之に倚り、また吾が羊群のために之にて樹葉を打落とし、また其他の事にも之を用ゆ』と云　彼曰く『之を抛て、モーゼよ』と云　彼之を抛ちたるに、見よ、そは奔る蛇となれりニ　彼曰く『それを掴め、恐るる勿れ。われ忽ち之を原形に復せしめんニ　また汝の手を腋窩わきのしたに挟はさめ。然らば怪我なくして手は純白とならん³。これ第二の休徴なりニ　是くの如きは更に偉大なる諸の吾が休徴を示さんがためなりニ

さらばフアラオに往け。げに彼は暴虐なり』と言

(1) 傳承は下の如く語る。モーゼ其母を尋ねるため、其の養父に暇を乞ひ、家人と共にミディアンを発して埃及に向ひしが、シナイ山の聳ゆるトゥワー Tura 山谷に達せし時、彼の妻は長途の旅に疲れて仆れ、其時一男兒を分娩せり。彼は路に迷ひ、羊は四散し去り、時恰も暗夜にして雪さへ降り初め、全く途方に暮れたる時、彼は突如シナイ山側に火の燃ゆるを見たり。蓋シアラビア人は、沙漠を旅する者のために、暗夜に火を焚きて路を知らしめ、来る者を慰はしむる風習なり。

(2) トゥワーの名称は『山』を意味するシリア語 Tura の轉訛なるべしとせらる。(3) モーゼは極めて色黒かりしと傳へらる。

彼曰く『主よ、吾胸を廣くせよ』¹ 吾事を易くせよ』² 吾舌の纏れを解き』³ 吾言を彼等に理解せしめよ』⁴ わが補佐として吾が家人のうちより』⁵ 吾兄アロンを吾に與へよ』⁶ 彼によつて吾力を強め』⁷ 彼を吾事に協力せしめよ』⁸ これ吾等が不断に汝を讚美し』⁹ 不断に汝を念ぜんがためなり。げに汝は吾等を照覽す』¹⁰ と言 彼曰く『汝の嘆願は聽許せらる、モーゼよ』¹¹ げに吾は以前にも汝に恩寵を垂れたり』¹² 其時吾は汝の母に默示せられたることを默示して言へり』¹³ 箱の中にも彼を入れて河に投げ、河をして之を岸に打上げしめよ。然らば吾敵にして且彼の敵なる者が彼を拾ひ上げん』¹⁴ と言 吾は汝が吾が目前にて哺育せられんがために、吾愛を汝のために注ぎたり』¹⁵

(1) モーゼは幼少の時火にて舌を焼き、言語不明なりしとせらる。(2) 傳承は下の如く語る。モーゼの母、黙示に従ひて箱を作り、モーゼを其中に入れて河中に流せしが、箱は其河の一支流に乗じてファラオの花園内にある大池に流れ入りたり。一日ファラオは女王アジア Asia と共に池畔に坐し居たりしが、箱の流れ来りしを見、命じて之を拾ひ取らしめ、開きて其中の嬰兒が眉目極めて端麗なるを見、之を撫育せしむることとせりと。

其時汝の姉来りて曰く「われ汝等に彼を育つる者を指示すべきか」と¹。かくて吾は汝の母を慰め、其憂を解かんがために、汝を其母に返したり²。汝が人を殺したる時も、吾は窮地より汝を救ひ、種々なる手段にて汝を試みたり。其後汝は数年の間ミディアンの民の間に留まれり⁴。モーゼよ然る後に汝は定められたる如く此処に来れるなり³。吾は吾がために汝を選びたり⁴。されば汝と汝の兄とは吾が休徴を携へて往け、而して吾を念ずることを懈る勿れ³。汝等兩人相携へてファラオに往け。げに彼は暴虐なり³。されど彼に対して溫和に物言へ。彼或は訓誡を受け、或は神を畏るべし』と⁴。

(1) 傳承は下の如く語る。モーゼのため多くの乳母雇入れられたりしも、彼は何人の乳をも飲まんとせざりき。之を傳聞せるモーゼの姉ミリアム Miriam は、適當なる乳母ありとて、モーゼの母を乳母として推挙したりと。(2) 旧約出

埃及記第二章第七—九節参照。(3) 第二八章第一五—二一節にモーゼが人を殺せる経緯を述ぶ。(4) 出埃及記第二章第

兩人曰く『主よ、吾等は彼が急いで害を吾等に加へんことを恐れ、また彼の暴虐ならんことを恐る』と罫 彼曰く『恐るる勿れ、げにわれ汝等と偕にあり。吾は能く聞き、能く見る罫 されば汝等兩人往きて彼に言へ『げに吾等は汝の主よりの使者なり。さらば吾等と共にイスラエルの兒等を去らしめ、彼等を虐ぐることを勿れ。吾等は汝の主の休徴を齎したり。此の嚮導に従ふ者の上に平安あらん罫 されど吾等を虚言者と呼ぶ者は必ず懲罰を受けん。げに吾等は是く默示せられたり』と』罫

ファラオ曰く『汝の主は誰ぞ、モーゼよ』と罫 彼曰く『吾主は萬物に稟賦を與へ、然る後に之を嚮導する者なり』罫 彼曰く『然らば前代の者の事情は如何』罫 彼曰く『之に関する知識は書冊に載せて吾主の許にあり。吾主は誤ることなく、忘るることなし罫 彼は大地を展べて汝等の臥床となし、往來のために地上に道路を造り、天上より水を降し、之によつて多種の草木を育成す。汝等は之を食ひ、且家畜を飼ふ。げに此中には睿智ある者への種々なる休徴あり罫 彼は土より汝等を創り、汝等を之に帰らしめ、然る後にまた汝等を甦らしむ』と罫

(1) 前代の者の受けたる応報、即ち死後の幸不幸の实情を問ふなり。

げにわれ種々なる休徴を悉く彼に示せしも、彼は之を虚偽なりとして拒否したり。彼曰く『汝は汝の魔術を以て吾等を吾等の國土より逐はんがために来れるか、モーゼよ。果して然らば吾等もまた之に類する魔術を以て汝に臨まん。されば吾等と汝と約束を結び、適宜の場処に会合する日を定め、吾等も汝も決して破約せざるべし』と云。彼曰く『会合の日は之を祭日に定めん。太陽高く天に登らば、即ち人々を呼び集めよ』と云。

フアラオ退きて計略を定め、然る後に会合の地に来り¹。モーゼ彼等に向つて曰く『禍なるかな汝等。汝等アルラーハについて虚構すること勿れ。然らば彼必ず懲罰を降して汝等を滅ぼさん。虚構する者は必ず失敗す』と云。かくて彼等は其計略について互に論議し、また退いて密議を凝らしたり²。彼等曰く『げに彼等兩人は魔術者にして、己れの魔術を以て汝等を其の國土より逐ひ、且汝等の最勝²のものを奪はんとする者なり。されば汝等の計略を整へ、然る後に列を成して来れ。げに今日勝利を得る者は必ず栄えん』と云。彼等曰く『モーゼよ、汝が抛つか、又は吾等先づ抛つか』と云。彼曰く『否な、汝等先づ抛て』と。其時見よ、彼等の繩と杖とは、其の魔術により

て蜿蜒として走るが如くモーゼに思はれたり矣。モーゼ即ち心に畏怖を抱けり矣。吾曰く『恐るる勿れ。げに汝必ず勝らん矣。汝が右手に持てるものを投げよ。然らばそは必ず彼等が造出せるものを呑まん。彼等は唯だ魔術者の詭計を弄せるにすぎず。その何処より来れるを問はず、魔術者は決して栄えず』と究

(1) ファラオ國內の名ある魔術者等を集め、之を伴ひて会合の場処に来れるなり。第七章第一〇九—一一二節参照。(2) 最勝のものとは或は著名の人物を意味すと言ひ、或は最上の傳統又は信仰を意味すとせらる。予は後者を採る。

かくて魔術者等跪きて拜して曰く『吾等はアロンとモーゼとの主を信ず』とき。ファラオ曰く『汝等わが允許なくして彼を信ずるか。げに彼は汝等に魔術を教へたる汝等の首領なるべし。吾は必ず汝等の手足を反断し、汝等を棗椰子樹の幹に釘けん。汝等は吾等のうち罰すること最も烈しく且長き者の誰なるかを知らん』とき。彼等曰く『吾等は吾等に示されたる明白なる休徴、並に吾等を創造せる彼に優りて汝を重んずること能はず。されば汝が思ふままに判決を下せ。されど汝は唯だ現世に属することを判決し得るにすぎず。げに吾等が吾等の主を信ずるは、吾等の罪過の宥恕を乞ひ、また汝が吾等に強要せる魔術の宥恕を乞はんがためなり。げにアルラーハは至善にして最

久なりき。げに罪人として其主の前に来る者のためには地獄あり。彼は其中にて生きもせず死にもせざらん。されど信じて善事を行ひて彼の前に来る者のためには最高の位階あり。長久に其中に住むべき河川流るるエデンの園あり。これ其身を潔くせる者への報賞なり』と云

われモーゼに黙示して曰く『吾が僕等と共に夜陰に出発せよ。追跡を恐れず、また（海を）恐れず、彼等のために乾ける道を海中に打開せよ』と云。ファラオ軍勢を率ゐて彼等の後を追ひしが、海を圧倒せる波浪は彼等をも圧倒せり。これファラオが其民を迷はしめ、正しく之を導かざりしが故なり云

イスラエルの兒等よ、吾は汝等を其敵より救ひたり云。吾はシナイ山の右側にて汝等と結約したり。吾はマナと鶉とを汝等に降したり云。而して吾は言へり『わが汝等に與へたる佳きものを食ひ、若し吾が憤怒の降るを恐れなば、度を過ごすこと勿れ。何人にてあれ、吾怒に触るる者は必ず滅びん。されど懺悔して信仰に入り、善事を行ひ、正しく導かるる者には、げに吾は寛容なり』と云

曰く『何事のために汝は其民より急ぐか、モーゼよ』云。彼曰く『彼等は近く吾後にあり、主

よ、吾は唯だ汝を欣ばしめんがために急ぎたり』云 彼曰く『げに吾は汝が去れる後に彼等を試みたり。而してサーミリーは彼等を迷はしめたり』と云 モーゼ憤り且悲しみ其民に帰りて曰く『吾民よ、主は善き約束を汝等と結ばざりしか。約束の期限が汝等には餘りに長かりしか、又は主の憤怒が汝等の上に降らんことを望みて、吾との約束を破りしか』と云 彼等曰く『吾等は自ら進んで汝との約束を破れるに非ず。吾等人々の裝飾品の重荷を負はしめられ、之を（火中に）投じたるなり』と。而してサーミリーも之を投じたりしが彼は之にて鮮黄色の吼ゆる犢（ゴウシ）を造りたり。而して曰く『こは吾等の神にして、またモーゼの神なり。彼は之を忘れたるなり』と云 彼等は其犢（ゴウシ）が一言も彼等に答ふることなく、また毫も彼等を損益する力なきを見ざりしか云 アロン既に彼等に是く告げたりしなり『吾民よ、汝等は唯だ此犢（ゴウシ）によつて試みられたるにすぎず。汝等の主は寛容なり。されば吾に従ひ、わが命令に聽け』と云 然るに彼等は言へり『モーゼの帰るまで、吾等は決して之を拜することを止めず』と云

(1) シナイ山にてエホバと会ふために七十人の長老と共に出発せる時のことにて、彼等とは其等の長老を指す。(2) サ
ーミリー As-Samiri については異説区々なり。基督教の学者は之をサマリア人と翻譯し、猶太史の無智より来るマホメッ
トの年代錯誤の一例とする者多し。但しガイゲルはサーミリーを以てサムエルの轉訛となし、イスラエル人を迷はしむるた

めに牛像の腹中に入りて吼声を発せるなりとせり。旧約出埃及記第三二章第二四節参照。(3)第七章第一四八節参照。

モーゼ曰く『アロンよ、汝は彼等が迷へるを見たる時、何故に吾に従はざりしか。汝は吾命に背きたるか』と云。アロン曰く『吾母の子よ、吾髻吾髪を掴むを止めよ。吾は汝が『汝はイスラエルの兒等を分裂せしめ、吾言を守らざりき』¹と言はんことを恐れたるなり』² 彼曰く『然らばサーミリーよ、汝の言はんとするところは何ぞ』³ 彼曰く『吾は彼等が見ざるものを見たり¹。吾は使者が遺せる足跡より一握の砂を取り、之を壇に投じたり²。吾心は吾をして是くせしめたり』³ モーゼ曰く『さらば去れ。汝現世にては『吾に触るる勿れ』³と言はしめられ、末世にては遁れ難き懲罰を受けん。汝が拜したる神を見よ。われ必ず之を焚き、之を灰燼に帰せしめ、然る後に之を海中に投ぜん』³ 汝等の神はアルラーハなり、彼の外に神なし。彼の知識は一切を抱擁す』と云

(1) 彼等の見ざるものとは、サーミリーが天使ガブリエルの天馬を馭りて過ぐるを見たることとせらる。(2) 使者即ちガブリエルの天馬が蹄を下るせる砂を掴みて壇に投じたること。壇が生きて吼ゆるに至れるは其爲なりとせらる。(3) 恐らく癩病となりて、他人の触るるを憚る身の上となることを意味す。

是くの如く吾は既往の消息の若干を汝に語り、且わが訓誡を汝に與へたり。苟くも之に背く者

は復活の日に於て必ず重荷を負ひ^二 而も永遠に之を負はん。そは復活の日に彼等にとりて痛ましき重荷なるべし^二 其日喇叭は吹かれん、其日吾は一齊に碧眼の罪人を召集せん^一 其時彼等低声に私語して言はん『汝等は唯だ十日前後滞留せるにすぎざりき^二』と^三 吾は彼等の言はんとするところを熟知す。彼等のうちの最も誠実なる者は言はん 『汝等の滞留せるは唯だ一日にすぎず』と^四

(1) 『碧眼』とは『紅髻』と共にアラビア人が其の最も惡む者に対する呼称なり。蓋し永年に互りて彼等と相争へる希臘人が碧眼紅毛なるによる。(2) 死後墓中の滞留を指す。

彼等は山について汝に問はん^一。言へ『吾主は之を粉碎せん^二 而して之を坦々たる平野となし^三 其中に彎曲も高低もなきに至らん』と^四 其日彼等は直前邁往する招呼者に従ひ往かん。声は大悲者の前に低められ、人は唯だ微かなる眩きを聞かん^五 其日大悲者が之を許し、其言が嘉納せらるる者の外は、如何なる勸解も無効ならん^六 アルラーハは彼等の前にありしこと並に彼等の後にあることを知る。されど彼等の知識は能く彼を会得するを得ず^七 而して人々の面は永生者・自存者の前に謙り、不義の重荷を負へる者は滅ぼされん^八 されど信じて善事を行へる者は、報償の誤算

せられ又は減損せらるる惧れなし^{二三}

(1) 復活の日に山嶽は如何になるべきかとの質問、(2) 天使イスラフィールを言ふ。彼は萬人を最後審判に召喚する任務を負ふ。

是くの如くにして吾はアラビア語の古蘭を降し、其中に警告を反復せり。これ彼等をして其身を護らしめ、また之を彼等への訓誡たらしめんがためなり^{二三} 崇高なるかなアルラーハ、そは王者なり、真理なり。されば汝への黙示が未だ完了せざる以前に、古蘭を催促すること勿れ¹。むしろ『主よ、わが知識を増せ』と祈れ^{二四}

(1) 第七章第一六一—一九節参照。

吾曾てアダムと約束を結びしが、彼は之を忘れたり。『而して吾は彼の志操堅固ならざるを見たり¹。われ諸天使に向つて『アダムに叩首せよ』と言へる時、彼等皆な之に従ひしが、イブリースのみ之を拒めり^{二五} 吾曰く『アダムよ、げに此者は汝及び汝の妻の敵なり。彼のために汝等樂園より逐ひ出ださるること勿れ。然らば汝等苦難に遭はん^{二六} 此処にて汝等は飢えずまた裸ならず^{二六} 渴^{かわ}かずまた熱からざらん』と^{二九}

(1) アダムは甚だしき健忘者としてアラビア人の間に知らる。されば『最初の健忘者は最初の人間なり』といふ諺あり。

然るにサタン彼を教唆して曰く『アダムよ。われ汝に永遠の樹と不滅の國とを示さんか』と言かくて彼等之を取りて食ひ、其の羞かしき処を露はせるを知り、樂園の樹葉を綴りて其身を蔽ひ初めたり。かくしてアダム其主に背き、道を誤りたり三

(1) 旧約創世記第二章第〇節、第三章第五節参照。古蘭第七章第二〇節参照。マホメットは旧約の智慧の樹と生命の樹とを混同せるものと思はる。

其後主は己れのために彼を選び、その懺悔を允し、彼を導きたり三 彼等く『汝等兩人相携へて此処より降れ。汝等の一は他の敵たるべし。若し汝等に吾が嚮導到ることあらば、之に従ふ者は迷ふことなく、また苦難に遭はざるべし三 されど吾が訓誡に背く者は、現世に於て困窮し、復活の日には吾之を盲者として甦らしむべし』と言 其時彼は言はん『主よ、吾は明かに視るを得たりしに、何故に吾を盲目として甦らしめたるか』と言 主は言はん『さもありなん。わが休徴が汝に至れる時、汝は之を忘れたりき。今日は汝が忘れらるる日なり』と言 吾は是くの如くにして背逆にして其主の休徴を信ぜざる者に報ゆ。末世の懲罰は最も烈しく、最も久し三

吾は彼等¹以前に如何に多くの世代を滅ぼせることぞ。彼等は彼等²の住める地を往来しながら、之によつて導かるることなきか。げに此中には睿智ある者への種々なる休徴あり^三。若し既に発せられたる汝の主の命令なかりせば、而して時期が既に定められたるに非ざりせば、彼等は決して刑罰を避け得ざりしなり^三。されば彼等の言を忍び、日の登る前並に日の沈む前に汝の主を讚美し、また夜間の數時並に日の頂^三点に彼を讚美せよ。恐らく彼は之を欣ばん^三。わが彼等のうちの或者に與へたる現世の榮華に汝の目を張る勿れ。吾は之によつて彼等を試みんとするのみ。汝の主の賜與は更に佳く更に久し^三。汝の家人に礼拜を命じ、且之を堅守せしめよ。吾は汝に養はれんことを求めず。養ふ者は吾なり。而して其身を護る者には善果あらん^三。

(1)メフカ市民。(2)滅び去れる前代の民。(3)正午を言ふ。

彼等曰く『何故に彼は其主よりの休徴を吾等に齎さざるか』と。何たることぞ。古の典籍に記されたる明白なる証據が、いま彼等に來れるに非ざるか^三。吾若し此事以前に彼等を滅ぼしたりとすれば、彼等即ち言はん『何故に汝は使者を吾等に遣はさざりしか。然らば吾等は卑しめ辱しめらる

る前に汝の休徴に従ひたりしものを』と言。言へ『各人皆な待つ。されば汝等も待て。やがて汝等は坦道を歩める者、また正しく導かれたる者の誰なりしかを知らん』と言。

第二十一 豫言者章

メッカ啓示

古来の諸豫言者について述ぶるに因みて豫言者章 Al-Anbiya と名づけらる。諸豫言者のうちアブラハムに就て語るところ最も多し。メッカ中期の啓示とせらるるも、全章に一貫の脈絡なく、年代を異にせる諸啓示を集録せるものにして、メデナ遷都以後の諸節、並に遷都以後に加筆せられたるメッカ諸節を含むこと前諸章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

人々が忌避して顧みざる間に、彼等の清算は近づけり。其主よりの新たなる訓誡が彼等に来る毎に、彼等之を聽いて嘲笑せずといふことなし。彼等は心中に之を愚弄するなり。而して不義を行ふ者は密かに相語りて曰く『こは汝等と等しく一個の人間に非ざるか。何事ぞ、汝等目を開きながら魔術に迷はざるるか』と。言へ『吾主は悉く天地の間に話さるることを知る。吾は能聞者・能知者なり』と。否な、彼等は言へり『そは夢の錯亂なり。否な、彼之を偽作せるなり。否な、彼は詩人なり。されば往時の民に諸使者が遣はされたる時の如く、彼にも吾等に休徴を齎さしめ

よ』と^五 彼等以前にわが亡ぼせる都府も、一として信じたるはなかりき。彼等果して信ずべき

か^六

汝¹以前にわが遣はせる者は、一としてわれ之に黙示を與へたる人間に、非ざりしはなし。汝等之を知らずば訓誡を受けたる民²に問へ^三 吾は彼等を食物を攝らざる身軀に造らず、また彼等是不死にも非ざりき^ハ 而も吾は彼等に與へたる約束を完うし、彼等並にわが欲する者を救ひて、暴虐なりし者を亡ぼしたり^九 吾は汝等への訓誡を載せたる經典を汝等に降せるなり。汝等尙ほ曉らざるか^{三〇}

(一) 前段並に此の一段は、ベルに従へばメッカ末期の諸啓示にメチナ初期のそれを加へて整頓せるものなり。(二) 猶太人並基督教徒。

われ如何に多くの不義を行へる都府を亡ぼし、別個の民を其後に挙げたることぞ^二 彼等わが懲罰を見たる時、げに倉皇として都府より遁走したり^三 時に声あり曰く『走る勿れ、汝等が榮華に暮らせる都府に還れ。汝等の住居に帰れ。想ふに汝等は糾問せらるべし』と^三 彼等曰く『悲しいかな。げに吾等是不義者なりき』と^四 而してわれ彼等を刈取れる穀類の如く消滅せしむるまで、

彼等の此の叫喚は止まざりき^三

吾¹は娛樂のために天地並に天地間の萬物を創造せるに非ず云 吾若し娛樂を欲しなば、吾は吾自身のうち之を求むべし。吾は断じて之を為さずモ 否な、吾は眞理を虚偽に擲^ハげて其頭^{コウ}を碎く。而して見よ。虚偽は忽ち消滅す。禍なるかな汝等が（アルラーハについて）稱ふることはハ

（一）前段及び此の一段は、ベルに従へばメヂナ啓示なり。

天地間の一切のものはアルラーハに属す。彼と偕に在る者¹は、彼に事へて驕らずまた倦まず云 等は夜毎日毎彼を讚へて懈ることなし^三

（一）彼と偕に在る者とは天使なり。独り人間のみならず、天使もアルラーハに事ふることを言ふ。

彼等は死者を甦らしむる神々を地上より選べるか^三 若し天地の間にアルラーハ以外の神々ありとすれば、天地は必ず混沌たるべし。されば王座の主アルラーハを讚へよ、彼は高く彼等の稱ふるものに超在す^三 彼は其の為すことについて問はるることなし。問はるるは即ち彼等なり^三 彼等はアルラーハ以外に神ありとするか。言へ『汝等の証據を示せ。こはわが同代の者並に吾が前代

の者に與へられたる訓誡なり』と。否な、彼等の多くは眞理を知らず。故に彼等は之を忌避す。汝以前に吾が遣はせる使者は、一人として吾之に『吾の外に神なし、されば吾に事へよ』と默示せざりしはなし。

彼等曰く『アルラーハに子女あり』と¹。彼を讃へよ、然らず。彼等は敬ふべき僕等なり²。彼等は彼に先んじて物言ふことなく、唯だ彼の命を奉じて行ふ。彼は彼等以前にあるもの並に彼等以後にあるものを知る。彼等は主の欣ぶ者のために非ずば勸解せず。彼等は彼を畏れて戦く。若し彼等のうちに『吾は彼以外の神なり』と言ふ者あらば、吾必ず地獄を以て其者に報いん。吾は是くの如くにして不義者に報ゆ。

(1) 天使を以て神女なりとするアラビア人の信仰を否認するものなり。(2) 彼等とは却ち天使。

天と地とはもと固結せる一躰なりしを、吾之を開闢し、且吾は水を以て一切の生類を創造せり。一信ぜざる者は此事を思はざるか。彼等尙ほ信ぜざるか。吾は地上に群山を置きて、大地を彼等と共に動搖せざらしめ、且彼等が正しく導かれんがために其中に大道を造れり。吾は天を以て堅固に支へられたる屋宇となせり。然るに彼等は其の種々なる休徴を忌避す。而して晝夜を創り、各

其の軌道を走る日月を創れるもまた彼なり三

吾は汝以前の如何なる人間をも未だ曾て不死とせることなし。何事ぞ、汝は死ぬべきものなるに、彼等は永遠に生くるとするか三 各人皆な死を味はしめらる。吾は禍福を以て汝等を試む。而して汝等吾に帰らしめらる三

信ぜざる者が汝を見る時、彼等は唯だ汝を以て嘲笑の的とす。曰く『汝等の神々について云々するは此者なるか』と。彼等は大悲者の訓誡を信ぜざるなり三 人は性急に創られたり。吾將に汝等に休徴を示さんとす。されば汝等吾に催促すること勿れ三 彼等曰く『汝等の言眞実ならば、此の威嚇の実現せらるるは何時ぞ』と云 若し信ぜざる者が其日を知りたりせば！ 其時彼等は其面より、また其背より猛火を防ぐ能はず、また救はるることを得ざるなり三 否な、そは突如彼等を襲ひて彼等を驚倒せしむべし。彼等は之を忌避することも、また猶豫せらるることみなからん三 げに汝以前の諸使者も嘲笑せられたり。されど復活の日に於て、彼等の嘲笑せることが彼等を圍繞すべし三

言へ『晝夜大悲者に対して汝を護る者は誰ぞ』と。否な、彼等は其主の訓誡を忌避す三 彼等は

吾以外に己れを守護する神々を有するか。此等の神々は己れ自身をも護ること能はず、また吾に對して彼等を護ること能はず。吾は此等の民並に其の祖先に安樂を與へ、その生存を永からしめたり。彼等はわれ此地に來りて其の辺境を縮小しつつあるを見ざるか。彼等果して勝利者なるか。

(1) 第一八章第四一節参照。

言へ『吾は唯だ默示によりて汝等を警告するのみ』と。されど聾者は警告せらるるも招呼の声を聞かず。而も汝の主の懲罰が些かにても彼等に觸ることあれば、彼等必ず言はん、『悲しいかな、げに吾等是不義者なりき』と。吾は復活の日に公平なる秤を置く。されば何人も不当に遇せらるることなし。設ひ芥子一粒の重さなりとも、吾必ず之を取り出でて量らん。吾は清算者として缺くるところなし。

吾はモーゼとアロンとに識別と光明と其身を護る者への訓誡とを與へたり。彼等は密かに其主を畏れ、復活の日を念ひて心戦く者なり。而して此の古蘭は、わが降したる祝福せられたる訓誡なり。然るに汝等尙ほ之を拒むか。

吾は曾てアブラハムに正しき道を與へたり。そはわれ彼を熟知せるが故なり^三 彼が其父並に其

民に告げて是く言へる時を念へ『汝等が拜する此等の偶像は何者ぞ』と^三 彼等曰く『吾等は吾等

の祖先が之を拜するを見たり』^三 彼曰く『汝等並に汝等の祖先は明かに誤れり』^四 彼等曰く

『汝は眞実を吾等に語らんとするか、又は吾等に戯るる者の一人なるか』^五 彼曰く『然らず、汝

等の主は天地の主なり。而して吾は其の証人の一人なり^五 神かけて言ふ、汝等踵を回して其背を

吾に示せる後、吾必ず汝等の偶像に対して策を施さん』と^五

かくて彼は唯だ一躰の巨像を除き、悉く彼等を破碎し去れり。そは彼等之に帰り来るべしと思へ

るが故なり^六 彼等曰く『吾等の神々に対して此事を敢てせる者は誰ぞ。げに彼は不義者の一人な

り』^六 他の者曰く『吾等はアブラハムと呼ぶ青年が、此等の神々について語るを聞けり』^六 彼

等曰く『さらば彼を人々の前に伴ひ来れ。恐らく彼等証人とならん』と^六

彼等曰く『吾等の神々に対して此事を為せるは汝なるか、アブラハムよ』^七 彼曰く『然らず、

神々のうちの此の巨大なる者が之を行へるなり。彼等若し物言はば、此事を彼等に問へ』^七 かく

て彼等自ら省みて曰く『吾等自身こそ不義者なりけれ』と^七

然るに幾くもなく彼等また顛倒して曰く『汝は此等の神々が物言はざることを熟知す』と^七 彼

曰く『然らば汝等は毫も汝等を損益せざる者をアルラーハ以外に拜するか』
に汝等がアルラーハ以外に拜する神々は。汝等尙ほ曉らざるか』
彼等を焚きて汝等の神々を救へ』と云

(1) 俄かに意見を翻して復た多神教徒となれることを言ふ。

其時吾曰く『火よ、冷涼なれ。アブラハムは安泰なれ』¹と云 彼等更にアブラハムに対して策動せんとせしが、吾は彼等を淪喪者たらしめたりき 吾は彼並にロトを救ひ、萬人のために彼等を吾が祝福せる國土に移したりき 而して彼にイサクと孫ヤコブとを與へ、等しく之を義人とせりき 吾は彼等を以て吾命を奉じて人を導く教師となし、善事を行ひ、礼拜を守り、捐課を納め、専ら吾にのみ事ふべきことを默示せりき

(1) 偽承によれば、アブラハムはニムロド王のために火刑に処せられたるも、神助によりて一命を助かりたりとせらる。

(2) 聖地即ちパレスチナを指す。

ロトについて言へば、吾は智慧と知識とを彼に與へ、且穢らはしき事を行へる都府より彼を救ひたり。けに彼等は不善にして背逆の民なりき 而して吾は慈悲を彼に垂れたり。彼は義人の一人

なりきま

ノアについて言へば、曾て彼が吾に祈れる時、吾之に応へて彼並に彼に従へる者を大なる災難より救ひたりき。吾はわが休徴を虚偽なりとせる民に対して彼を佑助せり。げに彼等は悪き民なりしかば、われ悉く之を溺死せしめたりき。

ダビデ並にソロモンについて言へば、或者の羊が夜間田圃に入りて之を荒せし時、彼等之を裁判し、¹吾は其の裁判の証人なりきま。吾は之をソロモンに曉らしめたり。²而して吾は各自に智慧と知識とを興へたり。またダビデには吾を讚美するため群山を飛鳥とを従はしめたり。之を為せるは実に吾なりき。また吾は汝等のために甲冑を作ること彼等に教へ、征戦に際して汝等の身を護らしめたり。汝等之を感謝するから。また吾は大風をソロモンに従はしめ、³その命令の下に之をわが祝福せる地に吹かしめたり。吾は萬事を知るハ。またサタンのうちに常に彼のために潜水せる者あり、また他の仕事を為せる者もありて、⁴吾常に彼等を監視せり。

(1) 傳承によれば、此の裁判に當りて、ダビデは田圃の持主が損害賠償として羊を牧羊者より受取るべしと判決せり。然るに当時十一才の少年なりしソロモンは、牝羊者は其の羊が荒廢せしめたる田圃が復旧するまで、羊の生産品却ち乳・毛・仔羊等を田圃所有者に提供すべしと主張し、ダビデも之に従へりとせらる。(2) 之を曉らしむとは、如何なる判決を下す

べきかを解悟せしめたること。(3) 傳承は風が常にソロモンの王座を運びて、其の欲する処に到らしめたりとなす。(4) 海に潜りて珊瑚・眞珠等を採取せる外、陸上の仕事例へば宮殿の建築、道路の建設等に從へりとの意味。

ヨブについて言へば、かれ其主を喚びて『艱難吾に臨めり、汝は大悲者中の至悲者なり』と祈れる時、吾之に応へて彼を襲へる艱難を除き、其の失へる家人のみならず、更に同數の人々を加へて之を彼に與へたり。これ吾が慈悲にして、敬虔なる人々への訓誡なり。

イシマエル、イドリース、ツールキフル¹について言へば、彼等皆能く耐え忍びたれば、吾は彼等に慈悲を垂れたり。げに彼等は義人なりき。

(1) ツールキフル *Turkiah* は或はヨシニア、或はエリア、或はザカリアと同一人視せられ、ロッドウエルはニープールの旅行記を典拠としてエゼキエルならんとせり。

ツーンヌン¹について言へば、彼一旦は激怒して去り、吾は彼に対して何事をも爲し得ずとせしが、後に黒闇²の中において叫んで曰く『汝の外に神なし。榮光汝の上にあれ。げに吾は不義者の一人なりき』と云。されば吾は彼に應へ、之を其の苦難より救ひたり。吾は是くの如く信者を救ふ。

(1) ツーンヌン *Tur-nun* は『魚の主』を意味し、ヨナのことを指す。(2) ヨナが大魚に吞まれ、魚腹の黒闇中に

祈れること。

ザカリヤについて言へば、かれ其主に向つて『主よ、汝は最勝の相続者なり。されど吾を子なきままに遺す勿れ』と祈れる時¹ 吾は之に応へて彼にヨハネを與へ、其妻を彼に適^{かた}はしめたり。¹ 彼等は競ひて善事行ひ、憧憬し畏懼して不断に吾に祈り、吾前に謙虚なりき²

(1) 其妻の不妊を癒やせることを意味す。

その隠すべき処を護れる女子¹ について言へば、われ彼女に吾靈を鼓吹し、彼女並に其子を以て萬人への休徴となせり² (而して吾は是く默示せり) 『げに汝等の此教は同一不二の教なり、而して吾は汝等の主なれば、汝等唯だ吾のみに事へよ』と³ 然るに彼等其教を彼等の間にて分割せり。² されど彼等は皆な吾に歸る³ かくて信じて善事を行ふ者は、決して其の精進を空しくせらるることなし、吾は其人のために必ず之を記録せん⁴

(1) マリアを指す。隠すべき処を護るとは貞潔の意味。(2) 猶太教と基督教とに分裂せることを言ふ。(4) 第四八節

以下此節に至る諸豫言者についての物語は、メッカ啓示に対してメヂナ遷都以後訂正を加へたるもの、並にメヂナ遷都以後の諸節を集成せるものとすべし。

わが滅ぼしたる諸都府は、ヤージュージ・マーシュージが解放せられて高丘より奔下し来るまでは、¹其の再び世に復ることを禁ぜらるるを²。而して眞実なる約束は近づけり。見よ、其時信ぜざ

りし者は瞠目して言はん『悲しいかな、吾等は此事を閑却せり。否な、吾等是不義者なりき』とを

(1) 北方の蠻族が破竹の勢を以て南下し来ることを指せるものとすべし。ヤージュージ・マーシュージの侵入は復活の日が近づける時に起る凶光の一とせらる。

げに汝等並に汝等が拜する者は、やがて墮ち往く地獄の薪たるべし³。彼等若し神々なりせば、地獄には墮ちざるべし。されど彼等は墮ちて永劫に其中に住まん⁴。彼等其中にて呻吟せん。また彼等其中にて(何事をも)聞かざらん⁵。

げに吾よりの善賞既に定められたる者は、遠く地獄より移され⁶。絶えて其音を聞かず、その魂が憧憬したる処に永く住まん⁷。至大の恐怖も今は彼等を悩ますに足らず、諸天使は彼等を迎へて言はん『こは約束せられたる汝等の日なり』と⁸。其日吾はスイジル¹が書卷を捲く如く諸天を捲き、初めに之を創造せる如く、再び之を創らん。これわが負へる約束なり。吾必ず之を果たさん⁹。げに吾は訓誡を與へたる後に、詩篇の中に是く記せり『正義のわが僕等、地を嗣がん』¹⁰

げに此中には神に事ふる者への教訓あり三六

(1) スイジル *As-shim* は、人間の行状記を管理する天使の名とせらる。(2) モーゼに律法タウラトを與へたる後に、ダビデに詩篇を與へたりとの意味。旧約詩篇第三十二章第二九節。古蘭に引用せられたる聖書中の唯一の句。

吾は唯だ三界への慈悲として汝を遣はしたるのみ三〇 言へ『吾に默示せられたるは、唯だ汝等の神は独一なりといふことのみ。汝等果して歸命するか』と三〇 彼等若し背き去らば言へ『吾は一律に汝等に宣言せり。されど吾は汝等に約束せられたることの近きか又遠きかを知らず三〇 げに彼は公然の言を知り、また汝等が匿すことを知る三〇 吾はまた此事が汝等の試練なるか、また現世の享樂が暫時なるかをも知らず』と三二 言へ『主よ、眞理によつて審判せよ。吾等の主は大悲者なり。』
吾等は彼等の称ふることに対して彼の佑助を求む』と三三

第二十二 參詣章

メヂナ啓示

第二六一—三三節に參詣に関する諸節あるに因みて參詣章 *Al-Hajj* と名づけらる。本章は或はメツカ啓示とせられ、或はメヂナ啓示とせらるるも、その大部分がメヂナ啓示に属することは殆ど疑ひを容れず。但しメツカ末期の諸節並に之に訂正を加へたるものを含む。ネルデケ及びロッドウエルは共にメヂナ末期のもとなすも、初期・中期の諸節もあり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

人々よ、汝等の主を畏れよ。げに末日の震動は一大事なるべし。其日哺乳の母は乳兒を忘れ、妊婦は其の重荷を抛ち、人は酒飲まずして酔へるが如くなるを見ん。而してアルラーハの懲罰は峻烈なるべし。然るに人々のうちには如何なる知識もなくしてアルラーハについて論議し、且逆心を抱くサタンに従ふ者あり。サタンについては是く銘記せらる『何人たるを問はず彼を愛護者とする者あらば、彼必ず之を迷はしめ、劫火の刑に之を導かん』と。人々よ、汝等若し復活について疑はば、われ初めは塵土より汝等を創れることを思へ。然る後に

吾は（吾力を）汝等に明示せんがために、先づ一涓滴より、次で一凝血より、次で成形並に未成形の肉塊より汝等を造れり。吾は吾が欲する者を一定の時期まで胎内に留まらしめ、然る後に嬰兒として汝等を出生せしめ、次で成年に達せしむ。汝等の或者は夙く死し、また或者は曾て知り得たることを悉く忘却し去る生命の最低の状態に復歸せしめらる。また人は大地の荒蕪せるを見ん。されど吾一たび雨を降せば、地は忽ち動き脹れて、一切の美しき草木を發生せしむ^五。是れアルラーハは眞理にして、死者に生命を與へ、且全能なるが故なり^六。そはまた疑惑を容れざる復活の日が来るべき故なり。そはまたアルラーハが墓中の人々を甦らしむるが故なり^七。然るに人々のうちに知識もなく嚮導もなく、また光明を與ふる經典をも有たずして、妄りにアルラーハについて論議し^八。肩を聳かして人々をアルラーハの道に背かしめんとする者あり^九。彼等は現世に於ても屈辱を受け、末世に於ては焦熱の苦刑を嘗めん^十。（其時是く言はるべし）『こは汝等の手が豫め送れるものに対する応報なり。アルラーハは其の僕等を虐ぐる者に非ず』と云。また人々の中には両端を持してアルラーハに事ふる者あり^二。彼等は幸運来れば即ち欣び、試練下れば忽ち顛倒して去る。彼等は現世と末世とを併せ喪ふ者なり。そは明白なる損失なり^三。

(1) 恐らくメヂナに於ける猶太人を指す。(2) メヂナの偽信者を指すものとすべし。

彼はアルラーハを舍きて、毫も己れを損益せざる者を拜す。そは甚だしき迷誤なり^三。彼は己れを利するよりも寧ろ己れを害する者を拜す。げに禍なる愛護者なり、禍なる伴侶なり^一^三

(一) 此等の両節はメッカの多神教徒を対象とするものにして、恐らく最初第七節に続けるものなり。「彼」とは多くの註釈家によりてアブー・ジャハルを指せるものとせらる。従つて前段のうち第八—一節の猶太人並に偽信者を対象とする諸節は、メヂナに於て加へられたるもの、其他はメッカ啓示とすべし。

信じて善事を行ふ者は、アルラーハ之を河川流るる樂園に入らしめん。げにアルラーハは己れの欲することを行ふ^二

若しアルラーハは現世並に来世に於て彼を加護せずと言ふ者あらば、^一道を講じて天に登らしめ、彼をして之を断たしめよ。^二而して己れの努力が其の憤慨するものを除去し得るや否やを見せしめ

よ^三

(一) 『彼』とはマホメットを指す。アルラーハはマホメットを加護せずと言ふ者ありしなり。(二) 『之』とはアルラーハの加護を意味す。昇天して彼に対するアルラーハの加護を断てとの意味。但し此の一句は『天又は天井より繩を垂れ、自ら命を断たしめよ』の意味に解する学者多し。セール、ロッドウェル、パーマー皆然り。而して之を以てマホメットに対する嫉視又は憤慨の餘りに演ずる狂態となす。かかる相違は『断つ Yaqta』の目的格が原文に無きを以てなり。而してセール

等は「彼自身」といふ目的格を補ひて叙上の如く解釈せるなり。但し之を「アルラーハの加護」とすれば一層穩当且明瞭に
此句の意味を解し得べし。予はムママッド・アリの説を採る。

かくて吾は明白なる休徴として古蘭を降したり。そはアルラーハは己れの欲する者を導くが故なり云

げに信ずる者、猶太人たる者、サービ教徒、基督教徒、マギ教徒、並にアルラーハに他の神々を配する者、復活の日に於てアルラーハは必ず彼等に判決を下すべし。げにアルラーハは一切を照覽す

彼等は天地間の一切のもの、日月、星辰、群山、鳥獸、並に幾多の人間がアルラーハに叩首するを見ざるか。されど多くの人々は刑罰を受けざるべからず。而してアルラーハが貶おとす者は何人も之を貴くするを得ず。げにアルラーハは己れの欲することを行ふ

此等¹は其主について論争する両論争者なり。而して信ぜざる者のためには烈火の衣裳仕立てられ、其の頭上には沸湯注がれん云 彼等の臟腑と皮膚とそのために溶け去らん云 彼等は鐵鎚にて

毆たれん三 而して彼等苦惱して火中より出でんとする毎に、またもや火中に突き落とされ、『焦熱の刑を味へ』と言はれん三 信じて善事を行ふ者は、アルラーハ之を河川流るる樂園に入らしめん。彼等は其処にて黄金と眞珠との腕輪に飾られ、錦繡の衣裳を纏はん三 彼等は純潔の語に導かれ、可願者の道に導かる言 げに信仰に入らず、人をアルラーハの道に背かしむる者、並に常住者²たる²と遠末者たることを問はず、萬人のために吾が建てたる聖殿に参詣することを阻む者、殿内に於て不義なる依怙偏頗を行ふ者は、吾必ず痛烈なる懲罰を之に嘗めしむべし三

(1) 信者と不信者、(2) メッカに常住する者。

われアブラハムのために聖殿の地をトして是く言へる時を念へ『何者をも吾に配する勿れ。周行する者、端立する者、鞠躬する者、叩首する者のために吾家を潔めよ三 人々に向つて参詣を宣告せよ。彼等を徒歩にて来らしめ、また遠路瘠駝に乗りて来らしめよ三 これ彼等をして参詣による数々の功德¹を目睹せしめ、定められたる日数の間²、彼が彼等に賜へる家畜の上にアルラーハの名を唱へしめ、然る後に之を食ひ、且窮困者並に貧者にも之は食はしめんがためなり三 然る後に彼等の蓬髪を了らしめ³、彼等の誓言を完了せしめ、而して古き宮⁴を周行せしめよ三 これ定例たるべ

し。而してアルラーの禁戒を遵守する者は、主の目に嘉しとせらる。既に汝等に告げられたるものを除き、総ての家畜の肉は合法なり。さらば偶像の不浄を避け、虚偽の言を避けよ。アルラーの堅信者として、何者をも彼に配する勿れ。アルラーに神々を配する者は、恰も天上より落下せる者の如し。鳥之を奪ひて飛び去り、或は風に吹かれて遠方に至らん。これ律例たるべし。アルラーの象徴を大ならしむる者は、其心敬虔なるより発するなり。汝等は定められたる時までに、種々なる利益を彼等より受く。而して彼等は古き宮にて犠牲に供へらる。

(1) 例へば物質的には参詣期にメッカを中心として行はるる盛大なる取引による利益、精神的には回教最大の勤行を果たせる功德等々。(2) 回教曆第十二月初十日。(3) 参詣者はメッカ郊外の聖駅にて『禁忌』に入り、薙髮・剪髯・剪爪等を禁ぜらる。而して十二月十日の献祭節を以て禁忌を了り、初めて髪を理め、髯を剃り、爪を剪る。(4) 方殿。(5) アルラーの『象徴を大にす』とは、或は多大の犠牲を献ずることとし、或は禁戒を遵守することとし、或はメッカ四周の第二次の聖蹟を重んずることとせらるるも、予は前後の諸節に鑑みて第一の解釈を取る。

吾は一切の教團に献祭の儀礼を定め、彼が彼等に賜へる家畜を屠るに当りて、アルラーの名を唱へしむ。汝等の神は唯一の神なり。されば汝等之に帰命せよ。謙虚者に吉報を傳へよ。謙虚者とはアルラーの名の唱へらるるを聞き、其心敬畏に満ち、能く其の遭遇することに耐え忍び、

わが賜へるものにて喜捨を行ふ者なり云

汝等を益するところ多き駱駝は、われ汝等に命じて之をアルラーハに供へしむ。されば之を屠るに当りては、彼等が整列して立てる間に、彼等の上にアルラーハの名を唱へよ。而して彼等が仆れたる後に之を食ひ、且物乞はずして満足する者並に物乞ふ者にも之を食はしめよ。是くの如く吾は彼等を汝等の用に服せしむ。汝等恐らく感謝せん云 彼等の肉は決してアルラーハに達せざるべし、彼等の血もまた然り。されど汝等の敬虔は必ずアルラーハに達せん。吾はアルラーハが汝等に賜へる嚮導に対して、汝等をして彼を讚美せしめんがため、彼等を汝等の用に服せしむ。されば善事を行ふ者に吉報を傳へよ云

げにアルラーハは信ずる者を護る。げにアルラーハは一切の背信にして忘恩の者を欣ばず云 迫害せられたるために戦ふ者には戦争を許す。げにアルラーハには彼等を佑助する力あり云 彼等は唯だ『吾等の主はアルラーハなり』と言へる故を以て、不当に其の家郷より逐はれたる者なり。若しアルラーハが一を以て他を討つことなかりせば、げに修道院、耶蘇教会、猶太教会堂、並に不斷にアルラーハの名が唱へらるる眞教の礼拜堂は、悉く破毀し去られしなるべし。アルラーハ

は彼を助くる者を助く。げにアルラーハは強大者・偉力者なり。わが地上に安住せしむる者にして、若し能く礼拝を守り、捐課を納め、正義を勧め、不義を阻まば、吾必ず彼等を助けん。萬事の歸着するところはアルラーハなり。

彼等は汝を虚言者と呼ぶ。されど彼等以前にもノアの民、アアド及びサムード、アブラハムの民及びロトの民、ミディアンの民、並にモーゼの民も、またその諸豫言者を虚言者と呼べり。吾は永く不信者を忍びたりしが、遂に彼等を襲ひたり。その轉變の如何に激しかりしぞ。吾は如何に多くの都府を其の不義を行へる間に滅ぼせることぞ。そは頽れて家根の上に落ちたり。また廢墟に歸せる如何に多くの井泉と高樓とのあることぞ。彼等は地上を遍歴せざりしか。彼等は曉る心と聽く耳とを有たざるか。げに失明せるは彼等の肉眼に非ず、盲目となれるは其胸にある心なり。彼等は汝に向つて懲罰を催促す。アルラーハは断じて其の約束を破らず。唯だ汝の主の一日は、汝等が計算する千年に當る。吾は如何に多くの都府が不義を行ふを忍び、而して遂に之を襲ひしことぞ。げに一切は吾に歸る。

言へ「人々よ、吾は唯だ汝等への公然の警告者にすぎず。信じて善事を行ふ者には宥恕と豊か

なる糧餉とあるべくミ わが休徴を無効ならしめんと努むる者は火獄の党侶ともがらなり』とミ

汝¹以前にわが遣はせる使者又は豫言者は、一人として黙示の誦出に際し、サタン之に何事かを示唆せざるはなかりき。されどアルラーハはサタンが示唆せるものを廢して其の黙示を整備せり。げにアルラーハは能知者・聰明者なりミ これアルラーハがサタンの示唆せるものを以て、其心に病ある者並に其心頑固なる者を試みんがためなりき。げに不義者は遠く眞理より離れたる者なりミ そはまた既に知識を賜はれる者をして、其の汝の主よりの眞理なるを知りて之を信じ、其心を謙虛にして彼に歸命せしめんがためなりき。げにアルラーハは信者を直き道に導く嚮導者なりミ 不信者に至りては、復活の日が突如として彼等を襲ふか、又は荒廢の日の懲罰が己れの上に降るまで、決して疑惑を止めざるべしミ 此日の大権はアルラーハに在り。彼は彼等に対して審判を行はん。而して信じて善事を行へる者は、歡喜の樂園に入るべくミ 信ぜずして吾が休徴を虚偽なりと言へる者は、げに羞づべき懲罰を受けんミ

(一) 此の一段はマホメットが古蘭第五三章の誦出に当り、極めて妥協的なる教節によつて、メッカ市民の心を和げんとせしが、後に天使の激しき非難を受け、代ふるに最も非妥協的なる教節を以てせるため、一層市民の敵意を煽れる時、マホメ

アトを慰安するために降されたる啓示とせらる。第五三章第二〇節以下参照。

アルラーハの道に移住し、其後に殺され又は死にたる者は、アルラーハ必ず之に善美なる糧餉を賜はらん。げにアルラーハは最勝の供養者なり^一。彼は必ず彼等が欣ぶ門より彼等を入らしめん。げにアルラーハは能知者・大度者なり^二。こは律例たるべし。害を加へられたる者が同様の行爲を以て報復し、而もまた迫害を蒙むる場合は、アルラーハ必ず彼を助くべし。げにアルラーハは赦免者・宥恕者なり^三。これアルラーハが晝を夜に踵がしめ、夜を晝に踵がしめんがためなり。げにアルラーハは能聞者・能見者なり^四。これアルラーハが眞理にして、彼等がアルラーハ以外に祈る神々は虚偽なるが故なり。げにアルラーハは至高者・至大者なり^五。

(一)此の一段はマホメットと共にメチナに移住せる遷士に対する激勵なり。(二)不当なる迫害を信者に加へたるメッカ市民に対する報復を是認せるものなり。(三)晝は順境、夜は逆境と解すべし。いま榮ゆる者が亡び、いま迫害せらるる者が勝利を得べしとの約束なり。

彼等は見ざるか、アルラーハ水を天より降せば大地の緑となることを。げにアルラーハは仁慈者・悉知者なり^六。天地間の一切のものは彼に属す。げにアルラーハは富有者・可頌者なり^七。彼

等は見ざるか、アルラーハは地上一切のものを汝等に従はしめ、其命によつて船を海上に走らしめ、其命によつて天を支へて之を地に落ちざらしむることを。げにアルラーハは人間のために大慈者・大慈者なり。生命を汝等に與へ、次で之を死なしめ、次で之を甦らしむるは彼なり。げに人間は忘恩なり。

吾は一切の教團に其の守るべき儀礼を定めたり。されば此事に関して彼等を汝と争論せしむる勿れ。唯だ彼等を汝の主に招げ。げに汝は正しき嚮導の上にある。彼等若し汝と争論しなば即ち言へ『アルラーハは汝等の爲すことを知る。彼は復活の日に於て、其の争論せることについて汝等を審判すべし』と云。汝はアルラーハが天地間の一切のものを知れることを知らざるか。そは載せて經典にあり、又そはアルラーハにとりて易々たることなり。彼等はアルラーハが如何なる權威をも與へざる者、また之について如何なる知識をも有たざる者を、アルラーハ以外に拜す。げに不義者には如何なる佑助者もなからん。

わが休徴が明証として彼等に誦出せらるる時、汝は不信者の面上に侮蔑の色あるを認めん。彼等

は吾が休徴を彼等に復誦する者に向つて、殆ど突撃を加へ来らんとす。言へ『吾は更に惡きことを汝等に告げん。そは火獄なり。アルラーハは信ぜざる者に之を約束す。げに惡き行先なり』と

人々よ、われ汝等のために一比喻を説くが故に之を聽け。アルラーハを舍きて汝等が拜する者は、一匹の蠅をだに創^{つく}ることを得ず。また蠅が何ものかを彼等より奪ひ去るも、之を奪回する力なし。喚ぶ者も喚ばるる者も、げに無力なるかな

彼等はアルラーハの稜威^{みいつ}を正しく料らず。アルラーハは強大者・偉力者なり。アルラーハは天使並に人間のうちより使者を選ぶ。アルラーハは能聞者・能見者なり。彼は彼等以前にありしものを知り、彼等以後にあるものを知る。而して萬物は彼に歸る

汝等信者よ、鞠躬し叩首して汝等の主を拜し、而して善事を行へ。然らば汝等榮ゆべし。アルラーハのために善戦せよ。彼は汝等をして善戦せしむるに足る。彼は汝等を選びたり。而して彼は宗教に於て如何なる難事をも汝等に課せず。宗教とは即ち汝等の祖先アブラハムの信仰なるが故なり。彼は以前も今も汝等を歸命者^{ムスリム}と名づけたり。これ使者を汝等の証人たらしめ、汝等を使者の証人たらしめんがためなり。されば礼拜を守り、捐課を納め、堅固にアルラーハを護持せよ、彼は汝

等の愛護者なり。何たる愛護者なるぞ、何たる佑助者なるぞか

第二十三 信 者 章

メッカ啓示

第一節に『信者こそ幸福なれ』とあり、且全章を通じて信者の最後の勝利を説くが故に信者章 *Al-Mu'minun* と名づけらる。メッカ末期の啓示とせらるるも、メデナ初期の啓示を混ず。メッカ啓示にメデナ遷都以後に訂正せるものあること他章と同じ。

大悲者大慈者アルラーハの名によりて

信者こそ幸福なれ一 謙虚に礼拝する者^二 空論を避くる者^三 喜捨を励む者^四 羞かしき処を護る者^五 但し其妻並に其の右手が所有する者に対する場合を除く。此等に対しては罪なし^六 されど此等の者以外に其欲を満たさんとする者、彼等は違背者なり^セ 信託と誓約とを守る者、礼拝を厳守する者^八 此等は樂園を嗣ぐ者にして^九 長久に其中に住まん^{一〇}

(一) 本章の序言たる此の一段はメデナ啓示なり。

吾は精泥より人間を創り^三 次で之を一涓滴となして安全なる個処に藏め^三 次で其の涓滴より一凝血を創り、次で其の凝血より一肉塊を創り、次で其の肉塊より骨を創り、次で肉を以て其骨を

包み、然る後に別個の生類として彼を造れり。されば最勝の創造者アルラーハを讃へよ^四 然る後に汝等は死し^五 然る後に復活の日に甦らしめらる^六

吾は汝等の上に七つの天界を創れり。而して吾は吾が創れるものを閑却せず^七 吾は水を天より降し、然る後に之を大地に留まらしむ。而して吾は之を撤去し得べし^八 吾は之によつて汝等のために棗椰子園並に葡萄園を創れり。園内に多くの果実ありて汝等之を食ふ^九 またシナイ山中に生ずる一樹あり^{一〇} 油を産し且嗜食者のために調味料を産す^{一一} 而して家畜にもまた汝等への教訓あり。吾は彼等の腹中にあるものを汝等に飲ましめ、汝等多くの利益を彼等より得る上に、其肉をも食ふ。汝等は彼等並に船舶によつて運ばる^{一二}

(一) オリーブ樹。ホロヴィッツ Horowitz はシナイ山がオリーブ山と混同せられたるならんとなす。

われノアを其民に遣はしたり。彼曰く『吾民よ、アルラーハに事へよ、彼の外に汝等の神なし。汝等其身を護らざるか』と^{一三} 其民のうちの信ぜざる貴人等曰く『此は吾等と等しく一個の人間にすぎず。彼は唯だ汝等の上に立たんとするのみ。アルラーハ若し欲しなば、彼は天使を遣はさん。吾等は古の祖先に是くの如きことありしを聞かず^{一四} 彼は憑かれたる者のみ。待て、暫く彼を見

よ』と云 彼曰く『主よ、吾を佑けよ。 彼等われを虚言者と呼ぶ』と云 吾即ち彼に默示して曰く『わが眼前にて吾が示唆に従ひて舟を造れ。わが命令下りて水が谷より迸り出づる時、各種生類の一對兩個と、宣告既に降れる者を除く汝の一家とを乗船せしめよ。不義を行へる民のために吾に嘆願する勿れ。見よ、彼等必ず溺るべし』 其時汝並に汝と共に舟中に安坐する者は『吾等を不義の民より救へるアルラーハを讃へよ』と唱へよ 而して言へ『主よ、吾等を無事に下船せしめよ。 げに汝は最も善く下船せしむる者なり』と云 げに此中には種々なる休徴あり。吾は彼等を試みたるなり』

われ彼等の後に他の一世代を挙げたり』 吾は彼等の間より選べる一使者を彼等に遣はして是く言はしめたり『アルラーハに事へよ、彼の外に汝等の神なし。汝等其身を護らざるか』と云 然るに其民のうちの貴人にして、アルラーハを信ぜず、末日の会見を虚偽なりとし、而も吾之に現世の榮華を興へたる者は曰く『此は汝等が食ふ物を食ひ、汝等が飲む物を飲む汝等と等しき一個の人間にすぎず』 汝等若し己れに等しき人間に従はば、汝等は必ず淪喪者とならん』 彼は汝等を威嚇して、汝等死して塵と骨とに歸したる後、再び墓中より甦らしめらると言ふか』 一蹴せよ、彼の威嚇を一蹴せよ』 吾等には唯だ現世の生活あるのみ。吾等は死し、吾等は生く。されど吾等は断じ

て甦らしめらるることなし。彼はアルラーハについて虚構する者に外ならず、吾等は彼を信ぜず』
と言。彼曰く『主よ、吾を佑けよ。彼等われを虚言者と呼ぶ』と言。彼曰く『幾くもなくして彼等
必ず後悔せん』と言。かくて轟然たる一声まさしく彼等を襲ひ、吾は彼等を奔流に流し去らるる塵
芥となせり。さらば不義の民を一蹴せよ¹』

(1) 此の一段は既に幾たびか繰返されたるアアド又はサムードの民に関するものにして、使者はホード又はサーリヒなり。

われ彼等の後に他の諸世代を挙げたり。如何なる民も其の定められたる時より先んずるを得
ず、また遅るることも得ず。吾は相次いで使者を遣はしたり。されど一使者の一民に至る毎に、
彼等は常に之を虚言者と呼べり。されば吾必ず一をして他の跡を追はしめ¹、之を以て彼等の殷鑑た
らしめたり。さらば不信の民を一蹴せよ』

(1) 逐次不信の民に対して懲罰を加へ、滅亡の運命を繰返さしめたること。

吾はわが休徴と明白なる権威とを與へてモーゼ並に其兄アロンを、ファラオ並に其の貴人等に遣
はしたり。然るに彼等は自ら大なりとせり。げに彼等は高慢なる民なりき。彼等曰く『吾等豈
吾等と等しき二個の人間を信すべけんや。而も彼等の民は吾等の奴隸に非ざるか』と言。かくて彼

等は兩人を以て虚言者となし、淪喪者のうちに加はりたり

吾は彼等を導かしむるためにモーゼに經典を與へたり〇 吾はまたマリアの子と其母とを一個の
「休徴たらしめ、靜安にして井泉湧く高地に彼等兩人を住ましめたり〇 主曰く『使者等よ、佳き物
を食ひ、善き事を行へ。吾は汝等の爲すことを熟知す〇 汝等の此教は同一不二の教にして、吾は
汝等の主なり。されば汝等吾を敬へ』と〇 然るに彼等は經典のことによつて彼等の間に其教を分
割し、各派皆な己れの有てるもののみを重んず〇 されば暫く混亂のままに彼等を放任せよ〇

(一)この一段は猶太人並に基督教徒を対象とするものにて、同一宗教を奉じながら、一はモーゼの律法を、他はイエスの福音を固執することを非難せるもの。恐らくメヂナ啓示なり。

彼等は、われ豊かに財宝と子女とを彼等に與ふることを以て、吾は種々なる幸福を彼等のために
急ぐものとするか。(断じて然らず)、されど彼等は之を識らず〇 げに其主を畏れて戦く
者〇 其主の休徴を信する者〇 何者をも其主に配せざる者〇 必ず其主に歸るべきことを念ひ、
其胸を敬畏に満たしてその喜捨する物を與ふる者〇 此等こそ種々なる幸福に急ぐ者にして、すなわち 首先に

之を獲べき者なれど

吾は何人にもその能力以上の事を課せず。吾には眞実を語る書冊あり。彼等は不当に遇せらるることなし。然らず、彼等の心は之¹に関して甚だしく無智にして、その為すところは遙かに之²と異なれり。而して彼等はその為すことを続けん。されどやがて吾は彼等のうちの栄耀を極むる者を膺懲せん。見よ、其時に及んで彼等初めて號泣せん。〔其時はく言はるべし〕『今に至りて號泣するを止めよ。汝等断じて吾が佑助を受けざるべし。わが休徴は汝等に讀誦せられたり。されど汝等常に踵を回して去り矣。之³に対して高慢に振舞ひ、夜陰に空しき議論を交したり』とぞ

(1) この『之』は古蘭又は訓誡を指す。(2) この『之』は恐らく信者の行爲として前節に列挙せられたる事を指す。

(3) 此の『之』は古蘭の諸節を指す。但しセール及びパーマーは『之』をメッカ聖殿を指せるものとして、此の一句を『聖殿を所有することを誇りて』の意味に解せり。

彼等は告げられたることを静思せざるか。又は古の彼等の祖先に來らざりしものが彼等に來れるか。又は彼等その使者を認めずして之を拒むか。又は『彼は幽鬼に憑かれたる者なり』と言ふか。断じて然らず、彼は眞理を以て彼等に來れるなり。然るに彼等の多くは眞理を忌避す。若し

眞理が彼等の私欲に従はば、天地と天地間にあるものとは悉く頽敗し去らん。断じて然らず、吾は彼等への訓誡を齎して来れるなり。然るに彼等は其の訓誡に背き去る也。

又は汝は報酬を彼等に求むるか。汝の主の報酬に更に善し。彼は最勝の給與者なり也。げに汝は彼等を直き道に招ぐ也。而も見よ、末世を信ぜざる者は道を逸す也。而して吾設ひ慈悲を垂れて彼等の災厄を除くとも、彼等依然として傲慢に、空しく迷路を彷徨せん也。吾曾て彼等に懲罰を加へしも、彼等尙ほ其主に従はず、また其心を謙虚ならしむることなかりき也。されど吾やがて重刑の門を彼等の前に開かん。此時初めて彼等愕然たらん也。

汝等のために耳と目と心とを造れるは彼なり。然るに汝等殆ど感謝せず也。汝等を地上に散布せるは彼なり。而して汝等は彼に集められん也。生死を與ふるは彼なり。晝夜の循環を制するもまた彼なり。汝等尙ほ曉らざるか。否、彼等は古人が言へると同一の事を言へり也。彼等曰く『何事ぞ、吾等一旦死して塵と骨とに歸したる後、また甦らしめらるることあるべきか』。吾等も吾等の祖先も曾て此事を約束せられず。こは唯だ昔語にすぎず』と云。

言へ『大地並に地上一切のものは誰に属するか。汝等之を知るか』と云。彼等言はん『アルラーハに』と。言へ『汝等尙ほ念はざるか』と云。言へ『七天の主、莊嚴なる王座の主は誰ぞ』と云。

彼等言はん『アルラーハ』と。言へ『汝等尙ほ彼を敬はざるか』と云。言へ『萬物を総攬する大権を握り、他に加護を興へて己れは之を求めざる者は誰ぞ、汝等之を知るか』と云。彼等言はん『アルラーハ』と。言へ『然らば何によつて惑はしめられたるか』と云。

然らず、吾は眞理を彼等に齎したり。されど彼等は虚言者なり云。アルラーハに断じて子なし。

また彼と同位なる如何なる神もなし。若し有らば各神皆な己れの創造せるものを提げて割據し、一は必ず他と覇を争はん。アルラーハを讚へよ、彼は高く彼等の稱ふるところのものの上に超在す云。

言へ『主よ、汝若し彼等が威嚇せらるることを吾に示さば！』云。主よ、吾を不義の民の間に居らしむる勿れ』と云。げに吾は彼等が威嚇せらるることを汝に示し得べし云。善を以て惡を析伏せよ。

吾は彼等が言ふことを熟知す云。言へ『主よ、吾はサタン等の誘惑に対して汝に加護を求む云。主よ、吾はサタン等が吾前に現はるることに対して汝に加護を求む』と云。

死が彼等の一人に臨む時、彼は言はん『主よ、吾を還らしめよ云。吾は遺棄し来れる善事を行はん』と。然らず、彼の言ふところは空言にすぎず。彼等の背後には、その甦らしめらるるまで一個の隔離あり云。

(1) 回教神学者は人間の死亡より復活に至る間を『隔離 Barzakh』と名づく。

喇叭吹かるる時、其日彼等の間に血縁の絆は絶え、互に援助を求め得ざらん^二。その秤量重き者は榮え^三。秤量輕き者は其身を喪ひて永劫に地獄に住まん^三。烈火は彼等の面を焦がし、彼等苦悶して其口を歪めん^四。(彼等に是く言はれん)『吾が休徴は汝等に復誦せられざりしか。汝等之を虚偽なりと言はざりしか』と^五。彼等言はん『主よ、吾等是不運に打負けたるなり。吾等は迷へる民なりき^六。主よ、此処より吾等を出でしめよ。吾等若し再び迷ふことあらば、吾等是不義の民たるべし』と^七。主言はん『火中に逐ひやれ。吾に物言ふこと勿れ^八。げにわが僕等のうちには是く言へる者あり』主よ、吾等は信ず。されば吾等を赦して慈悲を垂れよ。汝は最勝の大悲者なり^九と^九。然るに汝等は常に之を嘲笑し、吾を念ずることを懈りて彼等を笑ひたり^{一〇}。げに今日吾は彼等に報いたり、げにいま彼等は凱旋者なり』と^{一一}。

彼は言はん『汝等は幾年地上に滞留せるか』と^{一二}。彼等答へん『一日又は半日なるべし。されど善く計算する者に問へ』と^{一三}。彼曰く『汝等は暫く滞留せるにすぎず^二。汝等此事を知りたりせば!』^{一四}。汝等はわれ娛樂のために汝等を創れりと思へるか。また汝等は吾に歸らずと思へるか』

(1) 各人の監督者たる天使を指す。(2) 暫時とは永遠の苛責に比して人生の短きを言ふ。

眞実の王者アルラーハは崇高なるかな。高貴なる王座の主たる彼の外に神なしニ。如何なる証據もなくして他の神々をアルラーハと共に拜する者、げに彼の清算は其主の許にあり。げに不信者は榮えざるべしニ。言へ『主よ、赦して慈悲を垂れよ。汝こそ最勝の大悲者なれ』とニ。

第二十四 光明 章

メチナ啓示

第三五—四〇節にアルラーハの光明について述ぶるに因みて光明章 *Al-Nur* と名づけらる。信者の家庭にアルラーハの光明を照被せしめんとするものにして、主として家庭生活を純潔ならしむるための律法を定む。第一—二〇節はマホメットの愛妻アイシヤに対する誹謗に關聯せるものなるが、それは遷都五年のことなるを以て、本章の大部分は遷都五・六年間の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

こは吾が降せる一章にして、律例として裁可せるものなり。われ汝等を訓誡せんがために、其中に明白なる休徴を降したり。

淫婦並に姦夫には、各自百杖を加へよ。汝等若しアルラーハと末日とを信するならば、アルラーハの命を報ずるに当り、彼等に対して憐憫の情に左右せらるる勿れ。而して一團の信者に彼等の受刑を目睹せしめよ。姦夫は淫婦又は多神教徒以外の女子と結婚することを得ず。淫婦もまた姦夫又は多神教徒以外の男子と結婚するを得ず。此事は信者に禁ぜらる。

貞潔なる女子に対して悪声を放ち、而も四名の証人を挙げ得ざる者には、八十杖を加へよ。後日に至りて彼等の立証を受くる勿れ。彼等は違背者なり^四。但し後に懺悔して善事を行ふ者を除く。アルラーハは宥恕者・大慈者なり^五。

其妻に対して悪声を放ち、而も彼等自身以外に証人なき場合は、各自をしてアルラーハを証人として己れの言の眞実なることを四度誓はしめよ^六。而して五度目には『若し己れの言虚偽ならば、必ずアルラーハの呪咀を受けん』と誓はしめよ^七。妻若しアルラーハを証人として、四度彼の言の虚偽なるを証言する場合は刑罰を免る^八。而して五度目には『若し彼の言眞実ならば、アルラーハの憤怒必ず吾上に降らん』と証言せしめよ^九。若しアルラーハの恩寵と慈悲となく、またアルラーハが允懺悔者・聰明者ならざりせば！^{一〇}

げに此の虚言を放ちたるは汝等のうちの一團なり。之を以て災厄と思ふ勿れ、そは汝等のために幸運なり。彼等は各自その犯せる罪を負ふべく、彼等のうち之を大にせる責任者は重刑に処せらるべし^二。汝等之を聽きたる時、何故に男女の信者は己が心中にて善意の判断を下し、こは明白なる虚偽なりと言はざりしか^三。何故に彼等は之に対して四名の証人を挙げざりしか。彼等が証人を挙げざりしことよりすれば、アルラーハの目に彼等は虚言者なり^三。若し汝等に対するアルラーハの恩

寵と、現世並に来世に於ける彼の慈悲となかりせば、汝等の不謹慎なる談話に対して、必ずや汝等の上に嚴罰降りしなるべし。其時汝等其舌を以て互に此事を授受し、其口を以て己れの知らざることを語り、アルラーハの目には重大なることを、些事の如く考へたり。其時汝等何故に言はざりしか、『こは吾等の口にすべきことに非ず。栄光汝の上にあれ、こは甚だしき誹謗なり』と云。汝等若し信者ならば、アルラーハは汝等が是くの如きことを断じて再びすべからざることを命ず。アルラーハは汝等に休徴を明示す。アルラーハは能知者・聰明者なり。げに信者の間に此の醜聞の弘まることを欣ぶ者は、現世並に来世に於て必ず嚴罰を受けん。彼は知らざるもアルラーハは知る元。若し汝等に対するアルラーハの恩寵なく、またアルラーハが大悲者・大慈者ならざりせば！云。

(1) 此の一段はマホメットの妻アイシヤに関する醜聞が喧傳せられたる時に降されたる啓示とせらる。『此の虚言』とは事実無根なる誹謗の意味なり。傳承は下の如く語る。遷都五年マホメットはムスタリク Mustaliq 族討伐のため、アイシヤを伴ひて出征せしが、その凱旋途上アイシヤは事によつて一行に遅れ、一夜を路頭に明かしたる後、翌朝偶々通りかかれるサフワーン Saifwan ibn Muattal の駱駝に乗りてメヂナに帰着せしが、このためにアイシヤとサフワーンとの間に面白からぬ噂立ちたり。而して『事を大にせる責任者』は即ちアフダラーハ・イブン・ウバイにして、偽信者多く之を信

じ、信者の中にも疑心を抱く者あるに至れり。アリーの如きは即ち其の一人にして、爾来アイシヤは深刻なる敵意をアリ
ーに対して抱くに至れり。この啓示は是かる醜聞を否定するものなり。此の事件の最大の責任者アダラーハは、勢力餘り
に強大なりしが故に除外せられしも、其他の誹謗者は本章第四節の掟に従ひ、八十杖の笞刑に処せられたり。

汝等信者よ、サタンの足跡に従ふ勿れ。汝等若し彼の足跡に従はば、彼は必ず醜行と悪事とを汝
等に強いん。若し汝等に対するアルラーハの恩寵と慈悲となかりせば、汝等一人として清浄なるは
なかりしなり。されどアルラーハは己れの欲する者を潔くす。アルラーハは能聞者・能知者なりニ
汝等のうち財力あり能力ある者をして、その近親、貧者、及びアルラーハのために移住せる者に
対して施與せずと誓はしむる勿れ。彼等を赦して寛大なれ。汝等はアルラーハが汝等を赦すことを
欣ぶに非ざるか。アルラーハは宥恕者、大慈者なり¹三

(1) 此の一節は、アブー・バクルが其の貧困なる近親の遷士に対し、彼がアイシヤを誹謗せる故を以て、従来彼に與へ
たる扶助を止むべしと誓へることに対して降されたりとせらる。

思慮なけれども貞潔なる女子に対して悪声を放つ者は、現世並に末世に於て嚴罰を受くべし^三
彼等の舌と手と足とは、復活の日に於て、彼等の為せることを立証すべし^三 其日アルラーハは、

彼等が受くべき報償を存分に拂ひ、彼等をしてアルラーハが顯然たる眞理なることを知らしむべし^三

不淨の女子は不淨の男子に、不淨の男子は不淨の女子に宜しく、また清淨の女子は清淨の男子に、清淨の男子は清淨の女子に宜し。清淨なる男女は人言に累せらるることなし。彼等のためには宥恕と高貴なる糧餉とあらん^三

汝等信者よ、許可を求めず、また家人に挨拶することなくして、自宅以外の家に入ること勿れ。これ汝等のために善し。されば此の訓誡を守れ^三。家に人なき時は、許可せらるるまで之に入ること勿れ。帰れと言はれたる時は帰れ。そは汝等にとりて潔し。アルラーハは汝等の爲すことを知る^三。汝等自身の必要品を藏する無人の家に入ることとは罪なし。アルラーハは汝等が陽に陰に爲すことを知る^三

男子の信者に向つて、其目を伏せ、羞かしき処を護れと告げよ。是くするは彼等にとりて最も潔し。アルラーハは彼等の爲すことを知る^三。女子の信者に向つて、其目を伏せ、羞かしき処を護り、外に露れたるものの外は彼女等の裝飾を示す勿れと告げよ。また面幕を其胸まで垂れ、己れの夫又

は父、又は夫の父、己れの子又は夫の子、己れの兄弟の子並に姉妹の子、信者たる女子、女婢、性欲なき男僕、女陰について知るところなき幼者を除き、其等以外の者に彼女等の装飾を示す勿れと告げよ。また彼女等の隠せる装飾が人目に触るるほど其脚を高く挙げしむる勿れ。汝等信者よ、汝等若し榮えんとすれば、一齊にアルラーハに懺悔せよ^三

汝等のうちの独身者、及び汝等の男子奴隸並に女子奴隸のうちの敬虔なる者は、宜しく結婚すべし。彼等若し貧困ならば、アルラーハは恩恵を垂れて之を富ますさん。アルラーハは洪恩者・能知者なり^三 結婚の資力なき者は、アルラーハが慈悲を垂れて之を富ましむるまで自制せよ。汝等の奴隸のうち、解放証明書を求むる者ありて、汝等彼等の善なることを知らば¹、即ち書きて之を與へ、且アルラーハが汝等に賜へる物の一部を彼等に與へよ。汝等の女子奴隸のうち貞操を守らんと欲する者あらば、現世の儂き利得を求めて淫行を彼女等に強いる勿れ²。設ひ強要する者ありて淫行を敢てせしめらるるとも、アルラーハは彼女等に対して宥恕者・大慈者なるべし^三 吾は明瞭なる休徴と、汝等以前に世を逝りし人々の先例³とを降したり。これ其身を護る者への訓誡なり^三

(一) 『善なること』とは信者にして堅く教を守ること。(二) 此の一句は、偽信者の首領アブダラーハ・イブン・ウバイが、六人の女子奴隸を娼婦たらしめんとせる時、彼女等の一人が之をマホメットに訴へたりし時に降れる啓示とせらる。

(3) 先例とはヨセフ及びマリアのことを指す。却ちアーイシャと同じく無実の非難を受けたりとするなり。

アルラーハは天地の光明なり。譬ふれば其の光明は燈ともしびを置ける龕がんの如し。燈は玻璃の中にあり。玻璃は燦爛たる星の如く、其の燃ゆるは祝福せられたる一樹よりす。此樹は東方のものに非ず、西方のものにも非ざるオリブ樹にして、此樹の油は殆ど火の之に触るるなくして光明を發す。そは光に光を加ふるなり。アルラーハは己れの欲する者を彼の光明に導く。而してアルラーハは比喩を以て人に語る。げにアルラーハは一切を知る言。此の燈明はアルラーハの允許によつて建てられ、不断に彼の名が唱へらるる巍々たる家の中にあり。其処にて人々朝な夕な彼を讚美す言。彼等は商事や交易のためにアルラーハを念ずることを懈らず、能く礼拝を守り、捐課を納め、心も目も共に顛倒し去るべき日を怖る言。アルラーハは彼等の為せる最善の事に対して彼等に報い、且其の慈悲を垂れて報償を加増すべし。アルラーハは己れの欲する者に限りなく賜與す言。

信ぜざる者は、譬ふれば其の所行は蜃気楼の如し。渴者之を望み見て水となし、往きて其処に到れば一物を見ず、唯だ眼前にアルラーハの懲罰を見るのみ。彼は不信者が受取るべきものを存分に支拂はん。げにアルラーハの清算は神速なり言。又は之を深海中の黒闇に譬ふべし。波浪彼の上を

覆ひ、波浪の上にまた波浪あり。加ふるに黒雲海を蔽ひて黒闇互に重疊し、かれ其手を展ぶるも其手を見ず。げにアルラーハが光明を與へざる者には如何なる光明もなし。

汝、天地間一切の者がアルラーハを讚美し、飛鳥さへも翼を展べて亦然るを見ざるか。各自皆な其の礼拜と讚美とを知る。而してアルラーハは彼等の為すことを知る。天地の大権はアルラーハに屬し、アルラーハは萬物の歸趨なり。アルラーハは雲を驅り、次で之を集め、更に之を積み、やがて滋雨其間より出づ。汝は之を見ざるか。彼は氷雹を包む山の如き雲を天より降し、之を以て己れの欲する者を撃ち、欲する者を避く。而して其の電光は人目を奪はんとす。またアルラーハは晝夜を更代せしむ。げに此中には具眼者への教訓あり。またアルラーハは水にて各種の生類を創れり。その或者は腹にて歩み、或者は二足、或者は四脚を以て歩む。アルラーハは己れの欲する者を創る。げにアルラーハは全能なり。吾は明瞭なる休徴を降したり。アルラーハは己れの欲する者を直き道に導く。

彼等¹曰く『吾等はアルラーハ並に其の使者を信じて之に従ふ』と。然るに其後彼等の一部は背き去れり。此等は決して信者に非ず。而して彼等はアルラーハが彼等を裁判せんがために、アルラ

一ハ並に其の使者の前に召喚せらるる時、見よ彼等の一部は之を忌避す。若し正義彼等にあらば、彼等直ちに欣んで彼の前に出づべきなり。又は彼等疑心を抱くか、又はアルラーハ並に其の使者が不公平に彼等を裁判することを恐るるか。然らず、彼等是不義者なり。アルラーハ並に其の使者が信者を喚びて之を裁判する時、信者は唯だ『吾等は聽き且従ふ』と言ふべきなり。此等は榮ゆべき者なり。アルラーハ並に其の使者に従ひ、アルラーハを畏れて之を敬ふ者、此等は勝利を得べき者なり。

(一) 『彼等』とはメヂナの偽信者を指す。彼等のうちにはマホメットが絶對的に司法権を掌握することに不平を抱く者ありしなり。恐らくウホド役後の啓示なり。

彼等は汝若し命令を下さば、欣然出征すべきことを神かけて嚴肅に誓ふ。言へ『誓ふ勿れ。正当に服従すれば即ち足る。げにアルラーハは汝等の為すことを知る』と垂言へ『アルラーハに従ひ、使者に従へ。汝等若し背き去らば、彼は彼の責任を負ひ、汝等は汝等の責任を負ふべし。されど汝等若し彼に従はば、汝等は導かるべし。使者の務めは唯だ明白に宣言するにあり』と垂言アルラーハは、汝等のうち信じて善事を行ふ者をして、汝等以前の者に嗣がしめたるが如く、必

ず地を嗣がしむべきことを約束す。彼は彼等のために己れの善しとする教を確立して、彼等の畏懼を平安に易へん。彼等は唯だ吾のみに事へ、何者をも吾に配せざらん。されど其後に不信に復る者は作悪者なり云。汝等慈悲に浴せんがために禮拜を守り、捐課を納め、使者に従へ云。信ぜざる者が神意を地上に蹂躪し得べしと思ふ勿れ。彼等の住処は火獄なり。そは悪き行先なり云。

汝等信者よ、汝等の奴隸並に汝等のうちの未丁年者が汝等の居室に入るに当り、毎日三回は彼等をして汝等の許可を求めしめよ。即ち早朝禮拜の以前、正午脱衣の時、及び初夜禮拜の以後なり。そは汝等の三度の私事の時間なり。之を除けば相互往來することは汝等にも彼等にも罪なし。アルラーハは是くの如く汝等に休徴を明示す。アルラーハは能知者・聰明者なり云。

(1) アラビア其他の熱帯諸國に於ては、正午に脱衣して午睡を取るを一般の風習となす。

汝等のうち幼少なる者が丁年に達する時は、彼等以前の者が然る如く、入室に際して許可を求めべし云。

産兒期を過ぎ、且結婚を望まざる女子は、彼女等の裝飾を露すに非ずば、脱衣するも罪なし。されど之を自制することは彼女等のために最も善し。アルラーハは能聞者・能知者なり云。

盲者、又は跛者、又は病者、又は汝等自身が、己れの家、又は父の家、又は母の家、又は兄弟の家、又は姉妹の家、又は父方母方の伯叔父、伯叔母の家、又は汝等が其鍵を所持する家、又は友人の家にて食事することは罪なし¹。また汝等会合して食事するも、又は單獨にて食事するも共に罪なし。また汝等家に入る時は、アルラーハよりの祝ふべき歡ぶべき挨拶を交はし、互に敬禮せよ。アルラーハは是くの如く汝等に休徵を明示す。汝等恐らく之を會得せん²

(一) 食事に関するアラビアの迷信的風習を打破せるものなり。

アルラーハ並に彼の使者を信する者にして、公共の用件にて使者と共に在る時は、彼の許可を求めたる後ならでは退去せざるを以て眞個の信者となす。而して汝の許可を求むる者は、設ひ己れの用件にて退去を乞ふ者なりとも、アルラーハ並に其の使者を信する者なるが故に、汝の欲する者は之を許可し、且アルラーハの宥恕を求めよ。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり³。使者の召喚を以て汝等相互の間の召喚と同一視する勿れ。アルラーハは汝のうち密かに脱去する者あるを知る。其身を匿して使者の命令に従はざる者には、試練其上に降るか、又は痛刑に遭ふべきことを知らしめよ⁴

天地間の一切のものはアルラーハに属するに非ざるか。彼は汝等の美情を知る。復活の日に彼等が彼に帰る時、彼は彼等に向つて其の爲せることを告知すべし。アルラーハは一切を知る。

第二十五 識別章

メッカ啓示

第一節に『其僕に識別を降せる彼』とあるに因みて識別章 Al-Furqan と名づけらる。識別とは正邪善悪・眞偽の識別を意味し、古蘭の別名なり。而してモーゼの律法もまた此名を以て呼ばる。本章は主としてアラビア当時の迷信を斥け、人が天地創造の偉大なる奇蹟を看過して、小なる異象を求むるの愚を指摘す。ネルデケは本章を以て開教五・六年却ちメッカ中期の啓示となし、ムイアは開教十年以後却ちメッカ末期の啓示なりとす。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

三界への警告者たらしめんがために、其僕に識別フルカーンを降したる彼を祝福せよ一 天地の大権は彼に

属す。彼は子を生まず、何者をも其の大権に參與せしめず。彼は一切を創造し、且その運命を豫定せり^二 彼等は彼以外の神々を拜す。されど彼等は己れ自身が造られたるものにして、自ら一物をも創造せず、己れの利害を左右する力を有せず、生をも死をも復活をも左右する力を有せず^三 信ぜざる者曰く『こは彼が偽造せる謔言はわめごとにすぎず。而して他^一の人々が此爲に彼を助けたり。彼等^二

は不正と虚偽とを敢てせる者なり』と。彼等また曰く『古人の物語なり。朝な夕な彼に口授せられたるを筆記せしめたるなり』と。言へ『之を降せるは天地の秘奥を知れる者なり。げに彼は宥恕者・大慈者なり』と。

(1) 『他の人々』とは猶太人を指すとせらる。メツカ市民はマホメットが屢々猶太人と往来して彼等と論議するを目撃せり。但しシニプレンガーは『不正と虚偽』のために即ち犯罪又は異端を唱へて國外に放逐せられ、アラビアに避難し来れる外國人を指せるならんとせり。(2) 此の一句はガブリエルの言とも解せらる。然る時は『彼等』とはメツカの不信者を指すこととなる。

彼等また曰く『こは何たる使者ぞ。彼は食物を攝り、街頭を往来す。何故に天使が彼に降されて、彼と共に警告者とならざるか。何故に財宝が彼に擲下せられざるか。何故に彼は就て食ふべき果樹園を所有せざるか』と。而して不義者は更に曰く『汝等は憑かれたる者に従ふのみ』と。見よ、彼等が何者に汝を喩ふるかを。彼等は迷へるなり、彼等は道に会はざるなり。彼若し欲しなば、其よりも更に佳きものを汝に賜ふ彼を祝福せよ。そは河川流るる樂園なり。而して彼はまた大層高樓をも汝に賜はらん。

然らず。彼等は復活の日を虚偽なりとす。而して吾は復活の日を虚偽なりと言ふ者のために烈火

を準備せり二 火獄遠くより彼等を見る時、彼等は怒號と呻吟とが之より出づるを聞かん三 而して彼等一括して縛られ、火獄のいと狭き処に投ぜられん。其時彼等声を挙げて一死を希はん二（其時声ありて言ふべし）『今に及んで何の一死ぞ。宜しく萬死を希ふべし』と云 言へ『此の火獄と、其身を護る者に約束せらるる永遠の樂園と、果して孰れが善きか』と。これ彼等の報償にして、彼等の行先たるべし三 彼等は長久に樂園に住みて、其の欲する一切のものを得ん。これ汝の主に懇願すべき約束なり云

復活の日に當り、彼が彼等並に彼等の拜せる神々を一齊に召集する時、彼は言はん『此等の吾僕を迷はしめたるは汝等なるか、將又彼等自ら迷へるか』と云 彼等は言はん『光榮汝にあれ。吾等は汝以外に愛護者を求むる者に非ず。然るに汝は彼等並に彼等の祖先に現世の榮華を與へたり。されば彼等汝の訓誡を忘れて、遂に淪喪の民となれり』と云 （其時主は彼等を拜せる者に向つて言はん）『彼等は汝等の言の虚偽なることを立証せり。彼等には汝等の懲罰を免れしむる力なく、また汝を助くる力もなし。吾は汝等のうちの不義者に重刑を味はしめん』と云

汝以前にわが遣はしたる使者は、一人として食物を取らざるはなく、また街頭を往來せざるはなかりき。吾は汝等の或者をして他の試練たらしめたるなり。さらば汝等耐え忍ぶか。げに汝の主は

不断の照覽者なり

吾との会見を希はざる者は曰く『何故に天使が吾等に降されざるか、又は何故に吾等は目の当り吾等の主を見るを得ざるか』と。げに彼等は其心高慢にして、甚だしき背逆を敢てする者なり。彼等が天使を目睹する日は、作悪者のために如何なる吉報もなき日なり。彼等は唯だ『禁制！』と叫ばん。吾は彼等の爲せることを追求し、之を塵芥の如く四散せしめん。而して此日樂園の党侶は、最勝の住処に居り、最勝の午睡の場処に居らん。

(1) 直訳すれば『それは禁止せられたることなり』とすべし。アラビア人が聖月に於て用いる挨拶にして、かく呼びかけられたる者は其の抱ける敵意を放棄せざるべからず。此処にては不信者が刑罰を免れんとして此言を發するなり。

此日天は雲と共に裂け、諸天使降臨せしめられん。此日眞実の大権は大悲者に属し、不信者にとりて多難の日ならん。此日不信者は其手を噛む日なり。彼等は言はん『吁、吾若し使者と道を共にしたりせば！』吁、吾若し是かる者を愛護者とせざりせば！げに彼は訓誡既に至れる後に吾を迷はしめたるなり。サタンは常に人を裏切る』と云

使者曰く『主よ、げに吾民は此の古蘭を以て空しき饒舌となす』と言 吾は是くの如くにして各

の豫言者に作悪者のうちより一人の敵を作る。されど主は嚮導者・佑助者として不足なし^三。信ぜざる者また曰く『何故に古蘭は一時に彼に降されざるか』と。是くの如くするはわれ汝の心を堅固ならしめんがためなり。吾は之を区分して徐々に汝に默示す^三。而して彼等若し比喩を以て汝に臨まば、われ必ず眞実なる応答と最善なる解釋とを汝に與ふべし^三。地に伏して地獄に集めらるる者、げに此等こそ最悪の境涯に置かれ、迷ふこと最も遠きものなれ^三。

げに吾はモーゼに經典を與へ、其兄アロンを挙げて彼の補佐とせり^三。其時吾曰く『汝等相携へてわが休徴を虚偽なりとする民に往け』と。其後吾は徹底して彼等を殲滅せり^三。またノアの民が諸使者を虚言者と呼べる時も、吾は悉く彼等を溺死せしめて、之を人々への休徴となせり。而して吾は不義者のために痛烈なる懲罰を準備す^三。またアアド、サムード及びラス¹の民、並に其間の幾多の世代^三。吾は各の民を实例を以て警めたり。然る後に徹底して之を殲滅せり^三。彼等²は禍なる雨が降り注ぎし諸都府を過ぎりしことなきか。然らず、彼等は甦らしめらるることを希はざるなり^三。

(1) ラス Ar-Rass については定説なし。或はヤマーマの一都市なりとし、或はハドラマウトのそれなりとし、或はミデアンの一オアシスなりとす。(2) メッカ市民を指す。

彼等汝を見る時は、唯だ汝を嘲笑するを常とす。曰く『アルラーハが使者として挙げたるは此者なるか』^四 若し吾等堅忍して之を護持せざりせば、彼は殆ど吾等を吾等の神々より迷ひ去らしめんとせり』と。されど彼等その刑罰を目睹する時、げに道を迷ふこと遠かりし者が果して誰なりしかを知らん^五 汝はかの己れの私欲を以て神とする者を見たるか。汝は彼等の守護者たらんとするか^六 汝は彼等の多くが聞き且曉ることを期待するか。彼等は唯だ家畜の如し。否な、彼等は家畜よりも遠く道を迷へり^七

汝は汝の主が如何に陰影^一を伸ばすかを見たるか。彼若し欲しなば之を靜止せしむるを得るなり。吾は太陽^二を以て其の案内者となし^三、然る後徐々に之を吾に引き寄す^四

(一) 陰影は不義又は不信を象徴す。(二) 太陽は眞理又は信仰を象徴す。正義の太陽登れば不義の陰影之に伴ふも、遂に消失してアルラーハに帰ることを言ふ。

夜を衣裳とし、睡眠を休息とし、白晝を覚醒の時と定めたるは彼なり^一。その慈悲を降す前に、吉報として風を送るは彼なり。而して吾は清潔なる水を天より降し^二。之によつて死地に生命を興

へ、わが創れる幾多の生畜並に人間に之を飲ましむ

吾は彼等をして吾を念はしめんがために、反復して之¹を行ひたり。然るに彼等の多くは忘恩にして之を否認す吾 吾若し欲しなば、各市に一人の警告者を遣はせるなり^三 されば決して不信者に従ふ勿れ。力を盡して彼等と戦へ^三

(一)此の『之』を註釈家の或者は前段に於ける『雨』と解し、セール、ロッドウェル等之に従へり。然る時は、反復して之を行ふとは、屢々雨を降したることとなる。されど之と全く同一なる表現が第一七章第四一章にありて、此の場合の『之』は明白に古蘭を指す。故に予は此処にても『之』を古蘭と解したり。此の一段は前後と連絡なく、第四九節は次の第五三節に続くものとすべし。

二つの海を自由に流れしむる者は彼なり。一は新鮮にして甘く、他は鹹^{から}くして苦^{にが}し。而して吾は両者の間に越え難き隔壁を築きたり^五 また水より人間を創り、血縁による結合と婚姻による結合とを定めたる者は彼なり。げに汝の主は強大者なり^四 然るに彼等は、アルラーハを舍きて毫も彼等を損益する力なき者を拜す。げに不信者は其主に敵するサタンに左袒する者なり^五

吾は唯だ吉報傳達者並に警告者として汝を遣はせるにすぎず^五 言へ『吾は此爲に如何なる報酬

をも汝等に求めず。吾は唯だ人が其主の道を踏まんことを希ふのみ』と云。永生にして不死なる彼に頼り、彼を讃へよ。彼は其の僕等の罪を知悉す云。彼は六日の間に天地を創造し、然る後に王座に鎮坐す。彼は大悲者なり。知る者について彼のことを問へ云。然るに彼等に向つて『大悲者に叩首せよ』と言へば、彼等曰く『大悲者とは何ぞ。吾等は汝の命する者に叩首すべきか』と。かくしてそは彼等の嫌忌を増長す云。

天上に十二宮を創り、其中に燈明と、光を興ふる月とを置ける者を祝福せよ云。訓誡に従ふ者並に恩を知る者のために、晝夜を循環せしむる者は彼なり云。

謙遜して地上を往来し、愚なる者に声かけらるる時は唯だ『平安』と挨拶する者云。其主の前に叩首し又は端立して夜間をすごす者云。『主よ、地獄の懲罰より吾等を免れしめよ、げに其の懲罰は綿々止むなし云。げに悪き居処なり、悪き住処なり』と祈る者云。財を費すに当りて濫費せず又吝嗇ならず、能く中庸を保つ者云。アルラーハの外に何者をも拜せず、正義によるに非ずばアルラーハが禁じたる人を殺さず、姦淫を行はざる者、げに是くの如き者は即ち大悲者の僕等なり。而して之を侵す者は其罪の報償を受くべく云。復活の日に於て其の懲罰は倍加せられ、地獄に於て永劫

の屈辱を受けん矣。但し懺悔して信仰に入り、善事を行ふ者を除く。アルラーハは彼等のために諸悪を轉じて善事とすべし。アルラーハは宥恕者・大慈者なりき。懺悔して善事を行ふ者は、眞実なる懺悔によつてアルラーハに懺悔する者なりき。

一切の偽証を爲さざる者、空論に遇へば昂然として過ぐる者き。其主の休徴によつて訓誡せらるる時、聾者又は盲者の如く地に俯すことなく、起つて之を傾聽する者き。『主よ、目を欣ばしむる妻子を吾等に賜へ。吾等を神を敬ふ者の模範たらしめよ』と祈る者き。此等の者は其の堅忍に對して高貴なる居處を樂園の中に賜はり、其處にて歓迎と挨拶とを受けん。そは美しき住居なり、安息處なりき。

言へ『汝等若し祈らざりせば、主は汝等を念頭に置かざりしなり。然るにいま汝等は（アルラーハの使者を）虚言者と呼ぶ。やがて汝等必ず永遠の懲罰を受けん』と云

第二十六 詩 人 章

メッカ啓示

章の末尾第二二四節以下に詩人と豫言者との別を指摘せるに因みて詩人章 *Asi-Shu'ara* と名づけらる。本章にも古来の豫言者の物語を繰返せるは、迫害に苦しめる信者を慰むるためなり。即ち神使は皆な同一の使節を帯びて来り、一律に迫害を受くるも、最後の勝利は彼等のものなることを説くなり。メッカ中期の啓示を主とするも、メヂナ遷都以後のものを含む。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ター・スイーン・ミームー　こは明断なる經典の諸節なり^二　彼等信ぜんとせざるが故に、汝は之を憂へて殆ど死なんとす^三　されど吾若し欲しなば、吾は彼等を其前に平身低頭せしむる休徴を天上より彼等に降すべし^四　然るに彼等は、大悲者よりの新しき訓誡が彼等に來る毎に、常に背き去らずといふことなし^五　彼等は之を以て虚偽なりとす。されどいま彼等が嘲笑する消息が、やがて眞実となりて彼等に臨まん^六

彼等は大地を見ざるか。われ如何に各種の高貴なる草木を地上に成育せしむることぞせげに此中

には一個の休徴あり。されど彼等の多くは信ぜざるべし。而も見よ、汝の主は偉力者・大慈者なり。

汝の主がモーゼに向つて是く言へる時を念へ『往け、不義の民に。即ちファラオの民に。彼等

其身を護らんとせざるか』と二 彼曰く『主よ、吾は彼等が吾を虚言者と呼ばんことを恐る三 吾

胸は窄く、吾舌は滑かならず。さればアロンを吾に末らしめよ三 且吾は既に罪を彼等に得たれ

ば、彼等が吾を殺さんことを恐る』と四 彼曰く『断じて然らず。汝等兩人わが休徴を携へて往

け。げにわれ汝等と偕に在りて聽かん五 先づファラオに至りて六 吾は三界の主よりの使者なり云

イスラエルの兒等を吾等と共に去らしめよ』と言へ』と五

ファラオ曰く『汝は幼少の時、吾等の間に撫育せられしに非ざるか。汝は多年吾等の間の暮らせしに非ざるか。然るに汝は汝が爲せる如き事を爲せり。汝は忘恩者の一人なり』と六 彼曰く

『われ之を爲せるは、われ尙ほ迷へる者の一人なりし時なり云 吾は汝等を恐れて逃げ去れり。さ

れど吾主は智慧を吾に與へ、吾を使者の一人に加へたり云 汝はイスラエルの兒等を奴隸とせるを

以て、汝が吾に與へる恩恵なりとするか』と三

(1) 殺人の罪を犯せることを指す。

ファラオ曰く『三界の主とは誰ぞ』
彼曰く『天地並に天地間の一切のものの主なり。汝若し之を信じたらんには』
ファラオ左右の貴人に向つて曰く『汝等之を聽きたるか』
モーゼ曰く『そは汝等の主、また古の汝等の祖先の主なり』
ファラオ(左右の者に向つて)曰く『げに汝等に遣はされたる此の使者は憑かれたる者なり』
モーゼ曰く『そは東西の主、また東西の間にある一切のものの主なり。汝等若し之を理解したらんには』
ファラオ曰く『汝若し吾以外に神を立てなば、われ必ず汝を囚人の一人たらしめん』
彼曰く『吾若し明白なる証據を携へて汝に來れりとすれば即ち如何』
彼曰く『汝の言眞実ならば之を示せ』
モーゼ即ち其杖を投げたり。見よ、そは明白なる蛇となれり。
而して彼は其手を出ざせり。見よ、そは見る者に純白に見えたり。

ファラオ左右の貴人等に向つて曰く『げにこは老練なる魔術者なり』
彼は其の魔術によりて汝等を此國より逐はんとするなり。吾は汝等の意見を徴む』
と。彼等曰く『暫く彼並に彼の兄を退出せしめよ、使者を市内に派し』
總ての老練なる魔術者等を汝の前に召せ』
と。

かくて定められたる日の定められたる時刻に、多くの魔術者集まれり。其時市民に向つて問ふ者あり『汝等も集まり来れるか』云（彼等曰く）『然り、若し此等の魔術者が勝たば、吾等は彼等に従はん』と云 魔術者等ファラオに来りて曰く『吾等若し勝たば、吾等必ず報賞を得べきか』云 彼曰く『然り、汝等若し勝たば、われ必ず汝等をわが側近者のうちに加へん』と云 モーゼ彼等に向つて曰く『汝等が投げんとするものを投げよ』云 彼等其の繩と杖とを投げて曰く『ファラオの稜威によりて、見よ吾等必ず勝たん』と云 然るに見よ、モーゼ其杖を投ぐるや、杖は忽ち彼等が現出せしめたる幻影を呑み去れり云

魔術者等地に俯して叩首して曰く云 『吾等は三界の主云 モーゼ並にアロンの主を信ず』云 ファラオ曰く『汝等はわが允許なくして彼を信じたり。想ふに彼は汝等に魔術を教へたる汝等の首領なるべし。汝等やがて思ひ知らん。われ必ず汝等の手足を反断し、且悉く汝等を磔刑に処せん』云 彼等曰く『吾等また何をか憂へん。げに吾等は主に帰るなり云 吾等は信者の^{さきがけ}の首先なれば、主は吾等の罪を赦さんことを切願す』と云

われモーゼに默示して曰く『汝等必ず追求せらるべし。されば吾が僕等と共に夜陰に乗じて旅立て』と云 ファラオ、召募者を各都府に遣はして云 彼等をして言はしめたり『げに彼等は少数の

團體なり云 げに彼等は吾等に怨恨を抱く云 げに吾等は防備整ひたる多勢なり』と云 かくて吾は彼等を其の花園並に井泉者 財宝並に美邸より逐ひ立て云 イスラエルの兒等をして之を嗣がしめたり云

彼等日出づるところ彼等に追跡せり云 両軍相見えたる時、モーゼの同人曰く『吾等必ず敗れんと。モーゼ曰く『断じて然らず。げに吾主われと偕に在り。彼必ず吾を導かん』と云 其時われモーゼに默示して曰く『汝の杖にて海を撃て』と。かくて海忽ち分れ、両側儼として大山の如くなれり云 然る後われファラオの軍勢を其処に進ましめたり云 是くの如くにして吾はモーゼ並に彼と共にありし總ての者を救ひ云 次で其他の者を悉く溺死せしめたり。げに此中には一個の休徴あり。されど彼等の多くは信ぜざるなり云 げに汝の主は偉力者・大慈者なり云

アブラハムの消息を彼等に復誦せよ。かれ其父並に其民に向つて『汝等は何者に事ふるか』と問へる時云 彼等答へて曰く『吾等は神々の像に事へて常に之を拜す』云 彼曰く『汝等が祈る時、彼等能く汝等に聽くか云 彼等は汝等を益するか、又は損するか』云 彼等曰く『否な、されど吾等は吾等の祖先が是くするを見たり』云 彼曰く『汝等思はざるか、汝等が事ふる者云 汝等並に

汝等の祖先が事へたる者は甚。実にわが仇敵に外ならざることを。唯だ三界の主は然らず也。彼は
吾を創り、吾を導きき。吾を食ひ且飲ましめ也。われ病めば之を癒やしむ。吾を死し且甦らしめ也。
審判の日には吾罪を赦すべし也。主よ、智慧を吾に賜ひ、正義の人と吾を結べ也。吾をして美名を
後世に遺さしめ也。歎善の樂園を嗣ぐ者のうちに吾を加へよ也。また吾父を赦せ。げに彼は迷へる
者の一人なり也。復活の日に吾を辱しむる勿れ也。其日財宝と子女とは何等爲すところなく也。唯
だ清淨なる心を抱きてアルラーハの前に来る者のみ救はれん也。樂園は其身を護る者の近くに齎ら
され也。迷へる者の前には地獄現はるべし也。而して彼等に是く言はれん、汝等がアルラーハ以外
に拜したる神々はいま何処にあるか也。彼等は汝等を助け得るか、また己れ自身を助け得るか也。
と。是くの如くにして彼等並に彼等を迷はしめたる者、及びイブリースの軍勢は、一齊に地獄に投ぜ
られん也。而して彼等地獄の中に相争ひて言はん也。げに吾等が汝等を三界の主に配したるは明白
なる迷誤なりき也。吾等を迷はしめたる者は悪人なりき也。而していま吾等には一勸解者な
く也。一愛護者もなし也。吁、吾等再び現世に歸るを得ば、必ず信者となるべきものを、と』也。
げに此中には一個の休徴あり。されど彼等多くは信ぜざるなり也。げに汝の主は偉力者・大慈者
なり也。

ノアの民も諸使者を虚言者と呼びたり^{二五} 彼等の同胞ノア、彼等に向つて曰く『汝等其身を護らざるか^{二六} げに吾は忠実なる汝等への使者なり^{二七} さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ^{二八} 吾は其爲に如何なる報酬をも汝等に求めず。わが報酬は唯だ三界の主の許にあり^{二九} さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ』^{三〇} 彼等曰く『吾等汝に従ふべきか。汝に従ふは最も卑賤なる者のみに非ざるか』^{三一} 彼曰く『われ彼等の爲すことについて何の知るところあらんや^{三二} 彼等の清算は吾主の事なり。汝等若し此事を知らば——^{三三} また吾は信者を逐はんとするものに非ず^{三四} 吾は唯だ公然の一警告者にすぎず』^{三五} 彼等曰く『汝若し止めずば、ノアよ、汝は必ず石にて撃たるべし』^{三六} 彼曰く『主よ、げに吾民は吾を虚言者と呼ぶ^{三七} されば断乎たる判決を吾と彼等とに下し、吾並に信者のうちの吾と偕にある者を救へ』^{三八} かくて吾は彼並に彼と偕にありし者を満載の舟に救ひたり^{三九} 而して其後に残余の者を悉く溺死せしめたり^{四〇} げに此中には一個の休徴あり。されど彼等多くは信ぜざるなり^{四一} げに汝の主は偉力者・大慈者なり^{四二}

アアドの民も諸使者を虚言者と呼びたり^{四三} 彼等の同胞ホード、彼等に向つて曰く『汝等其身を護らざるか^{四四} げに吾は忠実なる汝等への使者なり^{四五} さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ^{四六} 吾は其爲に如何なる報酬をも求めず。わが報酬は唯だ三界の主の許にあり^{四七} 汝等は娛樂のために一

切の高処に道標を建つるか三 汝等は永く住まんがために堅域を築くか三 汝等権力を揮ふ時は暴虐者の如く之を揮ふか三 アルラーハを敬ひ、吾に従へ三 汝等が知れる種々なるものを賜へる彼を敬へ三 彼は家畜と子女とを汝等に與へ三 田園と井泉とを與へたり三 げに吾は汝等のために偉大なる日の懲罰を恐る』三 彼等曰く『汝が説法するもせざるも吾等にとりて畢竟一なり三 此は古人の舊俗にすぎず三 吾等は懲罰を受くべき者に非ず』と三 かくて彼等は彼を虚言者と呼べり。而して吾は彼等を滅ぼしたり。 げに此中には一個の休徴あり。 されど彼等多くは信ぜざるなり三 げに汝の主は偉力者・大慈者なり三

サムードの民も諸使者を虚言者と呼びたり三 彼等の同胞サーリヒ、彼等に向つて曰く『汝等其身を護らざるか三 吾は忠実なる汝等への使者なり三 さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ三 吾は其爲に如何なる報酬をも汝等に求めず。わが報酬は唯だ三界の主の許にあり三 汝等は此処に現存するもの三 即ち田園と井泉三 耕圃と花咲く棗椰子樹との間に三 設ひ汝等巧みに山を斫りて家を造るとも、永く安泰なり得べしとするか三 さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ三 汝等決して放埒者の命するところに従ふ勿れ三 彼等は地上を攪乱する者にして正義を行ふ者に非ず』と三 彼等曰く『汝は憑かれたる者なり三 汝は吾等と等しき一個の人間にすぎず。汝の言眞実ならば吾

等に一個の休徴を示せ』^{一五} 彼曰く『此の牝駝を見よ。それぞれ定められたる日に、牝駝も水飲み、汝等も飲むべし』^{一六} 汝等決して之を害する勿れ。然らば偉大なる日の懲罰汝等を襲はん』^{一七} と^{一八} 然るに彼等之を殺したり、而して忽ち之を悔いたり^{一九} そは懲罰彼等を襲へるが故なり。げに此中には一個の休徴あり。されど彼等多くは信ぜざるなり^{二〇} げに汝の主は偉力者・大慈者なり^{二一}

ロトの民も諸使者を虚言者と呼びたり^{二二} 彼等の同胞ロト、彼等に向つて曰く『汝等其身を護らざるか』^{二三} 吾は忠実なる汝等への使者なり^{二四} さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ^{二五} 吾は其爲に如何なる報酬をも汝等に求めず、わが報酬は唯だ三界の主の許にあり^{二六} 何たる事ぞ、汝等世間の男子に近づき^{二七} 主が汝等のために創れる妻女を顧みざるとは。否な、汝等は背逆の民なり』^{二八} 彼等曰く『ロトよ、汝若し止めずば、汝は必ず追放せらるべし』^{二九} 彼曰く『吾は飽くまで汝等の所行を惡む』^{三〇} 主よ、吾並に吾に従ふ者を彼等の所行より救へ』^{三一} かくて吾は彼並に彼に従へる者を救ひ^{三二} 唯だ後に残れる一老婦を除けり^{三三} 然る後に吾は悉く自餘の者を亡ぼせり^{三四} 吾は雨を彼等の上に降せり。而して其雨は、わが警告を與へたる者には致死の雨なり^{三五} げに此中には一個の休徴あり。されど彼等多くは信ぜざるなり^{三六} げに汝の主は偉力者・大慈者なり^{三七}

森林の民も諸使者を虚言者と呼びたり^三 シュアイブ彼等に向つて曰く『汝等其身を護らざる
か^三 吾は忠実なる汝等への使者なり^三 さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ^三 吾は其爲に如何
なる報酬をも汝等に求めず。わが報酬は唯だ三界の主の許にあり^三 汝等度量を充分にし、決して
減量する勿れ^三 量るには正確なる秤を以てし^三 彼等の物を騙取する勿れ。惡を爲して地上を攪
乱する勿れ^三 汝等並に前代の諸民を創れる彼を敬へ』^三 彼等曰く『汝は憑かれたる者なり^三
汝は吾等と等しく一個の人間にすぎず。吾等は汝を以て虚言者となす^三 汝の言眞実ならば、天の
一角を吾等の上に落下せしめよ』^三 彼曰く『吾主は汝等の爲すことを最も善く知る』と^三 され
ど彼等は彼を虚言者と呼べり。かくて暗雲の日の懲罰彼等を襲へり。そは偉大なる日の懲罰なり^三
げに此中には一個の休徴あり。されど彼等多くは信ぜざるなり^三 げに汝の主は偉力者・莊嚴者な
り^三

げに此は三界の主よりの啓示なり^三 誠実なる心靈之を携へて汝の心に降り^三 これ汝を明
晰なるアラビア語を以てする警告者たらしめんがためなり^三 此事は既に載せて古人の典籍に
あり^三 イスラエルの兒等の諸学者が之を承認せるは、彼等に対する一個の休徴に非ざるか^三

吾若し之を異邦人に降し^二 かれ之を彼等に向つて讀誦するとも、彼等之を信ぜざるべし^一 吾は是くの如くにして作惡者の心中に不信心を入らしめたり^三 されば彼等は痛刑を目睹するまで決して信ぜざるべし^二 而も刑罰は彼等の識らざる間に突如として彼等を襲ふべく^三 其時彼等は言はん『吾等は猶豫を興へられざるか^三 何たる事ぞ、彼等は吾等の懲罰を急ぐと言ふか』^四

汝は如何に思ふか、われ設ひ数年の間彼等に生を樂しましむるとも^三 彼等に約束せられたるところが遂に彼等に來るとすれば^三 その樂しめることが、彼等にとりて何の益するところあるか^三 されど吾は豫め訓誡を興ふる警告者を遣はさずしては、未だ曾て如何なる都府をも亡ぼさず^三 吾は決して不当なることを行ふ者に非ず^三

サタンは決して古蘭を携へて降らず^三 そは彼等の事に非ず、また彼等は之を能くせず^三 げに彼等は(天上の言を)聽くことを遠けらる^三 されば懲罰を受けざらんがためにはアルラーハ以外の神に祈る勿れ^三 汝の近親を警告せよ^三 汝に従ふ信者には、汝の翼を低く垂れよ^三 彼等若し汝に従はずば即ち言へ『吾は汝等の為すことと関りなし』^三 偉力者・大慈者に頼れ^三 彼は汝が禮拜のために立つを見^三 また叩首者の間にありて汝の為すところを見る^三 げに彼は能聞者・能知者なり^三

われ汝にサタンが何人に降るかを告ぐべきか三三 彼等は一切の虚言者と犯罪者との上に降る三三
彼等は其の聽きたることを傳ふ¹。されど彼等の多くは虚言者なり三三

(1) サタン等が天上にて偷み聽きたる事を、地上の彼等の追隨者に傳ふる意味と解すべし。

迷へる者は詩人に従ふ三三 汝は彼等があらゆる谷間に彷徨し¹三三 己れの行はざることとを口にす
を見ざるか三三 但し信じて善事を行ひ、常にアルラーハを念じ、迫害せられたる後に能く其身を護
る者²を除く。而して不義を行へる者は、やがて如何なる歸處に歸るかを知るに至らん三三

(1) 空想に駆らるることを指す。(2) 歸信せる詩人を指す。詩歌は偉大なる勢力を以てアラビア人の感情を支配するが
故に、マホメットは其の信仰の宣傳の上に多くの詩人の力を藉りたり。

第二十七 螻 蟻 章

メッカ啓示

第十八章に蟻のことを述ぶるに因みて螻蟻章 *An-Naml* と名づけらる。但し註釈家のうちには原語ナムル *An-Naml* を以て固有名詞となし、ジブリーン *Jibrin* とアスカラーン *Asqalan* との間に位する一オアシスに占拠せる古代アラビアの一部族とする者あり。ムマママッド・アリの如き其の一人なり。此等の学者は本章に現はるる『鳥』を以て騎兵を意味すとなし、『啄木鳥』を人名となし、幽鬼を以て外國人を意味すとして、本章中のソロモンに関する一列の神秘的説話を悉く合理化せんと努むるも、予は通説に従ひ、之を採らず。前章と同じく概ねメッカ中期の啓示とすべく、内容また前章に類似す。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ター・スイーン。こは古蘭並に明晰なる經典の諸節なり一 そは礼拝を守り、捐課を納め、堅く来世を信する信者への嚮導並に吉報なり二四 げに来世を信ぜざる者は、われ彼等をして己れの所行を善しと思はしめたり。されば彼等は迷路の彷徨を続けん四 彼等は極重の刑罰を受け、来世に於ては最大の淪喪者たらん五 げに汝は聰明者・能知者より此の古蘭を承受せるものなり六
モーゼか其の家人に向つて是く言へる時を念へ『げに吾は火を見たり。吾は其処より汝等に消息

を齎し来らん。又は火把ほたを持ち帰りて汝等を温めん』と¹。かれ其処そこに来れる時、声ありて曰く『火を求むる者並に火の周囲まわりにあるものは福なるかな、²三界の主アルラーハを讚へよ。モーゼよ、げに吾は偉力者・聰明者アルラーハなり。先づ汝の杖を投げよ』と。モーゼ其杖が蛇の如く動くを見たる時、彼は逃げ去りて復た歸らざりき。(其時また声ありて)曰く『モーゼよ、恐るる勿れ。げにわが使者たる者は、決して吾前に恐るべきに非ず。曾て不義を行へるも、後に善を以て惡に易へたる者も亦然り。げに吾は宥恕者・大慈者なり。汝の手を腋窩わきのしたに入れよ。之を出だせば傷害なくして而も其色は純白ならん。これアラオ並に其民に示すべき九休徴のうちなり。げに彼等は作惡の民なり』と。然るにわが明瞭なる休徴が彼等に示されたる時、彼等は『これ明白なる魔術なり』と言へり。げに彼等は心中に堅く之を信じながら、不義傲慢にして之を否認せるなり。されど此の作惡者の末路が如何なるものなりしかを見よ。

(1) 第二〇章第一七一・二三節参照。(2) 此の一句は多くの学者によつて『火中にある彼、並に火側にある彼は福なるかな』と解釈せられ、前の『彼』はアルラーハ、後のそれはモーゼとせらる。そは前置詞 في を『中に』と讀みたる解釈たるが、そは同時に『向つて』の意味あり、従つて『火に向へる彼』とは、火を求めたるモーゼと解すべし。火の周囲のものは天使を指すとも見るべく、或はムハムマンド・アリの解せる如く、多くの豫言者を出だせる祝福すべき國土を指すとも見

るべし。

げに吾はダビデ並にソロモンに知識を與へたり。彼等曰く『彼を信する多くの僕等に優りて吾等を選べるアルラーハを讚へよ』と云。ソロモンはダビデの繼嗣なりき。彼曰く『人々よ、吾等は鳥類の言を解することを教へられ、且一切のものを賜はれり。げにこは明白なる恩寵なり』と云

幽鬼と人間と鳥類とより成る軍勢が、ソロモンのために召集せられ、隊伍を組みてモ 蟻の谷に至れり。其時一疋の蟻曰く『蟻等よ、ソロモンと其の軍勢とは、識らずして汝等を蹂躪すべし。避けて穴に入れ』と云。ソロモン蟻の言を聽きて笑ひ、莞爾として曰く『主よ、吾をして汝が吾並に吾が父母に垂れたる恩寵を感謝せしめ、善事を行ひて汝を欣ばしめよ、また汝の慈悲によつて吾を汝の義しき僕等のうちに加はらしめよ』と云

彼また鳥を閲みして曰く『われ啄木鳥¹を見ざるは何故ぞ。彼もまた不参者のうちなるか言 げに彼若し明白に弁疏するに非ずば、われ必ず之に重刑を加へ、或は必ず之を殺さん』と云 幾くもな くして其鳥飛来して曰く『吾は汝が知らざることを知り得たり。吾は確實なる消息をサバより齎らせり』 げに吾は其國にて女子が其民に君臨するを見たり。女王は一切のものを賜はりて、莊嚴なる王座を有せり』 吾は女王並に其民が、アルラーハを舍きて太陽を拜するを見たり。而してサタ

ン彼等をして其の所行を善しと思はしめ、直き道より彼等を迷ひ去らしめれば、彼等は正しく導かれず。彼等のはかの天地の秘奥を闡明し、人の匿すもの露はすものを知悉するアルラーハを拜せんとせざるなり。アルラーハ、彼の外に神なし。彼は莊嚴なる王座の主なり』と云

(一)原語 Hudhud。或はやつがしら、或は啄木鳥、或は夏鷄、或は鳧となす。その孰れなるやを詳かにせず。

ソロモン曰く『吾は汝が眞実を語れるか、又は虚言者の一人なるかを見ん。わが此の書簡を携へ、往きて之を彼等に投じ、然る後に退きて彼等の答ふるを待て』と云

女王曰く『貴人等よ、げに高貴なる書簡われに投ぜられたり。げにそはソロモンより来れるものにして、げに次の如く讀まる。大悲者・大慈者アルラーハの名によりて。汝等吾に抗する勿れ、歸命者となりて吾に来れ』と云

女王曰く『貴人等よ、吾事について吾に建議せよ。汝等が証言を與ふるまで、吾は何事をも決せざるべし』と云。彼等曰く『吾等には実力あり、また勇武もあり。されど命を下すは即ち汝なり。されば吾等は汝が如何なる命を下すかを見ん』と云。女王曰く『げに諸王の都府に入るや、必ず之を蹂躪し、其民の最も權勢ある者を最も卑賤なる者となすを常とす。彼等の爲すことは實に是くの

如し言　されば吾は先づ彼等に進物を賜らん、而じて使節の齎し帰るものを待たん』と言

使節ソロモンに来れる時、彼曰く『何事ぞ、汝等は財宝を以て吾を助けんとするか。されど彼が吾に賜へるものは汝等に賜へるものに優る。否な、汝等は己れの贈物を誇る言　彼等に帰れ。われ必ず彼等の敵し難き軍勢を以て彼等に臨み、彼等を屈して之を國外に放逐し、卑賤なる境涯に陥らしめん』と言

ソロモン曰く『貴人等よ、彼等が帰命して吾に来るに先ち、女王の王座を吾に齎す者は汝等のうち果して誰ぞ』と言　幽鬼のうちの擻猛なる者¹曰く『吾は汝が座を起つ以前に之を汝に齎さん。げに吾は之を能くし、且信頼せらるべき者なり』と言　經典の知識を有する者ありて曰く『吾は一瞬の間に之を汝に齎さん』と。ソロモン、王座の忽ち其前に置かれたるを見て曰く『こは吾主の恩寵にして、わが知恩者なるか忘恩者なるかを試みんがためなり。感謝する者は己れのために感謝し、恩寵を忘るる者は（己れのために忘る）。げに吾主は富有者・寛仁者なり』と言

(1) イフリート Ifrit と呼ばれる幽鬼中の擻猛なる一種族。

ソロモン曰く『女王のために彼女の王座の装ひを変へよ。吾等をして彼女が正しく導かるるか、

將又導かれざる者の一人なるかを見せしめよ』と^三。而して女王来れる時、彼曰く『汝の王座は是くの如きものなりしか』と。彼女曰く『之と似たるものなり』と。ソロモン曰く『げに吾等は彼女以前に知識を賜はりて、アルラーハに歸命せるものなり^三。されど彼女がアルラーハ以外に拜したる神々が、彼女を迷はしめたり。げに彼女は信ぜざる民の一人となれるなり』と^三。

女王は宮殿に入れと告げられたり。然るに之を見れば大池の如くなりしかば、彼女は裳を蹙^{もす}げて其脚^{あし}を露したり^三。ソロモン曰く『こは玻璃にて滑かにせる宮殿なり』と。彼女曰く『主よ、げに吾は誤れり。いま吾はソロモンと共に三界の主アルラーハに歸命す』と^三。

げに吾はサムードの民に其の同胞サーリヒを遣はし、アルラーハに事へよと言はしめたり。然るに見よ、彼等兩派に分れて諍へり^三。彼曰く『吾民よ、何故に汝等は善事を舍きて惡事に忙はしきか。何故に汝等はアルラーハの宥恕を求めてその慈悲に浴せんとせざるか』と^三。彼等曰く『吾等は汝並に汝と偕にある者について、飛ぶ鳥にて吉凶を判断せり』と。彼曰く『汝等の鳥はアルラーハの手にあり。否な、汝等は試練を受くる民なり』と^三。市内に地上に惡を作して義しき行なき九人の者あり^三。彼等曰く『神かけて今夜吾等は必ずサーリヒ並にその家人を襲はん。而して彼の近

親に向つては、彼の家人が屠殺せられし時、吾等は現場に居らざりき。吾等の言は眞実なりと告げん』と哭。かくて彼等は策謀せり。而して吾また彼等の識らざる間に策謀せり。而も見よ、彼等の策謀の末路が如何なるものなりしかを。吾は彼等並に彼等の民を殲滅せり。かくして彼等の住居は其の不義のために顛覆せり。げに此中には知識ある民への一個の休徴あり。而して吾は信じて其身を護れる者を救ひたり。

(一) 『鳥』は吉凶即ち運命のこと。アラビア人は鳥の右又は左に飛び往くを見て吉凶を判断す。

吾はまたロトを(其民に遣はしたり)。其時彼曰く『何たる事ぞ、汝等知りつつ穢らはしき事を敢てするとは。何たる事ぞ、汝等女子よりも男子に色情を抱いて接するとは。否な、汝等は無智の民なり』と垂。然るに彼の民は唯だ是く答へたるのみ『ロトの一族を城外に逐へ。げに彼等は純潔を守らんとする者なり』と垂。されど吾は彼並に彼の一族を救ひたり。但し彼の妻を除く。吾は彼女を落後者の一人とせり。吾は彼等の上に雨を降したり。此雨は警告を受けたる者にとりて、げに禍なる雨なりき。

言へ『アルラーハを讃へよ。彼が選べる僕等の上に平安あれ。至上なるはアルラーハなるか、將又彼等が彼に配すを神々なるか』と云 天地を創造し、汝等のために水を天上より降す彼こそ至上に非ざるか。吾は之によつて美しき花園を生ぜしむ。園中の樹木を繁らしむるは汝等の能くするところにて非ず。アルラーハと相並ぶ神あるか。否な、されど彼等は神々を彼に配する民なり。大地を安息処となし、河川を其間に流れしめ、群山を其上に置き、兩海の間に隔壁を築ける彼こそ至上に非ざるか。アルラーハと相並ぶ神あるか。否な、されど彼等の多くは知らざるなり。虐げらるる者の祈に応へ、其の災厄を除き、汝等をして地を嗣がしむる彼こそ至上に非ざるか。然るに汝等殆ど之を念はず。陸海の黒闇の間に汝等を導き、慈悲の先驅として風を送る彼こそ至上に非ざるか。彼と相並ぶ神あるか。アルラーハは高く彼等が彼に配する者の上に超在す。萬物を創造し、次で之を復造し、天地の間より汝等に糧餉を賜ふ彼こそ至上に非ざるか。彼と相並ぶ神あるか。汝等の言眞実ならば其の証據を示せ。

言へ『アルラーハの外は天地間の何者も不可見のものを知らず。而して彼等は其の甦らしめらるる時を知らず。否な、されど彼等は末世に關して若干の知識を有す。されど彼等は之について疑心を抱く。否な、されど彼等は之について盲目なり』と云 信ぜざる者曰く『吾等並に吾等の祖先

が、一旦塵土に歸したる後、再び甦らしめらるることあるべきか。吾等は此事を約束せられ、吾等の祖先も亦然りき。されどこは古人の物語にすぎず』と云。言へ『地上を遊歴して作惡者の末路の如何なるものなりしかを見よ』と云。汝は彼等のために心を悩ます勿れ。彼等の策謀の故に阻喪する勿れき。彼等曰く『汝の言眞実ならば、此の威嚇は何時来るか』と云。言へ『汝等が催促することの一端は、近く汝等に來るべし』と云。

げに汝の主は人間に仁慈なり。されど彼等の多くは感謝せずき。げに汝の主は彼等の胸に匿すと並に露すことを知る者。天地間の秘密、一として載せて明晰なる經典になきはなしき。

げに此の古蘭はイスラエルの兒等のために、彼等の争点の最も多くを闡明するものなりき。げにこは信者に対する嚮導並に慈悲なりき。げに汝の主は己れの智慧を以て彼等を審判すべし。彼は偉力者・能知者なりき。されば汝はアルラーハに信賴せよ。汝は明白なる眞理の上に立つ者。げに汝は死者を聽かしむる能はず、また背を向けて逃げ去る聾者に汝の呼ぶ声を聽かしむる能はず。また汝は盲者を其の迷妄より導く案内者にも非ず。汝は唯だわが休徵を信する者、また吾に歸命せる者に聽かしめ得るのみ。

彼等に対する吾が宣告が實現せらるる時、吾は地中より彼等の前に一獸¹を出現せしめ、彼等に

向つて『げに入々はわが休徴を信ぜざりき』と叫ばしめん。其日われ一切の民のうちより、わが休徴を虚偽なりとせる一團を集め、之を各別の隊伍となし。アルラーハの前に来らしめん。其時彼は言はん『汝等わが休徴について周匝なる知識もなくして、妄りに之を虚偽なりとせるか。汝等の為せるは如何なることぞ』と云。かくて彼等の行へる不義に対して懲罰降るべく、而して彼等は發言を許されざるべし。

(一)この巨獸は Dabbat'ul Arz と呼ばれ丈一丈、牛の頭、猪の目、象の耳、鹿の角、駝鳥の首、獅子の胸、虎の色、猫の背、羊の尾、駱駝の脚、驢馬の声を具へ、復活の日の豫兆として、メッカの聖殿内又はサファア山上に出現すとせらる。セール及びロッドウェルが、之を以て Al-Jassasah とせるは当らず。ジャサーサは『間諜』の意味にして一サタンの名とせらる。

吾は彼等のために休息すべき夜を創り、視るために晝を創れり、彼等之を念はざるか。げに此中には信ずる民への種々なる休徴あり。

喇叭吹かるる日、アルラーハが欣ぶ者の外は、天地間の一切の者悉く恐懼し、平身低頭して彼の前に出でん。汝は群山を見て之を牢乎たりとすべし。而も其の消滅し去ること雲の散ずるが如く

なるを見ん。そは萬物を総攬するアルラーハの業なり。彼は汝等の為すことを知悉す。而して善事を行へる者は、それよりも更に善きものを得て、此日の恐慌に泰然たるを得ん。惡事を行へる者は、逆まに火獄に投ぜられん。汝等は己れの為せること以外に對して応報を受くべけんや。

言へ『吾は唯だ此地の主¹に事へよと命ぜられたり。主は此地を聖域となせり。萬物は彼に属す。吾は歸命者の一人たるべしと命ぜられた。また古蘭を讀誦せよと命ぜられたり。されば導かるる者は唯だ己れのために導かれ、迷ふ者——彼には『吾は一警告者にすぎず』と言へ』と云。また言へ『アルラーハを讚へよ。彼は汝等に其の休徴を示し、汝等は之を承認せん。汝等の主は汝等の為すことを閑却せず』と云。

(一)メッカを指す。

第二十八 來 歷 章

メツカ啓示

第二五節に『モーゼ彼に往きて其の來歴を述べたる時』とあるに因みて來歴章 *Al-Qasas* と名づけらる。而して本章の主題はモーゼなるを以て、章名は内容と相應せり。メツカ末期の啓示にして、或る學者はマホメットがメツカを去りてメヂナに遷る途上ジャハファ *Jahfa* に於て受けたるものとなす。第八五節は確實に遷移途上の啓示とせらるるも、若干のメヂナ啓示を除き、概ねメツカに於てマホメットの最も窮迫せるころの啓示となすべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ター・スイーン・ミームー　こは明晰なる經典の諸節なりニ　吾は信ずる民のために、モーゼ並にファラオの眞実なる來歴を汝に語らんニ　げにファラオ其國に於て勢威隆んにして、其民を諸部に分ちたり¹。彼は彼等のうちの一部を虐げ、男兒を殺して女子のみを残せり。げに彼は暴虐者なり²。而して吾は此國の虐げられたる者に恩寵を垂れ、彼等を以て信者の龜鑑とし、彼等をして地を嗣がしめ³。また彼等の勢力を此國に確立せしめ、ファラオ並にハーマーンと其の軍勢とに、その彼等に対して恐れたること⁴を目睹せしめんとせり⁵。

(1) 諸部とは埃及人及び猶太人の兩部なりと言ひ、或は上下貴賤の諸階級なりとも言ふ。(2) 一部とは埃及在住の猶太人を指す。(3) ハーマーン *Hamân* はファラオの宰相の名とせらる。(4) 猶太人が埃及に勢力を確立して覇権を握ることを恐れたるなり。

われモーゼの母に默示して曰く『彼に哺乳^{ちゆうのち}せよ。若し彼のために恐るべきこと起らば、之を河中に投ぜよ、決して恐れ且憂ふる勿れ。われ必ず之を汝に還し、且之をわが使者の一人たらしめん』とセ。ファラオの家人は、他日彼等の敵となり、また憂患の因^{たね}となるべき彼を捨ひ上げたり。げにファラオ並にハーマーンと其の軍勢とは罪人なりきハ。而してファラオの妻曰く『こは吾と汝との眼の歡びなり。之を殺す勿れ。他日彼は吾等を益することもあるべし。また之を吾等の養子とするも可ならん』と。これ彼等が知らざりし故なり^九

(一) モーゼの母が默示に従ひ、舟にのせて河中に流せる物語を省略す。第二〇章第三九節参照。

モーゼの母の心は空虚^{うつろ}となれり。吾若し其心を堅固にして真個の信者たらしめざりせば、彼女は在りしことを吐露せしなるべし。母、モーゼの姉に向つて曰く『彼の後を追へ』と。姉は彼等に曉られずして遠くより之を窺へり。われ其の以前にモーゼをして乳母の乳を拒ましめたり。其時

彼女来りて曰く『われ汝等のために此兒を撫育する一家の人々を教へん、彼等は必ず此兒に親切なるべし』と三　かくして吾はモーゼを其母に還し、其目を歡善に輝かしめ、其憂を去りて、アラハの約束の眞実なるを知らしめたり。されど彼等の多くは此事を知らざりき三

モーゼ成年に達して雄健となるに及び、吾は智慧と知識とを彼に與へたり。吾は是くの如くにして善事を行ふ者に報ゆ四　一日モーゼ市民の注意する者なき時¹、市内に往きて相闘ふ兩人あるを見たり。其の一人はモーゼの党侶にして、他は敵党の者なりしが、²党侶の者彼を見て、其敵に対して加勢を求めしかば、モーゼ即ち一拳を加へて之を仆したり。彼喟然として曰く『こはサタンの業なり。げに彼は人を惑はす公然の敵なり』と五　彼曰く『主よ、吾は吾魂を害へり。されど吾を赦せ』と。而して彼は之を赦せり。げに彼は宥恕者・大慈者なり六　彼曰く『主よ、汝は吾に恩寵を垂れたり、さればわれ決して再び作惡者に左袒せざるべし』と七

(一) 正午即ち市民の午睡の時を言ふ。(二) 党侶とは猶太人、敵党とは多神を拜する埃及人。

翌日かれ市内に在り、恐れを抱いて四顧せる時、見よ、昨日彼に援助を求めたる者が、また声をあげて援助を乞へり。モーゼ彼に向つて曰く『げに汝は争ひを好む者なり』と八　かくて彼が彼等

兩人の敵を襲はんせし時、彼曰く『モーゼよ、昨日汝が人を殺せる如く、吾をもまた殺さんとするか。汝は地上に於て専ら暴虐者たらんことを望み、和解者たることを欲せざる者なり』と云 時に一人あり、市の辺隅より走り来りて曰く『モーゼよ、げに貴人等は汝を殺さんと協議しつつあり。されば直ちに立去れ。吾は汝の誠実なる助言者なり』と云 かくて彼は恐れて四顧しながら此処を去れり。彼曰く『主よ、不義の民より吾を救へ』と云

モーゼ其面をミディアンに向けて曰く『主は吾を正しき道に導かん』と云 而してかれミディアンの井泉に到れる時、彼は一群の民の其の家畜に飲みふを見たり。而して彼は彼等の外に二人の女子が其の羊群を停めて遠方に立てるを見たり。彼曰く『何事ぞや』と。彼女等曰く『吾等は牧者等が帰り去れる後ならでは、吾等の羊群に飲みふことを得ず。そは吾等の父が極めて年老いたればなり』¹と云 モーゼ即ち彼女等のために羊群に飲みひ、然る後に樹蔭に退いて曰く『主よ、吾は切願す、げに何にてもあれ吾に恩恵を垂れよ』と云

(1) 此の年老いたる父は豫言者シユアイブとせらる。

兩女のうちの一人、羞を含みて彼に来りて曰く『吾等のために羊群に飲みひたることのために、吾

父は汝を召びて報いるところあらんとす』と。モーゼ即ち彼に來り、己れの未歴を彼に語れり。彼曰く『恐るる勿れ。汝は既に不義の民より免れたり』と^三。彼女等の一人曰く『吾父よ、彼を雇へ。げに汝が雇ひ得る最上の者は、強壯にして誠実なる男子なり』と^三。彼曰く『汝若し八年吾に雇はれなば、吾は両女の一人を汝と結婚せしむべし¹。若し滿期を十年とせんと欲しなば、是亦汝の意に任せん。吾は難きを汝に求めず、アルラーハ若し欲しなば、汝はわが義しき者の一人なるを知らん』と^三。彼曰く『これ吾と汝との約束たるべし。両期のいづれを滿期とするとも吾を責むること勿れ。アルラーハは吾等の言へることを照覽す』と^三。

(一)モーゼはシユアイブの女サファア¹ Safara を娶れりとせらる。

モーゼ既に年期を了へ、家人と共に旅せる時、山の此方に火を認めたり。かれ其の家人に向つて曰く『汝等此処に停まれ。げに吾は火を見たり。われ彼処より汝等に消息を齎さん、又は火把を持ち歸りて汝等を温めん』と^三。かれ其処に到れる時、祝福せられたる谷間の河谿¹の右岸より樹間に声ありて曰く『モーゼよ、げに吾は三界の主アルラーハなり』と。汝の杖を投げよ』と。かれ其杖が蛇の如く動くを見、踵を回して逃げ去り、また歸り來らざりき。(其時また声ありて曰く)『モーゼ

よ、恐れずして近く来れ。げに汝は安泰なる者の一人なり^三。汝の手を腋窩わきのしたに入れよ。之を出させば傷害なくして純白なるべし。汝が恐れて差し展べたる翼を收めよ。此等はファラオ並に其の貴人等に対する汝の主よりの二休徴なり。げに彼等は造悪の民なり』と^三

モーゼ曰く『主よ、げに吾は曾て彼等の一人を殺したり。されば吾は彼等が吾を殺さんことを恐る^三。また吾兄アロンは吾よりも其舌滑かなれば、わが証人となるために彼を補佐として吾に遣はせ。げに吾は彼等が吾を虚言者と呼ばんことを恐る』と^三。彼曰く『吾は汝の兄を以て汝の腕を強くせん。またわれ汝等兩人に權威を與ふるが故に、彼等決して汝等に敵し得ざるべし。わが休徴を（携へて往け）、汝等兩人並に汝等に從ふ者は必ず勝たん』と^三

モーゼわが明白なる休徴を携へて彼等に来れる時、彼等曰く『こは魔術の欺瞞にすぎず。吾等は古のわが祖先の間に此事ありしを聞かず』^三。モーゼ曰く『吾主は彼よりの嚮導を齎し来る者を熟知し、また樂園の善果を獲べき者を熟知す。げに不義者は決して榮えず』^三。ファラオ曰く『貴人等よ、吾は吾以外に汝等に神あるを知らず。さらばハーマーンよ、わがために泥土を焼け、而してわがために高楼を建てよ。われ之に登りてモーゼの神を見んと欲す。げに吾は彼を以て虚言者の一人となす』と^三。かくて彼並に彼の軍勢は、地上に於て妄りに自ら大なりとし、決して吾に歸らし

めらるる如きことなしと思へり。されば吾は彼並に彼の軍勢を捕へ、悉く之を海に投じたり。見よ、不義者の末路が如何なるものなりしかを。吾は彼等を以て人を火獄に招ぐ者の典型となせり。而して復活の日に彼等は佑助せられざらん。吾は現世に於ても呪咀を以て彼等を追求せり。而して復活の日に彼等は唾棄せられん。

げに吾は古の諸世代を亡ぼせる後、人間への明瞭なる訓誡として、また嚮導並に慈悲として、モーゼに經典を與へたり。恐らく彼等之によつて教へらるるところあらん。われモーゼに命令を降せる時、汝は遠隔の地にありてシナイ山の西側に居らず、また目撃者の一人にも非ざり。されど吾は（モーゼの後に）諸世代を擧げ、彼等のために其の生命を永くせり。汝はまたミディアンの民の間に住みて、わが休徴を彼等に讀誦せることもなかりき。されど吾は吾が使者を遣はせり。汝はまたわれモーゼを喚べる時、シナイ山の此方に居らざりき。されど汝が汝以前に未だ曾て一警告者も未らざりし民に警告を與へ、以て彼等を反省せしめんとするは、これ汝の主の慈悲による。そは彼等の手が豫め送れるもののために、災厄彼等を襲ふ時、彼等をして是く言はしめざらんがためなり。『主よ、何故に汝は使者を吾等に遣はさざりしか。吾等は汝の休徴を信じ、信者のうちに加はりしものを！』と。されど吾よりの眞理が彼等に至れる時、彼等はく言へり。『何故に曾てモー

ぜに賜はりしものと同じきものが彼に賜はらざるか』と。何たる言ぞ、彼等は以前にもモーゼに賜はりしものを信ぜざりしに非ずや。彼等曰く『これ互に相輔くる魔術なり』¹と。彼等また曰く『吾等は総てを信ぜず』と只 言へ『汝等の言眞実ならば、両者に優りて嚮導たるべき經典をアルラーハの許より齎し来れ。然らば吾は之に従はん』と只 彼等若し汝に応ふる能はずば、彼等は唯だ己れの私欲に従ふ者にすぎざることを知れ。アルラーハの嚮導なく、唯だ己れの私欲に従ふよりも甚だしき迷妄あるか。げにアルラーハは不義の民を導かず

(1) モーゼ五書並に古蘭を指す。

いま吾は吾言^{ことば}を彼等¹に達せしめたり。彼等恐らく教へらるるところあらん² われ古蘭以前に經典を與へたる者²は之を信ぜ³ 其の彼等に向つて讀誦せらるるや、彼等即ち曰く『吾等は吾等の主よりの眞理として之を信ず。げに吾等は其の至る以前に既に歸命者^{ムスリム}なりしなり』³と³ 彼等は能く耐え忍び、善を以て惡を斥け、わが賜へるものにて喜捨を行ふが故に、其の報賞は倍加せられるべし⁴ 彼等空しき議論を聽けば、踵を回して去りて曰く『吾等には吾等の事あり、汝等には汝等の事あり。さらば平安汝等の上にあれ。吾等は無智者を求めず』と⁵

(1) メッカ市民を指す。(2) 受経者却ち猶太人並に基督教徒を指す。(3) 受経者中のマホメットに帰依せる者の言なり。

げに汝は己れの好む者を導くことを得ず。されどアルラーハは己れの欲する者を導く。そは彼は導かるる者を熟知するが故なり¹

(1) 此の一節はマホメットが大恩ある伯父アブー・タリリアの臨終に際し、之を歸信せしめんとして遂に果たさざりし時に降れる啓示とせらる。

彼等曰く『吾等若しこの嚮導に従はば、吾等は國外に逐はるるに至らん¹』と。吾は彼等のために安全なる聖域を確立し、吾よりの糧餉として各種の美果を此地に輸送せしむるに非ずや。されど彼等の多くは之を知らず

(1) ハーリス・イブン・ウスマーン *Haris ibn Usman* の言とせらる。若しクライシュ族がマホメットの信仰を奉ずるに至らば、悉くアラビアの多神教徒を敵とすることとなり、衆寡敵せず遂にメッカより逐はるるに至らんとの意味なり。

吾は如何に多くの榮華を誇れる都府を亡ぼせることぞ。此等は彼等の居住地なりしが、彼等の後

には殆ど住む者もなし。そはわれ其等の都府の相続者となれるが故なり矣。されど汝の主は、豫め其國の首都に使者を遣はし、わが休徴を彼等に讀誦せしめたる後ならでは、決して如何なる都府をも亡ぼせることなし。また其民が不義を行へるに非ずば、吾は如何なる都府をも亡ぼせることなし。いま汝等に與へらるものは現世の生命を繋ぐ糧餉と其の裝飾とにすぎず。されどアルラーハの許にあるものこそ、更に善美にして長久なるものなれ。汝等尙ほ曉らざるか。

われ善き約束を與へ、その約束が必ず實現せらるべき者と、現世の生活を樂しましむるも、復活の日に必ず糾弾せらるべき者とを同一視し得るか。其日彼は彼等を喚んで言はん『汝等が吾に配せる神々はいま何処にありや』と云。当に懲罰を受くべき者は答へん『主よ、此等は吾等が誘惑せる者どもなり。吾等は己れが誘惑せられし如く彼等をも誘惑せり。されど吾等は汝に対しては罪なし。彼等は決して吾等を拜せるに非ず』と云。また是く言はれん『汝等がアルラーハに配せる神々を喚べ』と。彼等は彼等を喚べとも、彼等は応へず、彼等は唯だ懲罰を見るのみならん。吁、彼等若し正しく導かれたりせば！云。其日主は彼等と呼びて曰はん。『汝等如何なる返答をわが使者に與へたるか』と云。其日一切の消息は紛糾を極め、且彼等は互に相訊ぬることを許されず。されど懺悔し歸信して善事を行ふ者は、本願成就者のうちに加へられん。汝の主は己れの欲す

るものを創造し、且自由に選択す。されど選択は彼等の能くするところに非ず。アルラーハを讃へよ、彼は高く彼等が彼に配する者の上に超在す。而して汝の主は、彼等が胸中に匿すことを知り、また彼等が露すことを知る。充

彼はアルラーハなり。彼の外に神なし。現世並に来世の一切の讃頌は彼に属し、審判は彼の掌るところなり。而して汝等は彼に帰らしめらるる。言へ『汝等思へるか、アルラーハ若し復活の日まで不断に暗夜を連続せしむるとすれば、光明を

汝等に齋す者は、アルラーハに非ずして果して誰ぞ。汝等尙ほ聴かざるか』と云。言へ『汝等思へるか、アルラーハ若し復活の日まで不断に白晝を永続せしむるとすれば、休息すべき夜を汝等に齋す者は、アルラーハに非ずして果して誰ぞ。汝等尙ほ見ざるか』と云。彼は其の慈悲を垂れて汝等のために晝夜を造り、汝等を休息せしめ、また彼の恩恵を求めしむ。汝等恐らく感謝せん。其日彼は彼等と呼びて問はん『汝等がわが同位者とせる者はいま何処にありや』と云。而してわれ一切の民より一人の証人を擧げて言はん『汝等の証據を示せ』と。其時彼等は眞理がアルラーハのものなるを知らん。而して彼等が虚構せる神々は彼等を棄てて去らん。

げにカールーンはモーゼの民の一人なりしが、其民に対して暴慢なりき¹。吾は夥しき財宝を彼に與へ、その宝库の鍵は一群の強壯なる男子も猶且荷ひ難きほどなりき。其民彼に向つて曰く『勝ち誇る勿れ、アルラーハは勝ち誇る者を欣ばず矣。アルラーハが汝に賜へるものにて来世の安居を求めよ。現世にての汝の務めを閑却する勿れ。アルラーハが汝に善事を行へる如く、汝も他人に善事を行へ。地上に惡を作す勿れ。アルラーハは断じて作惡者を欣ばず』とき 彼曰く『わが之を與へられたるは、尊らわが知識のためなり』と。彼はアルラーハが、彼以前に於て彼よりも有力に、また彼よりも多く富を積める者を亡ぼせることを知らざりしか。されど罪人は彼等の罪惡について問はるることなし²。

(1)カールーン Qarun は回教の学者によりて旧約聖書のコラ Korah と同一人にしてモーゼの伯父なりとせらる。彼は美貌に於て、知識に於て、並に富に於て拔群なりしとせられ、埃及に於てヨセフが三個処に秘藏せる財寶の一を発見せりと傳へらる。(2)主は彼等の罪惡を知悉する故、また彼等に弁解の機会を與へざるためなり。

カールーン美々しく飾りて其民の間に出で往きたり。現世の生活を希へる者は曰く『嗚呼、吾等にもカールーンに賜はりし如きものが賜はりなば！ げに彼こそは偉大なる幸運者なれ』とき さ

れど知識を與へられたる者は曰く『禍なるかな汝等は。信じて善事を行ふ者には、アルラーハの報賞こそ最勝なれ。されど唯だ能く忍ぶ者のみ之を受けん』と云。かくて吾は彼並に彼の邸宅を地中に埋没し去れり。彼には彼を助けてアルラーハに抗する軍勢もなく、また彼は己れを護り得る者にも非ざりき云。前日まで彼の地位を美望せる者曰く『嗚呼アルラーハは己れの欲する僕等に糧餉を賜ひ、或者には之を増し、或者には之を減するなり。若しアルラーハの恩寵なかりせば、吾等も必ず地中に埋没せられしなるべし。嗚呼、不信者は決して榮えず』と云

かの末世の住処は、われ之を地上に於て自ら矜ることを求めず、また惡事を行はんとせざる者に與ふべし。善果は其身を護る者に歸す云。而して善事を行ふ者は過分の報賞を受くるも、惡事を行ふ者は唯ぞ応分の報償を受く云。げに古蘭を汝に裁可せる彼は、必ず汝を復歸すべき処に復歸せしむべし。言へ『吾主は嚮導を齎す者は誰なるか、明かに迷へる者は誰なるかを熟知す』と云。經典が汝に降さるべしとは、汝が豫想だもせざりし所にして、偏へに汝の主よりの慈悲による。されば断じて不信者の左袒者となる勿れ云。アルラーハの休徵既に汝に降されたる後、彼等をして汝を之に背かしむるが如きことある勿れ。人々を汝の主招げ。神々を彼に配する者の一人となる勿れ云。

アルラーハと共に如何なる神をも喚ぶ勿れ。彼の外に神なし。彼を除きて萬物は皆な消滅す。審判の日は彼の掌るところにして、汝等は彼に帰るなり矣。

(1) 此の一節はマホメットがメッカよりメヂナに遷る途上にての啓示とせらる。『復歸すべき処』の原語は *Ma'ad* にして、之を天上の樂園とも解すべく、或はメッカを指せりとも解すべし。即ち他日マホメットが勝利を得てメッカに復歸すべしとの豫言なり。

第二十九 蜘蛛章

メッカ啓示

第四節に多神を拜する者を蜘蛛に譬へ、『家のうちの至弱なるは蜘蛛の家なり』とあるに因みて蜘蛛章 *Al-Ankabut* と名づけらる。概ねメッカ中期より末期に亘りての啓示にして、前章と同じくマホメットの逆境時代に属し、迫害せられたる信者を鼓舞激勵せんとするものなり。但し冒頭十節はネルデケが指摘せる如く、バドル・ウホド兩役以後のメヂナ啓示とすべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ラーム・ミーム一人は唯だ『吾は信ず』と言ふのみにて足り、試練を受くることなしとするか¹ げに吾は彼等以前の者をも試練したり。げにアルラーハは誠実者は誰なるか、また虚言者は誰なるかを知らんとす² 悪事を行ふ者は、能く吾を凌ぎ得べしとするか。彼等の判断は禍なるかな³ アルラーハとの会見を希ふ者は、げにアルラーハの定めたる時が必ず来るべきことを知れ。彼は能聞者・能知者なり⁴ 善戦する者は唯だ己れのために善戦するなり。げにアルラーハは三界に求むるところなし⁵ 信じて善事を行ふ者は、われ必ず彼等の諸悪を拂拭し、その為せる最

上のことに対して報償を與へん^セ。吾は人がその父母に対して孝順なるべきを訓へたり。されど彼等若し汝に向つて汝の知らざる神々を吾に配せよと強ゆることあらば、断じて彼等に従ふ勿れ。汝等皆な吾に歸る。其時吾は汝等にその為せることを告知せん^ハ。されど信じて善事を行ふ者は、げにわれ必ず之を義人のうちに加へん^カ。人々のうちには『吾等はアルラーハを信ず』と言ひながら、一たびアルラーハのために艱難に遭はしめらるる時は、人為の災厄を以てアルラーハの懲罰と誤る者あり。而も其後汝の主よりの佑助来る時は、『げに吾等は汝等に協力せり』²と言ふ。萬人が胸中に懐くものを最も善く知るはアルラーハに非ざるか。げにアルラーハは信ずる者を知り、また偽信者をも知る^ニ

(1) 此の一段はウホド敗戦後に於ける偽信者の態度を非難せるものとして、メヂナ啓示とするを至当とす。(2) 戦敗れたる時は之をマホメントの罪に歸し、戦勝する時は戦利品の分配に與らんがために『吾等も協力せり』と言ふなり。

信ぜざる者が信ずる者に向つて曰く『吾等の道に従へ。げに吾等は汝等の罪を負はん』と。されど彼等は決して汝等の罪を負はざるべし。げに彼等は虚言者なり^ニ。されど彼等は必ず己れ自身の重荷を負ひ、且己れの重荷と共に他の重荷を負はしめられん。而して復活の日には必ず其の虚構せ

ることについて糾問せらるべし三

吾はノアを其民に遣はしたり。彼は千年に五十年缺くる間、彼等の間に住めり。彼等その不義のため洪水に襲はれしが、吾はノア並に方舟ほこぶねの同乗者を救ひ、之を三界への休徴となせり五

アブラハムが其民に向つて是く言へる時を念へ『アルラーハに事へ、之を敬へ。汝等知識あらば、此事の汝等にとりて最善なるを知らん六 然るに汝等はアルラーハを舍きて他の神々を拜し、唯だ虚偽を構ふ。されど汝等がアルラーハを舍きて拜する神々は、如何なる糧餉をも汝等に與へず。されば汝等の糧餉をアルラーハに求め、彼に事へ、彼に感謝せよ。汝等は彼に帰らしめらるモ汝等は之を虚偽なりと言ふか。げに汝等以前の民もまた使者を虚言者と呼べり。されど使者は唯だ明白にその使命を傳達するのみ』と六

彼等はアルラーハが如何に創造し且復造するかを見ざるか。げにそはアルラーハにとりて易々たることなり元 言へ『地上を遊歴してアルラーハが如何に萬物を創造せるかを見よ。次でアルラーハは第二の創造を創造せん、げにアルラーハは萬事を能くす』と言 彼は己れの欲する者を罰し、

欲する者に慈悲を垂る。而して汝等は彼に歸らしめらるニ。汝等は天に於ても地に於ても彼を無力ならしむる能はず。またアルラーハの外に汝等の愛護者なく佑助者なしニ。アルラーハの休徴を信ぜず、彼との会見を信ぜざる者は、わが慈悲に浴することを得ず。彼等には唯だ痛刑あるのみニ。

(一)此の一段即ち第一九—二三節は錯簡たるべし。次の第二四節はアブラハムの故事の継続にして、第一八節に続くものとすべし。

其民の返答は唯だ是くの如くなりき『彼を殺せ、然らずは焚け』と。されどアルラーハは彼を火中より救ひたり。げに此中には信ずる者への種々なる休徴あり。彼曰く『汝等はアルラーハの外に神々を立つるも、汝等と神々とは唯だ現世の友誼によつて結ばるのみ。復活の日に於て、汝等は互に他を否認し、互に他を呪咀すべし。汝等の住処は火獄なり。汝等には如何なる佑助者もなからん』と。ロトは彼を信じたり。彼曰く『吾は吾主の許に走らん。彼は偉力者・聰明者なり』と。吾はイサクとヤコブとをアブラハムに與へ、其の子孫に豫言と經典とを授け、また現世の報賞をも與へたり。末世に於て彼は必ず義人のうちに加へられん。

またロトが其民に向つて是く言へる時を念へ『汝等は汝等以前の如何なる民も行ばざりし醜行を

敢てすえ 何たる事ぞ、汝等は男子に近づかざるか、汝等は大道にて掠奪せざるか、汝等は相集まりて悪事は行はざるか』と。されど其民は唯だ是く答へたるのみ『汝の言眞実ならば、吾等にアラーハの懲罰を齎せ』と云 彼曰く『主よ、作惡の民に対して吾を佑助せよ』と言

而してわが使者等が吉報を齎してアブラハムに來れる時、彼等曰く『吾等は此の都府の民を滅ぼさんとす。げに此の都府の民は不義者なり』と。 彼曰く『げにロトも都内にあり』と。 彼等曰く『吾等は其処に住む者を熟知す。落後者たるべきロトの妻を除き、吾等必ず彼並に彼の家人を救はん』と云 而して使者等がロトに來れる時、ロト彼等を見て困惑し、如何に処すべきかを知らざりき。 彼等曰く『恐るる勿れ、また憂ふる勿れ。落後者たるべき汝の妻を除き、吾等は汝並に汝の家人を救はん』 此の都府の民は罪を犯したり。されば吾等は彼等の上に天譴を下さんとするなり』と云 吾は此中に思慮ある民への明白なる休徴を遺したり云

また吾はミディアンに其の同胞シニアイブを遣はしたり。 彼曰く『吾民よ、アルラーハに事へ、末日を恐れよ。惡事を行ひて地上を紊すこと勿れ』と云 然るに彼等は彼を虚言者と呼べり。かくて激震彼等を襲ひ、翌朝彼等は地に俯して仆れ居たり云

またアアドとサムード。此等の民のことは廢墟に歸したる彼等の住処によつて既に汝等に明瞭な

るべし。サタンは彼等をして己れの所行を善しと思はしめたり。されば彼等は思慮ある民なりしも、ついに彼のために迷はしめられたり云

またカールーンとファラオとハーマーン。モーゼは明白なる証據を携へて彼等に至りしも、彼等は地上に於て暴慢に失したり。されど彼等は吾を凌ぐべくもなかりき云

吾は彼等の各個を其罪によつて罪したり。或者には暴風を送り、或者は轟音を以て之を襲ひ、或者は之を地中に埋没し、或者は之を溺死せしめたり。アルラーハが彼等を害せるに非ず、彼等自ら己れを害せるなり云

アルラーハ以外に愛護者を求むる者は、譬ふれば己れのために家を作る蜘蛛の如し。げに家のうちの至弱なるは蜘蛛の家なり。彼等此事を知りたりせば！云 げにアルラーハは何にてもあれ彼等が彼以外に喚ぶ者を知る。彼は偉力者・聰明者なり云 吾は此等の比喻を人間に挙示すれども、識者の外は之を曉らず云 アルラーハは眞理を現すために天地を創れり。げに此中には信者への休徴

あり云

汝に默示せられたる經典の諸節を讀誦し、禮拜を嚴守せよ。げに禮拜は人を惡事と醜行とに遠ざ

らしむ。最も重大なるはアルラーハを念ずることなり。アルラーハは汝等の為すことを知る聖

最善の途を以てするに非ずば受経者と論議する勿れ。但し彼等のうち不義を行ふ者を除く。而して言へ『吾等は吾等に降されたるものを信じ、また汝等に降されたる者を信ず。吾等の神と汝等の神とは同一なり。吾等は彼に帰命す』と云

是くの如くにして吾は經典を汝に降したり。されば既に經典を賜はりたる者は皆な之を信ず。而して此等¹のうちにも亦信する者あり。不信者の外は何者もわが休徴を否まざる

(1) 受経者に対してアラビア人を指す。

此事ありし以前¹、汝は未だ曾て如何なる書籍をも讀まず、また汝の右手にて如何なるものをも書かざりき。若し汝が讀み且書けりとすれば、虚妄を追ふ者は或は之について疑心を抱くべし²。然らず、そは知識を賜はれる者の胸中に潜む明瞭なる休徴なり³。不信者の外は何者もわが休徴を否まざる

(1) 古蘭の啓示ありし以前。(2) 『虚妄を追ふ者』は、『之を虚妄とする者』とも解せらる。予は之を以て第五二節の

『虚妄を信じてアルラーハを信ぜざる者』と同一義と解せり。『虚妄』とはアルラーハ以外の諸神を指す。(3) 古蘭は實

に以前に降されたる經典の眞理のみならず、知識ある人々の胸中に潜む未発の眞理をも闡明するものとするなり。

彼等曰く『何故に主よりの休徴が彼に降されざるか』と。言へ『げに休徴はアルラーハの許にあり。げに吾は唯だ公然たる一警戒者にすぎず』と云。われ經典を汝に降し、汝は之を彼等に復誦せり。彼等之を以て尙ほ足れりとせざるか。げに此中には信ずる民への慈悲と訓誡とあり云。

言へ『アルラーハは吾と汝等との証人たるに足る。彼は天地間の一切のものを知る。されば虚妄を信じてアルラーハを信ぜざる者は、必ず淪喪者とならん』と云。彼等は懲罰を汝に催促す。若し豫め定められたる時期なかりせば、げに懲罰は彼等の識らざる間に、既に突如として彼等を襲ひしならん云。彼等は懲罰を汝に催促す。げに地獄はやがて不信者を圍繞すべし云。其日懲罰は彼等の頭上より、また彼等の脚下より彼等を襲はん。而して主は言はん『汝等の為せることを味へ』と云。

信ずるわが僕等よ、げに大地は廣し。されば吾に事へよ¹云。

(1)メッカに住みて迫害のために信仰を棄つることなく、大地は廣ければ去りて他に往き、其の信仰を堅持せよとの意味

人は皆な死を味はざるべからず。然る後に汝等は吾に帰るなり云。而して信じて善事を行ふ者は、吾之を河川流るる樂園の高処に居らしめ、長久に其中に住ましめん。善きかな精進者の報賞

は云 此れ能く耐え忍びて其主に頼る者への報賞なり云

如何に多くの生類が自ら養ひ得ざることをぞ。されどアルラーハは彼等を養ひ、また汝等を養ふ。彼は能聞者・能知者なり云

汝若し彼等に向つて『天地を創造し、日月を制する者は誰ぞ』と問はば、彼等答へて『アルラーハ』と言はん。然らば如何にして彼等は虚言し得るか云 　アルラーハはその僕等のうち己れの欲する者には豊かに糧餉を賜ひ、欲する者には之を減ず。げにアルラーハは萬事を知る云 　汝若し彼等に向つて『天より水を降し、之によつて死地を甦らしむる者は誰ぞ』と問はば、彼等答へて『アルラーハ』と言はん。言へ『然らばアルラーハを讃へよ』と。否な、彼等の多くは曉らざるなり云 　現世の生活は娛樂遊戯にすぎず。末世こそ眞実の生活なれ。彼等此事を知りたりせば！云 　彼等船中にては専らアルラーハに帰依して之に祈る。されど一旦救はれて上陸すれば直ちに他の神々を彼に配す云 　かくして彼等はわが彼等に賜へるものを信ぜず、現世の歡樂を求めんとす。されど彼等はやがて思ひ知らん云

その周辺に於て人々劫掠せらるる時、われメツカを以て安全なる聖域となせるを見ざるか。然る

に彼等尙ほ虚妄を信じてアルラーハの恩寵を感謝せざるか。アルラーハについて虚構する者、眞理が彼に来れる時に之を虚偽なりと呼ぶよりも不義なる者あるか。地獄に不信者の住むべき処なしとするか。されどわがために善戦する者は、われ之を吾道に導かん。げにアルラーハは善事を行ふ者と偕にあり矣。

第三十 羅馬人章

メッカ啓示

第一節に『羅馬人は敗れたり』とあるに因みて羅馬人章 *Ar-Rum* と名づけらる。当時東羅馬帝國の軍隊は、アラビアの隣接地域に於て隨處波斯軍のために撃破せられたり。マホメット開教第四年即ち西紀六一三年に、東羅馬帝國はエルサレム並にダマスコを、翌年には埃及を失ひ、翌六一五年波斯軍は更にアナトリアに侵入してコンスタンチノープルを脅威するに至れり。本章は此の前後にメッカに於て啓示せられたるものとせらる。当時メッカ市民は羅馬人即ち基督教徒に対してよりも、多く波斯人に対して好意と同情とを示せしかば、羅馬敗北の報道を聞きて大に欣び、彼等と同じく天啓の經典に拠つて独一神の崇拜を嚴守するマホメット並に其の信者の運命も、また羅馬人と同然なるべしとして、アラトの無力を嘲笑せり。是かる時に當りてマホメットは、羅馬の近く勝利を復すべきことを豫言し、同時に回教の最後の勝利を宣告せり。この豫言は實現せられ、西紀六二五年羅馬は波斯に対して決定的勝利を博したり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ラーム・ミームー 羅馬人は此國に隣接せる地にて敗れたりニ されど敗れて数年ならずして彼等必ず勝たんニ 既往も將來も事を決するはアルラーハなり 其日信者はアルラーハの佑

助を欣ばん^四。アルラーハは己れの欲する者を佑助す。彼は偉力者・大慈者なり^五。これアルラーハの約束なり。アルラーハは其の約束を破らず。されど人々多くは之を知らず^六。

彼等は現世の皮相を知る。されど彼等は末世を意に介せず^七。彼等は自ら反省するところなきか、アルラーハは唯だ真理のために且一定の時期を定めて、天地並に天地間の一切のものを創造せることを。されど人々多くは其主との会見を信ぜず^八。彼等地上を遊歴して、彼等以前の者の末路が如何なるものなるかを見ざりしか。彼等は此等よりも有力なりき。彼等は大地を掘り、此等が建てたるよりも大なるものを建設せり。而して彼等への使者は明瞭なる休徴を携へて彼等に至りしなり。さればアルラーハが彼等を害せるに非ず、彼等自ら己れを害せるなり^九。災厄は彼等が悪業の悪果なりき。そは彼等がアルラーハの休徴を虚偽なりとし、之を嘲笑せるが故なり^{一〇}。

アルラーハは創造し、然る後に之を復造す。然る後に汝等は彼に帰らしめらる^二。復活の日一切の作悪者は絶望すべし^三。而して彼等が彼に配せる神々のうち、一として彼等のために宥恕を乞ふ者なく、且彼等は其等の神々を否認すべし^三。復活の日来る時、其日彼等は分離せらるべし^四。信じて善事を行へる者は樂園に於て歡喜すべく^五。信ぜずしてわが休徴並に末世の会見を虚偽なりと言へる者は懲罰に処せらるべし^六。されば朝な夕なアルラーハを讚美せよ^七。天地間の讚美は唯だ

彼に帰す。されば日没と正午とに彼を讚美せよ。彼は死者より生者を生み、生者より死者を生み、死せる大地を甦らしむ。かくして汝等も墓より甦らしめらるるなり。

彼の休徴の一つは、彼が塵土より汝等を創れることなり。然る後に見よ、汝等普く地上に散布する人類となれり。彼の休徴の一つは、彼が汝等の同棲すべき妻を汝等自身より創り、汝等の間に愛慕憐恤の情を起さしめたることなり。げに此中には反省する民への種々なる休徴あり。彼の休徴の一つは、彼が天地を創造し、且汝等の言語と皮膚の色とを不同ならしめたることなり。げに此中には識者への種々なる休徴あり。彼の休徴の一つは、汝等を夜に晝に眠らしめ、且彼の恩恵を求めしむることなり。げに此中には傾聽する民への種々なる休徴あり。彼の休徴の一つは、電光を汝等に示して恐怖と希望とを抱かしめ、水を天より降して死地を甦らしむることなり。げに此中には思慮ある民への種々なる休徴あり。彼の休徴の一つは、彼が其の命令によつて天地を確立し、然る後に汝等と呼びて忽ち之を大地より出現せしむることなり。天地間の一切のものは彼に属し、萬物皆な彼に従ふ。最初に創造し、次で之を復造する者は彼なり。そは彼にとりて易々たることなり。彼は天地至高の位を占む。彼は偉力者・聰明者なり。

彼は汝等自身に関する一比喻を汝等に挙示す。汝等は己れの奴隸を以て、わが汝等に賜へる物の

共有者とするか。また汝等同志が互に相恐るる如く彼等を恐るるか¹。かくの如く吾は思慮ある民に休徴を明示す²。否な（汝等は之を為さざるべし）。されど不義を行ふ者は、知識なくして己れの私欲に従ふ者なり。アルラーハが迷はしめたる者は、誰か之を導き得るものぞ。彼等には如何なる佑助者もなかるべし³。

（1）アルラーハを自由民、其他の神々を奴隷に譬ふ。（2）不義を行ふとは多神をアルラーハに配すること。

アルラーハが創れる人間の本性に従ひ、一個の堅信者^{ハニイフ}として汝の面^{おもて}を真教に向けよ。アルラーハの創造に変更なし。そは正しき教なり。されど人々多くは之を知らず³。彼に懺悔し、彼を敬ひ、礼拜を守れ。アルラーハに神々を配する者の一人となる勿れ³。

其教を分ちて諸宗派を作れる者は、各宗唯だ己れの有てる者のみを欣ぶ³。

彼等艱難に遭ふ時は即ち其主に懺悔して之に祈る。されど一旦その慈悲に浴すれば、げに彼等の或者はまた神々を其主に配し³。わが彼等に賜へるものを信ぜんとせず。さらば暫く樂しめ。汝等やがて思ひ知らん³。われ彼等が彼に配する者を是認する權威を彼等に降せることあるか³。われ人々を慈悲に浴せしむれば、彼等即ち之を欣ぶ。然るに彼等の手が豫め送れるもののために災難に

遭へば、見よ彼等は忽ち絶望す。彼等はアルラーハが己れの欲する者に糧餉を増し、或は之を減ずるを見ざるか。げに此中には信ずる者への種々なる休徴あり。されば近親と貧者と旅人とに応分に施與せよ。そはアルラーハの慈顔を求むる者のために最も善し。是くの如き者は栄ゆべし。

重利を貪ることは人間の富を増すべし。されどそはアルラーハの恩寵を増す所以に非ず。されどアルラーハの慈顔を求めて汝等が喜捨するもの、此等は倍加して與へられん。

汝等を創り、之を育て、次で之を死なしめ、更に之を甦らしむるは彼なり。汝等の神々のうちに此等の一事をも能くする者あるか。彼を讃へよ、彼は高く彼等の彼に配する者の上に超在す。

人間の手が為せることのために、陸にも海にも艱難生じたり。これ彼等をしてその所行の一端を味はしめ、彼等を正道に復らしめんがためなり。地上を遊歴して汝等以前の者の末路が如何なるものなりしかを見よ。彼等の多くは多神を拜せる者なり。されば忌避し難き日がアルラーハより来る前に、汝の面を断乎眞実の教に向けよ。げに其日彼等は二群に分たるべし。信ぜざりし者は其の不信の罪を負ふべく、善事を行へる者には彼等のために展べられたる褥しとあるべし。これ彼が恩寵を垂れて善事を行へる者に報いんがためなり。げに彼は不信者を愛せず。

彼の休徴の一つは、吉報を齎す風を送りて、汝等にその慈悲を味はしめ、その命令によりて船を

走らしめ、汝等をして彼の恩恵を求めしむることなり。汝等恐らく感謝せん

げに吾は汝以前にも諸使者を其民に遣はしたり。諸使者は明瞭なる休徴を携へて其民に赴きたり。然る後に吾は一切の罪を犯せる者に報いたり。されど信者を佑助することはわが務めなり

雲を動かすために風を送る者はアルラーハなり。次で彼は思ふがままに雲を天上に拈げ、次で之を破れば、汝等即ち水の其間より降り来るを見る。彼はその僕等のうちの己れの欲する者の上に之を降り注がしむ。見よ、彼等歡呼して之を欣ぶを。而も雨の降り注ぐ前、彼等は絶望しつつありしなり。されば見よ、アルラーハの慈悲の跡を、彼が如何にして死地を甦らしむるか。げに彼は死者を甦らしむ。げに彼は全能なり。されどわれ設ひ風を送るとも、苗が既に黄ばむを見る時、彼等また不信者となる。げに汝は死者に聽かしむる能はず、其脊を向けて逃げ去る聾者に汝の喚呼を聽かしむる能はず、また盲者を其の迷路より導くことも能はず。汝は唯だわが休徴を信ずて歸命する者に聽かしめ得るのみ

汝等を微弱なる者に創り、微弱の後に強壯を與へ、強壯の後にまた微弱と白髪とを與ふるは彼なり。彼は己れの欲するものを創る。彼は能知者・強大者なり

復活の日来る時、一切の罪人は彼等が墓中に留まれるは僅に一刻にすぎずと誓はん。彼等世に在

る間も是く虚言するを常とせり。されど知識と信仰とを賜はれる者は即ち言はん『汝等はアルラーハの經典に従ひて、復活の日まで留まれるなり。而して今日は即ち復活の日なり。されど汝等は之を知らざりき』と云。其日不義を行へる者の弁疏は毫も其身を益するところなからん。而して彼等は慈顔を求むることを許されず。

げに吾は種々なる比喻を人々のために此の古蘭の中に挙げたり。されど設ひ汝が古蘭の一節を彼等に示すとも、信ぜざる者は必ず言はん『汝等は虚言者にすぎず』と云。アルラーハは知識なき者の心を是くの如く封じたり。されば耐え忍べ。アルラーハの約束は眞実なり。確信なき者をして汝を動搖せしむる勿れ。

第三十一　ルクマーン章

メッカ啓示

第一二章以下にルクマーンのことを述ぶるに因みてルクマーン章 Luqman と名づけらる。ルクマーンはマホメット當時に於てアラビア人の尊信を博したる古の聖者たることは疑ひなしといへども、旧約聖書には彼と同一人と看なすべき豫言者なし。但しルクマーンはエチオピアに生れたる黒人奴隸なりしとせられ、彼の名によつて傳へらるる種々なる寓話は、イソップ物語のそれと酷似するが故に、多くの學者によつてイソップと同人視せらる。蓋しイソップ Aesop とはエチオピア人 Aethiops の意味にして希臘人は彼の姓名を知らざりしが故に是く呼べるなるべし。若干のメチナ啓示を除き、概ねメッカ末期の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ミーム・ラーム　こは智慧に満ちたる經典の諸節なりニ　そは礼拜を守り、捐課を納め、堅く末世を信じて善事を行ふ者への嚮導並に慈悲なりニ

此等は其主に導かる。此等は栄ゆ

べし^五

(一) 此の一段の序説はメチナ啓示とすべし。

人々の中には、狂言綺語を購ひ来りて、之を以て知識なくして人をアルラーハの道に背かしめ、且之を翻弄せんとする者あり¹。是くの如き者のためには耻づべき懲罰準備せらる。わが休徴が彼に向つて讀誦せらるる時、彼は之を聴かざるが如く装ひ、宛も双耳におもり錘を詰めたる如く、傲然として其背を向けて去る。されば彼には痛烈なる刑罰の消息を傳へよせ

(1) ナツイール・イブン・アル・ハーリス Nazir ibn al-Haris と呼ぶ一メッカ人が、波斯古代の二英雄ルスタム Rustam 及びイスファンディアル Isfandiar を誦へる物語を購ひ歸り、古蘭よりも驚くべきものとして、之をメッカ市民に讀み聞かせたりと傳へらる。

げに信じて善事を行ふ者には歡喜の樂園あり。彼等長久に其中に住まん。これ眞実なるアルラーハの約束なり。彼は偉力者・聰明者なり。彼は汝等が見得る柱なくして諸天を創り、堅固なる群山を地上に投げて大地を汝等と共に動かざらしめ、また各種の生類を地上に散布せり。また吾は水を天より降し、各種の善美なる草木を地上に生ぜしめたり。これアルラーハの創造なり。若し彼以外に創造する者あらば之を吾に示せ。否な、不義者は明白なる迷誤の中にあり。

げに吾はルクマーンに智慧を與へて曰く『アルラーハに感謝せよ。アルラーハに感謝する者は、

唯だ己れの魂のために感謝するなり。而して忘恩者は——。げにアルラーハは富有者・可頌者なり』と三。またルクマーンが其子に向つて是く訓誡せる時を念へ『吾子よ、何者をもアルラーハに配する勿れ。之を配するは重大なる不義なり』と三。

吾は父母に関する訓誡を人間に與へたり。人の母親は、弱りに弱りて其子を胎内に宿し、其の離乳は実に二年の後なり。されば吾と汝の父母とに感謝せよ。汝等は吾に歸るなり。されど若し汝等の父母が、汝の知らざる者を吾に配することを強いなば、断じて之に従ふ勿れ。されど現世にては懇切に父母を遇し、吾に懺悔する者の道を守れ。汝等は吾に歸るなり。其時吾は汝等に其の為せることを告知すべし¹』_三

(一)此の一段は恐らく後に附加せられたるものにして、第一三節は次の第一六節に続く。

(ルクマーン曰く)『吾子よ、設ひ芥子粒の重さなりとも、設ひ岩石の間、又は天上、又は地中に潜むとも、アルラーハは必ず之を露さん^{あらは}。げにアルラーハは妙知者・悉知者なり云。吾子よ、禮拜を守り、善を勧め、惡を禁めよ^{とど}。如何なることに遭遇するとも能く耐え忍べ。これ必ず果たすべき務めの一つなり云。人に対して高慢に其面を背くる勿れ。傲然として地上を往來する勿れ。アル

ラーは自負矜高なる者を愛せず。徐ろに歩み、声を低くせよ。げに声の最も厭ふべきは驢馬の
声なり』と云

汝等思はざるか、アルラーハは天にあるもの地にあるものを汝等に奉仕せしめ、内外の恩寵を汝等の上に垂るることを。然るに人々のうちには、知識なく經典なく、光明を與ふる經典をも有たずして、妄りにアルラーハについて論議する者あり。彼等に向つて『アルラーハが降せるものに従へ』と言へば、彼等答へて曰く『吾等は吾等の祖先が奉じたるものに従はん』と。何事ぞ、サタン彼等を烈火の刑に招ぐも猶且然るか。

其面をアルラーハに向けて善事を行ふ者は、確乎たる把柄（きりて）を握れる者なり。萬事はアルラーハに歸着す。信ぜざる者の不信について心を悩ます勿れ。彼等は吾に歸る。其時吾は彼等に向つて其の為せることを告知せん。げにアルラーハは人が胸中に懐くことを知る。吾は暫く彼等に生を樂しません。然る後に吾は彼等を嚴刑に駆り立てん。汝若し彼等に向つて『天地を創造せるものは誰ぞ』と問はば、彼等答へて『アルラーハ』と言はん。言へ『アルラーハを讚へよ』と。されど彼等多くは知らざるなり。

天地間の一切のものはアルラーハに属す。彼は富有者・可頌者なり。設ひ地上の草木を悉く筆となし、海を七倍して其水を悉く墨汁とするとも、アルラーハの言を書き盡すこと難し。げにアルラーハは偉力者・聰明者なり。汝等の創造並に更生は、猶ほ一人を創造し更生せしむるが如きのみ。げにアルラーハは能聞者・能知者なり。

汝はアルラーハが夜を晝に納め、晝を夜に納め、日月を操縦して各その定まれる時期に運行せしむるを見ざるか。またアルラーハが汝等の為すことを熟知するを知らざるか。これアルラーハは眞理なるが故なり。而してアルラーハを舍きて汝等が拜する者は虚妄なるが故なり。而してアルラーハが至高者・至大者なるが故なり。

汝は船がアルラーハの恩寵によつて海上を走るを見ざるか。これ彼がその休徴を汝等に示さんためなり。げに此中には一切の堅忍なる知恩者への種々なる休徴あり。波浪山の如く彼等を覆ふ時は、彼等専らアルラーハを念じて之に祈る。然るに彼一たび彼等を安全に上陸せしむれば、彼等のうち忽ち二心を抱く者あり。されどわが休徴を拒む者は、唯だ背信なる忘恩者に外ならず。

人々よ、汝等の主を敬ひ、父は其子のために、子は其父のために何事をも為し得ざる日を恐れよ。げにアルラーハの約束は眞実なり。現世の生活に欺かるる勿れ。詐欺者のためにアルラーハについて欺かるる勿れ。

アルラーハ、げに彼は復活の日を知る。彼は雨を降す。彼は胎内に宿るものを知る。而して人は明日の為すことを知らず、いづれの地に死するかを知らず。げにアルラーハこそ能知者・悉知者なれ。

第三十二 叩首章

メッカ啓示

第一五節に『叩首して其主を讃へ』とあるに因みて叩首章 *As-Sajdah* と名づけらる。概ねメッカ中期の啓示にして、第二九章以下本章に至る四章を併せて一群を成せり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アリフ・ミーム・ラームー 疑惑を容れざる此の經典の啓示は、三界の主より出づ

彼等曰く『かれ之を偽作せり』と。然らず、こは汝をして、汝以前に未だ曾て一人の警告者も未らざりし民に向つて警告を與へ、彼等を正しく導かしめんがために、汝の主より降されたる真理なり

六日の間に天地並に天地間の一切のものを創造せるは彼なり。然る後に彼は王座に鎮坐す。汝等は彼の外に一愛護者なく、一勸解者なし。汝等尙ほ反省せざるか^四 彼は天より地に至る萬事を総攬す。然る後にそは一日にして彼に登る^一。而して其の一日は汝等が計算する一千年なり^五。これ不

可見のものと可見のものとを知悉する彼なり、偉力者・大慈者なり六　その創造せる一切を善美ならしめたる者なり。而して彼は泥土を以て人間の創造に着手せり七　然る後に彼は賤しき一涓滴を以て人間の子孫を創り八　之に形体を與へ、之に己れの魂を鼓吹し、且汝等のために耳と目と心とを造りたり。然るに汝等が恩を感ずること如何に薄きぞ九

(一) 『彼に登る』とは、或は彼に歸ること、却ち復活の日にアルラーハの前に召集せらるることと解し、或はアルラーハの命令が実現せられて、其の報告が彼に達することとせらる。予は後者を採る。

彼等曰く『吾等一旦地中に葬られて、復た新しき生類となるべきか』と。然らず、彼等は其主との会見を信ぜざる者なり〇　言へ『汝等の管理を委ねられたる死の天使が、汝等の魂を取り去らん。然る後に汝等は其主に歸らしめらる』と二

其時罪を犯せる者は、其主の前に頭を垂れて言はん『主よ、吾等は見、吾等は聽けり。吾等を地上に歸らしめよ。さらば吾等必ず善事を行はん。吾等今こそ堅く信じたれ』と。汝若し此の光景を目睹し得なば！三　吾若し欲しなば、一切のものに嚮導を與へ得べし。されど『吾必ず人間と幽鬼とを以て一齊に地獄を満たさん』と言へるわが言は^{ことば}實現せられざるべからず三　吾は言はん『刑罰

を味へ、こは汝等が此の汝等の日の会見を忘れたるが故なり。げに吾もまた汝等を忘れたり。さらば汝等の為せることに対して、永劫の懲罰を味へ』と云

わが休徴によつて訓誡せらるる時、地に伏し叩首して其主を讃へ、決して自ら矜ることなき者のみ、能くわが休徴を信する者なり云 彼等其身を臥床より起せば、即ち畏懼と希望とを抱きて其主に祈り、且わが賜へるものにて喜捨を行ふ云 而して何人も彼等が為せることの報賞として、密かに彼等のために備へらるる目を歡ばしむるものを知らず云

信者と作悪者とは同一視せらるべきか。彼等は決して一律に非ず云 信じて善事を行ふ者には常住の樂園あり。これ彼等の為せることに対する響應なり云 悪事を行へる者の住居は火獄なり。彼等之より出でんとする毎に、必ず其中に引戻されて是く言はれん『曾て汝等が虚妄なりと言へる此の火獄の刑を味へ』と云 吾は彼等を懺悔せしめんがために、大なる懲罰の前に先づ手近き懲罰を味はしむ云 其主の休徴によつて訓誡せられ、然る後に之に背くより甚だしく不義なる者あるか。吾は必ず作悪者に報ゆ云

げに吾はモーゼに經典を與へたり。されば彼が之を受けたることを疑ふ勿れ。吾はイスラエルの

兒等の嚮導として之を與へたり。吾は吾が命令によつて嚮導する導師を彼等の間に定めたり。これ彼等能く耐え忍びて、堅くわが休徴を信じたるが故なり。

げに復活の日に於て汝の主は其の爭論せることについて彼等を審判すべし。わが彼等以前に幾多の世代を滅ぼせることは、既に彼等に明白なるに非ざるか。彼等は廢墟に歸したる彼等の住居を往來す。げに此中には種々なる休徴あり。然るに彼等尙ほ聽かんとせざるか。吾は水を不毛の地に驅りて、之によつて彼等の家畜並に彼等自身の食餌たる穀類を生ぜしむ。彼等此事を思はざるか。彼等尙ほ其目を開かんとせざるか。而も彼等曰く『汝等の言眞実ならば、その審判は何時行はるるか』と云。言へ『審判の日には、いま現に信ぜざる者の信仰は無益なり、また彼等は猶豫せられず』と云。されば彼等より遠離せよ。而して待て。げに彼等もまた待つ言

第三十三 聯盟章

メヂナ啓示

第九一―二五節にアラビア諸族、聯盟してメヂナを囲み、一挙回教の勢力を殲滅せんとせる戦争に關して述ぶるに因みて聯盟章 *Al-Ahzal* と名づけらる。聯盟軍のメヂナ包圍は遷都五年のことにして、前年マホメットのためにメヂナより追放せられたる猶太人ナツイール *Ab-Nazir* 族の有力者が、先づメッカに赴きてクライシユ族の諸首領を説き、次で強大なるガトフアーン *Ghat* 族に説き、諸族聯盟して約一萬の大軍を結成し、メヂナに向つて進撃するに至らしめたるものなり。此の報道に接するや、マホメットは直ちに防戦の準備に着手し、波斯人サルマーン *Salman* の献策を容れて、壕を穿ち土壁を築き、三千の兵を擁して敵の来るを待てり。然るにアラビア人はもと攻城戦に慣れず、加ふるに時恰も嚴冬にして寒氣酷しく、聯盟軍は空しく城外に陣して爲すところを知らざりき。かくて兩軍相對峙すること半月、一夜風雨俄に至り、敵軍の天幕悉く破れ、メッカ軍を指揮せるアブー・スフヤーンは遂に退却に決し、敗戦の如くにして南下せるを以て、ガトフアーン諸族もまた軍を回すに至れり。而して聯盟軍の退却するや、モハメットは直ちにメヂナ郊外に居住する猶太人クライザ族を襲ひ、悉く其の男子を屠り、その女子と小兒とを奴隸とし、その財産を沒收せり。これクライザ族が聯盟軍のメヂナ包圍中、之に内応してマホメットの背後を衝かんとせるが故なりとせらる。本章第二六・二七節は此事に關するものなり。

同年此の塹壕戦に先ち、マホメットは其の養子ザイードが離別せる妻ザイイナブ *Zainab* を納れて之を諸妻の一に加へたり。

第四節及び第三七節は之に直接關聯せるものなるが、之に因みてマホメットの諸妻に関する啓示あり。蓋しマホメットが養子の離別せる女子を己れの妻とせることは、當時に於て種々なる風評を生みたるべく、今日に於ても基督教の諸学者がマホメットを攻撃する場合に、必ず引用せらるる出来事の一つなり。かくて本章の諸節は、聖塚戦の前後却ち遷都五年乃至七年の間の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

豫言者よ、アルラーハを敬ひ、不信者並に偽信者に従ふ勿れ。げにアルラーハは能知者・聰明者なり。汝の主が汝に默示せることに従へ。げにアルラーハは汝等の為すことを熟知す。アルラーハに頼れ。げにアルラーハは守護者たるに足る。

アルラーハは人間の体内に二つの心を創らず¹。彼は汝等が離別せる妻を汝等の母とせず²、また彼は汝等が養子とせる者を汝等の実子とせず³。是くの如きは汝等の口より出づる言葉にすぎず。されどアルラーハは眞実を語り、且正しき道に導く。彼等と呼ぶには其の実父の名を以てせよ⁴。是くするはアルラーハの目に最も正し。設ひ汝等その実父を知らずとも、彼等は汝等と同信の兄弟にして且汝等の被護者なり。而して故意に之を為せるに非ずば、汝等誤れることありとも罪なし⁵。アラ

一ハは宥恕者・大慈者なり⁵

(1) 『二つの心を創らず』とは、養子に対して実子に対すると同一の情愛を抱く能はず、母ならざる者に対して実母に対するが如き敬愛の念を抱く能はずとの意。(2) アラビア人は其妻を離別するに当りて『汝の背は吾母の背の如し』と宣告し、然る後は之に近づくは宛も母に近づくが如く不倫なりとする風習ありき。この啓示はかかる風習を否認せるものなり。

(3) アラビア人は養子を以て実子と同一視せしが、マホメットは養子ザリードの妻を娶れることによつて、此の風習をも否認せり。(4) 『彼等』とは養子のこと。アラビア人は人を呼ぶに常に『誰の子』又は『誰の父』と言ふを常とせり。例へばアブー・スフヤーン却ち『スフヤーンの父』、イブン・ウバイ却ち『ウバイの子』といふが如し。(4) 既往に於て無智のために此事を誤れりとも罪なしの意。(5) 此の一段の啓示の因縁は本章第三七節に説明せらる。

豫言者は信者自身よりも信者と血縁濃く、豫言者の諸妻は実に信者の母なり。またアルラーハの經典によれば、血縁者は一般信者並に遷士よりも優位の相続権を有す¹。但し汝等が其の友人のためにする好意は此限に非ず。此事は經典に記さるセ

(1) 直訳『血縁者は一般信者及び遷士よりも近し』。先にマホメットはメッカよりの移住者とメヂナの援助者との間に血縁によるよりも親近なる兄弟関係を結ばしめ、従つて是かる關係に結ばれたる遷士は、輔士が死去せる場合に其の財産の配分権をも得たりしが、此の啓示によりて以前の律例は撤廃せられたり。

われ諸豫言者と約束を結べる時を念へ。吾は汝と結約し、またノア、アブラハム、モーゼ、及びマリアの子イエスと結約せり。吾は彼等と堅き約束を結びたり。これ彼が一切の誠実者にその誠実を問はんがためなり。而して彼は不信者のために痛刑を準備せり。

(1) 誠実者とは即ち豫言者なり。豫言者が其の使命を完うするか、民衆は彼等の使命に対して如何に応ふるかを知るための意。

汝等信者よ、大軍¹汝等を襲へる時、アルラーハが汝等に垂れたる恩寵を念へ。吾は彼等に向つて大風を駆り、且汝等には見えざる天軍を汝等に送たり。而してアルラーハは汝等の為せることを見たり。其時彼等は上より又下より汝等を襲ひたり²。其時汝等の目は惑亂し、汝等の心臓は喉頭に上り、汝等はアルラーハについて臆測を逞しくせり。信者は試練を受けたり。彼等は激しく戦慄せり。

(1) 聯盟軍を指す。其数約一萬、味方の兵力に三倍せり。(2) 此時ガトフアーン軍はメデナ東方の高地に陣し、メッカ軍は西方の低地に陣したり。

其時偽信者並に其心に病ある者は曰く『アルラーハ並に其の使者は、唯だ吾等を欺きて(勝利

を)約束せるのみ』と三 而して彼等の一團は曰く『ヤスリブの民よ、此処は吾等の居るべき処に非ず、宜しく帰るべし』¹と。而して彼等の或者は『げに吾等の家は防備なし』と稱へて豫言者に(帰還の)許可を求めたり。防備なかりしに非ず、彼等は唯だ遁走を欲せるのみ三 若し敵軍四方より市内に入り、彼等に求むるに叛逆を以てしたりせば、彼等必ず之に応じたりしなり。彼等は殆ど之を躊躇せざりしならん² 而も彼等先には断じて敗退せざるべきことをアルラーハに誓へるなり。アルラーハとの約束は必ず糾問せらる³

(1)メヂナと言はずしてヤスリブと言へるは、マホメットに対する反感の表示。『此処』とは市外の壕塹内、『帰る』は市内の家に帰ること。(2)直訳『彼等は暫時其中に留まりしならん』。註釈家のうちには『其中』を『メヂナ市内』と解し、直ちに市内を去りて敵軍と行動を共にするの意味とするものあり。

言へ『汝等設ひ死又は殺害を免るるとも、遁走は毫も汝等を益せず。汝等唯だ之によりて暫時の生を楽しみ得るのみ』と云 言へ『アルラーハ若し汝等に災厄を降さんとし。又は汝等に慈悲を垂れんとすれば、誰か能く汝等をアルラーハより庇ひ得るものぞ』と。彼等はアルラーハ以外に一愛護者なく、一佑助者なし云 アルラーハは汝等のうちの妨害者を知り、またその同胞に向つて『吾等に来れ』言へる者を知る。彼等は汝を助くる力を惜みて、殆ど実戦に臨まざりき云 彼等恐怖に

襲はれたる時、汝は彼等が宛も昏暈せる瀕死の人の如く、轉目して汝を凝視するを見たり。而も恐怖一たび去れば、忽ち最上のものを貧り、鋭き舌にて汝等を責罵す¹。此等は決して信者に非ず。アルラーハは彼等の為せることを空無に帰せしめん。そはアルラーハにとりて易々たることなり元彼等は聯盟軍は決して敗退せずと考へたり。而して若し聯盟軍再び来ることあらば、彼等恐らく沙漠のアラビア人の間に居り、其処にて汝等の消息を問はんとすべし²。また設ひ彼等が汝等と共にありとも、殆ど実戦に臨まざるべし言

(1) 『最上のもの』とは戦利品の有利なる分配を指す、之を得んがために鋭き言葉を以て信者に要求すること。(2) 参

戦を厭ひて沙漠の間に避難し、其処にてマホメット敗北の消息を待つ意。

げにアルラーハの使者は、アルラーハと末日とを信じて、不断にアルラーハを念ずる者の最勝の模範なり三 信者等が聯盟軍を見たる時、彼等は言へり『これアルラーハ並に其の使者が吾等に約束せるものなり¹。アルラーハ並に其の使者の言は眞実なり』と。そは唯だ彼等の信仰と帰依とを篤からしめたるのみなりき三 信者のうちにはアルラーハと結べる約束に忠実なる者あり。その或者は既に誓言を完うし、或者は尙ほ待ちつつあり²。彼等は其心を変ふることなし三 希くばアルラー

ハが忠実者の忠実に報いんことを。また其の欲するままに偽信者を罰し、或はその懺悔を允さんことを。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり言

(1)アルラーハの約束とは、此処にては人は楽園に入る前に必ず試練を受くとの約束なり。(2)誓言を完うすとは戦死せること、待つとは聖戦に討死するを待つこと。

アルラーハは不信者をして憤激して其軍を回さしめたり。彼等は如何なる利益をも得ざりしなり。此戦に於てアルラーハは存分に信者を加護したり。アルラーハは強大者・偉力者なり言 而してアルラーハは、彼等を助けたる受経の民¹をその堡壘より逐ひ、その心中に恐怖を投じたり。而して汝等は彼等の一部を殺し、他の一部を俘虜となせり言 而してアルラーハは、彼等の田野、住宅、財産、並に汝等の未踏の地を汝等に繼承せしめたり。アルラーハは全能なり言

(1)猶太人クライザ族を指す。彼等は聯盟軍と相通じたるも、勝敗が明かに逆睹し得るまでは起たんとせず、而して聯盟軍が爲す所なくして退却せるため、干戈を執るに至らざりき。されどマホメットは、彼等の背信を口実として、直ちに軍を彼等に進め、その堅固なる堡壘を包圍すること二十五日にして之を降し、悉く其の男子を殺し、女子と小兒とを俘虜となし、その財産を没收して之を戦利品として処分し去れり。

豫言者よ、汝の諸妻に告げよ『汝等若し現世と其の榮華とを求むるならば、いざ吾は汝等に贈與を行ひ、正式なる離婚によつて汝等を離別せん』汝等若しアルラーハ並に其の使者と来世の住処とを求むるならば、汝等のうちの善事を行ふ者には偉大なる報賞準備せらる』と云 豫言者の諸妻よ、汝等のうち明白なる醜行を敢てする者は、その刑罰を倍加せられん。そはアルラーハにとりて易々たることなり言 而して汝等のうちアルラーハ並に其の使者に従順にして善事を行ふ者は、われ其の報賞を倍加し、また善美なる糧餉を準備せん 豫言者の諸妻よ、汝等は自餘の女子と同じからず。汝等其身を護らんと思はば、心に病ある者をして欲情を抱かしめざらんがために、言語慙にすぐること勿れ。唯だ端正に物言へ 靜肅に家居し、無明時代の虚飾を以て其身を飾る勿れ。禮拜を守り、捐課を納め、アルラーハ並に其の使者に従順なれ。アルラーハは唯だ彼の家人たる汝等の不淨を祓ひ、徹底して汝等を潔めんとするのみ また汝等の家にて讀誦せられたるアルラーハの休徴と智慧とを記臆せよ。アルラーハは妙知者・悉知者なり

(1) 『汝等』といふ此の代名詞は、其他の『汝等』が女性なるに對して男性なり。此故にシア派の學者は之を以てアリーを指せるものとなし、『彼の家人たる汝等』とはアリーと其妻フアティママ(ホメットの女)とを意味すと主張す。

アルラーハに歸命する男女、信仰に入れる男女、従順なる男女、誠実なる男女、堅忍なる男女、謙虚なる男女、喜捨する男女、齋戒する男女、貞潔なる男女、不断にアルラーハを念ずる男女、此等の者のためにアルラーハは偉大なる報賞を準備せり云

アルラーハ並に其の使者が既に一事を決定せる時、任意に事を行はんとするは男女の信者のなすべき事に非ず。アルラーハ並に其の使者に違背する者は、明白なる迷誤を敢てする者なり云

(1) 此の一節は次の如き場合に啓示せられたるものとせらる。即ちマホメットが奴隷より解放して自由民となし、且之を己れの養子とせるザイイドと叔母アニーマ Anna の娘ザイイナブとを結婚せしめんとせる時、ザイイナブ自身並に其の兄弟は此の結婚を欣ばず、容易に之を承認せんとせざりしが、其時本節の啓示マはメットに降りしため、兩人の結婚はアルラーハが定めたることとしてザイイナブも、之に従ふに至れりと。傳承はザイイナブは夙にマホメットに恋慕し居たりとなす。

アルラーハが恩寵を垂れたる者、而して汝自身もまた恩惠を施せる者に向つて、汝が『汝の妻を己れのために留めよ、而してアルラーハを念へ』²と言へる時を念へ。其時汝はアルラーハが將に明示せんとせることを己れの胸中に秘し置けり²。而して汝が最も恐るべきはアルラーハなるに、汝は却つて人間を恐れたり³。さればザイイドが其妻の離婚に関する必要なる手続を了へたる時、吾は彼

女を汝と結婚せしめたり。かくて信者は、離婚の手續を完了せる時は、己れの養子の妻と結婚するを妨げざることとなれり。⁴ アルラーハの命令は必ず行はる言

(1) 本節はマホメットとザイイナブとの結婚に関する啓示なり。(2) マホメットの仲介によつてザイイナブはザイイドに嫁したるも、夫婦の間円満なるを得ず、ザイイドは遂に離婚を決意するに至りしが、其時マホメットは此語を以てザイイドに和解を勧めたるなり。(3) ザイイドをマホメットの妻たらしめんとする神意を知りつつ之を秘したりとの非難。(4) 養子の妻を娶ることが、設ひ神意なりとは言へ、アラビア在来の風習に反することなれば、必ず世人の誹謗的たるべきを恐れて躊躇せることを指す。此処にザイイドの名が明示せられたることに注意すべし。古蘭中にマホメットと同時代の人々にして其名を挙げられたるはザイイド及びアブー・ラハブの兩人あるのみ。(4) 本章第二節に於て養子は実子に非ざることとを定め、本節によつてアラビア在来の風習を廢して、養子の妻と結婚することを許せるものなり。

豫言者はアルラーハが命じたることを行ふを妨げず。これ汝以前の諸豫言者に対するアルラーハの慣例なり。而してアルラーハの命令は絶対なり云 彼等はアルラーハの使命を傳へ、彼を畏れ、アルラーハ以外の何者をも恐れざりき。アルラーハの清算は遺漏なし云 マホメットは汝等うちの誰人の父にも非ず。彼はアルラーハの使者にして諸豫言者の印章なり。アルラーハは萬事を知悉

す

汝等信者よ、不斷にアルラーハを念ぜよ^三 朝な夕な彼を讚へよ^三 彼は汝等を黒闇より光明に入らしめんとして汝等を祝福す。諸天使も亦然り。彼は信者に仁慈なり^三 彼等とアルラーハと会ふ日の挨拶は、唯だ『平安』の一語なるべし。而して彼は高貴なる報賞を彼等のために準備せり^四 豫言者よ、げに吾は汝を証人として、また吉報傳達者並に警告者として^五 また命を奉じて人々をアルラーハに招ぐ者として、また光を與ふる燈火として遣はしたり^六 されば信者に向つては、彼等必ずアルラーハの偉大なる恩寵に浴すべしとの吉報を傳へよ^七 而して不信者並に偽信者に従ふ勿れ。彼等の喧騒を意に介することなく、唯だアルラーハに頼れ。アルラーハは守護者たるに足る^八

汝等信者よ、汝等信者の女子と結婚し、未だ之に触れざる以前に離別する場合は、之に対して汝等が守るべき期限を定めず。但し彼女等に贈與を行ひ、面目を立てて之を去るべし^九

豫言者よ、汝が婚資を與へたる諸妻、また俘虜としてアルラーハが汝に賜へる女子のうち汝の右手が所有する者、また汝の父方の伯叔父並に伯叔母の女、また汝の母方の伯叔父並に伯叔母の女にして汝と共に移住し来れる者、及び女子の信者にして其身を豫言者に許し、豫言者が之と結婚せん

と欲する者は、われ之を以て汝の合法なる妻となす。これ自餘の信者を超えて独り汝にのみ許さるる特權なり。われ汝をして（其の特權の行使に）支障ならしめんがために、信者の妻並に女奴について、既に彼等のためにも律例を設けたり。アルラーハは宥恕者・大慈者なり焉

汝は諸妻のうちの汝の欲する者を退け、欲する者と同衾するを得べし。また以前に離別せる者のうち汝の希ふ者を召致するも罪なし。かくするは彼女等の目を歡ばしめ、其心の憂を解き、諸妻をして汝が彼女等に與ふるものに満足せしむるために最も善し。アルラーハは汝等が胸中に懷くことを知る。アルラーハは能知者・大度者なり焉

汝は向後他の女子を娶るを得ず。また設ひその美貌が汝を歡ばしむるとも、他の女子を以て汝の現在の諸妻に替ふることを許さず。但し汝の女奴を除く。アルラーハは萬事を監規す焉

汝等信者よ、許可を與へらるるに非ずば、時を待たずして食事のために豫言者の家に入る勿れ。招待せられなば即ち入り、食事了らば直ちに辞去せよ。閑談して長坐する勿れ。豫言者はそのために迷惑するも、彼は汝等に向つて『去れ』と言ふを羞づ。されどアルラーハは眞實を言ふを羞ぢず。また豫言者の妻に物を求むる時は、必ず帳後より之を求めよ。かくするは汝等の心並に彼女等の心にとりて最も潔白なり。汝等はアルラーハの使者を迷惑せしむべからず。また汝等は彼の後に

決してその諸妻と結婚すべからず。げにそはアルラーハの目には重大事なり^三。汝等陽に一事を行ふとも、または陰に之を行ふとも、アルラーハは萬事を知る^四。

汝の諸妻は、其父、其子、その兄弟、その兄弟の子、その姉妹の子、同信の女子、並に女婢に対して（面幕を取去りて）語るも罪に非ず。但し彼女等をしてアルラーハを畏れしめよ。アルラーハは萬事を照覽す^五。

げにアルラーハ並に諸天使は豫言者を祝福す。汝等信者よ、汝等もまた彼を祝福し、正しき敬礼を以て彼に敬礼せよ^六。げにアルラーハ並に其の使者に惡声を放つ者は、アルラーハ之を現世並に末世に於て呪咀し、耻づべき懲罰を彼等のために準備す^七。故なくして男女の信者に惡声を放つ者は、誹謗と明白なる罪惡とに對する責を負ふべし^八。

豫言者よ、汝の諸妻及び女兒、並に女子の信者に向つて、彼女等の長衫を纏へ^一と告げよ。かくするは識られ易く^二、且迷惑を避くるに最も善し。アルラーハは宥恕者・大慈者なり^九。

(一) 外出に際して長き外套を纏ふこと。(二) 身分ある女子なることを容易に識別し得ること。

げに偽信者、其心に病ある者、並に市内の煽動者等が、設ひ其手を收めずとも、われ必ず汝を鼓

舞激励して彼等と戦はしむべし。されば彼等が市内に住みて汝の隣人たることは暫時の間なるべし¹。彼等は隨處に呪はれ、見れば即ち捕へられて屠り去られん²。これ既往の者に対するアルラーハの慣例なり。而して汝はアルラーハの慣例に如何なる変更もなきことを知らん³。

(1) 偽信者並に猶太人を対象とす。「市」とはメデナを指す。やがてメデナより放逐せらるべしとの意味。

人は復活の日について汝に問はん。言へ『之を知るは唯だアルラーハあるのみ。されど誰か汝に其日が恐らく近からずと告げ得る者ぞ』と⁴。げにアルラーハは不信者を呪咀し、彼等のために烈火を準備す⁵。彼等は永劫に其中に住まん。彼等には一愛護者なく一佑助者もなからん⁶。其面^{おもて}が火中に歪む日、彼等初めて言はん『吁、吾等もアルラーハに従ひ、其の使者に従ひたりせば！』と⁷。彼等また言はん『主よ、げに吾等は吾等の首領と大人とに従へり。然るに彼等は吾等を導きて道を迷はしめたり⁸。主よ、彼等の刑罰を倍加し、偉大なる呪咀を以て彼等を呪へ』と⁹。汝等信者よ、汝等のかのモーゼを誹謗せる者の如くなる勿れ。アルラーハは彼等の言に対してモーゼの潔白を示したり。彼はアルラーハに重んぜられたる者なり¹⁰。汝等信者よ、アルラーハを畏れ、正直に物言へ¹¹。彼は汝等のために汝等の所行を矯正し、汝等の罪惡を宥恕せん。アルラー

ハ並に其の使者に従ふ者は、必ず偉大なる幸福を獲んせ

吾は諸天と大地と群山とに帰信を求めたり。然るに彼等は之を荷ふことを辞し、且之を恐れたり。されど人間は之を荷へり。されど人間は不義にして且無智なりき。希くばアルラーハが男女の偽信者並に男女の多神教従を膺懲せんことを。またアルラーハが男女の信者の懺悔を允さんことを。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なりき

第三十四 サバー一章

メッカ啓示

第一五節以下にサバーに関して述ぶるに因みてサバー章 *Saba* と名づけらる。サバーはヤマンに住める古代アラビアの一部族にして、其都をサバー又はマールリア *Marrîb* と呼び、榮華を以て知られしが、西紀第二世初頭のころ、マールリア貯水池の決潰により、一朝にして廢墟に歸したりと傳へらる。本章は回教徒の註釈家は多くメッカ初期の啓示とするも、ネルデケ、ロッドウエル等は之をメッカ末期のものとなす。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アルラーハを讃へよ。天地間の一切のものは彼に属し、末世の讚美も彼に属す。彼は聰明者・悉知者なり。彼は地に入るもの並に地より出づるものを知り、天より降るもの並に天に登るものを知る。彼は大慈者・宥恕者なり。

信ぜざる者曰く『復活の日は決して吾等に来らざるべし』と。言へ『断じて然らず、吾は不可見のものを知る吾主によつて誓ふ、其日必ず汝等に来らん。げに一塵の重さも、また塵よりも小又は大なるものも、凡そ天地間の一切のもの、一として彼より免るるはなし。そは悉く載せて明晰なる

經典にあり^三。これ彼が信じて善事を行ふ者に報いんがためなり。彼等のためには宥恕と善美なる糧餉とあり^四。されどわが休徴を無力ならしめんと努むる者は痛烈なる刑罰を受けん^五。知識を賜はれる者は、汝の主より汝に降されたるものが眞理にして、偉力者・可頌者の道に導くものなることを知る^六。

信ぜざる者曰く『汝等が微塵に粉碎せられたる後、汝等必ずまた新しき生類となりて甦るべしと説く者あり、此者を汝等に指示すべきか。げに彼はアルラー^ハについて虚構の言を弄する者か、然らずば幽鬼に憑かれたる者なり』と。然らず、末世を信ぜざる者は懲罰と偉大なる迷誤との中にある者なり^ハ。彼等天地の間に彼等の前後にあるものを見ざるか。吾若し欲しなば大地をして彼等を吞下せしめ、天の一角を彼等の頭上に墜落せしめ得べし。げに此中には一切の懺悔する僕等への休徴あり^九。

われわが恩寵をダビデに垂れて曰く『群山よ、彼と共に讚美せよ、飛鳥も然かせよ』と。また吾は彼のために鐵を柔軟ならしめて曰く『長大なる鎧甲を作り、その鎧環を整へよ。而して善事を行へ。げに吾は汝等のなすことを照覽す』と。吾はまた風をソロモンに従はしめ、一朝にして一ヶ月の路程、一夕にして一ヶ月の路程を旅せしめたり。吾はまた彼のために溶銅の泉を湧出せし

めたり¹。また幽鬼の或者をして主の命令を奉じて彼の面前に勞作せしめ、わが命令に背ける幽鬼には烈火の刑を味はしめたり³。かくて彼等はソロモンのために其の欲する宮殿、形像、池の如き巨碗、不動の鍋を製作せり²。吾曰く『ダビデの家人よ、感謝を献げて勤勞せよ。わが僕等のうちには恩を知る者殆どなし』と³。而してわれ彼の死を定めたる時、其死を示したるは唯だ一爬虫が彼の杖を噛めることなり³。ソロモンの地に仆るるに及んで、幽鬼等は若し彼等が夙く此の不可見のことを知りたりせば、長く羞づべき苦難に服する要なかりしことを曉りたり³。

(1) 鎔銅の泉はヤマンに湧き、毎月三度湧出せりと傳へらる。(2) 巨碗の大は千人の者同時に之にて食ふべく、鍋は巨大にして動かすことを得ず、梯によりて之に登れりと傳へらる。(3) 回教神学者は、エルサレム神殿はソロモンが幽鬼を驅使して建立せるものとなす。神は神殿の竣工以前に死をソロモンに命じければ、ソロモンは若し己れ死なば幽鬼が仕事を怠るべきを憂へ、彼等に向つて其死を秘せんことを神に祈り、その祈願は聽許せられたり。かくて彼は立ちて杖に倚りたるまま絶命し、一年を経るも全く生前と異ならざる姿勢を保ちしが、偶々一爬虫ありて彼の杖を噛み、ために杖は折れてソロモンし体軀忽ち地上に仆れ、茲に初めて彼の死去せることが知られたり。

げにサバーの民は其の住める地に一休徴を有したり³。即ち左右の(比類なく豊満なる)二果樹園これなり。曰く『汝等の主が賜へる糧餉を食ひ、感謝を献げよ。國土は善美なり、主は寛仁な

り』と云 然るに彼等吾に背きたるが故に、われはイラムの洪水を彼等に放ち、彼等の善美なる両果樹園を變へて苦き果実を結ぶ樗柳と少許の皂角樹との両園となせり云 此れ彼等不信なりしが故に、われ之に報いたるなり。而して吾は忘恩者以外の者に報復せることあるか云

吾はサバーとわが祝福せる諸都府との間に著明なる諸市を置き、諸市の間に行程を定め、『此処を通りて晝夜安全に旅行せよ』と告げたり云 然るに彼等曰く『主よ、吾等の旅程を更に遠くせよ』と。かくて彼等自ら其身を誤りしかば、吾は彼等を以て後人の話柄となせり。吾は徹底して彼等を粉碎し去れり。げに此中には堅忍者並に知恩者への種々なる休徴あり云 イブリースは彼等に関する己れの推測の当れるを見たり。そは信者の一部を除けば、彼等悉くイブリースに従へるが故なり云 されどイブリースは彼等に対して如何なる權威をも有せざりしなり。吾は唯だ末世を信する者と、之を疑ふ者とを識別せんとせるにすぎず。汝の主は萬事を監視す云

(一) 祝福せる諸都府とはシリアの諸市を指す。サバーの繁榮は、その形勝たる地理的位置のために、独り自國の産物のみならず、東阿弗利加並に印度の貨物を集め、駝背によりて之をシリア及び埃及に送り、長く此の有利なる商売を独占せるによる。此の隊商路上に、南はハドラマウトより、北はシリアのアイラに至るまで、七十を算する諸市ありき。(二) 行程を遠くせよといふは、諸都市間の距離を遠からしめ、宿泊日数を減じて旅費を少くせんとする貧欲より出でたる希望と解すべ

言へ『アルラーハ以外に汝等が神々とする者を喚べ』と。彼等は天地の間に一塵の重さをも左右する能はず、毫も天地両者に參與せず、またアルラーハは彼等の間に一補佐を有せず。而して彼が許す者の外は、何者の勸解も彼に対して效なきなり。彼等の心より恐怖除去せらるるに及んで、彼等初めて言はん『汝の主の言へることは何ぞ』と。彼等は言はん『真理なり。彼は至高者・至大者なり』と。言へ『天地の間より汝等に糧餉を與ふるは誰ぞ』と。言へ『アルラーハなり。げに吾等と汝等との孰れかが、或は正道の上にある、或は明白なる迷誤の中にあるなり』と言。言へ『汝等は吾等の犯せる罪過について問はれず、吾等もまた汝等の行へることについて問はれず』と。言へ『主は一齊に吾等を召集し、然る後に真理によりて吾等を審判すべし。彼は裁判者・能知者なり』と。言へ『汝等が彼に配する神々を吾等に示せ。否な、汝等は之を能くせず。彼はアルラーハなり、偉力者・聰明者なり』と。

吾は唯だ吉報傳達者並に警告者として汝を萬人に遣はしたるのみ。されど人々多くは之を知らず。彼等曰く『汝の言眞実ならば、此の約束の実現せらるるは何の日ぞ』と言。言へ『そは汝等

が一刻も之を遅速し得ざる日の約束なり』と言

信ぜざる者曰く『吾等は古蘭を信せず、またその以前にありしものをも信せず』と。嗚呼、汝若し不義者等が其主の前に連行せられ、互に他を責罵するを見得たりせば！其時現世に於て無力とせられし者が、驕慢なりし者に向つて言はん『若し汝等なかりせば、吾等必ず信者となりしものを』と三 而して曾て驕慢なりし者は無力とせられし者に向つて言はん『汝等は嚮導既に汝等に至れる後、吾等が汝等を之に背かしめたりと言ふか。然らず、汝等自ら惡を作せるなり』と三 無力とせられし者は驕慢なりし者に向つて言はん『然らず、汝等は日夜策謀して、吾等に向つてアルラ一ハを信せず、神々を彼に配することを命じたり』と。彼等は刑罰を目睹して初めて悔恨せん。吾は不信者の首に扼くひまを繫かげん。彼等は唯だ其の為せることに対して報いらるるのみに非ざるか三 われ一警告者を一都府に遣はす毎に、都内の富裕なる者必ず曰く『吾等は汝等の齋せるものを信せず』と言 彼等曰く『吾等には多くの財宝と子女とあり、且吾等は懲罰に遭はざるべし』と言 言へ『げに吾主は己れの欲する者には豊かに糧餉を與へ、或は乏しく之を與ふ。されど人々多くは之を知らず三 汝等を吾に親近せしむるものは、汝等の財宝又は子女に非ず、唯だ信じて善事を行ふ者のみ能く吾に親近す。彼等は其の為せることに対する報賞を倍加せられ、安らかに高樓の中に

住まん言 而してわが休徴を無力ならしめんと努むる者は、必ず刑罰に服せしめられん』と言 言
へ『げに吾主はその僕等のうち己れの欲する者には豊かに與へ、または乏しく與ふ。汝等が喜捨す
るものに対しては、彼必ず之に優るものを以て報いん。彼は最勝の給與者なり』と言

かれ一齊に彼等を召集する日、彼は諸天使に向つて問はん 『此等は汝等を拜したる者なるか』
と 彼等言はん 『光榮汝にあれ、吾等の愛護者は汝にして彼等に非ず。否な、彼等は幽鬼を拜
し、彼等の多くは之を信じたり』と 此日汝等は互に他を益し又は損することを得ず。而して吾
は惡事を行へる者に言はん 『曾て汝等が虚偽なりと言へる火獄の刑罰を味へ』と

わが明瞭なる休徴が彼等に向つて讀誦せらるる時、彼等曰く『こは一個の人間にすぎず。而も彼
は汝等をして汝等の祖先が拜し来れるものに背かしめんとする者なり』と。また曰く『こは虚構の
謊言のみ』と。而して信ぜざる者は、眞理が彼等に至る時、『こは明白なる魔術のみ』と言はん
吾は未だ曾て彼等が学ぶべき如何なる經典をも彼等に降さず、また汝以前に如何なる警告者をも彼
等に遣はさざりき 彼等以前の者も之を虚偽なりとせしが、此等の者はわが賜へるものが彼等へ
の十分の一にも及ばざるに、またわが使者を虚言者と呼ぶ。さらばわが譴責の如何に嚴厲なりしこ

とぞ

(1) 『此等の者』とはメヅカ市民。古来メヅカよりも遙に有力にして富裕なりし諸都府が然りし如く、その富強が彼等の十分の一にも及ばざるメヅカも、また豫言者を拒むとの意味。

言へ『吾は唯だ一事を汝等に勧む。汝等或は兩人、¹或は單身、アルラーハの前に立て。而して汝等の伴侶は決して幽鬼に憑かれたる者に非ざることを省慮せよ。彼は唯だ嚴刑に対して汝等を警告する者にすぎず』と哭

(1) 兩人又は單身といふは、多数の場合は他の意見によつて判断を誤ることあるが故なり。(2) マホメット。

言へ『吾は其為に汝等に報酬を求めず。そは唯だ汝等のためなり。わが報酬は唯だアルラーハの許にあり。彼は萬事を照覽す』と哭 言へ『げに吾主は眞理を擲てり。¹彼は不可見のものを熟知す』と哭

(1) 虚偽に対して眞理を投じたりとの意味。

言へ『眞理未れり。虚偽は消えて再び回らざるべし』と哭 言へ『設ひわれ迷ふとも、そは己れに対して迷ふなり。われ若し導かるとすれば、そは悉く吾主の默示による。げに彼は能聞者・至

近者なり』と云

若し汝が、彼等恐慌するも遁るる途なく、¹近き場処より捕はるる光景を見得たりせば！ 其時彼等言はん『吾等は信ず』と。されど彼等如何にして²遠き場処より信仰に入るを得んや³ 曾て彼等は之を信ぜず、唯だ遠方より不可見のものについて揣摩せるのみに非ざりしか⁴ 而して既往の彼等の同類に対してなされたる如く、彼等と彼等が望むものとの間に隔壁築かるべし。げに彼等は不安なる疑惑の中にありしなり⁵

(1) 『近き場処』とは墓を意味す。地上より唯一歩の近きにあるが故に是く言はる。(2) 『遠き場処』とは現世より死によつて移されたる他の世界。(3) 『遠方』とは現世を指す。

第三十五 天使 章

メッカ啓示

第一節にある語によつて天使章 *Al-Mala'ikah* 又は創造章 *Al-Fa'atir* と名づけらる。啓示年代概ね前章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アルラーハを讃へよ、そは天地の創造者にして、二翼・三翼・四翼の天使を使者となす。而して彼は其の創れる者に己れの欲するものを加ふ¹げにアルラーハは全能なり。

(1) 『創れる者』とは天使を指し、『加ふ』とは翼の数を加ふるなり。例へばガブリエルは六百翼を有すとせらるるが如し。

アルラーハが慈悲を垂れて人間に授與するものは、何者も之を抑止するを得ず、彼が抑止するものは、彼ならでは何者も之を解放するを得ず。彼は偉力者・聰明者なり。

入々よ、汝等に対するアルラーハの恩寵を念へ。アルラーハ以外に天地の間より彼等に糧餉を賜

よ創造者あるか。彼の外に神なし。然るを汝等いづくに背き去らしめらるるか^三。而して設ひ彼等が汝を虚言者と呼ぶとも、げに汝以前にも諸使者は虚言者と呼ばれたり。而して萬事はアルラーハに帰る^四。

人々よ、げにアルラーハの約束は眞実なり。されば現世の生活に欺かるる勿れ。またアルラーハについて欺瞞者のために欺かるる勿れ^五。げにサタンは汝等の敵なり。されば敵として之を遇せよ。彼は唯だ烈火の党侶たらしむるために己れの味方を招ぐにすぎず^六。信ぜざる者は嚴罰に遭ひ、信じて善事を行ふ者は宥恕と重賞とを受けん^七。己れの悪事が美しく飾られ、そのために之を善事の如く思ふ者は——？。げにアルラーハは己れの欲する者を迷はしめ、欲する者を導く。されば彼等のために嘆きて汝の魂を傷ふ勿れ。げにアルラーハは彼等の為すことを知る^八。

アルラーハは風を送り、風は雲を呼ぶ。而して吾は之を死地に驅り、死せる大地を甦らしむ。復活もまた是くの如し^九。

榮爵を希ふ者は、一切の榮爵がアルラーハに属することを知れ。善言は登りて彼に達し、善事は彼之を提高す。されど悪事を策謀する者には痛刑あり、その謀策は空無は帰せん^{一〇}。

アルラーハは初め塵土より汝等を創り、次で一涓滴より造り、次で汝等を一對となせり。如何な

る女子も彼に知られずして懐胎し又は分娩することなし。而して壽命を長くせられて老年に達すること、また之を短かくせらるること、一として經典に載せられざるはなし。げにそはアルラーハにとりて易々たることなりニ

二つの海は一律ならず、一は甘く新鮮にして飲みて快く、他は鹹からくして苦にがし。されど汝等いづれの海よりも新鮮なる肉をとりて食ひ、まだ汝等が身に帯びる裝飾を採る。而して汝は汝等が彼の恩恵を求めて船の海上の走るを見る。汝等恐らく感謝せんニ 彼は夜を日に納め、晝を夜に納む 彼は日月を制して各一定の時期に之を運行せしむ。これ汝等の主アルラーハなり。大権は彼に属す。されど汝等が彼以外に呼ぶ者は、一毫を左右する力もなしニ 汝等設ひ彼等に祈るも、彼等は汝等の祈願を聽かず、設ひ聽くも之に應ずることを得ず。而して復活の日に於て、彼等は汝等が彼等をアルラーハに配せることを否認すべし。此事を汝に告ぐるは唯だかの悉知者あるのみニ

人々よ、汝等はアルラーハに求む。されどアルラーハは求むるところなし。彼は唯だ讚美せらるべき者なりニ 彼若し欲しなば、直ちに汝等を掃蕩し去りて新しき者を造出せんニ そはアルラーハにとりて易々たることなりニ

荷を負へる者は他の荷を負ふを得ず。設ひ重荷を負へる者が、其荷のために他を喚ぶとも、近親

さへも之を分担するを許されざるべし。汝は唯だ密かに其主を畏れ、堅く礼拝を守る者に警告し得るにすぎず。身を潔むるは己れのために潔むるなり。而して行先はアルラーハなり云

失明者と具眼者とは一律に非ず云 黒闇と光明と云 蔭影と熱風と云 生者と死者とは一律に非ず。アルラーハは能く己れの欲する者に聽かしむるも、汝は墓中の人に聽かしむるを得ず云 汝は唯だ一個の警告者にすぎず云 げに吾は吉報傳達者並に警告者として、真理のために汝を遣はしたり。一切の民、一として警告者が其間を往かざりしはなし云 而して彼等設ひ汝を虚言者と呼ぶとも、彼等以前の者もまた明白なる証據と書冊と光明と經典とを携へて彼等に至れる諸使者を、等しく虚言者と呼べり云 されば吾は其等の不信者を膺懲せり。而して吾が譴責の如何に嚴厲なりしことぞ云

汝は見ざるか、アルラーハが水を天上より降し、之によつて多彩異色の果実を生ずることを、また山嶽に或は白、或は紅、或は眞黒、多彩異色の條痕あることを云 而して人間・禽獸・家畜もまた多彩異色なり。アルラーハの僕等のうち、唯だ知識ある者のみ彼を畏る。げにアルラーハは偉力者・宥恕者なり云

げにアルラーハの經典を讀誦し、礼拝を守り、わが賜へるものにて陰に陽に喜捨を行ふ者は、不

壞の所得を希ふ者なり云 彼は存分に彼等に報い、その恩寵を加増せん。げに彼は宥恕者・善賞者なり云

わが汝に默示する經典は、以前に默示せられたるものを実証する眞理なり。げにアルラーハは己れの僕等を熟知し且照覽す云 吾は己れの選べる僕等をして經典を相続せしむ。而して彼等のうちには其魂を害へる者あり、中道を守る者あり、また其主の命を奉じて率先して善事を行ふ者あり。これ偉大なる恩寵なり云 彼等はエデンの樂園に入り、黄金と眞珠との腕輪に飾られ、その衣裳は錦繡なるべし云 彼等は言はん『吾等の憂を拂へるアルラーハを讃へよ。げに吾等の主は宥恕者・善賞者なり云 彼はその恩寵を垂れて、吾等を長久の邸宅に安住せしめ、労苦を受けず疲労を知らざらしむ』と云 されど信ぜざる者のためには地獄の火あり。彼等は死ぬることを許されず、また刑罰を軽くせられざるべし。吾は是くの如くにして一切の不信者に報ゆ云 彼等火中にありて叫ばん『主よ、吾等を釋せ。然らば吾等は曾て為せることを為さず、必ず善事を行はん』と。(而して是く言はれん) 『訓誡を受けんとする者は、其間に訓誡を受くるに足る壽命を、われ汝等各人に與へざりしか。吾は其の警告者を汝等に遣はしたり。されば刑罰を味へ。不義者には如何なる佑助者もなし』と云 げにアルラーハは天地間の不可見のものを知る。げに彼は人が胸中に懐くものを

知る言 彼は汝等を地上の代理者たらしめたり。されば信ぜざる者の不信は唯だ己れを害ふのみ。彼等の不信は唯だ不信者のために其主の嫌惡を増すにすぎず、また彼等の不信は不信者のために其の滅亡を増すにすぎざるなり言

言へ『汝等は汝等がアルラーハ以外に拜する者について思へることあるか。彼等が地上に創造せるものあらば之を吾に示せ。彼等は天上に於て何事にか參與するか。また吾は經典を彼等に與へ、明白なる休徴の上に彼等を立脚せしめたるか』と。然らず、不義者は唯だ欺くために互に約束するのみ

げにアルラーハは天地を支へて之を倒潰せざらしむ。天地一たび倒潰しなば、之を支ふる者は彼に非ずして誰ぞ。げに彼は寛容者・宥恕者なり

彼等は嚴肅に神かけて誓ひ、警告者若し彼等に来らば、如何なる民にも勝りて正しく導かるべしと言へり。然るに警告者の彼等に来るに及んで、彼等は唯だ之に対する嫌惡を増長し、地上に於て傲慢を事とし、且惡事を策謀せり。されど惡事の策謀は、唯だ之を行ふ者を困惑せしむるにすぎず。彼等は往古の民の慣例以外、また何事を期待し得るか。汝はアルラーハの慣例に如何なる変更をも見ず、彼等もまたアルラーハの慣例に如何なる変更をも見ざるべし。彼等地上を遊歴して、

彼等より有力なりし者の末路が如何なるものなるかを見ざりしか。何者も天地の間にアルラーハを無力ならしむるを得ず。げに彼は能知者・強大者なり四。アルラーハ若し人を其の為せることのために膺懲せんと欲したりせば、彼は一個の獸類をも地上に遺さざりしなるべし。彼は唯だ定められたる時まで彼等に猶豫を與ふるのみ。彼等に定められたる時到来ば、げにアルラーハは其の僕等の照覽者たらん五。

第三十六 ヤー・スーン章

メッカ啓示

冒頭の二文字に因みてヤー・スーン章 Ya Sin と名づけらる。回教徒の最も重んずる若干章の一にして、逆境、疾病、齋戒、臨終等に際して好んで復誦せられ、マホメット自身が之を『古蘭の心臓』と言へりとの傳承あり。メッカ中期の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ヤー・スーン一 智慧に満ちたる古蘭によつて誓ふニ げに汝は使者の一人にしてニ 直き道に立てり^四 此は偉力者・大慈者の啓示なり^五 是は汝をして其の祖先が未だ曾て警告を與へられず、従つて思慮なき民を警告せしめんがためなり^六

げにいま彼等の多くに對して宣告既に下れり。これ彼等が信ぜざる故なり^七 吾は彼等の首に首伽を籍めん。首伽は彼等の顎に達するが故に、彼等を頭を擡げざるを得ず^八 吾は彼等の面前に一隔壁、彼等の背後に一隔壁を築かん、然る後にわれ彼等を覆ひ包むが故に、彼等を見ることを得ず^九 汝が警告を與ふるも、又は之を與へざるも、彼等に於て畢竟一なり。是は彼等信ぜざるが故

なり。げに汝は唯だ訓誡に従ふ者、及び密かに大悲者を畏るる者を警告し得るのみ。而して此等の者には宥恕と重賞との吉報を傳へよ。げに吾は死者を甦らしむ。吾は彼等が豫め送るもの並に後に遺すものを記録す。吾は一切を明晰なる經典の中に登録す。

使者等がかの都府に来れる時の市民のことを、一例として彼等に説け。初めわれ二人の使者を彼等に遣はしたり。されど彼等は兩人を虚言者と呼びしかば、われ更に第三の者を遣はして彼等を助けたり。彼等曰く『げに吾等は汝等に遣はされたる者なり』。彼等曰く『汝等は吾等と等しく人間にすぎず、また大悲者は何ものをも降さず。汝等は虚言者にすぎず』。彼等曰く『主は吾等が汝等に遣はされたる者なるを知る。吾等の務めは唯だ明白に使命を傳達することのみ』。彼等曰く『吾等は汝等を不吉となす。汝等若し止めずば、吾等石にて汝等を撃たん、吾等は痛烈なる懲罰を汝等に加へん』と云。彼等曰く『汝等の不吉は汝等自ら招ぐところなり。汝等訓誡に従はんとせざるか。否な、汝等は無法の民なり』と云。

(1) 『使者等』とはイエスの使徒、『都府』とはアンチオクのこととせらる。(2) 『二人』とはヨハネとポーロ、『第三の者』とはシモン・ペテロのこととせらる。共に固より確証あるに非ず。此の一段の背景となれる傳承は下の如し。イエ

ス、傳道のためにヨハネとポーロとをアンチオクに遣はせしが、アンチオク郊外にて、兩人は先づ其処に羊を牧しつつありしハビープ Habib an-Najjar と呼べる者に教を宣べたり。而してハビープが眞実なる教たる証拠を求めしかば、兩人は彼等が病者を癒やし、盲人の目を開き、癩者を淨め得ることを述べ、且病めるハビープの童兒を立どころに癒やしたり。ハビープ即ち彼等に帰依し、彼の手引にて兩人はアンチオク市内に傳道し、多くの信者を得たりしが、此事國王の耳に入るや、教門を棄す者として、捕へられて獄に投ぜられたり。イエス之を聞き、更にシモン・ペテロをアンチオクに遣はしたり。彼は多神教徒を装ひて先づ市民の心を收攬し、遂に國王に親近して其の寵愛を受くるに至りしが、機を見て國王に説き、獄中の二人を國王の前に召喚し、シモン・ペテロ自ら之を審判することとなれり。而して裁判の結果、彼等がアルラーハの使者なることを認め、率先して自ら信者と名乗り、走りて偶像を破壊せしかば、市民多く彼等を信仰するに至れり。而して彼等を信ぜざりし者は、天使ガブリエルのために殲滅せられたりと。(3)直訳『汝等は訓誡せられてもか?』。

時に都府の辺遇より走り来れる一人あり、曰く『吾民よ、この使者等に従へ』 彼等は如何なる報酬をも汝等に求めず、彼等は正しき道を踏む者なり』 われ何を苦しんで彼を拜せざらんや、彼は吾を創り、吾はまた彼に歸るなり』 われ彼を舍きて他の神々を拜すべきか。されど若し大悲者が災厄を吾に降さんとすれば、彼等の勸解は毫も吾を益することなく、彼等は吾を救ふを得ず』 然る時は吾は明白なる迷誤に陥るものなり』 げに吾が信ずるは汝等の主なり。されば汝等吾に聽

け』と云 声ありて曰く『樂園に入れ』と。彼曰く『嗚呼、若し吾民が、吾主は吾を宥恕し、また吾を榮譽ある者のうちに加へたるを知りたりせば！』と云云 而して彼死して後、吾は其民に一兵をも天より降さず、また諸天使をも遣はさざりき云 そは唯だ轟然たる一声のみ。而も見よ、彼等忽ち消滅せり云

(1) ハビープを指す。(2) 此の一語によつてハビープが不信者のために殺れきたることを知るべし。彼の墓は今尙ほ回教徒の参詣多しと言はる。

嗚呼、慘ましきがなわが僕等¹！ 使者が彼等に來る毎に、一人として彼等之を嘲笑せざるはなし言 吾は彼等以前の幾多の世代を亡ぼせり。彼等は之を見ざるか。げに彼等は彼等に歸らず²。彼等は挙りて吾前に召致せらるるなり云

(1) この『僕等』は人類一般を指す。(2) 此の一句は三様に解釈せらる。第一は使者は再び彼等に歸り來らずとするもの。第二は彼等が諸使者に歸向せざりきとするもの。第三は彼等はアルラーハ以外の神々に歸らずとするもの。予は第三説を採る。

彼等への一休徴は死せる大地なり。吾は之を甦らしめ、穀類を之より生ぜしめ、彼等は之を食餌

となす言 　また吾は地上に棗椰子園並に葡萄園を造り、井泉を其間に湧かしめ言 　彼等をしてその
果实並に彼等の手が之にて作れるものを食はしむ。彼等尙ほ感謝せざるか言 　彼を讃へよ、彼は大
地に生ずる萬物の一對を創造し、次で人間其者を創造し、また彼等の知らざるものを創造せり言
彼等への一休徴は夜なり。われ白晝を之より剥ぎ去れば、見よ、彼等は黒闇の中にある言 　而し
て太陽は己れの休息の場処に急ぐ。これ偉力者・聰明者の定むるところなり言 　吾はまた月のため
に各宿宮を設け、再び回りて乾ける棗蒂の如くならしむ¹言 　日は月に追及する能はず、夜は晝と先
を争ふべからず。彼等皆な各自の天空に浮ぶ言

(一)宿宮は所謂二十八宿宮にして、月が毎夜宿る処なり。乾ける棗蒂は細く彎曲して其形宛も新月の如し。

われ彼等の子孫を満載の舟にて運べることも、また彼等への一休徴なり言 　吾は彼等が乗るため
に舟の如きものを造れり言 　吾若し欲したりせば、直ちに彼等を溺れしめ得べく、而して彼等には
如何なる佑助者もなかりしなり言 　彼等はわが慈悲によつて暫時の生を樂しむ以外、決して救はる
ることなきなり言 　而も彼等に向つて『汝等の前にあるもの並に後にあるものを恐れよ、汝等或は
慈悲に浴するを得ん』と告ぐるも、(彼等毫も意に介せず)言 　而して主の休徴が彼等に來る毎に

一として彼等が之に背き去らざるはなし。また彼等に向つて『アルラーハが汝等に賜へるものにて喜捨を行へ』と言へば、信ぜざる者は信ずる者に向つて曰く『アルラーハ若し欲しなば自ら之を養はん、何ぞ吾等が之を養ふを要せんや。汝等は明白なる迷誤の中にあり』と。〆

(1) 人類一般を指すともせられ、またノアの子孫を指すともせらる。(2) 前後に在るものとは現世並に來世の懲罰を指す。

汝等曰く『汝等の言眞実ならば、この約束の実現せらるるは何の日ぞ』と。〆 彼等はその互に爭論しつつある間に突如彼等を襲ふべき轟然たる一声を待つ者なり。其時彼等は遺言状を作るを得ず、また其の家人に帰ることも得ざらん。而して喇叭一たび鳴れば、彼等墓中より出でて其主の前に駆り立てられん。其時彼等は言はん『吾等を臥ふし處せより喚び起したるは誰ぞ。こは大悲者が約束せることなるべし。諸使者の言は眞実なりき』と。〆 時に唯だ轟然たる一声あり、見よ、彼等忽ち吾前に召致せられん。此日何人も不当に遇せらるることなし。汝等は唯だその為せることに対して報いらるのみ。〆

げに此日樂園の党侶は欣然として事に従はん。彼等と其妻とは、樹蔭の下に美しき坐牀に倚ら

ん矣 彼等其処にて鮮果並にその望むところのものを獲ん焉 『平安!』これ大悲者なる主よりの言なり矣

『汝等罪人よ、今日汝等は退散せよ矣 アダムの子等よ、汝等はサタンを拜せずと吾に約束せざりしか。げに彼は汝等の公敵なり焉 汝等は唯だ吾にのみ事ふべく、これこそ正しき道なりしなれど 然るにサタンは汝等の大群を迷はし去れり。何事ぞ、汝等は曉らざりしか否 此は汝等に約束せられたる地獄なり矣 今日汝等は此中にて燔かれん。そは汝等が信ぜざりし故なり』と云

其日吾は彼等の口を封ぜん。されど彼等の手は吾に語り、彼等の足はその為せることを証言せん矣 吾若し欲しなば、彼等の目をも抉らん。然らば彼等設ひ先を争ひて走らんとするも、如何にして見るを得べきぞ矣 また吾若し欲しなば、彼等を其場に固着せしめん。然らば彼等進むことも歸ることも得ざらん矣 而して其の壽命を永くする者は、われ其の体軀をか偃ましむ。汝等尙ほ曉らざるか矣

吾は彼に詩を教へず、¹そは彼に適はしからず。こは一個の訓誡にして平明なる古蘭に外ならず矣 そは生命を求むる者に警告を興へんがため、また不信者に対する吾が宣告が実現せられんがためな

(1) 『彼』とはマホメット。マホメットは屢々メッカ市民より詩人と呼ばれ、古蘭は詩に外ならずとせられたり。

彼等は見ざるか、吾は彼等のために吾手にて作れるものより家畜を創り、彼等をその所有者たらしめしめ、之を彼等に従はしめたることを。その或者は彼等之に騎り、或者は之を食ふ。彼等は之によりて種々なる利益と飲料とを獲るなり。彼等之を感謝せざるか。然るに彼等はアルラーハ以外に神々を立て、之に佑助を求めんとす。されど彼等は彼等を佑助すること能はず、彼等こそ彼等を護る軍勢なれ。されば彼等の言に汝の心を悩ます勿れ。吾は彼等が陰に陽に為すことを知悉す。

人は見ざるか、われ一涓滴より彼を創れることを。而も見よ、彼は公然たる抗爭者なり。彼は吾に似たる者を虚構し、己れが如何にして創られたるかを忘る。彼曰く『誰か能く朽ちたる骨に生命を與ふる者ぞ』と。言へ『最初に之を創れる者が、復た之に生命を與ふべし。彼は一切所造のものを知る。彼は汝等のために緑樹より火を創り、見よ、汝等之によつて火を燃えしむ』と。天地を創造したる者が、再び之に類するものを創造し得ざることをあるか。然り、彼は之を能くす。彼

は一切を知る創造者なり[△] かれ一事を欲すれば唯だ『有れ』と命ずるのみ、
而して其物即ち有
り[△] 彼を讃へよ、萬物に対する權威は彼にあり。汝等は彼に歸らしめらる[△]

(1) 木片を摩擦して火を発せしむることを指す。

第三十七 整列者章

メヅカ啓示

第一節に『整列者により』とあるに因みて整列者章 *Ar-Rafat* と名づけらる。メヅカ中期の初頭即ち開教五年頃の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

整列者¹によりて一 驅逐者²によりて二 並に訓誡の讀誦者³によりて誓ふ三 汝等の主は独一な

り^四 そは天地並に天地間の一切のものの主、旭日登天の國⁴の主なり五

(1) 位階に従つて整列する天使。(2) サタンを驅逐する天使。(3) 經典の諸節を豫言者に誦出する天使。(4) 原語 *Rabbu' l-Mas'arig*。マシヤールイクは東方又は日出処を意味する名詞 *Mashrig* の複数なり。これ太陽の登る地点は日々
変り、回教徒に従へば三百六十個処ありとせらるるが故なり。

吾は星辰を以て下天¹を飾り六 背逆のサタンに対して之を護る七 これサタン等をして高位の諸
天使の論議を聽かざらしめんがためなり。彼等は八方より排斥せられ八 驅逐せられ、且永劫の懲

罰を受けん^九 而して若し偷み聽く者あれば、耀く火箭之を追ふ^{二〇}

(一) 七層の諸天のうち最も大地に近き下層の天。(二) 流星を指す。流星は天上の論議を偷み聽かんとするサタンに対して、諸天使が放つ火箭なりとせらる。

彼等に問へ、創られたるものうち、彼等とわが創れる天使と孰れが強きと。吾は乾ける泥土にて彼等を創れるなり^二 然らず、汝は驚異し、彼等は嘲笑す^三 彼等は訓誡を受くるも意に介せず^三 休徴を見れば之を嘲笑す^四 彼等曰く『げにこは明白なる魔術のみ^五 吾等死して塵と骨とに歸したる後、再び甦るべしと言ふか^六 げに吾等の往古の祖先もまた然りとするか』と^七 言へ『然り、其時汝等皆な卑賤なる者とせらるべし^八 そは單なる一^一喝なり。而も見よ、彼等忽ち瞠目して^九 言はん^{一〇} 吁、悲しいかな、こは審判の日なり』と^{一一} そは汝等が虚偽なりとする判決の日なり』と^{一二}

(一) マホメッドがアルラーハの偉力に驚異する時、メッカ市民即ち不信者は之を嘲笑するを言ふ。(三) ガブリエルの一声を指す。

『不義を行へる者並に其の党侶、及び彼等がアルラーハ以外に拜せる神々を召集して^三 之を地

獄の道に導け^三 而して彼等を停めよ、彼等は糾問せらるべし¹』^三 『汝等互に相助けざるは何故ぞ』² 否な、此日彼等は唯だ服従する外に途なきなり^三 彼等の或者は互に相問はんとして他に近づかん^三 而して彼等は言はん『汝等は常に右方より吾等に来りたり』³ と言 彼彼等は答へん『然らず、もと汝等は信者に非ず^三 吾等は汝等に対して如何なる權威をも有せるに非ず。唯だ汝等が背逆の民なりしなり^三 いま吾等に対する吾主の宣告は下され、吾等は將に刑罰を嘗めんとす^三 げに吾等は汝等を迷はしめたり。されど吾等自身もまた迷ひつつありしなり』^三 かくて此日彼等は等しく刑罰を受けん^三 吾は是くの如くにして悪人を遇す^三 これ彼等曾てアルラーハの外に神なしと告げられたる時、彼等即ち傲然として^三 『吾等豈一狂詩人のために吾等の神々を棄つべけんや』^三 と言へるが故なり^三 然らず。彼は眞理を齎して来り、以前の諸使者を確証せる者なり^三 げに汝等は痛刑を受けん^三 而も是れ唯だ汝等が為せることに対する応報にすぎず^三 但しアルラーハの誠実なる僕等を除く^三』

(1) 主が天使等に向つての言葉。(2) 主が不義者に対しての言葉。汝等とは指導者と追隨者。(3) 追隨者が指導者に対しての質問。『右方より来る』とは吉報を齎すこと。右方は吉祥の方向なり。

此等の者は特別なる糧餉を賜はるべし¹ 即ち各種の鮮果なり² 彼等は栄誉を與へられ³ 歡喜の樂園の中にて⁴ 面々相對して榻上に坐し⁵ 清泉に汲める杯は其間を回る⁶ 其色清白にして飲みて味佳く⁷ 中に心身を害ふものを含まず、而して酪酏することなし⁸ 美しき双眼を俯目勝ちにせる女人、彼等の左右にあり⁹ その麗はしきこと宛も愛護せられたる卵の如し¹⁰ やがて一は他に近づきて互に相問はん¹¹ 一發言者ありて曰く『吾は一人の友を有せり¹² かれ常に¹³ 汝は果して信ずるか¹⁴ 吾等一旦死して塵と骨とに歸したる後、また審判を受くるが如きことあるべきか¹⁵』と言ひたり¹⁶』と¹⁷ 而して彼は左右を顧みて言はん『汝等看ざるか』と¹⁸ かれ俯瞰して地獄の底に其友を認めん¹⁹ 彼言はん『神かけて言ふ、げに汝は殆ど吾を滅ぼさんとせり²⁰ 若し吾主の恩寵なかりせば、吾は必ず受刑者の一人なりしならん』と²¹ 『何とや、吾等は初死の外にまた死なずして可なるか、吾等は刑罰を受けずして可なるか²²』と²³ げにこは至上の幸福なり²⁴ さらば精進者をして是くの如きことのために精進せしめよ²⁵』と²⁶

(1) 前節の『ナルラーの誠実なる僕等』を指す。(2) 樂園の党侶が発する歡喜の言葉なり。

此の嚮応と、ザックーム樹のそれと、孰れが善きか²⁷ げに吾は不義者を試みんがために此樹を

創れり^三 げにそは地獄の至深處に生ずる樹なり^四 而して其の果実はサタンの頭に似たり^五 げに彼等は之を食ひ、之にて其腹を満たしめらる^六 然る後に彼等沸湯を飲ましめられ^七 然る後に地獄に歸らしめらる^八

げに彼等は彼等の祖先の誤れるを知り^九 彼等もまた其の足跡を急げること知らん^十 げに彼等以前にも古人の多くは迷ひたり^{十一} 而も吾は豫め諸警告者を彼等に遣はせるなり^{十二} されば警告せられたる者の末路が如何なるものなりしかを見よ^{十三} 但しアルラーハの誠実なる僕等を除く^{十四}

げにノアは吾に祈りたり。而して吾は彼の祈禱の仁慈なる聽取者なり^{十五} 吾は彼並に彼の家人を大難より救ひて^{十六} 其の子孫を生残者たらしめたり^{十七} 吾はまた後代の人々をして、永く彼を讃へて『普く三界にノアの上に平安あれ』と稱へしめたり^{十八} げに吾は是くの如くにして善事を行へる者に報ゆる^{十九} げに彼は篤信なるわが僕等の一人なり^{二十} 而して吾は其他の者を溺れしめた

り^三

げにアブラハムは彼と信仰を一にしたり^{二十一} かれ完き心を以て其主に来り^{二十二} 其父並に其民に向つて曰く『汝等が拜する此者に何ぞ^{二十三} 汝等はアルラーハを舍きて虚妄の神々を求むるか^{二十四} 汝

等は三界の主を如何に思ふか』と云 彼即ち仰いで星を見よ 『げに吾に疾あり¹』と言ひしかば 彼等踵を回して彼を去れり かれ密かに彼等の神々に近づきて曰く『汝等は食はざるか』 何故に汝等は物言はざるか』と云 彼即ち彼等に襲ひかかり、右手を以て之を撃てり

(1) 傳承によれば、此時アブラハムは占星術を知れる者の如く装ひ、天上の星を見て『吾は病を獲る凶兆あり』と言ひしかば、市民は傳染を恐れて逃げ去り、其間にアブラハムは偶像を破毀せりと。

彼等急ぎて彼に歸り来れり 彼曰く『何事ぞ、汝等は己れが刻める者を拜するか』 汝等を創造し、また汝等が作るものを創造せるはアルラーハに非ざるか』と云 彼等曰く『彼のために薪を積み、而して烈火の中に彼を投ぜよ』と云 彼等是くの如く彼に策謀せしが、吾は彼等を劣敗者たらしめたり 彼曰く『げに吾は吾主の許に往かん。彼は吾を導かん』 主よ、吾に義人のうちに加へらるべき男兒を賜へ』と云 よつて吾は温順なる一男兒の吉報を彼に傳へたり

此子かれと共に精進する年齢に達せる時、彼曰く『吾子よ、吾は汝を犠牲に供へよとの夢を見た。されば汝が正しと思ふことを言へ』と。彼曰く『吾父よ、汝が命ぜられる如く行へ。アルラーハ若し欲しなば、汝はわが能く耐え忍ぶ者の一人なるを知らん』と云 かくて彼等は神意に隨順

し、アブラハム其子を仆して其面おもてを地に伏せし時^三 われ彼に告げて曰く『アブラハムよ^四 汝は既に其夢を果たしたり』と。げに吾は是くの如くにして善事を行ふ者に報ゆ^五 げにこは明瞭なる試練なりき^六 吾は偉大なる犠牲を以て彼の罪を贖ひ^七 永く後代の人をして^八 『平安アブラハムの上にあれ』と稱へしむることとせり^九 吾は是くの如くにして善事を行ふ者に報ゆ^{一〇} げに彼は篤信なるわが僕等の一人なりき^{一一} かくて吾は義人のうちの豫言者イサクの吉報を彼に與へ^{一二} 彼並にイサクを祝福せり。而して彼等の子孫の或者は善事を行ひ、或者は明かに其身を害へり^{一三}

(一) 『此子』とは回教徒に従へばイシマエルなり。但し旧約聖書にては之をイサクとす。

げに吾はモーゼ並にアロンにも恩寵を垂れたり^{一四} 吾は彼等並に彼等の民を大難より救ひ^{一五} 彼等を助けて勝利者たらしめ^{一六} 明瞭なる經典を彼等に與へ^{一七} 直き道に彼等を導き^{一八} 且永く後代の人をして^{一九} 『平安モーゼ並にアロンの上にあれ』と稱へしむることとせり^{二〇} 吾は是くの如くにして善事を行ふ者に報ゆ^{二一} げに彼等は篤信なるわが二人の僕等なりき^{二二}

げにエリアも使者の一人なりき^{二三} かれ其民に向つて曰く『汝等其身を護らざるか^{二四} 汝等パールを拜して、最勝の創造者^{二五} 且汝等並に汝等の祖先の主たるアルラーハを棄つるか』と^{二六} 然る

に彼等は彼を虚言者と呼べり。されば彼等は必ず糾弾せらるべし。但しアルラーハの誠実なる僕等を除く。而して吾は永く後代の人をして、『平安エリアの上にあれ』と稱へしむることとせり。吾は是くの如くにして善事を行ふ者に報ゆ。げに彼は篤信なるわが僕等の一人なり。

(1) エリア Ilyas は回教徒によりてアルキヅル Al-khizir (第一八章第五九節以下参照と同人とせられ、また旧約のエノクとも同人視せらる。

げにロトも使者の一人なり。吾は悉く彼並に彼の家人を救ひたり。但だ落後者となれる一老女を除く。然る後に吾は自餘の者を殲滅せり。げに汝等朝な夕な彼等の廢墟を通行しながら、尙且曉るところなきか。

げにヨナも使者の一人なり。かれ滿載の船に逃れし時、籤を抽きて敗れたり。而して一魚ありて彼を吞めり。これ彼は譴責せらるべき者なりしが故なり。彼若しアルラーハを讃ふる者ならざりせば、彼等が甦らしめらるるはまで彼も魚腹に葬られ居たりしならん。されど吾は不毛の海浜に彼を打上げ、かれ病みたりしかば、胡蘆樹を彼の上に繁らしめ、十萬乃至十萬を超ゆる民を彼に遣はしたり。而して彼等皆な信仰に入りしかば、吾は時到来るまで彼等に安樂を與へ

(1) 船が海上に停止して動かざりしため、船中に逃亡奴隷あるがためなりとて、抽籤によつて之を知らんとせる時、ヨナは吾こそ逃亡奴隷なりと叫んで身を海中に投じ、大魚のために吞まれたりとする傳承。(2) ヨナを吞みたる大魚、海岸に泳ぎ着きて彼を砂上に吐き出だせしが、かれ長く魚腹にありし故に衰弱せるなり。

彼等に問へ『汝の主は女兒を有し、彼等は男兒を有すと言ふか』^一 吾は諸天使を女性に創りしか。彼等は之を目賭せるか』¹と云 げにアルラーハは子を生めりといふは彼等の虚構なり。げに彼等は虚言者なり^{三・三} アルラーハは男兒よりも女兒を重んずると言ふか^三 何たる事ぞ、汝等如何なれば是く判断するか^三 汝等尙ほ反省せざるか^三 又は汝等明白なる証據を有するか^三 汝等の言眞実ならば、汝等の經典を提示せよ^三

(1) 彼等とはメツカ市民なり。彼等は天使を以て女性とし、之をアルラーハの女兒なりとせり。

彼等は彼と幽鬼との間に血縁ありとなせり。されど幽鬼は彼等が必ず糾弾せらるべき者なるを知れり^三 アルラーハを讚へよ、彼は高く彼等の稱ふるもの上に超在す^三 但だアルラーハの誠実なる僕等は是くの如き事を為さず^三

『げに汝等並に汝等が拜する神々は三二 地獄にて燔かるべき者の外は、何人をも誘惑することを得ず三三・三三 而して吾等¹の間には一として各自の定められたる位階なきはなし三三 吾等は位階に順つて整列し三三 常に彼を讚美す』三三

(1) 此の一段はガブリエルの言なるを以て、吾等とは即ち諸天使なり。

彼等曰く『吾等若し前代より傳へられたる訓誡を有したりせば三三 吾等もまたアルラーハの誠実なる僕たらん』と三三 然るに彼等は古蘭を信ぜず。されど彼等はやがて思ひ知らん三三

げに吾言は既に使者たるわが僕等に與へられたり三三 彼等は必ず佑助せらるべく三三 げにわが軍勢は必ず勝利を得ん三三 されば汝は暫く彼等より遠ざかりて三三 唯だ彼等を看よ。やがて彼等もまた看るべし三三

何事ぞ、彼等はわが刑罰を催促するか三三 されど刑罰が彼等の庭前に降る時、そは警告を與へられたる者にとりて禍なる朝なるべし三三 されば暫く彼等より遠ざかりて三三 唯だ彼等を看よ。やがて彼等もまた看るべし三三

稜威の主なる汝の主を讚へよ、 彼は高く彼等の称ふるもの上に超在する 平安諸使者の上にあ

れ
三
界
の
主
ア
ル
ラ
ー
ハ
を
讃
へ
よ

第三十八 サード章

メツカ啓示

冒頭の一文字に因みてサード章3rdと名づけらる。傳承によれば本章の冒頭十節は、メツカ市民がアブー・タリブに対してマホメットの保護を止めよと強要せる時に啓示せられたるものとせらる。メツカ中期の初頭のものとするべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

サード。訓誡に満ちたる古蘭によつて誓ふ一 否な、信ぜざる者は唯だ驕慢と敵対とを事とす二
吾は彼等以前に如何に多くの世代を滅ぼせることぞ。彼等は最早免るべからざる時に及んで慈悲を號呼せり三 いま彼等は彼等の間より一警告者の出でたることを驚く。而して不信者は曰く『これは妖術者なり、虚言者なり四 何事ぞ、彼は神々を以て唯一の神となすか。げにこは奇怪なることなり』と五 而して彼等の首領は相率ゐて去れり。彼等曰く『往け、汝等の神々を護持せよ。こは企たままれたる事なり六 吾等は以前の教に此事あるを聞かず。こは唯だ虚構せられたることのみ七 吾等のうち彼にのみ訓誡が降りと言ふか』と。否な、彼等はわが訓誡を疑ふものなり。否な、彼等

は未だわが懲罰を味はざるなりハ　偉力者・賜與者たる汝の主の慈悲の宝庫は彼等の有なるか
また天地並に天地間の萬物に対する權威は彼等の有なるか。果して然らば繩を攀ぢて天に登れ
されど如何なる聯盟軍も其処にては敗退せんニ

彼等以前にもノアの民、アアドの民、及び強大なるフアラオの民が、諸使者を虚言者と呼べり三
カムードとロトの民、及び森林の民も（諸使者に抗せる）聯盟者なりき三　彼等一として諸使者を
虚言者と呼ばざりしはなし。さればこそ当然懲罰を受けたるなれ四

而して此等の者も、唯だ一刻の遅速もなき一声を待つ者なり五　然るに彼等曰く『主よ、清算の
日に先ちて、まづ吾等の分を急げ』と六　彼等の言を忍べ。偉力を賜はれるダビデを念へ。げに彼
は不斷に懺悔せる一人なりきモ　げに吾は群山を彼に従へ、彼と共に朝な夕な吾を讚美せしめた
り六　而して集まり来れる鳥類も、皆な彼に従へり六　吾は彼の王國を固め、智慧と明敏なる判断
とを彼に與へたり言

(1) 此等の者とは現在のメッサカ市民、彼等も唯だガブリエルの一喝を待つ。(2) 現世に於て吾等の受くべき刑罰を先づ
受けんと豪語するなり。

汝は二人の敵対者が、墻を越えてダビデの内房に入り来れる物語を聞きたるか¹ニ　ダビデ彼等の入り来れるを見て驚きたり。彼等曰く『恐るる勿れ。吾等兩人は敵対者にして、一は他に損害を與へたり。されば公平に吾等を裁判して依怙の沙汰ある勿れ、而して吾等を直き道に導け³　げにこはわが兄弟なり。彼は九十九頭の牝羊を所有し吾は唯だ一頭の牝羊を所有せり。而して彼は⁴その牝羊をも吾に委ねよ⁵と言ひ、議論の末に吾に打勝てり』と³　彼曰く『げに彼が汝の牝羊をも己れの牝羊に併せんとするは、汝に損害を與ふるものなり。されど多くの共同者は互に相侵すを常とす。唯だアルラーハを信じて善事を行ふ者は然らず。されど彼等は甚だ少なし』と。而してダビデはわれ之によつて彼を試みしことを悟り、其主の宥恕を求め、鞠躬して懺悔せり⁴　吾即ち彼を赦したり。げに彼は吾に咫尺し、多幸なる帰處を得たり⁵

(1) 二人の敵対者とは、人間の姿を取れる天使にして、ダビデが既に九十九人の妻を有しながら、更にウリア Uria より其の唯一の妻を奪ひ、彼を前線に送りて戦死せしめんとせる時、之を反省せしめんがために遣はれたるものとせらる。旧約サムエル後書第二二章参照。

『ダビデよ、げに吾は汝を地上のわが代理者となせり。されば公平に裁判し、私情に従ひてアル

ラーハの道より迷ひ去る勿れ。アルラーハの道より迷ひ去る者は、清算の日を忘れたる者なるが故に、必ず痛烈なる懲罰に遭はん^三。吾は空しく天地並に天地間の萬物を創れるに非ず。是くの如く考ふるは信ぜざる者のことのみ。禍なるかな火獄に入るべき不信者は！^三。われ信じて善事を行ふ者と地上に悪を作す者とを同一視すべきか。また其身を護る者と罪を犯す者とを同一視すべきか^三。吾は祝福せられたる經典を汝に降せり。そは彼等をして其の諸節を靜思せしめ、識者をして反省せしめんがためなり』^三云

(1) 天使ガブリエルの言なり。(2) ダビデへの言は第二六節を以て終り、第二七節以下はマホメットに対するガブリエルの言とする学者あり。但し予はネルデケに従つて第二九節までをダビデへの默示とせり。従つて『祝福せられたる經典』とはダビデの詩篇を指せるものとす。

吾はソロモンをダビデに與へたり。如何に勝れたる僕なりしぞ。げに彼は不斷に吾に懺悔せり^三。或日の黄昏^{たそがれ}なり、三脚落地¹の駿馬献上せられたる時^三。彼曰く『げに吾は吾主を念ずることを忘れて地上の佳き物を欣び、太陽の既に黒闇の幕に隠れたるをも識らざり^三。駿馬を吾に連れ回れ^{かへ}』と。かくて彼は駿馬の脚と首とを斬り初めたり^三。

(1) 三脚にて地に立ち、一脚の踏みま地を離れんとする颯爽たる姿の形容。(2) 駿馬に没頭して日没礼拝を忘れたること。その贖罪のために彼は酷愛する駿馬を屠り去れるなり。アルラーが風をソロモンに従へ、之に乗じて隨處に飛到せしめたるは、此の懺悔に対する報賞とせらる。

また吾はソロモンを試みて、一像を其の王座に安置せり。後に至りてかれ鐵悔して言 曰く『主よ、吾を赦せ。而して吾以後の何者も有ち得ざる王國を吾に賜へ。げに汝は賜與者なり』と云 又よつて吾は風を彼に従はしめたり。風は彼が命するまゝに其の指示する處に向つて靜かに走れり云 吾はサタン等をも彼に従はしめたり。其中には建築者あり、潜水者あり、また鉄鎖に繋がれたる者もありき云 吾曰く『こはわが恩賜なれば、豊かに與ふるも節約するも汝の隨意たるべし』と云 げに彼は吾に咫尺し、多幸なる歸處を得たり云

(1) 之に関する回教徒の傳承は下の如し、ソロモンがシドンを陥れて國王を縛せる後、王女ジェラーダ、Jeradiah を伴ひ歸りて寵妃とせしが、彼女は亡父を追慕して止まざりしため、ソロモン之を慰むるためにサタンに命じて故王の像を刻ましめ、之をジェラーダに與へたり。然るに彼女並にその侍女等は、遂に神として此像を拜するに至りしかば、是くの如き瀆神のわざを招致せしめたるソロモンを罰するため、神はサカル Sakhar と呼ぶ一サタンをしてソロモンの指環を盗ましめたり。然るに此の指環には神名が刻まれ居りて、ソロモンの一切の力は之より出でたるものなりしかば、一旦之を失ふや

ソロモンの姿は忽ち変わり果て、悉く神通力を失ふに至れり。かくて何人も彼を國王と認むる者なく、空しく彷徨すること四十日に及び、其間ジェラーダの亡父の像は、公然ソロモンの殿中に於て神として崇拜せられたり。其後サカル逃亡して指環を海中に投じたるを、一魚ありて之を呑み、捕へられてソロモンに獻ぜられ、ソロモンは之によつて指環を回復し、同時に其の王國と王權とを回復するを得たりと。

吾僕ヨブが其主を喚びて『げにサタンは艱難と痛苦とを以て吾に迫る』と訴へたる時を念へ一日く『汝の足にて大地を踏め、然らば即ち爽涼なる浴場と飲泉と湧かん』と² 而して吾は慈悲を彼に垂れ、また心ある者への訓誡たらしむるため、彼の家人並に之に匹敵する人数を彼に與へたり³ 而して曰く『一束の枝を握り、之にて打て。吾との約束を破る勿れ』と。吾は彼が堅忍にして勝れたる僕なるを知れり。げに彼は不斷に吾に懺悔せり⁴

(1) 回教徒の傳承は下の如し。ヨブが悲境に陥れる時、サタン彼の妻に現れ、若し己れを神と奉じなば、家運必ず挽回せらるべしと告げれば、妻之を信じてヨブに許可を求めたり。ヨブ之を聞いて激怒し、幸運回り来らば、必ず百杖を加へて汝を罰すべしと告げて、眞情を神に訴へたりと。(2) ヨブの祈願に応へたる天使ガブリエルの言。(3) 默示によつて大地を踏みしに、忽ち清泉湧き、ヨブは之に浴して病癒え、妻また青春の美に復り、家運立どころに挽回せしかば、ガブリエルがヨブに向つて約束の如く其妻を打てと言へるなり。一束の枝を握れといふは、之を打擲するも痛苦を與へざらしめんがた

また強き手と聰き目とを有てるわが僕等アブラハムとイサクとヤコブとを念へ。吾は淨念を以て彼等を潔めたり。淨念とは末世を念ずることなり。げに彼等は吾目には選良者・最勝者なり。

またイシマエルとエリシアとヅールキフルとを念へ。彼等も皆な最勝者のうちなり。

こは一個の訓誡なり。げに其身を護る者は最勝の歸處を得べし。即ちエデンの樂園なり。その諸門は彼等のために開かれ。彼等其中に倚坐して鮮果と飲料とを喚ばん。而して彼等の左右には年齢相第しき俯目勝の処女あらん。これ清算の日に汝等に約束せらるるものなり。げにこれわが糧餉なり。そは決して盡くることなし。

(其身を護る者は)是くの如し。されど背逆の者にはげに惡き歸處あり。即ち地獄なり。彼等其中にて燔かれん。そは惡き臥處なり。此處には沸湯と極冷の水とあり。されば之を彼等に味はしめよ。其他にも同類多種の刑罰あるべし。(彼等を誘惑せる者に向つて是く言はれん)『こは汝等と共に顛落せる一軍なり。彼等は歓迎せらるべくもなし。げに彼等は火獄にて燔かる』と。彼等は(誘惑者に向つて)言はん『否な、汝等こそ歓迎せられざる者なれ。吾等のために此事を準

備せるは汝等なり。禍なるかな此の臥処は』とき 彼等また言はん『主よ、吾等のために此事を準備せる者のために、火獄にて二重の刑罰を加へよ』とき 彼等また言はん『吾等が悪人のうちに算へたる者、吾等が常に嘲笑せる者を此処に見ざるは何事なるぞ。吾等の目が彼等を見失へるか』とき

言へ『吾は唯だ一個の警告者のみ。アルラーハの外に神なし。そは独一者・全勝者¹ 天地並に天地間の萬物の主、偉力者・宥恕者なり』とき 言へ『こは重大なる消息なり¹ 然るに汝等は之を忌避す¹ 吾は最高の諸天使が論議せることについて如何なる知識もなかりしなり¹ そは唯だ吾を公然の警告者たらしめんがために吾に默示せられたるものなり』とき

(1) 重大なる消息とは次段に述ぶる人間創造の物語を指す。(2) 人間の創造に際して行はれたる諸天使の論議に関する知識なかりしとの意味。

其時汝の主は諸天使に向つて言へり『吾は泥土より一個の人間を創らんとす¹ われ之に形体を與へ、吾靈を之に鼓吹し了らば、汝等地に俯して之に叩首せよ』とき而してイブリースを除きて、諸天使皆な叩首せり¹ 但だ彼は高慢にして信ぜざる者の一人なり¹ 彼曰く『イブリースよ、

何故に汝はわが双手にて造れる者に叩首せざるか。汝は高慢なるか、又は汝は高貴なる者に属するか』^五 彼曰く『吾は彼に優れり。汝は火にて吾を創り、泥土にて彼を創れり』^六 彼曰く『さらば此処より退れ。』^七 げに汝は追はれたるものなり^八 而してわが呪咀は復活の日まで汝の上にあらん』^九 彼曰く『主よ、然らば彼等が甦らしめらるるまで吾を猶豫せよ』^{一〇} 彼曰く『汝は定められたる時まで猶豫せらるる者のうちに加へらる』^{一一} 彼曰く『吾は汝の稜威にかけて誓はん、吾は総ての人間を誘惑し去るべし』^{一二} 唯だ彼等のうち汝の誠実なる僕等を除く』^{一三} 彼曰く『そは眞実なり、吾は眞実を語る』^{一四} 吾は汝並に汝に従ふ者を以て一齊に地獄を満たさん』^{一五} と言へ『吾はこのために如何なる報酬をも汝等に求めず、また吾は矯飾者にも非ず』^{一六} そは唯だ三界に対する訓誡に外ならず』^{一七} 而して時未らば汝等必ずその眞実なるを知らん』^{一八} と言へ

第三十九 隊 伍 章

メッカ啓示

第七一節及び第七三節に信者及び不信者が、それぞれ隊伍をなして一は地獄に、他は樂園に入ること述ぶるに因みて隊伍章 Az-Zumar と名づけらる。概ねメッカ末期の啓示とすべし。但し第五三・五四兩節はメデナ啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

この經典の啓示は偉力者・聰明者アルラーハより出づ。吾は眞理によつて此の經典を汝に降せり。さればアルラーハに事へ、誠を盡して彼に隨順せよ。げに至誠の隨順は唯だアルラーハに對してのみ行はるべし。アルラーハ以外に愛護者を求めて『吾等が彼等を拜するは、唯だアルラーハ、に近づかんがために外ならず』と言ふ者は、アルラーハ必ず其の爭論せることについて彼等を審判すべし。げにアルラーハは忘恩の虚言者を導かず。

アルラーハ若し子を有たんと欲しなば、己れの創れるものうちより其の欲する者を択ぶべし。彼を讚へよ、彼はアルラーハなり、唯一者・全勝者なり。彼は眞理のために天地を創造せり。彼

は夜をして晝を繼ぎ、晝をして夜を繼がしむ。彼は日月を制して各自その定められたる時を違へざらしむ。知るべし、彼が偉力者・宥恕者なることを五。彼は單一の人間より汝等を創り、次で之より其妻を創れり。彼は家畜の四対¹を汝等に降せり。彼はまた汝等を母の胎内に創る。そは三重の黒闇裡²に於ける創造また創造なり。これ汝等の主なるアルラーハなり。權威は唯だ彼にのみ属す。彼の外に神なし。然るに汝等いづこに背き去らしめらるるか六。

(1) 駱駝・牛・羊・山羊の牝牡八頭を指す。(2) 三重の黒闇とは母胎・子宮・胎衣の三を指す。

設ひ汝等が感謝せずとも、アルラーハは汝等に求むるところなし。唯だ彼はその僕等の忘恩を欣ばざるのみ。而して汝等若し恩に感じなば、彼は汝等のために之を欣ばん。荷を負へる者は他の荷を負ふ能はず。やがて汝等は其主に歸らしめらる。其時彼は汝等に向つて其の為せることる告知せん。げに彼は人の胸中に懐くことを熟知す七。

人は艱難に遭へば即ち懺悔して其主に祈る。されど彼一たび彼等を其の恩恵に浴せしむれば、忽ち曾て彼に祈れることを忘れ、同位者をアルラーハに配して、人を彼の道より迷ひ去らしめんとす。言へ『恩を忘れて暫く樂しめ。げに汝等は火獄の党侶なり』と八。

を聽きその最善なるものを守るわが僕等に吉報を傳へよ。此等はアルラーハが導く者なり、此等は思慮ある者なりモエス。されど刑罰の宣告既に下れる者は――。汝は火獄の中に居る者を救ひ得るか元。されど其主を敬ふ者には、彼等のために建てられたる層々相重なる高樓あり、河川其下を流る。これアルラーハの約束なり。而してアルラーハは約束を破らず。

汝は見ざるか、アルラーハは水を天より降し、之を地中の井泉に入らしめ、之によつて各種の穀類を生じ、やがて凋零して其色黄ばめば、即ち之を碎きて粉末となすことを。げに此中には思慮ある者への訓誡あり三

アルラーハが其心をイスラームに開ける者、而して其主よりの光明に従ふ者を（其心頑固なる者と同一視すべきか）。其心頑固にしてアルラーハを念はざる者は禍なるかな。彼等は明白なる迷誤の中にあり三

アルラーハはいま最勝の言説を降したり。そは反復して説かるる多義の經典なり。其主を畏るる者は之を聞けば即ち一身戦慄す。而もアルラーハを念すれば忽ち心身共に和らぐ。これ即ちアルラーハの嚮導なり。彼は之を以て己れの欲する者を導く。されどアルラーハが迷はしむる者には如何なる嚮導者もなし三 復活の日に、禍なる刑罰に対して其面を掩はざるべからざる者が（善事を行

へる者と同一視せらるべきか。不義者には是く言はれん『汝の為せることを味へ』と言

彼等以前の者もまた虚言者と呼べり。而して刑罰は彼等の知らざる処より之に降り^三 而してアルラーハは現世に於ても彼等に屈辱を嘗めしめたり。されど末世の刑罰は更に重かるべし。彼等此事を知りたりせば！^三 吾は彼等を反省せしめんがために、種々なる比喻を古蘭の中に挙示したり^三 そは彼等をして其身を護らしめんとするものにして、如何なる晦澁もなきアラビア語の古蘭なり^三

アルラーハは一比喻を説く。互に相争ふ幾多の夥伴なかまと相結ぶ者と、唯だ一人に傾倒する者とありとすれば、¹ 両者の事情同じかるべきか。アルラーハを讃へよ、断じて然らず。されど彼等多くは之を知らず^元

(一) 前者は多神に事ふる者、後者は独一のアルラーハに事ふる者。

げに汝は死ぬべし。彼等また死ぬべし言 而して復活の日に汝等必ず其主の前にて争論すべし^三 アルラーハについて虚言し、真理彼に来りし時之を虚妄なりとするより甚だしき不義あるか。地獄には信ぜざる者の住むべき処なしとするか^三 されど真理を齎し且之を信する者は、能く其身を

護る者なり。此等は其主の許に己れの欲するものを獲ん。これ善事を行ふ者への報賞なり。ア

ルラーハは彼等の諸悪を拂拭し、その行へる最大の善事に対して報賞を賜ふべし。

アルラーハはその僕等にとりて十全なる守護者に非ざるか。然るに彼等は彼以外の者を以て汝を威嚇す。アルラーハが迷はしむる者には如何なる嚮導者もなし。而してアルラーハが導く者は何者も之を迷はしむる能はず。アルラーハは偉力者・報復者に非ざるか。

汝若し彼等に向つて天地を創れるは誰ぞと問はば、彼等必ず『アルラーハ』と答へん。言へ『アルラーハ若し吾を艱難に遭はしめんとすれば、彼等その艱難を除き得るか。またアルラーハ若し恩寵を吾に垂れんとすれば、彼等その恩寵を抑止し得るか』と。言へ『吾はアルラーハにて足る。頼る者は彼に頼る』と言。言へ『吾民よ、汝等己れの力に依じて行へ、吾また吾力に依じて行はん。やがて汝等思ひ知らん。耻づべき刑罰が何者に降され、永劫の懲罰が何者に課せらるるか』と。言へ『吾は人々のために真実の經典を汝に降したり。導かるる者は己れのために導かれ、迷ふ者は己れを害ふために迷ふ。汝は彼等の監視者に非ず』

アルラーハは彼等の死に臨んで其魂を己れに收む。死なざる者はその睡眠に際して之を己れに收む。而して彼が既に死の宣言を下せる者の魂は之を抑留し、然らざる者は定められたる時到来するまで

之を還附す。げに此中には反省する者への種々なる休徴あり^三

彼等はアルラーハ以外に勸解者を求むるか。言へ『何たる事ぞ、彼等は何事をも左右する力なく、何事をも理解せざるに非ずや』と^四 言へ『総じて勸解はアルラーハに属す。天地の大権は彼にあり、汝等は彼に帰らしめらる』と^五 アルラーハの名のみが唱へらるる時、末世を信ぜざる者の心は戦慄す。而して彼以外の神々の名が唱へらるる時は彼等即ち欣然たり^六 言へ『アルラーハよ、天地の創造者よ、不可見のものと可見のものとの悉知者よ、汝はその僕等が争論することについて審判を下すべし』と^七

不義を行へる者が、若し地上一切のもの乃至之に倍するものを所有するとすれば、彼等必ず之を挙げて復活の日の刑罰の苦厄より其身を贖はんとすべし。されど其時彼等は未だ曾て思量せざりしもの¹をアルラーハより示されん^八 而して彼等の為せる一切の諸惡を示され、曾て嘲笑せること²が彼等を圍繞せん^九

(1) 想像だもせざりし恐るべき刑罰。(2) 同上。

人は艱難に遭へば即ち吾に祈る。されど一たびわが恩寵に浴せしむれば即ち曰く『げに吾はわが

知識によつて之を獲たり』と。然らず、そは一個の試練なり。されど彼等多くは之を知らず。彼等以前の者もまた是く言へり。されど其の獲たるものは彼等を益することなく。その招げる災厄が彼等を襲ひたり。而して此等のうちの不義を行ふ者も、またその招ぐ災厄に襲はれん。彼等決してアルラーハを無力ならしむるを得ず。彼等はアルラーハが己れの欲する者に豊かに糧餉を賜ひ、又は乏しく賜ふことを知らざるか。げに此中には信ずる者への種々なる休徴あり。

(1) その最も著しき例はカールーンなり。第二八章第七六節以下参照。(2) メッカ市民を指す。

言へ『教に背きて己れの魂を害へるわが僕等よ、アルラーハの慈悲に失望する勿れ。げにアルラーハは一切の罪惡を赦す。げに彼は宥恕者・大慈者なり。佑助を得難き懲罰が汝等に來る前に、汝等の主に懺悔して之に歸命せよ。その識らざる間に突如として懲罰が汝等に來る前に、汝等の主より汝等に降されたるものうちの最勝なるものに從へ。然らずば或者は是く言ふに至らん。』
▲悲しいかな、吾はアルラーハを閑却せり。げに吾は嘲笑者の一人なりき。または是く言はん。▲アルラーハ若し吾を導きたりせば、吾は身を護る者の一人たりしものを。また或者は刑罰を目睹して言はん。▲吁、吾若し再び前世に還るを得ば、吾は必ず善行者の一人たらんものを。と

(されど彼等は是く答へられん) 否な、わが休徴が汝に至れる時、汝は之を虚偽なりと呼べり。汝は傲慢にして信ぜざる者の一人なりき』と』弄

復活の日に於て、汝はアルラーハについて虚偽を語れる者の面が黒く曇るを見ん、地獄の中に驕慢なる者の住むべき処なしといふかき、而してアルラーハは其身を護れる者を救ひ、之を彼等の安泰なる居処に入らしめん。彼等は災厄に遭ふことなく、心に憂を抱くことなからん。アルラーハは萬物の創造者、また萬物の守護者なり。天地の秘鑰はその掌裡にあり。アルラーハの休徴を信ぜざる者は必ず淪喪者とならん。

言へ『汝等吾に向つてアルラーハ以外の者に事へよと言ふか。嗚呼、汝等無智なる者よ』と云。彼が汝並に汝以前の者に默示して『汝若し何者かを彼に配しなば、汝の所行は空無に歸し、汝は必ず淪喪者とならん』と告げたる時を念へ。然らず、汝は唯だアルラーハのみに事へて、恩を知る者の一人たれ矣。

彼等はアルラーハの眞價を解せず。されど復活の日に於て、全地は彼の一握の中にあり、諸天は彼の右手にて捲かるべし。彼を讃へよ、彼は高く彼等が彼に配する者の上に超在す。喇叭一たび鳴れば、アルラーハが欲する者を除きて、天地間の一切のものは悉く昏絶せん。而して喇叭再び鳴

れば、見よ彼等忽ち起立して四顧すべし^六。其時大地は其主の光明に照らされ、書冊¹は安置せられ、豫言者並に見証者は召致せられ、審判は彼等に対して公平に行はれて、何人も不当に遇せらるることなかるべし^七。各人は等しく其の為せることに対して存分に報いらる。彼は彼等の為せることを熟知す^八。

(一) 各人の行状記。

其時信ぜざる者は隊伍をなして地獄に駆り立てられん。彼等地獄に到着すれば、諸門忽ち開かれ、守衛の者は彼等に向つて言はん『汝等の間より出でたる諸使者が汝等に来り、汝等のために其主の休徴を讀誦せざりしか。而して汝等が此日に会ふべきことを告げざりしか』と。彼等は『然り』と答ふべし。げに不信者に対する当然の刑罰の宣告が下れるなり^九。而して是く言はれん『地獄の門を入りて永劫に其中に住め。地獄こそ驕慢なる者の歸処なれ』と^十。

其主を敬へる者は隊伍をなして樂園に駆り立てらる。彼等樂園に到着すれば、諸門忽ち開かれ、守衛の者が彼等に向つて言はん『平安汝等の上にあれ。汝等は善事を行へり。さらば樂園に入りて長久に其中に住め』と^{十一}。彼等は言はん『アルラーハを讃へよ、彼は吾等との約束を果たし、吾等

に地を嗣がしめ、樂園に於て吾等の欲する処に住ましむ』と。精進せる者への報賞は豊かなるか
なき。而して汝は諸天使が王座の四周を囲みて其主を讚美するを見ん。彼等の審判は公平に行はれ
ん。而して『三界の主アルラーハに光榮あれ』と唱へられん。

第四十 信 者 章

メッカ啓示

第二八―四五節にフアオ家の一信者が、モーゼ並にアロンに対する迫害を抑止せんと努めたることを述ぶるに因みて信者章 Al-Mu'min と名づけらる。此章を初めとして H・M の二文字を以て始まる七章あり。総じて『ハー・ミーム諸章』と呼ばる。メッカ中期の啓示にして、若干のメヂナ啓示を含むとせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ハー・ミーム― この經典の啓示はアルラーハより出づ。そは偉力者・能知者^二 諸惡の宥恕者

・懺悔の聽允者、刑罰の厲行者、惜みなき賜與者なり。彼の外に神なし、最後の歸着は彼なり^三

信ぜざる者の外は、何人もアルラーハの休徴について爭論せず。されば汝は彼等が諸都府を往來すること¹に欺かるる勿れ^四 彼等以前にもノアの民並に其後の聯盟者は、皆な諸豫言者を虚言者と

呼べり。而して各の民皆な彼等の使者を捕へんと企て、虚偽の言を弄して眞理を論破せんと力めたり。さればこそ吾は彼等を捕へたるなれ 而してわが懲罰の如何に激しかりしぞ^五 かくして信ぜ

る者に対する汝の主の宣告は行はれ、彼等は火獄の党侶ともがらとなれり六

(一) 諸都府を往来すと言ふは隊商を組織して貿易のために南北に往来し、商利によつて富み榮ゆること。

王座を荷ふ諸天使並に之を囲む諸天使は、其主を讃へ、彼を信じ、且信する者のために宥恕を求めて曰く『主よ、汝は慈悲と知識とを以て萬物を抱擁す。されば懺悔して汝の道を踏む者を赦し、地獄の刑罰より彼等を護れ七 主よ、彼等の祖先並に其の妻子のうちの善事を行へる者を、汝が彼等に約束せるエデンの園に彼等と共に入らしめよ。げに汝は偉力者・聰明者なり八 而して彼等を諸惡より護れ。其日彼等を諸惡より護るは、げに其者を慈悲に浴せしむるものにして、そは至大の幸福なり』と九

げに信ぜざる者は是く怒號せられん『げに汝等が信仰を勧められて之を拒める時、アルラーハの怨恨は、汝等相互の怨恨よりも激しかりき』と一 彼等は言はん『主よ、汝は再び吾等を殺し、再び吾等を生かしめたり¹。吾等は己れの罪惡を告白す。さらば免るる途なきか』と二 曰く『この懲罰は、汝等がアルラーハのみ唱へらるる時は之をを信ぜず、同位者を彼に配する時は之を信じたるが故なり。されど審判は唯だ至高者・至大者アルラーハにのみ属す三 其の諸の休徴を汝等に示

し、汝等のために天上より糧餉を降す者は彼なり。されど懺悔する者の外は何人も之を念はず』
と三 されば不信者が如何に嫌忌するとも、専らアルラーハに祈りて之に隨順せよ四 彼は至尊者
なり、王座の主なり。彼は其の命令によつてその僕等のうち己れの欲する者に聖靈を降し、之をし
て会見の日を警告せしむ五 此日彼等一たび墓を出づれば、何事をもアルラーハに隠すこと能は
ず。而して此日の大権は何者の手にあるか。そは独一者・全能者アルラーハの手にあり六 此日各
人は其の為せるところに依じて報いられ、如何なる不公平も行はれず。而してアルラーハの清算は
神速なり七

(一) 生前生命のなかりし時と、死によつて生命を奪はるる時とが二度の死。誕生の時に生命を與へられ、審判のために墓
中より復活せしめらるる時とが二度の生。

彼等に向つて近づける日の警告を與へよ。其時彼等の心臓は喉頭を塞がん。而して悪事を行へる
者には一人の朋友もなく、聽かるべき一人の勸解者もなからん八 彼は能く眼底の詭詐を看破し、
胸裡の秘密を洞察す九 アルラーハは眞理によつて審判するも、彼等が彼以外に拜せる者は能く一
事をも審判せず。げにアルラーハは能聞者・能見者なり三

彼等地上を遊歴して、彼等以前の者の末路の如何なるものなるかを見ざりしか。彼等は此等に優りて有力なりし者にして、その遺跡は現に地上に存す。アルラーハは彼等の諸悪のために之を捕へたるなり。而して彼等はアルラーハに対して一守護者をも有たざりき。そは彼等の使者が明白なる休徴を携へて彼等に来りし時、彼等之を信ぜざりしが故に、アルラーハ即ち彼等を捕へたるなり。げに彼は偉力者・嚴罰者なり。

げに吾はわが休徴と明白なる權威とをモーゼに與へて、之をファラオとハーマーンとカールンとに遣はしたり。然るに彼等は之を魔術者・虚言者と呼びたり。而して彼が吾よりの眞理を彼等に齎せる時、彼等曰く『彼と共に信ずる者の男兒を殺し、その女子を生残せしめよ』と。されど不信者の策謀は唯だ失敗に終りたり。

ファラオ曰く『モーゼを吾に殺さしめよ、然る後に彼をして其主を喚ばしめよ。げに吾は彼が汝等の教を変へ、又は國內を攪乱せんことを恐る』と。モーゼ曰く『げに吾は清算の日を信ぜざる一切の驕慢者に対して、吾主にして且汝等の主なるアルラーハに加護を求む』と。

ファラオの家人のうち、己れの信仰を秘せる一人の信仰者あり、曰く『汝等の主よりの明白なる

休徴を齎し来れる者が、唯だ吾主はアルラーハなりと言へる故を以て、汝等之を殺さんとするか。若し彼の言虚偽ならば、その虚偽は唯だ彼自身を害ふのみ。されど若し彼の言眞実ならば、彼が汝等に警告することの一端は、必ず汝等の上に降らん。げにアルラーハは背逆者・虚言者を導かず。吾民よ、いま王國は汝等の有にして、汝等地上に雄飛するも、アルラーハの震怒若し吾等の上に降らば、之に対して吾等を救ふ者は果して誰ぞ』と。ファラオ曰く『吾は唯だ吾が見るところを汝等に示すのみ。吾は唯だ汝等を正道に導かんとするのみ』と云

かの信者曰く『吾民よ、げに吾は汝等のために恐る、既往の聯盟者の如き運命。またノアとアダとサムードの民、並に彼等以後の者に降れる如き懲罰が、汝等の上にも降らんことを。そはアルラーハはその僕等に対して不義を行ふことを希はざるが故なり。吾民よ、げに吾は汝等のために互に相喚ぶ日を恐る。其日アルラーハに対して汝等を護る一守護者なく、汝等唯だ踵を回して遁走せん。げにアルラーハが迷はしむる者には如何なる嚮導者もなし。曾てヨセフが明白なる休徴を齎し来れる時も、彼等は彼が齎せるものについて疑心を抱くことを止めず、彼が死するに及んで、汝等は彼の後にはアルラーハも使者を遣はさざるべし』と言ふに至れり。アルラーハは是くの如く背逆者・疑惑者を迷はしむ。如何なる權威をも與へられずして、妄りにアルラーハの休

徴について論議する者は、アルラーハ並に信者のために甚だしく憎まるべし。アルラーハは是くの如く一切の驕慢なる暴戾者の心を封す』と云

ファラオ曰く『ハーマーンよ、わがために高樓を築け。われ登高の途云 即ち天上に登る道を得て、モーゼの神に登り往かん。げに吾は斷乎彼を以て虚言者となす』と。かくてファラオの目には己れの惡事が佳しと映じ、正しき道より背き去らしめられたり。而してファラオの策謀は水泡に帰したり云

かの信者曰く『吾民よ、吾に従へ。吾は正しき道を汝等に示さん云 吾民よ、現世の生活は暫時の快樂にして、げに末世こそ長久の住居なれ云 惡事を行へる者は唯だ之に等しきものを以て報いらるるにすぎざれど、信じて善事を行へる者は、男女の論なく樂園に入り、其処にて限りなく糧餉を賜はらん云 吾民よ、われ汝等を救拯すくひに招ぐ時、汝等火獄に吾を招がんとするは何事ぞや云 われ汝等を偉力者・宥恕者に招ぐ時、汝等は吾をしてアルラーハを信ぜざらしめ、わが知らざる者を彼に配せしめんとす云 汝等が吾を招ぐ神々は、現世並に末世に於て断じて拜せらるべき者に非ず。吾等はアルラーハに歸る。而して背逆者は獄火の党侶たるべし云 汝等わが汝等に言へることを忘るる勿れ。吾は吾事をアルラーハに委ぬ。げにアルラーハはその僕等を照覽す』と云

かくてアルラーハは彼等が策謀せる諸の災厄より彼を救ひ、ファラオの民には嚴刑降りし。そは即ち火獄なり。彼等は朝な夕な獄火に曝されん。而して復活の日には『ファラオの民を極重の刑罰に入らしめよ』と言はれん。

彼等獄火の中に争論する時、無力なりし者が驕慢なりし者に向つて言はん『げに吾等は汝等に従へる者なり。されば汝等吾等のために獄火の一部の免除を斡旋し得るか』と。驕慢なりし者は言はん『げに吾等は皆な火中にあるなり。げにアルラーハがその僕等を審判せるなり』と。而して火中にある者は地獄の守衛者に向つて言はん『吾等のために一日の刑を軽減せんことを汝等の主に祈れ』と。彼等は是く答へん『汝等の使者が明白なる休徴を齎して汝等に来らざりしか』と。彼等言はん『然り』と。彼等言はん『然らば祈れ』と。されど不信者の祈禱は効なし。

げに吾はわが諸使者並に信者等を現世に於て佑助し、証人が起立する日に於てもまた之を佑助せん。其日惡事を行へる者の弁疏は無効にして、彼等には唯だ呪咀あるべく、唯だ禍なる住処あるべし。げに吾はモーゼに嚮導を興へ、イスラエルの兒等に經典を繼承せしめたり。そは思慮ある者への嚮導並に訓誡なり。されば耐え忍べ。アルラーハの約束は眞実なり。汝の罪の宥恕を乞ひ、朝な夕な汝の主を讚美せよ。如何なる權威をも興へられずして妄りにアルラーハの休徴につ

いて論議する者は、その胸中に慢心の外何もものなき者なり。されど彼等は決して其志を遂げざるべし。さればアルラーハの加護を求めよ。げに彼は能聞者・能見者なり矣

げに天地の創造は人間の創造よりも偉大なり。されど人は多くは之を知らず矣 失明者と具眼者とは一律に非ず。信じて善事を行ふ者と作悪者とは一律に非ず。されど反省する者の如何に少きとぞ矣 げに時は近づけり。そは疑ふべくもなし。されど人々多くは之を信ぜず矣 而して汝等の主は言へり『吾に祈れ、然らばわれ汝等に応へん。されど驕慢にして吾を拜するを屑しいさまよとせざる者は、必ず辱しめられて地獄に入らん』とき

汝等が休息するためには夜を定め、見るために晝を定めたるはアルラーハなり。げにアルラーハは人間に仁慈なり。されど人々多くは感謝せず矣 此れアルラーハなり、汝等の主なり、萬物の創造者なり。彼の外に神なし。然るに汝等いづこに背き去らしめらるるか矣 アルラーハの休徴を虚偽なりとする者は、是くの如くにして背き去らしめらるる矣

大地を汝等の居処となし、蒼穹を屋宇となし、形体を汝等に與へて之を完美し、諸の佳きものを以て汝等を養ふはアルラーハなり。これアルラーハなり、汝等の主なり。さらば三界の主アルラー

ハを祝福せよ。彼は永生者なり、彼の外に神なし。さらば彼に祈り、誠を盡して彼に隨順せよ。三界の主アルラーハを讚美せよ。言へ『吾主よりの諸の明瞭なる休徵吾に降され、吾は汝等がアルラーハ以外に拜する者に事ふることを禁ぜられ、唯だ三界の主に歸命すべきことを命ぜられたり』と矣

塵土より汝等を創り、次で一涓滴より創り、次で一凝血より創り、次で嬰兒として生れ出でしめ、次で壯年に達せしめ、然る後に——或者は蚤世するも——老人となりて定められたる壽命に汝等を達せしむるは彼なり。汝等恐らく了解せんを。生を與へ死を致すは彼なり。かれ一事を決して『有れ』と言へば即ち有り矣

汝はかのアルラーハの休徵を論議する者が、如何にして背き去らしめらるるかを見ざるか。彼等は經典を虚偽なりとし、またわが使者に降せるものを虚偽なりとする者なり。されどやがて彼等は思ひ知らんを。其時彼等は首伽を締められ、鎖にて繋がれ、沸湯の中に引入られ、然る後に火獄にて燔かれん。其時彼等に是く言はれん『汝等がアルラーハに配せる神々はいま何処にありや』と。彼等は答へん『彼等は吾等を棄てて去れり。否な、吾等は曾て何者をも拜せざりしな

り』と。アルラーハは是くの如くにして不信者を迷ひ去らしむ哉。〔また彼等に言はれん〕『これ汝等が地上に於て不当に驕慢にして、歡樂に狂ひ入りしが故なり』さらば地獄の門に入り、永劫に其中に住め。驕慢なる者の居処は禍なるかな』と云

されば耐え忍べ。アルラーハの約束は眞実なり。われ吾が彼等に約束せることの一端を汝に示すとも、又は先づ汝を死なしむるとも、彼等は竟に吾に歸らしめらる。げに吾は汝以前にも諸使者を遣はしたり。その或者については之を汝に語り、或者については未だ何事をも汝に告げず。されど如何なる使者といへども、アルラーハの允許なくして休徴を示すを得ず。されどアルラーハの命令一たび下れば、審判は公平に行はれ、之を虚偽なりとせる者は滅び去らん。

汝等のために家畜を創り、或は之に騎らしめ、或は之を食はしむるはアルラーハなり。汝等は種々なる利益を彼等より獲るなり。汝等は己れの胸に抱く願望を彼等によつて達し、また舟に乗る如く彼等に騎るを得るなり。彼は諸の休徴を汝等に示せり。然らば汝等はアルラーハの休徴のいづれを否まんとするか。

彼等地上を遊歴して、彼等以前の者の末路が如何なるものなるかを見ざりしか。彼等は此等より

も多数にして且有力なりしものにして、その遺跡は地上に現存す。されど彼等のなせる総ての事は無益なりき。彼等の使者が明瞭なる休徴を齎して彼等に来れる時、彼等は唯だ己れの有てる知識を欣びたり。されど彼等の嘲笑せることが、遂に彼等を圍繞したり。而して彼等わが懲罰を目睹するに及んで、彼等初めて言はん『いま吾等は唯だアルラーハを信じ、曾て彼に配したる神々を信ぜず』と云。されどわが刑罰を目睹せる後の彼等の信仰は、毫も彼等を益することなし。これ既往に於てアルラーハがその僕等に対する慣例なり。されば信ぜざる者は必ず滅ぶ。

第四十一 解説 章

メッカ啓示

第三節に『諸節が明細に解説せられたる経典』とあるに因みて解説章 *Fusilat* と名づけらるま。た第三七節に『唯だアルラ
ーハのみ叩首せよ』とあるに因みて叩首章 *As-Sajdah* と呼ばれるも、同名の第三十二章と区別するためにハー・ミーム叩首
章と呼ばれ、また単にハー・ミーム章とも呼ばれる。メッカ中期の啓示にして、マホメットがメッカの一有力者を改宗せしめんと
念願しつつありし時に降されたるものとせらる。

大悲者大慈者アルラーハの名によりて

ハー・ミームー　こは大悲者・大慈者よりの啓示ニ　諸節が明細に解説せられたる経典にして、
知識ある者のためのアラビア語の古蘭なりニ　そは吉報にして且警告なり。されど彼等多くは背き
去りて之を聴かず四　彼等曰く『吾等の心は汝が之に向つて吾等を招ぐ者に対して掩はれ、吾等の
耳はしひたり。吾等と汝との間には帳幕あり。されば汝は汝の事をなせ、吾等は吾等の事をなさ
ん』と五　言へ『吾は汝等と等しく一個の人間にすぎず。されど吾は汝等の神は唯一の神なること

を黙示せられたり。されば彼に向つて直き道を進み、その宥恕を求めよ。多神を拜する者は禍なるかな^六。彼等は喜捨を行はず、末世を信ぜず』と^七。されど信じて善事を行ふ者には盡さざる報賞あり^八。

言へ『げに汝等は二日の間に天地を創れる彼を信ぜざるか^一。汝等は同位者を彼に配するか。彼は三界の主なるぞ』と^九。彼は堅固なる群山を地上に置きて大地を祝福し、求むる者のために四日の間に一律にその糧餉を配給せり^二。然る後に彼は其時尚ほ煙にすぎざりし天に赴き、天と地とに向つて曰く『好むと好まざるとを問はず、汝等兩者吾に来れ』と。兩者曰く『吾等欣んで来れり』と^三。彼即ち二日の間に之を七層の天となし、各天にその任務を黙示せり。而して最も大地に近き天ををば燈明を以て飾り、且之を守護する諸天使を置けり。これ偉力者・能知者の定むるところなり^三。

(1) 第二二章第四七節、第三二章第五節、第七〇章第四節参照。(2) 此の四日のうちには第一の二日を含む。(3) 此の二日は四日後の二日にして、週の第五・第六日なり。回教徒は週の第五日即ち木曜日に諸天創られ、第六日即ち金曜日に日月星辰創られ、且其夕に人祖アダムが創られたりとなす。

彼等若し背き去らば即ち言へ『吾はアアドとサムードとを襲へる電撃が、汝等をも襲ふべきことを警告す』と三 彼等の使者、前後より彼等に来り、アルラーハの外に何者をも拜する勿れど告げたる時、彼等は言へり『吾等の主若し欲したりせば、彼は必ず天使を降せるならん。吾等は断じて汝等が遣はされたる使命を信ぜず』と四 アアドの民について言へば、げに彼等は地上に於て不当に驕慢なりき。彼等曰く『誰か實力に於て吾等に優るものぞ』と。彼等は彼等を創れるアルラーハが、實力に於て彼等に優れることを思はざりしか。而して彼等はわが休徴を否認せり五 かくて吾は災厄の日に暴風を彼等に駆り、現世に於て屈辱の刑罰を味はしめたり。されど末世の懲罰は更に羞づべく、且彼等は佑助せられざるべし六 サムードの民について言へば、吾は彼等に嚮導を與へたり。然るに彼等は嚮導よりも盲目を択びたり。されば其の為せることのために、屈辱の刑罰の電撃が彼等を襲ひたり七 されど彼は信じてアルラーハを敬へる者を救ひたり八

アルラーハの敵が一齊に召集せられ、隊伍をなして火獄に駆らるる日（を彼等に警告せよ）九 彼等火獄に到着する時、その耳と目と皮膚とは彼等が為せることを立証せんき。而して彼等は己れの皮膚に向つて言はん『何故に汝等は吾等に不利なる証言をなすか』と。彼等は答へん『萬物を語らしむるアルラーハは、吾等をも語らしむ。最初に彼は汝等を創りたり。而して最後に汝等は彼に

歸らしめらるるニ 汝等は己れの耳目と皮膚とに不利なる証言をなさざらしめんがために、其身を護
ることをせざりき。而して汝等は、アルラーハが汝等の為すことについて多く知るところなしと思
へりニ 其主を是くの如き者と思へることが、 汝等の破滅を招ぎ、 いま汝等は淪喪者となれり』
とニ 彼等如何に忍若するとも、火獄は永劫に彼等の住処たるべく、如何に恩寵を求むるとも、恩
寵に浴する者のうちに加へられざるべしニ 吾はサタンを彼等の伴侶と定めたり。サタンは彼等の
ために現世と末世¹とを粉飾せり。彼等以前の幽鬼並に人間の諸の民に下されたる宣告は、まさしく
彼等にも該当す。げに彼等は淪喪者たるべしニ

(1) 直訳『彼等の前に在りしもの、並後にあるもの』。

信ぜざる者曰く『古蘭に耳傾くる勿れ。之に打勝つために高声にて語れ¹』とニ 吾は痛烈なる懲
罰を信ぜざる者に味はしめ、彼等が行へる最悪の事に対して彼等に報いんニ アルラーハの敵が受
くべき応報は此なり、即ち火獄なり。此中に彼等のための永劫の住処あり。これ彼等がわが休徴を
否めることに対する報償なりニ、而して(火獄に投ぜられたる)不信者は言はん『幽鬼と人間との
うち吾等を迷はしめる者を吾等に示せ。吾等之を脚下に蹂躪して、奈落²の底に居る者のうちに加へ

ん』と云

(1) 高声に談笑して古蘭の誦誦を妨げしめんとするなり。(2) 直訳『最下層』。地獄の至深処の意味。

げに『吾主はアルラーハなり』と言ひて、直き道を邁往する者には、諸天使其上に降りて言はん『畏るる勿れ、また憂ふる勿れ。唯だ汝等に約束せられたる樂園の吉報を聽け。吾等は現世・末世の汝等の愛護者なり。汝等来世には其魂の希ふものを獲べく、その求むるものを獲ん。そは宥恕者・大慈者よりの響応なり』と云

アルラーハに祈りて善事を行ひ、『げに吾は歸命者の一人なり』といふに優る善言あるか。善悪は一律に非ず。善を以て悪を斥けよ。然らば汝と宿怨ある者も親友となるに至らん。されど唯だ堅忍の人のみ之を能くし、また大なる幸運の人のみ之を能くす。而して若しサタンの誘惑が汝等を誘惑しなば、アルラーハに加護を求めよ。げに彼は能聞者・能知者なり。

晝夜と日月とは彼の休徴のうちなり。汝等若し彼に事へんとしなば、日月を拜すること勿れ、之を創れるアルラーハに叩首せよ。設ひ彼等は驕慢にして彼に事ふるを屑しとせずとも、汝の主と偕なる諸天使は、日夜彼を讃へて倦むことなし。汝は大地の荒涼たるを見ん、而も吾之に雨を降

せば、地は動き且澎る。此事もまた彼の休徴のうちなり。げに大地に生命を與ふる者は、即ち死者を甦らしむる者なり、彼は萬事を能くす

げにわが休徴を忌避する者は、吾より隠るることを得ず。さらば復活の日に火中に投ぜらるる者善さか、將又安泰にして来る者善さか。汝等その好むところに從へ。げに彼は汝等の為すことを照覽す。げに訓誡既に至れる時に之を信ぜざる者は（吾より隠るることを得ず）。而して古蘭はげに莊嚴なる經典なり。虚偽は前よりも後よりも之に近づくことを得ず。そは聰明者・可頌者よりの啓示なり。汝に向つて言はるることは、総じて汝以前の諸使者に向つて言はれたることなり。げに汝の主は宥恕者にして且嚴罰者なり。

吾若し他國語にて古蘭を降したりせば、彼等必ず言はん『其の諸節が明細に解説せらるるに非ずば——。他國語とや！アラビア人にとや！』と。言へ『そは信ずる者には嚮導なり、また医療なり。信ぜざる者は其耳の中に錘あるなり。そは彼等には見えざるなり。彼等は遠方より呼ばるる者に似たり』と。

(一) 前半は明細に解説せられずば之を信ぜず、又は理解し得ずとの意味。後半は他國語にて降さるる天啓をアラビア人が受くるかの意味。

げに吾はモーゼに經典を興へたり。然るに之について爭論生じたり。若し既に発せられたる主の言ことばなかりせば、判決は既に彼等に下されしならん。そは彼等が之について大なる疑惑を抱くが故なり四五

善事を行ふ者は己れの魂を益し、惡事を行ふ者は己れの魂を害す。汝の主はその僕等に対して公正を缺くことなし四。復活の日のことは唯だ彼のみ之を知る。彼が知ることなくしては、一個の果實も其苞より出でず、一人の女子も懐胎し又は分娩することなし。其日彼は彼等に向つて言はん『汝等が吾に配したる神々はいま何処にありや』と。彼等は言はん『吾等は告白す、吾等の中に一人の見証者もなし』と四。かくて曾て彼等が拜せる者は彼等を棄てて去り、彼等は免るる途なきを曉らん四

人は幸福を祈りて倦むことなし。されど一たび災難に遭へば忽ち阻喪して絶望す四。而も災難に遭へる後に之を慈悲に浴せしむれば、彼は必ず言はん『こは吾力にて獲たるものなり。吾は復活の日を必至と思はず。また吾設ひ吾主に歸らしめらるるとも、吾必ず彼の許に幸福を獲ん』と。されど吾は必ず信ぜざる者に向つてその為せることを告知し、必ず彼等に嚴刑を味はしめん吾。われ恩恵を人に施せば、彼忽ち面を背けて退き去る。而も一たび災難に遭へば即ち喃々として祈る五

言へ『思へ、若し古蘭がアルラーハより降されたるものにして、而も汝等之を信ぜずとすれば、之に遠ざかるよりも甚だしく迷ふ者あるか』と^三 吾はわが休徴の眞実なることが彼等に明白となるに至るまで、或は遠國¹に於て、或は彼等自身の間¹に於て、常に之を彼等に示さん。汝の主は萬物の照覽者なり。汝は之を以て足れりとせざるか^三 彼等尙ほ其主との会見を疑ふか。げに彼は一切を圍繞しつつあるに非ざるか^三

(1) アラビア以外の諸國を指す。

第四十二 商議章

メッカ啓示

第三八節に『互に商議して之を行ふ者』とあるに因みて商議章 Ash-Shura と名づけらる。回教國に於ける議會政治を是認するために、時に此の一節が引用せらる。そは此の啓示に於て、事を行ふに當りて人々互に商議すべきことを勸むるが故なり。メッカ中期の啓示とすべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ハー・ミームー アアイーン・スイーン・カーフニ 偉力者・聰明者アルラーハは、汝並に汝以前の者に是くの如く默示す^三 天地間の一切のものは彼に属す。彼は至高者・至大者なり^四 諸天は（その稜威の前に）上空より崩裂せんとし、諸天使は其主を讃へて献頌し、地上の者のために宥恕を求む。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり^五 されど彼以外に愛護者を求むる者は、アルラーハ之を監視す。汝は彼等の監督者に非ず^六 われ是くの如くアラビア語の古蘭を汝に默示し、汝をして諸邑の母並に其の四周に警告せしめ、決して疑ふべからざる召集の日について彼等に警告を與

へしむ。其日一隊は樂園に入り、一隊は烈火に入らんせ。アルラーハ若し欲したりせば、彼等を一教に歸せしめたるなり。されど彼は己れの欲する者に慈悲を垂る。而して不義者には如何なる愛護者もなかるべし。彼等は彼の外に愛護者を求むるか。されどアルラーハこそ唯一の愛護者なれ。彼は能く死者を甦らしめ、能く萬物を左右す。

汝等何事について争論するとも、その審判はアルラーハの手中にあり。これ吾主アルラーハなり。吾は唯だ彼に頼り、唯だ彼に懺悔す。彼は天地の創造者なり。彼は汝等のために汝等自身より其妻を創り、また牡牝の家畜を創り、之によつて汝等を繁殖せしむ。彼は絶倫なり。彼は能聞者・能見者なり。彼は天地の鍵を握る。彼は己れの欲する者に糧餉を伸縮す。げに彼は萬事を知る。

彼は『此の信仰を護持せよ、宗派に分裂すること勿れ』と告げてノアに命じたる教を汝等の教と定めたり。これわが汝に默示する教にして、アブラハムとモーゼとイエスとに命じたるものなり。汝が招ぐ此教は、多神を拜する者にとりて至難なるものなり。アルラーハは其の欲する者を己れのために扱ひ、懺悔する者を己れに導く。彼等が宗派に分裂せるは、眞実の知識既に至れる後のことにして、げに互に他を嫉みたるによる。若し一定の時期を定めたる汝の主の言が既に発せられた

るに非ざりせば、判決は既に彼等に下されたりしなり。而して彼等の後に經典を繼承せる者は、之について不安なる疑惑を抱く。

(1) 彼等とは猶太人並に基督教徒を指す。

さらば彼等を此教に招げ。汝が命ぜられたる如く邁往し、彼等の私情に従ふ勿れ。而して言へ
『吾はアルラーハが降せる經典を信ず。吾は公平に汝等を判断せよと命ぜられたり。アルラーハは吾等の主にして且汝等の主なり。吾等には吾等の事あり、汝等の事あり。吾等と汝等との間に争論なからしめよ。やがてアルラーハは一齊に吾等を召集すべく、吾等皆な彼に歸るべし』と云 されど一旦彼に聽從せる後にアルラーハについて論議する者は、其の論議は其主の前に撥無せられ、神怒彼等に降りて痛刑を受けん云 眞実の經典と秤衡はかりと降せる者はアルラーハなり。而して末日の或は近づけることを汝に知らしむる者は何ぞモ 末日を信ぜざる者は之を催促するも、之を信ずる者はその眞実なるを知りて恐懼戰慄す。げに末日を疑ひて争論する者は、甚だしき迷誤の中にあるものなり云

(1) 直訳すれば『彼が聽從せられたる後』なり。この『彼』を以て或はマホメットを指すとなし、或はアルラーハを指す

となす。(2)古蘭中に含まれる訓誡を指す。

アルラーハはその僕等に仁慈なり。彼は己れの欲する者を養ふ。彼は強大者・偉力者なり元 来世の稼穡を希ふ者には、われ其人のために稼穡を増さん。現世の稼穡を希ふ者にも、われ之を彼に與へん。されど来世に於て彼は一分をも與へられざるべし言

彼等はアルラーハが許さざる教を彼等に勧むる神々を拜するか。若し(既に発せられたる)決定の言なかりせば、彼等は既に判決を下されたりしなり。而して不義者は必ず痛刑に遭はん三 其日汝は不義者が惡果の彼等に落ちんとするに臨みて、其の為せることに畏懼戰慄するを見ん。されど信じて善事を行へる者は樂園の草野に住み、己れの好むものを其主の許に獲べし。これ偉大なる恩寵なり三 これアルラーハが信じて善事を行ふ僕等に賜ふ吉報なり。言へ『吾は此為に如何なる報酬をも汝等に求めず。吾は唯だわが近親の愛を求むるのみ』と。而して一善を行ふ者には、われ其人のために其善を増さん。げにアルラーハは宥恕者・善賞者なり三

彼等は彼(マホメット)がアルラーハについて虚構の言をなせりと言ふか。されどアルラーハ若し欲しなば、彼は汝の心を封するを得べし。アルラーハは虚偽を撥無し、其言によつて眞理を実証

す。げに彼は人が胸中に懐くことを知る言。彼はその僕等の懺悔を納れ、彼等の諸悪を赦し、且汝等の為すことを知る言。彼は信じて善事を行ふ者の祈願に応へ、その恩寵を之に加増す。されど不信者は痛刑に遭はん言。

アルラーハ若しその僕等に糧餉を賜ふこと寛大ならば、彼等必ず地上に於て放縱なるべし。されど彼は適度にその欲するものを降す。げに彼はその僕等を熟知し且照覽す言。彼等が絶望せる時、雨を降してその恩沢を普くするは彼なり。彼は讚美せらるべき愛護者なり言。天地の創造並に彼が天地間に散布せる生類も、また彼の休徴のうちなり。而して彼はその欲する時に彼等を召集し得るなり言。

汝等を襲ふ不幸は、汝等の手が為せることのためなり。されど彼は多くを赦す言。而も汝等は地上に於て彼を無力ならしむるを得ず、また汝等はアルラーハの外に如何なる愛護者も佑助者もなし言。

山の如く海上を走る船も彼の休徴のうちなり言。彼若し欲しなば、風を鎮めて船を海面に停止せしめ得べし。げに此中には堅忍にして恩を知る者への種々なる休徴あり言。また彼は彼等の為せることのために船を沈没せしめ得べし。されど彼は多く赦す言。されどわが休徴について論議する者

は、やがて遁るる処なきに至らん^三

いま汝等に與へらるるものは現世の暫時の安樂にすぎず。アルラーハの許にあるものこそ、信じてその主に頼る者にとりて^三。また大罪と醜行とを避くる者にとりて、また憤怒を抑えて寛恕する者にとりて^三。また其主に応へて禮拜を守る者にとりて、また互に商議して事を行ふ者にとりて、またわが賜へるものにて喜捨を行ふ者にとりて^三。また迫害を加へられたる時に其身を護る者にとりて、更に善美にして且長久なるものなれ^三。

惡に報いるには同類の惡を以てせよ。されど寛容にして其身を修むる者には、アルラーハの許にその報賞あり。彼は不義者を欣ばず^四。迫害せられたる後に其身を護る者は之を罪すべき道なし^四。罪すべきは人を迫害し、地上に於て不当に放縱なる者なり。彼等は痛烈なる刑罰に遭はん^四。されど堅忍にして寛容なること、これ実に守るべき道なり^四。

アルラーハが迷はしむる者には、彼の外に如何なる愛護者もなし。汝は不義者が刑罰を目睹して、『之を避くる道なきか¹』と叫ぶを見ん^四。汝は彼等が火獄に曝され、屈辱によつて賤しめられ、ながしめに偷み視るを見ん。而して信者等は言はん『彼等こそ復活の日に己れ自身とその家人とを失へる淪喪者なれ』と。げに不義者は永劫の懲罰の中に居らん^四。彼等にはアルラーハの外に

彼等を助くる一愛護者なく、またアルラーハが迷はしむる者には如何なる道もなし

(1) 此の一句は『現世に還る途なきか』とも解せらる。

避け難き日がアルラーハより汝等に来る前に、汝等の主の招呼に応へよ。其日汝等は遁るる處なく、拒む力もなからん。されど彼等設ひ汝に背き去るとも、吾は彼等の監督者として汝を遣はせらるに非ず。汝の務めは唯だ使命の傳達のみ。而も見よ、われ人をわが慈悲に浴せしむれば即ち狂喜するも、己れの手が豫め送れるものために災難に遭ふ時は、忽ち恩を忘る。

天地の大権はアルラーハに属す。彼は己れの欲するものを創造す。彼は己れの欲する者に、或は女兒を與へ、或は男兒を與へ。或は男兒と女兒とを交へて與へ、また己れの欲する者を不妊ならしむ。げに彼は能知者・強大者なり。

アルラーハの人間に語るや必ず默示によつてし、又は帳幕の後よりし、又は使者を遣はし、その允許によつて己れの欲するところを之に默示せしむ。げに彼は至高者・聰明者なり。かくて吾はわが命令による聖靈によつて汝に默示せり。汝は經典の如何なるものなるかを知らず、また信仰をも知らざりき。されど吾は之を以てわが欲する僕等を導く光明となせり。而して汝は必ず直き道に

導かるべし。そは天地間の萬物を総攬するアルラーハの道なり。げに萬事はアルラーハに帰向す

第四十三 金飾章

メツカ啓示

H・M群の第四章にして、第三五節に『黄金の裝飾』とあるに因みて金飾章 Az-Zuhuf と名づけらる。メツカ中期の啓示に属す。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ハー・ミームー 明瞭なる經典によつて誓ふニ げに吾は汝等に理解せしめんがために之をアラビア語の古蘭となせりニ 是は載せて吾許にある經典の母の中にあり、是は至高にして智慧に満ちたるものなり^四 汝等背義の民なるが故に、われ此の訓誡^{ツイン}を汝等より撤回すべきか^五 吾は如何に多くの豫言者を往時の民に遣はせしことぞ^六 而して豫言者が彼等に來る毎に、一人として彼等之を嘲笑の的とせざるはなかりき^七 されば吾は此^一等の者よりも強大なる諸の民を亡ぼしたり。古人の先例既に彼等以前にあり^八

(一)メツカ市民。

げに汝若し彼等に向つて天地を創造せる者は誰ぞと問はば、彼等必ず答へん『偉力者・能知者が
両者を創れり』と云 彼は大地を汝等の臥牀とし、汝等を導くために路を其中に設けたり云 彼は
適量に水を天より降し、之によつて死地を甦らしむ。宛も是くの如く汝等も甦らしめられん云 彼
は萬物の雌雄を創り、また汝等が乗る船と家畜とを創れり云 此れ汝等を其背に安坐せしめんがた
めなり。されば汝等其背に安坐する毎に、汝等の主の恩寵を念ひて言へ『彼を讃へよ、彼は此等の
者を吾等に從はしめたり。そは吾等自身の能くせざりしことなり云 げに吾等は必ず吾等の主に帰
る』と云 然るに彼等は彼の僕等の一部を彼に配す。げに人は明かに忘恩なり云

彼はその創れるものうちより己れは女兒を択び、汝等には男兒を賜ふと言ふか云 而も彼等の
一人が、己れが大悲者に準^{なほら}ふる者の誕生の報^{しらせ}を受くれば、¹其面は曇り、其心は憤懣に満つ云 何事
ぞ、粉飾の間に育ち、理由もなくして爭論を事とするが如き者を²（彼等はアルラーハに準^{なほら}ふる
か）云 彼等は大悲者の僕等なる諸天使を女性とするか。彼等は彼等が創らるるを目睹せるか。彼
等の証言は記録せられ、且彼等は糾問せらるべし云

（1）此の一段はアラビア人が天使をアルラーハの女兒なりとして、之を崇拜することを非難するものにして、『大悲者に

準ふる者』とは女兒を言ふ。(2)女子のこと。

彼等曰く『大悲者若し欲したりせば、吾等は決して彼等を拜せざりしならん』と。彼等之について如何なる知識もなし、彼等は唯だ臆測するのみ。この古蘭以前に吾は經典を彼等に降せるか、彼等其を護持するか。否、彼等は唯だ是く言ふ『吾等は吾等の祖先が一個の教を奉ずるを見たり。げに吾等は彼等の先蹤に導かる』と。げもさもありなん、われ汝以前に一警告者を一都府に遣はす毎に、都府の富裕なる者は必ず言へり『吾等は吾等の祖先が一個の教を奉ずるを見たり。げに吾等は彼等の先蹤に導かる』と。警告者は言へり『何事ぞ、われ設ひ汝等の祖先が奉じたるよりも優れる教を汝等に齋すともか』と。彼等曰く『吾等は断じて汝等が齋せるものを信ぜず』と。かくて吾は彼等に報復せり。見よ、わが使者を虚言者と呼べる者の末路が如何なるものなりしかを。

アブラハムが其父並に其民に向つて是く言へる時を念へ『げに吾は汝等が拜する神々と絶縁す。唯だ吾を創れる彼を除く。げに彼は必ず吾を導かん』と。彼は之を以て後代永存の遺訓となし、

彼等を正しき道に復らしめんとせるなり云 否な。されば吾は此等並に其の祖先をして、眞理と明白なる一使者とが彼等に來るまで、暫く現世の生活を樂しましめたるなり云 然るにいま眞理彼等に至るに及んで、彼等曰く『こは魔術なり。吾等は断じし之を信ぜず』と言 又曰く『若し此の古蘭が両都¹の偉大なる人物に降されたるものなりせば』と云 然らば汝の主の慈悲²を頌與する者は彼等なるか。彼等の間に現世の生計を頌ち、或者をして他を從へしむるために其の階級を他よりも高くせるは吾なり。されど汝の主の慈悲は彼等が積むもの³よりも貴し云 若し人類挙りて一團となる懼れなかりせば⁴、吾は大悲者を信ぜざる者のために、其家に白銀の家根、之に昇る白銀の階段云 居室に白銀の扉、倚坐すべき錦繡の榻牀を與へ云 且黄金の裝飾を施せるなるべし。されどげに是れ総じて現世の快樂にすぎず。其身を護る者のためには、汝の主の許に來世あり云

(1) メッカ・タイフの兩都を指す。(2) 豫言者の聖職を與ふる慈悲なり。(3) 財寶と子女。(4) 人類悉く不信者の一團となる懼れ。

大悲者を念ずることを忽^{ゆるがせ}にする者は、われサタンを之に繋ぎて其の伴侶たらしめん云 げにサタンは彼等を道より迷はしむるも、彼等は正しく導かると想はん云 而して遂に吾前に來るに及んで

初めて言はん『吁、吾と汝との間に東西萬里の懸隔あらんことを！』と。げに惡き伴侶なるかな。汝等是不義なりし故に、此日汝等は何の益するところもなからん。げに汝等は刑罰を分つべき者なり
り完

何とや、汝は聾者に聞かしめ、盲者又は明白なる迷誤の中にある者を導き得べしとするか。されど吾若し汝を此世より逝らしむることありとするも、吾必ず彼等に報復せん。或はわれ汝にわが彼等に約束せることを目睹せしめん。げに吾は思ふが儘に彼等を左右し得るなり。されば汝に默示せられたるものを護持せよ。げに汝は直き道にあり。げに古蘭は汝並に汝の民への訓誡なり。汝等やがて（之を守れるや否やを）問はるべし。汝以前にわが遣はせる諸天使に問へ、吾曾て大悲者以外に彼等が拜すべき神々を定めたるかと。

げに吾はモーゼにわが休徴を與へて之をファラオ並に其の貴人等に遣はしたり。彼曰く『吾は三界の主の使者なり』と。然るに彼がわが休徴を携へて彼等に來れる時、見よ彼等は之を笑ひたり。而してわが彼等に示せる休徴は、一として姉妹の休徴よりも偉大ならざるはなかりしなり。されば吾は彼等を懺悔せしむるため、刑罰を以て彼等を懲らしたり。其時彼等曰く『魔術者よ、

汝の主が汝と結べる約束によつて、吾等のために彼に祈願せよ。げに吾等必ず直き道を踏まん』
と呪 然るにわれ彼等の刑罰を除くや、見よ彼等忽ち此の約束を破れり吾 而してファラオ其民に
宣言して曰く『吾民よ、埃及の國土並に吾下を流るる此等の河川は吾有に非ざるか。汝等之を知ら
ざるか』 吾はこの卑賤にして言語不明なる者に優れり¹ されば黄金の腕輪が彼に降され、又は
諸天使が彼と共に遣はさるるに非ずば、吾は断じて彼を信ぜず』と云 かれ是くの如くしてモーゼ
を軽んぜしめ²、其民之に従へり。げに彼等は背逆の民なりき云 かくて彼等わが激怒に触れ、吾は
彼等に報復し、一齊に彼等を溺死せしめたり云 吾は之を以て一個の先例となし、後代の鑑戒なら
しめたり云

(1) モーゼを指す。(2) 『モーゼを軽んぜしめ』と訳せる一句は『其民に輕薄を勸め』と解釈する學者多し。予は之を採らず。

またマリアの子のことが一例として挙げられたる時、汝の民は声を挙げて笑ひたり¹ 彼等曰く
『吾等の神々が優れるか、又は彼が優れるか』²と。彼等が汝に之を言ふは唯だ争論せんがため
のみ。否な、されど彼等は好争の民なり云 彼は唯だわが恩寵に浴せる一人の僕にすぎず。而して吾

は彼を以てイスラエルの民への一例とせり焉 而して吾若し欲しなば、吾は地を嗣ぐべき諸天使を汝等の間より挙げ得べし³ げに彼は末日の休徴の一つたらん⁴ されば之について疑心を抱く勿れ。汝等唯だ吾に従へ。これ直き道なり⁵ 而してサタンに迷はしめらるる勿れ。彼は汝等の公然の敵なり⁶ イエスは明瞭なる証據を齎し来りて言へり『吾は智慧を齎して汝等に来れり。吾は汝等が争論する若干の事柄を汝等に説き明かさん。さればアルラーハを敬ひ、吾に従へ⁷ げにアルラーハは吾主にして汝等の主なり。されば彼を崇めよ、これ直き道なり』と⁸ 然るに諸派ありて互に相争ふに至れり。哀しいかな、不義を行ひて苦惱の日の刑罰に遭ふべき者は⁹ 彼等はその知らざる間に突如として来る末日の外に、また何ものを待ち得るか矣 アルラーハを敬へる者を除きて、此日友人が互に仇敵とならん¹⁰

(1) イエスの奇蹟的誕生を笑ふなり。(2) 吾等が神として拜する諸天使と、基督教徒が神子とするイエスと孰れか勝れるかの意味。(3) 恰も父なくしてイエスを出現せしめたる如く、メッカ人の間に天使を出現せしめ得との意味。人間も天使も等しくアルラーハによつて創られたる者なるが故なり。(4) 回教徒の信仰によれば末日の豫兆として、イエス天上よりダマスコ附近の地に降り、それよりエルサレムに向つて進むとせらる。

わが僕等よ、わが休徴を信じて歸命者となれる汝等には、此日畏怖なく憂懼なからん¹¹ 汝等

並に汝等の妻は、欣然として樂園に入れき。其処にては黄金の杯盤彼等の間を回り、心に望み目に快きものを賜はり、長久に其中に住まんき。これ汝等が爲せることのために汝等が嗣がしめらるる樂園なりき。其処には汝のために就て食ふべき許多の果実ありき。

げに作悪者は永劫に地獄の刑罰の中に居らんき。そは彼等のために輕減せられず、彼等其中にて絶望せんき。そはわれ彼等を害せるに非ず、彼等自ら己れを害せるなりき。彼等は叫ばん『マールクよ、希くは汝の主をして吾等の命を終らしめよ』と、而して彼は答へん『汝等は此処に留まらざるべからず』とせ。

(1) マールク Malik は回教徒によつて地獄を支配する天使とせらる。

げに吾は眞理を汝等に齎せり。然るに汝等多くは眞理を忌避すき。彼等は何事をか決したるか¹。然らば吾また決するところあらんき。彼等はわれ能く彼等の秘密と私語とを聞かずとするか。然らず、わが使者等²は彼等の左右にありて之を記録する。

(1) マホメットに対して何事をか策謀せんと決したるかの意味。(2) 諸天使。

言へ『若し大悲者に子ありとすれば、吾は礼拝者の首先^{さき}たらんき。天地の主を讚へよ、彼等が彼

に帰するものに高く超絶せる王座の主を讃へよ』と云 されど彼等が彼等の日に当面するまで、彼等の詮索し嬉戯するに委ねよ云

彼は天に於ても神、地に於ても神なり。彼は聰明者・能知者なり云 天地の大権を掌握し、天地間の萬物を主宰し、末日を知り、而して汝等の帰趨たる彼を祝福せよ云 アルラーハを舍きて彼等が拜する神々は毫も勸解の力なし。但し眞理を実証し且之を知れる者を除く¹云 汝若し彼等に向つて『汝等を創れる者は誰ぞ』と問はば、彼等必ず『アルラーハ』と答へん。然らば何処に彼等は背き去らしめらるるか云 さればこそ彼は言ふなれ『主よ、此等は信ぜざる民なり』と云 彼等を遠離して唯だ『平安』と挨拶せよ。やがて彼等は思ひ知らん云

(1) バイザーキ・ジャラールディンによれば、此の除外例に算へらるるは、諸天使とエツラとイエスとなり。彼等はアラビア人・猶太人・基督教徒によつて、それぞれ神として崇拜せられたる者なるも、天啓の知識によつて神の独一て眞理を実証せるために、勸解者たることを許さるとせらる。(2) マホメット。

(1) マホメットが最初に天啓を受けたるラマザン月下句の一夜にして『稜威の夜 Lailatu'l-Qadr』と呼ばれる。第九七章第一—三節参照。(2) 回数徒は毎年此夜に翌年の一切萬事がアルラーハによつて前定せらるゝとなす。

されば蒼穹が顯然たる煙を生じて人々を蔽ひ去る日を待て。そは痛烈なる懲罰なり。 (其時彼等は言はん) 『主よ、此の懲罰を吾等より除け。げに吾等は信者なり』と云。されど其時に及んで彼等訓誡を受くるも何の益するところあらんや。曾て明白なる使者が彼等に来れる時云。彼等其背を彼に向けて言へるに非ずや『他より学べる者なり、憑かれたる者なり』と云。げに吾少しく懲罰を軽くしなば、汝等必ずまた(不信に)復らん云。われ絶大なる威力を以て彼等を猛襲する日に於て、吾は必ず彼等に報復せん云。

げに吾は彼等以前にファラオの民を試みたり。其時高貴なる使者彼等に来りて云。曰く『アルラーハの僕等を吾に返せ。げに吾は汝等への誠実なる使者なり』と云。また曰く『アルラーハに對して傲慢なる勿れ。吾は明白なる權威を以て汝等に来れり云。げに吾は汝等が石にて吾を撃たざるや。吾主即ち汝等の主に加護を求めたり云。汝等若し吾を信ぜずば吾より遠ざかれ』と云。かくてかれ其主を喚んで曰く『げに此等は罪惡の民なり』と云。(主曰く) 『夜陰に乗じてわが

僕等と共に旅立て。げに汝等は追跡せらるべし。されど心を安んじて海を渡れ。げに彼等は溺死する軍勢たるべし』と言。かくて彼等は如何に多くの果樹園と井泉と。穀圃と美邸と。之によつて歡樂を盡くせる佳きものとを、其後に遺せることぞ。 (彼等の末路は) 是くの如し。吾は他の民をして之を嗣がしめたり。而して天は彼等のために泣かず、地もまた泣かず、且如何なる猶豫をも與へられざりき。吾はイスラエルの民を羞づべき懲罰より救へり。吾は彼等をフアラオより救へり。げに彼は背逆にして暴戾なりき。吾はことさらに萬民を超えて彼等を選びたり。而して明白なる試練を含む諸の休徴を彼等に與へたり。

げに此等の者は言ふ。『吾等は唯だ一たび死ぬるのみ。吾等は決して甦らず。汝等の言眞実ならば、吾等の祖先を甦らしめよ』と言。彼等はトゥツバ¹の民並に彼等以前の民よりも優れるか。げに彼等は惡を作せるが故に吾は之を滅ぼせり。

(一) 南部アラビアのヒムヤール族。その國王をトゥツバ Tubba と呼べるが故にトゥツバの民と言はる。トゥツバは繼承者の意味。

吾は戯れに天地並に天地間の萬物を創れるに非ず。吾は眞理のために之を創れり。されど彼等多くは之を知らず。げに分離の日こそ彼等の総てに定められたる期限なれ。此日友人は其友のために一事を為し得ず、また彼等は佑助を受けざるべし。唯だアルラーハが慈悲を垂るる者を除く。げに彼は偉力者・大慈者なり。

げにザックーム樹こそ罪人の糧なれ。そは溶けたる銅の如く、また沸湯の沸る如く彼等の腹中に沸騰せん。而して是く言はれん。『彼を捕へて地獄の只中に投ぜよ。然る後に懲罰の沸湯をその頭上に注げ。味へ！げに汝は偉力者・高貴者なるかな。げに是こそ汝が常に疑ひ末れることなれ』と云。

(1) 傳承は此の一段がアブー・ジャハル Abu Jahi を対象とせるものなりとす。(2) 第三十七章第六二節、第五十六章第五二節参照。

げに其身を護る者は安泰なる居処に。花園と井泉との間に居らん。彼等は身に縋子と絹布とを纏ひ、相向ひて対坐せん。げに是くの如し。而して吾は大きく耀ける目をもてる処女を彼等に娶らしめん。彼等は其処にて安んじて各種の鮮果を求めん。彼等其中に住みて、初死の外にま

た死を味はず、主は地獄の苦惱より彼等を救はん矣。これ汝の主の恩恵なり、至上の幸福なり也。吾は彼等をして訓誡を受けしめんがために、この古蘭を汝の國語にて汝に讀誦し易からしめたり矣。されば待て。げに彼等も待ちつつあり矣。

第四十五 跪 坐 章

メッカ啓示

第二八節に『汝は一切の民の跪坐するを見ん』とあるに因みて跪坐章 *Al-Jasayah* と名づけらる。概ねメッカ中期の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ハー・ミームー この經典の啓示は偉力者・聰明者アルラーハより出づ^三 げに天地の間には信者への諸の休徴あり^三 而して汝等自身の創造並に彼が地上に散布せる一切の生類の中に、信心堅固なる民への諸の休徴あり^四 また晝夜の循環、アルラーハが天上より降して死地を甦らしむる雨、並に風位の変轉の中に、思慮ある民への諸の休徴あり^五 此等はアルラーハの諸の休徴にして、吾は真理によつて之を汝に誦出せり。然るにアルラーハ並にその諸の休徴を舍きて、彼等果して如何なる新説を信ぜんとするか^セ 禍なるかな一切の罪深き虚言者は！^セ 彼は己れに向つてアルラーハの啓示が讀誦せらるるを聞くも、宛も之を聞かざるが如く依然として驕慢なり。されば彼には痛

然なる懲罰を告知せよハ 而して僅にわが啓示の一端を知れば、彼に直ちに之を嘲笑す。此等の者には羞づべき懲罰あり九 彼等の前には地獄あり。彼等が為せることは毫も彼等を益するところなく、アルラーハを舍きて彼等が愛護者と扱べる者もまた然り。げに彼等には偉大なる懲罰あり二
こは嚮導なり。其主の休徴を信ぜざる者には痛苦の懲罰あり二

海洋を汝等に従はしめたるは彼なり。これその命令によつて船を海上に走らしめ、汝等をして彼の恩恵（による商利）を求めしめ、而して汝等を感謝せしめんがためなり三 彼はまた天地間の萬物を汝等に従はしむ。而して萬物は彼より出づ。げに此中には反省する民への種々なる休徴あり三 信ずる者に向つて、アルラーハの目¹を希はざる者を赦せと告げよ。これ彼が彼等の爲せることに応じて報償を行はんがためなり四 善事を行ふ者は己れを利し、悪事を行ふ者は己れを害す。然るに汝等は其主に歸らしめらる五

(一) 『アルラーハの目』とは不信者に対する戦闘を意味す。『戦闘』はアラビアにて常に『目』と呼ぶ。この一節は聖戦の義務を力説する後年の諸節によつて撤廃せられたるものと解釈せらる。

げに吾はイスラエルの兒等に經典と智慧と豫言とを降し、諸の佳きものを之に與へ、萬民に超え

て彼等を選びたり^六 吾は此事¹に関して明白なる命令を彼等に與へたり。而して知識既に彼等に至りて後、互に嫉視するまでは、異論を稱へて相争ふことなかりき。げに復活の日に当り、汝の主は彼等が相争へることについて彼等に審判を下すべし^モ いま吾は此事¹に関する大道を汝に委ぬ。されば此道を往け。知識なき者の私情に従ふ勿れ^六 げに彼等アルラーハに抗して何事をも汝に爲すこと能はず。不義を行ふ者は互に他の愛護者なれども、其身を護る者の愛護者はアルラーハなり^元 ²こは人々に対する明白なる教訓にして、信心堅固なる民への嚮導並に慈悲なり^三 悪事を行ふ者は、われかの信じて善事を行ふ者と彼等とを同一に遇し、其の生死を等しからしむると想ふか 惡きかな彼等の判断は！^三

(1) 『此事 Amt』とは宗教の本義と解すべし。(2) 古蘭を指す。

アルラーハは眞理によつて天地を創造せり。これ彼が各人に対して、其の爲せることに応じて報償を與へんがためなり。彼等は決して不当に遇せらるることなし^三 汝はかの己れの私欲を神とする者、アルラーハが故¹に之を迷はしめて、其の耳と心とを封じ、其目を覆ひたる者を見ざるか。アルラーハが棄てたる後、彼等を導く者は果して誰ぞ。汝等尙ほ反省するところなきか^三

彼等曰く『あるものは唯だ吾等の現世の生活のみ。吾等は生き且死す。吾等を滅ぼすものは唯だ時間あるのみ』と。されど彼等は之について如何なる知識もなし。彼等は唯だ臆測するのみ言。而してわが明瞭なる休徴が彼等に讀誦せらるる時、彼等の唯一の辯論は『汝等の言眞実ならば、吾等の祖先を甦らしめよ』と言ふにすぎず。言へ『アルラーハは生命を汝等に與へ、次で汝等を死なしめ、然る後に疑ふべからざる復活の日に汝等を召集せん。されど人々多く之を知らず』と。

天地の大権はアルラーハに属す。末日の来る時、之を空言なりとせる者は、此日に於て淪喪者とならん。而して汝は一切の民等しく跪坐し、一切の民等しく其の書冊の前に召集せらるるを見ん。(彼等に是く言はれん)『今日汝等は己れの為せることに対する報償を受く。わが此の書冊は眞実を汝等に語る。吾は総て汝等が爲せることを此中に記録せり』と云。されど信じて善事を行へる者は、主之に慈悲を垂る。これ明瞭なる幸福なり。而して不信者には是く言はれん『わが休徴が汝等に讀誦せられざりしか。然るに汝等傲慢にして遂に罪惡の民となれり。また汝等に向つて『アルラーハの約束は眞実なり、末日は疑ふべくもなし』と言はれし時、汝等は『吾等末日の何たるかを知らず、吾等は之について疑惑を抱くも確信を有せず』と言へり』と云。かくて彼等が爲せる諸惡歴然として彼等の前に現れ、曾てその嘲笑せることが彼等を圍繞すべし。而して彼等に

言はれん『汝等曾て此の汝等の日を忘れたる如く、今日吾は汝等を忘るべし。汝等の住処は火獄にして、汝等には如何なる佑助もなし』これ汝等がアルラーハの休徴を嘲笑し、現世の生活に欺かれたるが故なり。今日に及んでは、汝等此処より出づるを得ず、また主の好意を求むるを許さず』と云

さらば諸天の主、大地の主、三界の主アルラーハを讃へよ云 天地の莊嚴は彼に属す。げに彼は偉力者・聰明者なり云

第四十六 アハカーフ 章

メッカ啓示

第二一節に『アアドの同胞がアハカーフにて其民に警告せる時を念へ』とあるに因みてアハカーフ章 Al-Ahqaf と名づけらる。アハカーフはヤマンのスィール Sijil の地名にして砂丘の意味なり。H・M群の最終章にして、メッカ末期の啓示とすべし。但し第一〇節、第一五一―一八節、及び第三五節はメヂナ啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ハ・ミームー この經典の啓示は偉力者・聰明者アルラーハより出づニ 吾は眞理により且一定の期限を定めずしては天地並に天地間の萬物を創造せず。されど信ぜざる者は彼等に警告せられたることを忌避すニ 言へ『汝等は汝等がアルラーハを舍きて拜するものについて思へることあるか、彼等は大地の何ものを創れるか、彼等は諸天の創造に參與せるか。汝等の言眞実ならば、この古蘭以前に降されたる經典又はその知識の遺存するものを吾に示せ』と 復活の日までは決して彼の祈願に応へず、且彼等の祈願を顧みざる者を、アルラーハ以外に拜するより甚だしき迷誤ある

るか^五 萬民が召集せらるる時、彼等却つて彼等の敵となり、彼等に拜せられたることを否認せんか
わが明瞭なる啓示が彼等に讀誦せられ、眞理が彼等に至れる時、信ぜざる者は之について曰く
『こは明白なる魔術なり』と^モ また曰く『彼之を偽作せり』と。言へ『吾若し之を偽作せりとす
れば、汝等はわがために何ものをもアルラーハより得難かるべし¹。彼は最も善く汝等が之について
口にすることを知る。彼は吾と汝等との間の証人たるに足る。彼は宥恕者・大慈者なり』と^ハ 言
へ『吾は諸使者のうちの新しきものに非ず。また吾は如何なる事が吾に対し、また汝等に対して行
はるるかを知らず。吾は唯だ吾に默示せられたることに従ふのみ。而して吾は公然たる一警告者に
外ならず』と^九 言へ『汝等思へることあるか、若し古蘭がアルラーハより出でたるものなるも汝
等之を信ぜず、而してイスラエルの兒等のうちの一証人²が其の（律法との）一致を証言して之を信
ずるも、汝等依然として傲慢なりとすれば、（げに汝等是不義の民に非ざるか）。アルラーハは不
義の民を導かず』と^{一〇}

(1) アルラーハの如何なる恩寵をも得難きこと、即ち懲罰より免れしむること。(2) 回教に帰信して、マホメットはモ

ーゼが豫言せる使者なりと言へる猶太人アブダラーハ・イブン・サラーム Abdalah ibn Salam を指すとせらる。

信ぜざる者は信ずる者を指して曰く『若し此事が佳きことなりせば、彼等此事に於て吾等に先んずるの理なし』と。而して彼等は之によつて導かるるを欲せざるものなるが故に即ち曰く『こは往古の詭語なり』と二 されど古蘭以前にも嚮導にして且慈悲なるモーゼの經典あり。古蘭は實に之を實証するアラビア語の經典にして、惡事を行ふ者には警告を與へ、善事を行ふ者には吉報を傳ふるものなり三 げに『吾主はアルラーハなり』と稱へて邁往する者は、畏怖なく憂懼なからん三此等は樂園の党侶にして、長久に其中に住まん。これ彼等が為せることに対する報賞なり四

吾は父母に孝ならんことを人間に命ず。人の母は苦しんで懐胎し、苦しんで分娩し、彼を孕みてより離乳するまで實に三十閱月なり。既にして壯年に達し、次で四十歳に達すれば即ち言ふべし『主よ、吾を励まして、汝が吾並にわが父母に垂れたる恩寵を感謝せしめよ。汝を欣ばすために善事を吾に行はしめよ、わが子孫に於ても吾を多幸ならしめよ。げに吾は汝に懺悔し、汝に歸命する者なり』と五 此等の者はわれ彼等の行へる最大の善事を受納し、其の諸惡を看過すべし。彼等は樂園の党侶なり。これ彼等に約束せらるる眞實の約束なり六

然るにその父母に向つて是く言ふ者なり『嗤ふべきかな、汝等はわれ甦らしめられんと威嚇する

か。吾前に幾多の世代逝きてまた帰らざるに非ずや』と。その父母、佑助をアルラーハに祈りて曰く『禍なるかな汝は。信ぜよ、アルラーハの約束は眞実なり』と。彼曰く『そは古人の物語にすぎず』と¹。此等の者は彼等以前に逝れる幽鬼並に人間の諸の民に下されたる宣告に該当する者なり。げに彼等は淪喪者とならん²。各人にはその行へる事に依じて種々なる位階あり。これ彼が彼等の行へる事に依じて報償せんがためなり。而して彼等は決して不当に遇せらるることなし³。而して信ぜざる者が獄火に曝さるる時、(彼等に是く言はれん)『汝等は現世に於て諸の佳きものを蕩盡し、存分に之を享樂せり。されば今日汝等は、地上に於て妄りに傲慢且放埒なりしことのために、羞づべき刑罰を以て報いらる』⁴と云

(一)此の一節は、父母の言に聽かざりしアブー・バクルの子アブダラハマン Abdalrahman を対象とせるものとせらる。

アアドの一同胞¹がアハカーフに於て其民を警めたる時を念へ²。げに警告者は彼以前にも、また彼以後にも来れり。其時彼曰く『アルラーハの外に何者をも拜する勿れ。吾は汝等のために偉大なる日の懲罰を恐る』³と云。彼等曰く『汝は吾等を吾等の神々に背かしめんがために来れるか。汝の言眞実ならば、汝が吾等に威嚇することを示せ』⁴と云。彼曰く『その知識は唯だアルラーハのみ之を

有す。吾は唯だ遣はされたる使命を傳ふるのみ。されど吾は汝等が無智の民なることを知る』と三
而して黒雲の山谷に向つて流るるを見たる時、彼等曰く『こは吾等に雨を與ふる雲なり』と。彼曰
く『然らず、これ汝等が催促せるところのものにして、之に伴ふ暴風こそ痛烈なる懲罰なれ』と。そ
は其主の命令を奉じて一切を破壊し去らん』と。而して翌朝には彼等の住居以外また一物をも見る
を得ざりき。吾は是の如くにして作惡の民に報ゆ。げに吾は汝等に與へざりし力を彼等に與へ、
耳と目と心とを彼等に與へたり。されど彼等はアルラーハの休徴を認めざりしが故に、其の耳と目
と心とは、彼等のために何事をも為し得ざりき。而して彼等の嘲笑せることが彼等を圍繞したり云

(一) 豫言者ホード。第七章第五六節、第十一章第五〇節以下参照。

げに吾は汝等の周圍にある諸都府を滅ぼしたり。而して吾は彼等を懺悔せしめんがために反覆し
て諸の休徴を示したり云。アルラーハに近づくために彼等が彼以外に拜したる神々は、何故に彼等
を助けざりしか。否な、彼等は彼等を棄て去りたり。そは總てこれ彼等の虚言にして、唯だ彼等が
虚構せるものにすぎざりしが故なり云

われ古蘭を聽かんとする幽鬼の或者を汝に赴かしめたる時を念へ。彼等其の讀誦に侍坐するや、互に『謹聽!』と言へり。その終るや、即ち其民に歸りて警告を與へたり云 彼等曰く『吾等はモーゼの後に降されたる經典を聽聞せり。そは以前の經典を確証し、眞理と正道とに導くものなり。吾民よ、アルラーハの招呼者に応へて彼を信ぜよ。彼は汝等の諸惡を赦し、痛烈なる懲罰より汝等を救はん云 』アルラーハの招呼者に応へざる者は、地上に於てアルラーハの力を弱むることを得ず、また彼の外に如何なる愛護者もなかるべし。此等は明白なる迷誤の中にある者なり』と云¹

(1) マホメットが愛妻カディージャ及び伯父アブ・タリブを失ひて失意の極に達せる時、メッカを去りてタイフに傳道を試みしが、市民の激しき反抗に遭ひて歸途につき、ナクラ Nakla 山谷に一夜を明かしたり。而して夜半マホメットが起きてアララーに祈りつつありし時、幽鬼の一群來りて古蘭の誦誦を聽き、直ちに歸信せりと傳へらる。此の一段は明かに此事を述べたるものなれば、此事ありし開教第十年・西紀六二〇年以後の啓示なり。第七二章第一節以下参照。

天地を創造し、その創造によつて疲るることを知らざるアルラーハは、能く死者を甦らしむる力あり。彼等此事を知らざるか。然り、げに彼は萬事を能くす云 信ぜざる者が火獄に曝さるる時、(彼等は問はるべし)『こは現実に非ざるか』と。彼等は答へん『然り、神かけて』と。其時彼は言はん『然らば汝等の不信に対する懲罰を味へ』と云 されば古の諸使者が毅然として耐え忍べる

如く、汝もまた耐え忍べ。彼等の懲罰を催促する勿れ。彼等その約束せられしことを目睹する日、
彼等は墓中の滞留が一日の一刻にすぎざりし如く想はん。之を宣べよ。亡ぶ者は唯だ作悪者のみに
非ざるか^三

第四十七 マホメット章

メチナ啓示

第二節にマホメットの名が挙げられたるに因みてマホメット章 Muhammad と名づけらる。メチナ初期の啓示に属するも、第一八節はマホメットがメッカよりメチナに走れる途上、顧みて最後の一瞥を故都メッカに與へ、惜別の涙滂沱たりし時に降れるものとせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

信ぜず且人をアルラーハの道に背かしむる者、彼は彼等の所行を空無に帰せしめん^一 信じて善事を行ひ、主よりの真理なるマホメットへの啓示を信する者、彼は彼等の諸惡を拂拭し、其心を正しくせん^二。これ信ぜざる者は虚妄に従ひ、信する者は其主よりの真理に従ふが故なり。是くの如くアルラーハは人々のために彼等の慣例を表明す^三。

汝等不信者と会戦する時は、彼等の頭を斬りて之を塵殺せよ、而して俘虜の縲洩いましめを強固にせよ、而して戦争が其の重荷を下ろせる後、或は之を釋放し、或は之を贖はしめよ。必ず是くすべし。ア

ルラーハ若し欲しなば、彼は親ら彼等に報復し得べし。されど彼は汝等の一部を以て他を試みんとするなり。而してアルラーハの道に殺さるる者は、決して其の所行を空しくせらるることなし¹。彼は彼等を導き、其心を正しくし²。彼が既に彼等に告げたる樂園パラダイスに彼等を入らしむべし³。汝等信者よ、汝等若しアルラーハを助けなば、彼また汝等を助けて其の歩武を堅確ならしめん⁴。

(1) 一本に Kutila の代りに Katila とあり。然る時は『アルラーハの道に戦ふ者は』となる。(2) 或は『その境遇を改善し』と解釈せらる。

されど信ぜざる者には唯だ滅亡あるのみ。而して彼は彼等の所行を空無に帰せしめん⁵。そは彼等がアルラーハの降せるものを厭惡せるが故なり。彼は彼等の所行を無効ならしめん⁶。彼等は地上を遊歴して、彼等以前の者の末路が如何なるものなりしかを見ざりしか。アルラーハは彼等を掃蕩し去れり。而して不信者には之と同様のことあらん⁷。そはアルラーハは信者の愛護者にして、不信者には如何なる愛護者もなきが故なり⁸。

げにアルラーハは、信じて善事を行ふ者を、河川流るる樂園に入らしめん。而して信ぜざる者は、現世の生活を樂しましめ、獸の食ふが如く食はしめ、然る後に火獄を彼等の住居となさん⁹。

汝を逐へる都市よりも、更に強大なりし都市を、如何に多く吾は滅ぼせることぞ。而して彼等には如何なる佑助者もなかりき。其主よりの明瞭なる証據に頼る者と、己れの悪事を善しと思ひて、其の私欲に従ふ者とは、之を一律に視るべきか。

其身を護る者に約束せらるる樂園の光景を述べん。其中に濁らざる清水の河あり、味変らざる乳の河あり、飲む者に快き酒の河あり、清澄なる蜜の河あり。彼等其処にて各種の鮮果と其主の宥恕とを賜はらん。彼等はかの永劫に火獄の中に住み、其腸を断つ沸湯を飲ましめらるる者と一律なるべきか。

彼等のうちには汝に耳傾くる者あるも、汝の面前を去れば知識を興へられたる人々に向つて『彼がいま言へるは何事ぞ』と言ふ者あり。此等はアルラーハが其心を封じたる者にして、唯だ己れの私欲に従ふものなり。されど正しく導かるる者は、彼之を更に善導し、彼等をして能く其身を護らしめん。不信者は突如として襲ふ末日の外に、また何ものを待ち得るか。その前兆は既に現れたり。その彼等に臨むに及んでは、訓誡を受けんとするも既に遅し。さればアルラーハの外に神なきを知り、汝の罪並に男女の信者の罪の宥恕を求めよ。アルラーハは汝等の活動の場処を知り、また安息の場処を知る。

(一) 註釈家のうちには『活動の場処 Mutaqallab』を『帰還の場処』と解し、メッカに帰ることを意味すとする者あり。されど予は『安息の場処』即ち来世に対して、現世を指せるものと解せり。

信ずる者曰く『唯だ一章^{スーラ}さへ降されなば』と。されど明瞭なる一章降され、言征戦に及ぶものあれば、その心中に病ある者は、死を怖れて昏倒する者の如き^{まなざし}眸を以て汝を一顧す。禍なるかな彼等は！望ましきは服従と善言となり。而して事一たび決しなば、アルラーハに忠誠なることこそ彼等のために最善なれ。汝等若し背き去るとすれば、汝等は地上に悪を行ひ、血縁を断たんとする者なるか。アルラーハが之を呪咀し、其耳を聾せしめ、其目を盲せしむるは、実に此等の者なり。彼等は古蘭を学ばんとせざるか。彼等の心は鍵かけられたるか。げに嚮導既に明示せられたる後に退轉する者は、サタン必ず之を誘惑すべきも、主は暫く彼等を放任せん。そは彼等が、アルラーハの降せるものを悪む者に向つて、密かに『吾等は事業の一部に於て汝等に從はん』と言ふが故なり。されどアルラーハは彼等の密語を知る。さらば諸天使来りて彼等の面^{おもて}を打ち、また其背^{そむ}を打ちて、彼等の魂を取去る時、彼等果して如何なるべきぞ。これ彼等がアルラーハの怒ることに従ひ、その欣ぶものを厭へるが故なり。されば彼は彼等の所行を空無に歸せしむ。

(1) 不信者に対して戦へと命ずる啓示あらば、欣んで出征せんとの意味。(2) 此の「彼等」はメヂナの猶太人を指し、啓示を惡む者とは偽信者る指せるものとすべし。猶太人が彼等を誘惑し、彼等をして出征せしめず、相結んでマホメットに抗せんとすることを言へるなり。

其心に病ある者は、アルラーハが彼等の怨恨を暴露せずとするかえ 吾若し欲しなば、われ之を汝に指示し、汝は彼等の形跡によつて之を知り得べし。而して汝は彼等の曖昧なる言語によつて必ず之を識別せん。アルラーハは汝等の為すことを知る言 吾は汝等のうち能く善戦する者並に堅忍なる者を知るまで汝等を試みん。而して吾は汝等の行狀記を査閲せん げに信ぜずして、人をアルラーハの道に背かしめ、嚮導既に明示せられたる後に使者に抗する者は、決してアルラーハを害するに非ず、唯だ己れの所行を空無ならしむるのみ三

(1) マホメットに対して密かに胸中に抱く怨恨を意味す。

汝等信者よ、アルラーハに従ひ、使者に従へ。汝等の所行を空無に帰せしむる勿れ げに信ぜずして人をアルラーハの道に背かしめ、而して不信者として死ぬる者は、アルラーハ断じて之を赦さざるべし言 意気阻喪する勿れ、汝等優勢なる時に和平を唱ふる勿れ。アルラーハは汝等と偕に

あり。彼は決して汝等の所行について汝等を欺かざるべし言

現世の生活は遊戯にして娛樂なり。汝等若し信じて其身を護らば、彼は必ず汝等に報いん。彼は汝等にその財産の全部を求めず言 彼若し之を求めて強要しなば、汝等即ち吝嗇となり、また汝等の怨恨を惹起するに至らん言 げに汝等は僅にその財産の一部をアルラーハの道に費すことを求めらるるにすぎず。汝等のうちには吝嗇なる者あり。されど吝嗇は唯だ己れの魂を害するのみ。アルラーハは富み、汝等は貧し。而して設ひ汝等が背き去るとも、彼は他の民を以て汝等に代へん。彼等は決して汝等の如き者に非ざるべし言

第四十八 勝利章

メヂナ啓示

本章に於て屢々繰返さるる『勝利』の語に因みて勝利章 *Al-Fath*』と名づけらる。而して勝利とは遷都六年のホダイイビヤ
休戦條約訂結を指す。この條約訂結の経緯は下の如し。

遷都六年^{ヅールカダ}十一月、マホメットはメッカ^{ウムラ}参殿のため、約千五百の信者を率ゐてメヂナを出立せり。彼は参殿以外に他意なきを
示すため、参詣者に許されたる一劍の外、堅く其他の武器携帯を禁じたり。されどメッカ市民は彼を信ぜず、近隣の同盟諸部族
を糾合して、武力を以て彼の入市を阻むに決し、カーリド・イブン・アルワリド *Khalid ibn al-Valid* 二百の騎兵を率ゐて先
発せり。此事を知るやマホメットは、大道を右折して路を險難なる峡谷の間に求め、カーリドの騎兵を避けてメッカ郊外ホダイ
ビヤに達し、一と先づ幕營を此処に張れり。彼は飽迄も戦闘を避け、平和の間に事を決せんとし、メッカ市内に多くの有力な
る親戚を有するウスマーン、*Usman ibn 'Affan* を派して交渉の任に当らしめしが、ウスマーンの帰來遅れたるに加へて、彼が
メッカ市民のために殺されたりとの風聞傳はりしかば、マホメットは遂に一戦を覚悟し、アカシアの大樹の下に信者を集め、彼
と生死を共にすべきことを誓はしめたり。本章第一八節に『信者等が樹下に忠誠を汝に誓へる時』とあるは即ち此事なり。され
どウスマーンの死は誤聞にして、幾度か交渉の末、遂に十年間の休戦條約を結び、総てのアラビア部族が自由にマホメットと條
約を結び得ること、改宗者は自由にメッカを去りてマホメットに投じ得ることを承認し、且翌年の参詣期にはメッカ市民が三日

間悉く市外に撤退してマホメットの参詣を行はしむることを承諾せり。固よりメッカ市民は尙未だ彼の豫言者たることを承認せるに非ず、彼は唯だアブダラーの子として参詣を許されたるにすぎずといへども、此の休戦條約はメッカ市民が遂に彼に対する抗戦力を失へることを白状せせるものにして、実に戦はずして收めたる偉大なる勝利なり。而も信者のうちには、此の重大なる意義を認めず、聖殿参拜のために長途南下して、空しく北帰するを不平とするものあり。本章冒頭の啓示は、ホダーイビーヤの天幕を疊みて帰途につける途上に降り、マホメットが駱駝の背上より之を復誦せるものとせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

げに吾は顯著なる勝利を汝に與へたり—これアルラーハが既往並に当来の汝の罪を宥恕し、汝への恩寵を完うし、汝を直き道に導かんがためなりニ 而してアルラーハが偉大なる佑助を以て汝を佑助せんがためなりニ

信心の上に信心を長養せしめんがために、信者の胸中に^{サキナ}安^ナ靜を降せる者は彼なり。天地の萬軍はアルラーハに属す。アルラーハは能知者・聰明者なり^四 此れ彼が信ずる男子並に信ずる女子を、河川流るる樂園に入りて長久に其中に住ましめんがため、また彼等の諸惡を消滅せしめんがためなり。そはアルラーハの目には至高の幸福なり^五 此れ彼が偽信の男子並に偽信の女子、多神を拜する男子並に多神を拜する女子を膺懲せんがためなり。 彼等は妄りにアルラーハに対して臆測を加

ふ。彼等は必ず悲運に陥るべく、アルラーハは彼等を怒り且呪ひて、彼等のために地獄を準備す。そは禍なる行先なり。天地の萬軍はアルラーハに属す。アルラーハは偉力者・聰明者なり。

げに吾は証人として、吉報傳達者として、また警告者として汝を遣はしたり。これ汝等をして、アルラーハ並に其の使者を信じ、彼を輔け、彼を敬ひ、朝な夕な彼を讚へしめんがためなり。げに汝に忠誠を誓ふ者は、即ちアルラーハに忠誠を誓ふ者なり。アルラーハの手は彼等の手の上に在り。されば誓約を破る者は、その破約によつて唯だ己れの魂を害ふのみ。而してアルラーハとの約束を守る者は、かれ之に偉大なる報賞を與へん。

落後せる沙漠のアラビア人等は汝に向つて言はん『吾等は吾等の家産と家人とのために忙殺せられたり。されば吾等のために宥恕を乞へ』と。彼等は其舌を以て其心になきことを語る。言へ『アルラーハ若し汝等に禍し、又は汝等に福せんと欲しなば、誰か汝等のためにアルラーハの一事をも左右し得るものぞ』と。否な、アルラーハは汝等の為すことを知る。否な、汝等は使者並に信者等が、決して再び其家に歸らざるべしと考へ、心に之を欣べるなり。汝等は邪念を抱けるなり。汝

等は不良の民なり三 アルラーハ並にその使者を信ぜざる者、げに吾は是くの如き不信者のために
烈火を準備せり三 天地の大権はアルラーハに属す。彼は己れの欲する者を赦し、欲する者を罰
す。アルラーハは宥恕者・大慈者なり四

(1) 参殿に加はらんことを求められて応ぜざりしバダイキ人を指す。彼等は此の参殿の危険を想ひ、且戦利品を獲べき希望なかりしを以て辭を設けて落後せるなり。(2) メッカとの衝突を豫想し、敵は優勢なる故、若し戦闘行はれたば信者等は生還せざるべしと考へたるなり。(3) 『其心に之を善しと思はしめられたり』と直訳すべし。是く思はしめたるはサタンなり。

汝等が往きて戦利品を收めんとする時、落後せる者は言はん『吾等をも汝等に從はしめよ』と。
彼等はアルラーハの言を変へんとする者なり²。言へ『汝等断じて吾等に從ふべからず。アルラーハは先に是く定めたり』と。然るに彼等曰く『汝等は吾等を嫉む』と。断じて然らず。彼等は殆ど理解せざる民なり五

(1) マホメットのホダイイピーヤより歸るや、直ちに猶太人の富裕なる邑落カーイバル Khaibar を攻めて之を征服し、悉くその土地と財産とを没收せり。往きて戦利品を收むとは即ちカーイバルに赴くことなり。(2) 戦利品はホダイイピーヤ行進に加はれる者のみ分配せらるべしと定められたるなり。落後者の要求はこの神意を変へんとするなり。

落後せる沙漠のアラビア人に告げよ『汝等やがて強大なる勇武の民と戦ふために召集せられん。汝等は彼等がイスラームを奉ずるに至るまで彼等と戦はざるべからず。汝等若し命に従はば、アルラーハは善賞を汝等に賜はらん。若し以前の如くまた命に背かば、彼は痛烈なる懲罰を以て汝等を膺懲せん』と云

(一) 強大なる民とは偽豫言者ムサーイリマ Musailima を指せりと言ひ、又は羅馬人若くは波斯人を指せりとも言ふ。

失明者は罪なく、跛者も罪なく、病者も罪なし¹。アルラーハ並に其の使者の命に従ふ者は、彼之を河川流るる樂園に入らしめん。命に背く者は、かれ痛烈なる懲罰を以て彼等を膺懲せん²。

(一) 落後家居するも罪なきを言ふ。出征の免除なり。

げに信者等が樹下に忠誠を汝に誓へる時¹、アルラーハは大いに之を欣べり。彼は彼等の胸中に懐けることを知りて、彼等の上に安靜を降し、且手近き勝利を以て之に報いたり²。而して彼等は夥しき戦利品を獲たり。アルラーハは偉力者・聰明者なり³。アルラーハは汝等が獲べき夥しき戦利品を汝等に約束し、汝等のために急ぎて之を賜ひ、且汝等に敵する者の手を抑制せり³。そは此事を以て信者への休徴たらしめ、且汝等を直き道に導かんがためなり³。其他の戦利品にして、汝等の

力尙未だ及ばざるものは、アルラーハ之を汝等のために圍繞す。アルラーハは萬事を能くす三

(1) ホダーイビーヤ山谷の一樹下の誓。(2) 手近き細利とはカーイバル征服を指す。(3) 『手を抑制す』とは干戈を收むること。此処にては休戦條約によつてメッカとの衝突を避け得たることを意味すとすべし。

また設ひ不信者が汝等と戦へりとするも、彼等は必ず敗北したりしなり。而して此後彼等には如何なる愛護者も佑助者もなかるべし三 此れ既往に行はれしアルラーハの慣例なり。汝はアルラーハの慣例に如何なる変更もなきことを知らん三 又メッカの山谷¹に於て汝等を彼等に勝たしめたる後、汝等のために彼等の手を制止し、彼等のために汝等の手を制止せる者は彼なり。アルラーハは汝等が為せることを照覽す四 彼等は不信者にして汝等の聖殿参拜を阻み、供物がその定められたる場処に達することを妨げたる者なり²。若し汝等が未知なる男女の信者を蹂躪して、そのために識らずして罪を犯す惧れなかりせば、アルラーハは決して汝等の手を抑止せざりしなり。これアルラーハが己れの欲する者に慈悲を垂れんがためなり。若し兩者が明かに分離し居たりせば、吾必ず痛烈なる懲罰を以て不信者等を懲罰したりしなり五 而して其時不信者等は胸中に怒気を宿せり。そは無智の怒気なり。されどアルラーハは、その使者並に信者等に安靜を降し、彼等をして敬畏の

言を堅持せしめたり。これ彼等が能く之に値し、また之に適へるが故なり。アルラーハは萬事を
知る云

(1)メッカの山谷は即ちホダーイビーヤ。(2)マホメット並に信者等の参殿を阻み、ミナーにて献祭することを阻める
を言ふ。(3)武力にてメッカを征服する場合は、未知の信者も殺戮に遭ふべき惧れあるを言ふ。(4)信者と不信者の両
者。(5)其時とは休戦條約の明文を起草せる時を言ふ。マホメットはアリーに口授して、條約の前文に『大悲者・大慈者
アルラーハの名によりて』と書かしめしが、メッカ代表スハイル Suhail ibn 'Amr は激しく之に反対し、またマホメ
ットが『アルラーハの使者』と称ふことを拒み、遂にマホメットを讓歩せしめたり。其時信者は甚だしく憤慨せしが、マホメ
ットは之を制止したり。(6)『大悲者・大慈者』を省きたれど、『アルラーハの名によりて』と前文を附せることを指す。

げにアルラーハは其の使者のために彼の夢を實証したり。夢に曰く『アルラーハ若し欲しなば、
汝等剃髮し又は断髮して安全に聖殿に入るを得ん。汝等決して恐るべからず、彼は汝等の知らざる
ことを知る。此事の外に彼は汝等のために手近き勝利をも定めたり』と云¹

(1)此夢によつてマホメットはメッカ参殿を企てたりと傳へらる。而して此夢は翌年の参詣と、カーイバル征服とによつ
て實現せられたり。

嚮導並に眞実の教を興へてその使者を遣はし、之を一切諸教の上に置かんとする者はアルラーハなり。アルラーハは証人たるに足るニ。マホメットはアルラーハの使者なり。彼と偕にある者は、不信者に対しては剛毅に、信者の間にありては仁慈なり。汝は彼等が鞠躬し叩首して、アルラーハの恩寵と善意とを求むるを見ん。彼等の面上には叩首の痕あり。これ実に（モーゼの）律法に見る信者の姿にして、また（イエスの）福音に見る信者の姿なり。譬ふれば彼等は種子が其苞を出でて成長し、穂となり茎となりて種植者を欣ばしむるが如し。不信者は彼等を見て憤らん。されどアルラーハは、信じて善事を行ふ者ニ、宥恕と重賞とを約束せり云

第四十九 内房章

メヂナ啓示

第四節に『内房』の語あるに因みて内房章 *Al-Hujurat* と名づけらる。蓋し遷都八年マホメットがメッカを征服してより、勢威頓にアラビア半島に普く、沙漠の諸部族、四方より使節をメヂナに派し、マホメットの宗教的並に政治的権威を承認するに至りしを以て、遷都九年は『使節の年』と呼ばれたり。然るに此等の使節の或者は、全く礼に嫻たはざる沙漠の兒なりしを以て、例へば俘虜引渡の交渉のためにメヂナに来れるタミーム *Tamim* 族の代表者等の如きは、マホメットが内房にて正午の午睡を取り居りし時、大声を擧げて室外より『マホメットよ、出でて吾等と会へ』と呼ぶ有様なりき。第四節に『汝が内房に居る時、高声にて汝を喚ぶ者』とあるは即ち彼等を指せるものとせらる。全章概ね礼儀作法に関する啓示にして、遷都九年以後の啓示とすべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝等信者よ、汝等何事に於てもアルラーハ並に其の使者に先んずる勿れ¹。アルラーハを敬へ。げにアルラーハは能聞者・能知者なり。汝等信者よ、汝等の声を豫言者の声よりも高くする勿れ。汝等互に声を高くして物言ふ如く声を高くして彼に物言ふ勿れ。これ汝等の所行が、汝等の知らざ

る間に空無に歸せざらんがためなり^二 げにアルラーハの使者の前にて其声を低くする者は、アルラーハが其心の敬虔なるを試証せる者なり。彼等は宥恕と重賞とを獲べし^三 げに汝が内房に居る時、高声にて汝を喚ぶ者は、概ね思慮なき者なり^四 汝が出でて彼等に來るまで待つこそ、彼等のために最も善きことなれ。されどアルラーハは宥恕者・大慈者なり^五

(一) 『先んずる勿れ』とは一切の事をアルラーハ並に其の使者の判断を待たずして行ふ勿れの意味。

汝等信者よ、若し悪人が或る消息を汝等に齎せる時は、慎重に之を検討せよ¹。そは汝等無智のため或民を害し、翌日その為せることを後悔せざらんがためなり^五 而して汝等の間にアルラーハの使者あることを忘るる勿れ。彼若し多くの事柄に於て汝等に從はば、汝等は罪を犯すことならん²。アルラーハは汝等をして信仰を愛せしめ、之を汝等の胸に飾り、汝等をして不信と醜行と背逆とを惡ましむ。此等は正しく導かるる者なり^七 これアルラーハの慈悲並に恩寵なり。アルラーハは能知者・聰明者なり^八

(一) 此の啓示は下の事實に關聯せるものとせらる。アルワリード・イブン・ウクバー Al Walid ibn Ukkba が、捐課徴收のためにムスタリク族に派遣せられし時、彼等の多数が彼に会はんと馳せ來るを見、彼は曾て彼等と干戈を交へたることあり

しを以て、必定捐課納付を拒まんとするものならんと推測し、歸りて此事を報告せり。よつてマホメットはカーリドをして兵を率ゐて之を討たしめんとせしが、カーリドは現地に到りて其の事実無根なりしを知り得たり。(2) 罪を犯すとはマホメットを誤るが故なり。

若し信者の両党互に相争はば、彼等の間に立つて調停せよ。若し兩者の一が他を侵犯せる場合は、侵犯者がアルラーハの命令に復歸するまで彼等と戦へ。彼等若し復歸しなば、公平に彼等を調停し、正しく行へ。げにアルラーハは義しく行ふ者を欣ぶ。信者は兄弟なり。されば汝等慈悲に浴せんがためには、兄弟相和してアルラーハを敬へ。

(1) 両党とはメヂナに於て多年に亘りて抗争し來れるアウス・カズラジ兩族を指す。

汝等信者よ、男子は男子を嘲る勿れ。そは彼等が己れよりも優れることあるべきが故なり。女子は女子を嘲る勿れ。そは彼女等が己れよりも優れることあるべきが故なり。互に誹謗する勿れ。互に惡名を以て呼ぶ勿れ。歸信後の惡名は惡むべし。之を懺悔せざる者は不義者なり。

(1) 此の啓示はマホメットの妻サファイヤ *Safiya bint Huyayn*。他の諸妻のために猶太女と罵れたることを訴へたる時に降れるものとせらる。其時マホメットは彼女に向つて「汝は何故に言はざるか、吾父はアロン、吾兄はモーゼ、吾夫はマ

ホメットと』と告げたりと言はる。

汝等信者よ、心して猜疑を去れ。げに若干の猜疑は罪惡なり。他の過を探る勿れ、互に讒誣する勿れ。汝等のうちに好んで死せる兄弟の肉を啖ふ者あるか、汝等必ず之を嫌忌せん。アルラーハを敬へ、アルラーハは允懺悔者・大慈者なり三

人々よ、げに吾は汝等を男女に創り、之を民族と部族とに分ちたり。これ汝等をして互に相識らしめんがためなり。げに汝等のうち最も高貴なる者は、アルラーハの目には最もアルラーハを敬ふ者なり。げにアルラーハは能知者・悉知者なり三

沙漠のアラビア人曰く『吾等は信ず』と。言へ『汝等は未だ信ぜず。されば唯だ、吾は服従す』と言へ。そは信仰未だ汝等の胸中に入らざるが故なり。されど汝等若し眞にアルラーハ並に其の使者を信するに至らば、彼は汝等の所行に報ゆるに吝ならざるべし。アルラーハは宥恕者・大慈者なり』と云

信者とはアルラーハ並に其の使者を信じ、後に至りても之を疑はず、その財産と生命とを献げてアルラーハの道に善戦する者を謂ふ。此等こそ誠実者なれ三

言へ『汝等は己れの教をアルラーハに教へんとするか。アルラーハは天地間の一切を知り、且アルラーハは萬事を熟知するに非ざるか』と云

(一) 『吾は眞の信者なりと報告してアルラーハを欺かんとするか』の意味に解すべし。

彼等は己れが歸命者ムスリムとなれることを以て、恩恵を汝に施したるが如く思惟す。言へ『汝等の歸依を以て吾への恩恵となす勿れ。汝等若し誠実者ならば、汝等を信仰に導けるアルラーハこそ、恩恵を汝等に垂れたる者なれ』とモ、げにアルラーハは天地の秘奥を知る。アルラーハは汝等の為すことを照覽す云

第五十 カーフ 章

メッカ啓

冒頭の文字Qに因みてカーフ章と名づけらる。メッカ中期の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

カーフ。光栄の古蘭によつて誓ふ¹。然らず、彼等は己れの間より一警告者が現れ来りしことを驚異す。信ぜざる者は曰く『こは奇怪なることかな²。吾等死して塵となれる後にとや²。そは遼遠なる復歸なり³』と³。吾は大地が彼等より耗らし去るものを知る⁴。吾には之を記録する書冊あり⁴。然らず、彼等は眞理が彼等に来れる時、之を虚偽なりとせるが故に、いま困惑の状態にあるなり⁵。

(1) マホメットがアルラーハの使者なることを誓ふなり。(2) 死後また生命ある者に復歸するかの意味。(3) 復歸するとしても想像も及ばぬ遼遠の未来ならんとの意味。(4) 『彼等』とは墓中に葬られたる死者を言ふ。耗らし去るとは、五体の筋肉が次第に消失するを言ふ。(5) 困惑とは天啓を以て或は魔術、或は詩、或は偽作などと取汰汰して取捨に迷ふこと

彼等仰いて天を見、われ如何にして之を創り、如何にして之を飾れるかを思はざるか。また其の些も空隙なきを見ざるか。吾は大地を展開し、堅固なる群山を其上に置き、各種の美しき草木を成長せしめたり。そは一切の懺悔する者への考察の対象並に訓誡なり。吾は祝福せられたる水を天より降し、之によつて果樹園と收穫多き穀類とを生育す。幹高き棗椰子樹の累々たる果実は、わが僕等の糧餉なり。吾は之によつて死地を甦らしむ。死者の復活もまた是くの如し。彼等以前にノアの民、ラス及びサムードの民、アアドの民、ファラオ、ロトの同胞、森林の民及びトツバアの民も、悉く、使者を虚言者と呼べり。さればこそわが威嚇が当然実現せられたるなれ。吾は最初の創造を以て疲れたるとするか。然らず、されど彼等は新しき創造について疑心を抱く。吾

(1) 第二十五章第三八節参照。(2) 第二章第七八節参照。(3) 第四章第三七節参照。(4) 新しき創造即ち復活。

げに吾は人間を創れり。吾は彼の魂が彼に囁くことを知る。吾は彼の頸脉よりも彼に近し。兩¹ 接受者が彼の左右に坐して彼を接受する時を念へ。彼未だ一語を発せざるに、其側に既に準備を整へたる一監視者あり。やがて死の苦悶眞実に来る。(其時彼に言はれん) 『これ汝が避けんと欲せるものなり』と云。やがて喇叭吹かれん。これ豫て彼等に威嚇せられたる日なり。而して各

人皆な一驅逐者及び一証人と共に来る² (其時彼に言はれん) 『げに汝は此事を意に介せざりき。されど吾いま汝の被幕を掲げたれば、今日汝の目は鋭し』と³ 而して彼の同伴者は言はん『これわが汝のために準備せるものなり』と³ (其時主は言はん) 『一切の頑冥なる忘恩者⁴ 善を阻める者 掟を破れる者、疑心を抱ける者⁵ 並にアルラーハ以外の者を拜せる者をば、汝等⁴ 兩者にて地獄に投ぜよ 之を投じて嚴罰を加へよ』と⁵ 其時彼の同伴者は言はん『主よ、われ彼を誘惑せるに非ず、彼自ら迷へるなり』と⁵ 主は言はん『吾前に爭論する勿れ。吾は豫て汝等を警告せり⁶ 吾言は變ふべからず、而して吾はわが僕等に対して決して不公平なるものに非ず』と⁶ 其日吾は地獄に問はん『既に充滿せるか』と。地獄は答へん『尙ほ来る者あるか』と⁶

(1) 人間の臨終に際して其魂を接受する二天使。(2) 驅逐者も証人も共に天使。(3) 『準備を整へたる一監視者』即ち行狀記に善惡を記録せる天使。(4) 驅逐者・証人の二天使。(5) 此の同伴者とは彼の首に繋がれたるサタンを指す。

樂園は其身を護れる者の近くに齎らさる。そは彼等に遠からず⁷ (彼等に言はれん) 『こは汝等に約束せられたるものなり。そは不斷にアルラーハを念じ、その掟を守り⁸ 密かに大悲者を敬ひ 懺悔の心を抱く者のためなり』と⁸ 安んじて之に入れ 今日⁹は永生不死の日なり』と⁹ 彼等其

処にて己れの欲するものを獲べく、吾は彼等への恩恵を加増せん^三

われ彼等以前に、彼等よりも強大なりし如何に多くの世代を亡ぼせしことぞ。地上を遊歴せよ。

彼等一避難処だも有したりしか^三 げに此中には心ある者、耳傾くる者、而して親しく之を目睹せる者への訓誡あり^三

げに吾は六日の間に天地並に天地間の萬物を創造せり。而して吾は未だ曾て疲労に襲はれず^一

(一) 神は疲労を知らざるが故に安息を要せず。これ基督教徒並猶太人が、神は六日にして天地を創造し、第七日に休養せりといふ信仰を否定して言へるなり。

彼等の言ふことを忍べ。日出づる前と日沈む前に汝の主を讃へよ^三 而して夜間にも、定められたる禮拜の後に彼を讃へよ^四

喚呼者が近^一き処より喚ぶ日に其耳を側てよ^二 其日彼等は眞実に一声の響くを聞かん。これ復活の日なり^三 げに吾は生を與へ死を致す。而して萬物は吾に帰る^三 其日大地突如として彼等の前に裂け、彼等倉皇として(墓より)出で来らん。これ吾にとりて易々たる召集なり^四

(一) 萬人の聴き得る場処。回教徒は之をエルサレムの禮拜堂なりとす。

吾は彼等の言ふことを知る。汝は彼等を強要すべからず。汝は唯だわが威嚇を恐るる者を古蘭にて教化せよ聖

第五十一 散布者章

メッカ啓示

第一節に「散布者」とあるに因みて散布者章 *Al-Nariyat* と名づけらる。メッカ初期の啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

散布する散布者によつて一 重荷を負へる者によつて二 疾駆する者によつて三 事を分つ者によつて誓ふ¹四 げに汝等に警告せらるることは眞実なり^五 げに審判は必ず行はれん^六

(一) 第一―四節は塵を散布する風・雨を孕む雲・海上を走る船・神命によつて生類に必要な事物を分布する天使によつて誓ふと解釈せらる。但し叙上四者は悉く風を意味するものとも解すべく、然る場合は「塵を散布し、雨を負ひ、疾く走り、雨を分布する風によつて誓ふ」とすべし。

幾多の軌道ある天によつて誓ふ也 げに汝等の言ふところは区々なり¹ 之に背き去る者は背き去らしめらるる者なり² 虚言者は呪はれよ³ 彼等は洪水の中にありて之を意に介せず^二 彼等曰

く『審利の日は何時ぞ』と三 其日は彼等が火獄に於て試練を受くる日なり三 (彼等に是く言はれん) 『汝等の試練を味へ。これ汝等が催促せるものなり』と四

(1) 古蘭又はマホメットについて不信者の意見区々なること。(2) 古蘭又はマホメットに背く者は、神意によつて背かしめらるる者なりとの意味。(3) 無智の洪水。

げに其身を護る者は、花園と井泉との間に住み三 其主の賜ふものを獲ん。げに彼等は以前に善事を行へる者なり三 彼等は夜も殆ど眠らぬ三 拂曉に宥恕を求む三 彼等の富は乞ひ求むる者並に敢て乞はざる者に適宜に頒たれたり三

地上には信心堅固なる者への諸の休徴あり三 汝等自身の中にもまた然り。汝等之を見ざるか三 而して天上には汝等の糧餉、並に汝等に約束せられたるものあり三 天地の主によつて誓ふ、げにそは眞実なり。汝等己れの言を疑はざる如く眞実なり三

(1) 来世の報償、即ち天上の楽園。

汝はアブラハムの賓客の物語を聞かざりしか言 彼等アブラハムに來りて『平安』と言へる時、彼は心に未知の人々と思ひながらも、また『平安』と応へたり言 彼退きて其の家人に至り、肥え

たる一頭の犢を携へ来り云 之を彼等の前に置きて『汝等食はざるか』と言へり云 其時彼は彼等
に對して畏怖の念を抱けり。されど彼等は『怖るる勿れ』と告げて、聰明なる一童子を彼に與へん
との吉報を傳へたり云 アブラハムの妻之を聞き、疾呼して進み出で、自ら其面おもてを打ちて曰く『吾
は不妊の老婆なり』と云 彼等曰く『汝の主、是く告げたり。彼は能知者・聰明者なり』言 アブ
ラハム曰く『汝等の用件は何ぞ、使者等よ』云 彼等曰く『げに吾等は罪惡の民に遣はされたる者
なり云 是は泥石の雨を彼等に降さんがためにして云 其石には背逆者の名が汝の主によつて表記
せられたり』と言 而して其時吾は市内の信者を脱出せしめたり云 されどアブラハムに歸命せる
は、市内に於て唯だ一家ありしにすぎざり云 吾は此中に痛刑を恐るる者への休徴を遺したり云
モーゼにも（一休徴あり）。其時われ明白なる權威を與へて彼をファラオに遣はせり云 然るに
かれその勢威を恃んで之に背き、モーゼを呼びて魔術者又は狂者と言へり云 さればわれ彼並にそ
の軍勢を捕へて之を海中に投じたり。これ彼が譴責せらるべき者なりしが故なり云

アアドにも亦然り。其時吾は暴風を彼等に驅れり云 而して風の吹き捲くところ、一物として
微塵に歸せざるはなかり云 サムードにも亦然り。其時彼等は『暫く生を楽しめ』と告げられた
り云 されど彼等其主の命に背きしかば、彼等の目前にて轟音彼等を襲ひたり云 而して彼等また

起つことを得ず、また其身を救ふことを得ざりき^五 而して往昔のノアの民にも亦然り。げに彼等は放縦なる民なりき^六

吾は偉力を以て天を創りたり、げに吾は之に其の廣袤を與へたり^七 吾はまた大地を展開せり。而してわれ如何に美しく之を展べたることを^八 吾はまた汝等を訓誡するために萬物を雌雄一対に創れり^九 されば汝等アルラーハに避難せよ。げに吾は彼より汝等に遣はされたる公然の警告者なり^{一〇} 而して如何なる神をもアルラーハに配する勿れ。げに吾は彼より汝等に遣はされたる公然の警告者なり^{一一}

彼等以前の諸の民に遣はされし諸使者も、一人として魔術者又は狂者と呼ばれざるはなかりき^{一二} 彼等之を遺誡として世々繼承し来れるか 然り、彼等は背逆の民なり^{一三} されば彼等を遠離せよ。汝はそのために譴責せらるることなし^{一四} 唯だ訓誡を與へよ、げに訓誡は信者を益す^{一五}

吾は唯だ吾に事へしめんがために幽鬼と人間とを創れるなり^{一六} 吾は彼等に糧餉を求めず、吾は彼等が吾を養はんことを求めず^{一七} げにアルラーハこそ厚賜者・大能者・強大者なれ^{一八}

げに悪事を行ふ者は、彼等の同類の者の得分と同一なる得分を受けん^{一九} されど彼等をして吾に催

促²せしむる勿れ² 禍なるかな信ぜざる者は。そは彼等に約束せられたる日あるが故なり²

(1) 既往の不信者と同一の刑罰を受くること。(2) 復活の日は何時ぞと催促すること。

第五十二 山嶽章

メッカ啓示

第一節に『山によりて誓ふ』とあるに因みて山嶽章 *Al-Tur* と名づけらる。山とはシナイ山を意味し、モーゼを連想せしむるものなり。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

山によりて一 展べられたる羊皮紙に書かれたる經典によりて二 詣でらるる殿堂によりて三
彌高き屋宇によりて四 並に漲る海洋によりて誓ふ六 げに汝の主の懲罰は必ず行はれ七 何人も
之を忌避するを得ざらん八

(一) 第一―六節はマホメットとモーゼとの類似を高調せるものと見るべし。山とはモーゼのシナイ山にして、之に対してマホメットのヒラー山あり。經典はモーゼ五書にして、之に対して古蘭あり。詣でらるる殿堂とはエルサレム神殿にして、之に対してメッカ聖殿あり。彌高き屋宇とは即ち蒼穹にして両者に共通なり。而して漲る海洋とはファラオの軍勢を溺没せしめたる海とすべし。但し多くの註釈家は詣でらるる殿堂を以てメッカ聖殿又は第七天に於けるメッカ聖殿の原型にして、諸天使が常に参詣するドゥラー・*Al-Durah* 神殿を指すとす。

其日天は震ゆひ、山は揺ゆがる。使者を虚言者と呼び、戯論を事とせる者にとりて、げに其日は禍なるかなニ。三 其日彼等は獄火の中に投ぜられて三（是く言はるべし）『此火こそ汝等が常に虚妄なりとせるものなれ』四 此は魔術なるか。汝等之を見ざるか五 入りて燔かれよ。汝等之を忍ぶも忍ばざるも即ち一なり。汝等は唯だその為せることに対して報わらるるのみ』と云

げに其身を護る者は花園と歡喜の中に住み、其主が彼等に賜ふものを欣び、また其主が獄火の懲罰より彼等を救へることを欣ばん六（彼等に是く言はるべし）『暢然として食ひ且飲め。これ汝等が為せることに対する報賞なり』と云 彼等は排列せられたる榻牀に倚坐せん 而して吾は大なる耀ける目を有てる処女を彼等にめあわさん七 信ずる者及び其の子孫にして彼等に従つて信する者は、われその子孫と彼等とを樂園に於て結ばん。吾は彼等の為せる一事をも減ぜざるべし。各人は皆な己れの為せることに対して責を負ふ三 また吾は彼等が好む鮮果と肉類とを彼等に與へん。其処にて彼等痴愚と罪惡とを宿さざる酒杯を酌み交さん三 彼等の左右には秘藏せられたる眞珠の如き少年往返せん八 彼等は相對あひまひて応答せん九 其時彼等は言はん『げに吾等曾て家人と共にありし時、吾等は恐怖に慄へ居たりき三 然るにアルラーハは吾等に恩寵を垂れ、熱風の懲罰より吾等を救ひたり』 げに吾等は以前より彼に祈願せり。げに彼は慈惠者・大慈者なり』と云

されば彼等に警告せよ。アルラーハの恩寵によつて、汝は卜占者に非ず、また狂者にも非ず元
彼等曰く『彼は詩人のみ。彼のために時が齎す災厄を待たん』¹と言。言へ『待て、吾また汝等と共
に待たん』²と言。彼等の智慮が之を言はしめたるか、又は彼等は背逆の民なるか。彼等また曰く
『彼之を偽作せり』と。然らず、彼等は信ずることを欲せざるなり。彼等の言眞実ならば、彼等
をして古蘭に類する言を作らしめよ言

(1) 時が齎す災厄とは死を意味す。運命の轉變によつて悲境に陥ることを意味すと解する学者もあり。

彼等は吾より創られたるか、又は彼等自身が創造者なるか。彼等は天地を創造せるか。否な彼
等には堅固なる信念なきなり。彼等は汝の主の宝庫を所有するか、又は彼等は至高の支配者なる
か。彼等は登りて偷み聽くべき梯^{はしこ}を有するか。¹然らばその聽取者をして明白なる証據を齎さしめ
よ言。汝等には男兒ありて、アルラーハには女兒ありとするか。汝は彼等に報酬を求めて、その
ために重き負債を彼等に荷はしめたるか。彼等は書写すべき不可見のことを有するか。²彼等は
策謀せんとするか。されど信ぜざる者は必ず策謀に敗る。彼等はアルラーハ以外に神を有する
か。アルラーハを讚へよ、彼は高く彼等が彼に配する者の上に超在す。

(1) サタンの如く天上に登りて諸天使の論議を偷み聞くための梯。(2) 不可見のことに關する知識を有するかの意味なり。『筆写すべき』と言ふは、マホメットの信者が筆写する如く筆写すべきと言ふ意味を含むが故に、古蘭は其の啓示せらるる毎に、夙くより筆録せられ居たることを知るべし。

彼等設ひ天の一角が崩落するを見るとも、尙且『こは密雲のみ』と言はん。されば彼等が昏倒する日まで之を放任せよ。其日彼等の策謀は毫も彼等を益せず、且彼等は如何なる佑助をも獲ざるべし。而して惡事を行へる者には、此外にも懲罰あらん。されど彼等多くは之を知らず。されば忍びて汝の主の審判を待て、汝はわが眼中にあり。されば起床の時に汝の主を讃へ。夜間にも、また星落つる時にも彼を讃へよ。

第五十三 星 辰 章

メッカ啓示

第一節に『落ち行く星によつて誓ふ』とあるに因みて星辰章 *Al-Najm* と名づけらる。開教五年マホメットに対するメッカ市民の反感頓に昂まり、迫害に堪え兼ねたる信者の一團はアビシニアに避難するに至れり。されどメッカ市民もまた此の新しき宗教運動が、到底尋常一様の手段を以て抑圧し難きを知り、若しマホメットが、彼等の最も尊崇する三神アウッザー・アルラト・マナトを拒否せざるに於ては、彼等もまたアルラーハと其の使者とに従はんとする意図を示したり。而してマホメットは、実に下の如き啓示によつて、此の妥協に應ぜんとせり。即ち本章第一九・二〇節なり。曰く『汝等はアルウッザー、アルラト、また第三にマナトを念へるか。彼等に天翔ける鶴なり、彼等の勧解は望まし』と。然るにマホメットは、此の妥協について激しく天使の非難を受け、後の二句を以てサタンの囁きなりとし、代ふるに最し非妥協的なる一節を以てせり。曰く『此等は空しき名なり。汝等並に汝等の祖先が是く名づけたるのみ。アルラーハは如何なる權威をも彼等に降さず。單なる忖度なり。彼等は已れの好むところに従ふにすぎず』(第二三節)と。此事ありてよりメッカ市民の彼に対する憤激と敵意とは、更に甚だしきを加へたり。本章は此事ありし前後の啓示なり。尙ほサタンの囁きとせられし二句は、現行古蘭より除却せらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

落ち行く星によつて誓ふ^一 汝等の伴侶は謬ることなく、惑はさるることなし^二 彼は任意に発
言するに非ず^三 彼は黙示せられたる黙示に外ならず^四 偉力ある者が之を彼に教へたるなり^五
そは明智ある者にして、其時至高の天際にありて明かに其姿を現したり^六 次で彼は次第に接近し
て降り来り^八 隔たること僅に兩弓、乃至それよりも近き處に達し^九 其僕に向つて黙示を黙示せ
り^{一〇} 彼の心は己れの見たることを謬らず^二 然るに汝等は、彼が見たることについて彼と諍はん
とするか^三

(1) 『伴侶』とはマホメット。(2) 天使ガブリエル。ガブリエルのアラビア名ジブライーール Jibrā'īl は『神の偉力者』を意味す。(3) ガブリエルは二度其姿をマホメットに現したりとせらる。第一は最初の天啓を受けたるヒラー山上に於て、第二は所謂夜行昇天の時なり。此處にては最初のヒラー山上にての經驗を述ぶ。(4) ガブリエルがマホメットに近づける時は、人間の姿を取れりとせらる。

而して彼は更に他の時に彼を見たり^一 彼は境を劃するスイドラ樹の畔^二 常住の樂園に近き處
に於てなり^三 スイドラ樹が之を覆へるものに覆はれたる時^六 彼の目は偏視せずまた妄視せず^七
彼は實に其主の休徴の至高なるものを視たるなり^八

(1) 第一七章第一節参照。(2) 境を劃すとは、天使も人間も越ゆべからざる境界を劃すること。スイドラ Sidran 樹は

至高の天即ち第七天たるアルラーハの宝座の右方に聳ゆとせらる。此樹の葉数は地上の総人口に等しく、各葉皆之に相應する人間の姓名を有し、毎年ラマザン月十五日の日没後、翌年中に死去すべき人名を有する諸の葉は枝より落ち去ると言はる。(3) 『覆へるもの』とは或は無数の天使たりとせられ、或は鳥群たりとせらる。

汝等はアルラート、アルウツザー元、また等三にマナートを念へるか言、汝等には男兒ありて、彼には女兒ありとするか言、げに不公平なる分配なるかな言、此等は空しき名なり。汝等並に汝等の祖先が是く名づけたるのみ。アルラーハは如何なる權威をも彼等に降さず、單なる付度なり。彼等は唯だ己れの好むところに従ふにすぎず。而していま彼等の主よりの嚮導が彼等に来れり言、人はその希ふものを獲らるべきか言、否な、末世も現世もアルラーハに属す言。

天上には如何に天使多きことぞ。されどアルラーハが己れの欲し且欣ぶ者に允許を與へたる後に非ずば、彼等の勸解は毫も益することなし言、げに末世を信ぜざる者は、女子の名を以て天使を呼ぶ言、されど彼等は之について如何なる知識もなし。彼等は唯だ臆測に従ふのみ。げに臆測は眞理を如何ともするを得ず言、さればわが訓誡に面を背け、唯だ現世の生活をのみ希ふ者より遠ざかれ言、これ彼等の知識の総計なり。げに汝の主は彼の道より迷ひ去る者を知悉し、また正しく導か

るる者を知悉す言

天地間の萬物はアルラーハに属す。これ彼が悪事を行へる者には其の為せることに報い、善事を行へる者には最勝のものを以て報いんがためなり^三。此等は小過以外の諸の大罪と醜行とより遠ざかる。げに汝の主の慈悲は廣大なり。彼は大地より汝等を創れる時より、また汝等が母胎に潜める時より、汝等を知悉す。されば己れの純潔を矜る勿れ。彼は其身を護る者を知悉す^三。

汝はかの背き去れる者を見ざるか^一。彼は初め僅かに與へ、次で與ふことを停めたり^言。彼は木可見のことを知り、且之を見得るか^三。彼はモーゼの書に記されたること^言。及び其の約束に忠実なりしアブラハムのことを告げられざりしか^三。

(一) ア・ワリード・イブン・ムガイヤ Al Walid ibn Mughairah を指すとせらる。彼はメッカ市民よりマホメットに歸依せることを非難せられ、己れの改宗は神罰を恐るるためなりと答へたり。一市民之を聞きて、然らば己れ其罪を贖はんと言へるを以て、彼贖罪金を此者に與ふることを約束し、マホメットを去りて祖先の宗教に復歸したり。されど彼は吝嗇なりしかば、初め約束せる贖罪金の一部を支拂へるも、後には約束の金額が多きにすぎたりとして之を支拂ふことを停止せりと傳へらる。

重荷を負へる者は、他人の重荷を負ふを得ず^言。人は唯だ己れの精進せることのみを獲べく^言。

その精進は遂に現れ。然る後に之に対して存分に報いらるべし。汝の主は萬物の歸趨なり。笑はしめ、泣かしむるは彼なり。死なしめ生かしむるは彼なり。注がるる一涓滴より男女両性を創るは彼なり。再び創造するも彼の事なり。富ましめ有たしむるは彼なり。狼星の主は彼なり。古のアアドを亡ぼし。サムードを亡ぼして、遺類なからしめたるは彼なり。彼等以前にノアの民を亡ぼせるも彼なり。げに彼等是不義と背逆とを極めたり。また彼は顛覆せる諸都府を顛覆し。之を蔽へるものが彼等を蔽ひたり。(彼は此等のことを告げられざりしか)さらば汝の主の恩惠のいづれについて異論を唱ふるか。こは往古の諸警告者と同じき一警告者なり。近づく日は近づけり。而してアルラーハに非ずば何者も之を示すを得ず。汝等此言を驚くか。汝等は笑ひて泣かざるか。汝等は嬉戯するか。むしろアルラーハに叩首して彼に事へよ。

第五十四 太陰章

メッカ啓示

第一節に『時は近づけり、月は裂けたり』とあるに因みて太陰章 *Al-Qamr* と名づけらる。月裂けたりといふは恐らく月蝕なるべく、此の異常なる天文現象は、マホメットに対するメッカ市民の迫害が頓に激烈を加へつつありし時に、実際に起りたることと傳へらる。而して學者のうちには、マホメットが不信者の求めに應じて此の異象を現出せしめたりとする者あり。されど古蘭は、随處に此種の休徴即ち奇蹟を求むることを非難し、古蘭こそ唯一至上の奇蹟なれと教ふるを以て、是くの如く解釈するは、マホメットの意に反するものとすべし。唯だ此章が月に異象ありし年の前後の啓示に属することを知れば即ち足る。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

時は近づけり、月は裂けたり^一。されど彼等は、設ひ休徴を目睹するとも、背き去りて言はん『こは不断の魔術なり』と^二。而して彼等之を以て虚妄となし、唯だ己れの私欲に従ふ。されど一切の事は決定せらる^三。其中に鑑戒を含める諸の消息は、既に彼等に傳へられたり^四。そは完全無缺の智慧なり。されど一切の警告は彼等を益せず^五。されば彼等より遠ざかれ。召集者が一大難事に彼等を召集する日^六。其日其彼等は目を伏せ、蝗の潰散する如く墓中より出で^七。召集者の許に

走り往かん。而して不信者は言はん『これは大難の日なり』とハ

(1) 豫言者を拒みて天譴を受けたる諸の民の消息。(2) 召集者はイスラエル、一大難事は最後審判。

彼等以前にノアの民も虚言者と呼べり、然り、わが僕を虚言者と呼べり。而して彼等また彼を狂者と呼べり。而して彼は擯斥せられたり。かくて彼は其主に祈りて曰く『げに吾は敗れたり、来りて吾を佑助せよ』と云。されば吾は天上の諸門を開きて水を奔下せしめ。また地上に井泉を潰湧せしめたり。而して水は定められたる目的のために集まれり。吾即ち板と釘とにて造れるものの上に彼を乗せ。信ぜられざりし彼への報賞として、わが目前に之を水上に走らしめたり。げに吾は一個の休徴として之を遣したり。されど之を記憶する者あるか。見よ、警告を與へたる後のわが懲罰の如何なるものなりしかを云。而して吾は古蘭を記憶し易からしめたり。されど之を記憶する者あるか。

アアドの民もまた使者を虚言者と呼べり。見よ、警告を與へたる後のわが懲罰の如何なるものなりしかを云。災厄連続の日に、われ咆哮する暴風を彼等に駆り。根こそぎにせられし棗椰子樹の幹の如く、人々を吹き拂へり。見よ、警告を與へたる後のわが懲罰の如何なるものなりしかを云。

げに吾は古蘭を記臆し易からしめたり。されど之を記臆する者あるか三

サムードの民も警告を虚偽なりとせり三 彼等曰く『吾等が従ふべきは、吾等のうちの一個の間なるか。これ迷妄と狂気との沙汰なるべし三 吾等のうち唯だ彼にのみ警告が降されたりといふか。否な、彼は無礼なる虚言者なり』と三 (主黙示して曰く) 『明日彼等は、無礼なる虚言者の誰なるかを知らん三 げに吾は彼等を試みんがために一牝駝を送るべし。されば彼等を監視し、耐え忍びて待て三 而して彼等に告げて、水は彼等と牝駝とに分配せらるべく、各自順番に之を飲めと言へ』と三 然るに彼等その伴侶を呼び、彼は劔を抜いて之を殺したり三 見よ、警告を與へたる後のわが懲罰の如何なるものなりしかを言 げに吾は一声の轟音を彼等に送れり。而して彼等忽ち柵を作る者の枯木の如くなり果てたり三 げに吾は古蘭を記臆し易からしめたり。されど之を記臆する者あるか三

ロトの民も警告を虚偽なりとせり三 さればわれ砂石の嵐を彼等に駆り、拂曉に唯だロトの家人のみを救へり三 これわが恩寵なり。吾は恩を知る者に報ゆ三 彼はわが懲罰を彼等に警告せるも、彼等は之を疑へり三 且彼等は悪意を抱いて彼の客人のことを彼に尋ねしかば、われ彼等の目を盲ひしめ、『わが警告の後の懲罰を味へ』と告げたり三 而して翌朝、定められたる刑罰彼等の

上に降りり云 曰く『警告の後のわが懲罰を味へ』と言 げに吾は古蘭を記憶し易からしめたり。
されど之を記憶する者あるか

げに警告はアラオの民にも来れり 然るに彼等はわが休徴を虚偽なりとせり。されば吾は偉
力者・強大者の襲撃を以て彼等を襲撃せり

汝等不信者は彼等より優れるか、又は汝等は經典に於て懲罰より除外せられ居るか また彼等
は『常勝軍なり』と言ふか その全軍は必ず潰走して敗退せん 否な、末日こそ彼等に約束せ
られたる日なれ。末日の凄惨と痛苦とは更に甚だしかるべし げに作悪者は迷妄と混沌との中に
あり 其日彼等逆まに火獄に投ぜられ、『地獄の摩撫を味へ』と言はれん

げに吾は限度を定めて萬物を創れり わが命令は唯だ一語にして、疾きこと一轉瞬の如し
げに吾は汝等の同類を亡ぼせり。されど之を記憶する者あるか 彼等の一言一行は載せて書冊の
中にあり 大小一切の事、悉く記録せらる げに其身を護る者は、花園と河川との間に住み
威力ある王者の前に、真理の座に坐せん

第五十五 大悲者章

メッカ啓示

第一節に『大悲者』とあるに因みて大悲者章 *Al-Rahman* と名づけらる。前章と同じくメッカ初期の啓示なり。本章に類出する疊句『汝等は主の恩惠のいづれを否むか』の主格並に動詞が双数なるを以て、此章の『汝等』とは、幽鬼並に人間を指せるものとせらる。

大悲者・大慈者アラーハの名によりて

大悲者一 古蘭を教へたり二 彼は人間を創り三 之に言語を教へたり四 日月は一定の計算に従ひ五 草木は彼に叩首す六 彼は高く天を挙げ、また秤衝を定めたり七 これ汝等が秤衝を妄りにせず八 公平に量りて減量することなからしめんがためなり九 彼は生類のために大地を備へたり一〇 地上には鮮果あり、苞ある棗椰子樹あり二 外皮ある穀類あり、芬香ある芳草あり三 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか三

彼は陶工の如く、泥土より人間を創り四 煙なき火にて幽鬼を創れり五 然らば汝等は主の恩惠

のいづれを否むか云

彼は両東の主、両西の主なり¹モ 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか云

(一)二つの東西といふは、夏期及び冬期に於て太陽の出没する処を異にするより来れるものにして、單に東西といふと同じ。

彼は二つの海を放置して之を相会せしむ¹云 されど両海の間には隔壁ありて、互に相侵すことを得ず云 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか云

(一)二つの海とは淡水の河川及び鹹水の海洋を言ひ、相会すとは河口にて両者相交はるを言ふ。

両者より大小の眞珠出づ¹云 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか云

山の如く海上に聳ゆる船は彼の有なり¹云 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか云

地上の一切は凋落し¹云 唯だ尊嚴と榮譽とを具足する汝の主の慈顔のみ恒存す¹云 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか云

天地間の一切の者は彼に懇願す。日々彼は忙殺せらる¹云 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか云

汝等兩個の大衆よ、やがて吾は汝等を（審判するため）時を造らん^三 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^三

幽鬼並に人間の群よ、汝等若し天地の境を越え得なば之を越えよ。されどわが允許なくしては汝等之を越ゆるを得ず^三 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^三

火焰と鎔銅と汝等の上に降されん。而して汝等佑助を獲ることを得ざらん^三 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^三

天は裂けて、紅草ベニカサの如き薔薇の色となる時あらん^三 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^三 其日幽鬼も人間も、其罪について問はるることなからん^一 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^三

(一) 問を須るずして知悉せられ居ること。

罪人はその記號によつて識られ、前髪と兩足とを捕へられん^三 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^三

『こは作惡者が虚妄なりとせる地獄なり』^三 彼等烈火と沸湯との間を右往左往せん^四 然らば

汝等は主の恩恵のいづれを否むか^聖

されど其主の前に立つことを畏るる者には二つの樂園あり¹ 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^聖

(1) 主の前に立つことを畏るとは、最後審判を恐れて其身を護ること。二つの樂園とは幽鬼のそれと人間のそれと解すべし。

各の樂園に枝葉鬱密たる樹木あり^聖 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^聖

各の樂園に流泉あり^聖 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^聖

各の樂園に二種の一切の果実あり¹^聖 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^聖

(1) 二種の意味不明なり。或は尋常の種類と希有の種類なりとし、或は未熟成熟の二種なりとす。

錦繡にて縁^{ふち}どれる臥牀に倚り、両園の鮮果は手の達する処にあり^聖 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^聖

園中に伏目勝ちの処女あり、人間も幽鬼も未だ曾て之に触れず^聖 然らば汝等は主の恩恵のいづれを否むか^聖

処女等は紅玉の如く、また眞珠の如し^一 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^二
善の応報は善に非ずして何ぞ^三 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^二
此等の外に二つの樂園あり^一 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^三

(一) 位階の劣れる者のための樂園とせらる。

深緑の枚葉繁茂せり^四 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^五

各の樂園に二湧泉あり^六 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^七

各の樂園に鮮果と棗椰子樹と石榴とあり^八 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^九

園中に至善にして至美なる処女あり^十 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^{十一}

耀ける大いなる目を有てる天女は、帳幕の蔭に藏さる^{十二} 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否む

か^{十三}

人間も幽鬼も未だ曾て之に触れず^{十四} 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^{十五}

彼等は深緑の臥牀に倚り、華美なる毛氈に坐る^{十六} 然らば汝等は主の恩惠のいづれを否むか^{十七}

尊嚴と榮譽とを具足する汝の主の名を祝福せよ^{十八}

第五十六 不可避者章

メッカ啓示

第一節に『不可避のこと来る時』あるに因みて不可避者章 Al-Waqi'ah と名づけらる。不可避者とは最後審判なり。メッカ初期の啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

不可避のこと来る時^一 何者もその来るを虚妄と呼ぶを得ざらん^二 此時或者は貶^{カト}され、或者は擧げられん^三 此時大地激しく震撼し^四 群山粉碎して^五 塵埃となつて四散せん^六

此時汝等は三類に分たれん^七 (第一は)右方の衆。右方の衆とは何ぞ^八 (第二は)左方の衆。左方の衆とは何ぞ^九 (第三は地に於ての)首先者、(天に於ても)首先者なり^{一〇}

此等(首先者)はアルラーハに咫尺し^{一一} 歓喜の樂園に住まん^{一二} そは先人に多く^{一三} 後人に少し^{一四} 彼等は黄金を縷めたる榻牀の上に^{一五} 相對ひて倚坐す^{一六} 永遠の少年、彼等の左右を回り^{一七} 盞と觴と清酒溢るる杯とを献ず^{一八} 彼等之を飲むも頭痛せずまた昏醉せず^{一九} 鮮果は採るに委ね^{二〇}

鳥肉は好むに任すニ　また大なる眸もてる天女のニ　宛も秘藏の眞珠の如くなるはニ　即ち彼等の為せることに対する報賞なりニ　彼等園中にありて妄言悪語を聞かずニ　唯だ『平安・平安』と言ふを聽くニ

次には右方の衆、右方の衆こそ幸福なれニ　そは棘なきスイドラ樹ニ　果実累々たる香蕉樹の間ニ　鬱密たる樹蔭ニ　滾々たる清泉の畔にありニ　豊沢なる鮮果はニ　不断に缺くることなく、食ふを禁めらるることなしニ　また高貴なる榻牀ありニ　而してわれ新たに天女を創りてニ　之を永遠の処女となしニ　年齢相等しき可恋の者となせりニ　これ右方の衆のためなりニ　前人に多く元　後人にも亦多しニ

然らば左方の衆、彼等こそ不運の徒なれニ　そは熱風と沸湯との間ニ　黒煙の蔭ニ　涼ならず爽ならざる処に居らんニ　げに彼等曾て奢侈に耽りニ　大罪を事としニ　且常に『吾等一たび死して塵と骨とに歸したる後、如何んぞ再び甦るべけんや』　吾等の祖先また然り』と言へる者なりニ　言へ『げに前人も後人も』　定められたる日の定められたる時刻に必ず召集せらるべし』と云　げに其時、汝等迷へる者、否める者よニ　汝等はザックーム樹の果実を食ひてニ　其腹を満たしニ　また沸湯を飲むことニ　宛も渴ける駱駝の飲むが如くならんニ　これ審判の日に於ける彼等の饗応

吾は汝等を創れり。然るに何故に汝等は之を信ぜざるか¹ 汝等は己れの射出するものについて考へたるか² 之を創れるは汝等なるか、將又その創造者は吾なるか³ 汝等の間に死を定めたるは吾なり。されど吾は之がために⁴ 汝等に代ふるに汝等に類する者を以てし、又は汝等を変へて汝等の知らざる者となすことを妨げらるる者に非ず⁵ 汝等は最初の創造を知る。然るに何故に汝等は思はざるか⁶

(1) 再度の創造即ち復活を信ぜざるかとの意味。

汝等は己れの耕すものについて考へたるか⁷ 實を之に結ばしむるは汝等なるか、將又吾なるか⁸ 吾若し欲しなば、之を乾枯不毛ならしむるを得べし。其時汝等は嘆きて止まざるべし⁹ 曰く『吾等は負債者となれり¹⁰ 否な、吾等は收穫を喪へり』と¹¹ 汝等は己れの飲む水について考へたるか¹² 之を雲より降すは汝等なるか、將又吾なるか¹³ 吾若し欲しなば、之を鹹^{かち}からしむるを得べし。然るに汝等は何故に感謝せざるか¹⁴ 汝等は己れの鑽る火について考へたるか¹⁵ その

ための樹を生ぜしめるは汝等なるか、將又吾なるか、火を以て一個の訓誡となし、且之を荒野に住む者の便利に供せしむるは實に吾なりき。されば偉大者なる汝の主の名を讚へよき。

吾は群星の落つるを指して誓ふき。汝等若し知識あらば、げにそは重大なる誓言なり。汝等若し之を知らば！^{七六}。そは高貴なる古蘭なりき。そは載せて秘藏の書冊の中にありき。淨められたる者に非ずば何人も之に觸るるを得ず^一。そは三界の主よりの啓示なり。何事ぞ、汝等は此教を嘲笑するか。汝等は之を虚偽と呼ぶことを以て日々の生計^{かりはひ}とするか。果して然らば（瀕死者の魂が）その喉頭に上り来る時、何故に汝等は之を追ひ戻さざるか。其時汝等は親しく之を見るなり。而して汝等には見えざれど、吾は汝等よりも彼の近くにありき。されば汝等若し^二隷属者に非ずば、而して汝等の言眞実ならば、何故に其魂を復歸せしめざるか。

(一)此の一節は古蘭が古くより筆写せられ居たることを示す。(二)此の一節はセール、ロッドウエル、パーマーの諸學者、皆な『審判を免れんとすれば』の意味に解釈せり。されど不信者は末日を信ぜざる者たるが故に、最後審判を避くる意図あるべからず。原語 Madimn は『権威の下に置かる』又は『隷属する』又は『卑めらる』の意味なれば、アルラーハに隷属すること、又はアルラーハの権威の下にあることと解すべし。漢訳に『被制者』とせるは正し。

彼若しアルラーハに咫尺すべき者の一人ならば、必ず安息と薫香と歡喜の樂園とを獲ん、彼若し右方の衆の一人ならば、『平安』と挨拶せられん、されど彼若し否める者、迷へる者の一人ならば、必ず沸湯の響応を受け、地獄にて燔かれん、これ実に無疑の眞理なり、されば汝の主の偉大なる名を讚へよ、

第五十七 黒鉄章

メヂナ啓示

第二五節に『吾はまた鉄を降したり』とあるに因みて黒鉄章 Al-Hadid と名づけらる。ネルデケは第一〇節の『勝利』を以てバドルの戦勝となし、従つて本章を遷都四・五年の啓示となすも、この勝利は決してバドル戦勝に非ず、明白にメッカ征服を指せるものなるが故に、啓示年代も遷都八・九年の交とすべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

天地間の萬物はアルラーハを讃ふ。彼は偉力者・聰明者なり一 天地の大権は彼に属す。彼は生かしまた死なしむ。彼は萬事を能くす二 彼は最初にして最後なり、顯者にして幽者なり。彼は萬物を知る三 六日の間に天地を創造し、然る後に王座に鎮坐するは彼なり。彼は地に入るもの、地より出づるものを知り、天より降るもの、天に登るものを知る。汝等いづこに在りとも、彼は常に汝等と偕にあり。アルラーハは汝等の為すことを照覽す四 天地の大権は彼に属す。萬事はアルラーハに歸趨す五 彼は夜を晝に繼がしめ、晝を夜に繼がしむ。彼は胸中に懐くものを知悉す六

アルラーハ並に其の使者を信じ、彼が汝等に繼がしめたるものうちより喜捨を行へ。汝等のうち信じて喜捨を行ふ者には、偉大なる報賞あらんせ。汝等何を苦しんでアルラーハ並に其の使者を信ぜざるか。使者は汝等をして其主を信ぜしめんがために汝等を招ぐ。而して汝等若し信者ならば、彼は既に汝等と約束を結べるなりハ。汝等を黒闇より光明に導かんがために、明瞭なる休徴をその僕に降せるは彼なり。げにアルラーハは汝等に懇切にして仁慈なりハ。汝等何を苦しんでアルラーハの道に喜捨せざるか。天地の遺産を相続する者はアルラーハに非ざるか。汝等のうち、勝利の以前に喜捨し且征戦せる者は、然らざりし者と同じからず。彼等は勝利の以後に喜捨征戦する者よりも高位を占む。アルラーハは各人に幸福を約束す。而してアルラーハは汝等の為すことを熟知す。アルラーハに善き貸付を行ふ者は誰ぞ。彼は彼のために之を倍加し、且豊かなる報賞を與へん二

(1) メツカの征服を指す。

其日汝は、前方並に右方に向つて光明を放つ男女の信者を見ん。(彼等に是く言はるべし) 『今日汝等に吉報あり。河川流るる樂園あり、汝等長久に其中に住まん。そは偉大なる幸福なり』

と三 其日男女の偽信者は、信者に向つて言はん『待て、吾等も汝等の光明を借らん』と。されど彼等は是く言はれん『歸りて光明を求めよ』¹と。其時信者と偽信者との間に一高壁築かれて彼等を隔離せん。高壁に一門あり、門内には慈悲、門外には懲罰あるべし三 偽信者は信者に向つて叫ばん『吾等も汝等と偕にありしに非ずや』と。信者は答へん『然り。されど汝等は、互に他を誘惑し、踟蹰し狐疑して、アルラーハの命令下るまで、遂に空望に欺かれたり。欺瞞者はアルラーハについて汝等を欺けるなり四 されば汝等は今に及んで最早其罪を贖ふことを得ず。不信者も亦然り。汝等の住居は火獄なり。火獄は汝等の主君^{アッラー}なり。そは禍なる行先なり』と五

(一) 現世に復歸して自ら光明を求めよとの意味。信仰の光明は現世に於て獲得せざるべからず。

信ずる者が、アルラーハの訓誡並にその降せる真理を念ひて、其心を謙虚ならしむる時は未だ到らざるか。彼等をして、かの以前に經典を降され、その壽命を長くせられながら、其心頑固にして多く背逆者となり果てたる者の轍を踏まざらしむる時は未だ到らざるか六 アルラーハは能く死せる大地を甦らしむることを知れ。吾は汝等を悟らしめんがために、諸の休徴を明示せり七 げに喜捨を行ふ男女並にアルラーハに善き貸付を行ふ者は、その返報を倍加せられ、且高貴なる報賞を受

けんえ アルラーハ並に其の使者を信する者は誠実者なり、而して其主の前に於て証人たるべき者なり。されど信ぜずしてわが休徴を虚偽なりとする者は地獄の党侶なり云

現世の生活は、娛樂、遊戯、虚飾、相互の自負、財宝と子女との競争にすぎざることを知れ。譬ふれば雨後の草木の如し。その成育は農夫を欣ばしむるも、やがてその枯稿し、その変黄し、次で乾かされて破碎せらるるを見ん。而して末世には峻嚴なる刑罰あり、またアルラーハの宥恕とその好意とあり。げに現世の生活は唯だ幻影にすぎず云

アルラーハの宥恕、並に廣袤天地に等しき樂園を得るために相競ひて急げ。そはアルラーハ並に其の使者を信する者のために備へらる。これアルラーハの恩寵なり。アルラーハは己れの欲する者に之を賜ふ。アルラーハは無量の恩寵の主なり云

地上又は汝等自身の上起る一切の災厄は、一として吾之を生ぜしむる以前に、既に經典の中に記されざるはなし。そはアルラーハにとりて易々たることなり云 　そは汝等をして喪へるが故に悲嘆せず、興へられたるが故に狂喜すること勿らしめんがためなり。アルラーハは一切の衿高自負する者を欣ばず云 　彼等は自ら吝嗇にして、他にも吝嗇を勧む。而して（喜捨を）忌避する者ありとも、アルラーハは富有者・可頌者なり云

げに吾は諸の明瞭なる休徴を與へてわが諸使者を遣はしたり。而して人々をして公平を守らしめんがために、經典と秤衡とを汝等の間に降したり。吾はまた猛烈なる力と人間のために諸の利益とを含む鐵を降したり。これアルラーハが密かに彼並に彼の使者を輔くる者を知らんがためなり。げにアルラーハは強大者・偉力者なり云

げに吾はノアとアブラハムとを遣はしたり。吾は彼等の子孫に豫言と經典とを與へたり。而して彼等の或者は正しく導かれたれど、その多くは背逆者なり云云 吾は其後も諸使者を続派し、後にマリアの子イエスを遣はして、福音を之に與へたり。而して吾は彼に従ふ者の胸中に、親切と慈悲とを宿らしめたり。されど修道制はアルラーハを欣ばしめんとして彼等自身が創造せるものにして、吾之を命じたるに非ず。而も彼等は格守して之を守るに非ず。吾は彼等のうちの眞実なる信者に報賞を與ふべきも、彼等の多くは背逆者なり云

汝等信者よ、アルラーハを敬ひ、その使者を信ぜよ。彼は二重の慈悲を汝等に賜はらん。即ち光明を賜ひて汝等を歩み入らしめ、且汝等を宥恕せん。アルラーハは宥恕者・大慈者なり云 受經者等は須く知るべし、彼等は毫末もアルラーハの恩寵を左右する能はず、恩寵は唯だアルラーハの手

にありて、彼は己れの欲する者に之を賜ふことを。アルラーハは無量の恩寵の主なり云

第五十八 争辯者章

メヂナ啓示

第一節にマホメットと『争弁』せる一女子のことを述ぶるに因みて争弁者章 *Al-Mujadilah* と名づけらる。その女子とはカーウラ・ピント・サアラバ *Khāula bint Sa'āba* にして、其夫アウス・イブン・アッ・サーマット *ʿAws ibn as-Samāt* のために、アラビア在来の習慣に従ひ、『汝は吾にとりて吾母の背の如し』との宣告の下に離別せられたるものなり。カーウラは此事についてマホメットに訴ふるところありしが、マホメットは夫に離別せられたる上は、従来の慣習に従つて身を処すべしと答へ、カーウラの嘆願を容れざりき。されどカーウラは、アウスとの間に幼少なる子女あり、之を棄てて家を出づるに忍びず、歸りて至心にアルラーハに愁訴せり。よつてアルラーハはマホメットに黙示し、アラビア在来の離婚の形式を廃棄せしむるに至りたりと。是くの如きは即ち此の啓示に関する回教の傳承なり。此事については第三三章第三節に簡單なる言及あるを以て、本章は第三三章以前の啓示にして、遷都四・五年の交のものとするべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アルラーハは、その夫について汝と争辯し、且之をアルラーハに愁訴せる女子の言を聽きたり。

而してアルラーハは汝等兩人の談話をも聽きたり。げにアルラーハは能聞者・能見者なり。

汝等のうち、その妻を母の背の如しと言ひて、之を離別する者あり。されど妻は母に非ず、汝等

を産みたる者こそ母なれ。げに彼等の言は悪むべく、また虚偽なり。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり^二

その妻を母の背の如しと言ひて之を離別し、後に其言を撤回せんとする者は、互に相触るる以前に、奴隸一名を解放せよ。これ汝等への訓誡なり。アルラーハは汝等の為すことを熟知す^三 解放すべき奴隸を有せざる者は、互に相触るる以前に、二ヶ月を通じて齋戒せよ。之を能くせざる者は、六十人の貧者に給食せよ。これ汝等をしてアルラーハ並に其の使者を信ぜしめんがためなり。これアルラーハの掟なり。而して不信者には痛刑あるべし^四

げにアルラーハ並に其の使者に違背する者は、前人が顛覆せられたる如く顛覆せられん。吾は既に諸の明瞭なる休徴を降せり。さればアルラーハが一齊に彼等を甦らしめ、彼等に向つてその為せることを告知する日、不信者には羞づべき刑罰あらん。彼等が忘れたる間に、アルラーハは一切を記録せり。アルラーハは萬事を照覽す^五

汝はアルラーハが天地間の一切のことを知れるを見ざるか。三人私語すれば彼は第四者、五人私語すれば彼は第六者なり。多少を論ぜず彼等の在るところ、彼また必ず偕にあり。かくて彼は復活の日に於て、彼等に向つてその為せることを告知せん。げにアルラーハは萬事を知る^七

汝はかの私語を禁ぜられたる者が、後に其禁を犯し、アルラーハの使者に対して罪惡と敵意と叛意とを抱いて私語するを見ざるか。彼等は汝の前に来りて、アルラーハが汝に挨拶すると異なる言^{ことば}を以て挨拶し、互に相顧みて曰く『何故にアルラーハは吾等の言を罰せざるか』と。彼等には地獄にて足る。彼等其中にて燐かれん。禍なる行先なりハ。汝等信者よ、汝等私語する時、使者に対して罪惡と敵意と叛意とを抱いて私語する勿れ。正義と敬虔とを以て私語せよ。而してアルラーハを敬へ。汝等は彼に召集せらるるなりカ。私語は唯だサタンより出づ。彼は之によつて信者を悩ましめんとす。されどアルラーハが許すことなくしては、彼は毫末も彼等を害するを得ず。されば信者をしてアルラーハに頼らしめよ。

(一) 『平安汝の上に在れ As-Salam halaiika』と言はずして、『災難汝の上に在れ As-Sam halaiika』と言へること。

汝等信者よ、集会に際して、席を譲れと言はれなば即ち譲れ。然らばアルラーハは汝等のために樂園に席を設けん。また起てと言はれなば即ち起て。アルラーハは、汝等のうちの信者並に知識を賜はれる者を、高き位階に陞^{のぼ}すべし。アルラーハは汝等の為すことを知るニ

汝等信者よ、汝等が使者に面晤せんとする時は、之に先だちて喜捨を行へ。そは汝等のために最

も善く且潔し。汝等若し資力なくば、然らばアルラーハは大度者・大慈者なり三。汝等は面晤の前に喜捨を行ふことを憚るか。汝等之を行はず、而もアルラーハが汝等を赦せる時は、堅く礼拜を守り、捐課を納め、アルラーハ並に其の使者に従へ。アルラーハは汝等の為すことを知る三。

汝はかのアルラーハの怒に触れたる者を友とする者を見ざるか¹。彼等は汝等の與党に非ず、また彼等の與党にも非ず。彼等は知りつつ虚偽の誓言をなす四。アルラーハは彼等のために嚴刑を準備せり。彼等の為せることは禍なるかな五。彼等はその誓言を以て護身の裝束となし、人をアルラーハの道より背かしむ、彼等は羞づべき刑罰を受けん六。彼等の財宝と子女とは毫もアルラーハを左右する能はず。彼等は火獄の党侶なり。彼等永劫に其中に住まん七。アルラーハが一齊に彼等を召集する日、彼等はいま汝等に誓ふ如く彼に誓ひ、以て何事かを為し得べしと想はん。げに彼等は虚言者に非ざるか八。サタンは彼等を左右し、彼等をしてアルラーハを念ずることを忘れしむ。彼等はサタンの軍兵なり。げにサタンの軍兵は淪喪者に非ざるか九。げにアルラーハ並に其の使者に違背する者は、最も卑賤なる者のうちに加へられん三。アルラーハ記して曰く『われ必ず勝たん、吾とわが諸使者と』と。げにアルラーハは強大者・偉力者なり三。

(1) 此の一段はメヂナの偽信者を対象とするものにして、神の怒に触れたる者とは猶太人なり。

汝はアルラーハと末日とを信する民が、設ひ父又子、又は兄弟、又は同族なりとも、アルラーハ並に其の使者を敵とする者と、友好を結ぶ者あるを許すべからず。主は彼等の胸裡に信仰を銘記し、己れの靈を以て之を強め、河川流るる樂園に入りて、長久に其中に住ましめん。アルラーハは彼等を欣び、彼等またアルラーハを欣ぶ。彼等はアルラーハの軍兵なり。げにアルラーハの軍兵は本願成就者に非ざるか三

第五十九 追放章

メヂナ啓示

第二一七節にメヂナの猶太人ナヅィール *Am-Nasir* 族の追放に關して述ぶるに因みて追放章 *Al-Hashr* と名づけらる。もとナヅィール族はマホメットに対して中立を約束せしが、バドル戦勝の後に款を彼に通じ、ウホド敗戦後に彼に背き、使者をメッカに派して、アブー・スフヤーンと相結び、マホメットの顛覆を企てたり。よつてマホメットは遷都四年兵を率ゐて彼等を攻め、之を降して其地より放逐せり。而してアブダラーハ・イブン・ウバイを首領とするメヂナの偽信者等は、密かに猶太人と相通じ、若し彼等がマホメットと衝突する場合は必ず彼等に左袒すべく、若し彼等が事敗れて追放せらるる如きことあらば、必ず彼等と共にメヂナを去るべしと約束せり。されどマホメットがナヅィール族に対して干戈を用ゐたる時、彼等は毫も彼等に助力せず、その屈服して追放せらるるに及んでも、之に伴ふことをせざりき。此等の偽信者は本章に於て痛烈に糾弾せらる。本章は此の事件以後の啓示にして、遷都四年のものとせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

天地間の萬物はアルラーハを讃ふ。彼は偉力者・聰明者なり。受経者中の不信者をその住处より追放し、之を最初に追はれたる者と合せしめたるは彼なり。汝等は、彼等決して退去せざるべし

と思ひ、彼等もまたその堡壘が、能くアルラーハに對して己れを護り得べしと思ひたり。然るにアルラーハは、彼等の考慮せざりし処より彼等を襲ひ、彼等の胸中に恐怖を投じたり。かくて彼等は己れの手並に信者の手にてその家屋を毀つに至れり²。具眼者よ、就て学ぶところあれ³。而して設ひアルラーハが彼等に追放を命ぜざりしとするも、彼は必ず現世に於て彼等を膺懲せしなり。而して末世に於ては必ず火獄の刑罰を受けん³。これ彼等がアルラーハ並に其の使者に抗せるがためなり。苟くもアルラーハに抗する者は、アルラーハは之に報いること嚴厲なり⁴。汝等が彼等の棗椰子樹を伐採せることも、之を其根に立たしめ置くことも、等しくアルラーハの命令によるものにして、之によつて作惡者を辱しめんがためなり⁵。

(1) 受經者中の不信者とはナツィール族、最初に追放せられたる者とはカーイヌカア族を指す。但し此の一句は「最初の追放にその住処を去らしめたり」と解し、ナツィール族の追放を最初の追放とし、之を後のウマルが行へるカイバル族追放と區別するなりとする学者あり。予はムイア及びロッドウエルの解釈に従へり。(2) ナツィール族は一切の財産を遺して他に移住することを許され、退去に際して、回教徒の手に歸するを惡みて己れの家屋を破毀したり。(3) マホメットはナツィール族が堡壘に立籠りて容易に降服せざりしたため、モーゼの律法(旧約申命記二〇ノ一九)が之を禁止するに拘らず、彼等の棗椰子樹園を伐採し、其根を焼拂ひしかば、之を見たる堡壘内の猶太人は、叫喚してマホメットの不法を詰問せり。マホメットの此の行爲は「アルラーハの命令」によるものとして此処に是認せらる。

アルラーハが彼等よりの鹵獲品として其の使者に賜へるものは、汝等之に向つて馬又は駱駝を進めざりしものなり¹。アルラーハは其の使者をして己れの欲するものを支配せしむ。アルラーハは全能なり^六。アルラーハが諸邑の民より鹵獲品として其の使者に賜ふものは、アルラーハ並に其の使者、近親、孤兒、貧者及び旅人に属すべきものとす。これ鹵獲品を汝等のうち富者なる者の間に流布せざらしめんがためなり。使者が與ふるものは之を取り、彼が禁ずるものは之を避けよ。アルラーハを敬へ。アルラーハは報いること嚴厲なり^七。

(一) ナヅィール征討は歩兵のみにて行はれ、騎乗者はマホメット一人のみなりし理由により、その鹵獲品は、第一八章第四一節に啓示せられたる戦利品処分規定によらず、全部アルラーハの使者に歸すべきものとせられたり。

此度の鹵獲品の一部は、遷士中の貧者に属すべし¹。彼等は其家と財物とより逐はれて、尙且アルラーハの恩寵とその眷顧とを求め、アルラーハ並に其の使者を輔けたり。此等は皆な誠実者なりハ市内に邸宅を擁し、彼等以前に歸信せる者は、己れに來り投じたる者を愛し、遷士に分與せられたるものに対して、胸中更に求むるところなし²。而して設ひ自ら貧するとも、己れよりも遷士のことを念とす。其心を貧欲より遠ざけたる者、是くの如き者は必ず榮えん^九。而して彼等に後れて歸

信せる者は曰く「主よ、吾等並に吾等以前に帰信せる諸兄弟を宥恕し、信ずる者に対する如何なる怨恨をも吾等の胸中に種ゆる勿れ。主よ、汝は慈愍者・大慈者なり」と。

ナツイール族征服の戦利品は、全部マホメットに歸したる上、輔士には分與せられず、唯だ遷士中の貧者にのみ與へられたり。(2)市内とはメヂナ市内、メヂナに邸宅を擁せる者は即ち輔士、来り投じたるは遷士なり。

汝はかの偽信者等を見ざるか。彼等は受経者中の信ぜざる諸兄弟に向つて言へり「汝等若し追放せられなば、吾等また汝等と共に去らん。事、汝等に関する限り、吾等は何者にも服従せざるべし。汝等若し攻撃せられなば、吾等必ず汝等を援助せん¹」と。而してアルラーハは彼等の虚言者なることを立証せり。二 彼等が逐はるるとも、此等は彼等と共に去らず。彼等が戦ふとも、此等は彼等を援助せず、設ひ援助せりとするも必ず踵を回して敗走せしなり。其時此等は如何なる佑助をも得ざるべし。三 彼等は胸中に汝等を恐るることアルラーハを恐るるよりも甚だし。これ彼等は理解なき民なるが故なり。三

(1) アブダラー・イブン・ウバイがナツイール族に與へたる約束の言葉。

また彼等(猶太人)は、城壁ある都市又は墻壁の背後よりならでは、決して汝等と戦はず。而も

相互の間に於ける彼等の鬪志は強烈を極め、汝等は彼等を以て一團となせども、其心は四分五裂せり。これ彼等は思慮なき民なるが故なり^四

彼等は近く彼等に先行せる民に似たり^一。彼等も己れの所行の惡果を嘗めたり。而して末世には彼等のために痛刑あらん^五。また彼等はサタンに似たり。サタンは人に向つて『信仰を棄てよ』と告ぐるも、其人一旦不信者となれば即ち曰く『げに吾は汝と関り^六なし。げに吾は三界の主を畏る』と。されば両者の末路は、等しく火獄に墮し、永劫に其中に住むことなり。これ不義者の受くる応報なり^七

(一) 最初に追放せられし猶太人カリーヌカア族を指す。(二) この彼等は偽信者を指す。アブダラーハの約束をサタンの言に比したるなり。(三) 猶太人並に之と通じたる偽信者。

汝等信者よ、アルラーハを敬へ。各人をして末るべき日のためにその豫め送るものに留意せしめよ。アルラーハを敬へ、げにアルラーハは汝等の為すことを知る^八。アルラーハを忘れたる者の如くなる勿れ。彼は彼等をして己れの魂を忘れしめたり。彼等は作惡者なり^九

火獄の党侶と樂園の党侶とは同じからず。樂園の党侶、彼等こそ勝利者なれ^三

吾若し古蘭を山上に降したりせば、汝は其山が平身低頭し、アルラーハを畏れて崩裂し去るを見ん。吾は人々を反省せしめんがために此の比喻を述ぶ三

彼はアルラーハなり、彼の外に神なし。王者なり、聖潔者なり、和平者なり、誠実者なり、守護者なり、強大者なり、至高者なり。アルラーハの栄光、高く彼等が之に配する者の上にあれ三 彼はアルラーハなり、創造者なり、製作者なり、形成者なり、一切の尊號は彼の有^{もの}なり。天地間の萬物は彼を讃ふ。アルラーハこそ偉力者・聰明者なれ三

第六十 試 女 章

メチナ啓示

第一〇節に『逃げて汝等に来る女子の信者あらば、之を試問せよ』とあるに因みて試女章 Al-Muntahamah と名づけらる。逃げ来るといふは、回教に帰依せるために甚だしく迫害せられてメッカよりメチナに逃亡し来ることを意味し、之を試問するとは其の女子の信仰を吟味することなり。ホダーイビーヤ休戦條約によれば、マホメットはメッカよりの一切の逃亡者は男女を問はず悉く之を送還する約束なりしが、女子信者の逃亡の場合は、若し之を送還すれば迫害更に甚大なるべきが故に、此の啓示によりて女子逃亡者のメッカ送還を廢止せり。遷都八年の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝等信者よ、吾敵にして且汝等の敵たる者を友とする勿れ¹。汝等は、汝等に降されたる眞理を信ぜざる彼等に対して、尙ほ友誼を示さんとするか。彼等は、汝等が其主アルラーハを信ずる故を以て、使者と汝等とを逐へるに非ざるか。汝等出でて吾道に善戦し、わが満足を求めながら、密かに彼等に友誼を示さんとするか。吾は汝等が匿すことを知り、且露すことを知る。之を敢てする者は、げに直き道より逸し去るものなり。彼等若し汝等と会はば、彼等必ず汝等の敵たらん。彼等

は悪意を抱いて其手と其舌とを汝等に展べ、切に汝等がその信仰を棄てんことを望まんニ 汝等の親族も、また汝等の子女も、復活の日に当りて毫も汝等を益することなし。彼は汝等を離隔すべし。アルラーハは汝等の為すことを照覽す^三

(一) 敵とはメッカの不信者を指せるものにして、此の啓示は下の如き場合に降されたるものとせらる。遷都八年マホメットが極秘の間にメッカ征服の準備を整へつつありし時、マホメットの最も信頼する遷士の一人ハーティブ・イブン・アビ・バルタア *Hatib ibn abi Balta'a* が、メッカに残せる家族の身の上を憂慮し、マホメットのメッカ進撃計画を同市の知人に密告するため一女子を遣はしたり。此事発覚してマホメットはアリーをして其跡を追はしめ、途中に之を捕へて事なきを得たり。マホメットは従来の一ハーティブの忠誠を思ひて之を赦せしが、此の啓示によりて堅く信者を戒め、メッカ市民との友好を慎ましめたり。

アブラハム並に彼に従へる者は、汝等の龜鑑たるべし。彼等其民に告げて曰く『げに吾等は、汝等並に汝等がアルラーハ以外に拜する神々と関り^{かは}なし。吾等は汝等と絶縁せり。汝等専らアルラーハを信するに至るまで、吾等と汝等との間に永久に敵意と憎悪とを生じたり』と。而して汝等はアブラハムが其父に向つて『吾はアルラーハを左右し得ざれども、汝のために宥恕を乞はん』と言へるに倣ふこと勿れ。主よ、吾等は汝に頼り、汝に帰趨す^四 主よ、吾等を以て信ぜざる

者に対する試練とすること勿れ。吾等を赦せ。主よ、げに汝は偉力者・聰明者なり^五。汝等は彼等に於てアルラーハと末日とを仰望する者の龜鑑を見るべし。されど設ひ背き去る者ありとするも、げにアルラーハは富有者・可願者なり^六。

アルラーハは、汝等と彼等のうちにて汝等が敵視する者との間に、或は友愛を結ばしむることあらん¹。アルラーハは大能者なり、アルラーハは宥恕者・大慈者なり^七。アルラーハは、教の故を以て汝と干戈を交へざりし者、また汝等を郷土より逐はざりし者に対して、汝等が親切と公平とを以て之を遇することを禁せず。アルラーハは公平なる者を欣ぶ^八。アルラーハは、唯だ教の故を以て汝等と干戈を交へたる者、汝等を郷土より逐へる者、並に汝等の放逐に左袒せる者と友誼を結ぶことを禁ずのみ。苟くも彼等を友とする者は不義者なり^九。

(1) 不信者が回教に帰依する場合。

汝等信者よ、若し逃げて汝等に來る女子の信者あらば、之を試問せよ。アルラーハは最も善く彼女等の信仰を知る。汝等若し彼女等の信仰の確實なるを知らば、之を不信者の許に歸らしむる勿れ。彼女等が不信者の妻たることは合法に非ず、また不信者が彼女等の夫たることも合法に非ず。但

し不信者に対しては、彼等が婚資として費せるものを返還せよ。而して汝等若し婚資を與ふれば、彼女等と結婚するも罪に非ず。不信者の女子との紐結を固持する勿れ。汝等は己れが婚資として費せるものの返還を求め、且不信者にもその費せるものの返還を求めしめよ。これアルラーハの審判なり。アルラーハは汝等を審判す。アルラーハは能知者・聰明者なり。若し汝等の諸妻のうち、汝等を去りて不信者に奔る者ある場合は、汝等が幸運に際会せる時、妻を失へる者に対して、その費せると同額のものを與へよ¹。而して汝等が信するアルラーハを敬へ²。

(1) 幸運に際会するとは勝戦によつて鹵獲品を獲ることを言ふ。不信者は回教徒に対して賠償せず、従つて其妻を失へる信者は、其妻が走り往ける不信者より賠償を受け得ざるを以て、之に対しては向後教團が戦勝によつて鹵獲品を獲たる際に、其夫に対して補償せよとの意味。

豫言者よ、若し女子の信者が汝に來りて、下の如く誓はば、その誓言を納れて彼女等のためにアルラーハの宥恕を求めよ¹。何者をもアルラーハに配せず、盜まず、姦淫せず、子女を殺さず、自ら²捏造せる讒謗の言を發せず、正しき事に於て汝に背かず』と。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり³。

(1) 此の誓約は女子誓言と言はる。第二アカバ誓約以前は、男子の信者も同一の誓言をなせしが、第二アカバ誓約以後、

男子誓言には更に防護の一項を加ふ。(2) 原文『その手と足との間にて捏造せる虚言』。

汝等信者よ、アルラーハの怒に触れたる者を友とする勿れ。彼等是不信者が墓中の者に望を失へ
る如く、末世に望を失へる者なり¹。

(1) 復活を信ぜざる猶太人との友好を戒むるものなり。

第六十一列伍章

メヂナ啓示

第四節に『アルラーハは、堅固なる建築の如く、列伍を整へて彼のために戦ふ者を愛す』とあるに因みて列伍章 *As-Saff* と名づけらる。内容は明白にメヂナ遷都以後に関するものなれども、アラビア原典に之をメッカ啓示とするもの多きは、或はホダイビーヤ休戦條約締結に際し、メッカ山谷に滞留しつつありし間に接受せる啓示とするによるか。果して然らば本章の啓示年代は遷都六年なり。

天地間の萬物はアルラーハを讃ふ。彼は偉力者・聰明者なり。汝等信者よ、何故に汝等は自ら行はざることとを口にするか¹。汝等が自ら行はざることとを口にすることは、アルラーハの最も惡むところなり。げにアルラーハは、堅固なる建築の如く列伍を整へて、彼のために戦ふ者を愛す⁴。

(1) 財産と生命とを献げてアルラーハのために戦はんと言ひ乍ら、ウホド会戦に於て背走せる者を指すとせらる。但し言行一致せざる偽信者一般を指せるものとも解せらる。

モ一ゼが其民に向つて是く言へる時を念へ『吾民よ、何故に汝等われを苦しむるか。汝等はわが

アルラーハより遣はされたる者なるを知れるに非ずや』と。而して彼等が迷ひ去れる時、アルラーハは彼等の心を迷はしめたり。アルラーハは作惡の民を導かず^五

またマリアの子イエスが是く言へる時を念へ『イスラエルの兒等よ、吾は汝等に遣はされたるアルラーハの使者なり。吾は吾以前に降されたる律法を確証し、且吾以後にアマツドと呼ぶ使者来るべしとの吉報を傳ふる者なり』¹と。然るにイエス諸の明証を携へて彼等に來れる時、彼等は『これ明白なる魔術なり』と言へり^六

(一) イエスがマホメットの出現を豫言せりとするものなり。新約ヨハネ傳第一四章第一七節、第一六章第七節参照。アマツド Ahmad は『讚美する者』、マホメット Muhammad は『讚美せらるる者』を意味し、共に同一語根 hand より出で、共通に使用せらる。回教徒はヨハネ傳の『助主 Palacrete』はアルマツド即マホメットなりとす。

イスラームに徴されながら、アルラーハについて虚偽の言を弄するより甚だしき不義あるか。アルラーハは不義の民を導かず^七 彼等その口を以てアルラーハの光明を吹き消さんとす。されど不信者が如何に嫌惡するとも、アルラーハは必ずその光明を完うせん^八 嚮導と眞教とを與へてその使者を遣はせるは彼なり。不信者が如何に嫌惡するとも、彼は之を以て一切諸教の上にあらしめ

汝等信者よ、われ汝等を痛烈なる懲罰より救ふべき一生業を指示すべきか。アルラーハ並に其の使者を信じ、その財産と生命とを献げてアルラーハの道に善戦せよ。汝等若し之を知らば、此事は汝等のために最も善し。彼は汝等の諸悪を赦し、汝等を河川流るる樂園に入らしめ、エデンの園の莊麗なる邸宅に住ましめん。そは偉大なる幸福なり。彼はまた汝等が愛する其他のものを賜ふべし。即ちアルラーハの佑助と目前の勝利となり。されば此の吉報を信者等に傳へよ。

汝等信者よ、アルラーハの輔士アシナールたれ。マリアの子イエスが、その使徒等に向つて『アルラーハのためにわが輔士たらん者は誰ぞ』と言へる時、彼等即ち『吾等アルラーハの輔士たらん』と答へたり。而してイスラエルの兒等の一部は信じ、一部は之を信ぜざりき。さればわれ信じたる者を援けて其敵に抗せしめ、忽ち勝利を彼等に得せしめたり。

第六十二集 會 章

メヂナ啓示

第九節に『集會の日に禮拜に招ぐ声を聞かば、急ぎてアルラーハを念じ、その仕事を措け』とあるに因みて集會章 *Al-Jumu'* と名づけらる。集會の日とは即ち金曜日にして、アルラーハが天地創造を了へたる日、またマホメットが初めてメヂナに入りたる日にして、回教の禮拜日なり。遷都二一四年の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

天地間の萬物はアルラーハを讃ふ。彼は王者・聖潔者・偉力者・聰明者なり一 蒙昧なる民に対して、その同族の間より一豫言者を遣はし、その休徴を彼等に復誦し、彼等を潔め、經典と智慧とを彼等に教へしむる者は彼なり。彼等は従来明白なる迷誤の中にありし者なりニ 而して彼等のうちには未だ歸信せざる者あり。されど彼は偉力者・聰明者なりニ 此れアルラーハの恩寵なり。彼は己れの欲する者に之を賜ふ。アルラーハは偉大なる恩寵の主なり^四

律法を荷はしめられて而も之を守らざる者は、譬ふれば書冊を荷ふ驢馬の如し。アルラーハの休

徴を虚偽なりとする民の情状は惡むべきかな。アルラーハは不義の民を導かず^五 言へ『汝等猶太人よ、汝等若し萬民に超えてアルラーハに寵愛せらるると稱するならば、而して汝等の言眞実ならば、直ちに死を希へ』と^六 されど彼等は、其手が豫め送れることのために、決して死を希はざるべし。されどアルラーハは不義者を知悉す^七 言へ『汝等設ひ死を逃避せんとするも、死は必ず汝等に追及せん。然る後に汝等は、不可見と可見のものを知る彼に歸らん。其時彼は汝等に向つてその為せることを告知すべし』と^八

汝等信者よ、集会の日に禮拜に招ぐ声を聞かば、急ぎてアルラーハを念じ、汝等の仕事を措け。汝等知らば是くするは汝等のために最も善し^九 禮拜了らば即ち田野に散じ、アルラーハの恩恵を求め、不断にアルラーハを念へ。然らば汝等榮ゆべし^{一〇} 然るに彼等商貨を見、または遊戯を見る時は、忽ち禮拜を棄て、走りて之に赴く¹ 言へ『アルラーハが有てるものは、商貨よりも遊戯よりも善し。アルラーハこそ最善の給與者なれ』と^二

(一) 或る金曜日、マホメットが禮拜を司会し居たる時、偶々一隊商のメヂナに到着せるあり。会堂に在りし信者等、その太鼓の轟くを聞くや、僅に十二名を除きて、他は悉く隊商を見んがために走り去れりと傳へらる。

第六十三 偽信者章

メヂナ啓示

第一節に『偽信者等が汝に来る時』とあるに因みて偽信者章 *Al-Munafiqan* と名づけらる。遷都四年の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

偽信者等が汝に来る時、彼等曰く『吾等は汝がアルラーハの使者なることを証言す』と。されどアルラーハは、汝が己れの使者なることを知り、また偽信者が虚言者なることを立証す^一。彼等は信仰を以て護身の装束となし、人をアルラーハの道に背かしむ。彼等の為すことは禍なるかな^二。そは彼等一旦信じて、後に之を棄てたるが故なり。彼等の心は封ぜられたり。されば彼等は理解することを得ず^三。汝が彼等を見る時、その風貌は汝を欣ばしめ、彼等が汝等に語る時、汝は其言に耳傾く¹。されど彼等は壁に凭れる枯木の如し。彼等は一切の騒音が、悉く己れを敵とするものの如く思惟す。彼等は敵なるが故に要愼せよ。アルラーハは彼等と戦ふ²。如何に彼等の迷へることぞ^四。彼等に向つて『いざ来れ、アルラーハの使者、汝等のために宥恕を乞はん』と言へば、彼等即ち其面

を背く。汝は彼等が傲然として踵を回すを見ん^五。汝が宥恕を乞ふにせよ、また乞ははざるにせよ、アルラーハは断じて彼等を宥恕せざるべし。アルラーハは作惡の民を導かず^六。是く言ふ者は彼等なり『アルラーハの使者に従ふ者に喜捨する勿れ。然らば彼等四散するに至らん』と^三。されど天地の宝庫はアルラーハに属す。而も偽信者は之を曉らず^七。彼等曰く『吾等若しメデナに歸らば、有力者は必ず無力者を放逐せん』と^四。されど力はアルラーハと其の使者と信者とに属す。而も偽信者は之を知らず^八。

(一) 偽信者の首領アブダラーハ・イブン・ウバイは、容姿端麗、言語明快なりしと言はる。(二) 『アルラーハは彼等と戦ふ』は『アルラーハよ、彼等を仆さんことを』の意味なり。(三) 此言はアブダラーハ・イブン・ウバイが実際に発せる言なりとせらる。メッカよりの移住者には生活困難なる者多かりしを以て、之に喜捨することを止めなば、窮乏に堪え兼ねて四散すべしとの意味なり。(四) 同上。ムスタリーク遠征中にメデナ人と移住者との間に激しき争論起りし時、アブダラーハがメデナ人に対して告げたる言とせらる。

汝等信者よ、汝等の財宝と子女とのために、アルラーハを念ずることを忽せにする勿れ。是くの如くする者は淪喪者たらん^九。死が汝等の各自を襲ふ以前に、わが汝等に賜へるものうちより喜捨を行へ。そは彼が『主よ、暫時の猶豫を與へよ。然らば吾は喜捨を行ひて善行者とならん』と言

はざらんがためなり。定められたる時到来ば、アルラーハは何人にも猶豫を與へず。アルラーハは汝等の為すことを知る。

第六十四 相欺章

メヂナ啓示

第九節に『アルラーハが召集の日のために汝等を召集する日、其日は互に相欺く日なるべし』とあるに因みて相欺章 *Al-Ta-shabun* と名づけらる。メッカ啓示とせられ、ワイル、ムイア、セール等の諸学者は之に従ふも、冒頭の一節はメヂナ諸章の常用句なるのみならず、第一二節の『アルラーハ並に其の使者に従へ』といふ一句はメヂナ啓示に於てのみ見るものなる上、内容もまた遷都以後の事に関するものあるを以て、メヂナ初期の啓示とすべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

天地間の萬物はアルラーハを讃ふ。大権は彼に属し、讃頌は彼に属す。彼は全能なり。汝等を創れるは彼なり。而して汝等のうち一は信者、他は不信者なり。アルラーハは汝等の為すことを照覽す。彼は眞理によりて天地を創造し、汝等を形成して美しき姿を與へたり。而して汝等は皆な彼に帰る。彼は天地間の一切のものを知り、汝等の匿すことと並に露すことを知る。アルラーハは人が胸中に懐くことを知る。

古の信ぜざりし者が、己れの所行の惡果を味ひ、痛烈なる懲罰を受けたる諸の消息が汝等に達せざりしか^五。そは彼等の使者が、明白なる証據を携へて彼等に來れる時、彼等は『人間豈能く吾等を導かんや』と言ひ、之を信ぜずして背き去れるが故なり。されどアルラーハは彼等に頼らず。アルラーハは富有者・可頌者なり^六。信ぜざる者は想へらく、復活はあり得べからずと。言へ『神かけて言ふ、断じて有り。汝等必ず甦らしめらるべし。其時汝等はその為せることを告知せられん』と。そはアルラーハにとりて易々たることなり^七。

さればアルラーハ並に其の使者と、わが降せる光明とを信ぜよ。アルラーハは汝等が為すことを知悉す^八。彼が召集の日に汝等を召集する日、其日は互に相欺く日なるべし^九。さればアルラーハを信じて善事を行へる者は、かれその諸惡を拂拭し、之を河川流るる樂園に入らしめ、長久に其中に住ましめん。これ無上の幸福なり^{一〇}。されど信ぜずしてわが休徵を虚偽なりと言へる者は、火獄の党侶にして、永劫に其中に住まん。そは禍なる行先なり^{一一}。

(一) 此の一節もメヂナ啓示の常用句なり。(二) 善人は、若し彼等が惡人なりしならば懲罰を受くべかりしことを知り、

惡人は若し彼等が善人なりしならば樂園に入るべかりしことを知るべしとの意味。

如何なる災厄もアルラーハの允許なくして生ずることなし。而してアルラーハを信する者は、かれ其人の心を導く。アルラーハは萬事を知悉すニ。さればアルラーハ並に其の使者に従へ。されど設ひ彼等が背き去るとも、わが使者の務めは唯だ明白に使命を傳達するにありニ。アルラーハ、彼の外に神なし。信者をして彼に頼らしめよニ。

汝等信者よ、げに敵は汝等の妻子のうちにもあり。されば彼等に要慎せよ。されど汝等之を赦し、之を看過し、之を寛恕しなば、げにアルラーハは宥恕者・大慈者なりニ。汝等の財宝と子女とは、唯だ一個の試練にすぎず。唯だアルラーハの許にのみ偉大なる報賞ありニ。されば心を盡してアルラーハを敬ひ、之に聽き、之に従ひ、且喜捨を行へ。そは汝等のために最も善し。一心の貧慾を避くる者は栄ゆべしニ。而して汝等若しアルラーハに善き貸付を行はば、彼は汝等のために之を倍加し、且汝等を宥恕せん。アルラーハは願賞者・大度者なりニ。彼は不可見並に可見のもの能知者なり、偉力者・聰明者なりニ。

第六十五 離婚章

メヂナ啓示

第一一七節に、先に第二章に於て定めたる離婚法の改訂あるに因み離婚章 *Al-Talaq* と名づけらる。遷都六年の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

豫言者よ、汝等妻を離別せんとする時は、定められたる期間に之を離別し、その期間を精確に計算し¹、汝等の主アルラーハを敬へ。彼等が明白に姦淫を行へるに非ずば、期間満了以前に之を其家より逐ひ、又は自ら退去するを許す勿れ。これアルラーハの掟なり。アルラーハの掟を破る者は、げに己れの魂を害ふ者なり。汝は知らざれども、アルラーハは後に新しきことを生ぜしむるやも知るべからず²。定められたる期間満了しなば、或は懇ろに之を留置し、或は懇ろに之を離別せよ。而して汝等のうちより二名の証人を立て、アルラーハの前に正しく証言せしめよ。これアルラーハと末日とを信ずる者への訓誡なり。而してアルラーハを敬ふ者は、アルラーハ其人のために一出路³を示して⁴。彼が豫期せざる処より糧餉を賜ふことあらん。げにアルラーハを頼る者には、アルラ

一ハあれば即ち足る。アルラーハは必ずその目的を遂ぐ。而してアルラーハは一切のものに限度を定めたり^三

(一) 第二章第二二八節以下参照。(二) 夫婦を和解せしめて再び相結ぶこともあらんとの意味。(三) 出路とは離別の悲哀より脱する路。

汝等の妻のうち経水の望なき者を離別せんとする時、汝等若し疑心を抱かば、その守るべき期間を三個月と定む。未だ経水なき者もまた同じ。懐胎せる妻の場合は、その期間を分娩までと定む。

アルラーハを敬ふ者には、彼は事を容易ならしむ^四。これアルラーハが汝等のために降せる掟なり。而してアルラーハを敬ふ者には、彼その諸悪を拂拭し、その報賞を加増すべし^五。

汝等己れの資力に応じて妻を己れの住居に住ましめよ。その生活を窮迫せしめて之を苦しむる勿れ。妻若し妊娠中ならば、分娩するまで之に給與せよ。妻若し汝等のために哺乳する場合は、その報酬を之に與へ、汝等の間に懇ろに商量せよ。汝等若し困難を感じなば、他の女子をして父のために其兒を哺乳せしめよ^六。富裕なる者はその富裕のうちより支出し、生計豊かならざる者は、アルラーハが彼に賜へるもののうちより支出せよ。アルラーハは仁人にも彼が其人に賦與せる以上を強

要せず、アルラーハは苦の後に樂を與ふ

如何に多くの都府が、其主並に其の使者の命令に背けることぞ。されば吾は嚴厲なる清算を以て清算し、峻烈なる懲罰を以て懲罰せり。彼等はその所行の惡果を味へり。彼等の所行の結末は滅亡なりき。アルラーハは彼等のために嚴厲なる懲罰を準備せり。されば汝等思慮ある者よ、アルラーハを畏れよ。汝等信ずる者よ、アルラーハは汝等に訓誡を降したり。またアルラーハの明瞭なる休徵を汝等に復誦せしめ、信じて喜事を行ふ者を黒闇より光明に入らしめんがために、一人の使者を遣はしたり。アルラーハを信じて善事を行ふ者は、アルラーハ之を河川流るる樂園に入らしめ、長久に其中に住ましめん。アルラーハは善美なる糧餉を彼のために準備せり。

七天を創造し、また之に類する大地を創造せるはアルラーハなり。命令は天地の間に降る。そは汝等をしてアルラーハが全能にして、その知識は一切を抱擁することを知らしめんがためなり。

第六十六 禁止章

メヂナ啓示

第一節に『禁止』の語あるに因みて禁止章 *At-Tahrim* と名づけらる。本章の前半は、マホメットが其妻ハフサ *Hafsa* に定められたる日に、他の妻マリーヤ *Mariya* と同衾せることによつて醸されたる家庭の紛糾に関連せる啓示なり。マリーヤは、遷都七年埃及太守がマホメットに贈れる若くして美しきコプト女子にして、マホメットの男兒イブラーヒームの母なり。ハフサはマホメットの所行に激怒せしを以て、マホメットは彼女を宥むるため、今後決してマリーヤに触れざるべしと誓ひ、且此の出来事を極秘に付すべきことを命じたり。然るにハフサは此事をアーイシャに告げたりしを以て、マホメット怒りてハフサを離別し、且一箇月に亙りて総ての彼の諸妻より遠ざかり、其間唯だマリーヤとのみ同居せり。此の啓示は、マリーヤに触れずとの彼の誓言を取消し、且諸妻の言行を譴責せるものなり。他の傳承によれば、其日はアーイシャに定められたる日なりしが、マホメットはハフサの室にてマリーヤと相会し居たるをハフサに発見せられたるなりと言ふ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

豫言者よ、何故に汝はアルラーハが汝に合法なりとせることを禁止して、諸妻の歡心を求めんとするか。アルラーハは宥恕者・大慈者なり。アルラーハは汝が是くの如き誓言を解くことを允許

す。アルラーハは汝等の守護者なり。彼は能知者・聰明者なりニ

(1) マホットがハフサに対して今後決してマリーヤに触れずと誓言せることを指す。

豫言者、其妻の一人に秘密を守るべき最近の出末事を告げたる時、彼女は之を漏洩したり¹。アルラーハ此事を彼に知らしめしかば、彼は一部を彼女に言明し、一部は言明を避けたり。かれ此事を告げたる時、彼女曰く『之を汝に告げたるは誰ぞ』と。彼曰く『能知者・知悉者之を吾に告げたり²。汝等²兩人の心は僻めるが故に、兩人若しアルラーハに向つて懺悔すれば即ち可なり。されど若し兩人相助けて豫言者に抗する如きことあらば、アルラーハが彼の守護者なること、ガブリエル及び義しき信者もまた然ること、さては彼等の外に諸天使が彼の佑助者なることを知れ⁴。彼若し汝等を離別しなば、主は汝等の代りに更に善き諸妻を彼に與へん。そは婦命者⁵、篤信者、敬虔者、懺悔者、礼拜者、齋戒者にして、既に男子を知れる女子あり、また処女もあらん』と⁵

(1) ハフサがアイシヤに告げたることをと指す。(2) ハフサとアイシヤ。

汝等信者よ、人と石とを薪とする火獄に対して、汝等自身と汝等の家人とを護れ。火獄の上には嚴厲にして猛烈なる諸天使あり。彼等はアルラーハの命令に従はずといふことなし。彼等は命ぜら

れたることを行ふ。(是く言はれん)『汝等不信者よ、今日は汝等自ら辯疏する勿れ。汝等は唯だその為せることに対して報いらるのみ』とせ

汝等信者よ、眞実なる懺悔を以てアルラーハに懺悔せよ。主は汝等の諸惡を拂拭し、河川流るる樂園に汝等を入らしめん。其日アルラーハは、豫言者並に彼と信仰を共にする者を辱しめざるべし。彼等の光明は、その前方に馳せ、またその右方に馳せん。而して彼等は言はん『主よ、吾等のために光明を完うし、また吾等を宥恕せよ。げに汝は萬事を能くす』とせ

豫言者よ、不信者と偽信者に対して善戦せよ、彼等に対して嚴厲なれ。彼等の歸處は地獄なり、そは禍なる行先なり

アルラーハは、信ぜざる者のために一先例を述ぶ。そはノアの妻並にロトの妻のことなり。彼等はわが義しき僕等のうちなりしが、其妻は彼等に背きたり。而して彼等はアルラーハに対して其妻のために一事を為し得ざりき。彼女等は唯だ『墮獄者と共に墮獄せよ』と言はれたり

アルラーハは、信ずる者のために一先例を述ぶ。そはファラオの妻のことなり。彼女曰く『主よ、樂園の中に汝に近くわがために一屋を建てよ。吾をファラオ並に彼の所行より救ひ、また吾を不義の民より救へ』とせ。またイムラーンの女マリア(の先例あり)。彼女は貞潔なりしかば、わ

れ吾靈を彼女に吹き入れたり、かくて彼女は其主の言と經典とを信じ、篤信者の一人となれり三

第六十七 大 權 章

メヅカ啓示

第一節に『大權を握る彼を祝福せよ』とあるに因みて大權章 *Al-Mulk* と名づけらる。メヅカ中期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

大權を握る彼を祝福せよ、彼は萬事を能くす一 彼は汝等を試みて、言行最勝なるは誰なるかを知らんがために、生と死とを創造せり。彼は偉力者・宥恕者なり二 彼は層々相重なる七天を創造せり。汝は大悲者の創造に、如何なる参差不同をも見るを得ず。目を挙げ見よ、汝は一微瑕をだも見るか三 目を挙げて見、また目を挙げて見よ。汝の視力は疲れ弱りて己れに歸り来らん四 而して吾は燈明を以て下層の天を飾り、之を以てサタンを逐ふ火箭となせり。吾は彼等のために烈火の刑を備ふ五

其主を信ぜざる者には地獄の刑罰あり。そは禍なる行先なり六 彼等其中に投ぜらるる時、火獄沸騰して其声驢馬の鳴くが如くなるを聞き七 激怒のために破裂し去らんとするが如くなるを見

ん。而して彼等の一團が之に投ぜらるる毎に、その守衛等は彼等に問はん『汝等に警告者来らざりしか』とハ。彼等は答へん『然り、一警告者吾等に来れり。されど吾等は之を虚言者と呼び、[▲]アルラーハは何ものをも降さず、汝等は大なる迷路の中にあるのみ』と言へり』とカ。彼等また言はん『吾等之に聽きたりせば、また吾等に思慮ありたりせば、吾等は烈火の党侶に加はらざりしものを』とヨ。彼等は己れの諸惡を告白すべし。(されど彼等は唯だ)『退れ、火獄の徒は!』(と言はれん)一。げに密かに其主を敬へる者には、宥恕と重賞とあらん三。汝等秘かに言ふも、また公けに語るも、彼は人が胸中に懐くことを知る三。彼豈己れの創れる者を知らざらんや。彼は靈妙者・知悉者なり四。

汝等のために大地を平坦ならしめたるは彼なり。されば汝等その諸地域を往來し、彼が賜ふ糧餉を食へ。復活とは彼に帰ることなり五。天上にある彼が、大地をして汝等を吞下せしむることなしと安心し得るか。げに其時大地は震撼すべし六。天上にある彼が、砂石を飛ばす烈風を汝等に送ることなしと安心し得るか。其時汝等わが警告の眞意を曉るべし七。

げに彼等以前の者も諸使者を虚言者と呼べり。而も見よ、わが激怒の如何なるものなりしかを八。彼等は双翼を伸縮して彼等の上を翔くる鳥類を見ざるか。彼等を支ふる者は大悲者に非ずして誰

ぞ。げに彼は萬事を照覽す元。大悲者に対して汝等を援くる軍兵たるべき者は誰ぞ。げに不信者は唯だ迷妄の中にあリ言。彼若しその給與を止めなば、汝等を養ふ者は果して誰ぞ。然る彼等は依然として頑冥に、且之を忌避す三。面を伏せて行く者は、正道を邁往する者よりも善く導かるとするか三。言へ『汝等を生み、汝等のために耳と目と心とを創れるは彼なり』と。然るに汝等は殆ど感謝せず三。言へ『汝等を地上に繁殖せしむるは彼なり。而して汝等は彼に召集せられん』と言。彼等曰く『汝等の言眞実ならば、此の約束の実現せらるるは何時ぞ』と云。言へ『唯だアルラーハのみ之を知る。吾は唯だ公然の一警告者にすぎず』と云。されど其の近づくを見るに及んで、不信者の面は悲憂に曇らん、而して彼等に言はれん『汝等が常に求めたるは即ち是なり』と云。

言へ『汝等如何に思ふか、アルラーハが吾並に吾と偕なる者を滅ぼすにせよ、或はかれ吾等に慈悲を垂るるにせよ、痛烈なる懲罰に対して不信者を護る者は果して誰ぞ』と云。言へ『彼は大悲者なり。吾等は彼を信じ、彼に頼る。やがて汝等は明白に迷誤の中にあリし者の誰なるかを知らん』と云。言へ『汝等如何に思ふか。水が地下に沈み去る時、再び之を湧出せしむる者は果して誰ぞ』

第六十八 筆翰章

メッカ啓示

第一節に『筆並に之を以て彼等が書きたるものによりて誓ふ』とあるに因みて筆翰章 *Al-Qalam* と名づけらる。本章は古来回教神学者によつて、最初の啓示とせらるる第九十六章に直ちに次ぐものとせらる。蓋し第九十六章に『彼は筆を以て教へたり』とあり、本章の『筆』は之と連関せるものとするが故なり。本章は疑ひなく最も早期のメッカ啓示に属するも、第一七一—三三節並に第四八一—五〇節等の如く、メデナ啓示と思はるる諸節をも含めり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

ヌーン。筆並に之を以て彼等が書きたるものによりて誓ふ¹。主の恩寵によりて汝は決して憑かれたる者に非ず²。げに汝は必ず不朽の報賞を獲べく³。汝の本性は高貴なり⁴。やがて汝は見るべく、彼等また見るべし⁵。汝等孰れが亂心者なるかを⁶。げに汝の主は己れの道より迷ひ去る者を熟知し、また正しく導かるる者を熟知す⁷。

(1) 『筆』は天上にある筆にして、『彼等』とは諸天使なり。(2) マホメットが最初に新しき信仰を宣べたる時、専ら取沙汰せられたることは、彼が幽鬼に憑かれたりといふことなりき。

されば汝を虚言者と呼ぶ者に屈從する勿れ^ハ 彼等は汝が彼等と妥協せんことを望み、彼等もまた汝と妥協せんことを望む^ル 汝はかの賤しむべき誓言者^ニ 讒誣に狂奔する誹謗者^ニ 掟を破り罪を犯す善事の阻害者^ニ 財宝と子女とを有するも、卑陋にして素性賤しき者に屈從する勿れ^ニ わが休徴が彼に讀誦せらるる時、彼は言へり『これ古人の物語にすぎず』と^云 吾は彼の鼻上に烙印せん^ニ

(1) この一段はワリード・イブン・ムガイヤラ *Walid ibn Mughaira* を対象とせるものとせらる。賤しき素姓とは、ワリードが私生兒にして、父ムガイヤラは彼が十八歳に達するまで、之を実子として承認せざりしことを言ふ。

げ¹に吾は曾て果樹園の所有者等を試みたる如く彼等をも試むべし。其時果樹園の所有者等は、翌朝果実を摘まんと約束せしが^モ 異例を加ふることを忘れたり^タ² かくて彼等の眠れる間に、汝の主が降せる災厄之を囲み^テ 翌朝には園内の果実悉く摘み去られたるが如くなれり^ニ 而して翌朝彼等互に呼んで曰く『急ぎ園³に往きて果実を摘まん』と^云 彼等道すがら低声に相語りて曰く『今日は一貧人も入りて吾等を妨ぐるを許さず』と^云 彼等かく思ひ定めて拂曉に出でたりしが^ニ 往きて園を見るに及んで即ち曰く『げに吾等は誤れり^ニ 否な、吾等は收穫を禁ぜられたるなり』

と云 彼等のうちの殊勝なる者曰く『吾は汝等に何故にアルラーハを讃へざるかと言へるに非ずや』と云 彼等曰く『吾等の主を讃へよ、げに吾等是不義者なりき』と云 而して彼等進み出でて互に他を責めたり言 彼等曰く『吁、げに吾等は背逆者なりき』 希くば主が之に代る更に善きものを吾等に賜はらんことを。げに吾等は此事を吾等の主に嘆願す』と云 かくの如きはわが懲罰なり。而して来世の懲罰は更に重し。彼等此事を知りたりせば！』

(1) 此の一段はメヂナ啓示なるべしとせらる。果樹園の所有者に関する傳承は下の如し。昔ヤマンのサナア郊外に棗椰子園を所有せる富者あり。收穫時には落ちたる椰子果を拾はしめて貧者を潤ほせしが、其子之を嗣ぐに及び、慳吝にして他に施すことをせざりしため、天譴を蒙りて椰子園は荒廢に歸したりきと。(2) 『アルラーハ若し欲したば』と附加することを忘れたるを言ふ。アルラー 欲したば、收果不可能となること、即ち異例もまたあり得べし。(3) 『急ぎ』と言ふは、早朝貧者の来りて落果を拾ふ以前に收果せんがためなり。

げ¹に其身を護る者は、必ず其主の許に歡喜の樂園を獲ん言 われ歸命者^{ムスリミン}を遇すること、罪人を遇する如くなるべきか言 汝等何を苦しんで是くの如く判断するか言 汝等經典を有するか。汝等之を學んで言 己れが扱ふものを必ず獲らるべしとするか言 汝等は復活の日に及ぶ誓約を吾と結びて、己れが判断せるものを必ず獲らるべしとするか言 彼等に問へ、彼等のうち之を保證するもの

は誰ぞと^四 彼等は(之を保証する)伴侶^二を有するか。 彼等の言眞実ならば、その伴侶を伴ひ来
れ^四

(一)この一段は不信者等が若し復活が事実とするも、彼等は現世に於て然る如く、来世に於てもマホメットの信者の下風
には立たざるべしと言へるに答へたるものとせらる。(二)アルラーハに配する他の神々の意味とも解釈せらる。

脛が露さるる日^一、彼等は叩首せよと告げらるるも、之を能くせざるべし^三 彼等は其目を伏せ、
羞辱は彼等を覆はん。そは彼等安泰なりし日に、叩首せよと告げられて之に従はざりし故なり^三
されば此教を虚偽なりとする者を吾に委ねよ。われ彼等の知らざる道によりて、歩々彼等を滅亡に
導かん^四 吾は彼等を放任すべし。わが計画は堅確なり^四

(一)復活の日。脛を露すとは困苦する時の身仕度なり。

汝は報償を彼等に求めて其の負担を重くせるか^四 又は彼等不可見のことを知りて自ら之を書き
得るか^四

耐え忍びて主の審判を待て。絶望して叫べる魚の同伴者^一の如くなる勿れ^四 若し其主の恩寵が彼
に降らざりせば、彼は譴責せられて不毛の地に棄て去られしなり^四 されど主は彼を選びて義人の

うちに加へたり。

(1) ヨナのこと。第三十七章第一三九—一四八節参照。

不信者が古蘭の警告を聴く時、彼等其目を以て殆ど汝を卒倒せしめんとす。而して曰く『げに彼は憑かれたる者なり』と云。されど古蘭は三界への教誡に外ならず。

第六十九 必來者章

メッカ啓示

第一節に『必來者』とあるに因みて必來者章 *Al-Haqqah* と名づけらる。必來者の原語 *Al-Haqqah* は眞実又は実在を意味し、末日即ち最後審判の意味に用ゐらるるも、同時に現世に於けるアルラーハの懲罰、即ち一切の災厄をも含む。例へば本章中に見ゆるアアド及びサムードの民に加へられる天譴の如し。メッカ初期の啓示とすべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

必來者一 必來者とは何ぞニ 汝に必來者の何たるかを知らしむるものは何ぞニ

サムード並にアアドは末日¹を虚偽なりとせり^四 さればサムードは非常事²によつて亡び^五 アア

ドは咆哮する烈風によつて亡べり^六 彼は七日八夜間断なく此風を彼等に驅れり。其時汝は、人々が空³なる棗椰子樹の如く地に仆るるを見得たりしなり^七 いま汝は一人だも彼等の遺類を見得るか^八 ファラオ並に彼以前の民、さては顛覆せる諸都府の民も、皆な悪事を行ひ^九 其主の使者に抗したり。さればかれ痛烈なる懲罰を以て彼等を懲罰せり^三 げに洪水氾濫せる時、われ汝等を舟

に乗らしめたるは二 之を以て汝等への訓誡となし、また留意する耳に之を記憶せしめんがためなり
りみ三

(1) 末日の原語は *Al-Qari'ah*。打撃者の意味なり。(2) 非常事の原語は *Al-Taghayyah*。限度を越えたる事の意味。

喇叭一たび鳴り三 大地は群山と共に擡げられて、一撃の下に両者が撃碎せらるる時四 此日にこそ一¹大事は突発するなれ五 此日蒼穹は脆弱となりて崩裂し六 諸天使は各自の区域を守らん、而して彼等の上に八天使ありて、此日汝の主の宝座を荷はんモ

(1) 一大事の原語は *Al-Waqi'ah*。突発する重大事件の意味。

此日汝等は彼の前に伴はれん。其時汝等が匿せることは一も掩ふことを得ざるべし八 而して右手にその行狀記を渡さるる者は即ち言はん『いざ、取りてわが書冊を讀まん。げに吾は必ず清算せらるべきことを知り居たり』と言 かくて彼等は高濶なる樂園の中に、快適なる生活を営み三・三 鮮果は其手の達するところにあらん三 (彼等に言はるべし) 『暢然として食ひ且飲め。これ過ぎし日に豫め汝等が送れるものに対する報賞なり』と言

されど其の左手に行狀記を渡さるる者は即ち言はん『吁、われ此の書冊を渡されざりせば！』

吾はわが清算の如何なるものなるかを知らざりき。吁、死がわが終局にてありたりせば！わが財宝は吾を益せず。わが権勢は吾を去れり』と云。（彼等に言はるべし）『彼を捕へて之を縛り。地獄に投じて之を燻け。然る後に七十尺の鐵鎖に之を繋げ。げに彼は至大者アルラーハを信ぜず。また進んで貧者を養はざりき。されば此日彼は此処に一人の友もなし。また彼は汚らはしき膿の外に食物もなし。之を食ふは唯だ罪人あるのみ』と云。

吾は汝等の見得るもの。並に汝等の見得ざるものによつて誓ふ。古蘭は実に高貴なる使者の言なり。そは詩人の語に非ず。汝等何ぞ信すること少なき。そは卜者の語に非ず。汝等何ぞ思ふこと少なき。古蘭は実に三界の主より降されたるものなり。汝若し汝について虚偽の言を弄したりとすれば。吾必ず彼の右手を捕へ。その頸脈を断たん。而して吾は彼に対して汝等の何人をも制止せざらん。されど古蘭は其身を護る者への訓誡なり。吾は汝等のうちに之を虚偽なりとする者あるを知る。げにそは不信者の長嘆の因たるべし。そは古蘭が確實なる真理なるが故なり。さらば至大者たる汝の主の名を讚へよ。

第七十 階段 章

メツカ啓示

第三節に『登高の階段の主アルラーハ』とあるに因みて階段章 Al-Ma'arij と名づけらる。メツカ初期中の末期の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

間者あり、不信者の上に降るべき懲罰について問へり一 そは何人も忌避する能はずニ そは登高の階段の主アルラーハより出づニ この階段は諸天使並に聖靈が、一日にして彼の許に登り往く階段なり。その一日は五千年に當る四 されば見事なる忍耐を以て忍耐せよ五 げに彼等は之を遠のこととするも六 吾はその近きを見るセ 其日蒼穹は變じて溶銅の如くハ 群山は變じて羊絨の如く九 友人は相見えて互に問ふことを得ざるべし一〇 作惡の人は、此日の刑罰を免れんがために、其子ニ 其妻及び兄弟三 庇護を受くる一族三 及び若し己れを救ひ得なば、地上一切の人を以て其罪を贖はんと希ふべし四 断じて能はず げに烈々たる獄火は五 彼等の頭顱を捉へて之を

曳き云 退轉して踵を回さんとする者云 並に富を積みて之を藏せる者を喚ぶべし云

げに人間は性急短氣に創られたり云 艱難に遭へば即ち焦慮し云 幸運到れば即ち慳吝となる云

一切の礼拜する者は即ち然らず云 彼等は常に礼拜を守り云 其の財宝の適宜の一部を云 来りて

乞ふ者並に羞ぢて乞はざる者に充つ云 又 貞潔を守る者云 其主の懲罰を恐るる者云 一

げに主の懲罰は油断すべからず云 貞潔を守る者云 但し諸妻並に諸婢と偕なるは罪なし。

此等以外に求むるは違背なり云 又 貞潔を守る者云 又 正しく証言する者云 又 礼拜

を格守する者云 此等の者は榮譽を得て樂園の中に住まん云

不信者等が左右に群をなして汝の身邊に奔馳するは何のためぞ云 彼等は皆な歡喜の樂園に入

ることを希ふか云 断じて能はず。げに吾は彼等が知れるものにて彼等を創れり云 吾は東西の主

によつて誓ふ云 吾は能く彼等に代ふるに彼等より優れる者を以てし得べし。而して吾は之を妨げ

らるることなし云 されば約束せられたる彼等の日まで、彼等を空しく嬉戯せしめよ云 其日彼

等は、宛も士卒が軍旗の下に集まる如く、急ぎて墓を出でん云 其時彼等その目を伏せ、羞辱は彼

等を覆はん。これ彼等が約束せられたる日なり云

(一)卑しき一涓滴より創れること。従つて樂園に入るためには、信仰によつてその心身を潔むることを必要とす。

第七十一 ノア章

メツカ啓示

ノアの説教を主題とするが故にノア章 *NOAH* と名づけらる。メツカ初期の啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

げに吾は『痛烈なる懲罰が汝の民に降る以前に彼等を警めよ』と告げて、ノアを其民に遣はしたり一 彼曰く『吾民よ、吾は汝等に遣はされたる公然の警告者なりニ 汝等アルラーハに事へ、之を敬ひ、之に従へニ 彼は汝等の諸悪を宥恕し、定められたる時まで汝等を猶豫すべし。されどアルラーハが定めたる時到来ば、断じてまた遅延を許さず。汝等此事を知りたりせば！』と四

彼曰く『主よ、げに吾は日夜吾民に呼びかけたり五 されどわが招呼は唯だ彼等の逃避を増長するにすぎず六 げにわれ彼等と呼びて、汝は彼等を赦さんと告ぐる毎に、彼等は指を以て其耳を蔽ひ、衣を以て其身を覆ひ、依然として反抗し、傲然として自ら矜る七 げに吾は声を高くして彼等と呼べり八 げに吾は公けに語り、私かに訴へたり九 吾は言へり十 汝等の主の宥恕を求めよ。げ

に彼は寛恕なり云 彼は沛然たる雨を汝等に降しニ 財宝と子女とを以て汝等を助け、汝等のために田野を作り、河川を流れしむ三 汝等何を苦しんで偉大なるものをアルラーハより獲んと望まざるか三 げに彼は諸の段階を経て汝等を創れるなり四 汝等如何にしてアルラーハが層々の七天を創造せるかを見ざるか五 彼は月を光明とし、日を燈火とせり六 アルラーハは土より汝等を生れしめ七 次で土に歸らしめ、然る後にまた土より出で来らしむ八 アルラーハは汝等のために大地を絨毯の如くならしめ、汝等に大道を往来せしむ九と』云

(一) 第二二章第五節参照。

ノアまた曰く『主よ、げに彼等は吾に背きたり。彼等はその財宝と子女とが唯だ其人の滅亡を加ふる者に従へりニ 而して彼等は重大なる陰謀を企てたり三 彼等は言へり、汝等断じて汝等の神々を棄つる勿れ、ワッド、スウアー、ヤグース、ヤアウーク、ナスルを棄つる勿れ¹と三 かくして彼等は多くの人々を迷はしめたり』と。されば汝もまた作悪者をして其の迷誤を増長せしむるにすぎざるべし云 されど彼等は、その諸悪のために溺没せしめられ、次で火獄に投ぜらるるなり。而して其時彼等はアルラーハの外に如何なる佑助者もなきことを知らん云

(1) Wadd・Suw'a・Yaghos・Ya'uq・Nasr はアラビアの諸部族が拜せる神々にして、ワッドは男身、スウアーは女身、ヤグースは獅子身、ヤアウークは馬身、ナスルは鷲身の神なりとせらる。

ノア曰く『主よ、地上に不信者の遺類なからしめよ。若し遺類あらしめば、彼等必ず汝の僕等を迷はしめ、唯だ背徳忘恩の子孫を生まん。主よ、吾とわが父母、信じて吾家に入る者、及び男女の信者を宥恕せよ。不義者の上には滅亡以外に何ものを加へざれ』と云。

第七十二 幽鬼章

メッカ啓示

第一―五節の主題が幽鬼なるに因みて幽鬼章 *Al-Jinn* と名づけらる。マホメットがタイイフ傳道に失敗してメッカに歸る途上、ナクラ山谷に於て一群の幽鬼の歸依を受けたることは、既に之を述べたり。本章は此事ありし後の啓示なれば、メッカ末期のものに属す。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『吾は是くの如く默示せられたり。一群の幽鬼、耳を側てて曰く『吾等は驚嘆すべき古蘭を聴けり』。そは直き道に導くものなり。吾等は之を信じ、何者をも吾主に配せざるべし』。吾等は信ず、彼は――崇高なるかな吾主の稜威は――妻なくまた子なきことを』。吾等は信ず、吾等のうちの頑愚なる者は、アルラーハについて最も荒誕なる言をなせることを』。げに吾等は、人間と幽鬼とは、決してアルラーハについて荒誕なる言を弄する者に非ずと思ひたりき』。

『げに人間の或者は、幽鬼の或者に加護を求む。されど彼等は之によつて唯だ幽鬼の悪行を増長

せしむるにすぎず^六。而して彼等もまた汝等と同じく、アルラーハは何者をも魁らしむることなしと思へり^七。

『吾等は天上に登らんとせり。されど吾等は、強大なる護衛と火箭とが、一天に満つるを見たり^一。吾等曾ては偷み聴くために天上の座席に坐するを常とせり。されどいま偷み聴かんとする者は、彼を待ち構へたる火箭あるを見ん^九。げに吾等は此事が地上に住む者に禍を加へんとするためなるか、將又主は之によつて彼等を正しく導かんとするためなるかを知らず^二。』

(一) 恰も此頃、天上に流星夥しく、且其他の異象多かりしかば、当時の占星家は恐懼して一切の卜占を中止せりと傳へらる。而してマホメットは此等の流星を以て、天上の會議を偷み聴かんとして昇天するサタン又は幽鬼に対し、一天守護の任に當る諸天使が放つ火箭なりと考へたること、前述の如し。(二) 此事とは幽鬼をして天上の會議を偷み聴かしめざること。其事が人間にとりて幸福なるか不幸なるかを知らずとの意味。

『吾等のうちには義しき者あり、また然らざる者あり。吾等は道を異にする諸派に分る^一。吾等は地上に於てアルラーハを凌ぐこと能はず、また逃避して彼より免るること能はざるを知れり^三。吾等は古蘭の嚮導を聽きて之を信じたり。而して其主を信ずる者は、損失を恐れず、また迫害を恐れず^三。吾等のうちには既に歸命者^{ムスリム}となれる者あり、また惡事を行ふ者もあり。歸命者となれる者

は直き道を邁往す^二 而して惡事を行ふ者は、火獄の薪とならん^一と』^三

彼等若し直き道を往かば、われ豊かに飲むべき水を與へ^二 之によつて彼等を試みん。而して其
主の訓誡を忌避する者は、かれ之を極刑に逐ひやらん^一

禮拜堂は専らアルラーハの有^もなり。されば此中にてアルラーハと共に何者をも拜する勿れ^二 あ
ルラーハの僕が禮拜のために起立せる時、彼等は息づまるまで彼に押寄せざり^一と^九

(一) 『アルラーハの僕』はマホメットなれど、『彼等』とは何を指せるか不明なり。或は之を以て幽鬼の群ありとし、或
はターイフの不信者なりとす。

言へ『吾は唯だアルラーハを拜し、何者をも彼に配せず』と^三 言へ『げに吾は汝等を害するこ
とを得ず、また益することを得ず』と^三 言へ『何者もアルラーハに対して吾を護る能はず、また
吾は彼の外に加護を求むるところなし^三 わが務めは唯だアルラーハの使命と其の消息との傳達に
あり。而してアルラーハ並に其の使者に背く者には地獄の火あり、彼等永劫に其中に住まん』と^三
彼等その約束せられたることを目睹するまで疑ふべし。其時に及んで彼等初めて助力に於て最も
弱く、人数に於て最も少なかりしは誰なるかを知らん^二 言へ『吾は汝等に約束せられたることを

近く来るか、將又吾主は之に遠き期限を定めたるかを知らず。されど
己れが選べる使者の外には、何人にもその秘密を示さず。而して彼は護衛者に命じて使者の前後
に行かしむ』と云。これ彼が果して使者が其主の使命を傳達するや否やを知らんがためなり。彼は
彼等の有てるものを圍繞し、萬事を計算す云。

第七十三 着絨衣者章

メッカ啓示

第一節に『絨衣を着たる者よ』とあるに因みて着絨衣者章 *Al-Muzzamil* と名づけらる。着絨衣者とは、絨衣を纏ひて床に就けるマホメットを指す。本章は、明白にメヂナ啓示とすべき第二〇節を除き、メッカ啓示の最も初期に属するものの一にして、ロッドウェルは之を全古蘭の第三次の啓示となし、所謂『中断』以後の第二のせのとなせり。但しネルデケは之を第二十三次、ムイアは第三十三次の啓示となす。いづれにもせよ、本章は、中断以後の或る期間に、マホメットが夜も夢をたさずして祈り且思へる頃の啓示なりとす。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

絨衣を着たる者よ一 暫時の間を除き、夜も起きて礼拜せよニ 半夜にて可なり。また之より短くとも三 又は長くとも可なり。而して音調を整へて古蘭を朗誦せよ四 吾は重大なる言を汝に授けんとす五 げに初夜は印象深刻に、言語明確なり六 げに汝は晝間に長時の用務あり七 されば汝の主の名を念じ、至心の帰依を以て帰依せよ八 彼は東西の主なり。彼の外に神なし。彼を汝の守護者とせよ九

彼等の言を耐え忍び、礼儀正しき遠離を以て彼等を遠難せよ。現世の安樂を事として眞理を否む者を吾に委ねて、汝は暫く彼等を堪忍せよ。げに吾には重き鐵鎖、燃ゆる獄火、^{たげ}哽ぶ食物、また痛ましき懲罰あり。其日大地と群山と震撼し、群山は散砂の堆積とならん。

げに吾曾てファラオに使者を遣はせる如く、汝等の証人たるべき一使者を汝等にも遣はしたり。ファラオその使者に背きたるが故に、吾は嚴罰を彼に加へたり。汝等若し依然として帰信せずば、童子が白髪となる日に於て、汝等如何にして其身を護らんとするか。げに其日は蒼穹さへも崩裂せん。彼の約束は必ず果たさる。げにこれ一個の訓誡なり。されば欲する者に其主に至る道を探らしめよ。

¹主は汝が夜間の三分の二、又は半夜、又は三分の一を、起つて礼拝するを知る。汝と信仰を共にする者の一部も亦然り。晝夜を測る者はアルラーハなり。彼は汝等が正しく時刻を測り得ざることを知りて、慈顔を汝等に向く。²さらば古蘭中の容易なる諸節を朗誦せよ。汝等のうちには病者あり、アルラーハの恩恵を求めて地上を旅する者あり、またアルラーハの道に戦ふ者あり。アルラーハは能く之を知る。されば古蘭中の容易なる諸節を朗誦し、礼拝を守り、捐課を納め、アルラーハ

に善き貸付をなせ。汝等が己れのために豫め送る一切のものは、汝等必ずアルラーハの許に之を見ん。そは最善にして最大の報賞なり。さらばアルラーハの宥恕を求めよ。げにアルラーハは宥恕者・大慈者なり言

(1) 此の一節はネルデケが指摘せる如く『明白にメヂナ啓示』なり。(2) 時刻を誤ることを宥恕する意味。時刻を誤るまじとて徹夜する信者ありしたため、之を緩和したるなり。

第七十四 着套衣者章

メッカ啓示

第一節に『套衣を着たる者よ』とあるに因みて着套衣者章 *Al-Mudassir* と名づけらる。多くの学者は、本章を以て所謂中断後の最初のもの、従つて全古蘭中の第二次の啓示となす。之に關すを傳承は下の如し。長き天啓中断の後、マホメットはヒラー山中を彷徨しつゝありし間に、天使ガブリエルを望見し、その莊嚴を極めたる姿に恐懼し、妻カディージャの許に馳せ帰り、床上に横はりて身を外套に包ましめたり。其時ガブリエルが床上の彼に降臨して默示せるものが即ち本節の初五節なりとせらる。而して此時以来天啓相次いで降り、マホメットは次第に天啓の確實を信じ、自己の使命の重大なるを自覚し、起つて教を宣べよとの本章の默示に従ひ、アルラーハの使者としての任務に邁往するに至れるものなり。而してメッカ初期に於ては、本章並に前章に見るが如く。外套に身を包みて床上に横はりながら天啓を受くるを常とせりと言はる。本章のうち第三一節はメヂナ遷都以後に附加せられたるものとせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

套衣を着たる者よ一 起つて警告せよ二 汝の主、彼を讚へよ三 汝の衣、之を潔めよ四 不淨、

之を遠離せよ五¹

(1) 不淨とは多神崇拜を意味すとせらる。但し此の一節は『神怒、之を避けよ』とも解せらる。

返報の増多を求めて恩惠を施す勿れ^六 汝の主のために耐え忍べ^七 喇叭鳴る時^八 げに其日は
苦難の日^九 不信者にとりて容易ならざる日なり^{一〇}

わが創れる彼を吾に委ねよ^二 吾は巨富を彼に與へ^三 彼と偕に住む子女を與へ^四 彼のために
萬事を円滑ならしめたり^五 然るに彼は更にわが賜與を望む^六 断じて能はず。げに彼はわが休徴
に抗したり^七 吾は彼を驅りて嶮難なる山路を登らしめん^八 げに彼は熟慮せり、而して策謀せ
り^九 呪ふべきかな、如何に彼が策謀せることぞ^{一〇} 再び言ふ、呪ふべきかな、如何に彼が策謀せ
ることぞ^{一一} 次で彼は見たり^{一二} 次で額を蹙め、眉を蹙めたり^{一三} 次で傲然として背を向けて去れ
り^{一四} 而して言へり『こは傳習の魔術に外ならず^{一五} こは人間の言にすぎず』と^{一六} われ必ず獄火
にて彼を燔かん^{一七} 獄火の何たるかを汝に知らしむるものは何ぞ^{一八} そは何ものをも遺さず、何も
のをも餘さず^{一九} そは人の肉を焦く^{二〇} 而して其上に十九天使あり^{二一}

(1) 『彼』とはワリード・イブン・ムガイヤラを指すとせらる。第六八章第一〇節以下参照。(2) 子女が両親と共に住むことは富裕なる家族のみ之を能くし、多くのメッカ人け衣食を求めしめんがために其の子女を家より出だせり。

吾¹は唯だ天使のみを火獄の護衛者とせり。其数を十九となせるは、唯だ信ぜざる者を試みんがため、また受経者をして信心堅固ならしめんがため、また信ずる者をして益々篤信ならしめんがためなり。また受経者並に信者をして疑心を抱かざらしめんがため、而して其心に病ある者と不信者とをして「アルラーハは此の比喻を以て何を教へんとするか」と言はしめんがためなり。アルラーハは是くの如くにして己れの欲する者を迷はしめ、欲する者を導く。而して彼の外は何者も汝の主の軍勢を知らず。而してこは人間への訓誡に外ならず。

(1) 此の一節は明白にメヂナ啓示にして、恐らく火獄の護衛者を十九天使とせることに対し、猶太人が唱へたる異論に答へたるものなるべし。受経者・信者・偽信者・多神教徒の四教を同時に対象とすることは、決してメッカ啓示に見ざることなり。

然り、月によりて三 終らんとする夜によりて三 明けんとする曉によりて誓ふ言 げに火獄は最大苦難の一なり言 人間への警告なり言 汝等のうちの邁往者又は落後者への警告なり言 各人皆な己れの所行に対して責を負ふ言 唯だ右方の衆を除く言 彼等は樂園の中にありて言 作惡の人について互に相問はん言 『汝等を地獄に陥れたるは何ものぞ』と言 彼等は答へん『吾等は礼

拜者に非ざりき^三。また貧者を養はざりき^四。吾等は空論者と共に空論に耽り^五。審判の日を虚偽なりとせり^六。されど確實なる事が遂に吾等を襲ひたり^一』と^二。かくて如何なる勸解者の勸解も、彼等には効^{かひ}と^きものとなれり^三。

(一) 確實なる事とは死なり。不信者として死したることを言ふ。(二) 不信の中に死したる者は墮地獄を免るる途なし。

彼等何を苦しんで訓誡に背くか^四。彼等は宛も恐るる驢馬が吾獅子より逃げ去るが如し^五。否な、彼等は皆な開かれたる書卷を與へられんことを望めるなり^一。否な、彼等は来世を恐れざるなり^二。否な、此の古蘭は訓誡なり^三。されば欲する者は訓誡を受けよ^四。されどアルラーハが欲するに非ずば、彼等は訓誡を受けざるべし。げに彼は最も怖るべく、また最も寛恕なり^五。

(一) 己れにも直接天上より啓示の降らんことを望むの意味。例へば第二章第一一八節を見よ。不信者はマホメットに次の如く言へり『何故にアルラーハは吾等に物言はざるか、又は休徴が吾等に降らざるか』と。

第七十五 復活章

メッカ啓示

第一節に『復活の日によりて誓ふ』とあるに因みて復活章 Al-Qiyamah と名づけらる。メッカ初期の啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

吾は復活の日によりて誓ふ^一 吾は自責の念によりて誓ふ^二 人はわれ能く彼の骨を集め得ずとするか^三 然らず、われ能く彼の指端をさへも齊^{よしの}へん^四 然らず、人は其の以前に悪事を行はんと欲するなり^五 彼は問ふ『復活の日は何時ぞ』と^六 そは日は眩み^七 月は黯^{くろ}り^八 日月相並ぶ時なり^九 人は其日に及んで言はん『逃避の地は何処にありや』と^{一〇} 否な、如何なる避難処もなし^{一一} 其日、安息処は唯だ汝の主の許にのみあり^{一二} 其日、人は彼が豫め送れるもの並に後に遺せるものを告知せられん^{一三} 否な、各人皆な己れ自身の証人たらん^{一四} 設ひかれ諸の辯疏を提出するとも(その辯疏は無効ならん)^{一五}

(一)『己れの前にあるものをも否認せんとす』とも解せらる。

之¹を催促するために汝の舌を動かす勿れ^三 之を集め之を讀むは吾事なり^モ 吾之を讀まば、汝は復誦せよ^ハ 然る後に之を解説することも、げにまた吾事なり^元

(1) 『之』とは天啓を意味す。この一段は天使ガブリエルがマホメットに対して古蘭の啓示を急ぐ勿れと警めたるなり。第二〇章第一一四節参照。ロッドウエルは此の一段を以て、マホメットが夙くより古蘭を一卷の書に編輯せんと意図し居たることを示すものなりとせり。

否な、汝等は憊き現世を愛して^三 末世を閑却す^三 其日或者の面は耀きて^三 其主を仰ぎ見ん^三 また他の面は曇りて^三 大難の將に彼等を襲はんとするを知らん^三 否な、魂が喉頭に上り来る時^三 人は即ち言はん『呪術者は何処にありや』¹と^モ 彼は臨終の近さを知り^六 脚と脚と相纏はん² 其日彼は汝の主に駆り立てらる^言

(1) 呪符によつて魂を追ひ戻し、生命を救ふ者なきかの意味。(2) 苦惱の形容。

これ彼が信ぜず祈らざりしが故なり^三 彼は眞理を虚偽なりとして背き去れり^三 然る後に彼は傲然として其民に往けり^三 近づけり、² 天譴汝に近づけり^言 再び言ふ、近づけり、天譴汝に近づけり^言 人は彼が其儘に放任せらるべしと思ふか^言

(1) アブー・ジャハルを指せるものとせらる。(2) 『近づけり』は『禍なるかな』とも解釈せらる。

彼はもと射出せられたる一涓滴に非ざりしか言 次で彼は一凝血となり、次でアルラーハは彼を
創り、彼を整形し言 之を男女両性となせり言 彼は死者を甦らしめ得ずと言ふか言

第七十六章 人間章

メッカ啓示

第一節に因みて人間章 *Al-Insan* 又は光陰章 *Al-Dahr* と名づけらる。一般にメッカ中期の啓示とせらるるも、学者のうち之をメッカ啓示とするもの、またメッカ・メッカ両期の啓示を含むとする者あり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

人間に言ふに足らざる者として、一定の光陰を過ごすに非ざるか¹ げに吾は人間を試みんがために、両性の精を混へて之を創り、耳目を之に與へたり² げに吾は之に道を示したり。彼或は感謝し、或は感謝せざらん³ げに吾は不信者のために鐵鎖と桎梏と烈火とを準備せり⁴

(1) 長く母胎の中に居ることを指す。

されど義しき者は、カーフル¹の水を混へたる杯を飲まん⁵ そはアルラーハの僕等が飲む泉なり。彼は彼等のために之を流溢せしむ⁶ 彼等はは誓約をうし、災厄四方に普き日を恐る⁷ 彼等は其主を愛するが故に、貧者、孤兒及び囚虜に食を與へ⁸ 且曰く「吾等は唯だアルラーハのた

めに汝等を養ふものにして、絶えて汝等に報酬を求めず^九 げに吾等は陰慘なる災厄の日が主より
来ることを恐る』と云 さればアルラーハは、其日の災厄より彼等を護りて、愉色と歡喜とを彼等
に與へん二 彼はまた樂園と錦繡とを以て彼等の堅忍に報いん三 彼等其中にて榻牀に倚り、暑熱
を知らず、また酷寒を知らず三 樹蔭は濃かに彼等を覆ひ、果実は垂れて摘むに易し四 銀器と玻
璃瓶と彼等の間に回まわされん五 瓶は玻璃の如く見えて実は銀にて作られたり。而して其量は彼等自
ら量る七

(一)カーフール Kafur はカムフォル即ち樟腦の意味にて、樂園を流るる一河の名称なり。其水清澄涼、冷にして芳香あ
るによつて此名あり。

彼等其処にてザンジャビール¹を混へたる杯を飲ましめられんモ 即ちサルサビール²と呼ばるる樂
園内の井泉の水なり云 又また永遠の少年ありて彼等の周囲を往來す。汝彼等を見る時、之を散布せ
られたる眞珠なりとせん云 汝之を見る時、歡喜と大國とを其処に見ん云 彼等は深緑の精絹並に
黄金を鑲めたる素絹の衣裳を纏ひ、白銀の腕輪を佩ばん。而して主は清醇なる飲料を彼等に飲まし
めん三 (是く言はれん) 『これ汝等への報賞なり、汝等の精進は必ず嘉納せらる』と三

(1) ザンジャビール Zanjabil はジンジャ 即ち生薑の意味にて、同じく樂園の一河の名。(2) サルサビール Salsabil は喉ざわり佳き水の意味。

げに吾は古蘭を汝に降したり言 されば耐え忍びて汝の主の審判を待て。彼等のうちの罪人又は不信者に従ふ勿れ言 朝な夕な汝の主の名を念ぜよ言 夜半に彼に叩首し、長夜に彼に叩首せよ言

げに此等の者は憊き現世を愛し、来るべき重大なる日を背後に棄つ言 彼等を創り、その筋骨を堅めたるは吾なり。吾若し欲しなば、彼等の代りに彼等と同類のものを創り得るなり言 げにこは一個の訓誡なり。されば欲する者をして其主に到る道を探らしめよ言 されどアルラーハ欲するに非ずば、汝等は之を欲せざらん。げにアルラーハは能知者・聰明者なり言 彼は己れの欲する者とその慈悲に浴せしむ。而して不義者のためには痛刑を準備す言

第七十七 神 使 章

メッカ啓示

第一節に『相繼いで遣はさるる者によりて誓ふ』とあるに因みて神使章 Al-Mursalat と名づけらる。此処に遣はさるる者と
言ふは、或は天使、或は風、或は古蘭の諸節なりとせらる。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

相繼いで遣はさるる者によりて一 神速に飛行する者によりて二 弘く傳播する者によりて三

明かに分別する者によりて四 或は赦免のため、或は警告のためニ六 訓誡を傳達する者によりて

誓ふ五 汝等に約束せらるることは必ず来らん七

そは群星撥無せらるる時八 蒼穹崩裂する時九 群山粉碎せらるる時一〇 諸使者が時を定めて召

集せらるる時なり二 其の定めらるる時は何の日ぞ三 決裁の日なり三 決裁の日の何たるかを汝

に知らしむるものは何ぞ四 之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍なるかな五

吾は古の諸の民を亡ぼし六 来者をして彼等の後を踵がしめしに非ずや七 吾は常に是くの如く

にして罪人を処分す。之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍なるかな。

吾は卑賤なる一涓滴より汝等を創り。定められたる時まで。之を安全なる場処に置きしに非ずや。これわが処置なり。わが処置の如何に見事なることぞ。之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍なるかな。

吾は大地を以て。死者並に生者を容れしめ。堅固なる山嶽を其上に聳えしめ、また飲むべき甘泉を與へしに非ずや。之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍なるかな。

さらば汝等、その虚偽なりと呼ぶものに向つて往け。火獄の黒煙、三條の巨柱の如くなる蔭に往け。そは高塔の如き火花を吐き。さながら黄色の駱駝に似たり。之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍なるかな。

其日は彼等が物言ふを得ざる日なり。辯疏せんとするも許されざる日なり。之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍なるかな。

其日は決裁の日なり。其日われ汝等と古人とを一齊に集むべし。若し汝等策謀せんと欲しなば、今に於て吾に策謀せよ。之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍なるかな。

げに其身を護る者は、樹蔭と井泉と。その好む鮮果との中に居らん。彼等に是く言はれ

ん) 『暢然として食ひ且飲め。こは汝等の為せることに対する報賞なり』と^四 吾は是くの如くに
して善行者に報ゆ^四 之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍なるかな^五

暫く食ひ且樂しめ。げに汝等は作惡者なり^四 之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍
なるかな^五

彼等は鞠躬せよと告げらるるも鞠躬せず^四 之を虚偽なりと言へる者にとりて、げに其日は禍な
るかな^五

彼等古蘭を舍きて、また如何なる教を信ぜんとするか^五

第七十八 消息 章

メツカ啓示

第二節に『重大なる消息』とあるに因みて消息章 *An-Naba'* と名づけらる。最後の数節を除きメツカ初期の啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

彼等何事について互に相問ふか一 重大なる消息についてなりニ 彼等之について争論すニ 否
な、彼等やがて知るべし四 否な、再び言ふ、彼等やがて知るべし五

吾は大地を絨毯とし六 群山を柱とせるに非ずや七 吾は汝等を創りて男女となし八 睡眠を休
息のために定め九 夜を衣ころもとなし一〇 晝を生業なりわひの時と定め二 上には堅固なる七層の天を建て三
燦然たる燈明を其中に置き三 雨を孕む雲より沛然たる水を降し四 之によつて穀類と百草とを生
ぜしめ五 園圃を鬱密たらしむるに非ずや六

げに決裁の日は定められたり七 其日喇叭一たび鳴れば、汝等群をなして殺到し八 天は開けて
盡く門となり九 群山移し去られて唯だ幻影のみ残らん一〇

げに地獄は陷穽なり三　そは背逆者の帰宿にして三　彼等永劫に其中に住まん三　彼等其処にて
爽涼を知らず、飲むべきものなし三　唯だ沸湯と穢膿とあるのみ三　痛切なる応報なるかな三　げ
に彼等は清算を望まず三　常にわが休徴を虚偽なりとせる者なり三　吾は一切を書冊の中に記録せ
り三　『さらば之を味へ。吾は刑罰の外に何ものをも汝等に附加せず』三

げに其身を護る者は本願成就せん三　果樹園と葡萄園とあり三　年齢彼等と相等しき隆乳の処女
あり三　酒に溢るる杯あり三　彼等は空論と虚言とを聴かざらん三　これ汝の主よりの報賞なり、
存分の恩賜なり三　そは天地並に天地間の萬物の主なり、大悲者なり。何者も彼に物言ふを得ず三
諸天使並に聖靈が整列して起立する日にも、大悲者が許し、且義しく物言ふ者の外は、彼に物言ふ
ことを得ず三　其日は眞実の日なり。されば欲する者を其主に帰向せしめよ三　げに吾は懲罰近し
と警告せり。其日、人は其手が豫め送れるものを目睹せん。而して不信者は叫ばん『吁、希くばわ
れ塵埃に帰せんことを』と三

第七十九 抽出者章

メツカ啓示

第一節に『荒々しく引き出だす者』とあるに因みて抽出者章 *An-Naziat* と名づけらる。抽出者とは人間の臨終に際して、其魂を接收する天使を指す。第一―一四節、第一五―二六節、第二七―四六節の三部より成り、第一部は初期メツカ啓示の特徴明白たるも、第二部は稍々冗長、第三部は更に然り。啓示年代を異にせるを見るべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

荒々しく引き出だす者によりて一 安らかに解放する者によりて二 空中を飛行する者によりて三 先行する者によりて四 事来处理する者によりて誓ふ¹ 其日、第一の喇叭天地を震撼し^六 (第二の喇叭)之に続かん^七 其日、人々の心は戦き^八 其日は伏すべし^九 彼等は言へり『吾等また原状に復せしめらるべきか^三 何たることぞ、吾等枯骨となり果てたる後にてもか』と二 彼等また言へり『然らばそは滅亡に復ることなるべし』と三 されど唯だ一声の轟くあり^三 見よ、彼等忽ち甦りて大地の面に現れん^四

(1) 諸天使によつて誓ふこと。一、荒々しく不信者の魂を抜き出だして之を死なしめ、二、安らかに信者の魂を眠らしめ、三、主の命令を傳達するために空中を飛行し、四、信者に先行して之を樂園に導き、五、神命によつて天地間の萬事を処理する者、即ち天使なり。(2) 直訳『其日震撼者は震撼し、次のものが之に続かん』。『震撼者』とは第一の喇叭、『次のもの』とは第二の喇叭を指す。

モーゼの物語が汝に達せざりしか^五 主、トウワ一の山谷に彼を呼びて曰く^六 『ファラオに往け、げに彼は暴戾なり^七 彼に告げよ^八 汝は己れを潔めんと欲するか^九 然らばわれ汝を其主に導き、之を敬はしめん^十』と云 かくしてモーゼは至大なる諸の休徴を彼に示せしが^{十一} 彼はモーゼを虚言者と呼びて之に背きたり^{十二} 然る後にかれ急ぎて退出し^{十三} 其民を集めて^{十四} 是く宣言せり『吾こそ汝等の主なる至高者なれ』と云 さればアルラーハは、来世並に現世の懲罰を彼に加へたり^{十五} げに此中には敬畏者への教訓あり^{十六}

汝等を創ることと、天を創ることと、果して孰れが難事なるか。彼は天を建造せるなり^{十七} 彼は高く天を挙げ、然る後に之を整へ^{十八} 夜を暗くし、白晝の光を現したり^{十九} 然る後に彼は大地を展べ^{二十} 水と牧草とを之に生ぜしめたり^{二十一} 而して彼は群山を固め^{二十二} また汝等並に汝等の家畜のた

めに糧餉を造れり言

偉大なる災厄の来る時言　そは人がその努めて為せることを想起する日なり言　また地獄が目ある者の前に出現する日なり言　而して背逆なりし者言　また現世を扱ひし者は言　げに地獄がその居処たるべし言　されど其主の前に立つことを恐れて、其魂を私欲より護れる者は言　げに樂園がその居処たるべし言

彼等末日について汝に問ひ、その来るは何時ぞと訊ねん言　されど汝は何によつて之を知らしむるを得るか言　その時期を知るは唯だアルラーハあるのみ言　汝は唯だ之を恐るる者への警告者たるにすぎず言　而も彼等が之を目撃する日、彼等その墓中に滞留せるは、宛も一朝一夕なりしが如く思はん言

第八十 擧 蹙 章

メッカ啓示

第一節に『彼は眉を擧めて背を向けたり』とあるに因みて擧蹙章・Abasa と名づけらる。彼とはマホメットなり。傳承によれば、一日マホメットがクライシユ族の有力者等を説得せんと努めつつありし時、貧しき一盲人来りて信仰のことを問ひ、ために彼等との談話を中断せしめしかば、マホメットは眉を擧めて面を彼に背けたり。此の啓示はマホメットの是くの如き態度に対する譴責なり。その盲人とはアフダラー・イブン・ウム・マクトゥーム Abdallah ibn um Maktum として、マホメットは後に甚だ彼を重んじ、再度之をメヂナ知事に任じたり。而してマホメットは彼を迎ふる毎に『御蔭にて吾主の叱責を蒙りたる仁よ』と挨拶するを常とせりと言はる。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

彼は眉を擧めて背を向けたり一 そは一盲人が来れる故なり二 されど汝は如何にして知り得るか、彼が或は其身を潔めんとし三 或は訓誡を受けんとする者にして、その訓誡が彼を益することなきを四

他に求むるところなしとする者は五 汝之を重んじて之に接す六 されど彼設ひ其身を潔めずと

も、そは汝の関するところに非ず。されど切実に汝に来り。敬畏の念に満ちたる者を。汝は蔑視せり。断じて然るべからず。古蘭は訓誡なり。されば欲する者をして之を護持せしめよ。そは高貴にして方正なる。書吏によりて書かれ。至高にして至純なる。尊き書冊に載せられたるものなり。

呪ふべきかな人間は。如何に彼は忘恩なることぞ。彼は何を以て彼を創りしか。實に一涓滴よりなり。かれ之を創り、之に形体を與へ。次でその出路¹を容易ならしめ。然る後に之を死なしめて墓中に埋め。次でその欲する時に之を甦らしむ。

(1) 母胎より産れ出づる路。

否な、人間はその命ぜられたることを行はざり。彼をして其の食物を念はしめよ。げに吾は沛然たる水を降し。大地を裂きて之を割き。然る後に穀類と。葡萄と苜蓿。オリブと棗椰子樹。鬱密たる花園。果実と牧草とを生ぜしめ。之を汝等並に汝等の家畜の糧餉たらしむ。

されど耳を聳する一声轟く時。其日、人は己れの兄弟。己れの父母。己れの妻子を棄てて

逃げ去らん言 其日、各人唯だ己れの事に忙殺せられん言 其日、多くの面は耀き言 笑ひ且歡ば
ん言 其日、他の多くの面は塵を被り言 黒闇之を覆はん言 此等は即ち不信者なり、作惡者な
り言

第八十一 摺 疊 章

メッカ啓示

第一節に「太陽が摺り疊まるる時」とあるに因みて摺疊章 Al-Takwir と名づけらる。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

太陽が摺り疊まるる時^一 群星の落つる時^二 群山の動かさるる時^三 懐胎十月の駝駱が棄てらるる時^四 野獸が集めらるる時^五 海洋が澎湃たる時^六 靈魂再び肉体と相結ぶ時^七 生きて埋められし女兒が^八 如何なる罪にて殺されしかと問はるる時^九 書冊が開かるる時^十 蒼穹が剥ぎ去らるる時^{十一} 地獄が烈火を吐く時^{十二} 其日各人は皆な己れの為せることを知らん^{十三}

(一) アラビア人の最も尊重する財産、之をも顧る暇なしとの意味。(二) 恐怖の餘り皆た集まり来るを言ふ。(三) 死して墓中に埋められし者が甦る時。

げに吾は隱微なる群星によりて^五 登り且沈む群星によりて^六 黒闇退く夜によりて^七 明け初むる朝によりて^八 げに古蘭は高貴なる使者の言なり^九 彼は王座の主の許に尊貴なる位を占

むる偉力者にして言 従はれ且信頼せらるべき者なりニ また汝等の伴²侶は決して憑かれたる者に非ずニ 彼は清朗なる天際に彼を見たり³ニ また彼は不可見のことを告ぐるを吝む者に非ず言
そはまた逐はれたるサタンの言に非ずニ 然らば汝等何処に往くかニ 古蘭こそ三界への訓誡なれニ そは汝等のうち直き道を歩まんとする者への訓誡に外ならずニ されど三界の主アルラーハ
が欲するに非ずば、汝等は之を欲せざるべしニ

(1) ガブリエルを指す。(2) マホメット。(3) マホメットがガブリエルを見たること。

第八十二分 裂 章

メツカ啓示

第一節に『蒼穹分裂する時』とあるに因みて分裂章 *Al-Infiter* と名づけらる。メツカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

蒼穹分裂する時^一 群星散亂する時^二 海洋合一する時^三 墳墓顛覆する時^四 其時、人は己れが豫め送れるものと、後に遺せるものとを知らん^五

人間よ、汝の寛大なる主について、汝を迷はしめたるは何者ぞ^六 汝を創造し、汝を成形し、汝を齊整せるは彼に非ざるか^七 彼は思ふがままの形態を汝に與ふ^八

否な、汝等は審判を虚偽なりと呼ぶ^九 げに汝等の上には監視者あり^{一〇} 高貴なる記録者にして^{一一} 汝等の為すことを知悉す^{一二} げに善人は必ず歡喜の中に住み^{一三} げに惡人は必ず地獄の中に住まん^{一四} 彼等審判の日に其中にて燔かれ^{一五} 決して之より出づるを得ざらん^{一六} 汝に審判の日の何たるかを知らしむるものは何ぞ^{一七} 再び言ふ、汝に審判の日の何たるかを知らしむるものは何

ぞろ　そは何人も他のために一事をも為し得ざる日なり。其日、命令は唯だアルラーハより出づべし

第八十三 減量者章

メツカ啓示

第一節に『量を減ずる者』とあるに因みて減量章 At-Tafit と名づけらる。メツカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

禍なるかな量を減ずる者は一 彼等は他人が己れに量る時は十分ならんことを求めニ 己れが他人に量り又は測る時は之を減ずニ 此等の者は、偉大なる日のために甦らしめらるることを知らざるか^{四・五} 其日は萬人悉く三界の主の前に立つ日なり^六

然り、悪人の書冊はスイツジーン¹の中にありセ スイツジーン¹の何なるかを汝に知らしむるものは何ぞハ そは書かれたる書冊なり^九 其日は之を虚偽なりと言へる者ニ 審判の日を虚偽なりと言へる者にとりて禍なるかなニ 之を虚偽なりと言ふ者は背逆者、作悪者に外ならずニ 彼等は、わが休徴が彼等に讀誦せらるる時『こは古人の物語のみ』と言ふ者なり^三 断じて然らず。されど彼等の為せることが、其心の鑄^{さび}となれり^四 然り、げに其日彼等は其主より斥けられん^五 然る後

に彼等は獄火にて燔かれん云 然る後に言はれん 『これ汝等が曾て虚偽なりと言へるものなり』
と云

(1) スイツジーン Sijira は地獄の中の牢獄の名にして、悪人の行状記は此名を以て呼ばる。

然り、げに善人の書冊はイルリユーン¹の中にある云 イルリユーンの何たるかを汝に知らしむるものは何ぞ云 そは書かれたる書冊なり云 主に咫尺する諸天使之を守護す云 げに善人は歡喜の中に居らん云 彼等は高榻に倚りて觀覽せん云 汝は彼等の面上に歡喜の光耀を見ん云 彼等は封印せられたる醇酒を飲まん云 その封口は即ち麝香なり。さらば嗜む者をして之を嗜ましめよ云 之に混へたるはタスニーム²の水なり云 そは主に咫尺する者が就て飲む泉なり云

(1) イルリユーン Jiljira は『高処』の意味にして、善人の行状記を此名にて呼ぶ。(2) タスニーム Tasnim は『高処に運ばる』の意味。其水が樂園の至高処に運ばるるに因みて名づけられたる樂園中の一井泉の名。

げに罪人は信者を哂ひ云 其前を過ぐる時は互に目を以て語り云 己れの民に帰れば之を笑柄とす云 彼等、信者を見れば即ち曰く『げに此等は迷へる者なり』と云 されど彼等は信者の監督者として遣はされたるに非ず云 されど其日信者は不信者を笑はん云 其時彼等は高榻に倚りて觀覽

ぜん言 不信者はその為せることに対して報いらねざらんや言

第八十四 分散章

メッカ啓示

第一節に『蒼穹分散して』とあるに因みて分散章 Al-Inshiqaq と名づけらる。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

蒼穹分散して一 謹て其主に聽從する時^二 大地伸張して^三 地中の一切を放出して空虚となり^四 謹て其主に聽從する時^五 人間よ、げに刻苦して其主に到らんと精進する者は、其時にこそ彼に会ふべけれ^六。其時右手にその行狀記を渡さるる者は^七 容易なる清算にて清算せられ^八 欣然として己れの家人に歸らん^九。されど背後よりその行狀記を渡さるる者は^{一〇} 絶叫して滅亡を希ふべきも^二 竟に獄火に燔かるべし^三。そは彼が會て其の家人と偕に現世を楽しみ^三 決して其主に歸ることなしとせるが故なり^四。然らず。げに其主は常に彼を照覽せり^五。

(1) 地獄に驅らるる者は、右手を首に縛られ、左手を後に縛らる。されば背後より渡すとは左手に渡すことなり。(2) 苦痛に堪え兼ねて滅亡を希ふなり。

吾は夕陽の紅くはまによりて云 夜とその集むるものによりてモ 満ちたる月によりて誓ふ云 汝等
必ず一層より他層へと移送せられん¹云 然るに彼等何を苦しんで帰信せざるか云 古蘭が彼等に讀
誦せらるる時、何故に彼等は叩首せざるか云 然り、信ぜざる者は之を虚偽なりとす云 されどア
ルラーハは彼等の為すことを熟知す云 されば痛烈なる懲罰を彼等に傳へよ云 但し信じて善事を
行ふ者を除く。彼等には不朽の報賞あらん云

(1) 生より死、死より来世へと移送せらるること。

第八十五 望樓章

メツカ啓示

第一節に『諸の望樓ある天によりて誓ふ』とあるに因みて望樓章 Al-Buroj と名づけらる。望樓とは或は天使が之に登りて監視する望樓なりとし、或は一般に星辰を指すとなし、或は黄道十二宮を指すとなし、或は月の二十八宮を指すとなす。但し黄道十二宮を指すとする説最も弘く行はる。メツカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

諸の望樓ある天によりて一 約束の日によりてニ 証人と被証者によりて誓ふ¹ 薪を燃やせる火坑の徒は屠られたり² 其時彼等火坑の側に坐し³ 信ずる者に対して己れが為せることを目睹せり⁴ 而して彼等が信者を虐げしは、彼等が唯だ天地の大権を掌握する偉力者・可頌者アルラーハを信じたるがためなりき。アルラーハは萬事を照覽す⁵。

(1) 諸説区々なれど、証人とはアルラーハ、被証者とは人間並に幽鬼を指すとするを穩当とすべし。他の諸説は証人をマホメット、被証者を信者とし、又は前者を信者・後者を不信者とし、又は天使と其の監視せる人間なりとす。(2) 『火坑の徒(主人等)』とはヤマーンに君臨せる猶太人ツウ・ナワース *Tu Nawas* が西紀五二年ナジラーンの基督教徒を迫害し、

悉く之を火坑に投じたることを指せるものとすべし。ガイガー及びネルデケは之を以て旧約第三章第八節以下に記されたることを指せりとするも、メッカ初期の啓示は、猶太人並に基督教の傳承に言及すること殆ど皆無なる故、之を首肯し難し。

げに信ずる男女を迫害して懺悔せざる者には、地獄の懲罰あり、焦熱の懲罰あらん。げに信じて善事を行ふ者には、河川流るる樂園あらん。これ無上の本願成就なり。見よ、汝の主の報復はげに峻烈なり。

げに創造し且復造する者は彼なり。而して彼は宥恕者・仁愛者なり。光榮ある宝座の主なり。一切所欲の遂行者なり。ファラオの軍勢とサムードの民の物語が汝に達せざりしか。否な、信ぜざる者は依然として之を虚偽なりとす。されどアルラーハは背後より彼等を囲む。然らず。こは載せて秘藏の牌にある光榮の古蘭なり。

第八十六夜者來章

メツカ啓示

第一節に『蒼穹並に夜來る者によりて誓ふ』とあるに因みて夜來者章 *At-Tariq* と名づけらる。夜來者の原語 *Tariq* は、夜間に来りて戸を叩く者の意味にして、その何を指せるかについて諸説区々なれども、第三章と呼応して星と解するを穩當なりとす。メツカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

蒼穹並に夜來る者によりて誓ふ一 夜來る者の何たるかを汝に知らしむるものは何ぞニ 是は閃きらめき輝く星なりニ げに各人には一守護者あり四 されば人をして己れが如何なるものより創られしかを念はしめよ五 彼は腰と肋骨との間より迸り出づる水より創られたるなり六七 げに隠れたることとが露顯せらるる日九 アルラーハは彼を甦らしめ得るなりハ 其時彼は力もなく佑助者もなき者たらん〇

雨を降す天によりてニ 芽を出だす大地によりて誓ふ三 げに古蘭は眞偽分別の言にして三 断

じて戲論に非ず

げに彼等は策謀を策す

吾もまた策謀を策せん

されば不信者に猶豫を與へ、暫く之を放任

せよ

第八十七 至高者章

メッカ啓示

第一節に『至高者たる汝の主の名を讃へよ』とあるに因みて至高者章 Al-A'la と名づけらる。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

至高者たる汝の主の名を讃へよ^一 彼は創造し、整齊し^二 豫定し、嚮導す^三 彼は牧草を生じ^四 次で之を黯然たる刈株となす^五

われ汝に古蘭の讀誦を教へんとす。汝決して之を忘るべからず^六 但しアルラーハが欲する諸節を除く。げに彼は露れたるものと隠れたるものを知る^七 吾は汝の道を容易ならしめん^八 されば訓誡せよ、訓誡は人を益す^九 敬畏者は必ず訓誡を受けん^{一〇} されど最も不幸なる者は之に背き去らん^{一一} 彼は必ず至大の烈火に燔かれん^{一二} 而してその火中に生きもせず死にもせざらん^{一三} されど其身を潔めて^{一四} 其主の名を念じて禮拜する者は本願成就せん^{一五}

否な、汝等は現世の生活を重んず^{一六} されど末世は更に善く、更に長し^{一七} げに此事は載せて古

の諸經典ハ 即ちアブラハム及びモーゼの經典にあり元

(一) 猶太人の学者は旧約エズラ書をアブラハムの經典なりとせり。

第八十八 壓倒者章

メツカ啓示

第一節に「壓倒者の消息が汝に達したるか」とあるに因みて壓倒者章 Al-Ghasiyah と名づけらる。壓倒者とは末日の異名なり。メツカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

壓倒者の消息が汝に達したるか一 其日、諸の面は俯れ^{おちた}ニ 辛勞し、困苦して^{おちた}ニ 焦熱の獄火に燔かれ^{おちた}ニ 沸湯の泉より飲ましめられん^{おちた}ニ 彼等は荆棘の外に食物なく^{おちた}ニ 之を食ふも肥えず又飢を医さず^{おちた}ニ

其日、他の諸の面は嬉然としてハ 既往の己が精進を欣び^{おちた}ニ 巍々たる樂園に居りて^{おちた}ニ 絶えて無益の言を聞かずニ 園内には一流泉あり^{おちた}ニ 高榻置かれて^{おちた}ニ 酒杯側にあり^{おちた}ニ 褥は列べられ^{おちた}ニ 絨毯は展べらる^{おちた}ニ

彼等雲を見ざるか、 そは如何にして創らるるか^{おちた}ニ 天を見ざるか、 そは如何にして挙げらるるか^{おちた}ニ

かえ 山を見ざるか、そは如何にして立てらるるかえ 大地を見ざるか、そは如何にして展べらるるかえ

(1) 原語 *hili*。駱駝の意味あり、また雨を孕む雲を謂ふ。

されば訓誡せよ。汝は一訓誡者に外ならずニ 汝は決して彼等の監督者に非ずニ されど背き去りて信ぜざる者はニ アルラーハ重罰を以て之を罰せんニ げに彼等は吾に歸るニ 其時彼等を清算するは吾事なりニ

第八十九 黎明章

メッカ啓示

第一節に『黎明によつて誓ふ』とあるに因みて黎明章 Al-Fajr と名づけらる。極めて初期のメッカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

黎明によりて一 十夜によりて二 雙と單によりて三 並に逝り往く夜によつて誓ふ¹ げに此中に思慮ある者への誓約あり^五

(1) 黎明・十夜・双と單・逝り往く夜の解釈は区々にして定説なし。但し『十夜』はメッカ参詣が行はるるヅルヒツジャ月一日より十日に至る十夜なることは明瞭なるを以て、予は叙上四者を悉くメッカ参詣に關聯せしめて解釈せるムマママド・アリの説を採る。即ち黎明はヅルヒツジャ月一日の黎明、十夜は同一日より十日に至る十夜、双は十一十二の両日即ち参詣に附随する儀式の行はるる二日、單は同じく儀式の行はるる最後の一日即ち十二日の夜なり。古蘭第二章第二〇三節に、十夜の後に二日残りて禮拜し、然る後は逝り往くも罪に非ずとあり。蓋し聖殿参詣は單にメッカをアラビアの宗教的中心たらしめたるのみならず、之に伴ひて経済的には最も重要な取引地たらしめたるを以て、実にメッカ繁榮の最大の原因なり。本章は、此の事実をメッカ市民に挙示し、以前に繁榮して天譴のために亡び去れる諸都府を想起

せしめ、彼等の帰信を求めたるものとすべし。

汝はアルラーハが如何にアアドの民を処分せしかを見ざるか^六 四柱林立のイラムは^七 地上未だ會て之に類するものを造れる者なかりしなり^八 また山谷に巖を斫りしサムードの民^九 及び強大なりしファラオを見よ^{一〇} 彼等皆なその國土に於て暴戾を敢てし^{一一} 惡事を國內に重ねたり^{一二} さればこそ汝の主は彼等の上に懲罰の答を加へたるなれ^{一三} げに汝の主は監視塔上に立つ^{一四}

(一) 傳承によれば、父アアドの後を嗣いでアアドの民に君臨せるシェツダード Sheddad は、天上の樂園に倣ひてアデンの沙漠に莊麗豪華なる地上の樂園を建設し、之を曾祖父の名に因みてイラム Iram と名づけたり。然るにその竣工するに及んで、彼が供奉を整へて之に赴かんとせる途上、突如轟然たる一声に襲はれ、彼並に其民は悉く仆れ、イラムの樂園は霧の如く消散し去れりと。

主、人を試みて、之を高貴ならしめ且恩恵を垂るる時は、彼即ち曰く『主は吾を重んず』と^一
主、人を試みて、糧餉を賜ふことを減ずる時は、彼即ち曰く『主は吾を軽んず』と^二 断じて然らず。されど汝等は孤兒を重んぜず^三 相促して貧者を養ふことをせず^四 好んで弱者の遺産を併吞し、財物を酷愛す^五 断じて然るべからず。大地微塵に碎くる時^六 汝の主が整列せる諸天使と共に來る時^七 其日地獄は引き揚げられん^八。而して其日、人は己れの為せることを想起せん。されど

想起したりとて何の益するところぞ三 彼は言はん『吁、吾は生前に善功を積みたりしものを』²
と言 げに其日は彼が罰する如く罰する者なく三 彼が縛る如く縛る者なからん三

(1) 引揚げんとは目前に現出せしむること。但し正統回教神学者は之を如字的に解釈し、七萬本の鉄鎖にて地獄を縛り、一鉄鎖に七萬の諸天使あり、力を併せて之を引揚ぐとなす。(2) 直訳『わが此生(死後の生活)のために豫め送りたりしものを!』。

汝、静安なる心靈よ三 汝の主に歸りて、欣び且欣ばれよ三 わが僕等のうちに入れえ わが樂園の中に入れ三

第九十 國 土 章

メ、カ啓示

第一節に『この國土によつて誓ふ』とあるに因みて國土章 *Al-Balad* と名づけらる。國土とは即ちメ、カなり。極めて初期のメ、カ啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

吾はこの國土によりて誓ふ^一 汝はこの國土の住人なり^二 また産める者と産まれたる者によりて誓ふ^三 げに吾は苦難の中に人間を創れり^四

(一) 國土とはメ、カ、汝とはマホメット。此の一句を『汝は此の國土に於て行動の自由を有す』と解する學者あり。(二) 諸説区々なれど『産める者』とはアラビア人の聖祖アブラハム、『産まれたる者』とはアブラハム又はイシマエルの子孫を指せるものとすべし。(三) 迫害に憚むマホメットに対する慰安の辭と見るべし。

彼は何者も彼を左右し得ずと思ふか^一 彼曰く『吾は莫大なる富を費せり^二』と六 彼は何者も彼を見ずと思ふか^七 吾は彼のために兩眼とハ 一舌と双唇とを創り^八 また二つの大道に彼を導け^三

るに非ざるか〇 されど彼は嶮路を踏まんとせざりきニ 嶮路の何たるかを汝に知らしむるものは
何ぞニ そは奴隸を放つことなりニ 飢饉の時には四 近親の孤兒ニ また塵埃に臥す貧者を養ふ
ことなり六 而して信者の一人となり、互に堅忍を励み、憐恤を励むことなり七 此等は即ち右方
の衆なり八 されどわが休徴を信ぜざる者は左方の衆なり九 彼等は閉鎖せられたる火獄の中に居
らん〇

(1) 『彼』とはワリード・イブン・アルムガイイラを指すとせらる。(2) マハメットを迫害するために巨費を散じたり
と豪語せること。(3) 平坦なる悪への道と、嶮難なる善への道。

第九十一 太陽章

メッカ啓示

第一節に『太陽とその光耀とによりて誓ふ』とあるに因みて太陽章 Ash-Shams と名づけらる。極めて初期のメッカ啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

太陽とその光耀とによりて一 之に踵ぐ月によりて二 之を顯す白晝によりて三 之を包む暗夜によりて四 蒼穹と之を創れる彼とによりて五 大地と之を展べたる彼とによりて六 心靈と之を完うせる彼とによりて七 而して罪惡と敬虔とを之に教へたる彼によりて誓ふ八 其身を潔むる者は榮え九 其身を穢す者は亡ぶ一〇

サムードの民は惡逆にして、使者を虚言者と呼べり二 彼等のうちの最も卑賤なる者が起ち上りし時三 アルラーハの使者、彼等に告げて『こはアルラーハの駱駝なれば、汝等之に水飲ましめよ』と言へり三 然るに彼等は彼を虚言者と呼び、その駱駝を殺したり。されば彼はその罪惡の故を以て彼等を亡ぼし、一律に之を膺懲せり四 彼は断じて結果を顧慮せず五

第九十二 暗夜章

メツカ啓示

第一節に『帳を引く暗夜によりて誓ふ』とあるに因みて暗夜章 Al-Jaili と名づけらる。極めて初期のメツカ啓示。

大悲者大慈者アルラーハの名によりて

帳とほりを引く暗夜によりて一 輝く白晝によりてニ 男女を創れる彼によりて誓ふ三 げに汝等の精

進は多端なり四 されど喜捨を行ひ、アルラーハを敬ひ五 而して最勝なるものを信ずる者には六

われ彼のために安樂に到る道を容易ならしめん七 されど慳吝にして財宝に執着し八 而して最勝

なるものを虚偽なりと言ふ者には九 われ彼のために艱難に到る道を容易ならしめん〇 彼が顛落

し去る時、その財宝は毫も彼を益せざるべし二

げに導くは吾事なり三 げに現世も来生も吾有もなり三 されば吾は燃ゆる火獄を以て汝等を警め

たり四 而して至極の不運者のみ其中にて燔かれん五 そは之を虚偽なりとして背き去れる者な

り六

其身を護る者は火獄を距ること遠し云 彼はその財宝を喜捨して己れを潔め云 恩恵を施して報
酬を求めず云 唯だ其主たる至高者の慈顔を求む云 彼は必ず満足せん云

第九十三章 午前章

メッカ啓示

第一節に『輝く午前によりて誓ふ』とあるに因みて午前章 Ad-Duha と名づけらる。マホメットへの天啓が中断せるため、メッカの市民等がアルラーハはマホメットを見棄てたるなるべしなど取沙汰せることに、此の啓示が降りりと傳へらる。メッカ初期の啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

輝く午前によりて¹ 並に暗き夜によりて誓ふ² 汝の主は汝を棄てず、また憎まず³ げに汝にとりて来世は現世よりも善し⁴ げに汝の主は汝が欣ぶものを賜はらん⁵ 汝は一孤兒なりしが、之を庇護せるは彼に非ざるか⁶ 汝は迷へる者なりしが、之を導けるは彼に非ざるか⁷ 汝は乏しかりしが、之を養へるは彼に非ざるか⁸ されば孤兒を虐ぐる勿れ⁹ 乞食を逐ふ勿れ¹⁰ 而して主の恩寵を宣べ傳へよ¹¹

(1) 原語『一日の輝く部分』。(2) 此の一句を『後半の生涯は汝の前半の生涯よりも善かるべし』と解釈する学者あり。

第九十四 開胸章

メ、カ啓示

第一節に『吾は汝の胸を開き』とあるに因みて開胸章 *Al-Inshirah* と名づけらる。恐らく前章とほぼ啓示年代を同じくす。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

吾は汝の胸を開き¹ 汝の背を圧したる² 重荷を去らざりしか³ また汝の名を挙げざりしか。
げに苦は樂に伴ひ⁴ げに樂は苦に伴ふ⁵ されば時を得れば即ち刻苦し⁶ 専ら汝の主に求めよ⁷

(1) 『胸を開く』とは憂を去りて慰安を與ふる意味とすべし。但し回教神学者は之を如字的に解し、或はマホメットが乳母ハリーマに沙漠に哺育せられつつありし幼時に、或は七天歷程の際に、天使ガブリエルが彼の胸を切開し、罪惡の因なる黒汁を拭ひ去れりとなす。(2) 時を得るとは信者と共に禮拜を了へたる後と解釈せらる。

第九十五 無花果章

メツカ啓示

第一節に『無花果とオリヴとによりて誓ふ』とあるに因みて無花果章 *At-Tin* と名づけらる。極めて初期のメツカ啓示なり。

大悲者大慈者アルラーハの名によりて

無花果とオリヴとによりて一 シナイ山によりて二 並に此の平安の都府によりて誓ふ三 け
に吾は人間を最善の姿に創りたり四 而して吾は之を卑賤者中の至賤者に復らしめん五 但し信じ
て善事を行ふ者を除く。彼等には不朽の報賞あらん六 向後誰か汝に向つて審判を虚偽なりと言ひ
得るものぞ七 アルラーハは審判者中の最勝の審判者に非ざるか八

第九十六 凝血章

メッカ啓示

第二節に『一凝血より人間を創れり』とあるに因みて凝血章 *Al-'Alaq* と名づけらる。本章の最初の五節は、マホメットが、ヒラー山上に於て受けたるものにして、全古蘭を通じて最初の啓示とせらる。但し第六節以下は其後の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

創造者なる汝の主の名を奉じて讀め¹ 彼は一凝血より人間を創造せり² 讀め、汝の主は至仁なり³ 彼は筆にて教へたり⁴ 彼は人間にその未だ知らざることを教へたり⁵

(1) 『讀め』と繰返されたるは、マホメットが最初めに讀めと告げられし時、吾は讀む能はずと答へたるによるとせらる。

然り、げに人間は不遜なり¹ そは自ら富めりとするが故なり² げに萬人は汝の主³に復歸す一人の僕が禮拜せる時、汝は之を禁めたる者を見ざりしか⁴ 汝は彼を以て正しく導かるる者とするか⁵ また信心を勧むる者とするか⁶ 汝は彼を以て眞理を虚偽なりとして背き去れる者とするか⁷ 彼はアルラーハが照覽することを知らざるか⁸ 然り、彼若し止めずば、吾は彼の前髪⁹

虚偽罪惡の前髪を擱まん云　さらば彼をして其の同類³を喚ばしめよセ　吾また地獄の守衛者⁴を喚ばん云　否な、断じて彼に従ふ勿れ、叩首して主に近づけ云

(1) 『人間』は一般的意味に用ゐられたるものと解釈し得るも、多くの回教註釈家はアブー・ジャハルを指せるものとなす。(2) 『一人の僕』とは、多くの註釈家によりてマホメットを指し、之を禁めたる者とはアブー・ジャハルを指すとせらる。但しネルデケは、開教当初に最も多くマホメットに歸依したる奴隸を意味するものとなせり。メッカに於て最も甚だしく迫害せられたるに此等の奴隸なり。(3) 原語は『會議 An-Nadi』。市民會議に列席するメッカの有力者を指す。(4) 原語 Az Zabaniyah は守衛者・護衛者の意味。マールイクを指揮者として地獄を守護する天使を指す。

第九十七 稜威章

メッカ啓示

第一節に『吾は稜威の夜に古蘭を降したり』とあるに因みて稜威章 *Al-Qadr* と名づけらる。稜威の原語カドルは莊嚴・偉大の偉力を意味し、マホメットがヒラー山上に最初の天啓に接したる夜を『稜威の夜 *Lailat Al-Qadr*』と称す。ラマザン月下旬の一夜なり。極めて初期のメッカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

げに吾は稜威の夜に古蘭を降したり一 稜威の夜の何たるかを汝に知らしむるものは何ぞニ 稜威の一夜は千月に優るニ 此夜、諸天使並に聖靈は、其主の命を奉じ、一切の命令を携へて降臨せり^四 黎明の現るるまで夜は平安なり^五

第九十八 明 證 章

メヂナ啓示

第一節以下に『明証』について述ぶるに因みて明証章 Al-Bayyinah と名づけらる。明証とはマホメットを指す。メッカ末期の啓示とするものあるも、メヂナ啓示なること殆ど疑なく、恐らく遷都初年の啓示なるべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

受経者のうちの信ぜざる者並に多神を拜する者は、明証が彼等に來るまでは離反せざりき。明証とは、純正なる記載を含める清淨なる書冊を讀誦するアルラーハの使者を謂ふニ。また受経者等は、明証が彼等に來るまでは、宗派に分れざりき。彼等に命ぜられたることは、唯だアルラーハに事へ、堅信者として専ら彼を敬ひ、且禮拜を守り、捐課を納むることに外ならざりき。而してこれ實に眞實の宗教なり。

げに受経者のうちの信ぜざる者並に多神を拜する者は、必ず獄火の中に墮ち、永劫に其中に住まん。此等は一切衆生中の最惡者なり。信じて善事を行ふ者は、一切衆生中の最善者なり。彼等

の報賞は主の許にあり、即ち河川流るるエデンの樂園なり。彼等長久に其中に住まん。アルラーハは彼等を欣び、彼等はアルラーハを欣ぶ。これ主を敬ふ者への報賞なりハ

第九十九 地震章

メッカ啓示

第一節に『大地激しく震ひ』とあるに因みて地震章 *Az-Zilzāl* と名づけらる。極めて初期のメッカ啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

大地激しく震ひ一 大地その重荷を擲ち三 人は『地に何事か起れる』と言ふ時三 其日大地は
諸の消息を傳へん四 そは汝の主が之を命ずるが故なり五 其日、人々は己れの所行を見るため
に、諸の團體に分れて進み来らん六 微塵の善にても行へる者は其善を見るべく七 微塵の惡にて
も行へる者は其惡を見るべし八

第百戰馬一章

メ、カ啓示

第一節に『戰馬によりて誓ふ』とあると因みて、戰馬章 *Al-A'adiyah* と名づけらる。原語は『疾駆者』の意味にして、或は之を以て駱駝を指すとする學者あるも、予は多くの註釈家に従ひて戰馬と解せり。極めて初期のメ、カ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

鼻息荒く疾駆して、鐵蹄火花を散らす戰馬によりて^一 黎明に出擊して^二 砂塵を揚げ^四 戰陣に殺到する戰馬によりて誓ふ^五 げに人間は其主に対して忘恩なり^六 げに彼はその証人なり^七 げに彼は財宝を酷愛す^八 彼は知らざるか、墓中のものが暴露せられ^九 胸中のこと悉く露顯する時あるを^{一〇} げに其日、主は悉く彼等について知らん^二

第百一 打撃者章

メノカ啓示

第一節に『打撃者』とあるに因みて打撃者章 Al-Qari'an と名づけらる。打撃者とは末日を意味す。極めて初期のメノカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

打撃者！一 打撃者とは何ぞニ 打撃者の何たるかを汝に知らしむるものは何ぞニ 其日、人は

四散する蛾の如く^四 山は梳^すかれたる羊毛の如くならん^五 秤衝重き者^六 彼には多幸の生活あ

り^七 秤衝軽き者^八 彼の母はハーキヤなり^八 1 ハーキヤの何たるかを汝に知らしむるものは何

ぞ^九 そは烈火なり^{二〇}

(一)母とは住処の意味。ハーキヤ Al-Hawiya は深处の意味。地獄の至深处にある牢獄の名。

第百二競多章

メツカ啓示

第一節に『多きを競ふことに惑はさる』とあるに因みて競多章 At-Takasur と名づけらる。極めて初期のメツカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝等は墓に入るまで、多きを競ふことに惑はさるニ^三 不可なり、汝等やがて之を知らん^三 断じて不可なり、汝等やがて之を知らん^四 不可なり。汝等確かに之を知りたりせば！^五 そは汝等獄火を見るべきが故なり^六 然り、汝等确实なる目にて之を見ん^七 げに其日汝等は現世の歡樂について問はれん^八

第三百三 午後章

メヅカ啓示

第一節に『午後によりて誓ふ』とあるに因みて午後章 *Al-Asr* と名づけらる。午後の原語 *Asr* は『時代』の意味あるが故に『時代章』とも訳すべし。極めて初期のメヅカ啓示にして、マホメットはその臨終に際し、本章第二節を復誦せりと傳へらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

午後によりて誓ふ
げに人は滅亡の中にあり
唯だ信じて善事を行ひ、互に眞実を励み、忍耐を励む者を除く

第四百 誹謗者章

メッカ啓示

第一節に『誹謗を事とする譏誣者』とあるに因みて誹謗者章 *Al-Humazah* と名づけらる。メッカの有力者は、同市に来る者を路に要し、マホメットの説教を聴かざらしめんがために種々なる譏誣を事とせり。本章はその当時の啓示にして、メッカ初期のものに属す。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

禍なるかな一切の誹謗を事とする譏誣者は一 彼は富を集めて之を積む^二 彼はその富が能く彼を不死ならしむべしと思惟す^三 断じて然らず。彼はホタマハ¹の中に投ぜられん^四 ホタマハの何たるかを汝に知らしむるものは何ぞ^五 そはアルラーハが燃やす火なり^六 そは胸の上まで燃えさからん^七 そは長大なる円柱に支へられたる^八 彼等を蓋ふ拱路^{アーサ}の如くなるべし^ハ

(一) ホタマハ *Al-Hutamah* は破碎の意味にして地獄の一名なり。之に投ぜらるれば悉く粉碎せらるるを以て此名あり。

第五百五 巨 象 章

メッカ啓示

第一節に『巨象の所有者』とあるに因みて巨象章 Al-Elm と名づけらる。西紀五七〇年のころ、ヤマンに君臨せるアビシニアの將軍アブラハ Abraha は、メッカ征服を企てて北上せしが、軍中に巨象を伴ひたり。この巨大なる動物は深刻なる印象をメッカ人に與へ、ために此年を『象の年』と呼ばしむるに至れり。されど遠征軍は猛烈なる天然痘に襲はれ、得るところなくして南歸せり。マホメットは此年に誕生せりと言はる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝は見ざるか、汝の主が如何に巨象の所有者を処分せるかを一 彼は彼等の戰略を混亂せしめ二 群鳥を彼等の上に降して三 泥石を之に擲下せしめ四 遂に彼等を噛み荒らされたる莖の如くならしめたるに非ずや五

第百六 クライシユ族章

メッカ啓示

第一節に『クライシユ族の保護のためなり』とあるに因みてクライシユ族章 *Al-Qur'ish* と名づけられ、第二節の『冬期の隊』に因みて冬期章 *Ash-Shita* と名づけらる。極めて初期のメッカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

クライシユ族の保護のためなり¹ 冬期並に夏期の彼等の隊商の保護のためなり² されば彼等をして聖殿の主を拜せしめよ³ 主は飢えたる時に彼等を養ひ⁴ 恐れたる時に彼等を安んじた

り⁵

(1) 前章を承けて、アブラハが空しく軍を回したるは、アルラーハがクライシユ族を保護せんがためなりとするなり。

(2) 毎年夏冬二回の隊商派遣の制度を定めたるはマホメットの祖父ハーシム *Hashim* なり。

第一百七 布施章

メツカ啓示

第七節に『布施を拒む者』とあるに因みて布施章 *Alms-giving* と名づけらる。布施の原語 *Alms-giving* は、もと日用の家具又は必需品の意味なるも、法定の捐課並に任意の喜捨を含めて、財物を施與することを意味するに至れり。極めて初期のメツカ啓示

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝はかの審判を虚偽なりと言ふ者を見ざるか一 孤兒を驅逐する者は彼なりニ 彼はまた相促して貧者を養ふことなし三 禍なるかな、禮拜するも四 禮拜を忽せにする者五 信神を粧ひて六 布施を拒む者は！七

第百八 潤 澤 章

メ、カ啓示

第一節に『吾は汝に潤沢を與へたり』とあるに因みて潤沢章 *Al-Kausar* と名づけらる。潤沢の原語カーウサルは、一切の善きものが潤沢なる意味にして現世並に來世の幸福を含む。同時にそは樂園の一河の名称にして、其水は蜜よりも甘く、麝香よりも香しく、乳よりも白く、一たび之を飲めば永久に渴くことなしとせらる。本章はマホメットの一子アルカースィム *Al-Qasim* が天死せる時、アース・イブン・ワイル *As ibn Wail* なる者が、之を以て天譴なりと唱へ、市民に向つて彼の宗教に入るべからずと宣傳せる所に降されたる啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

げに吾は汝に潤沢を與へたり されば汝の主に祈り、供犠を行へニ 汝を憎む者には絶えて子

女なからんニ

第百九 不信者章

メッカ啓示

第一節に『汝等不信者よ』とあるに因みて不信者章 Al-Kafirun と名づけらる。メッカ初期の啓示にして、メッカの有力者がマホメットに向つて妥協を提議せるころのものとせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『汝等不信者よ』 吾は汝等が事ふる者に事へず
汝等はわが事ふる者に事へず
吾も
た汝等が事ふる者に事へざるべし
汝等に汝等の教あり、吾に吾教あり』と

第一百 佑助 章

メヂナ啓示

第一節に『アルラーハの佑助と勝利と来る時』とあるに因みて佑助章 *Al-Nasr* と名づけらる。マホメットの長逝数週間以前に降されたるメヂナ最末期の啓示たるも、往々にしてメッカ啓示とせらるるは、之を以てマホメットがその最後のメッカ参詣中に降されたるものとするが故なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アルラーハの佑助と勝利と来りて、人々相率ゐてアルラーハの教に入るを見る時ニ、其時汝の主を讃へて、その宥恕を乞へ。げに彼は允懺悔者なりニ。

第百十一 アブー・ラハブ章

メッカ啓示

アブー・ラハブ夫妻を呪咀するが故にアブー・ラハブ章 Abu Lahab と名づけらる。彼はマホメットの伯父にして、一族のうち夫妻協力してマホメットに敵せること彼等より甚だしきはなし。傳承は下の如く語る。マホメットがその一族を集めて己れがアルラーハより選ばれたる警告者たることを告げたる時、アブー・ラハブは啻に彼の使命を拒否せるのみならず、『汝は是くの如きことのために吾等を招きたるが、汝の如きは死に当る』と罵り、石を拾ひて彼に投ぜんとせり。この啓示は此事ありたる後に降されたりと。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アブー・ラハブの双手は滅び、彼また滅びん^一。その富は彼を益せず、その所得また然り^二。彼は烈焰の火に燔かれ^三。薪を負へる其妻また然らん^四。彼女の頸には棗皮の繩かかるべし^五。彼

第百二十一章

メッカ啓示

アルラーハの唯一なるを説くが故に独一章 Al-Ikhlās と名づけらる。古蘭の神髓とせられ、マホメットは此の一章能く全古蘭の三分の一に当ると言へりと傳へらる。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『アルラーハは唯一者なり一　アルラーハは所依者¹なりニ　彼は産まず、また産まれず三
彼に対等者なし』^四

(1) 『所依者』の原語は *Samad* As-Samad として、一切が之に依存する者の意味。

第一百十三 曉天章

メツカ啓示

第一節に『吾は曉天の主に加護を求む』とあるに因みて曉天章 *Al-Fuṣṣaṭ* と名づけらる。初期のメツカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『吾は曉天の主に加護を求む』^一 主が造る災厄に対して^二 黒闇加はる夜の災厄に対して^三
縷^{ウサヒ}を吹く女子の災厄に対して^四 並に嫉妬する嫉妬者の災厄に対して^五

(一)糸の結目を吹き、呪咀せんとする者の名を唱へて災厄を呼ぶ女子。当時のアラビアに普く行はれし迷信なり。

第百十四 人 類 章

メヅカ啓示

第一節に『人類の主』とあるに因みて人類章 *ANZES* と名づけらる。メヅカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『吾は人類の主 人類の王 人類の神に加護を求む 人類の胸中に私語する陰險なる私語者の災厄に対して』^{四・五} 並に幽鬼と人間との災厄に対して』^六

一九五〇年二月十日印刷
一九五〇年二月十五日發行

古 蘭

定價一、三〇〇圓
地方賣價二、二五〇圓

譯者 大 川 周 明

發行者 栗 山 利 雄
東京都千代田區神田神保町一ノ六五

印刷者 中 村 榊
東京都板橋區板橋町八丁目一九五二



發行所

東京都千代田區神田
神保町一丁目六十五

株式會社

岩 崎 書 店

神田(25) 一三八八

植 木 製 本